県道徳島鴨島線改良事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

徳島市

中島田遺跡
南島田遺跡

平成元年3月

徳島県教育委員会

巻頭図版（カラー）

（1）中島田遺跡出土の中世土器

（2）中島田遺跡自然流路出土「呪符木簡」

序　　文

本書は、県道徳島鴨島線道路改良工事に伴う事前調査として、徳島県教育委員会が実施した中島田遺跡・南島田遺跡の発掘調査報告書であります。

中島田遺跡・南島田遺跡はともに本県では調査例の少ない中世の集落遺跡であります。調査によって発見されました多数の遺構・遺物は、地域の歴史を解明する貴重な手掛かりとなるとともに、当時の庶民生活を具体的に復原する貴重な資料ともなるものであります。

これらの成果をおさめた本報告書が、埋蔵文化財に対する認識と理解を深め、さらには今後の研究の一助ともなれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、現地での発掘調査、報告書の作成にあたって、関係各位から賜りました多大の御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成元年３月

徳島県教育委員会
教育長　松　本　冨　夫

例　　言

1．本書は、徳島県教育委員会が実施した徳島市中島田町２丁目所在の中島田遺跡と同市南島田町３丁目所在の南島田遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は、徳島県土木部の依頼を受けて、県道徳島鴨島線道路改良工事に伴う事前調査として実施したものである。

3．発掘調査及び整理作業等の実施期間は次の通りである。〈（　）内は調査面積〉

・中島田遺跡１次調査（1,800㎡）	昭和61年２月４日～昭和61年11月27日
・　同　２次調査（550㎡）	昭和63年６月１日～昭和63年８月31日
・南島田遺跡（1,800㎡）	昭和61年11月17日～昭和62年５月31日
・整理・報告書作成	昭和62年６月１日～昭和62年12月28日
	昭和63年９月１日～昭和63年11月31日

4．発掘調査および報告書の作成にあたって、次の諸氏・各機関の御協力・御教示を得た。

岡内三眞（徳島大学）、水野正好（奈良大学）、舘野和巳（奈良文化財研究所＜当時＞）、正岡睦男（岡山県古代吉備文化財センター）、岡崎正雄（兵庫県埋蔵文化財センター）、岡田章一（同前）、一山　典（徳島市社会教育課）、滝山雄一（同前）、勝浦康守（同前）、菅原康夫（文化課）、徳島県土木部道路建設課、徳島土木事務所、㈱武市組。

5．本書の執筆は第Ⅰ篇第２章第２節（１）・第３節（１）の一部を小笠原賢、第１篇中の輸入陶磁器に関するすべての記述を久保脇美朗、第Ⅱ篇第５章第２節（９）を北原雅代が分担したほかは福家清司が行い、編集は福家が担当した。遺構・遺物の実測及び実測図のトレースは各年度の調査員が分担して行ったほか、本田春愛、黄田浩二、原田夏実、森前美佐子、谷恵子、宮尾大、末永一路各氏の協力を得た。遺構・遺物の写真撮影は福家が主に行い、２次調査の遺物写真については一部宮尾大氏の協力を得た。

6．本書で用いる高度値は海抜高であり、方位は磁北を示す。

7．遺物番号は本文・挿図・表・図版と一致する。

8．本報告に関係する遺物・図面等は徳島県教育委員会文化課が一括して保管している。

目　　次

序文……徳島県教育委員会教育長　　松本冨夫

第Ⅰ篇　　中島田遺跡

第１章　位置と環境…… 1

第１節　地理的環境…… 1

第２節　周辺の遺跡…… 1

第３節　歴史的環境…… 4

第２章　調査の契機と経過…… 11

第１節　調査の契機…… 11

第２節　調査の経過…… 11

（１）１次調査の経過…… 11

（２）２次調査の経過…… 12

（３）調査組織…… 13

第３節　調査日誌抄…… 15

（１）１次調査…… 15

（２）２次調査…… 18

第３章　層序…… 20

第４章　遺構と遺物…… 23

第１節　概要…… 23

（１）遺構について…… 23

（２）遺物について…… 24

第２節　第１遺構面の遺構と遺物…… 24

（１）溝と出土遺物…… 25

（２）土坑と出土遺物…… 26

（３）集石遺構と出土遺物…… 27

第３節　第２遺構面の遺構と遺物…… 28

（１）建物跡・柱穴群と出土遺物…… 28

（２）溝と出土遺物…… 37

（３）土坑と出土遺物…… 60

（４）井戸と出土遺物…… 88

（５）自然流路と出土遺物…… 90

（6）その他の遺構と出土遺物…… 97
第4節　包含層出土遺物…… 99
（1）土師質土器…… 99
（2）瓦器・瓦質土器 …… 112
（3）国内産陶器 …… 117
（4）輸入陶磁器 …… 126
（5）土製品・石製品・金属製品 …… 128
第5章　遺構・遺物の検討 …… 132
第1節　遺構の検討 …… 132
（1）建物跡 …… 132
（2）溝・溝状遺構 …… 133
（3）土坑 …… 133
（4）井戸 …… 134
（5）自然流路 …… 134
第2節　遺物の検討 …… 134
（1）出土遺物の器種構成 …… 136
（2）土師質杯 …… 137
（3）土師質皿 …… 142
（4）土師質椀 …… 144
（5）鍋 …… 145
（6）羽釜 …… 148
（7）瓦器 …… 149
（8）魚住焼 …… 150
（9）備前焼 …… 151
（10）常滑焼 …… 152
（11）輸入陶磁器 …… 153
（12）土錘 …… 155
（13）銅銭 …… 155
（14）呪符木簡 …… 156
第Ⅱ篇　南島田遺跡
第1章　位置と環境 …… 163
第1節　地理的環境 …… 163
第2節　周辺の遺跡 …… 163

第３節　歴史的環境 …… 163
第２章　調査の契機と経過 …… 165
第１節　調査の契機 …… 165
第２節　調査の経過 …… 165
（１）調査の経過 …… 165
（２）調査組織 …… 167
第３節　調査日誌抄 …… 167
第３章　層序 …… 170
第４章　遺構と遺物 …… 171
第１節　概要 …… 171
（１）遺構について …… 171
（２）遺物について …… 171
第２節　第１遺構面の遺構と遺物 …… 171
（１）溝と出土遺物 …… 171
（２）土坑と出土遺物 …… 174
（３）自然流路と出土遺物 …… 181
第３節　第２遺構面の遺構と遺物 …… 185
（１）建物跡・柱穴と出土遺物 …… 186
（２）溝と出土遺物 …… 188
（３）土坑と出土遺物 …… 189
第４節　第１包含層出土遺物 …… 195
（１）土師質土器 …… 195
（２）瓦器・瓦質土器 …… 197
（３）国内産陶器 …… 198
（４）輸入陶磁器 …… 199
（５）土製品・石製品・金属製品 …… 199
第５節　第２包含層出土遺物 …… 202
（１）土師質土器 …… 202
（２）瓦器・瓦質土器 …… 203
（３）国内産陶器 …… 204
（４）輸入陶磁器 …… 204
（５）土製品・石製品・金属製品 …… 205
第５章　遺構・遺物の検討 …… 207

第１節　遺構について …… 207
（１）第１遺構面の遺構 …… 207
（２）第２遺構面の遺構 …… 208
第２節　遺物について …… 208
（１）土師質杯 …… 208
（２）土師質皿 …… 210
（３）土師質椀 …… 211
（４）鍋 …… 212
（５）羽釜 …… 213
（６）瓦器・瓦質土器 …… 213
（７）国内産陶器 …… 216
（８）輸入陶磁器 …… 217
（９）石鍋 …… 218
（10）銅銭 …… 218
第Ⅲ篇　まとめ
第１章　中島田遺跡における中世日常雑器の構成とその特質 …… 223
第１節　はじめに …… 223
第２節　中島田遺跡出土遺物の機能的分類 …… 223
第３節　中島田遺跡出土の中世土器の特質 …… 226
第２章　阿波中世の流通と中島田遺跡出土遺物 …… 229
第１節　はじめに …… 229
第２節　中世阿波の海運について …… 229
第３節　大山崎油座商人と吉野川の水運 …… 231
第４節　中島田遺跡出土遺物と流通 …… 233

挿図目次

第　1図　中島田遺跡位置図……1
第　2図　周辺の遺跡分布図……2
第　3図　中島田遺跡の歴史的環境……5
第　4図　中島田遺跡調査区割図……12
第　5図　E調査区北壁土層図……21
第　6図　B調査区Ⅰ・Ⅱ間畦土層図……22
第　7図　土師質土器分類図（折り込み）
第　8図　第1遺構面遺構配置図（E調査区）……24
第　9図　溝101土層図……25
第　10図　溝102土層図……25
第　11図　溝102出土遺物実測図……26
第　12図　土坑101実測図……26
第　13図　土坑101出土遺物実測図……26
第　14図　土坑102実測図……27
第　15図　集石遺構101実測図……27
第　16図　集石遺構101出土遺物実測図……27
第　17図　第2遺構面遺構配置図（折り込み）
第　18図　柱穴群位置図……28
第　19図　建物201実測図……28
第　20図　建物203実測図……29
第　21図　建物204実測図……30
第　22図　建物205実測図……30
第　23図　柱穴出土遺物（1）実測図……32
第　24図　建物206実測図……33
第　25図　建物207実測図……33
第　26図　建物208実測図……34
第　27図　柱穴出土遺物（2）実測図……35
第　28図　建物に伴う出土遺物実測図……36
第　29図　溝201土層図……37
第　30図　溝201出土遺物実測図……37

第　31図　溝202出土遺物実測図 …… 38
第　32図　溝203出土遺物実測図 …… 39
第　33図　溝204出土遺物実測図 …… 39
第　34図　溝205土層図 …… 40
第　35図　溝205出土遺物（１）実測図 …… 41
第　36図　溝205出土遺物（２）実測図 …… 42
第　37図　溝206土層図 …… 43
第　38図　溝206土器だまり実測図 …… 44
第　39図　溝206出土遺物（１）実測図 …… 45
第　40図　溝206出土遺物（２）実測図 …… 46
第　41図　溝208土層図 …… 48
第　42図　溝208出土遺物実測図 …… 48
第　43図　溝209出土遺物実測図 …… 48
第　44図　溝210土層図 …… 49
第　45図　溝210出土遺物実測図 …… 49
第　46図　溝211土層図 …… 49
第　47図　溝212・溝213土層図 …… 49
第　48図　溝212出土遺物実測図 …… 49
第　49図　溝213出土遺物実測図 …… 50
第　50図　溝214土層図 …… 50
第　51図　溝214出土遺物実測図 …… 50
第　52図　溝215土層図 …… 51
第　53図　溝215出土遺物実測図 …… 51
第　54図　溝216出土遺物実測図 …… 52
第　55図　溝217土層図・出土遺物実測図 …… 52
第　56図　溝218土層図・出土遺物実測図 …… 53
第　57図　溝219土層図・出土遺物実測図 …… 53
第　58図　溝220土層図 …… 53
第　59図　溝220出土遺物実測図 …… 54
第　60図　溝221土層図 …… 54
第　61図　溝221出土遺物実測図 …… 54
第　62図　溝222土層図 …… 54
第　63図　溝222出土遺物実測図 …… 55

第 64図 溝223土層図 …… 55
第 65図 溝223出土遺物実測図 …… 55
第 66図 溝224土層図 …… 56
第 67図 溝225土層図・出土遺物実測図 …… 56
第 68図 溝226土層図 …… 56
第 69図 溝227土層図・出土遺物実測図 …… 57
第 70図 溝228土層図 …… 57
第 71図 溝229土層図・出土遺物実測図 …… 57
第 72図 溝230土層図 …… 58
第 73図 溝231土層図 …… 58
第 74図 溝232土層図 …… 58
第 75図 溝232出土遺物実測図 …… 58
第 76図 溝233土層図・出土遺物実測図 …… 59
第 77図 溝235土層図 …… 59
第 78図 溝236土層図 …… 60
第 79図 溝237土層図 …… 60
第 80図 土坑201実測図 …… 61
第 81図 土坑201出土遺物実測図 …… 62
第 82図 土坑202・203実測図 …… 62
第 83図 土坑204実測図 …… 63
第 84図 土坑205実測図 …… 63
第 85図 土坑206実測図・出土遺物実測図 …… 64
第 86図 土坑207実測図・出土遺物実測図 …… 64
第 87図 土坑208実測図 …… 65
第 88図 土坑209実測図 …… 65
第 89図 土坑210実測図 …… 65
第 90図 土坑211実測図 …… 66
第 91図 土坑212実測図 …… 66
第 92図 土坑213実測図・出土遺物実測図 …… 66
第 93図 土坑214実測図 …… 67
第 94図 土坑215実測図・出土遺物実測図 …… 67
第 95図 土坑216・217・218実測図 …… 68
第 96図 土坑216出土遺物実測図 …… 68

第 97図　土坑219実測図 …… 69
第 98図　土坑219出土遺物実測図 …… 69
第 99図　土坑220実測図 …… 70
第 100図　土坑221実測図 …… 70
第 101図　土坑221出土遺物実測図 …… 71
第 102図　土坑222実測図 …… 71
第 103図　土坑223・224実測図 …… 71
第 104図　土坑225・226実測図 …… 71
第 105図　土坑226出土遺物実測図 …… 72
第 106図　土坑227実測図・出土遺物実測図 …… 72
第 107図　土坑228実測図 …… 72
第 108図　土坑229実測図 …… 73
第 109図　土坑230・231実測図 …… 73
第 110図　土坑230出土遺物実測図 …… 73
第 111図　土坑232実測図 …… 73
第 112図　土坑233実測図 …… 74
第 113図　土坑234実測図・出土遺物実測図 …… 74
第 114図　土坑235実測図 …… 75
第 115図　土坑236実測図 …… 75
第 116図　土坑237実測図 …… 75
第 117図　土坑238実測図 …… 76
第 118図　土坑238出土遺物実測図 …… 77
第 119図　土坑239実測図・出土遺物実測図 …… 78
第 120図　土坑240実測図 …… 78
第 121図　土坑241出土遺物実測図 …… 78
第 122図　土坑241・242実測図 …… 79
第 123図　土坑242出土遺物実測図 …… 79
第 124図　土坑243実測図・出土遺物実測図 …… 80
第 125図　土坑244実測図 …… 80
第 126図　土坑245実測図 …… 80
第 127図　土坑246実測図 …… 80
第 128図　土坑246出土遺物実測図 …… 81
第 129図　土坑247出土遺物実測図 …… 81

第 130図　土坑247・248実測図…… 82
第 131図　土坑249実測図 …… 83
第 132図　土坑249出土遺物実測図 …… 83
第 133図　土坑250実測図 …… 84
第 134図　土坑250出土遺物実測図 …… 84
第 135図　土坑251実測図 …… 84
第 136図　土坑251出土遺物実測図 …… 85
第 137図　土坑252実測図 …… 85
第 138図　土坑252出土遺物実測図 …… 86
第 139図　土坑253実測図・出土遺物実測図 …… 86
第 140図　土坑254実測図・出土遺物実測図 …… 86
第 141図　土坑255実測図 …… 87
第 142図　土坑256実測図 …… 87
第 143図　土坑257出土遺物実測図 …… 87
第 144図　土坑259実測図 …… 88
第 145図　土坑260実測図 …… 88
第 146図　井戸201実測図・出土遺物実測図 …… 89
第 147図　自然流路土層図…… 91
第 148図　自然流路出土遺物（1）実測図…… 93
第 149図　自然流路出土遺物（2）実測図…… 94
第 150図　自然流路出土遺物（3）実測図…… 95
第 151図　自然流路出土遺物（4）実測図…… 96
第 152図　木棺墓実測図…… 97
第 153図　集石遺構201実測図 …… 97
第 154図　集石遺構202実測図 …… 98
第 155図　集石遺構202出土遺物実測図 …… 98
第 156図　不明遺構出土遺物実測図…… 98
第 157図　包含層出土遺物（1）－土師質　杯①－実測図…… 100
第 158図　包含層出土遺物（2）－土師質　杯②－実測図…… 101
第 159図　包含層出土遺物（3）－土師質　皿①－実測図…… 103
第 160図　包含層出土遺物（4）－土師質　皿②－実測図…… 104
第 161図　包含層出土遺物（5）－土師質　椀－実測図…… 106
第 162図　包含層出土遺物（6）－土師質　鍋①－実測図…… 107

第 163図　包含層出土遺物（７）－土師質　鍋②－実測図…… 108
第 164図　包含層出土遺物（８）－土師質　鍋③・羽釜①－実測図…… 109
第 165図　包含層出土遺物（９）－土師質　羽釜②・すり鉢－実測図…… 110
第 166図　包含層出土遺物（10）－土師質　脚部－実測図…… 111
第 167図　包含層出土遺物（11）－瓦器　椀①－実測図…… 113
第 168図　包含層出土遺物（12）－瓦器　椀②・皿－実測図…… 114
第 169図　包含層出土遺物（13）－瓦質　鍋・羽釜①－実測図…… 115
第 170図　包含層出土遺物（14）－瓦質　羽釜②・脚部－実測図…… 116
第 171図　包含層出土遺物（15）－陶器　すり鉢①－実測図…… 118
第 172図　包含層出土遺物（16）－陶器　すり鉢②－実測図…… 119
第 173図　包含層出土遺物（17）－陶器　こね鉢①－実測図…… 120
第 174図　包含層出土遺物（18）－陶器　こね鉢②－実測図…… 121
第 175図　包含層出土遺物（19）－陶器　こね鉢③－実測図…… 122
第 176図　包含層出土遺物（20）－陶器　椀・壷・甕①－実測図…… 124
第 177図　包含層出土遺物（21）－陶器　甕②－実測図…… 125
第 178図　包含層出土遺物（22）－輸入陶磁器①－実測図…… 127
第 179図　包含層出土遺物（23）－輸入陶磁器②－実測図…… 128
第 180図　包含層出土遺物（24）－土製品・石製品・金属製品①－実測図…… 129
第 181図　包含層出土遺物（25）－金属製品②－実測図…… 130
第 182図　中島田遺跡出土遺物の分類…… 136
第 183図　杯Ａの法量分布図…… 138
第 184図　ひびき岩16号墳出土遺物実測図…… 139
第 185図　杯Ｂ～Ｅ・Ｇの法量分布図…… 140
第 186図　杯Ｆの法量分布図…… 141
第 187図　皿の法量分布図…… 142
第 188図　椀の法量分布図…… 144
第 189図　椀ＢⅠの法量変化図…… 145
第 190図　瓦器椀の法量分布図…… 149
第 191図　土錘の法量分布図…… 155
第 192図　南島田遺跡と中島田遺跡の位置関係図…… 164
第 193図　南島田確認調査トレンチ配置図・南島田遺跡調査区位置図…… 166
第 194図　南島田確認調査№７トレンチ東壁土層図…… 170
第 195図　南島田遺跡遺構配置図（第１遺構面・第２遺構面）（折り込み）

第 196図　溝101土層図 …… 172
第 197図　溝101出土遺物実測図 …… 172
第 198図　溝102土層図 …… 173
第 199図　溝102出土遺物実測図 …… 174
第 200図　土坑101実測図 …… 174
第 201図　土坑102実測図 …… 175
第 202図　土坑102出土遺物実測図 …… 175
第 203図　土坑103実測図 …… 175
第 204図　土坑103出土遺物実測図 …… 176
第 205図　土坑104実測図 …… 176
第 206図　土坑105実測図 …… 176
第 207図　土坑106実測図 …… 177
第 208図　土坑106出土遺物実測図 …… 177
第 209図　土坑107実測図 …… 177
第 210図　土坑108実測図 …… 177
第 211図　土坑109実測図 …… 178
第 212図　土坑110実測図 …… 178
第 213図　土坑111出土遺物実測図 …… 178
第 214図　土坑111実測図 …… 179
第 215図　土坑112実測図 …… 180
第 216図　土坑113実測図 …… 180
第 217図　土坑113出土遺物実測図 …… 180
第 218図　自然流路101土層図（折り込み）
第 219図　自然流路101出土遺物実測図 …… 182
第 220図　自然流路102土層図 …… 184
第 221図　自然流路102出土遺物実測図 …… 185
第 222図　建物201実測図 …… 186
第 223図　建物202実測図 …… 187
第 224図　柱穴出土遺物実測図 …… 188
第 225図　溝203土層図 …… 189
第 226図　溝205実測図 …… 189
第 227図　土坑201実測図 …… 190
第 228図　土坑202実測図 …… 191

第 229図　土坑202出土遺物実測図 …… 191
第 230図　土坑203実測図 …… 192
第 231図　土坑204実測図 …… 192
第 232図　土坑205実測図 …… 193
第 233図　土坑206実測図・出土遺物実測図 …… 193
第 234図　土坑207実測図 …… 194
第 235図　土坑208実測図 …… 194
第 236図　第１包含層出土遺物（１）－土師質　杯－実測図 …… 195
第 237図　第１包含層出土遺物（２）－土師質　皿－実測図 …… 196
第 238図　第１包含層出土遺物（３）－土師質　椀－実測図 …… 196
第 239図　第１包含層出土遺物（４）－土師質　鍋・羽釜－実測図 …… 197
第 240図　第１包含層出土遺物（５）－瓦器　椀・皿－実測図 …… 198
第 241図　第１包含層出土遺物（６）－陶器　すり鉢・こね鉢・盤・甕－実測図 …… 200
第 242図　第１包含層出土遺物（７）－輸入陶磁器－実測図 …… 201
第 243図　第１包含層出土遺物（８）－土製品・石製品・金属製品－実測図 …… 201
第 244図　第２包含層出土遺物（１）－土師質　杯・皿・椀・鍋－実測図 …… 202
第 245図　第２包含層出土遺物（２）－瓦器　椀・皿－実測図 …… 203
第 246図　第２包含層出土遺物（３）－陶器　こね鉢・甕－実測図 …… 204
第 247図　第２包含層出土遺物（４）－輸入陶磁器－実測図 …… 205
第 248図　第２包含層出土遺物（５）－土製品・石製品・金属製品①－実測図 …… 205
第 249図　第２包含層出土遺物（６）－金属製品②－実測図 …… 206
第 250図　石鍋出土地分布図 …… 218
第 251図　中世阿波の港津 …… 230
（参考図）藍住町勝瑞出土遺物実測図 …… 158

表　目　次

表 1　中島田遺跡出土遺物一覧表…… 135
表 2　溝206－土器だまり－出土遺物の器種構成 …… 136
表 3　中島田遺跡銅銭一覧表…… 156
表 4　銅銭初鋳年一覧表…… 156
表 5　南島田遺跡出土遺物一覧表…… 209
表 6　南島田遺跡銅銭一覧表…… 219
表 7　中島田遺跡出土遺物の構成…… 224
表 8　文安２年に兵庫北関に入関した阿波船の月別回数…… 230
表 9　阿波船の積載品目とその数量…… 231
表10　阿波船の規模…… 231
表11　中島田－溝102出土遺物観察表 …… 235
表12　中島田－土坑101出土遺物観察表 …… 235
表13　中島田－集石遺構101出土遺物観察表 …… 236
表14　中島田－柱穴出土遺物（１）観察表…… 236
表15　中島田－柱穴出土遺物（２）観察表…… 240
表16　中島田－建物に伴う出土遺物観察表…… 242
表17　中島田－溝201出土遺物観察表 …… 244
表18　中島田－溝202出土遺物観察表 …… 245
表19　中島田－溝203出土遺物観察表 …… 246
表20　中島田－溝204出土遺物観察表 …… 246
表21　中島田－溝205出土遺物観察表 …… 247
表22　中島田－溝206出土遺物観察表 …… 252
表23　中島田－溝208出土遺物観察表 …… 260
表24　中島田－溝209出土遺物観察表 …… 261
表25　中島田－溝210出土遺物観察表 …… 261
表26　中島田－溝212出土遺物観察表 …… 261
表27　中島田－溝213出土遺物観察表 …… 262
表28　中島田－溝214出土遺物観察表 …… 262
表29　中島田－溝215出土遺物観察表 …… 263
表30　中島田－溝216出土遺物観察表 …… 264

表31　中島田－溝217出土遺物観察表 …… 265
表32　中島田－溝218出土遺物観察表 …… 266
表33　中島田－溝219出土遺物観察表 …… 266
表34　中島田－溝220出土遺物観察表 …… 266
表35　中島田－溝221出土遺物観察表 …… 267
表36　中島田－溝222出土遺物観察表 …… 267
表37　中島田－溝223出土遺物観察表 …… 268
表38　中島田－溝225出土遺物観察表 …… 269
表39　中島田－溝227出土遺物観察表 …… 269
表40　中島田－溝229出土遺物観察表 …… 269
表41　中島田－溝232出土遺物観察表 …… 270
表42　中島田－溝233出土遺物観察表 …… 270
表43　中島田－土坑201出土遺物観察表 …… 271
表44　中島田－土坑206出土遺物観察表 …… 272
表45　中島田－土坑207出土遺物観察表 …… 273
表46　中島田－土坑213出土遺物観察表 …… 273
表47　中島田－土坑215出土遺物観察表 …… 273
表48　中島田－土坑216出土遺物観察表 …… 274
表49　中島田－土坑219出土遺物観察表 …… 274
表50　中島田－土坑221出土遺物観察表 …… 276
表51　中島田－土坑226出土遺物観察表 …… 276
表52　中島田－土坑227出土遺物観察表 …… 277
表53　中島田－土坑230出土遺物観察表 …… 277
表54　中島田－土坑234出土遺物観察表 …… 278
表55　中島田－土坑238出土遺物観察表 …… 278
表56　中島田－土坑239出土遺物観察表 …… 280
表57　中島田－土坑241出土遺物観察表 …… 280
表58　中島田－土坑242出土遺物観察表 …… 281
表59　中島田－土坑243出土遺物観察表 …… 281
表60　中島田－土坑246出土遺物観察表 …… 282
表61　中島田－土坑247出土遺物観察表 …… 283
表62　中島田－土坑249出土遺物観察表 …… 283
表63　中島田－土坑250出土遺物観察表 …… 284

表64　中島田－土坑251出土遺物観察表 …… 284
表65　中島田－土坑252出土遺物観察表 …… 285
表66　中島田－土坑253出土遺物観察表 …… 286
表67　中島田－土坑254出土遺物観察表 …… 286
表68　中島田－土坑257出土遺物観察表 …… 286
表69　中島田－井戸201出土遺物観察表 …… 287
表70　中島田－自然流路出土遺物観察表 …… 287
表71　中島田－集石遺構202出土遺物観察表 …… 293
表72　中島田－不明遺構出土遺物観察表 …… 293
表73　中島田－包含層出土遺物（土師質　杯）観察表 …… 293
表74　中島田－包含層出土遺物（土師質　皿）観察表 …… 301
表75　中島田－包含層出土遺物（土師質　椀）観察表 …… 312
表76　中島田－包含層出土遺物（土師質　鍋・羽釜・すり鉢）観察表 …… 318
表77　中島田－包含層出土遺物（土師質　脚部）観察表 …… 323
表78　中島田－包含層出土遺物（瓦器　椀・皿）観察表 …… 325
表79　中島田－包含層出土遺物（瓦質　鍋・羽釜・脚部）観察表 …… 332
表80　中島田－包含層出土遺物（国内産陶器　すり鉢）観察表 …… 335
表81　中島田－包含層出土遺物（国内産陶器　こね鉢）観察表 …… 337
表82　中島田－包含層出土遺物（国内産陶器　椀・壷・甕）観察表 …… 341
表83　中島田－包含層出土遺物（輸入陶磁器）観察表 …… 345
表84　中島田－包含層出土遺物（土製品・石製品・金属製品）観察表 …… 351
表85　南島田－溝101出土遺物観察表 …… 356
表86　南島田－溝102出土遺物観察表 …… 357
表87　南島田－土坑102出土遺物観察表 …… 357
表88　南島田－土坑103出土遺物観察表 …… 358
表89　南島田－土坑106出土遺物観察表 …… 358
表90　南島田－土坑111出土遺物観察表 …… 358
表91　南島田－土坑113出土遺物観察表 …… 359
表92　南島田－自然流路101出土遺物観察表 …… 359
表93　南島田－自然流路102出土遺物観察表 …… 361
表94　南島田－柱穴出土遺物観察表 …… 365
表95　南島田－土坑202出土遺物観察表 …… 365
表96　南島田－土坑206出土遺物観察表 …… 366

表97　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　杯）観察表…… 366
表98　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　皿）観察表…… 367
表99　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　椀）観察表…… 369
表100　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　鍋・羽釜）観察表…… 370
表101　南島田－第１包含層出土遺物（瓦器　椀・皿）観察表…… 371
表102　南島田－第１包含層出土遺物（国内産陶器　すり鉢・こね鉢・盤・甕）
観察表…… 373
表103　南島田－第１包含層出土遺物（輸入陶磁器）観察表…… 374
表104　南島田－第１包含層出土遺物（土製品・石製品・金属製品）観察表…… 375
表105　南島田－第２包含層出土遺物（土師質　杯・皿・椀・鍋）観察表…… 377
表106　南島田－第２包含層出土遺物（瓦器　椀・皿）観察表…… 380
表107　南島田－第２包含層出土遺物（国内産陶器　こね鉢・甕）観察表…… 381
表108　南島田－第２包含層出土遺物（輸入陶磁器）観察表…… 382
表109　南島田－第２包含層出土遺物（土製品・石製品・金属製品）観察表…… 383

写 真 目 次

写真 1　作業風景(1)…… 16
写真 2　現地説明会（１次調査）…… 18
写真 3　現地説明会（２次調査）…… 19
写真 4　土層堆積状況（Ｂ調査区畦）…… 22
写真 5　土坑102検出状況 …… 27
写真 6　土器だまり遺物出土状況(1)…… 47
写真 7　土器だまり遺物出土状況(2)…… 47
写真 8　作業風景(2)…… 94
写真 9　「呪符木簡」出土状況…… 94
写真10　「銅銭」出土状況…… 131
写真11　表土剝ぎ取り…… 167
写真12　作業風景(3)…… 168
写真13　現地説明会…… 169
写真14　土坑111検出状況 …… 180
写真15　土坑207検出状況 …… 194
写真16　「銅銭」出土状況…… 206

図版目次

巻頭図版（カラー）
（１）中島田遺跡出土の中世土器
（２）中島田遺跡自然流路出土「呪符木簡」

図版１　中島田遺跡全景
（１）遠景（眉山より望む）
（２）近景（北より望む）
図版２　中島田－Ａ調査区の遺構（１）
（１）集石遺構201検出状況
（２）溝219検出状況
図版３　中島田－Ａ調査区の遺構（２）
（１）土坑228検出状況
（２）土坑234「土師質杯」出土状況
図版４　中島田－Ｂ調査区の遺構（１）
（１）木棺墓検出状況①
（２）木棺墓検出状況②
図版５　中島田－Ｂ調査区の遺構（２）
（１）土坑202～205検出状況
（２）土坑207検出状況
図版６　中島田－Ｂ調査区の遺構（３）
（１）柱穴検出状況
（２）柱穴内の根石検出状況
図版７　中島田－Ｃ調査区の遺構（１）
（１）全景（東より）
（２）溝201検出状況
図版８　中島田－Ｃ調査区の遺構（２）
（１）溝205検出状況
（２）土坑201遺物出土状況
図版９　中島田－Ｄ調査区東部の遺構（１）
（１）溝205検出状況

（２）溝205「青磁皿」出土状況
図版10　中島田－Ｄ調査区東部の遺構（２）
（１）溝206検出状況
（２）溝206土器だまり検出状況
図版11　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（１）
（１）全景（東より）
（２）全景（西より）
図版12　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（２）
（１）中央部の遺構検出状況（南より）
（２）土坑221検出状況
図版13　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（３）
（１）土坑213検出状況
（２）土坑213「五銖」出土状況
図版14　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（４）
（１）土坑220検出状況
（２）土坑219遺物出土状況
図版15　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（５）
（１）自然流路検出状況
（２）自然流路「呪符木簡」出土状況
図版16　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（６）
（１）自然流路「矢」出土状況
（２）同上（部分１）
（３）同上（部分２）
図版17　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（７）
（１）自然流路「ハケ状工具」出土状況
（２）自然流路「漆椀」出土状況
図版18　中島田－Ｄ調査区西部の遺構（８）
（１）自然流路「永楽通宝」出土状況
（２）自然流路「備前大甕」出土状況
図版19　中島田－Ｅ調査区の遺構（１）
（１）遺構検出状況（遠景、北より）
（２）遺構検出状況（近景、西より）
図版20　中島田－Ｅ調査区の遺構（２）

（１）土坑101検出状況
（２）土坑101土層堆積状況
図版21　中島田－Ｅ調査区の遺構（３）
（１）建物207・208検出状況
（２）建物に伴う遺物出土状況
図版22　中島田－Ｅ調査区の遺構（４）
（１）溝223遺物出土状況
（２）土坑249検出状況
図版23　中島田－Ｅ調査区の遺構（５）
（１）井戸201検出状況①
（２）井戸201検出状況②
図版24　中島田－Ｅ調査区の遺構（６）
（１）井戸201検出状況③
（２）井戸201検出状況④
図版25　中島田－遺構出土遺物（１）
図版26　中島田－遺構出土遺物（２）
図版27　中島田－遺構出土遺物（３）
図版28　中島田－遺構出土遺物（４）
図版29　中島田－遺構出土遺物（５）
図版30　中島田－遺構出土遺物（６）
図版31　中島田－遺構出土遺物（７）
図版32　中島田－遺構出土遺物（８）
図版33　中島田－遺構出土遺物（９）
図版34　中島田－遺構出土遺物（10）
図版35　中島田－遺構出土遺物（11）
図版36　中島田－包含層出土遺物（１）
図版37　中島田－包含層出土遺物（２）
図版38　中島田－包含層出土遺物（３）
図版39　中島田－包含層出土遺物（４）
図版40　中島田－包含層出土遺物（５）
図版41　中島田－包含層出土遺物（６）
図版42　中島田－包含層出土遺物（７）
図版43　中島田－包含層出土遺物（８）

図版44　中島田－包含層出土遺物（９）
図版45　中島田－包含層出土遺物（10）
図版46　中島田－包含層出土遺物（11）
図版47　中島田－包含層出土遺物（12）
図版48　南島田遺跡全景
（１）遠景（東より）
（２）近景－調査前－（東より）
図版49　南島田－第１遺構面の遺構（１）
（１）全景（西より）
（２）全景（東より）
図版50　南島田－第１遺構面の遺構（２）
（１）溝101検出状況
（２）溝101遺物出土状況
図版51　南島田－第１遺構面の遺構（３）
（１）溝102検出状況
（２）溝101・102検出状況（東より）
図版52　南島田－第１遺構面の遺構（４）
（１）土坑108検出状況
（２）土坑103遺物出土状況
図版53　南島田－第１遺構面の遺構（５）
（１）自然流路101検出状況（西より）
（２）自然流路102検出状況（東より）
図版54　南島田－第１遺構面の遺構（６）
（１）自然流路101「石鍋」出土状況
（２）自然流路102「白磁碗」出土状況
図版55　南島田－第２遺構面の遺構（１）
（１）全景（西より）
（２）全景（東より）
図版56　南島田－第２遺構面の遺構（２）
（１）建物201検出状況
（２）建物201柱穴内根石検出状況
図版57　南島田－第２遺構面の遺構（３）
（１）柱穴内「瓦」出土状況

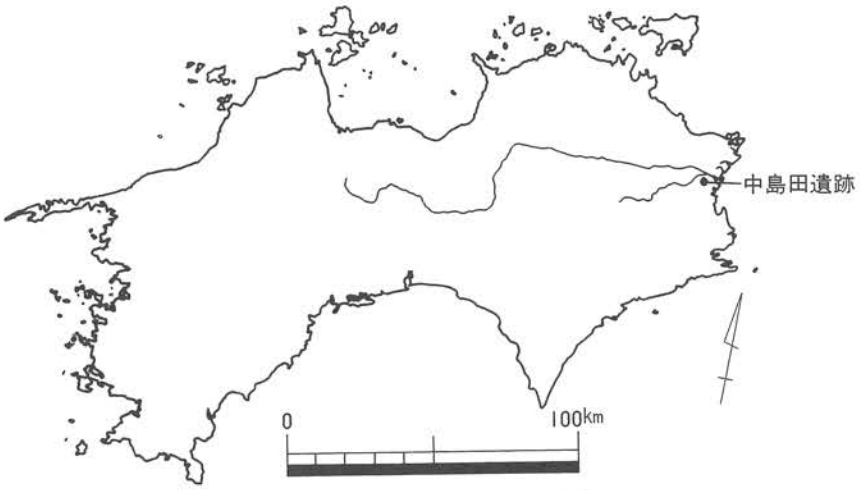
（２）溝205検出状況
図版58　南島田－第２遺構面の遺構（４）
（１）土坑201検出状況
（２）土坑202土層堆積状況
図版59　南島田－遺構出土遺物
図版60　南島田－包含層出土遺物
図版61　南島田－遺構・包含層出土の甕

本　　文

第１篇　中島田遺跡

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境（第１・２図）



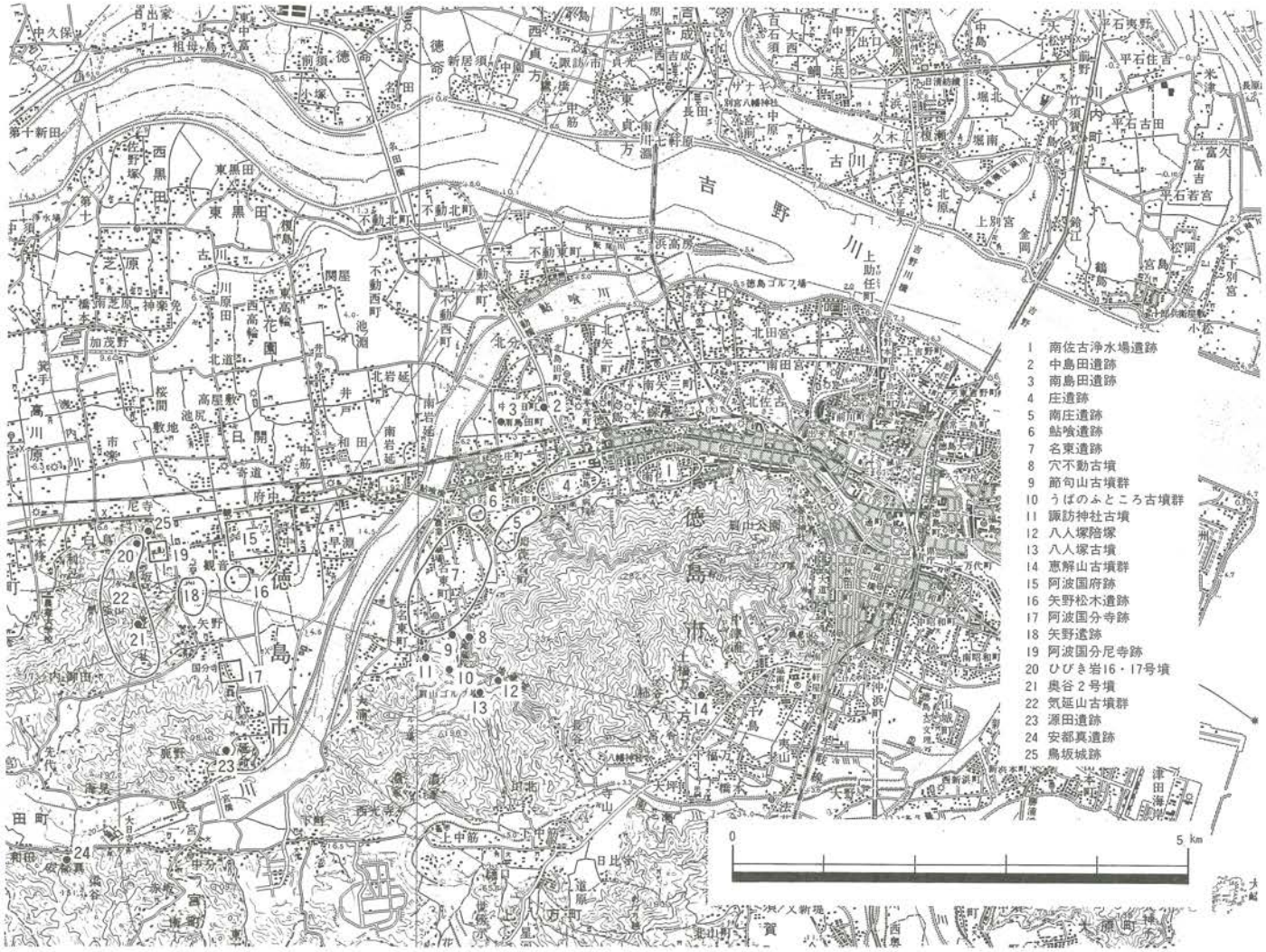
第１図　中島田遺跡位置図

高知県と愛媛県の県境にそびえる瓶ケ森（1896.5m）に源を発して、四国山地の峡谷を北流する吉野川は、徳島県三好郡池田町でほぼ直角に流路を変えて東流し、一路、紀伊水道に注ぎ、河口部一帯に広大な三角州を形成する。徳島市はその広大な三角州の南端部に形成された都市である。その徳島市の中央部やや北寄りの地点に中島田遺跡の所在する徳島市中島田町２丁目が位置する。中島田町２丁目の北西部には吉野川と河口付近で合流する鮎喰（あくい）川が流れる。この鮎喰川は弥生時代前期以前は中島田町２丁目の南方約２㎞に位置する眉山（びざん）山塊の麓を流れていたと見られるが、その後次第に流路を北向きに変化させて、現在のような流路となった川である。その間、大量の土砂が流域に堆積し、現在の標高３～４ｍの低平な沖積平野が形成された。中島田遺跡はその低平な沖積平野の一角に営まれた中世の集落遺跡であり、現地表面の標高は約3.5mを測る。調査地点の地目は水田および宅地である。

第２節　周辺の遺跡（第２図）

縄文時代

周辺の遺跡の中で縄文時代の遺物が出土した遺跡としては南佐古浄水場遺跡[註1]・庄遺跡（日



第2図　周辺の遺跡分布図　（建設省国土地理院発行 1/50000 地形図「徳島」「川島」を転載）

赤血液センター地区[註2]・徳島大学蔵本団地地区体育館地点[註3]・南蔵本下水〈仮称〉地区[註4]）があるが、明瞭な生活痕跡はまだ検出されていない。

弥生時代

眉山の北麓部一帯は県内最大級の弥生集落が営まれた所で、これまでに、庄[註5]・南庄[註6]・鮎喰[註7]・名東（みょうどう）[註8]の各遺跡で該期の遺構・遺物が検出されている。とりわけ徳島市教育委員会によって数次にわたる調査が行われた南庄遺跡では前期から後期にかけての集落の変遷を物語る多数の遺構・遺物の出土が見られ、庄遺跡でも弥生前期の墓群（徳島大学蔵本団地地区同窓会館地点）や多量の遺物を含む土坑群（同地区体育館地点）が検出されている。また、庄遺跡では前期から後期にわたる多数の木製品が出土している点も特筆される。

一方、目を鮎喰川の左岸に転じると、気延（きのべ）山の麓には弥生時代の集落遺跡である矢野遺跡[註9]が広がる。この矢野遺跡でも数次の調査によって中期を中心とする時期の竪穴住居跡などの遺構が確認されている。

鮎喰川流域は該期の特徴的な遺物である青銅祭器の出土例が目立って多い地域でもある。源田遺跡[註10]からは3個の銅鐸と中広形銅剣1本、安都真（あづま）遺跡[註11]からは4個の銅鐸、さらに鮎喰川の上流域にあたる名西郡神山町からは2箇所[註12]で銅剣が出土している。

古墳時代

眉山山塊の西端は多数の古墳が営まれた場所であり、その麓一帯には弥生時代に引き続いて該期の集落が形成されていた。主要な古墳としては市内最大級の横穴式石室を持つ円墳である地蔵院境内の穴不動古墳、積石による前方後円墳としては全国最大といわれる八人塚古墳（県指定史跡）などがある。古墳時代の遺構・遺物は、前代同様、庄・南庄・鮎喰・名東の各遺跡から検出されている。

鮎喰川左岸の気延山周辺は県下最大の古墳群地帯であり、100基以上の古墳が群集する。調査事例としてはひびき岩古墳群内の16・17号墳[註13]、奥谷古墳群内の奥谷2号墳[註14]などがあり、そのほかの主要古墳としては、結晶片岩[註15]の巨石によって構築された全長8mの横穴式石室の矢野古墳[註16]（県指定史跡）が所在する。

古　代[註17]

古代の政治・経済の中心地であった阿波国府は、鮎喰川左岸の現国府町に所在し、周辺には国分寺跡[註18]・国分尼寺跡[註19]（国指定史跡）を初めとする該期の遺跡が密集している。国衙政庁の正確な位置については現段階では不明であるが、徳島市教育委員会による確認調査が数次にわたって実施されて、その成果が期待されている。

鮎喰川右岸においても、庄・名東遺跡などで該期[註20]の遺構・遺物が見つかっており、とりわけ庄遺跡では名東郡衙にかかわると見られる大規模な掘立柱建物跡や墨書土器、銅製の巡方、石帯などが検出されている。また、徳島大学蔵本団地地区体育館地点や南庄遺跡[註21]では水路状

遺構から斎串・人形などの律令祭祀にかかわる遺物も多数出土している。[註22]

中　世

鎌倉・室町を中心とする中世の遺構・遺物は庄・南庄・名東などの各遺跡から検出されているが、比較的纏まった状態で検出されたのは名東遺跡のみである。徳島県教育委員会による県営名東団地の建て替えに伴う調査では、平安末期から鎌倉初期頃と推定される大規模な建物跡や堀状の遺構が発見され、平安期に成立起源を持つ安楽寿院領名東荘に伴う倉庫などの施設の可能性が指摘されている。[註23] そのほか、徳島市教育委員会による調査によっても、数棟の掘立柱建物跡が検出されており、当地域を中心に鎌倉～室町期の集落が展開することが明らかにされている。[註24]

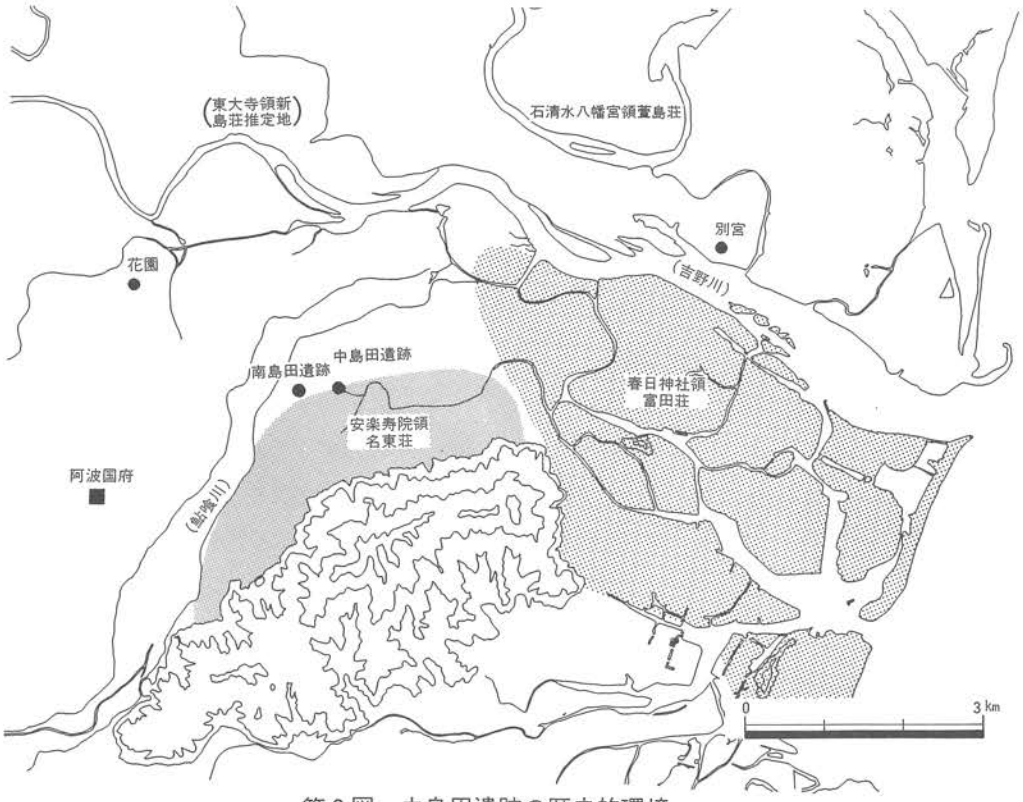
一方、鮎喰川左岸の地域では、市による国衙跡の確認調査においても、中世の遺構・遺物が検出されており、古代から中世にかけての国府の変遷を知る上で貴重な成果が積み上げられつつある。

以上のように中島田遺跡の周辺には縄文時代以降の遺跡が数多く所在し、徳島県下でも有数の遺跡密集地帯となっている。しかしながら、そうした多数の遺跡は主に眉山・気延山の山麓部に分布しており、図１上で東西に延びる国道192号線よりいずれも南側に位置している。国道192号線の北側は地形的にも幾分低平な地形で、この地域においてはこれまで遺跡の所在は確認されていない。したがって今回調査を行った中島田遺跡と南島田遺跡の両遺跡が、こうした低平な地域で最初に発見・調査された遺跡ということになる。

第３節　歴史的環境（第３図）

中島田遺跡が営まれた時代である中世を中心とする時期の歴史的環境を文献史料をも援用しながら、さらに詳しく見ておくことにしたい。

中島田遺跡が所在する徳島市中島田町２丁目付近は奈良時代は名方（なかた）郡に属していた。奈良時代、この名方郡には阿波国における代表的な初期荘園として著名な東大寺領新島（にいじま）荘が成立していた。この新島荘の位置については、近年の研究によって現在の板野郡藍住町新居須付近に比定する説が有力視されているが、現状では諸説一致を見ない。[註25] しかし、いずれの説を採るにしても、中島田遺跡の所在地とは至近の距離にあり、大河の流域の低平な地に立地した荘園であったことに変わりはない。その意味で、新島荘は吉野川及び鮎喰川下流域の開発史を知る上で貴重な存在となる。しかし、文献による限りでは、新島荘は他の初期荘園の例にもれず、10世紀代には荒廃してしまっている。[註26] その後、当地域でも王朝国家の下で在地の富豪層による開発が推進されたと推察されるが、具体的な史料は伝わらず、わずかに鎌倉初



第３図　中島田遺跡の歴史的環境

期頃に吉野川と鮎喰川の合流地点南岸の地域が田宮島と呼称されて、成立まもない春日神社領富田荘に属していたことが知られるのみである。[註27] この富田荘は現在の徳島市の中心部一帯を荘域として、元来、国衙領に準じる別納保であった所領が元久元（1204）年に在地領主の寄進によって春日神社領として立券されたものである。立荘以前に別納保であったことは、すでに平安末期から一定程度、在地勢力による開発が進展していたことを示している。[註28] したがって、遅くとも平安末期には吉野川の三角州地帯の開発が進み、新たな中世所領の形成が推進されていたことが窺える。

中島田遺跡が所在する地域も既述のように大局的にはそうした三角州地帯の一角を占めており、開発の歴史も平安末期頃には遡り得るものと思われる。中島田遺跡の調査が行われた地点は遺跡が営まれる以前は後述するように生活痕跡が確認されないが、基盤層である砂礫層からは比較的遺存状態の良い平安末から鎌倉初期頃と見られる遺物が少量出土しており、今後周辺の微高地で該期の遺跡が発見される可能性は十分考えられる。

ところで、中島田の地域に隣接する蔵本地域は古代から中世にかけての時期、名東荘に属していたことが、文献史料の上で確認される。[註29] この名東荘は康治２（1100）年に院庁下文をもって成立した荘園で、平安末期には京都の安楽寿院の領有するところとなった。安楽寿院は後白河上皇が創建した寺院で、その所領も従来院領であったものが寄せられたものが多い。[註30] 名東荘は郡名を負っており、荘域もかなり広大な荘園であったと見られる。確実に当荘内に

含まれると見られる地域は、徳島市名東町・南庄町・庄町・佐古などであるが、北島田町・中島田町・南島田町の各地域と鮎喰町の地域は、荘内に属したか、その外縁部に位置したか明らかでない。しかし、平安末期の史料[註31]ではあるが、当時、名東荘の荘民が鮎喰川を超えて、隣荘の延命院荘に出作し、中には居宅を構えた農民もいたことから見ても、当時の名東荘内では可耕地の開発は限界に達し、その開発意欲が周辺部に向かいつつあったことが窺える。

従来、低湿な三角州地帯として開発が容易でなかった名東荘の北辺部が、鮎喰川の流路の変遷などの自然的条件の変化によって、次第に高燥な土地となるにつれて、名東荘の荘民を中心とする農民が出作し、やがて集落を形成するに到ったと推測される。

このように中島田の中世集落は吉野川及び鮎喰川下流域の開発の進展という歴史的条件の下で形成されたと考えられるのであるが、今一つ当遺跡にかかわる歴史的環境の中で注目すべきは交通・流通の問題である。この点について注目されるのは、中島田とは隣接する位置関係にある蔵本が中世の頃、「倉本下市」と呼ばれた「市」であった点である。「倉本」の地名自体にも物資の集散地としての性格[註32]が窺えるが、さらに流通・交易の拠点として「市」が開設されていたとなると、その地が「マチ（町)」的な様相を強くしていたことは容易に想像されるところである。中島田の集落がそうした「マチ」的な様相を呈していた「倉本」の影響下にあったこともまた容易に想像される。

ところで、「倉本」を中心とする地域の流通・交易の問題を考える上で、重要な点は吉野川・鮎喰川を中心とする河川水運の問題であろう。

これまでの通説によると、中世の頃の吉野川の本流は現在の旧吉野川であったとされる。しかし、鎌倉時代初期の史料[註33]によると、富田荘の北側を「吉野川」が流れていたことが記されており、少なくともこの頃は現在の吉野川(近世には別宮(べつく)川と呼ばれていた）の流路が「吉野川」と呼ばれていたことは確実である。また、「兵庫北関入船納帳」に記載される「別宮」は石清水八幡宮領萱島荘内の港津で、吉野川の河口部に位置している[註34]。当時、大山崎の油座商人は吉野川を舞台に活発な活動を展開していたが、その拠点となったのが「山崎胡麻」の積出港となっていた「別宮」であったと見られる[註35]。こうした文献史料から考えると中世の頃の「吉野川」は現在の旧吉野川ではあり得ず、現在の吉野川の流路の前身か、飯尾川の流路であったと見られるのである。とすれば中島田は河川水運の大動脈ともいうべき吉野川ルートの沿線に位置することになる。こうした水運、ひいては流通の発展が中島田の集落に生きた人々のくらしに大きな影響を与えたことは想像に難くなく、中島田遺跡から出土する遺物についても流通史の視点から検討が加えられなければならないことを歴史的環境が示しているといえよう。

註記

註１　森敬介「徳島市水道三谷濾過池に於ける原始的独木舟発見の顚末(上)(下)」『歴史と地理』18の１・18の５　1926年。

註２　徳島県教育委員会（以下、県教委）「庄遺跡現地説明会資料」1983年。

註３　県教委「庄遺跡徳大蔵本団地地区－体育館地点－昭和58年度調査現地説明会資料」1983年。

註４　徳島市教育委員会（以下、徳島市教委）『第７回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る－最近の発掘調査－』1986年。

註５　庄遺跡の主な調査歴は次の通りである。(地区・地点名、調査主体、調査年、文献)

（１）蔵本公園地区、県教委、1978年、県教委『徳島県文化財調査概報(昭和53年度)』1980年。

（２）徳島西警察署地区、県教委、1979～1980年、県教委『徳島県文化財調査概報（昭和54年度)』1981年。

（３）旧あさひ学園（日赤血液センター）地区、県教委、1983年、註２参照。

（４）徳大蔵本団地地区器具庫地点、県教委、1982～1983年、「現地説明会資料」。

（５）徳大蔵本団地地区体育館地点、県教委、1982～1983年、註３参照。

（６）加茂名中学校地区、徳島市教委、1983年、「現地説明会資料」。

（７）兵営西内線地区、徳島市教委、1983～1984年、徳島市教委『第６回埋蔵文化財資料展庄遺跡の人々のくらしと文化』1985年。

（８）徳大蔵本団地地区課外活動共用施設＜部室＞地点、県教委、1984年、「現地説明会資料」。

（９）徳島西消防署地区、徳島市教委、1984年。

（10）国道拡幅工事に伴う調査地点、県教委、1984年、県教委『庄・鮎喰遺跡』1985年。

（11）徳大蔵本団地地区臨床講義棟地点、県教委、1985年。

（12）徳大蔵本団地地区動物実験室地点、県教委、1985～1986年、「現地説明会資料」。

（13）南蔵本下水（仮称）地区、徳島市教委、1985～1986年、註４参照。

（14）徳大蔵本団地地区同窓会館地点、徳島大学医学部同窓会館建設地埋蔵文化財保護対策委員会、1986～1987年、「現地説明会資料」。

（15）徳大蔵本団地地区医療短大地点、県教委、1987年、「現地説明会資料」。

（16）南庄町４丁目地区、徳島市教委、1987年。

（17）庄町３丁目地区、徳島市教委、1987年、徳島市教委『第８回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』1987年。

註６　南庄遺跡の主な調査歴は次の通りである。

（１）小川マンション地区、徳島市教委、1981～1982年、註５（７）参照。

（２）市道南庄・南佐古地区、徳島市教委、1985～1988年、各年次の「現地説明会資料」および徳島市教委第６～９回埋蔵文化財資料展図録。

（３）徳島家畜衛生保健所地区、県教委、1988年。

註７　鮎喰遺跡の主な調査歴は次の通りである。

（１）市下水道建設工事に伴う調査、徳島市教委、1983～1987年、註４参照。

（２）国道192号線拡幅工事に伴う調査、県教委、1984年、註５（11）参照。

註８　名東遺跡の主な調査歴は次の通りである。

（１）西・南地区、秋山　泰、1960年、天羽利夫・岡山真知子「鮎喰川下流域における弥生文化の展開－序論－」（徳島県博物館『徳島県博物館紀要』第５集　1974年）。

（２）Ａ～Ｃ地区（第１次調査）、徳島市教委、1977年、徳島市教委『名東遺跡第１次調査概報－1977年度－』1978年。

（３）Ｄ～Ｆ地区（第２次調査）、徳島市教委、1978年、徳島市教委『名東遺跡第２次調査概報－1978年度－』1979年。

（４）Ｇ・Ｈ地区（第３次調査）、徳島市教委、1982年、徳島市教委『弥生時代の徳島市－埋蔵文化財資料展－』1983年。

（５）県営名東団地地区、県教委、1984～1988年、各年次の「現地説明会資料」および県教委『第１・２回埋蔵文化財資料展　掘ったでよ阿波』1987・1988年。

（６）名東町１丁目地区、徳島市教委、1986年、註４参照。

（７）天理教国名大教会地区、徳島市教委、1987～1988年、徳島市教委『第９回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る－最近の発掘調査と古墳の副葬品』1988年。

註９　矢野遺跡の主な調査歴は次の通りである。

（１）国府変電所地区（第１次調査）、県教委、1976年、県教委『徳島県文化財調査概報1976年度』1978年。

（２）国府変電所地区（第２次調査）、県教委、1976年、同前。

（３）国府変電所地区（第３次調査）、県教委、1976年、同前。

（４）国府変電所地区（第４次調査）、県教委、1977年。

（５）Ａ・Ｂ地区(第５次調査)、徳島市教委、1978年、徳島市教委『徳島市文化財だより』№1　1978年。

（６）第６次調査地区、石井町教委、1979年～1980年。

（７）Ｃ地区（第７次調査）、徳島市教委、1981年、註８（４）参照。

（８）Ｄ地区（第８次調査）、徳島市教委、1981年、同前。

（９）Ｅ・Ｆ地区（第９次調査）、徳島市教委、1983年。

(10) 国府養護学校地区、県教委、1983年、「現地説明会資料」。

(11) 国府養護学校地区、県教委、1987年。

(12) よつまた地区、徳島市教委、1988年、註８（６）参照。

註10　三木文雄「阿波国源田出土の銅剣銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』36の２　1950年。

註11　三木文雄「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』50の４　1965年。

註12　村木幸雄「阿波国名西郡左右山出土の平形銅剣と其遺跡」『考古学雑誌』30の３　1940年。沖野舜二「徳島県神山町下分東寺出土の銅剣」・三木文雄「徳島県神山町下分東寺出土の銅剣－補遺－」『考古学雑誌』42の１　1956年。

註13　菅原康夫『日本の古代遺跡37徳島』　保育社　1988年。

註14　石井町教育委員会（以下、石井町教委）『ひびき岩16号墳発掘調査報告書』1986年。

註15　県教委『徳島県文化財調査概報昭和54年度』1981年。

註16　徳島市教委『古墳時代の徳島市－埋蔵文化財資料展－』1981年。

註17　註16参照。

註18　関連の調査歴は次の通りである。

（１）市道改築工事に伴う緊急発掘調査、県教委、1976年、註９（１）参照。

（２）阿波国分寺跡重要遺跡確認調査（第１次）、徳島市教委、1978年、徳島市教委「阿波国分寺跡第１次調査概報」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第５集　1979年。

（３）阿波国分寺跡重要遺跡確認調査（第２次）、徳島市教委、1980年、徳島市教委「阿波国分寺跡第２次調査概報」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第７集　1980年。

（４）阿波国分寺跡重要遺跡確認調査（第３次）、徳島市教委、1980年、徳島市教委「阿波国分寺跡第３次調査概報」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第９集　1981年。

（５）農業用水工事に伴う緊急発掘調査、徳島市教委、1985～1986年、註４参照。

註19　主な調査歴は次の通りである。

（１）阿波国分尼寺跡緊急発掘調査、県教委・石井町教委、1970年、県教委・石井町教委『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』1971年。

（２）阿波国分尼寺跡緊急発掘調査（第２次）、県教委・石井町教委、1971年、県教委・石井町教委『阿波国分尼寺遺跡（第２次）緊急発掘調査概報』1972年。

（３）石井小学校尼寺分校プール建設に伴う調査、石井町教委、1985年。

註20　国府跡に関連する主な調査歴は次の通りである。

（１）阿波国府跡重要遺跡確認調査（第１次）、徳島市教委、1983年、徳島市教委「阿波国府跡第１次調査概報－1982年度－」(『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第12集、1983年)

（２）阿波国府跡重要遺跡確認調査（第２次）、徳島市教委、1984年、徳島市教委「阿波国府跡第２次調査概報－1983年度－」(『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第13集、1984年)

（３）阿波国府跡重要遺跡確認調査（第３次）、徳島市教委、1985年、徳島市教委「阿波国府跡第３次調査概報－1984年度－」(『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第14集、1985年)

（４）阿波国府跡重要遺跡確認調査（第４次）、徳島市教委、1986年、徳島市教委「阿波国

府跡第４次調査概報－1985年度－」(『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第15集、1986年)

（５）阿波国府跡重要遺跡確認調査（第５次)、徳島市教委、1987年、徳島市教委「阿波国府跡第５次調査概報－1986年度－」(『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第16集、1987年)

（６）阿波国府跡重要遺跡確認調査（第６次)、徳島市教委、1988年、徳島市教委「阿波国府跡第５次調査概報－1987年度－」(『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第17集、1988年)

（７）宅地造成工事に伴う緊急調査－神明地区－、徳島市教委、1987年、註８（７）参照。

（８）国府養護学校プール建設に伴う調査、県教委、1988年、「現地説明会資料」。

註21　福家清司「庄遺跡出土の墨書土器銘『賀専当』について」高等学校地歴学会『高校地歴』20号　1984年。

註22　福家清司・久保脇美朗「庄遺跡徳大蔵本団地地区－体育館地点－」広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『第４回中世遺跡研究集会　中世の呪術資料』1984年。
徳島市教委「南庄遺跡市道南庄南佐古線地区現地説明会資料」1987年。

註23　註８（５）参照。

註24　註８（６）参照。

註25　丸山幸彦「東大寺領庄園の変遷」八木充『古代の地方史２山陰・山陽・南海編』朝倉書店1977年。

註26　年月日不詳（長徳４年か)「東大寺領諸国荘家田地目録」東南院文書『平安遺文』377号。

註27　承久４年３月「大江泰兼愁状」大東家旧蔵文書『鎌倉遺文』2937号。

註28　福家清司「阿波国富田荘の成立と開発」徳島地方史研究会創立10周年記念論集『阿波・歴史と民衆』南海ブックス　1981年。

註29　名西郡神山町勧善寺所蔵「大般若経」巻321奥書（徳島県博物館『徳島県博物館紀要』第12集1981年）に「阿州名東庄倉本下市」と見える。

註30　年月日不詳「庄々所済日記」安楽寿院古文書（愛媛県『愛媛県史』資料編古代・中世　1983年)。

註31　久安２年７月11日「河人成俊等問注申詞記」(愚昧記裏文書『平安遺文』2583号)。

註32　註29参照。

註33　元久元年９月「阿波富田荘立券文案」春日神社文書（『鎌倉遺文』1481号)。

註34　燈心文庫所蔵。

註35　「離宮八幡宮文書」に関係史料が数点見られる。

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

中島田遺跡は調査以前には所在が確認されていなかった遺跡である。当遺跡が発見される契機になったのは、県道徳島鴨島線道路改良事業に伴う中島田工区の工事であった。昭和61年１月、県道路建設課より工事施工に伴う埋蔵文化財の確認調査の依頼を受けた文化課は、工事予定地内の試掘を重機を用いて行った。この時点では、ごく少量の土器片が採集されたのみで、遺跡の所在を確認するに到らなかったため、さらに道路本体部分の床掘りが終了した時点で、改めて面的な確認調査を実施することとなった。同月20日に小範囲の面積を面的に精査して再度の確認調査を実施したところ、ほぼ全面に溝跡・土坑・柱穴などの遺構が検出され、出土遺物から中世の遺跡が工事予定地内に広がることが判明した。当初、遺跡の所在が確認されなかったため、受注業者によってすでに一部の工事が始められていた段階であったが、再度の確認調査の結果を基に、文化課・道路建設課・徳島土木事務所の三者で協議を行った結果、工事中の不時発見遺跡としての取扱いで、緊急調査を実施する運びとなり、急拠編成された調査班が２月当初から調査に着手することとなった。

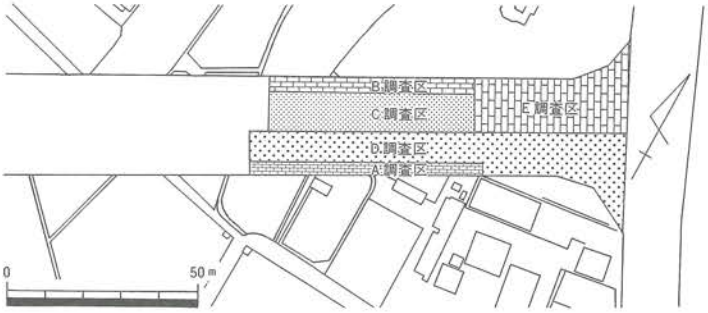
調査に着手した段階では、一部用地買収が完了していない一画があり、その部分の調査は買収が完了後に調査を実施することとなった。この部分の調査は用地買収終了後の昭和63年６月に着手した。本書では、以下、先の調査を１次調査、後者を２次調査として記述した。

第２節　調査の経過

（１）１次調査の経過

協議の結果、１次調査は道路両側の擁壁・舗道部分の発掘調査と遺跡の範囲確認のための調査を昭和60年度中に実施し、道路本体部分の発掘調査は昭和61年度に行うこととなった。調査は２月４日にまず中島田工区の第２分割部分の試掘トレンチの掘り下げから開始した。翌５日から道路両側の擁壁と舗道部分の表土剝ぎを重機を使用して行い、順次掘り下げを進めた。調査区が分割されたため、道路南側の擁壁と舗道部分をＡ調査区、北側をＢ調査区と便宜上呼称し、以下、順次２次調査区までをＣ～Ｅ調査区とした（第４図参照）。

確認調査区では重機による深掘り等によっても遺跡の広がりが見られず、厚い砂礫層が堆積することが確認されたため、第２分割部分については工事に着手。Ａ・Ｂ調査区では完形の土師質の杯や椀などの遺物が出土し、遺構もほぼ全面に広がっていることが確認された。



第４図　中島田遺跡調査区割図

しかし、遺構の識別は極めて困難で、調査は難航した。

３月31日に昭和60年度の調査を終え、新年度の調査は新しい体制の下で、４月７日から着手した。新年度調査はＡ・Ｂ調査区の調査を継続する一方、４月16日から道路本体部分の北側車線（Ｃ調査区と呼称）の掘り下げに着手した。Ａ・Ｂ調査区は５月初旬に明渡しを終えた。さらに年度当初の協議によって隣接する南島田工区の確認調査の依頼があったため、５月中旬から試掘トレンチの調査も平行して進めた。Ｃ調査区は全面にわたって床掘りが終了し、包含層も大半が削平を受けていたため、遺構面の検出は順調であったが、遺構の確認は困難を極めた。前年度調査においてＢ調査区西端部で木棺墓が検出されたことから、Ｃ調査区では調査区をさらに西に拡張して調査を行ったが、この拡張部分で自然流路と見られる落ち込みを確認した。この落ち込みの掘り下げを行ったところ、矢・呪符木簡などの木製品が出土した。７月下旬にＣ調査区の調査と平行して、道路南側部分（Ｄ調査区と呼称）の調査を開始した。Ｄ調査区の西半分ではすでに道路の下部工事が行われていたが、これを除去して調査を行った。Ｃ調査区の調査は８月初旬に終了し、Ｄ調査区の調査に専念するが、工事工程の都合上、Ｄ調査区の東半分をまず明渡すことになり、この部分の調査を先行させ、10月初めに明渡しを終えた。

Ｄ調査区西部の調査は11月27日に完了し、中島田遺跡の１次調査をすべて完了した。調査が終盤に近づいた同月15日には現地説明会を開催し、調査成果の中間発表を行った。

（２）２次調査の経過

２次調査は用地買収完了後の昭和63年６月２日から着手した。２次調査の調査区は１次調査のＣ調査区の東側にあたり、便宜的にＥ調査区と呼称した。Ｅ調査区は１次調査の調査区の大部分がすでに包含層まで工事による削平を受けていたのと異なり、建物の基礎を除去してもなお旧耕作土以下の土層は撹乱を受けていない状態であった。そのため、１次調査では不十分であった遺構の層序的な把握を目指して、旧耕作土以下は手掘りによる調査を進めた。その結果、旧耕作土下の床土と見られる層を除去した段階で、比較的新しい時期の遺構面（第１遺構面）を検出した。この第１遺構面から下は比較的均質な土層が厚く堆積していたが、

1次調査で検出した遺構と同一時期の遺構面（第2遺構面）までは、遺構面として把握される土層は確認されなかった。

2次調査は、途中、現場全体が完全に水没するなど、雨に悩まされながらの調査であったが、8月27日には現地説明会を開催し、同31日にすべての調査を完了した。

1次・2次の調査経過の概要は上述の通りであるが、詳細については次節に抄述する調査日誌抄に譲ることとしたい。

（3）調査組織

昭和60年度

総括	課長	前川　武
	課長補佐	清水　博
	文化財保護班長	立花　博
庶務	庶務係長	富積　忠男
	主事	大八木芳子
調査担当	研修生	小笠原　賢
	文化財調査員	小西　敏夫

昭和61年度

総括	課長	桝田　務
	課長補佐	清水　博
	文化財保護班長	中田　正
	社会教育主事	後藤　忠雄
庶務	庶務係長	富積　忠男
	主事	大八木芳子
調査担当	社会教育主事	福家　清司
	文化財調査員	久保脇美朗・林　和彦・北原　雅代・中村　光男・九十九　貢・鎌田　憲二（9.11～）・仁木　浩志（9.11～）・林　博之（9.11～2.14）・原田　夏実（2.20～）

昭和62年度

総括	課長	桝田　務
	課長補佐	清水　博
	文化財保護班長	中田　正

	社会教育主事	後藤　忠雄
庶務	庶務係長	天野　尊温
	主事	大八木芳子
調査担当	社会教育主事	福家　清司
	文化財調査員	中村　光男・乾　雅信・実平　理文・楠　達二

昭和63年度

総括	課長	三舟　侑司
	課長補佐	岡野　嘉夫
	文化財保護班長	河野　良昭
	社会教育主事	後藤　忠雄
庶務	庶務係長	天野　尊温
	事務主任	大八木芳子
調査担当	社会教育主事	福家　清司
	文化財調査員	北原　雅代・上田　直樹・神例　邦明・木村　哲也（～8.10）・細井康宏（9.1～10.31）

【調査作業参加者】（昭和60年度～昭和63年度）

岡田惣五朗、武市義光、相原覚、笠井義則、秋山久米夫、斎藤清重、森井修、北瀬正幸、田村猪三郎、大林勝治、岡田孝司、黄田浩二、町田和彦、岡田イワノ、山本マキエ、山本シズカ、斎藤ユキ子、藤崎アサエ、斎藤ノブ子、萩野愛子、井関和子、日野征子、西門佐世子、渡部ツヤ子、能田キミ子、井上弘子、森本キヌエ、佐藤ヨシエ、金丸昌弘、原田夏実、斎藤智子、黒長美智子、永田典子、久保恵美、田岡盛恵、武市玉乃、森本誉、上原義男、河野芳子、三浦千秋、森井岩夫、森井フミコ、斎藤春雄、斎藤信治、手塚つる子、上原ハルエ、大森フサコ、北原照子、本田春愛、田村明、遠藤秀明、森前美佐子、上原ハルコ、金丸典弘、丸山稔、渡辺高章、森清治、喜多史朗、中塩トモエ、村岡マチエ、滝川邦雄、村上稔、富樫哲也、宮本武志、大西昭範、天羽哲也、樫福博、松本幸治、宮尾大、末永一路、鈴木寿、宮本文子、仁木浩志。

【整理作業参加者】（昭和62年度・昭和63年度）

原田夏実、森前美佐子、谷恵子、黄田浩二、本田春愛、仁木浩志、田尾直美、岩田智美、天羽哲也、魚谷寛、吉成裕之、宮本武志、富永由里、神部三知代、山脇敬子、宮尾大、末永一路、森清治。

第3節　調査日誌抄

（1）1次調査

（昭和60年度調査）

昭和61年

2月4日（火）晴

本日より調査開始。まず遺跡の広がりを確認するために、中島田工区第2分割にトレンチを設定し、掘り下げる。

2月5日（水）晴

A・B調査区の表土剝ぎ（重機使用）開始。

2月8日（土）晴

調査区杭打ち。確認調査区写真撮影。第2分割工区には遺跡の広がりが見られないことを確認。

2月15日（土）晴のち曇

B調査区掘り下げ開始。この間、A調査区で検出した遺物の実測を開始するとともに遺構確認開始。

2月18日（火）雪のち雨

A調査区で集石遺構検出。午後雨となり、資材の点検と土器の洗浄を行う。

2月24日（月）雪のち晴

この間、A・B調査区全体で遺構の確認を進める。溝跡・柱穴等の遺構を多数検出するが、全体に遺構のプラン確認難しい。

3月5日（水）晴

春一番の中での作業。A調査区の柱穴・土坑・溝跡等を完掘し、写真撮影。プランの把握が極めて難しいため、さらに全体を小刻みに掘り下げて、遺構の精査を繰り返すことにする。

3月13日（木）晴

この間、調査区全体で遺物の取り上げと遺構の精査を繰り返す。遺物の出土は多いが、遺構のプランは不明瞭。

3月16日（日）曇

調査が遅れ気味のため、日曜日であるが作業を行う。全体で遺構の確認を進める。B調査区の西端で、小規模の木棺墓を検出する。

3月18日（火）曇

木棺墓の実測開始。

3月24日（月）晴

木棺墓の断面図作成後、掘り下げ開始。明日、写真撮影の予定。

3月27日（木）晴のち曇

木棺墓取り上げ。腐食が激しいため、粘土を切り取って取り上げる。木棺内には人骨のほか、折敷・漆椀が納められている。

3月31日（月）

事務所内の整理・遺物の分類・資材の点検を行って、昭和60年度の調査を終える。

（昭和61年度調査）

4月7日（月）晴

本日より新体制で調査再開。A・B調査区の調査を継続。

4月8日（火）晴のち曇

木棺が検出されたB調査区の西端をさらに10mほど拡張し、掘り下げ。新たに墓の検出は見られなかったが、骨・漆椀などの出土が見られ、墓が破壊された可能性が認められた。

4月16日（水）晴

昨日の降雨により、調査区水没。排水作業と清掃に手間取る。この間、A・B調査区壁面の土層図の作成、掘り残し分の遺構確認作業と実測図の作成を継続。道路建設課との協議により、中島田工区の延長部分である南島田工区の確認調査を早急に実施することとなった。明日よりC調査区の掘り下げを開始する。

4月22日（火）雨

激しい雨が終日続き、調査区冠水。畦の崩壊が心配される。

4月30日（水）晴

C調査区の掘り下げ続行。東側部分に遺物が多い。遺構のプラン把握が困難なため、手掛かりとするために遺物は可能な限り残しながら掘り下げを進める。A・B調査区は小調査区単位で砂層直上まで掘り下げて最終の確認作業を行う。

5月7日（水）晴

昨日の降雨により、全面冠水。周辺からの雨水の流入によりプール状態となり、終日排水作業に要する。排水作業の合間に、南島田工区の確認調査区の杭打ちを行い、試掘トレンチを設定する。

5月8日（木）晴

A・B調査区完掘。写真撮影後、明渡す。A調査区では直ちに擁壁工事が始まる。

5月12日（月）曇のち晴

C調査区全体で遺構確認作業。東部を中心に多数の遺構を確認。遺構配置図の作成開始。明日、遺構確認状況写真撮影の予定。

5月15日（木）晴

昨日の雨により、C調査区・南島田工区の確認調査区とも水没。終日排水作業実施。

5月23日（金）晴

この1週間、C調査区では排水作業に明け暮れる。遺構面上の土器の実測を始める。この間、確認調査区のトレンチ掘り下げ・土層図作成を集中的に行う。南島田工区の確認調査区では遺物の出土はほとんど見られない。

5月27日（火）晴

C調査区溝201・202掘り下げ。遺構不鮮明な箇所を掘り下げて、遺構確認。

6月3日（火）曇

C調査区の遺構半掘作業続行。南島田工区の確認調査区№8トレンチで中世の土器片が出土し始める。

写真1　作業風景（1）

6月9日（月）晴

C調査区を西側に約10m拡張する。この部分はB調査区の拡張部分で、遺構面が落ち込み、沼状の堆積土が見られた地点にあたる。

6月21日（土）～26日（木）

断続的に雨が降り続く。雨の合間にC調査区拡張部の荒掘り作業を行う。自然流路の落ち込みであることが判明。埋土から曲物などの木製品が出土し始めたので、慎重に掘り下げる。また、南島田工区の確認調査のトレンチを鮎喰川の堤防近くにさらに手掘りで3箇所あけるが、表土直下より砂礫層となる。

7月3日（木）曇

自然流路より墨痕のある木札1点出土。土坑201土層図、溝205掘り下げ。

7月10日（木）曇時々雨

C調査区東部の炭化物が広がる箇所を再精査。自然流路よりほぼ完存の矢1本出土。雁股の鉄鏃が装着されている。

7月11日（金）曇

自然流路より墨書鮮明な呪符木簡1点出土。

7月17日（木）曇時々晴

矢・呪符木簡等の出土遺物をマスコミ発表。徳島大学岡内先生来訪。

7月18日（金）晴

C調査区遺構完掘状況写真撮影。明日より平面図作成。

7月23日（水）晴時々曇

D調査区東部の表土・盛土を重機を使用して行う。南島田工区の確認調査をすべて終了し、トレンチを埋め戻す。

8月5日（火）晴

この間、調査区東部一帯を掘り下げて、確認漏れの遺構の確認に努める。確認漏れのピット等多く、掘り下げ・図面作成に追われる。D調査区東部の包含層の掘り下げ続行。比較的遺物の出土少ない。

8月9日（土）晴

C調査区の調査終了。D調査区東部で溝203確認し、掘り下げ開始。

8月25日（月）晴

D調査区東部の溝203完掘、平面図作成。C調査区から延びる溝205の掘り下げ開始。D調査区西側の重機残土の処理開始。

9月8日（月）曇

D調査区東部で溝205の掘り下げ続行。溝の北側一帯で、遺構の精査を繰り返す。この部分では土器の細片が出土するが、明瞭に遺構面として把握できる層が見当らない。

9月18日（木）曇のち雨

溝205の平面図作成。午後雨となり、室内で遺物・図面の整理作業を行う。

9月26日（金）晴

D調査区東部で溝206検出。土器だまりが確認され、10月当初の明渡しを前にして、図面作業を急ぐ。元興寺文化財研究所伊藤賢二氏来訪。木製品の保存処理について御教示を得る。

9月29日（月）晴時々曇

溝206の土器だまりでは完形の杯・椀などが多数出土するが、ほぼ掘り上がる。

10月3日（金）晴

溝206の土器だまり実測完了。D調査区東部の調査ほぼ終了。明日、明渡し。D地区西端の自然流路の掘り下げを開始する。

10月16日（木）晴

自然流路より呪符木簡1点を含む木製品出土。

10月18日（土）曇

自然流路より「正見邪見　利根鈍根」と墨書された薄板（柿経）出土。また、合わせ口にして投棄されたと見られる杯の中から、「永楽通宝」1点を含む銅銭2点が出土。

10月27日（月）曇

この間、D調査区西部の全体にわたって遺構の完掘と図面の作成を続行。自然流路からは木製品の出土が相次ぐ。三野町文化財保護委員会の一行来訪。

10月29日（水）曇一時雨

D調査区西部の遺構完掘状況の写真撮影。全

体の平面図作成開始。

11月10日（月）曇のち晴

D調査区全体掘り下げおよび遺構の確認作業続行。現地説明会準備作業。

11月15日（土）曇

現地説明会開催。

写真２　現地説明会（１次調査）

11月17日（月）晴

南島田遺跡の調査に備えて、調査事務所を移転。

11月27日（木）晴

この間、確認漏れの遺構の掘り下げ・図面作成に追われたが、本日で中島田遺跡１次調査のすべての調査を完了し、明渡す。

（２）２次調査

（昭和63年度調査）

昭和63年

６月２日（木）雨

本日、資材搬入・重機による建物基礎部の除去を予定していたが、激しい雨のため作業を延期する。

６月６日（月）晴

ようやく資材搬入を行う。建物の基礎部・盛土を重機を用いて掘削。

６月７日（火）晴

調査区の杭打ちを始める。

６月13日（月）晴

残土の処理と平行して、盛土下の旧耕作土の掘り下げ開始。マンガン沈殿面の精査により土坑101確認。第１遺構面として把握。

６月17日（金）曇

溝101確認、掘り下げ。

６月20日（月）曇のち晴

第１遺構面の調査を終え、下層の掘り下げ開始。

６月25日（土）雨

昨日来の雨により、調査区冠水。排水作業。

６月29日（水）曇時々雨

包含層掘り下げ続行。「景祐元宝」１点出土。

７月４日（月）曇時々晴

排水溝掘り下げ時に坩堝・滑石製石板出土。

７月９日（土）曇

包含層掘り下げ継続。一部で遺構面まで掘り下げ、精査。多数の遺構が見え始める。

７月18日（月）曇時々雨

ここ１週間、断続的に雨が降り、作業やや遅れ気味。雨の合間に遺構面の検出に努める。

７月20日（水）曇

ほぼ全面に遺構が広がるが、プランの不鮮明なものが多く、さらに精査を繰り返す。

７月22日（金）曇

第２遺構面の遺構確認状況の写真撮影後、遺構の掘り下げにかかる。

７月27日（水）曇

この間、遺構の半掘・土層図の作成続行。調査区やや西よりの部分で炭層を除去後、鍋などが一括して出土。「土器だまり」として図面作成にかかる。

8月4日（木）晴

井戸掘り下げ。石列を検出。石組の井戸かと思われたが、石は1段のみで、肩の崩壊を防ぐために並べられたものと見られる。

8月12日（金）曇時々雨

盆で作業を休止していたが、昨夜来の豪雨で調査区全体がプール状になり、一部壁面が崩壊し始めたため、雨の中、終日排水作業を行う。

8月17日（水）曇時々雨

ここ10日間程連日雨が降り、排水作業の繰返し。雨の合間に平面図を作成。

8月18日（木）曇のち雨

ようやく第2遺構面の遺構完掘状況の写真撮影を終えるが、写真撮影を始めると同時にまたまた雨・・・。現地説明会の準備を平行して進める。

8月22日（月）曇時々雨

第2遺構面をさらに掘り下げて、確認漏れの遺構を調査。井戸の底に曲物が据えられていることを確認。

8月26日（金）曇のち晴

全体の掘り下げと確認漏れの遺構の精査をほぼ終える。

8月27日（土）晴

現地説明会開催。

写真3　現地説明会（2次調査）

8月30日（火）晴

井戸の曲物取り上げ後、完掘。調査完了状況の写真撮影を行って、2次調査を終える。

8月31日（水）晴

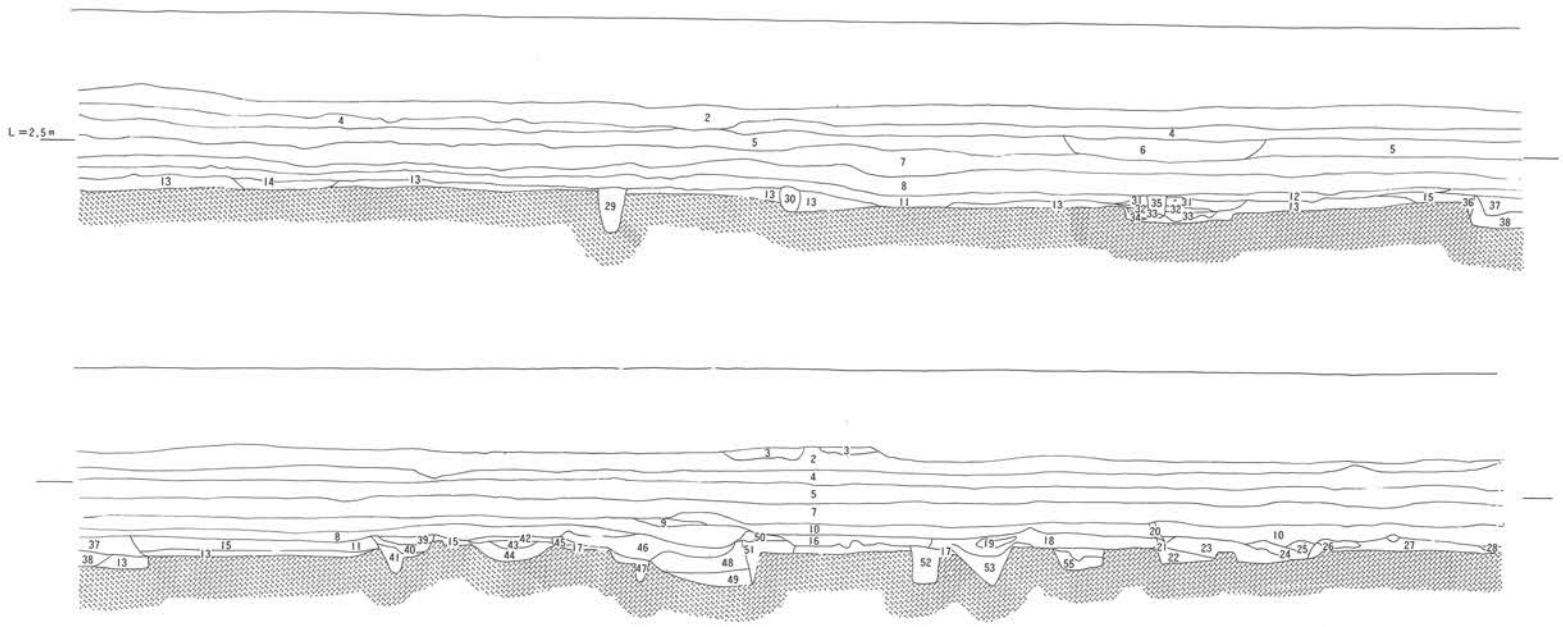
調査区周囲に安全対策を施し、資材搬出。

第3章　層　序

中島田遺跡の調査区は、2次調査の調査区（E調査区）が宅地及び駐車場であったほかは水田として利用されていた土地であった。E調査区でも建物に伴う盛土（約1m）を除去すると戦後まで耕作されていた旧水田土壌が現れる。調査前の水田面の現標高は約3.1～3.9mである。

調査区の層序は全体で必ずしも一様ではないが、1次調査の調査区においては大半がほぼ遺構面直上付近まで工事による削平を受け、土層を層序的に把握するのは困難であったため、ここでは上部からの調査が可能であった2次調査区（E調査区）北壁の土層（第5図）に基づいて中島田遺跡全体の基本土層の説明を加えることとし、第2遺構面下部の土層に関してのみ、1次調査での所見に基づいて補足したい。

まず、第1層は調査以前に建っていた建物に伴う盛土で、E調査区とD調査区東部の一部に認められた。盛土がされた時期は比較的新しく昭和40年以降のことである。第2層が戦後まで耕作されていた水田の土壌であり、他の調査区の表土に対応する。第4層は水田に伴う床土層及び旧水田土壌と見られる層で、撹乱を受けたと見られるブロック状の土が混入する。第5層以下は人為的な撹乱を全く受けていない層で、第5層はマンガンの沈殿が顕著で、その上面は暗茶褐色を呈する。このマンガン沈殿面はE調査区では、南東部を除いてほぼ全面に検出される。この面で溝跡・土坑などの遺構が認められ、第1遺構面として把握した。第7層は基本的には第5層と同一の層で、その分別も明瞭ではないが、第5層に比べるとマンガンの混入が少ないのが特色である。第8層も色調の上では第5・7層と大差がないが、全体に粒子が細かくなり、やや粘質味が増す。第5・7層からも中世遺物が出土するが、その量が極めて少ないのに対し、この第8層からは遺物の量が比較的豊富になる。第11・12層は第8層に比べてさらに炭化物・遺物の量が多く、第2遺構面に伴う明瞭な遺物包含層として把握される。しかし、この層はE調査区の中でも北半分にしか広がっておらず、調査区の南側では第7層と第8層の識別は不明確であった。そうした傾向はC調査とD調査区でも指摘でき、D調査区では第8層以下に対応する明瞭な包含層は認められなかった。第13層は第2遺構面の遺構が掘り込まれた層で、遺物包含層と比べると、砂質味が強く、やや褐色味が強くなる。また部分的ではあるが、その上面は締まりが良好で、C調査区東部とE調査区においてはその検出は比較的容易であった。しかし、D調査区では工事による削平と重機による圧力を受けたためか、遺構面の検出は極めて困難であった。遺構の埋土は一様でないが、全体に極めて識別が困難なものであり、わずかな粘性を手掛かりとして遺構の検出に努めざるを得ない状態であった。



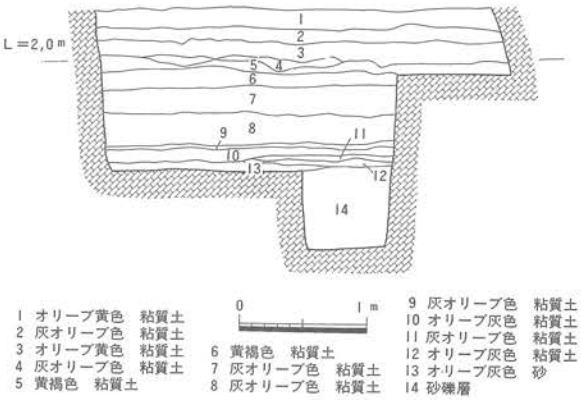
1 盛土
2 灰オリーブ色 粘質土
3 灰オリーブ色 砂質土
4 オリーブ黄色 粘質土
5 灰オリーブ色 砂質土
6 オリーブ黄色 粘質土
7 灰オリーブ色 砂質土
8 黄褐色 粘質土
9 黄褐色 砂質土
10 黄褐色 砂質土
11 黄褐色 粘質土
12 黄褐色 粘質土
13 黄褐色 砂質土
14 暗灰黄色 粘質土
15 黄褐色 砂質土
16 黄褐色 粘質土
17 黄褐色 砂質土
18 暗灰黄色 粘質土
19 黄褐色 粘質土
20 灰オリーブ色 粘質土
21 灰オリーブ色 粘質土
22 灰オリーブ色 粘質土
23 黄褐色 粘質土
24 灰オリーブ色 砂質土
25 暗灰黄色 粘質土
26 黄褐色 粘質土
27 黄褐色 砂質土
28 黄褐色 粘質土
29 黄褐色 粘質土
30 灰オリーブ色 砂質土
31 黄褐色 粘質土
32 黄褐色 粘質土
33 暗灰黄色 粘質土
34 黄褐色 砂質土
35 灰オリーブ色 粘質土
36 黄褐色 粘質土
37 黄褐色 粘質土
38 暗灰黄色 粘質土
39 黄褐色 粘質土
40 黄褐色 粘質土
41 黄褐色 粘質土
42 黄褐色 粘質土
43 黄褐色 粘質土
44 黄褐色 粘質土
45 灰オリーブ色 粘質土
46 暗灰黄色 粘質土
47 黄褐色 粘質土
49 黄褐色 粘質土
50 黄褐色 粘質土
51 黄褐色 砂質土
52 黄褐色 粘質土
53 黄褐色 粘質土
54 黄褐色 粘質土
55 暗灰黄色 粘質土

0 2m

第5図　E調査区北壁土層図

第13層以下についてはＢ調査区で深掘りした際の土層図（第６図）にしたがって説明を加える。

第６層がＥ調査区の第13層に対応する層で、その下の第７～13層は灰オリーブ色系の土層が堆積するが、下部になるほど粘性がなくなり、全体に細かい砂粒が目立ち、締まりも悪くなる。第14層は一括で示したが、実際は複雑な砂礫の堆積層で、最下部の層は小砂利混じりの層となり、湧水が見られる。この第14層は中島田遺跡の全調査区で認められ、遺跡全体の基盤層となる層で、鮎喰川によって上流より流出した砂礫が堆積したものと考えられる。遺物は細片ながら第２遺構面下部の土層中にも見られるほか、第14層の砂礫層中からも出土した。この第14層中から出土した遺物の中には平安末から鎌倉初期頃と見られる遺存状態の極めて良好な土師質の皿（遺物番号632－以下は番号のみを記す）が認められ、周辺に該期の遺構が存在することを暗示しており、注目される。



第６図　Ｂ調査区　Ⅰ・Ⅱ区間畦土層図

調査区の西端では室町期に下る時期の遺物が含まれる自然流路を検出したが、この時期に伴う遺構面はすでに工事による削平が進行していた地点であったためか、確認することはできなかった。この自然流路より西側においては中島田遺跡の遺構面を形成した土層は検出されず、厚い砂礫層が堆積することが、昭和60年度に実施した確認調査で判明している。そうした厚い砂礫層は基本的には南島田遺跡の地点付近まで続くことが昭和61年度の南島田工区の確認調査で確認された。

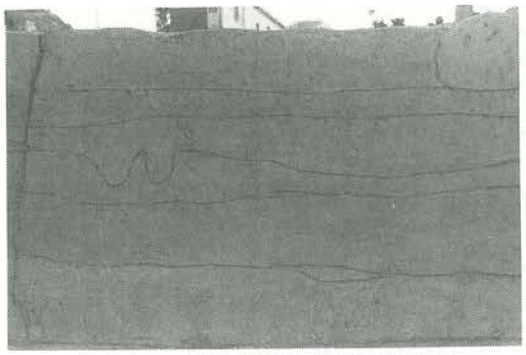
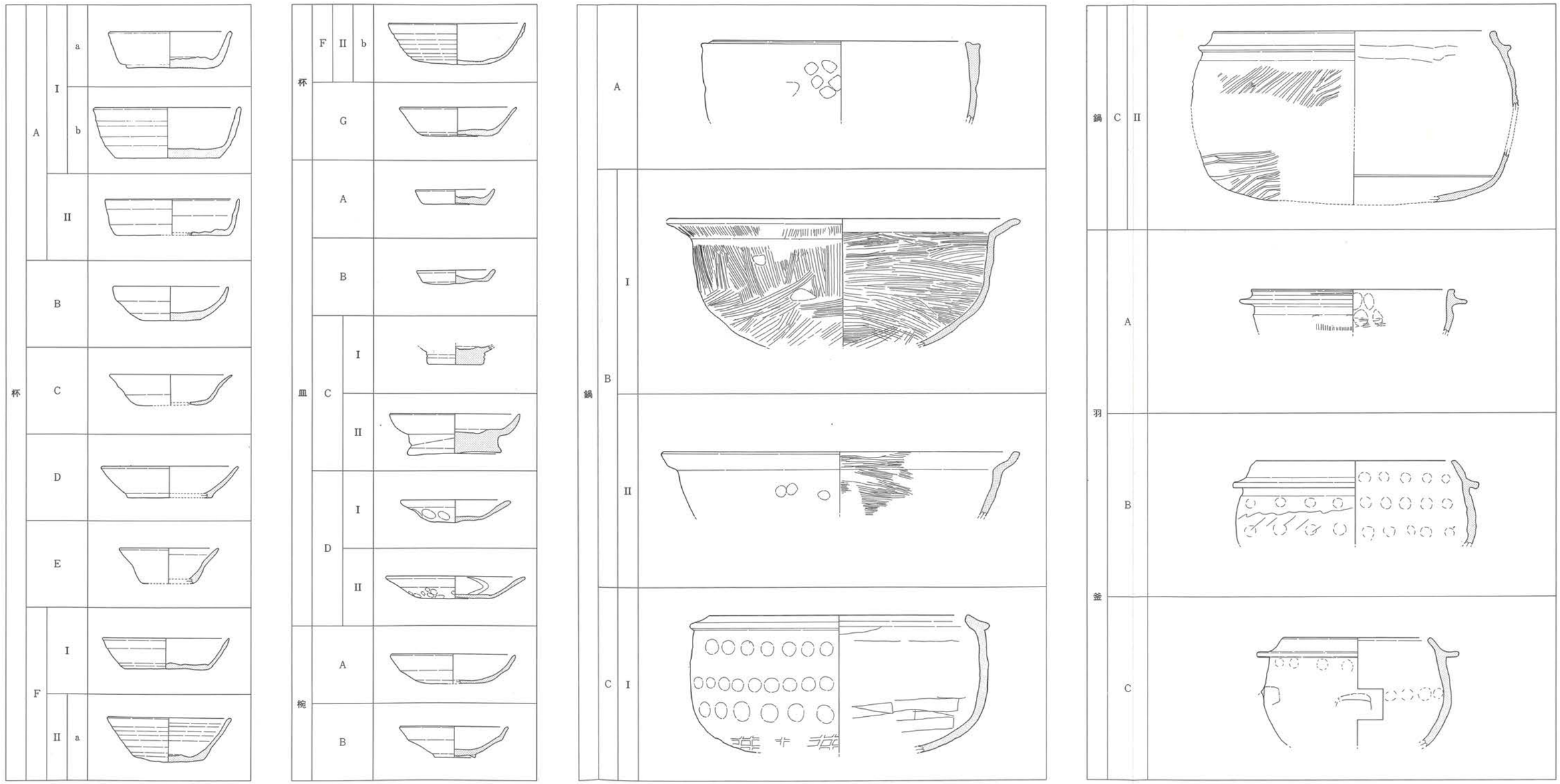


写真４　土層堆積状況（Ｂ調査区畦）



第７図　土師質土器分類図

第４章　遺構と遺物

第１節　概　要

（１）遺構について

１次調査で検出した主な遺構は掘立柱建物跡５棟以上・溝跡19条・土坑37基・木棺墓１基・自然流路１条などである。また、２次調査で検出した主な遺構は、第１遺構面では溝跡２条・土坑２基・集石遺構１基、第２遺構面では掘立柱建物跡３棟以上・溝跡19条・土坑23基・井戸１基などである。１次調査時の遺構の中には２次調査では区別できた第１遺構面の遺構に対応する遺構も若干含まれる可能性があるが、既述のように１次調査では工事による削平のため遺構を層序的に把握できなかったため、ここでは同一面の遺構として一括記載せざるを得なかったことは遺憾である。ただ、遺構埋土の特徴から、第１遺構面の遺構と推定されるものについては、その旨を記述した。

上述の遺構のうち、第２遺構面の遺構を種類別に概観すると、まず建物跡に伴う柱穴群は、Ａ調査区内の２箇所（Ａ・Ｂ群）とＢ・Ｃ調査区東部の１箇所（Ｃ群）、Ｅ調査区の３箇所（Ｄ・Ｅ・Ｆ群）の計６箇所で集中的に検出された。これらの柱穴群の中で、実際に建物跡として復原し得たのは計８棟分であったが、復原できなかった建物も存在するものと思われ、今回の調査区内では、これらの柱穴群が所在する地点に建物が建てられていたと考えられる。

次に、溝及び溝状の遺構であるが、比較的規模の大きい溝としては、Ｃ・Ｄ調査区にまたがってほぼ東西に走行する２条の溝（溝205・206）がある。その他の溝は比較的規模が小さいものが多く、中には末端が閉塞しているもの（溝201）も検出された。このような小規模の溝の中で、東西あるいは南北の方向を持つものは建物に伴う雨落ち溝であったと見られる。

土坑も多数検出されたが、その分布はＡ調査区西部・Ｂ調査区東部・Ｄ調査区西部・Ｅ調査区西北部と東北部に集中する。これらの土坑の形状は大きく方形・円形・不整形のものに区分される。形状不明のものを除外すると、その内訳は方形19基・円形15基・不整形６基となる。方形のものは土壙墓の可能性が高いが、遺物の副葬は全く見られなかった。また砂礫層まで掘り込まれている円形の土坑は井戸としての機能が想定されるが、井戸枠等は全く検出されなかったので、断定はできなかった。明確に井戸として検出し得たのは、Ｅ調査区で検出した１基のみである。

その他の遺構としては木棺墓・集石遺構・自然流路があるが、いずれもやや時期が下るもので、Ｅ調査区の第１遺構面の遺構に対応する可能性がある。

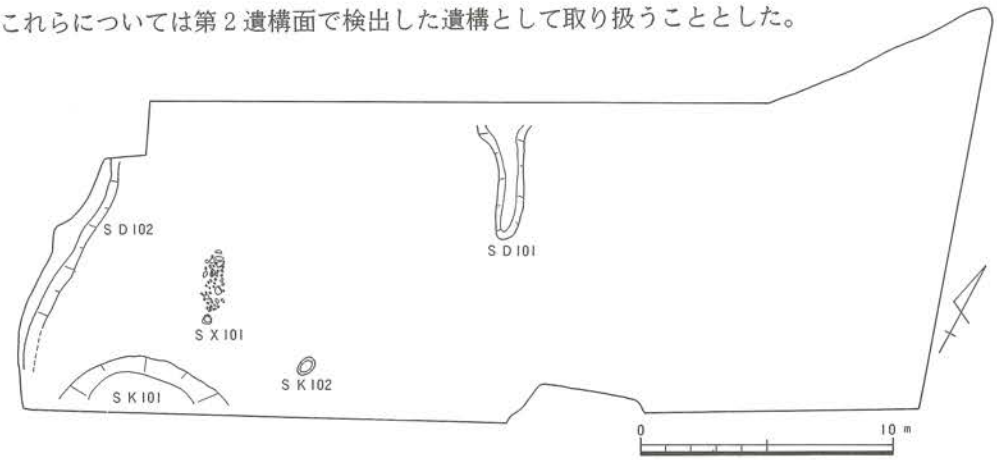
（2）遺物について

中島田遺跡の調査で出土した遺物は整理コンテナでおよそ250箱に達するが、遺構に伴う遺物は比較的少なく、過半は包含層出土遺物で占められる。遺構出土・包含層出土遺物ともに多種多様な遺物が見られるが、完形ないしは完形に復原されるものは土師質の杯・皿・椀などで少量見られるだけで、全般的に破片、それも細片のものが多数を占めている。出土遺物のかなりの部分を占める包含層出土遺物は2次調査区（E地区）では層序的な取り上げが可能であったが、1次調査の調査区においては、包含層の大部分がすでに工事によって削平を受けていたために、重機の残土から出土した遺物も包含層出土として一括して示さざるを得なかった。このため、包含層出土遺物については必ずしも層序的な把握が十分でないことをお断りしておきたい。

ところで出土遺物の説明にあたっては原則として土師質土器、瓦器・瓦質土器、国内産陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品、木製品に大きく分類して記述した。このうち、とりわけ土師質土器については量的に多いことと、器形が豊富なために記述の便宜上、第7図に示した分類図に基づいて記述した。なお、分類の基準等については本篇第5章第2節「遺物の検討」の各項において詳述した。

第2節　第1遺構面の遺構と遺物

第1遺構面の遺構（第8図参照）は、上部からの調査が可能であったE調査区で検出したもので、他の調査区では工事による削平のため確認することはできなかった。したがってここでは明確に第1遺構面の遺構として把握できたE調査区の遺構のみを取り上げる。他の調査区においてもE調査区の第1遺構面に対応する時期と推定される遺構が検出されているが、これらについては第2遺構面で検出した遺構として取り扱うこととした。



第8図　第1遺構面遺構配置図（E調査区）

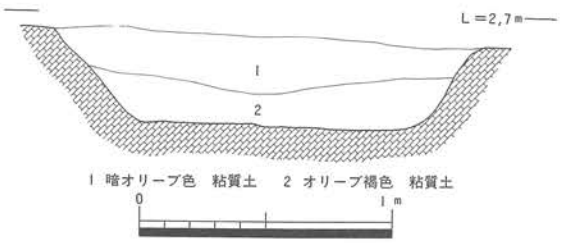
E調査区では盛土・旧水田土壌・水田床土層を除去するとほぼ全面に多量のマンガン粒が沈殿する面が検出された。この上面で溝跡2条・土坑2基を検出したため、この面を第1遺構面として把握した。この第1遺構面の遺構の時期は出土遺物が少なく特定し難いが、上部の床土層からは近世初期と見られる陶磁器が少量出土しており、戦国期から近世初頭を下限と見ることができる。

（1）溝と出土遺物

①溝101（SD101）

・遺構（第9図）

E調査区中央部北寄りの地点で検出された南北溝である。盛土直下の旧水田耕作土および一部撹乱が及んでいる水田床土層を除去した時点で検出した多量のマンガン粒が沈殿する面上で確認した。長さ5.5m•最大幅2.3m•深さ約0.15mの形の整わない溝で、調査区北壁に延びる。南端は閉塞しており、流路としての機能を有していたかどうかは不明である。



第9図 溝101 土層図

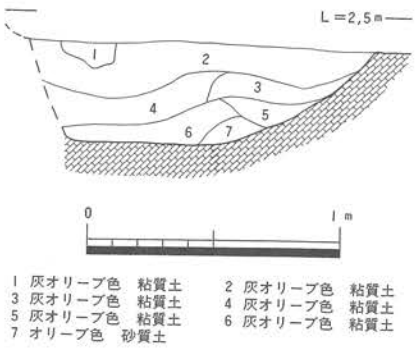
・遺物

出土遺物は極めて少なく、土師質土器の細片が3点出土したのみで、図示可能なものはない。

②溝102（SD102）

・遺構（第10図）

E調査区の西端部で検出された南北溝である。正確な規模は不明であるが、幅は少なくとも1.4m以上、深さは少なくとも0.4m以上であり、約9.3m分を確認した。この溝の上部には近代まで機能していたと見られる水路があり、この水路に打ち込まれた杭の一部が遺存していた。



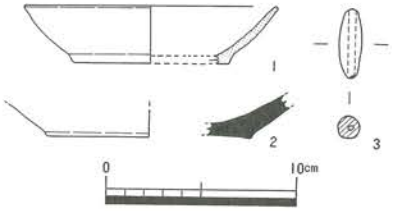
第10図 溝102 土層図

・遺物（第11図、表11）

上部の溝埋土からは近現代の陶磁器が出土したが、溝102からは新しい時期の遺物はなく、いずれも中世の土器が出土している。小片も含め約150点の土器片が出土しているが、大半

が土師質土器の細片である。

1は土師質の杯。やや薄手の製品で、体部・口縁部とも丁寧なロクロナデで仕上げられる。底部の切り離し方法は不明である。形態的特徴等から杯Dに分類される。2のこね鉢は底部に回転糸切り痕を留める。なお、こね鉢の口縁部の小片が2点出土しているが、いずれも口縁端部を大きく拡張するタイプのものである。3は土錘である。



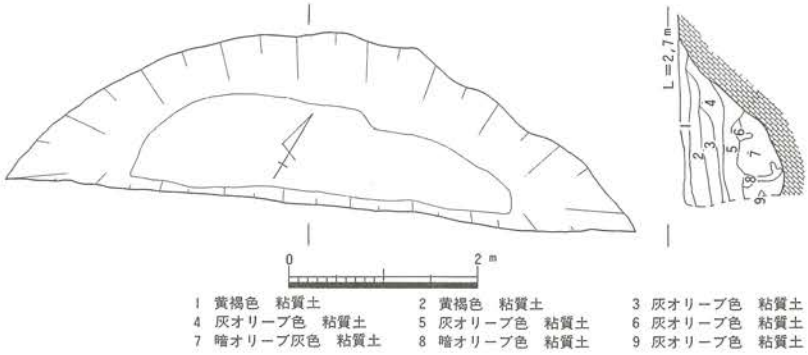
第11図　溝102 出土遺物

（2）土坑と出土遺物

①土坑101（ＳＫ101）

・遺構（第12図、図版20）

E調査区の南西部で一部を検出した遺構で、全体の形状は不明ながら、ほぼ円形を呈すると推定される。深さは少なくとも1.05mあり、埋土は全体に粘性が強い。こうした埋土の状況や底近くで葦科の植物やカラス貝の遺体が出土したことから、沼状の遺構と見られる。

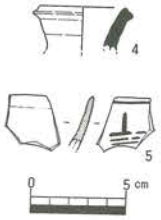


第12図　土坑101 実測図

・遺物（第13図、表12）

出土遺物は少なく土師質土器・陶器の細片が14点出土したのみ。

4は瀬戸焼の瓶子の注口部で、口径4.5cm。外面の一部を除いて淡緑色の灰釉がかかる。5は磁器の碗の細片である。外面に雲文状の文様が描かれる。産地については特定し難い。



第13図　土坑101 出土遺物

②土坑102（ＳＫ102）

・遺構（第14図）

第1遺構面で見逃していたと考えられる遺構で、10cm程第1遺構面を掘り下げた時点で検出した。長円形の浅い土坑で、検出面で長径0.8m・短径0.5m・深さ0.07mを測る。この遺構の周辺には焦土および炭化物が多く認められたが性格については不明である。

・遺物

出土遺物は土師質土器・青磁の碗の細片などが約20点出土したのみで、図示可能な遺物はない。

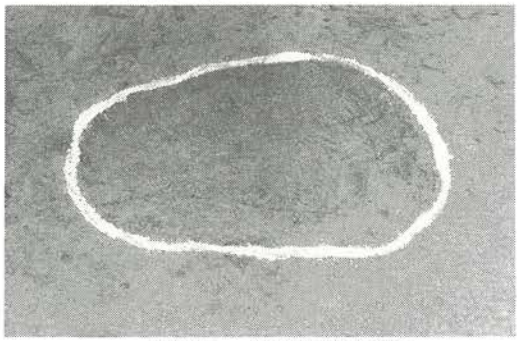
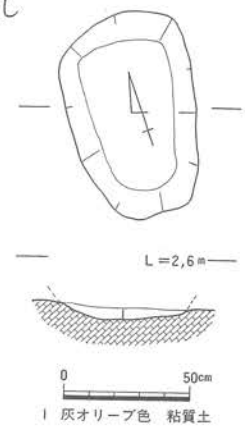


写真５　土坑102検出状況



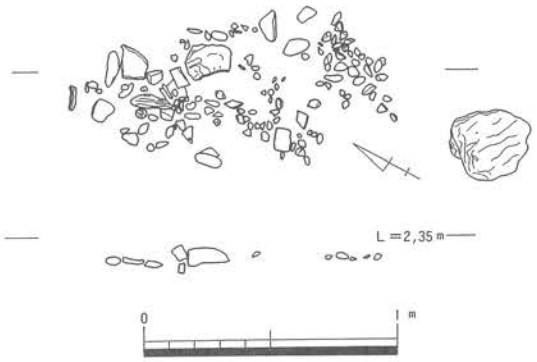
第14図　土坑102 実測図

（３）集石遺構と出土遺物

①集石遺構101（ＳＸ101）

・遺構（第15図）

第１遺構面を若干掘り下げた時点で、小砂利が集中する地点が確認されたため、掘り方の検出に努めたが、掘り方については確認するに到らなかった。当初墓の可能性が想定されたが、集石が薄く、その可能性は少ないと思われる。

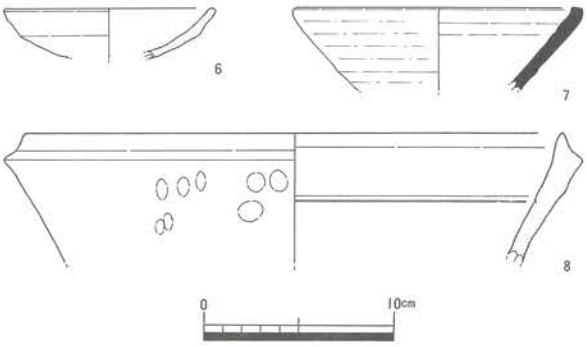


第15図　集石遺構101 実測図

・遺物（第16図、表13、図版25）

集石の中から土師質土器や瓦器・陶器の細片が15点程出土している。

６は土師質の椀、７は魚住焼の椀、８は土師質と見られるすり鉢である。すり鉢は口径28.8cmに復原される。焼成は土師質と判断されるが、土師質のすり鉢は当遺跡ではまれであり、あるいは軟質に焼成された魚住焼のすり鉢である可能性も残る。



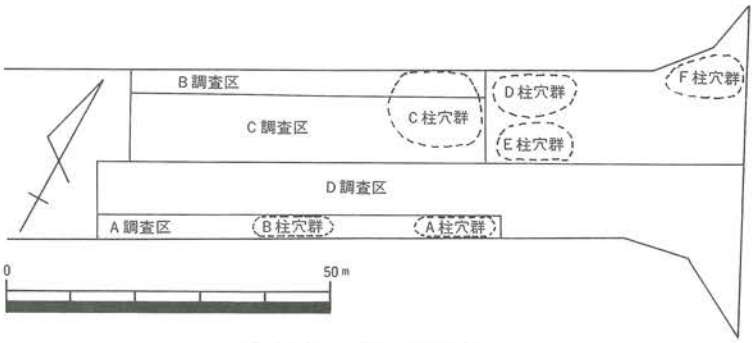
第16図　集石遺構101 出土遺物

第３節　第２遺構面の遺構と遺物

第２遺構面は第１遺構面を約60cm掘り下げて検出した遺構面で、鎌倉時代後半と考えられる多数の遺構・遺物が検出された（第17図参照）。

（１）建物跡・柱穴群と出土遺物

中島田遺跡では多数の柱穴が検出されたが、それらの柱穴は一定の小地域毎に密集する傾向が窺える。それぞれの小地域を柱穴群として把握し、調査区内での建物の所在地点を想定したのが第18図である。図上では１次調査・２次調査で検出された柱穴群を一括して示したが、記述にあたっては整理の都合上、１次と２次に分けた。。



第18図　柱穴群位置図

（A）１次調査で検出した柱穴群・建物跡と出土遺物

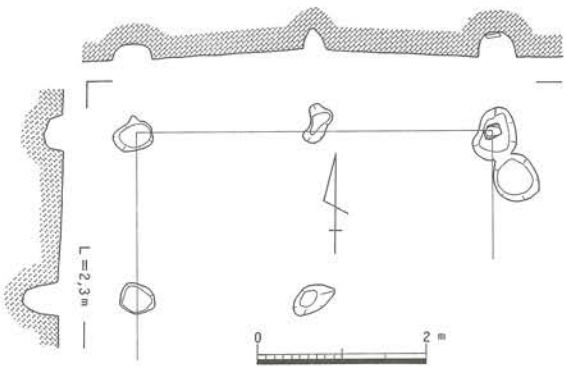
A柱穴群

A調査区東部一帯で検出。総数約20個の柱穴が検出された。マンション建設に伴って徳島市教育委員会が調査を行った南側の地域にまで広がる。この[註1]柱穴群では建物201が復原されたが、ほかにも根石を備えた柱穴が認められ、復原できなかった建物が存在するものと推定される。

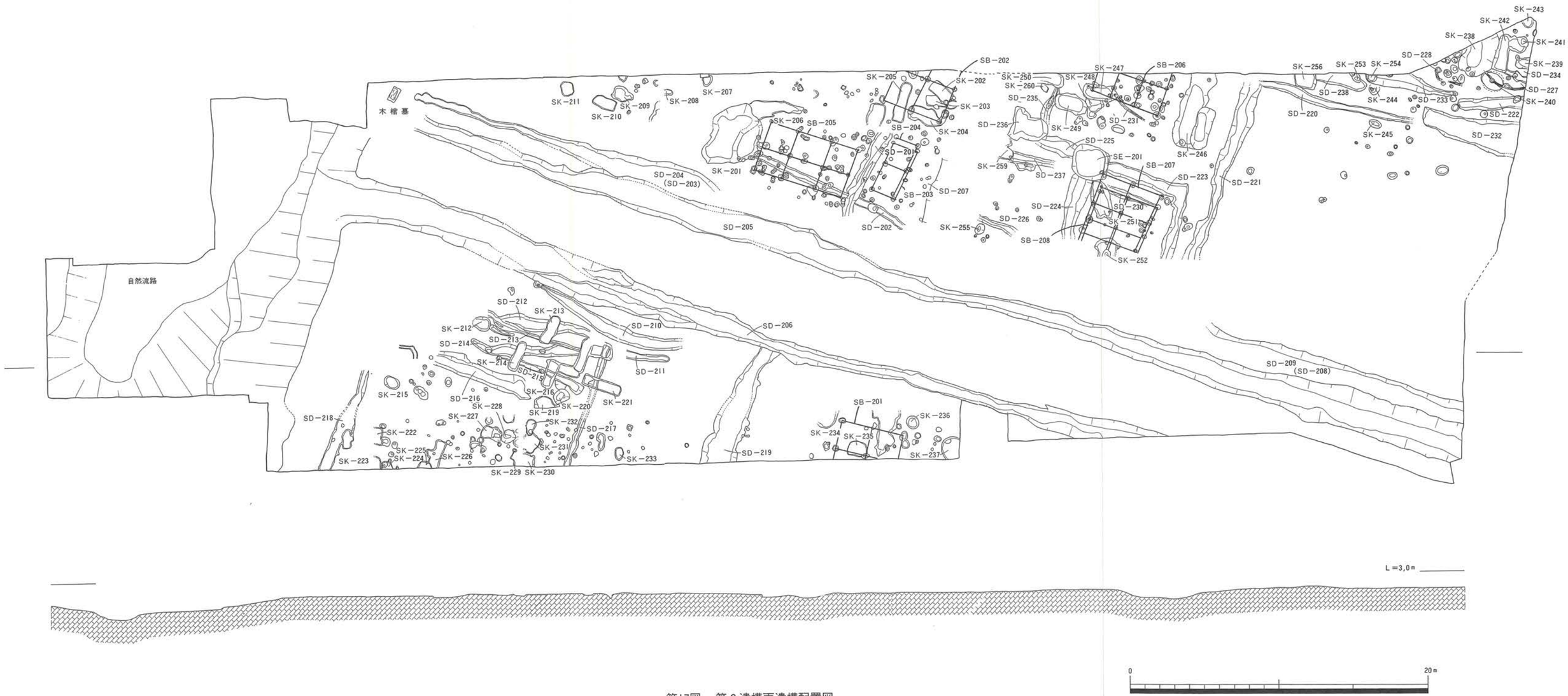
①建物201（ＳＢ201）

・遺構（第19図）

A柱穴群で復原された建物で、隣接する徳島市教育委員会による



第19図　建物201 実測図



第17図　第２遺構面遺構配置図

調査区で検出された柱穴をも合わせると東西２間（4.2m）×南北３間（6.4m）、棟方向はほぼ磁北に沿う建物となる。柱穴は直径約0.4～0.6m・深さ0.25～0.45mの大きさで、柱穴内に根石を置くものと置かないものがある。

Ｂ柱穴群

Ａ柱穴群とは南北方向に延びる溝219をはさんで隣接する位置に広がる柱穴群で、約50個のピットが検出されたが、土坑等との重複のため建物は復原できなかった。しかし、根石の見られるピットが見られることから建物が存在したことはほぼ確実である。

Ｃ柱穴群

Ｂ調査区東部からＣ調査区東部にかけての柱穴群で、総数約140個のピットが検出された。１次調査では最も多数のピットが検出された地点にあたる。多数のピットが検出されたことから、少なくとも数棟の建物が存在したと見られる。復原し得たのは建物202・建物203・建物204・建物205の４棟分である。

②建物202（ＳＢ202）

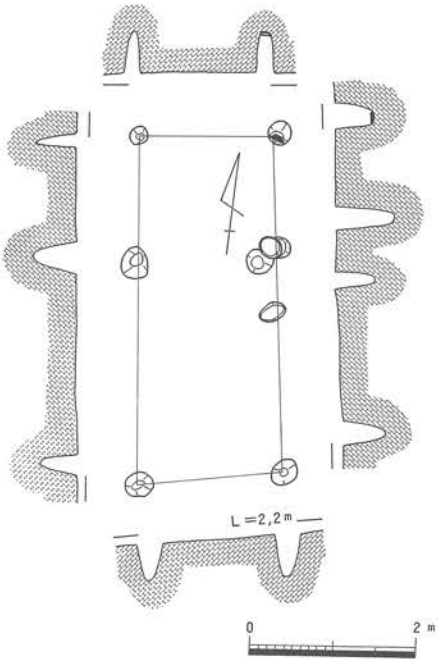
・遺構

東西２間（4.2m）×南北１間（1.3m）を検出したが、北西隅の柱穴を欠く。検出分のみでは建物として小規模であるので、さらに北側に延びるものと思われる。柱穴は径0.3～0.5mで、深さは0.21～0.29mである。南北方向を基軸とすると、Ｎ４°Ｗで、わずかに西に振っている。

③建物203（ＳＢ203）

・遺構（第20図）

Ｃ柱穴群で復原され、東西１間（1.6m）×南北２間（3.95m）、棟方向はほぼ磁北に沿う建物である。柱穴は径0.3～0.4m・深さ0.48～0.66mの大きさである。



第20図　建物203 実測図

④建物204（ＳＢ204）

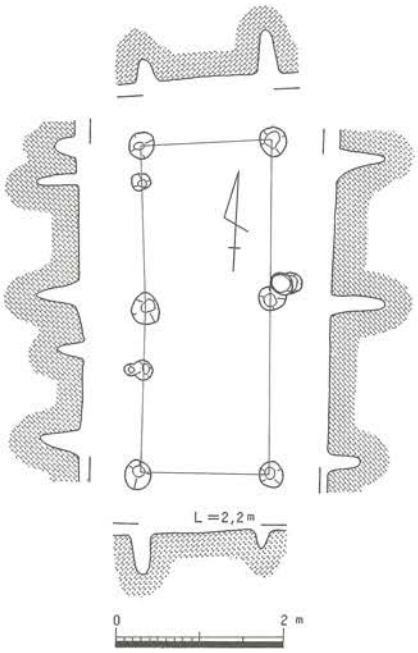
・遺構（第21図）

建物203と重複する状態で復原される東西１間（1.75m）×南北２間（4.1m）、棟方向Ｎ５°Ｗの方向を持つ小規模の建物である。柱穴は径0.30～0.35m・深さ0.39～0.63mの大きさである。

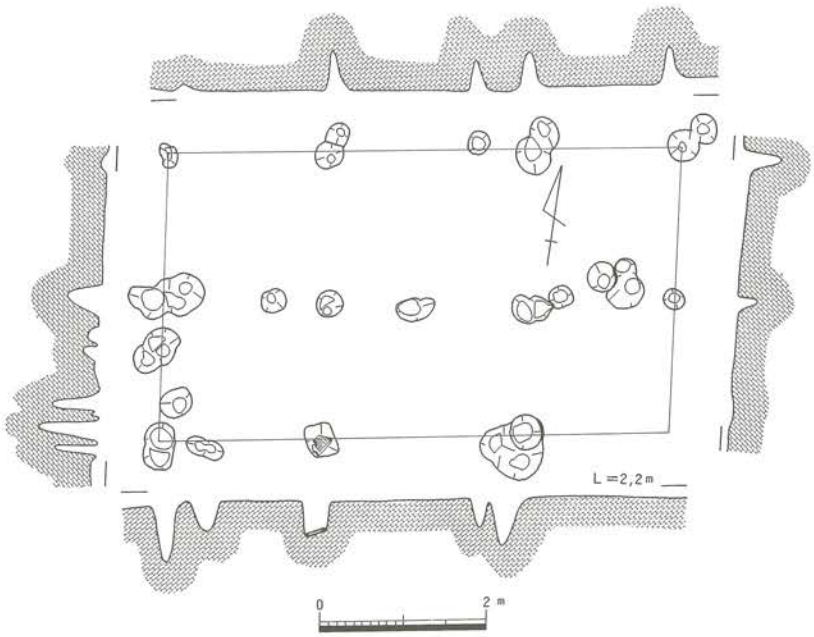
⑤建物205（ＳＢ205）

・遺構（第22図）

建物203・204の西側で復原される東西３間（6.2m）×南北２間（3.45m）、棟方向Ｎ４°Ｗの方向を持つ建物である。南東隅の柱穴を欠く。柱穴は複数の柱穴が重複したために掘り方が大きくなったものを除くと、径0.2～0.4m・深さ0.12～0.72mの大きさである。



第21図　建物204 実測図



第22図　建物205 実測図

・遺物（第23図、表14、図版25）

上述の１次調査で検出した各柱穴群から出土した遺物を一括して示した。

９～14は土師質の杯である。杯には杯ＡＩａ（９～12）と杯ＦＩ（13・14）がある。前者には口縁部が直線的なもの（９・11）、やや内湾するもの（12）、やや外反気味のもの（10）があり、形態の上では比較的バリエーションに富む。９は完形品で、口径11.8cm・器高3.4cm・底径8.9cmを測る。杯ＡＩａの典型例である。14は口径11.8cm・器高2.7cm・底径7.8cmに復原される。色調は灰白色で、杯ＦＩの典型例として上げられる。

15～21は土師質の皿である。皿Ａが大半を占めるが、皿Ａには底部の回転糸切り痕をナデ消すもの（16・17）がある。21は底部に糸切りの痕跡が認められない上、未調整の粗面を留めるやや特異なものである。

22～24の土師質椀はいずれも中部瀬戸内系の高台付椀である。高台は退化傾向が著しい。

25・26の瓦器の椀はいずれも退化した高台を貼り付ける。26の内面には粗雑な暗文が施される。27の皿とともに和泉型と見られる。28は口縁部が直立するタイプの瓦質の羽釜であり、断面三角形状の鍔が水平に貼り付けられる。成形・調整にロクロを使用したと見られ、丁寧な回転ナデが全体に施される。

29・30は備前産と考えられる椀で、底部に回転糸切り痕を明瞭に留め、口縁部外面は重ね焼により黒色を呈する。色調は灰白色で焼成はやや瓦質に近い。口縁部・体部内外面をヨコナデあるいはナデで調整し、底部内面に一方向のナデを施す。口径は11.9～12.2cmである。

31～34のこね鉢はいずれも口縁部の小破片であるが、口径19.9～33.3cmに復原される。口縁部外面にはいずれも重ね焼痕が認められる。

35は横田・森田分類に拠る龍泉窯系青磁碗Ｉ－５類[註2]の体部破片で、内湾気味に立ち上がる体部外面に、片切り彫りによるやや幅広の鎬蓮弁文が施される。

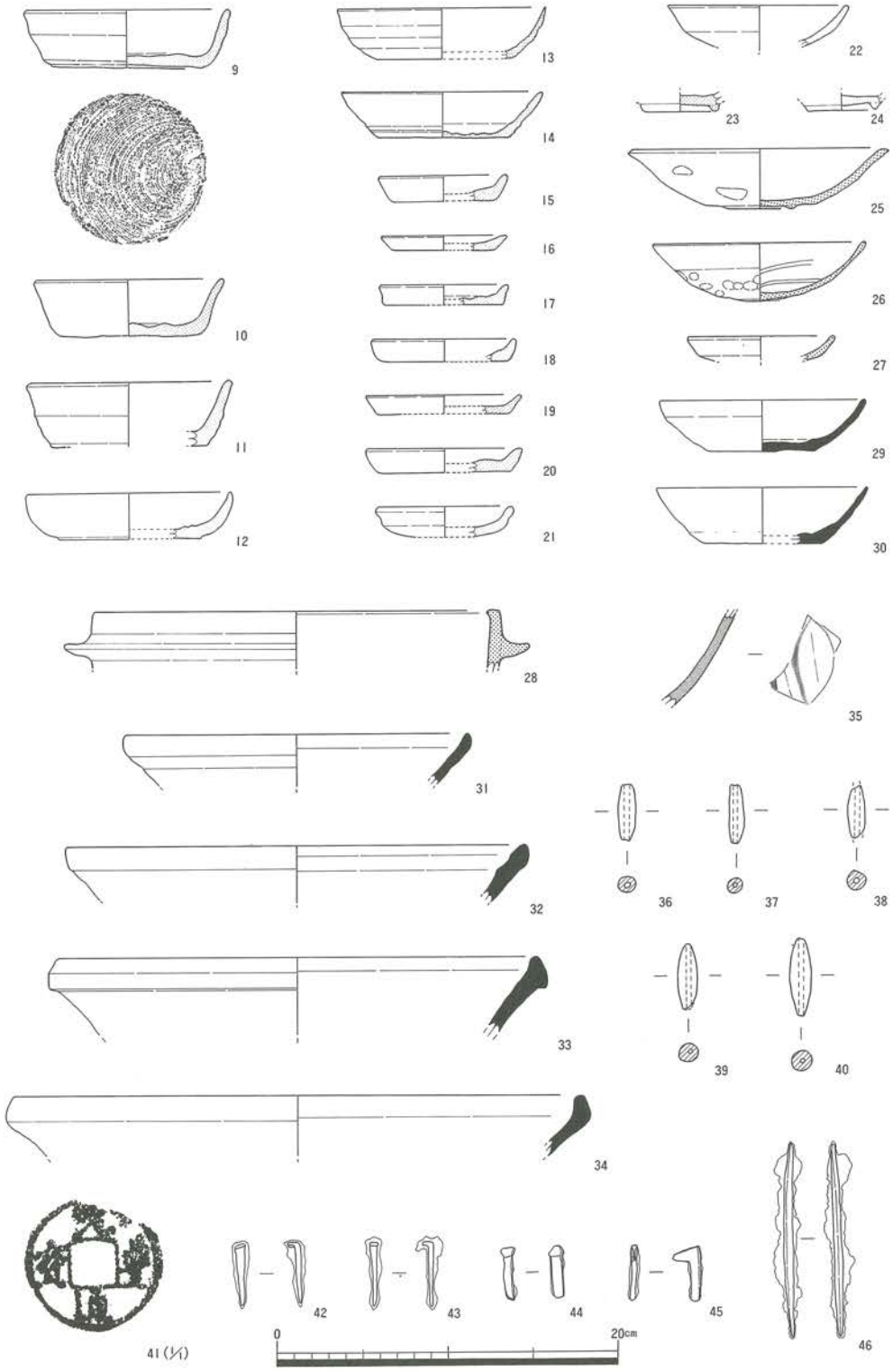
36～40の土錘はいずれも紡錘形の管状土錘であり、小形のものである。

41は「元豊通宝」。初鋳年は1078年で、宋銭である。

42～44は鉄釘である。完存する42・43は3.6cm・3.7cmと短い。42はやや幅広の釘で、頭部は屈曲し、Ｌ字形を呈する。

45は鉄釘あるいは鎹の可能性があるものの正確には不明である。

46は全長11.5cmで、中央部付近が最も厚みがあり、両端部は尖る。鉄鏃の可能性があるが正確には不明である。



第23図　柱穴出土遺物（Ⅰ）

（B）２次調査で検出した建物跡・柱穴群と出土遺物

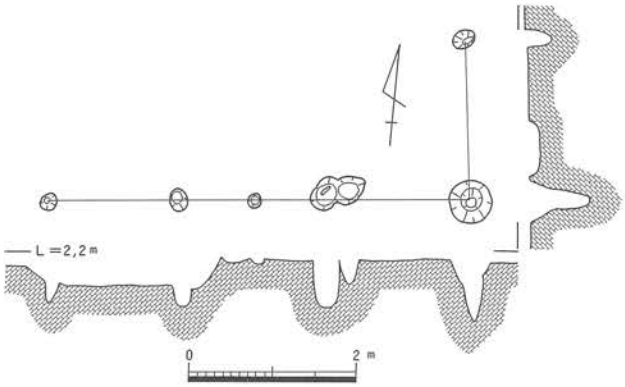
D柱穴群

E調査区北西部で検出された柱穴群で、総数約40個のピットが検出された。ここでは建物206が復原されたが、中心は調査区外に広がっているものと見られる。

⑥建物206（ＳＢ206）

・遺構（第24図）

D柱穴群で復原され、東西３間（5.2m）×南北１間（1.8m）、南北方向を基軸とするとＮ４°Wの建物となる。さらに調査区外に延びる可能性が高い。南辺の西側２箇所の柱穴は土坑247に切られるが、土坑247完掘後に検出された。柱穴は削平を受けたもの、重複のものを除くと、直径0.2〜0.5m・深さ0.30〜0.75mの大きさである。



第24図　建物206 実測図

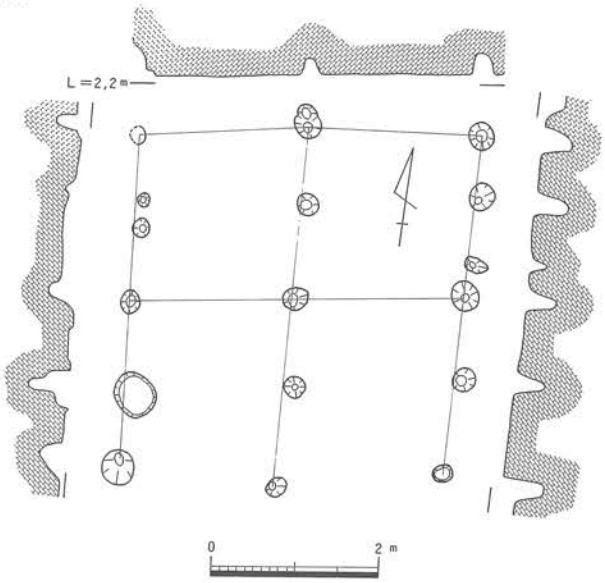
E柱穴群

E調査区西南部で検出され、D柱穴群とは隣接する位置関係にある。総数約30個のピットが検出された。建物207・208を復原。

⑦建物207（ＳＢ207）

・遺構（第25図、図版21）

E柱穴群で復原され、東西２間(3.9〜4.2m)×南北２間(4.0m)、南北方向を基軸とするとＮ６°Wの方向の建物である。柱穴は直径0.35〜0.40m・深さ0.21〜0.33mの大きさである。なお、この建物が復原された地点には炭化物を多数含む層が数cmにわたって堆積しており、その中から土師質の鍋などの遺物が出土している（建物に伴う遺



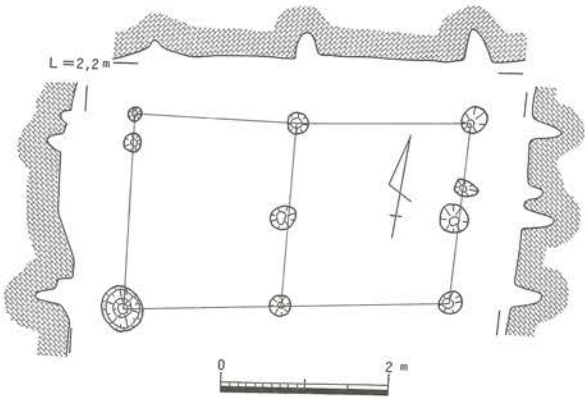
第25図　建物207 実測図

物として後述)。意図的に置かれたと見られる平石とともにこの建物ないしは次に述べる建物208に伴う遺物である可能性が高い。

⑧建物208（ＳＢ208）

・遺構（第26図、図版21）

Ｅ柱穴群で復原され、東西２間（4.0m）×南北１間（2.0～2.15m)、南北方向を基軸とするとＮ６°Ｗの方向の建物である。柱穴は直径0.35～0.55m・深さ0.15～0.45mの大きさである。



第26図　建物208 実測図

Ｆ柱穴群

Ｅ調査区東北部で検出されたが、その中心はさらに北側一帯に広がるものと見られる。多数の土坑・溝等に切られ、建物を復原するには到らなかった。

・遺物（第27図、表15、図版25）

２次調査で検出した柱穴群から出土した遺物を一括して示した。

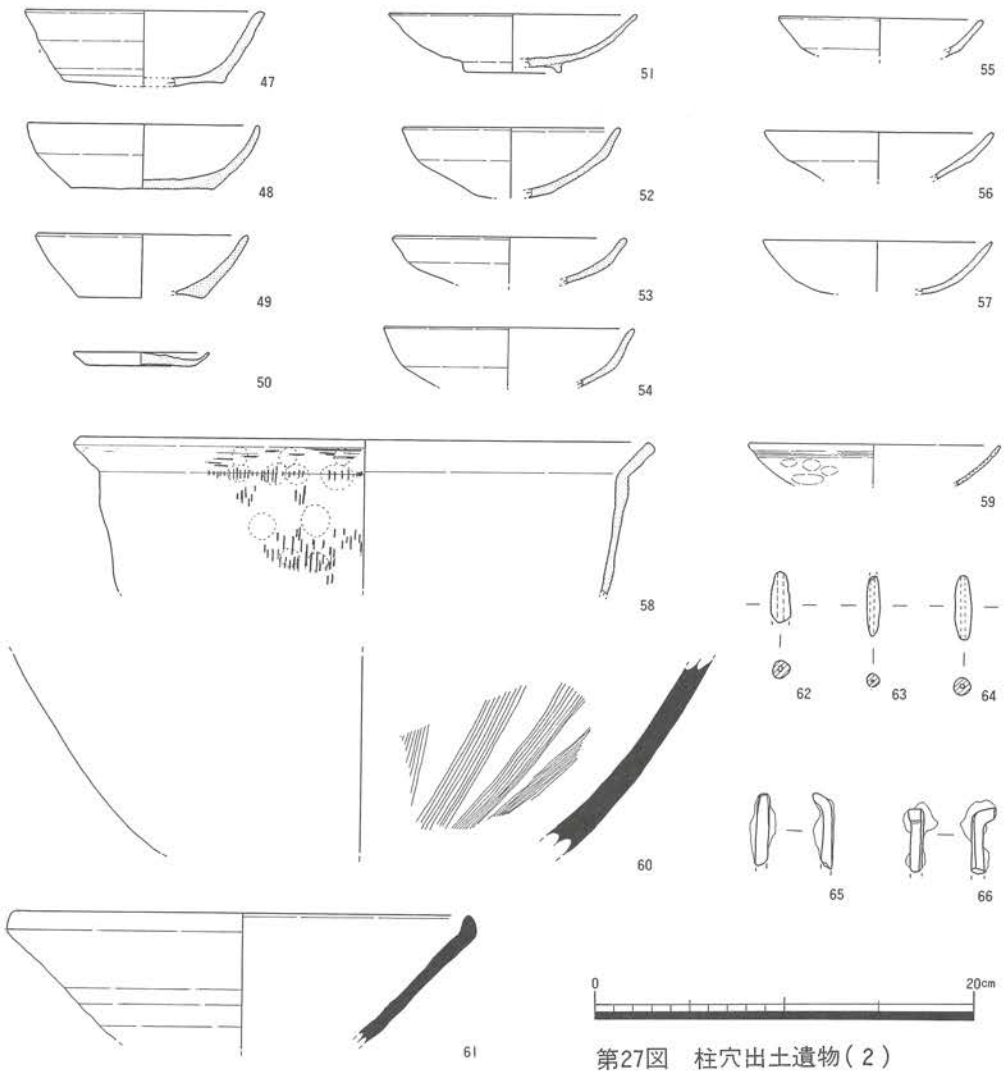
47～49は土師質の杯である。杯ＡＩａに属するタイプ（47）と杯Ｂ（48・49）がある。後者は、形態・調整上は備前地方の産と見られる陶器椀とほぼ共通するタイプのもので、その形態を模倣したものと見られる。50の土師質皿は技法・色調等からは皿Ａに属するタイプと見られるが、器高が極めて低く、口縁部の器壁も薄いことなどはやや特異な形態と見ることができる。

51～57は土師質の椀である。51が椀Ｂ、52が椀Ａに分類されるほかは底部を欠失するため不明である。口径はいずれも復原値であるが、51・54が口径12.9cm・13.3cmと比較的大形品であるほかはいずれも口径11～12cm前後である。

58は土師質の鍋で、口縁部が「く」の字状を呈するタイプで、鍋Ｂに分類される。体部内面に細かい横方向のハケ目、同外面に縦方向の粗いハケ目が施される。内外面に煤が付着する。

59は瓦器椀で、器壁は全体に薄く仕上げる。体部外面は炭素未吸着である。

60は備前焼のすり鉢である。体部の破片であるが、内面には９条単位の櫛描条線が認められる。61のこね鉢は口縁端部をあまり拡張しないタイプで、口径23.8cmとやや小形の製品である。



第27図　柱穴出土遺物（２）

62～64は土錘。65・66は鉄釘である。いずれも先端部を欠失する角釘で、頭部はＬ字形に屈曲する。

以上のほかに、すでに述べたようにＥ柱穴群で復原された建物207・建物208の敷地内で、遺構面直上から結晶片岩の平石などとともに土器が出土した。これらの土器は検出状況および土層の状況などから考えて建物に関係する遺物である可能性が高いと考えられるため、ここで建物207ないしは建物208のいずれかに関係する遺物として取り上げておくこととしたい。（第28図、表16、図版21・26）

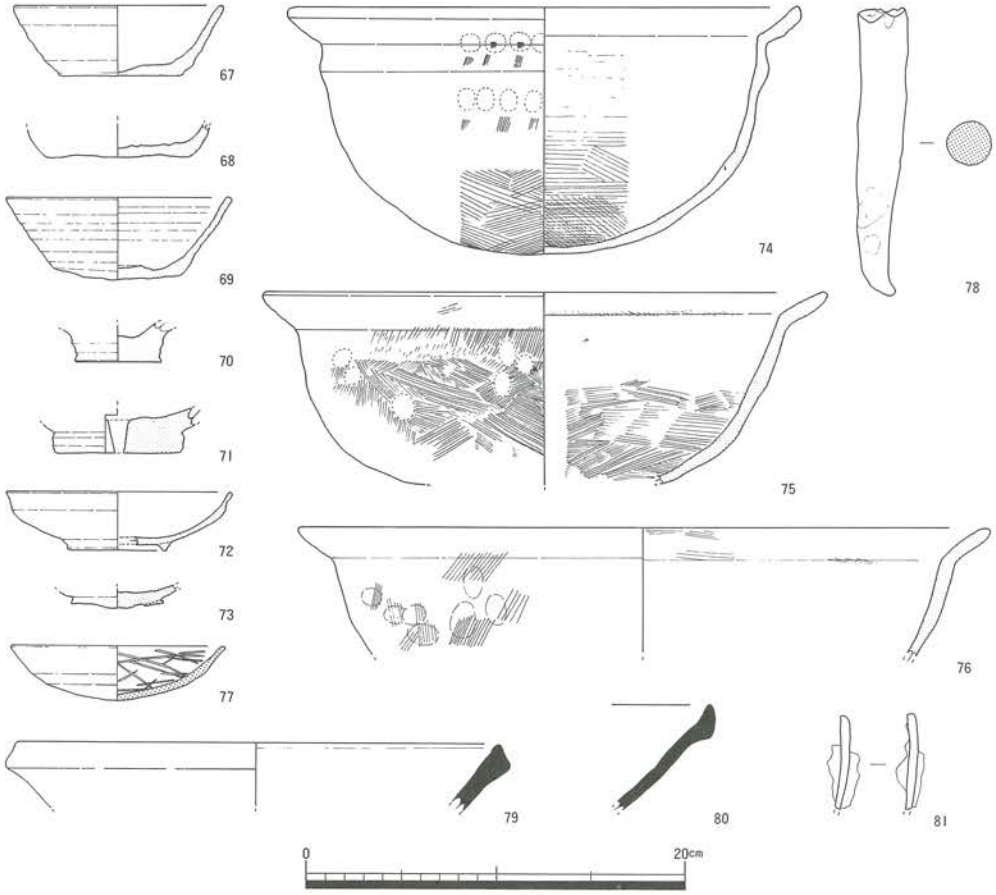
67～69は土師質の杯である。67・68は杯ＡⅠａ、69は杯ＦⅡａに分類される。67は通例の杯ＡⅠａに比べてやや器壁が薄い。底部は回転糸切り痕をナデ消す。法量は口径11.1cm・

器高3.7cm・底径6.6cmを測る。69は口径12.0cm・器高4.3cm・底径6.8cmに復原される。外面は成形による凹凸が顕著である。

70・71はともに土師質の高台付皿で、皿Cに分類される。いずれも皿部は欠損する。底径は70が4.6cm、71が6.7cmである。71は底部中央部に穿孔が認められる。

72・73は土師質の椀である。ともに椀Bである。72は口径12.0cm・器高2.8cm・高台径3.8cmに復原される。体部上位で大きく屈曲し、口縁部外面に強いヨコナデを施す。

74～76はいずれも土師質の鍋で、鍋Bに属するタイプである。74はほぼ完形に復原され、口径27.0cm・器高12.9cmを測る。調整は口縁部内外面をヨコナデ、体部内面を横方向のハケの後部分的にナデ、同外面はユビオサエ後縦方向の細かいハケ目、底部内外面には縦横の細かいハケ目を施す。外面には全面に煤が付着し、良く使用されたことを示している。75は74に比べて器高がやや低い個体であるが、技法は74とほぼ同様である。76の鍋は体部内面のハケ目をナデ消す。



第28図　建物に伴う出土遺物

77は瓦器椀である。無高台で、口径11.2cm・器高3.0cmに復原される。内面には細い暗文が施される。和泉型と見られる。78は瓦質の脚部。

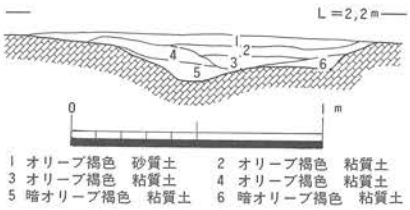
79・80は魚住焼と見られるこね鉢である。81は鉄釘の断片であろう。

（2）溝と出土遺物

①溝201（ＳＤ201）

・遺構（第29図、図版７）

Ｃ調査区東部で検出された南北方向の溝状遺構で、長さ6.3mを検出した。幅約0.9m・深さ約0.2mである。溝の北端部は閉塞される。南端部については明瞭に確認できなかったが、閉塞されていた可能性が高い。溝202と切り合うが新旧関係は不明。



第29図　溝201 土層図

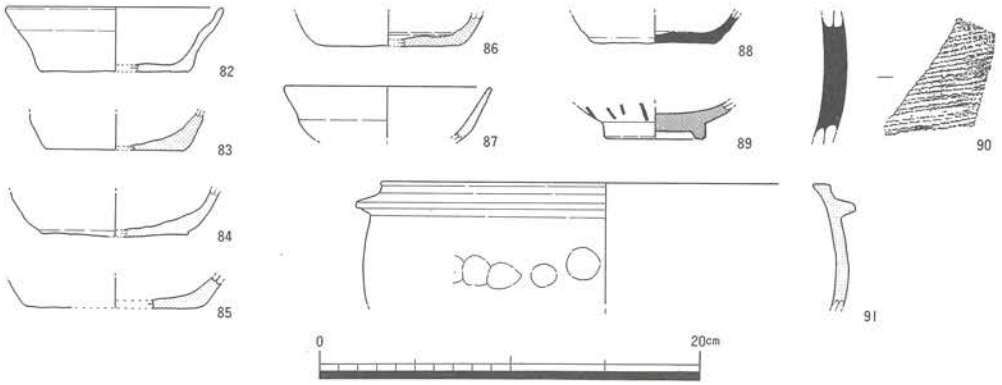
・遺物（第30図、表17、図版26）

遺物は土師質土器を中心として約480点出土したが、細片が多い。

82～86は土師質の杯である。82は口径11.2cm・器高3.4cm・底径7.5cmに復原される。底部は糸切り痕をナデ消す。口縁部が外反する点と器壁を薄く作る点は通例の杯ＡⅠａと異なる点であり、杯ＡⅡに分類される。83～86はいずれも杯ＡⅠａである。87は土師質の椀である。

88は備前産と見られる椀で、底部外面に回転糸切り痕を明瞭に留める。底部内面には一方向のナデが施され、体部は内外面ともロクロナデで仕上げられる。色調は淡赤褐色であり、焼成不良品と見られる。

89は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類の底部破片で、内面見込部は無文であるが、外面には蓮弁文が施される。底部の厚さは他の同類と比べてやや薄く、高台の外面と畳付けの部分は露胎となっている。



第30図　溝201 出土遺物

90は甕の体部の破片で、外面に平行叩きを施す。

91は土師質の羽釜である。体部・口縁部が内湾する羽釜Bのタイプである。断面台形状の小さな鍔が付く。体部外面にユビオサエを施す以外はヨコナデで仕上げる。

②溝202（ＳＤ202）

・遺構

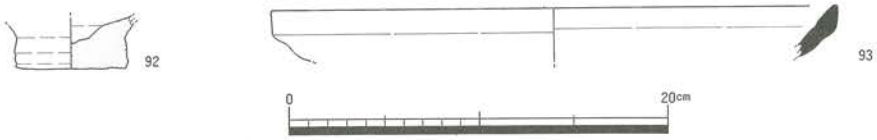
東西方向に延びる溝で、溝201に直交する。西端は土坑201に切られる。検出分で約11m。幅約0.5m・深さ約0.1mである。

・遺物（第31図、表18、図版26）

出土遺物は少なく、土師質土器・瓦器などの細片が30点程出土したのみである。

92は土師質の高台付皿で、皿Cに分類されるタイプである。

93は魚住焼のこね鉢である。口縁部外面に重ね焼痕が見られる。



第31図　溝202 出土遺物

③溝203（ＳＤ203）

・遺構

C調査区で検出。溝204埋没後に掘られた溝である。東西方向に延びるが、東部は溝204との重複と土質の変質等のため、掘り方は不明であった。幅約１m・深さ約0.14mで、約14m分を検出した。検出面から考えて、２次調査区の第１遺構面の時期に対応する可能性がある。

・遺物（第32図、表19、図版26）

溝埋土からは土師質土器の細片を中心として約70点の遺物が出土したが、図示可能なものは少ない。

94は土師質の羽釜で、直立気味の口縁に断面が台形状の小さい鍔が付く。口縁部内外面はヨコナデで仕上げられる。羽釜Aに該当する。

95～97は魚住焼のこね鉢である。いずれも口縁部の小片で、口径の復原値はやや正確さを欠くが、20.8～34.0cmの間に分布する。いずれも端部の拡張が著しく、口縁端部はいずれも重ね焼によって黒色を呈する。

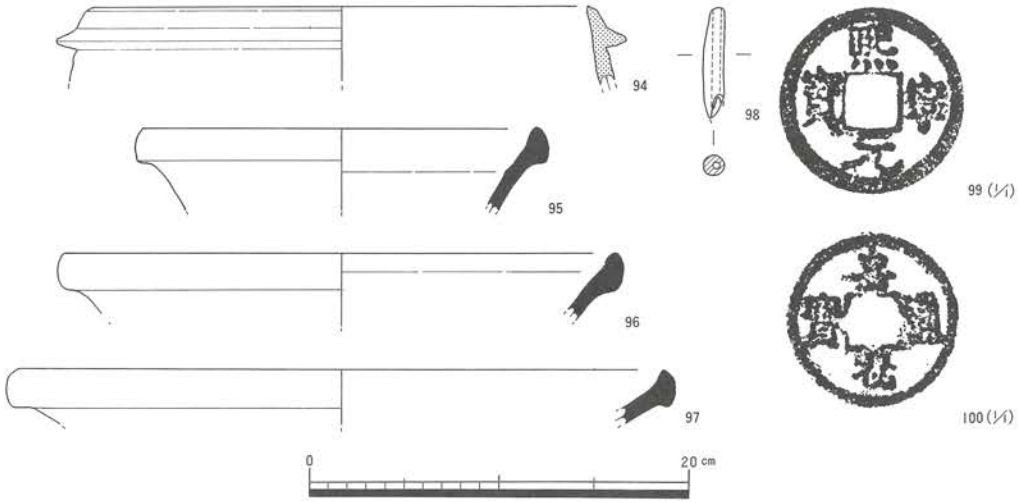
98は紡錘形の管状土錘である。

99・100は銅銭。99は1068年初鋳の「熙寧元宝」、100は1056年初鋳の「嘉祐通宝」である。

④溝204（ＳＤ204）

・遺構

溝205埋没後にその上部に掘られた溝で、溝203の前身にあたる。幅約1.3m・深さ約0.2m



第32図　溝203 出土遺物

を測り、約16m分を検出した。D調査区東部からB調査区西端部まで延びているが、B調査区内では土色が全体的に青灰色に変色しており、掘り方は判然としない。

・遺物（第33図、表20、図版26）

出土した遺物は極めて少ない。

101は魚住焼のこね鉢。102は輸入陶磁器の梅瓶。体部の小片で、器壁はかなり薄く、外面には渦文ないしは波涛文と見られる沈線文が描かれ、その上に青白色の釉が施されている。

第33図　溝204 出土遺物

103は刀子。切先の断片で残存長は7.6cm。棟厚は0.2cmと比較的薄い。

⑤溝205（ＳＤ205）

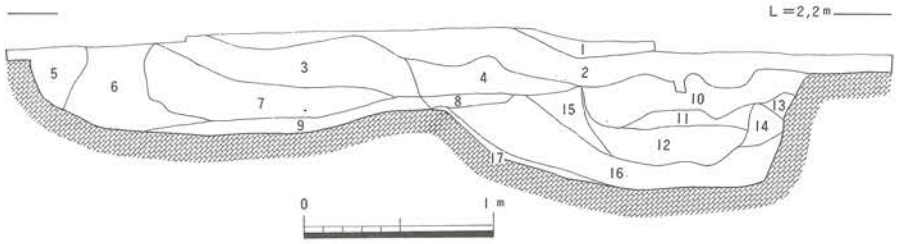
・遺構（第34図、図版８・９）

調査区全体の東端から西端にかけてほぼ東西に一直線に延びる溝である。工事による削平を受けていないD調査区東端部での計測値では、幅2.5～3.0m・深さ約１mを測るが、C調査区では上部が削平を受けた状態で検出された。延長で約75mを検出。溝底は当遺跡の基盤層である砂礫層に達していたが、底には青灰色粘土層の堆積が認められた。

・遺物（第35・36図、表21、図版26・27）

遺物は土師質土器を中心として約500点出土したが、比較的細片のものが多い。

104～106は土師質の杯である。106が杯ＦⅡａと見られるほかは杯ＡⅠａのタイプである。また、105は底部と体部の境界付近の粘土がヘラ状工具で強く掻き取られており、底部が高台状にやや突出する。



1 オリーブ黄色 砂質土　2 灰オリーブ色 粘質土　3 黄褐色 砂質土
4 灰オリーブ色 砂質土　5 灰オリーブ色 砂質土　6 灰オリーブ色 砂質土
7 灰オリーブ色 砂質土　8 灰オリーブ色 粘質土　9 黄褐色 砂質土
10 オリーブ黄色 粘質土　11 オリーブ黄色 粘質土　12 灰オリーブ色 砂質土
13 オリーブ黄色 粘質土　14 灰オリーブ色 粘質土　15 灰オリーブ色 粘質土
16 灰オリーブ色 粘質土　17 黄褐色 砂

第34図　溝205 土層図

107～109は土師質のⅢである。107はⅢA、108・109はⅢBに分類される。110～113は土師質の高台付椀である。112は高台が高く、安定しており、やや古相を示すが、その他は高台の退化が著しい。

114～118は瓦器椀である。いずれも和泉型に属するものであるが、高台が残るものはいずれも退化した高台である。法量は復原値であるが、口径11.3～12.9cmの間に収まる。117・118には暗文が施されるが不明瞭である。

119～121・123・124は土師質の鍋である。いずれも口縁部が「く」の字状を呈する鍋Bである。120は口縁端部をわずかに摘み上げる。口縁部はヨコナデのもの（119・120・123）と、内面に横方向のハケ目を施すものがある（121・124）。124は体部内面に横方向のハケ目、同外面に縦方向のハケ目を施す。

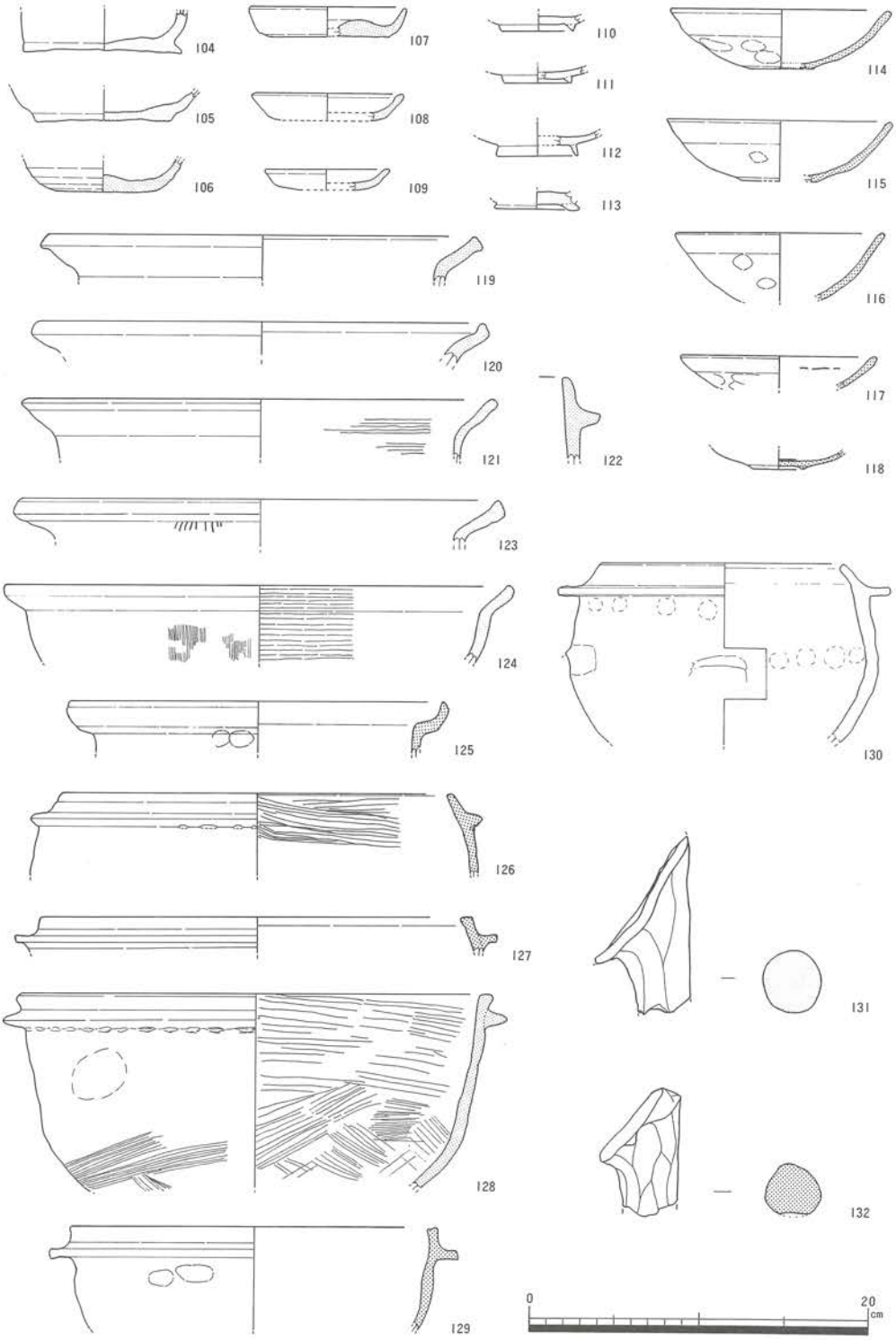
125は瓦質の鍋で、口縁部が外反した後内湾する。口縁部内外面とも丁寧なヨコナデを施す。

122・128・130は土師質の羽釜である。122・128は羽釜A、130は脚付きで、羽釜Cに分類される。128は口径27.2cmに復原される。内面に横および斜め方向のハケ目、外面にユビオサエ後、粗いハケ目を施す。鍔貼り付け部に棒状工具による圧痕が認められる。130には粘土紐の結合部に顕著なユビオサエ痕が残る。脚は剝落するが、その痕跡を留める。

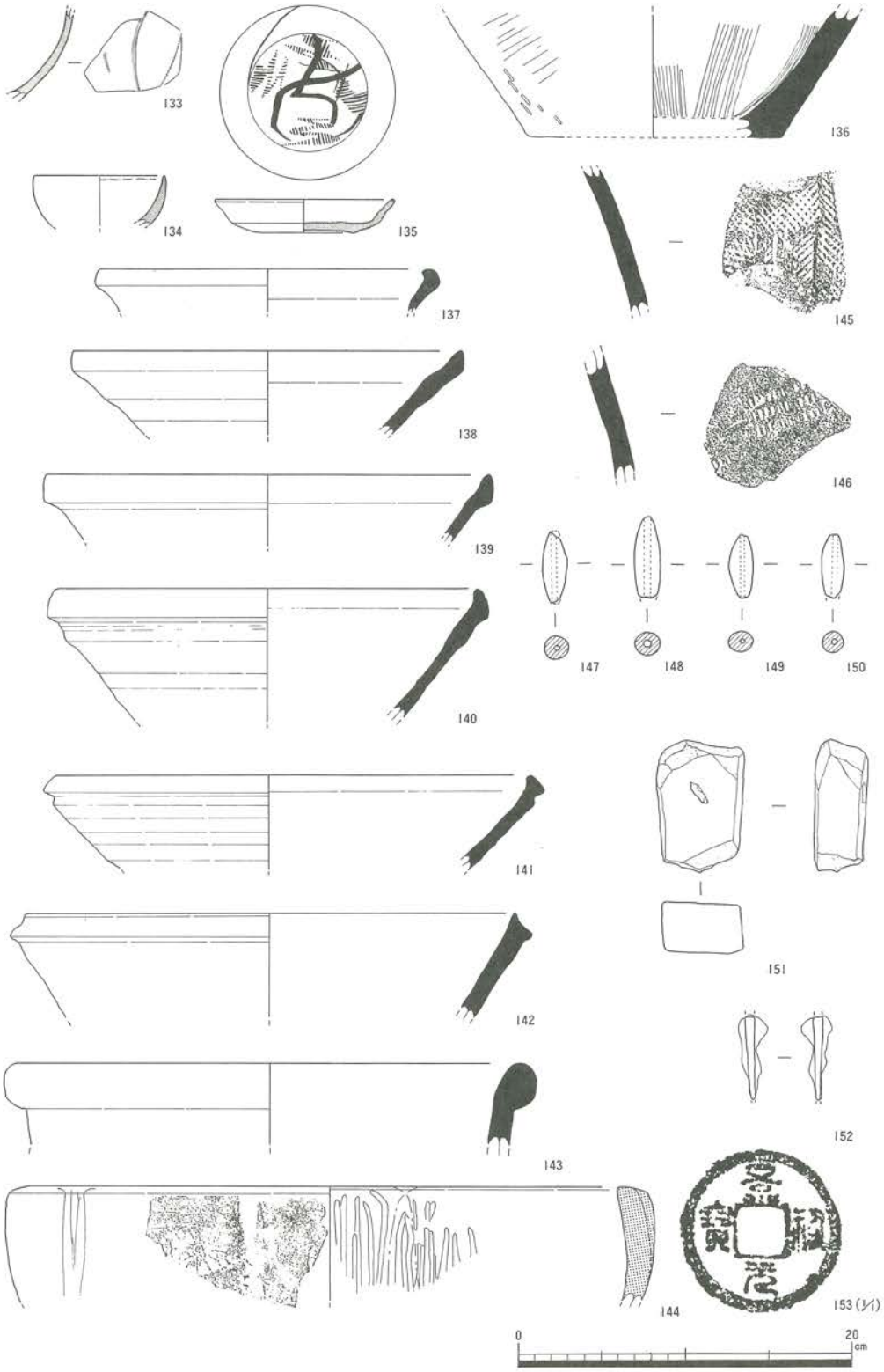
126・127・129は瓦質の羽釜である。126・127は口縁部がやや内湾する。129は口縁部が直立気味である。126には128と同様な棒状工具による圧痕が認められる。

131・132は脚部。131は土師質、132は瓦質である。

133～135は輸入陶磁器。133は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類の体部破片で、内湾気味の体部外面に幅の広い蓮弁文が描かれている。134は、同じく龍泉窯系の青磁小碗Ⅲ－1類の口縁部の破片で、口径約8cm、内湾する体部と尖り気味の口縁部を持ち、口縁部に輪花を持たないⅢ－1a類と考えられる。135は同安窯系青磁ⅢⅠ－2類のほぼ完形に近い個体で、内面にはヘラによる片切り文と櫛によるジグザグ文が施されている。底部外面以外全面施釉。



第35図　溝205 出土遺物（Ⅰ）



第36図　溝205 出土遺物（２）

136は備前焼のすり鉢。内面に6条単位のやや粗い目の櫛描条線が施される。体部外面は縦横の粗いナデで仕上げられる。内面に自然釉がかかる。

137～141は魚住焼のこね鉢である。口径は小片による復原のためやや不正確であるが、25㎝前後のやや小形のもの（137～140）と28㎝前後のやや大形のもの（141）がある。口縁端部はあまり拡張しない138以外は、上下に大きく拡張し、端面にやや丸みを持たせている。142は備前焼の可能性がある。

143は玉縁状の口縁を持つ備前焼の甕であり、口縁端部には自然釉がかかる。

144は瓦質の火鉢である。口縁部を輪花に作り、内外面を丁寧なヘラミガキで仕上げる。体部外面には菊花文のスタンプが押印される。小片のため口径の復原値はやや不正確である。

145・146はともに甕の体部破片である。145は外面に綾杉状の叩きを施し、146は格子目のスタンプを押印する。145は魚住、146は瀬戸の製品と見られる。

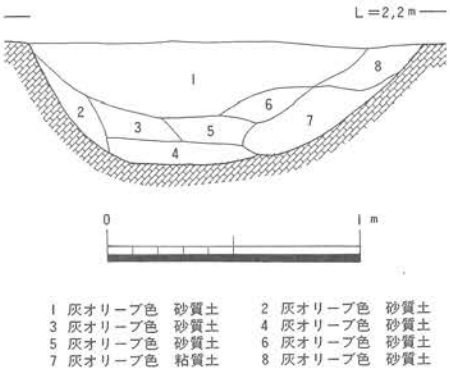
147～150はいずれも紡錘形の管状土錘で、147が重さ8.4ｇ、148が10.3ｇであるほかは、5.2ｇ・5.5ｇの小形品である。

151は砥石。152は鉄釘。153は銅銭で、「景祐元宝」。初鋳年は1034年である。

⑥溝206（ＳＤ206）

・遺構（第37・38図、図版10）

溝205と平行する形で、その南側を東西に延びる溝である。検出面では幅1.5m・深さ0.5mを測るが、削平を受ける以前は、溝205と同規模であったと見られる。約58mを検出。西端は自然流路に切られる。またＤ調査区中央部で溝219とほぼ直交する。この溝から一括投棄された土器だまりが検出され、遺構出土遺物の中では最もまとまった資料となった。



第37図　溝206 土層図

・遺物（第39・40図、表22、図版28～30）

出土遺物は土器だまりから出土したものが大半を占め、約320点出土している。

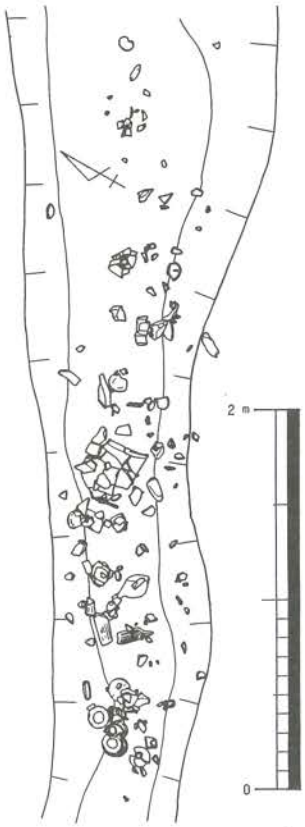
154～190は土師質の杯である。杯ＡⅠａ（154・156～160・162～167・169～180）、杯ＡⅡ（161・168）、杯Ｃ（155）、杯ＦⅠ（181・183・185・186・188・189）、杯ＦⅡｂ（182・184・187）がある。

杯ＡⅠａが最も多数を占めている。この杯ＡⅠａは体部から口縁部の形態ではやや内湾気味のもの（156・158・163など）も見られるが、全般には直線的に立ち上がる形態のものが目立つ。成形・調整の上では器面調整と器壁の厚さにバリエーションが認められる。また、

底部と体部の境界付近の粘土を削り取り、器壁を減じる技法は杯ＡＩａにほぼ共通するものであるが、その精粗の差異も大きく、削り取った痕跡が段になって残るもの（157・159・163・171・175など）が認められるのに対し、その痕跡を留めないまでに丁寧に削り整えるもの（156・162・165など）もある。完形および完形に近いものとしては166・169のみである。法量はそれぞれ口径11.4cm・器高3.3cm・底径8.1cm、口径11.9cm・器高3.7cm・底径9.3cmである。

杯ＡⅡは比較的少ない。161は口縁部が外反し、全体に器壁が薄い。底部外面の糸切り痕は丁寧にナデ消す。168は形態的にはやや特異であるが、全体に器壁が薄いタイプであるので、杯ＡⅡに含めた。この個体は口径14.0cmに復原されるやや大形の製品であるが、器高は3.0cmと低い。

155は杯Ａ類に比べると丁寧な作りで、焼成も幾分堅緻である。器壁も通例の杯ＡＩａに比べると薄手である。通例の杯Ｃに比べるとやや器壁が厚く、形態が異なるが、一応杯Ｃに含めた。

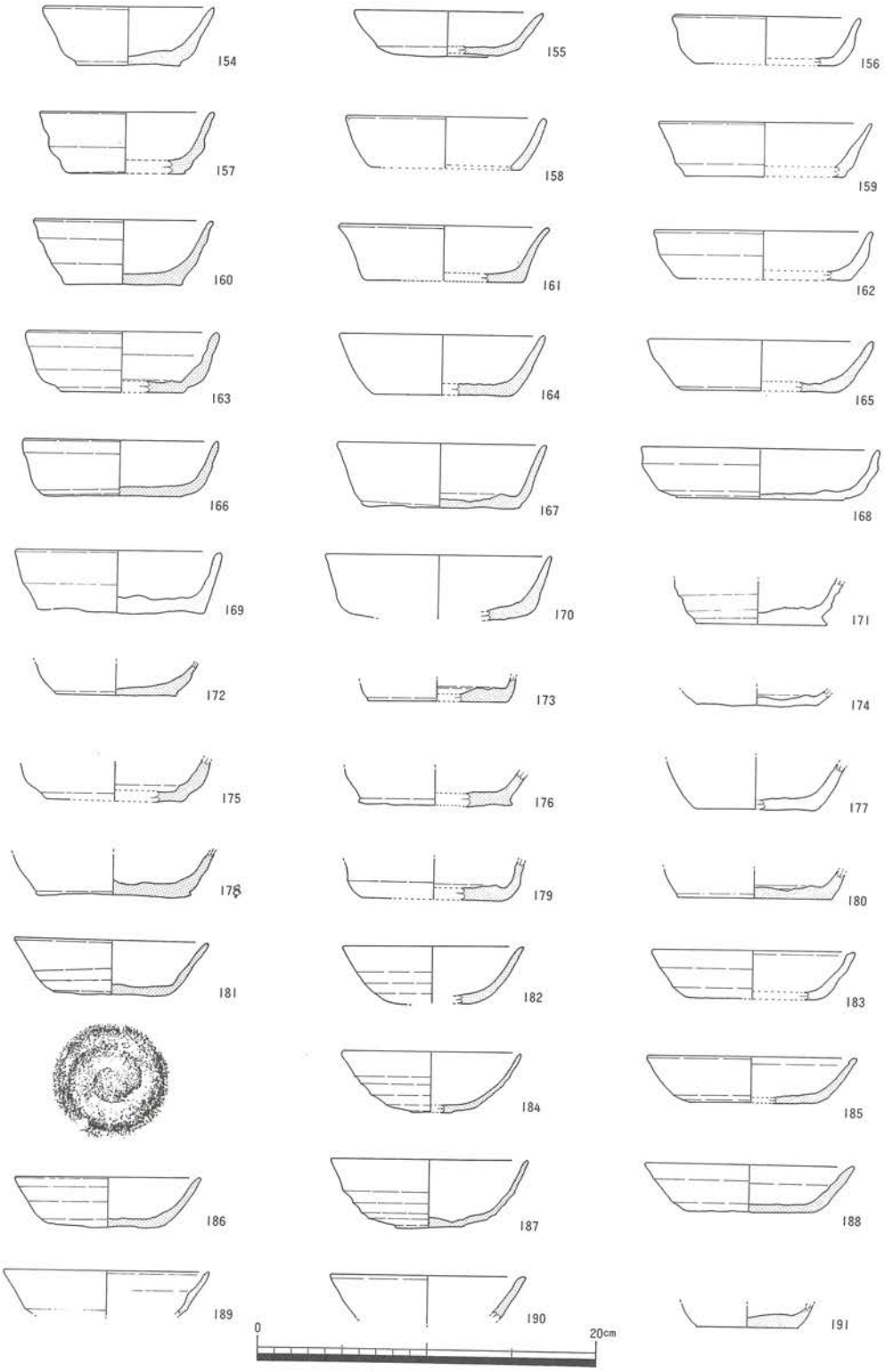


第38図　溝206 土器だまり実測図

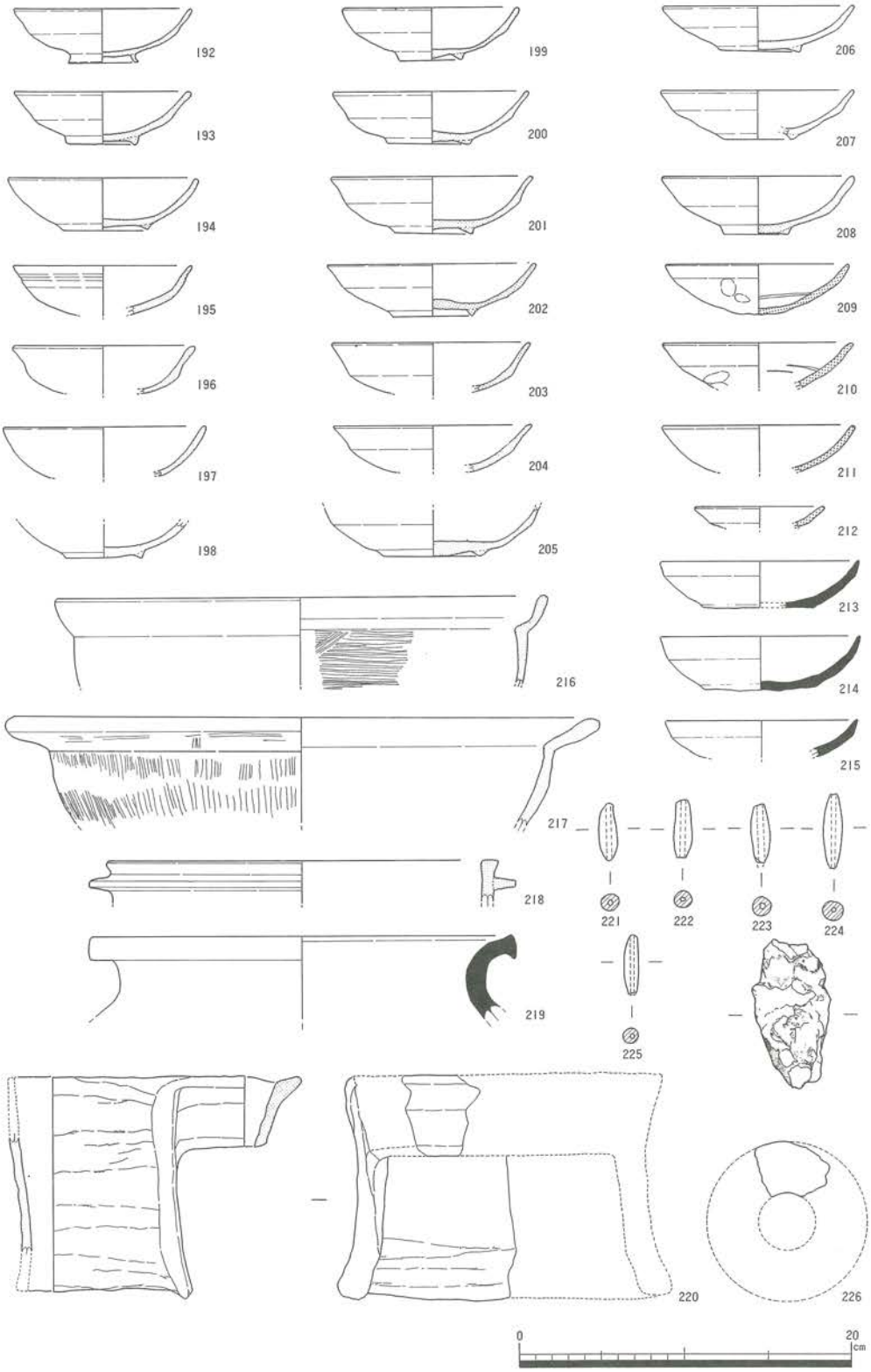
杯Ｆは底部回転ヘラ切りの一群であるが、このうち杯ＦＩが最も多い。色調は淡褐色ないしは灰白色を呈するものが多い。ほぼ確実な法量が得られる個体としては181・186がある。181は口径11.4cm・器高3.2cm・底径6.6cm、186は口径10.8cm・器高3.0cm・底径5.7cmであり、全体に口径に対して、器高値が小さい点に特徴が窺える。187は杯ＦⅡｂの典型例で、底部は丸底状を呈する。182は小片のためやや不明瞭であるが、口径に対して器高が高く、底部はやはり丸底状であることから杯ＦⅡｂに含まれると考えられる。

191は土師質の皿で、皿Ａに分類される。

192～208は土師質の椀である。194・199・201・206は完形及び完形に近いものである。いずれも中部瀬戸内系の高台付椀と同タイプである。底部の遺存するものはすべて椀Ｂのタイプに該当し、無高台のものは認められない。高台の径は3.8～5.9cmの間に分布する。形状は断面が方形で、やや高めものが１点（192）認められるほかは、すべて断面三角形ないしはそれがつぶれて台形状になった低い高台であり、全体に高台の退化傾向が顕著である。体部・口縁部の形状としては、体部上位を屈曲させて稜を形成するものが大半であるが、中には



第39図　溝206 出土遺物（Ⅰ）



第40図　溝206 出土遺物（２）

稜が認められないもの（194・197）も少数ながら存在する。口径は15cm前後と推定される205以外は10.5～12.5cmの間に収まる。器高が判明するものは2.8～3.5cmの間に収まり、3.2cmのものが最も多い。

209～211は瓦器椀、212は瓦器皿である。瓦器は椀・皿とも和泉型の製品である。209の椀は無高台で、内面に簡略化された渦巻状の暗文が施される。

213～215の椀はいずれも備前地方の産と見られるもので、焼成は瓦質に近く、色調は灰色ないしは灰白色を呈する。口縁部外面はいずれも重ね焼によって黒色を呈する。214はほぼ完形で、口径12.0cm・器高3.2cm・底径6.6cmを測る。底部には回転糸切り痕を明瞭に留め、一部に板目も認められる。口縁部内外面と体部内面にはロクロナデが施され、底部内面には一方向のナデが施される。213の底部はやや突出。

216・217は土師質の鍋である。216は口縁部を「受け口」状に作る鍋ＢⅡのタイプで、体部内面に横方向のハケ目が施される。217は口縁部が外反し、「く」の字状を呈するタイプで、鍋Ｂに分類される。216の体部が直立気味であるのに対し、体部の傾斜が大きく、比較的浅い鍋であったと見られる。体部内面はナデで仕上げられるが、同外面は縦方向のハケ目、口縁部外面は粗い縦方向のハケ目が施される。

218は土師質の羽釜である。直立する短い口縁部に断面方形の鍔を貼り付ける。やや安定した鍔であることから羽釜に分類したが、鍋である可能性も残る。

219の甕は大きく外反する口縁部の小片である。口縁端部を上下に拡張している。焼成は瓦質に近く、色調は黒色を呈する。頸部外面にはかすかに平行条線の叩きの痕跡が認められる。形態・焼成等から魚住焼の製品と考えられる。

220は土師質の竈である。廂を貼り付けないタイプのもので、草戸分類の竈Ａに該当する。[註3] 円筒の全面に台形状の焚口を持ち、焚口の両側に粘土帯を縦方向に貼り付けている。草戸千軒町遺跡ＳＧ2741出土遺物の中に類例が認められる。[註4]

221～225は土錘である。いずれも当遺跡通有の小形管状土錘である。重さ2.7～5.8ｇの間に収まる。

226は羽口の断片である。本来は胴径約10cm程度の円筒状のものであったと見られる。

写真６　土器だまり遺物出土状況（１）

写真７　土器だまり遺物出土状況（２）

⑦溝207（ＳＤ207）

・遺構

Ｃ調査区東壁沿いでその一部のみが検出された溝で、全体の幅・深さ等は不明である。

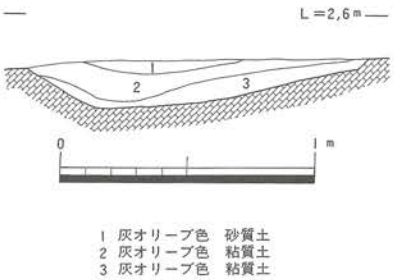
・遺物

土師質の杯などの細片が少量出土したのみで図示できるものはない。

⑧溝208（ＳＤ208）

・遺構（第41図）

溝209の後身にあたる東西溝で、Ｄ調査区東部で確認された。幅約1.2m・深さ約0.4mで、約18m分を検出。

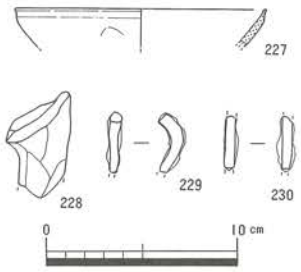


第41図　溝208 土層図

・遺物（第42図、表23）

土師質土器の細片を中心に約150点の遺物が出土したが、細片がほとんどである。

227は瓦器の椀である。この椀は口縁端部を強く摘んでナデているために先端部が鋭く尖る。228は土師質の脚部、229・230は鉄釘である。鉄釘はいずれも断片で、断面は方形を呈する。



第42図　溝208 出土遺物

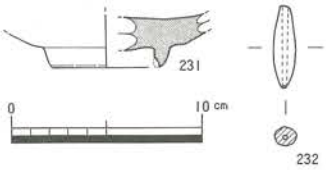
⑨溝209（ＳＤ209）

・遺構

溝205埋没後に、その上部に掘られた溝で、幅約２ｍ・深さ0.4mで、約24m分を検出。溝209埋没後にはさらに溝208が掘られた。

・遺物（第43図、表24）

出土遺物は土師質土器の細片を中心として約40点出土したが、図示できるものは少ない。



第43図　溝209 出土遺物

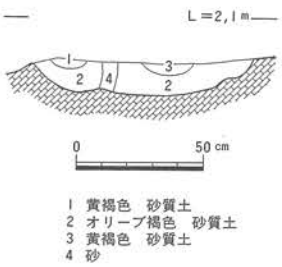
231は龍泉窯系青磁碗Ｉ－５類と考えられる底部の破片で、内面見込み部は無文、底部の器肉は厚く、断面方形でやや高めの高台は外面のみが露胎で内傾する。体部外面に蓮弁文と見られる凹凸がわずかに認められる。

232は土錘である。

⑩溝210（ＳＤ210）

・遺構（第44図）

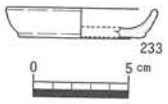
Ｄ調査区西部で検出。規模は検出面で幅約0.9m・深さ約0.09mを測り、約14m分を検出した。



第44図　溝210 土層図

・遺物（第45図、表25、図版29）

約20点の遺物が出土したが、図示し得た遺物は土師質の皿（233）のみである。



第45図　溝210 出土遺物

この皿は皿Aに属するタイプで、口径7.8cm・器高1.6cm・底径6.6cmに復原される。

⑪溝211（ＳＤ211）

・遺構（第46図）

Ｄ調査区西部で削平著しい状態で検出。検出面で幅約0.4ｍ・深さ約0.07m、長さ約３ｍを測る。

・遺物

土師質土器・瓦器などが約40点出土したが、図示可能な遺物はない。

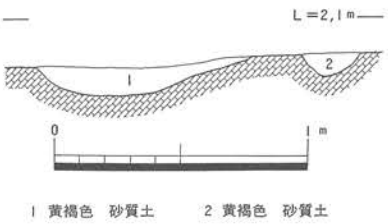
⑫溝212（ＳＤ212）

・遺構（第47図）

Ｄ調査区西部で検出。幅約1.5m・深さ約0.1mを測り、約７ｍ分を検出。削平著しい。溝213・土坑213と切り合う。

・遺物（第48図、表26）

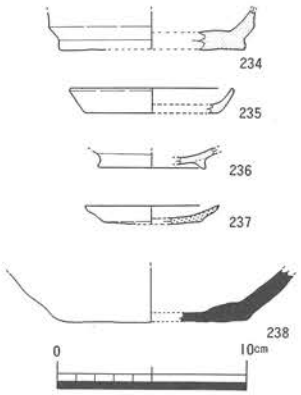
出土遺物には土師質土器約230点、瓦器・瓦質土器約50点があるが、いずれも細片で、図示可能であったのはわずか５点である。



第47図　溝212・213 土層図

244は土師質の杯である。この杯は底径9.8cmに復原されるやや大形の製品で、底部と体部の境界付近の粘土をヘラ状工具の先で掻き取った結果、底部がやや突出気味となる特徴が顕著に認められる。杯ＡＩｂに属すると見られる。235は土師質の皿である。やや薄手で、器高低い。底部に回転糸切り痕を留めており、皿Ａに分類される。236は土師質椀の底部小片である。断面方形の高台を貼り付けるもので、高台径5.8cmとやや大きい。

第46図　溝211 土層図



第48図　溝212 出土遺物

237は瓦器皿である。短い口縁部がやや外反気味に立ち上がる。器高1.0cmと極めて低い。和泉型と見られる。

238はこね鉢の底部の破片である。平底の底部に回転糸切り痕を留めている。魚住焼と見られる。

⑬溝213（ＳＤ213）

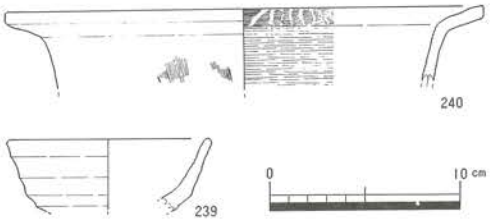
・遺構（第47図）

Ｄ調査区西部で検出。検出幅0.3m・深さ約0.07m・長さ約7.5m。溝215・土坑214・土坑218と重複。

・遺物（第49図、表27）

出土遺物には土師質土器などの細片が約180点あるが、図示可能なものは少ない。

239は土師質の杯である。底部回転糸切りで、杯ＡＩａに分類される。240は土師質の鍋である。口縁部の形態から鍋Ｂに分類される。口縁部内面・体部内面に横方向の細かなハケ目、体部外面に縦方向のハケ目が施される。

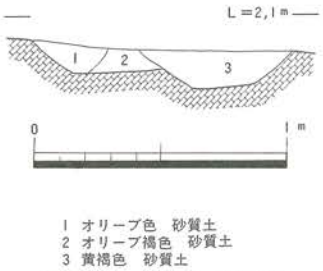


第49図　溝213 出土遺物

⑭溝214（ＳＤ214）

・遺構（第50図）

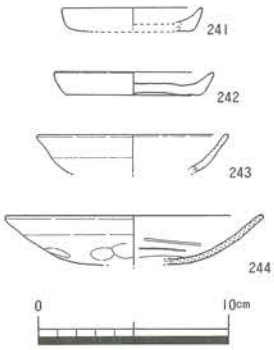
Ｄ調査区西部で検出。幅約0.3m・深さ約0.08m・長さ約7.5mを測る。溝213・溝215・土坑214・土坑218に切られる。



第50図　溝214 土層図

・遺物（第51図、表28）

遺物は約240点出土したが、大半が土師質土器の細片である。



第51図　溝214 出土遺物

241・242は土師質の皿である。いずれも皿Ａである。243の椀は中部瀬戸内系の高台付椀の口縁部破片である。

244は瓦器椀である。内面に簡略化された暗文が施されるが、炭素の吸着は不十分であり、終末期の資料と見られる。

⑮溝215（ＳＤ215）

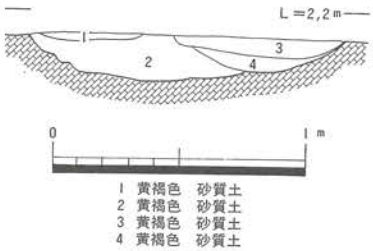
・遺構（第52図）

Ｄ調査区西部で検出。幅約0.45m・深さ約0.2m・長さ約７mを測る。両端とも閉塞の可能性が高い。溝214と切り合うが、新旧関係不詳。土坑214・土坑216に切られる。

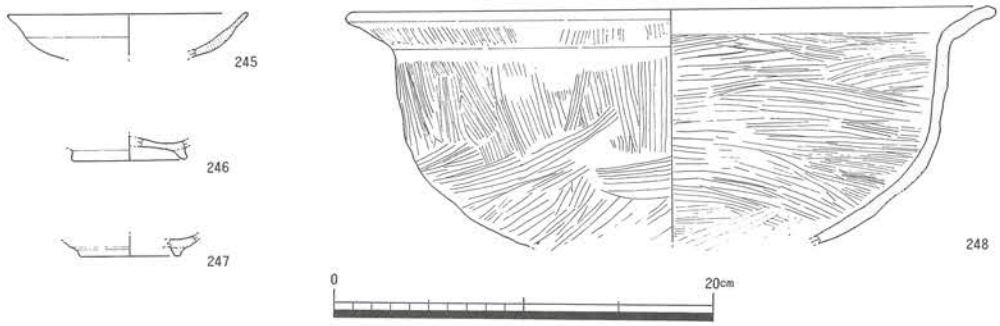
・遺物（第53図、表29、図版29）

出土遺物には土師質土器片約220点・瓦器片約70点のほか、鉄釘・鉄滓などがあるが、図示可能なものは極めて少ない。

245～247は土師質の椀である。いずれも中部瀬戸内系の高台付椀である。248は土師質の鍋である。鍋Bに属するタイプで、体部内面に横方向のハケ目、同外面に縦方向のハケ目、底部外面に縦横のハケ目が施される。口径33.5cmに復原される。



第52図　溝215 土層図



第53図　溝215 出土遺物

⑯溝216（ＳＤ216）

・遺構

Ｄ調査区西部で検出。幅約1.06m・深さ約0.12m・長さ約7.2mを測る。両端部の掘り方は不明瞭となる。

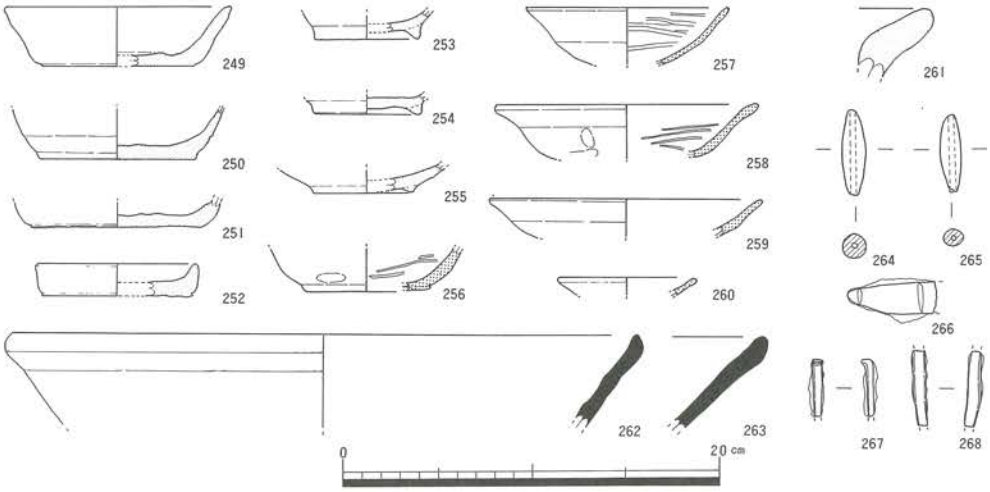
・遺物（第54図、表30、図版29）

出土遺物は約140点の土器片があるが、比較的瓦器の点数が多い。

249～251は土師質の杯である。いずれも杯ＡＩａのタイプであるが、251は体部の破損部を丁寧に打ち欠いて整えており、皿に転用した可能性がある。252の皿は底部回転糸切りの通有のタイプ。253～255はいずれも中部瀬戸内系の高台付椀である。

256～259は瓦器椀である。いずれも内面に粗雑な暗文が施される。256は無高台であるが、底部周縁部の粘土をヘラ状工具で掻き取り、底部を突出気味に仕上げる。器壁も厚手であり、特異なタイプと見られ、厳密には瓦質土器と称すべき製品である。260は瓦器皿の口縁部小破片であるが、口径の復原値7.2cmを測る。口縁部短く、斜め上方に立上り、端部をやや肥厚させる。口縁部内外面ともヨコナデを施す。暗文は見られない。

261は土師質の鍋と見られる。口縁部が外反するタイプであるが、極めて器壁が厚く、や



第54図　溝216 出土遺物

や特殊な製品と見られる。

262・263はこね鉢である。ともに直線状の体部で、口縁端部をわずかに上方に拡張する。ともに口縁部外面は重ね焼により黒色を呈する。魚住焼である。

264・265は通有な管状土錘である。

266は刀子。切先部の断片で、残存長は4.2cm。刃部の断面は三角形である。267・268は鉄釘。いずれも断片であるが、267の頭部はL字形を呈する。ともに断面方形の角釘である。

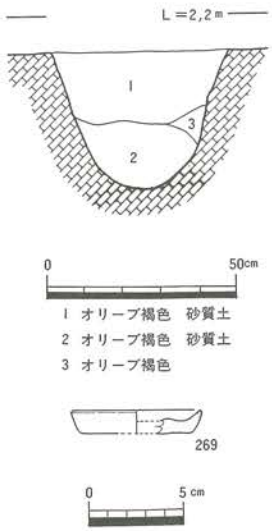
⑰溝217（ＳＤ217）

・遺構（第55図）

Ａ調査区とＤ調査区にかけて検出された溝で、幅約0.35m・深さ約0.09m・長さ約8.6mを測る。北の端は削平のため掘り方は不明瞭となる。土坑219・土坑223に切られる。

・遺物（第55図、表31）

出土遺物は土師質土器・瓦器の細片が約290点出土したが、図示可能なものはほとんどなく土師質の皿（269）を図示し得たのみである。この皿は底部回転糸切りで、皿Ａに属する。



第55図　溝217 土層図・出土遺物

⑱溝218（ＳＤ218）

・遺構（第56図）

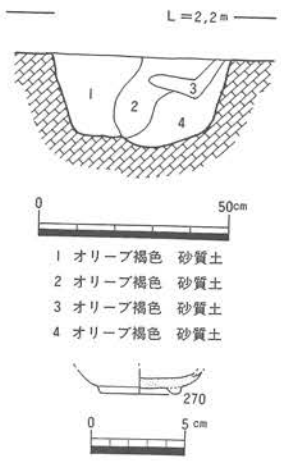
Ａ調査区とＤ調査区にかけて検出された南北溝で、幅約0.78m・深さ約0.25m・長さ約

7.5mを測る。北の端は削平のため掘り方は不明瞭となる。なお、この溝は埋土から見て、E調査区第1遺構面の遺構に対応する遺構と考えられる。

・遺物（第56図、表32）

遺物は土師質土器の細片が約35点出土しているが、いずれも細片である。

270は土師質の椀である。この椀は断面台形状のやや押しつぶれた高台を持つ。



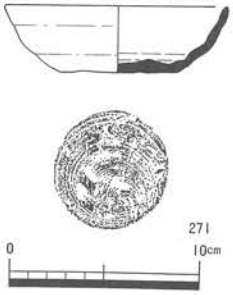
第56図　溝218 土層図・出土遺物

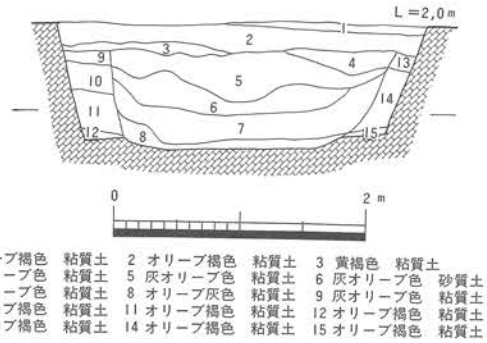
⑲溝219（SD219）

・遺構（第57図、図版2）

A調査区とD調査区にかけて検出された南北溝で、幅約1.6m・深さ約0.44m・長さ約8.2mを測るが、削平を受けていると見られる。溝206と合流。この溝は隣接する徳島市教育委員会による調査区でも南方向の延長部分が検出されている。

・遺物（第57図、表33、図版29）





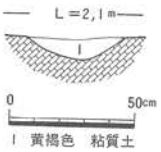
第57図　溝219 土層図・出土遺物

出土遺物は少なく、図示し得たのは備前地方の産と見られる椀（271）1点のみである。この椀は底部を回転糸切りで切り離し、板目を留める。口径11.5cm・器高3.4cm・底径6.2cmを測る。

⑳溝220（SD220）

・遺構（第58図）

E調査区東部で検出された東西方向の溝状遺構で、長さ約10mを検出した。幅約0.4m・深さ約0.08mである。溝の西端部は調査区外に延びるが、東端部は閉塞されていた可能性が高い。溝221と直交するが、新旧関係は不明である。



第58図　溝220 土層図

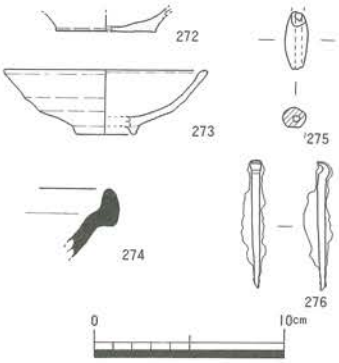
・遺物（第59図、表34）

土師質土器・瓦器の細片が約70点出土した。

272は土師質の皿、273は土師質の椀である。土師質の椀は口径10.6cm・器高3.4cm・高台径3.2cmである。高台は退化傾向が著しい。

274はこね鉢の口縁部の小片で、拡張した口縁端部は丸みを持つ。

275は土錘、276は鉄釘である。

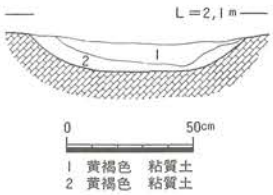


第59図　溝220 出土遺物

㉑溝221（ＳＤ221）

・遺構（第60図）

Ｅ調査区のほぼ中央部で検出した南北溝で、幅約0.84m・深さ約0.11mを測り、約12m分を確認した。両端はともに調査区外に延びる。溝220と直交する。なお、この溝を境に西側では遺構の密度が比較的高いが、東側ではほとんど遺構が見られなくなるという特徴が見られる。小溝ではあるが、集落内の区画溝として機能していた可能性がある。

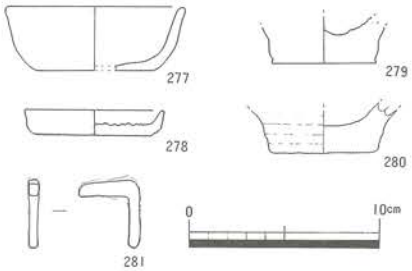


第60図　溝221 土層図

・遺物（第61図、表35、図版30）

出土遺物は、土師質土器の細片などが約85点出土しているが、図示可能なものは少ない。

277は土師質の杯である。この杯は口径9.2cm・器高3.4cm・底径6.2cm。底部に明瞭な回転糸切り痕を留める。278～280は土師質の皿である。278は当遺跡通有の形態のもので、口径7.4cm・器高1.3cm・底径6.2cmを測り、底部外面には回転糸切り痕が明瞭に残る。皿Ａである。279・280は高台状に部厚い底部が突出する形態で皿Ｃに分類される。底部は回転糸切りで切り離される。



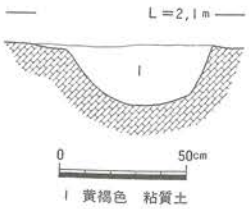
第61図　溝221 出土遺物

281は不明鉄製品である。これはＬ字形を呈し、一方の断面が方形、他方が円形に近い。用途不詳であるが、あるいは鎹の断片の可能性もある。

㉒溝222（ＳＤ222）

・遺構（第62図）

Ｅ調査区北東部で検出した東西溝で、西端は閉塞し、東は調査区外に延びる。幅約0.6m・深さ約0.24m・長さ約3.63mである。



第62図　溝222 土層図

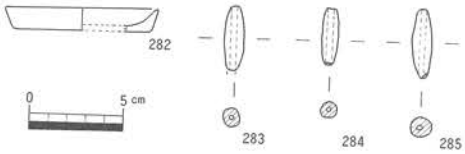
・遺物（第63図、表36）

出土遺物は土師質土器・瓦器・国内産陶器等の細片約50点である。

282は土師質の皿である。この皿は断面三角形状の短い口縁部がほぼ直立気味に立ち上が

る形態のもので、底部の糸切り痕は明瞭でないが、形態・色調から見て皿Aと見られる。

283〜285の土錘はいずれも当遺跡通有の小形の管状土錘である。

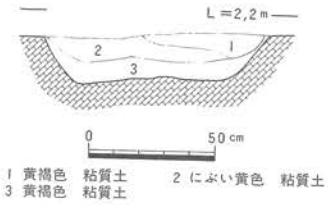


第63図　溝222 出土遺物

㉓溝223（ＳＤ223）

・遺構（第64図、図版22）

Ｅ調査区西部南寄りで検出したもので、Ｅ柱穴群を囲む形で、東西方向から南北方向に折れ曲がる。東端は井戸201に切られ、南端は調査区外に延びる。規模は幅約0.85m・深さ約0.17mで、延長で約9.6m分を検出した。Ｅ柱穴群で復原した建物に伴う溝であった可能性が高い。



第64図　溝223 土層図

・遺物（第65図、表37、図版30）

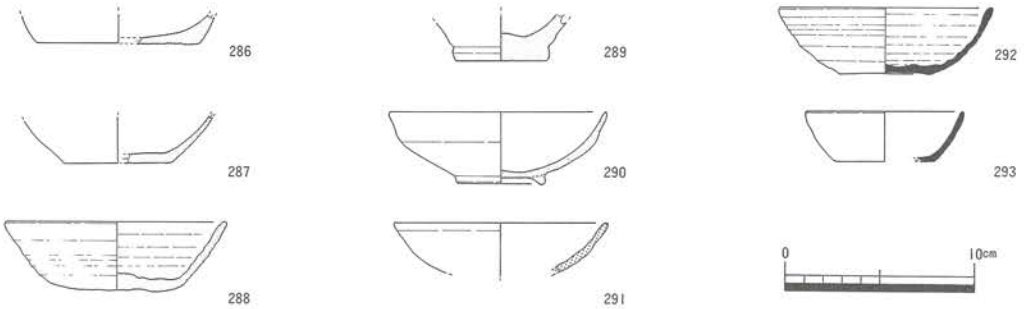
出土遺物は建物の北側に相当する東西方向の部分で比較的多く、ほぼ完形に復原されたものも含め、約200点の土器片が出土した。

286〜288は土師質の杯である。杯ＡⅠａ（286）・杯ＦⅠ（287）・杯ＦⅡａ（288）がある。287は色調が灰白色で、堅緻な焼成。288は口径11.5cm・器高3.6cm・底径6.0cmの法量を示す。底部は回転ヘラ切り後、全体に丁寧なナデが施される。内外面に成形による凹凸が見られるが、全体に丁寧な作りの製品である。

289は土師質の高台付皿である。底部が高台状に突出する皿Ｃのタイプのもので、高台の底径は5.0cmを測る。底部には回転糸切り痕を留め、全体に粗いロクロナデで仕上げられる。

290は土師質の椀で、ほぼ完形に復原され、口径11.5cm・器高3.8cm・高台径4.8cmを測る。高台は貼り付け高台で、低く、断面は三角形状を呈する。

291は和泉型の瓦器椀。292は陶器椀で、ほぼ完形である。法量は口径11.3cm・器高3.6cm・底径5.0cmである。底部外面に明瞭な回転糸切り痕を留める。産地を特定し難いが、備前地方の製品と見られる。



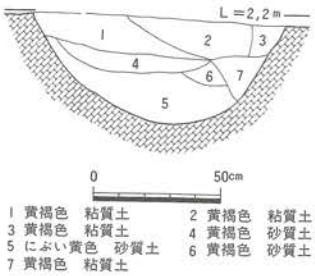
第65図　溝223 出土遺物

293は瀬戸焼と見られる小椀で、全体に丁寧なロクロナデが施される。

㉔溝224（ＳＤ224）

・遺構（第66図）

Ｅ調査区南西部で検出した南北溝で、幅約１ｍ・深さ約0.4mを測る。北端は井戸201に合する。南端は第１遺構面の土坑101に切られる。検出したのは約４ｍ分である。なお、この溝はやや粗い砂粒が混じる埋土であったが、こうした特徴は井戸201の埋土上部や、やはり井戸201に合する溝である溝225にも共通するものであり、この溝と井戸201との有機的関連が想定される。



第66図　溝224 土層図

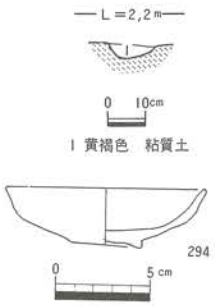
・遺物

出土遺物は土師質土器・瓦器の細片が30点余り出土したが、図示可能なものはない。

㉕溝225（ＳＤ225）

・遺構（第67図）

Ｅ調査区の西端中央付近で検出された東西溝であるが、西端部付近は土質が不安定で確認が困難であったためにやや掘り下げ過ぎとなり、プランを明確に把握できなかった。規模は幅約1.14m・深さ0.24mで、約2.2mを検出。西端は溝236に合流する。また東で井戸201に合する。既述したようにこの溝も井戸201と有機的な関連を持っていた可能性が高い。



第67図　溝225 土層図・出土遺物

・遺物（第67図、表38、図版30）

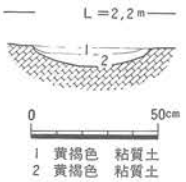
遺物は土師質土器等の細片が約20点出土したのみで少ない。

294は土師質の椀で、ほぼ完形に復原された。法量は口径10.6cm・器高2.8cm・高台径3.8cmで、器高が低く、高台の退化傾向が顕著な製品である。

㉖溝226（ＳＤ226）

・遺構（第68図）

Ｅ調査区南西隅で検出された東西溝で、上部は掘り過ぎにより削平を受けた状態で検出した。検出した状況で、幅0.45m・深さ約0.08mを測る。西端は第１遺構面の溝102、東端は同じく土坑101に切られ、延長で2.25mが検出されたに過ぎない。



第68図　溝226 土層図

・遺物

出土遺物はない。

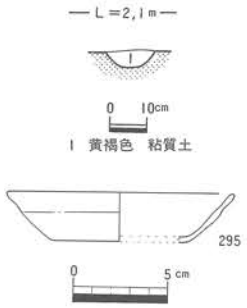
㉗溝227（ＳＤ227）

・遺構（第69図）

Ｅ調査区東端部北寄りの地点で検出した幅９cm・深さ３cmの極めて小規模の溝である。約2.9mを検出。土坑240と重複する関係にあるが、この溝が新しい。

・遺物（第69図、表39）

出土遺物は少なく土師質土器・瓦器・陶器の細片が８点出土したのみである。



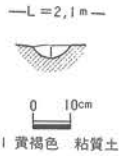
第69図　溝227 土層図・出土遺物

295は土師質の杯である。この杯は明褐灰色を呈し、胎土は極めて良好な製品で、口縁部外面を強くロクロでナデる。全体に器面を平滑に仕上げており、杯Ｃに分類可能か。ただし、底部の切り離しについては不詳である。

㉘溝228（ＳＤ228）

・遺構（第70図）

Ｅ調査区東部北寄りの地点で検出した幅10cm・深さ３cmの極めて小規模の溝である。部分的に削平を受け、途切れるが延長で約2.04mを検出。



第70図　溝228 土層図

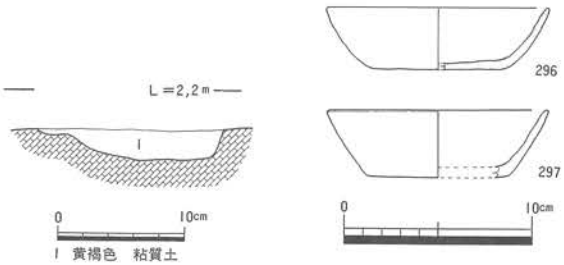
・遺物

出土遺物はない。

㉙溝229（ＳＤ229）

・遺構（第71図）

Ｅ調査区の北壁に沿った地点で認められた溝であるが、排水溝掘り下げ時に削平を受け、全体の規模等は不明である。ただ、断面観察が可能であった箇所で作成した土層図によると幅0.73m・深さ0.12mであった。



第71図　溝229 土層図・出土遺物

・遺物（第71図、表40、図版30）

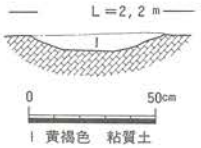
出土遺物は少なく土師質土器・陶器片が約15点出土したのみ。

296・297は土師質の杯である。296は口径11.2cm・器高3.2cm・底径6.8cmに復原され、297は11.8cm・器高3.6cm・底径7.3cmを測る。ともに色調は淡黄色を呈し、全体を丁寧なロクロナデで仕上げる。ともに杯ＦＩである。

㉚溝230（ＳＤ230）

・遺構（第72図）

E調査区西部やや南寄りの地点で検出。E柱穴群の中に位置する幅0.56m・深さ0.07mの小規模な東西溝である。両端は削平により掘り方不明。



第72図　溝230 土層図

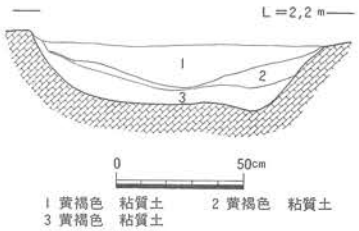
・遺物

出土遺物はない。

㉛溝231（SD231）

・遺構（第73図）

E調査区西部北寄りのD柱穴群の中で検出した幅15cm・深さ3cmの小規模な溝である。約1.4mを検出。西端は土坑247に切られるが、東端は削平のためか掘り方は不明瞭となる。



第73図　溝231 土層図

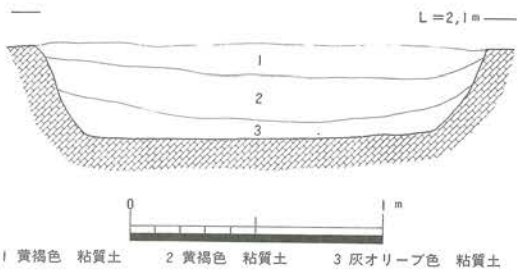
・遺物

出土遺物はない。

㉜溝232（SD232）

・遺構（第74図）

E調査区東端部で検出されたもので、幅1.78m・深さ0.37mと比較的規模の大きな溝である。しかし、西端部は閉塞しており、流路としての機能を果たしていなかったと考えられる。東端は調査区外に延びる。今回検出したのは約6.6m分である。



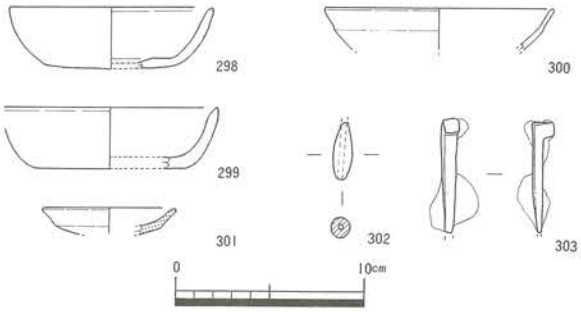
第74図　溝232 土層図

・遺物（第75図、表41、図版30）

遺物は土師質土器片が約100点出土したが、細片のものが大半を占める。

298・299は土師質の杯である。口径10.5～10.8cm・器高はともに3.3cm・底径7.0～8.0cmの法量を持つ。底部外面はともに糸切り痕をナデ消す。ともに杯AⅠaである。300は土師質の椀である。

301は瓦器皿で、口径6.0cmと小さく、口縁部は外反する。底部を欠失



第75図　溝232 出土遺物

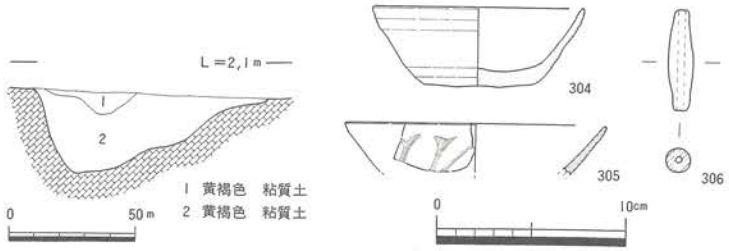
するが、やや丸底状と見られる。和泉型の製品である。

302は土錘である。303は鉄釘で、頭部をＬ字形に屈曲させる。先端部を欠失する角釘である。

㉝溝233（ＳＤ233）

・遺構（第76図）

Ｅ調査区東北部の壁面沿いに検出した東西溝で、幅0.65m・深さ0.18mの規模である。西端は調査区外に延びるが、東端は閉塞する。やや掘り方が整わないため、遺構が重複している可能性が考えられたが、確認できなかった。



第76図　溝233 土層図・出土遺物

・遺物（第76図、表42）

出土遺物は土師質土器・瓦器・陶器・輸入陶磁器などの細片が約50点出土。

304は土師質の杯である。口径11.4cm・器高4.2cm・底径5.9cmで、やや器高が高い。底部外面にはヘラ切り痕及び板目が残る。色調は灰白色。杯ＦⅡａに分類される。

305は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類の口縁部の破片で、口径は比較的小さく、直線的に外上方に立ち上がる体部外面には、やや不規則な蓮弁文が施される。全面に淡緑色釉が施されるが釉調は不良であり、全体に粗製である。

306の土錘は通常の管状土錘で、重さは6.3ｇを測る。

㉞溝234（ＳＤ234）

・遺構

Ｅ調査区東北隅で検出した東西溝で、幅0.35m・深さ0.1mの小規模なものである。西端は土坑242に切られ、東端は調査区外に延びる。

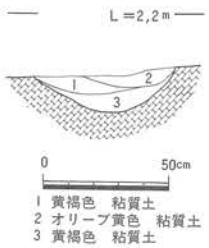
・遺物

出土遺物はない。

㉟溝235（ＳＤ235）

・遺構（第77図）

Ｅ調査区西北隅で検出した幅約0.59m・深さ0.17mの南北溝で、約2.3mを検出。北端近くは幅・深さが小さくなるが、北端は土坑250に切られる。また南端は溝236に切られる。



第77図　溝235 土層図

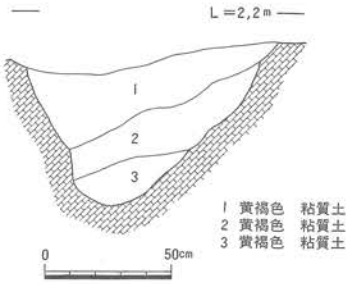
・遺物

出土遺物は土師質土器の細片が6点出土したのみで、図示可能な遺物はない。

㊱溝236（ＳＤ236）

・遺構（第78図）

Ｅ調査区の西端部で、壁面にかかって検出した遺構である。形状は不整形であるが、埋土が全体に砂質味が強く、底には小砂利を含む層の堆積が見られたので、溝として把握した。規模については不明であるが、深さは少なくとも0.5m以上である。



第78図　溝236 土層図

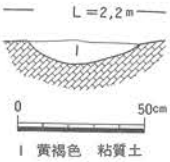
・遺物

出土遺物は少なく、土師質土器の細片が7点出土したのみである。

㊲溝237（ＳＤ237）

・遺構（第79図）

Ｅ調査区の西端部で検出した幅0.4m～1.1m・深さ0.09mの浅い東西溝である。西端は土坑259に切られる。東端部は削平により掘り方不分明。



第79図　溝237 土層図

・遺物

出土遺物は土師質の椀・鍋の細片が2点出出したのみで、図示可能なものはない。

㊳溝238（ＳＤ238）

・遺構

Ｅ調査区の北壁の中央部やや東よりの地点で、壁面にかかる形で検出した東西溝で、幅は不詳、深さは0.24mを測る。検出したのは約3.75m。西端は調査区外に延び、東端は閉塞する。東端部で土坑251と重複する。

・遺物

出土遺物はない。

（3）土坑と出土遺物

①土坑201（ＳＫ201）

・遺構（第80図、図版8）

Ｂ・Ｃ両調査区にまたがって検出された不整形の土坑で、底部は浅い鉢状を呈する。長軸4.9m・短軸2.6・深さ0.2mの規模である。溝202・溝206と重複関係にあるが、新旧関係は

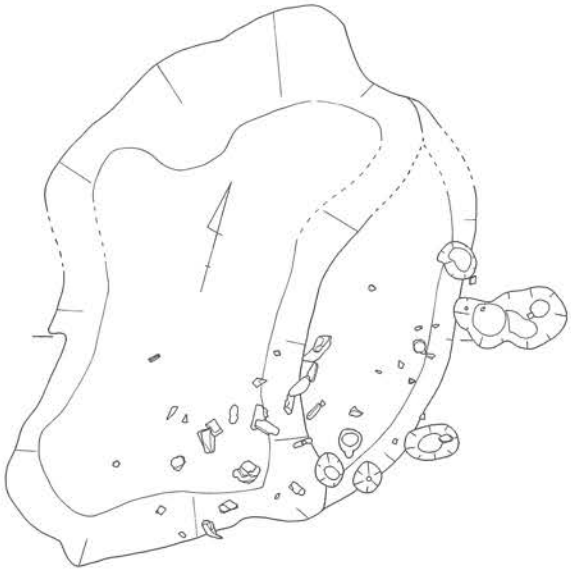
明らかにできなかった。

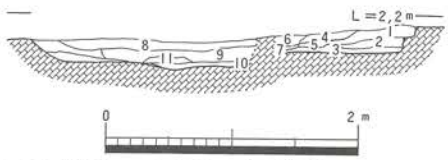
・遺物（第81図、表43、図版30）

出土遺物は土師質土器・瓦器・陶器などが約550点出土したが、細片のものが多い。

307～311は土師質の杯である。いずれも底部回転糸切りで、杯ＡＩａの通有のタイプであるが、307はその他に比べると体部の器壁が薄く、口縁部が外反する。312は土師質の皿で、やや外反気味に立ち上がる短い口縁部を持つ。皿Ａである。313は土師質の椀の底部で、高台径4.0cmと小さく、変形が著しい。

314は和泉型の瓦器椀で、口径10.4cmに復原される。





1 灰オリーブ色　粘質土　2 暗オリーブ色　粘質土　3 灰オリーブ色　粘質土
4 黄褐色　粘質土　5 黄褐色　粘質土　6 灰オリーブ色　粘質土
7 灰オリーブ色　粘質土　8 灰オリーブ色　粘質土　9 灰オリーブ色　粘質土
10 黄褐色　粘質土　11 黄褐色　粘質土

第80図　土坑201 実測図

315は龍泉窯系青磁碗Ｉ－５類と見られる底部破片。内面見込み部は無文で、低い高台の外面は露胎で畳付け部は方形に近い。316は白磁皿Ⅸ類に分類されるもので、外上方に直線的に立ち上がる口縁部を持ち、口縁端部は釉の施されないいわゆる口禿状を呈する。釉は全面に施釉されるが、底部外面の釉は薄く、一部は掻き取られる。

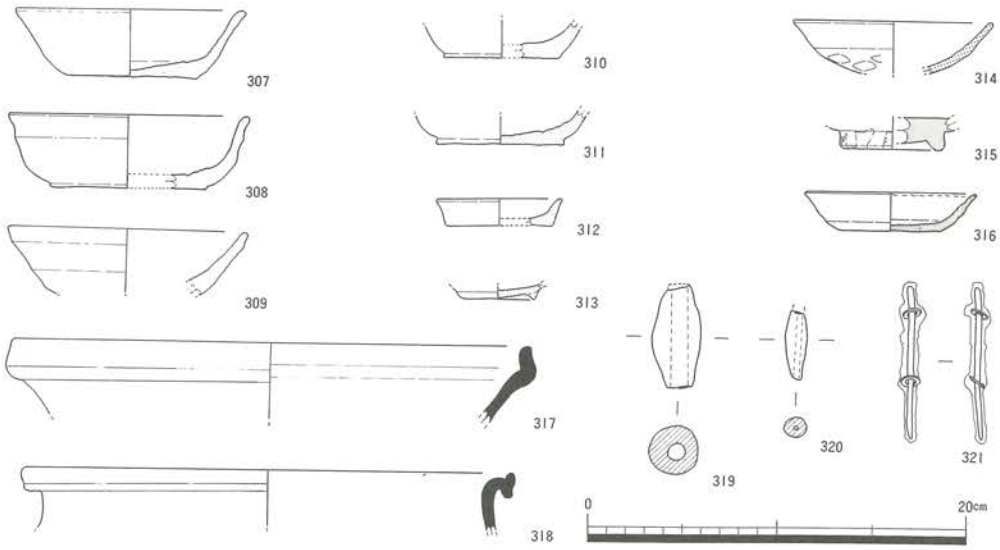
317はこね鉢である。口縁部を内側に大きく曲げ、内外面ロクロナデ。二次加熱のため、内面の器壁剝落。318は常滑焼の甕。

319・320の土錘はともに通有の形態であるが、319は重さ33ｇと当遺跡では比較的大形品に属する。

321の鉄製品は釘状のものに小リングが２個装着されたものと見られるが、用途は不明である。

②土坑202（ＳＫ202）

・遺構（第82図、図版５）



第81図　土坑201 出土遺物

B調査区で検出。形状は方形で、長辺1.87m・短辺0.85m・深さ0.25mを測る。土坑203を切る。

・遺物

図示可能な遺物はない。

③土坑203（ＳＫ203）

・遺構（第82図、図版５）

土坑202に切られる。全体的な規模不明。

・遺物

出土遺物なし。

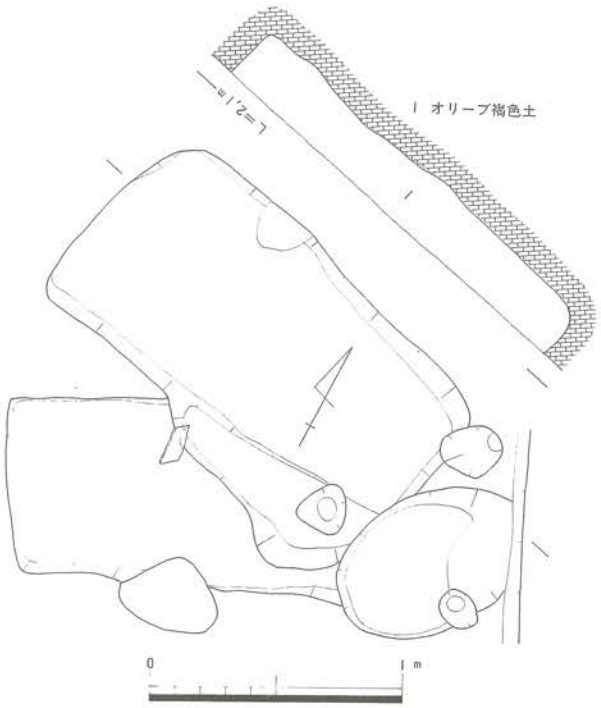
④土坑204（ＳＫ204）

・遺構（第83図、図版５）

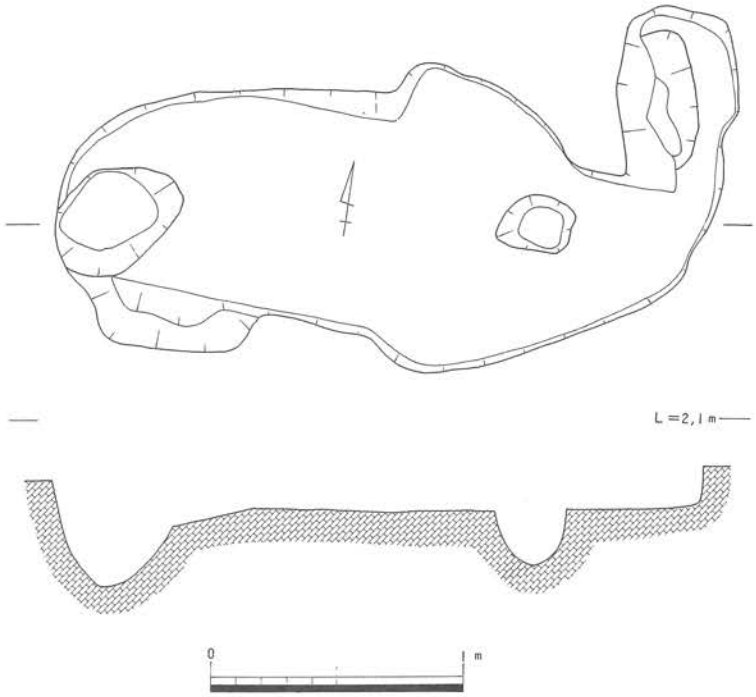
B調査区東端部で検出。長軸2.48m・短軸0.95m・深さ0.12mの規模で、形状は不整形。

・遺物

出土遺物なし。



第82図　土坑202・203 実測図

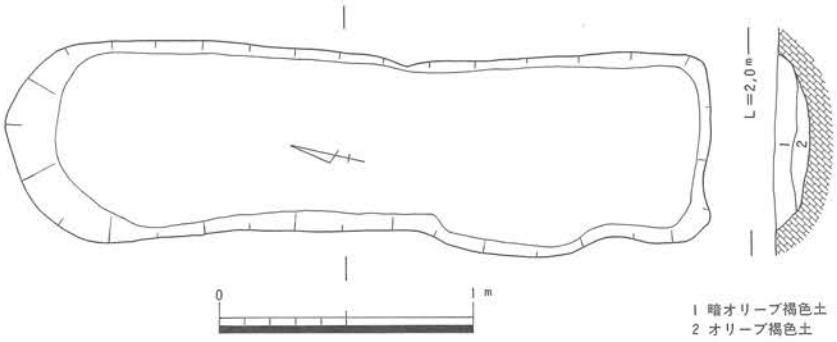


第83図　土坑204 実測図

⑤土坑205（ＳＫ205）

・遺構（第84図、図版５）

土坑204のすぐ西側で検出。形状は方形で、長辺2.77m・短辺0.71m・深さ0.18mの規模である。



第84図　土坑205 実測図

・遺物

出土遺物は約10点程。いずれも細片で、図示可能なものはない。

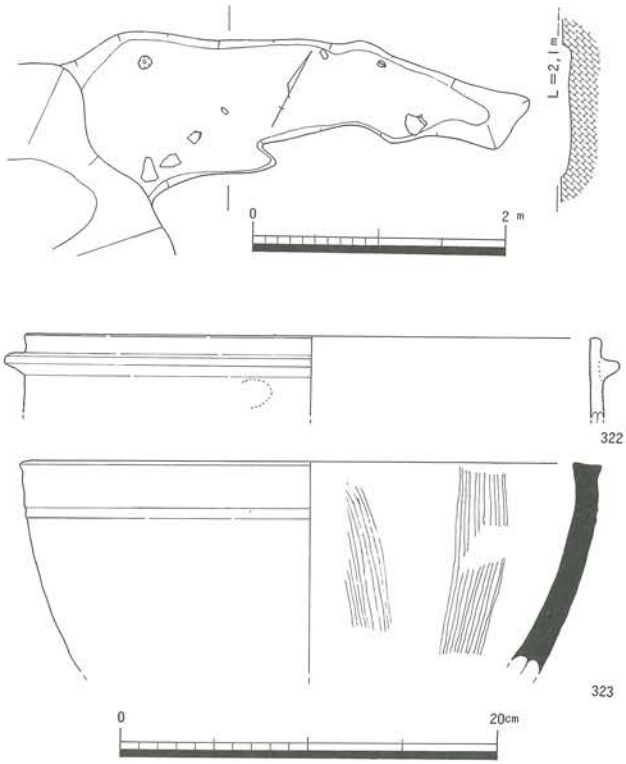
⑥土坑206（ＳＫ206）

・遺構（第85図）

土坑201に切られ、全体の形状不明。長軸3.55m・短軸1.05m・深さ0.05mを測る。

・遺物（第85図、表44）

322は土師質の羽釜である。直立する口縁部に短い鍔を貼り付ける羽釜Ａのタイプで、体部外面にはわずかにユビオサエが認められる。323は備前焼のすり鉢である。内面に６条単位の櫛描条線が施される。口縁端部はわずかに拡張する。色調は暗褐色で、胎土には砂粒が多く含まれる。



第85図　土坑206 実測図・出土遺物

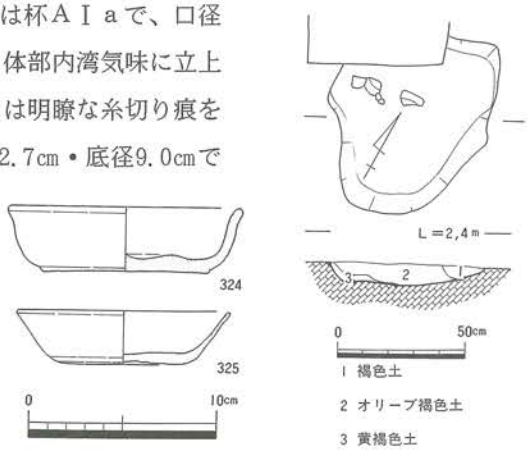
⑦土坑207（ＳＫ207）

・遺構（第86図、図版５）

Ｂ調査区北壁にかかる土坑で、一部を検出したのみ。

・遺物（第86図、表45）

324・325とも土師質の杯である。324は杯ＡＩａで、口径12.2cm・器高3.4cm・底径9.0cmを測る。体部内湾気味に立上り、口縁部はやや外反する。底部外面には明瞭な糸切り痕を留める。325の法量は口径10.9cm・器高2.7cm・底径9.0cmであり、底部をヘラで切り離し、全体を丁寧なナデで仕上げる。底部外面には板目が認められる。色調は淡赤褐色で、胎土は極めて精良である。この杯は当遺跡出土の杯の中ではやや特異なタイプに属し、杯Ｇに細分した。



第86図　土坑207 実測図・出土遺物

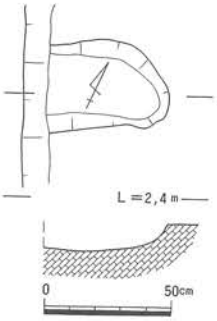
⑧土坑208（ＳＫ208）

・遺構（第87図）

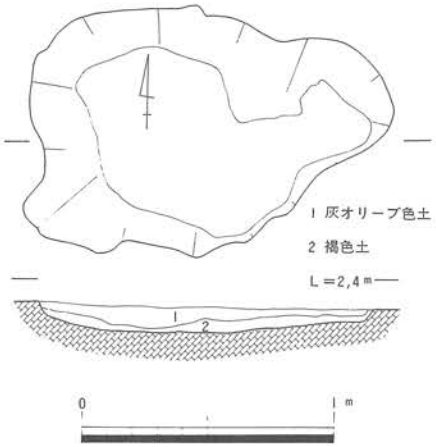
B調査区中央部で検出。形状は長円形と見られる。

・遺物

土師質土器の細片が約10点したのみで、図示可能な遺物はない。



第87図　土坑208 実測図



第88図　土坑209 実測図

⑨土坑209（ＳＫ209）

・遺構（第88図）

B調査区西寄りの地点で検出。形状は不整形で、長軸1.44m・短軸0.93m・深さ0.08mを測る。

・遺物

出土遺物はいずれも細片で、図示可能な遺物はない。

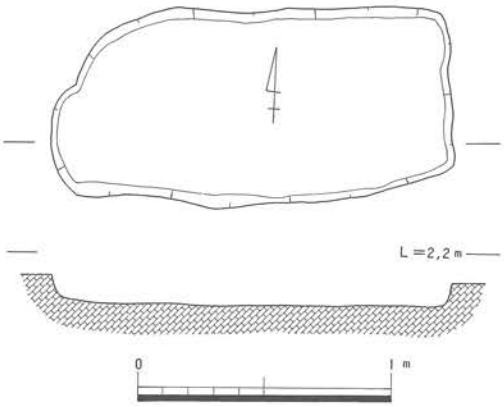
⑩土坑210（ＳＫ210）

・遺構（第89図）

土坑209に隣接して検出。ほぼ方形で、長辺1.58m・短辺0.77m・深さ0.11mである。

・遺物

図示可能な遺物なし。



第89図　土坑210 実測図

⑪土坑211（ＳＫ211）

・遺構（第90図）

土坑210の西側で検出。長円形を呈し、長径0.98m・短径0.87m・深さ0.1mの規模である。

・遺物

出土遺物なし。

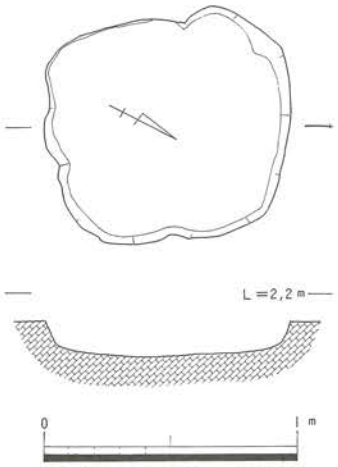
⑫土坑212（ＳＫ212）

・遺構（第91図）

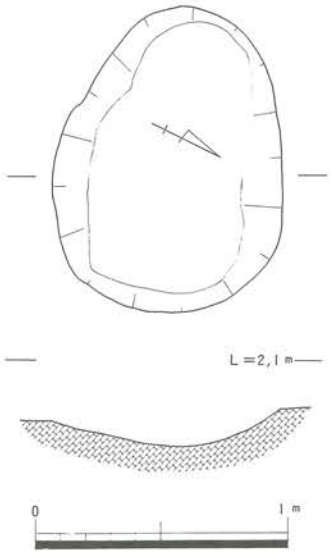
D調査区西部で検出。形状は不整円形で、長径1.21m・短径0.93m・深さ0.14mである。

・遺物

図示可能な遺物はない。



第90図　土坑211 実測図



第91図　土坑212 実測図

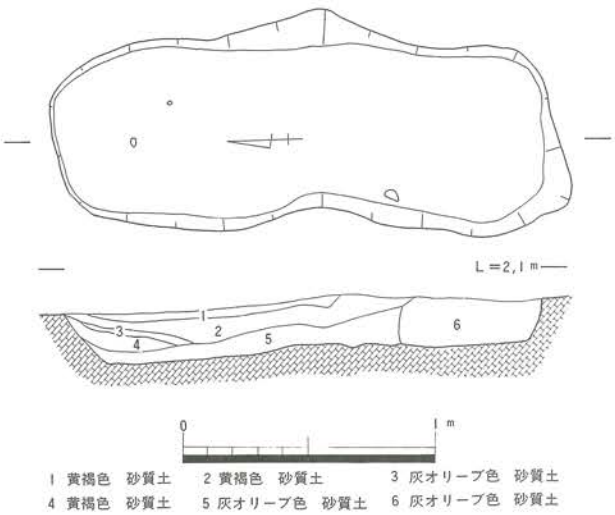
⑬土坑213（ＳＫ213）

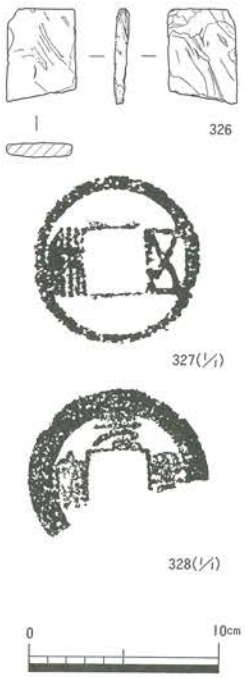
・遺構（第92図、図版13）

D調査区西部で検出。長辺2.07m・短辺0.77m・深さ0.16mを測り、形状は方形を呈する。溝212・溝213を切る。

・遺物（第92図、表46、図版31）

出土遺物としては土師質土器の細片を中心として約240点の遺物があるが、図示可能なものは極めて少ない。





第92図　土坑213 実測図・出土遺物

326は砥石である。327・328は銅銭である。327は「五銖」銭で、今回の調査で出土した銅銭の中では最も時代の古いものである。

⑭土坑214（ＳＫ214）

・遺構（第93図）

Ｄ調査区西部で検出。長辺2.15m・短辺0.65m・深さ0.11mを測り、形状は方形を呈する。溝214・溝215を切る。

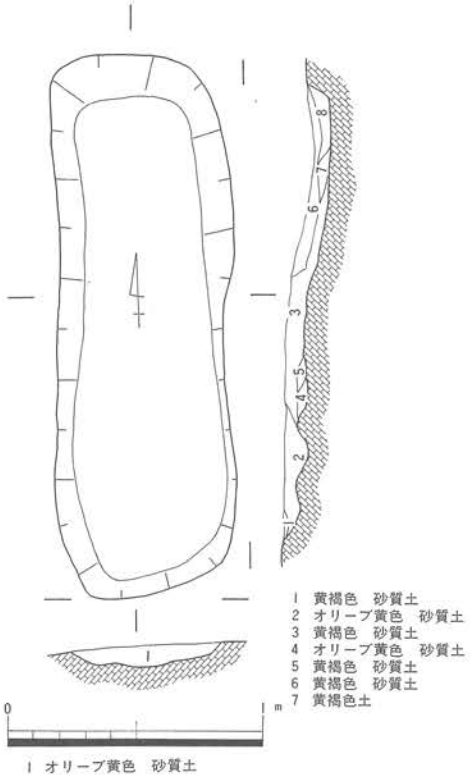
・遺物

土師質土器・瓦器の細片を中心として約60点の遺物が出土したが、図示可能な遺物はない。

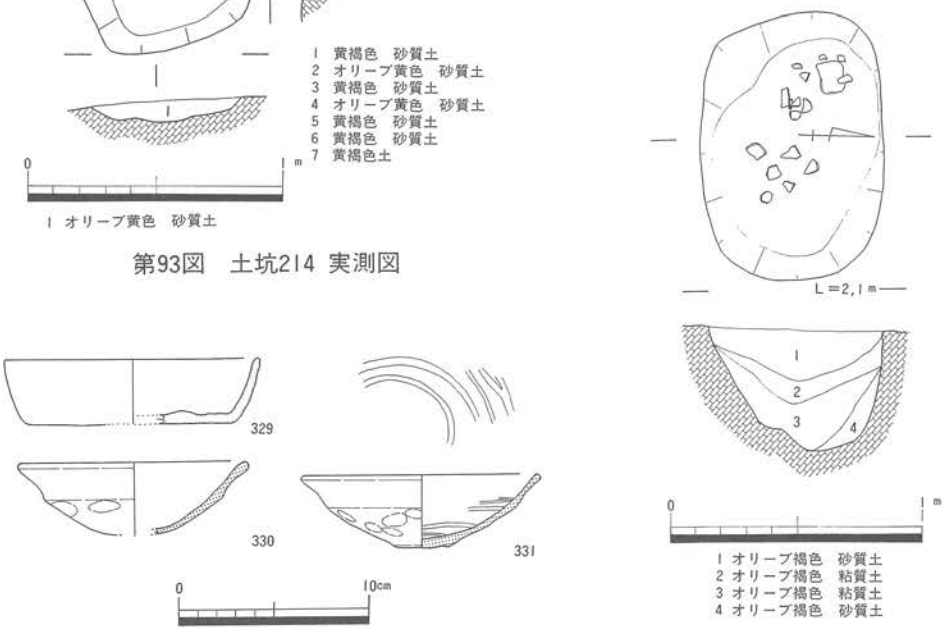
⑮土坑215（ＳＫ215）

・遺構（第94図）

Ｄ調査区西部で検出。長径1.06m・短径0.74m・深さ0.5mの長円形の土坑。ピットが複数重複した可能性もある。



第93図　土坑214 実測図



第94図　土坑215 実測図・出土遺物

・遺物（第94図、表47、図版31）

出土遺物は土師質土器・瓦器の細片などが約130点出土。

329は土師質の杯。底部回転糸切りの通有のタイプで、口径13.2cm・器高3.5cm・底径11.1cmの法量を持つ。

330・331は瓦器椀である。330は無高台と見られ、口径11.8cmに復原される。331は退化した高台を貼り付け、内面に幅広の暗文を施す。ともに和泉型と見られる。

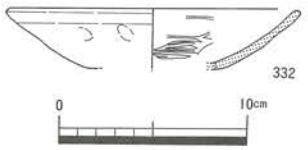
⑯土坑216（ＳＫ216）

・遺構（第95図）

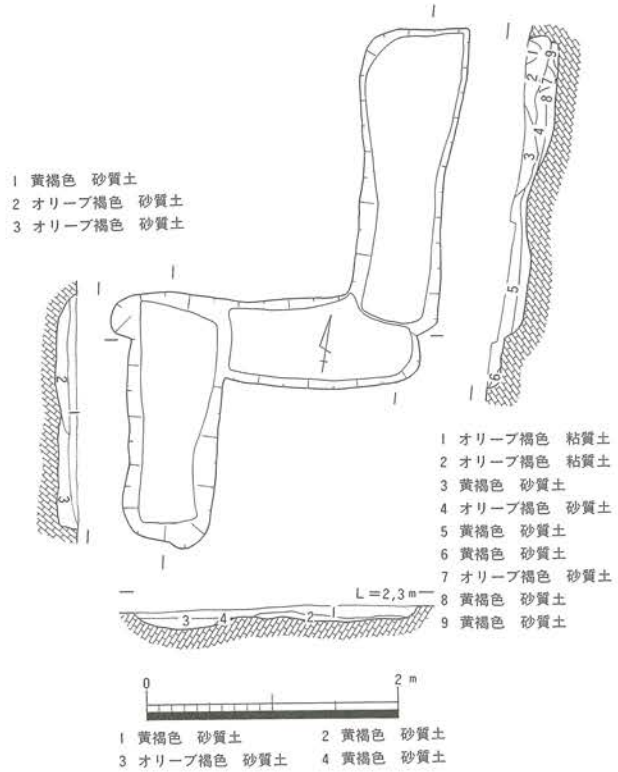
Ｄ調査区西部で検出。隅丸の長方形を呈し、長辺1.9m・短辺0.76m・深さ0.21mを測る。土坑217・土坑218と重複。

・遺物（第96図、表48）

土師質土器・瓦器片などが出土。このうち図示可能であったのは瓦器の椀（332）のみ。この瓦器椀は体部から口縁部にかけての破片で、口径は復原値であるが、15.2cmとやや大きい。内面には幅広の暗文が施される。色調は黒灰色で、炭素の吸着は比較的良好である。



第96図　土坑216 出土遺物



第95図　土坑216・217・218 実測図

⑰土坑217（ＳＫ217）

・遺構（第95図）

Ｄ調査区西部で検出。長方形と見られるが、両端がそれぞれ土坑216・土坑218に切られるため長辺不詳・短辺0.71m・深さ0.12mである。

・遺物

図示可能な遺物はない。

⑱土坑218（ＳＫ218）

・遺構（第95図）

形状は方形で、長辺2.38m・短辺0.72m・深さ0.12mの規模である。溝216・土坑217を切る。

・遺物

図示可能な遺物はない。

⑲土坑219（ＳＫ219）

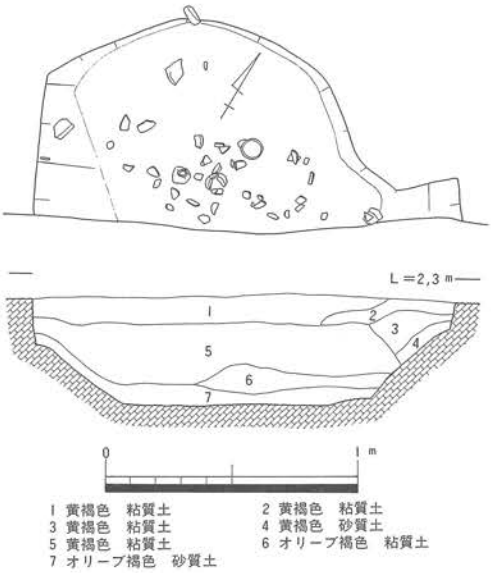
・遺構（第97図、図版14）

Ｃ調査区南壁にかかり、形状は正確には不明であるが、円形状と見られる。深さ0.2m。埋土に多量の炭化物を含み、魚骨と見られる骨も出土した。

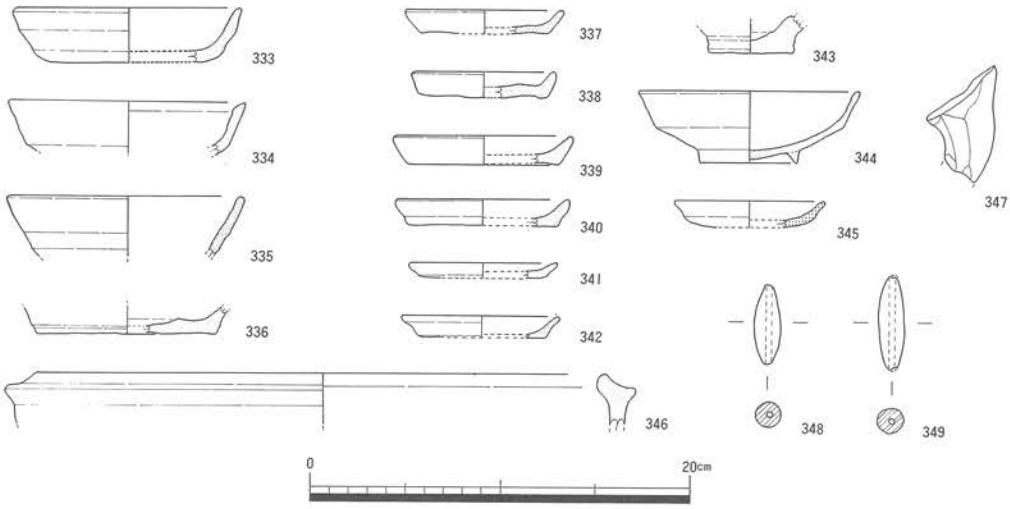
・遺物（第98図、表49、図版31）

遺物は約300点と比較的多い。

333～336は土師質の杯。底部の切り離し不明のものがあるが、色調等からいずれも杯ＡＩａのタイプと見られる。337～343は土師質の皿である。341は底部切り離しは不明であるが、形状・色調等から皿Ｂのタイプと見られる。342も同様のタイプである。343



第97図　土坑219 実測図



第98図　土坑219 出土遺物

は皿Ｃのタイプに属し、底部内面中央部が大きく凹む。344は土師質の椀。断面三角形の比較的安定した高台を貼り付ける。口径11.5cm・器高3.8cm・高台径5.1cmの法量を持ち、体部中位で大きく屈曲し、外面に明瞭な稜を持つ。

345は瓦器の皿。底部がやや丸底状で、口縁部外反気味。

346は土師質の鍋。口縁部が内湾し、口縁端部を上下に大きく拡張する。鍋ＣＩと見られるが、このタイプの出土例は少ない。

347は土師質の脚部。348・349は土錘である。

⑳土坑220（ＳＫ220）

・遺構（第99図、図版14）

Ｄ調査区中央部南で検出されたやや長円形の土坑で、長径1.08m・短径0.86m・深さ0.75mを測る。掘り方は下部の砂層まで達しており、素掘りの井戸の可能性がある。

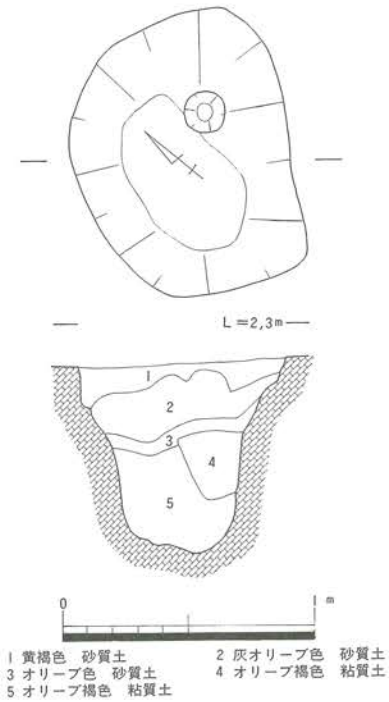
・遺物

出土遺物は土師質土器・瓦器・陶器の細片が約170点出土したが、図示可能なものはない。

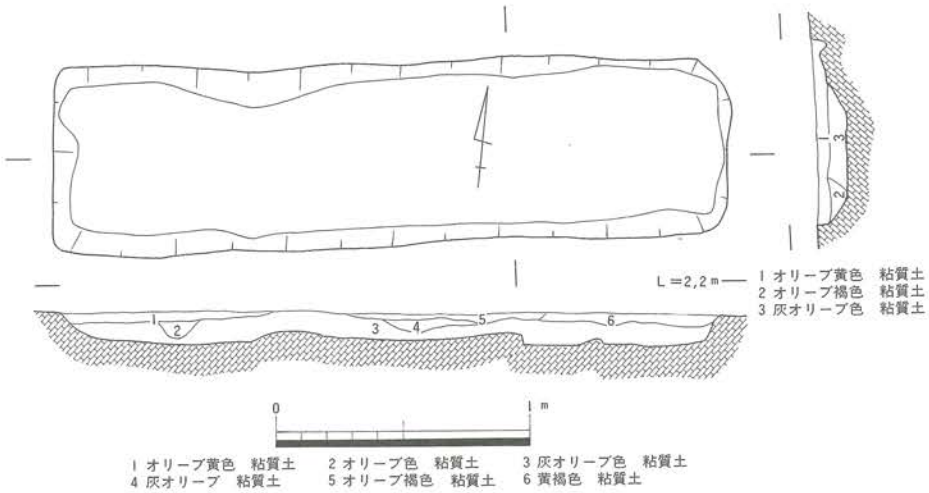
㉑土坑221（ＳＫ221）

・遺構（第100図、図版12）

溝217を切って掘り込まれた長方形の土坑で、長辺2.71m・短辺0.79m・深さ0.11mを測る。形状から土壙墓と推定されるが、特に副葬品等の出土は認



第99図　土坑220 実測図

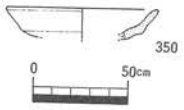


第100図　土坑221 実測図

められなかった。

・遺物（第101図、表50）

遺物は土師質土器・瓦器・鉄滓などの細片が約370点出土しているが、図示可能なものは少なく、土師質の皿（350）のみである。この皿は口径7.9cmに復原され、口縁部やや外反。底部はユビオサエ、底部外面以外はヨコナデで仕上げられる。



第101図　土坑221 出土遺物

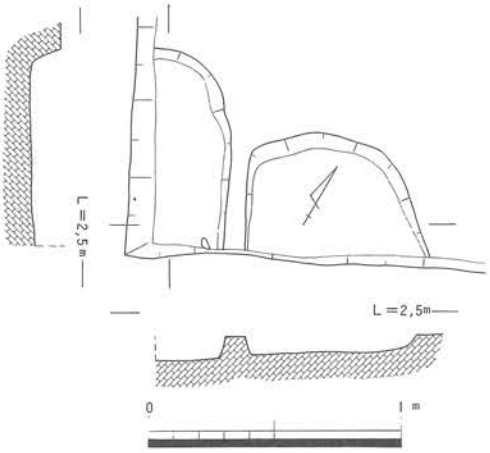
㉒土坑222～225（ＳＫ222～225）

・遺構（第102・103・104図）

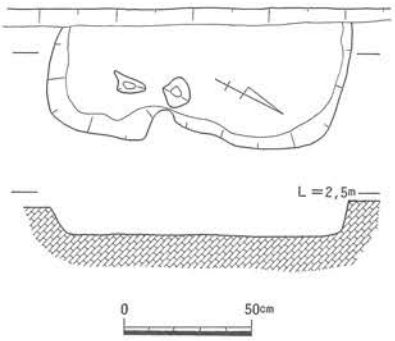
いずれもＡ調査区西部で検出したが、壁面等にかかり、形状・規模は不詳。土坑225は土坑226を切る。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。



第103図　土坑223・224 実測図



第102図　土坑222 実測図

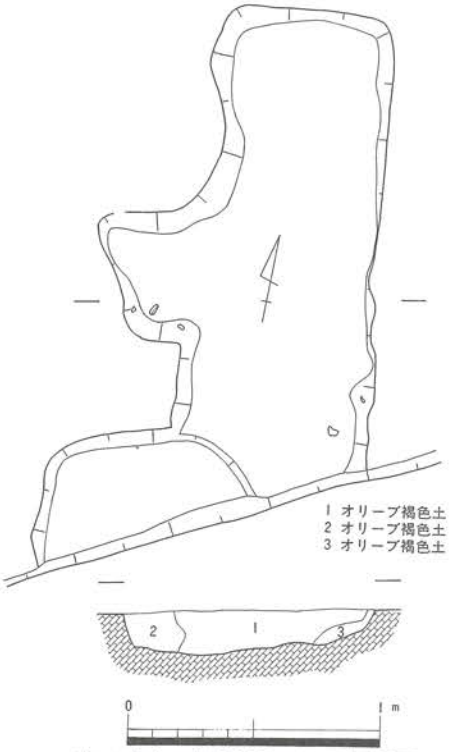
㉓土坑226（ＳＫ226）

・遺構（第104図）

長方形状の土坑と見られるが、壁面にかかり、正確な規模は不明。深さ0.23m。土坑225に切られる。

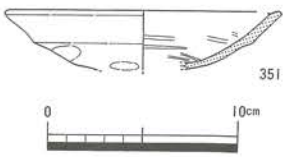
・遺物（第105図、表51）

遺物は少なく、図示し得たのは瓦器の



第104図　土坑225・226 実測図

椀（351）のみである。この瓦器椀は体部大きく外方に開き、口縁部やや外反気味。端部は丸く仕上げる。内面は丁寧にナデられた後、幅広の暗文が施される。法量は口径14.5cm・器高3.1cmで、底部欠失のため、高台は不明。



第105図　土坑226 出土遺物

㉔土坑227（ＳＫ227）

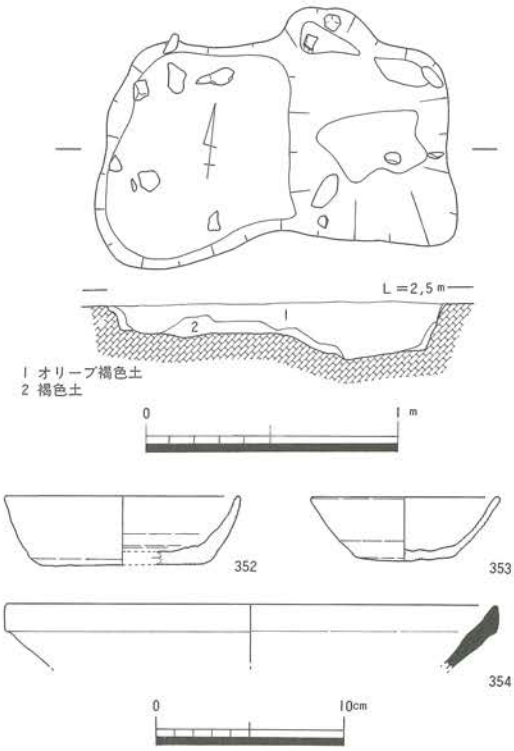
・遺構（第106図）

幅の広い長方形を呈し、長辺1.34m・短辺0.75m・深さ0.13mを測る。

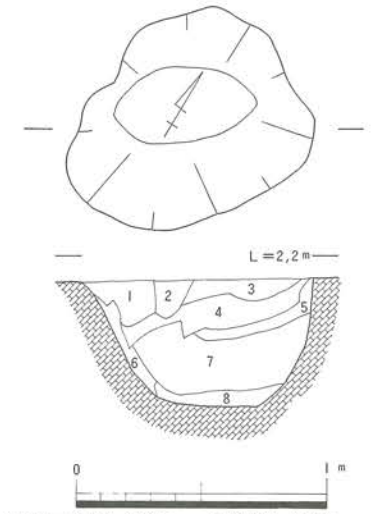
・遺物（第106図、表52、図版31）

352・353は土師質の杯である。352は底部回転糸切り後ナデを施す。杯ＡⅠａである。353は底部に回転ヘラ切り痕を明瞭に留め、器高がやや大きいタイプで、杯ＦⅡａに分類される。体部外面下部をヘラケズリし、器壁を薄く仕上げる。全体をロクロナデで仕上げるが、底部内面はナデる。色調は灰白色を呈する。

354はこね鉢である。口縁端部をやや上下に拡張するが、端面は平坦に仕上げる。重ね焼痕明瞭。



第106図　土坑227 実測図・出土遺物



第107図　土坑228 実測図

㉕土坑228（ＳＫ228）

・遺構（第107図、図版３）

Ａ調査区で検出。不整円形を呈し、長径1.01m・短径0.75m・深さ0.6mを測る。掘り方は下部の砂層に達しており、井戸として使用された可能性もある。

・遺物

図示可能な遺物はない。

㉖土坑229～231（ＳＫ229～231）

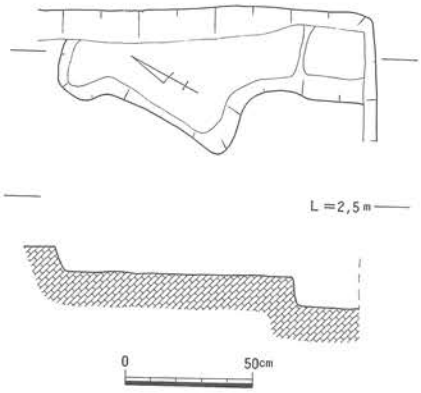
・遺構（第108・109図）

正確な形状・規模等不明。

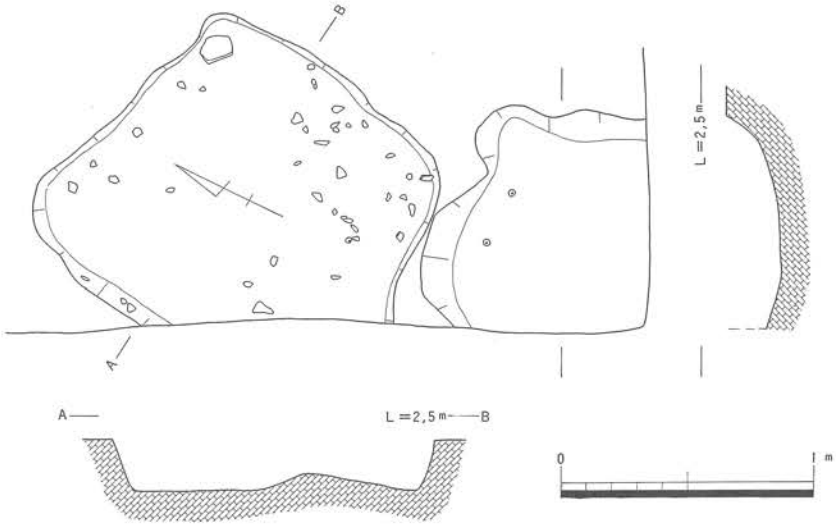
・遺物（第110図、表53）

土坑230より土師質の杯・皿等が約180点出土し、土坑231より同じく約350点の土師質の杯・皿の細片が出土したが、いずれも細片である。

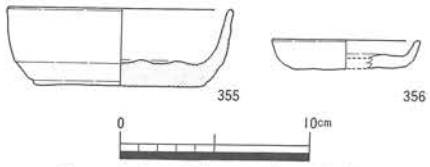
図示したのは土坑230出土の土師質の杯（355）と皿（356）である。前者は杯ＡⅠａ、後者は皿Ａに属する。



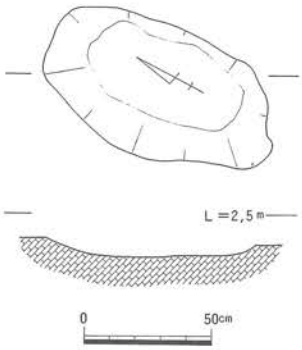
第108図　土坑229 実測図



第109図　土坑230・231 実測図



第110図　土坑230 出土遺物



第111図　土坑232 実測図

㉗土坑232（ＳＫ232）

・遺構（第111図）

長円形の土坑で、長径0.96ｍ・短径0.54ｍ・深さ0.06ｍを測る。

・遺物

土師質土器の杯などの細片が17点出土しているが、図示可能な遺物はない。

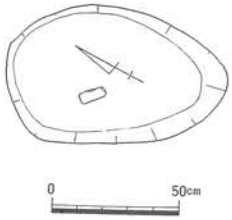
㉘土坑233（ＳＫ233）

・遺構（第112図）

長円形の土坑で、長径0.88m・短径0.54m・深さ0.2mを測る。

・遺物

出土遺物なし。



第112図　土坑233 実測図

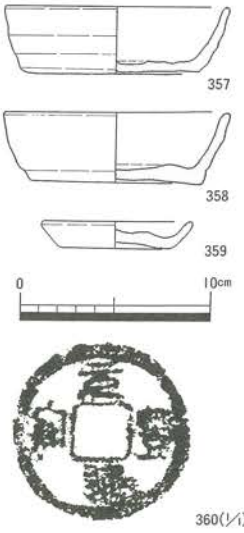
㉙土坑234（ＳＫ234）

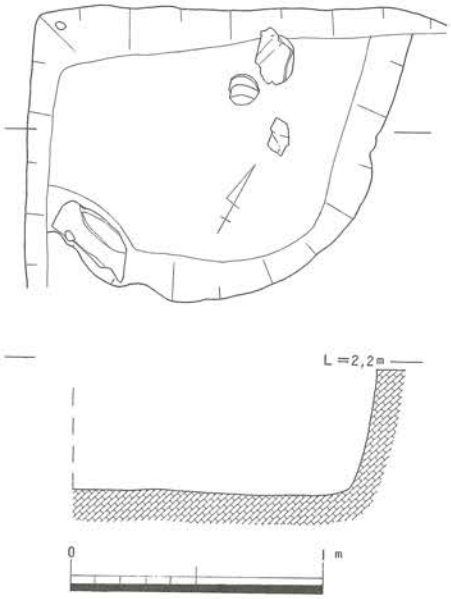
・遺構（第113図、図版３）

壁面にかかり正確な形状・規模等不明であるが、円形を呈すると見られる。深さは0.32m。

・遺物（第113図、表54、図版31）

357・358は土師質の杯である。いずれも完形で、357の法量は口径11.6cm・器高3.4cm・底径9.0cmを測る。358は口径11.8cm・器高3.5cm・底径9.0cmで、体部・口縁部直立気味に立ち上がる。底部は回転糸切り痕を明瞭に留める。ともに杯ＡＩａのタイプである。359は土師質の皿である。法量は口径7.6cm・器高1.4cm・底径5.8cmを測る。底部回転糸切りの通有のタイプであるが、やや中央部が盛り上がる。





第111図　土坑234 実測図・出土遺物

360は銅銭で、「元豊通宝」である。

㉚土坑235（ＳＫ235）

・遺構（第114図）

形状は長円形。この遺構は遺構面を深く掘り下げて、砂層上面で検出したもので、検出面では、長径1.38m・短径0.99m・深さ0.17mを測る。

・遺物

遺物は出土しなかった。

㉛土坑236（ＳＫ236）

・遺構（第115図）

Ａ調査区で検出され、長径0.88m・短径0.8m・深さ0.31mの規模を持つ円形に近い形状である。

・遺物

土師質の杯などの細片が13点出土したが、図示可能な遺物はない。

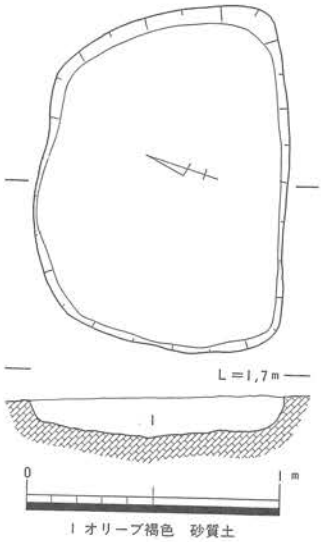
㉜土坑237（ＳＫ237）

・遺構（第116図）

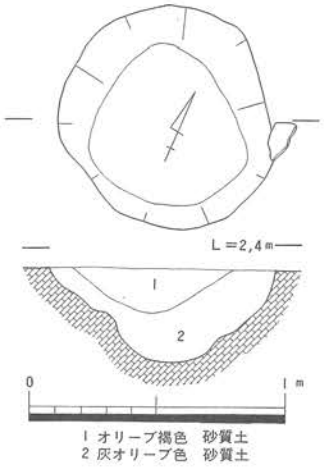
Ａ調査区東端部の壁面で検出され、規模は不明。形状は円形と考えられる。深さは0.1m。

・遺物

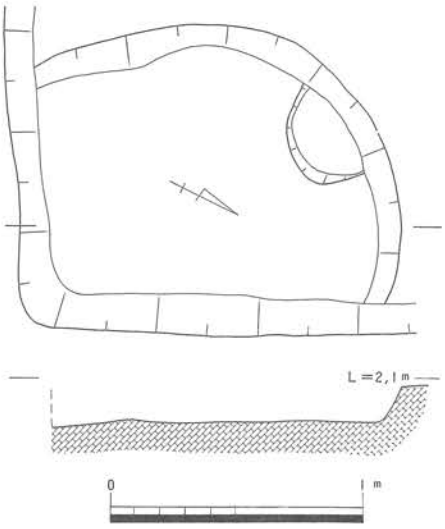
土師質土器の細片が約20点出土したが、図示可能な遺物はない。



第114図　土坑235 実測図



第115図　土坑236 実測図



第116図　土坑237 実測図

㉝土坑238（ＳＫ238）

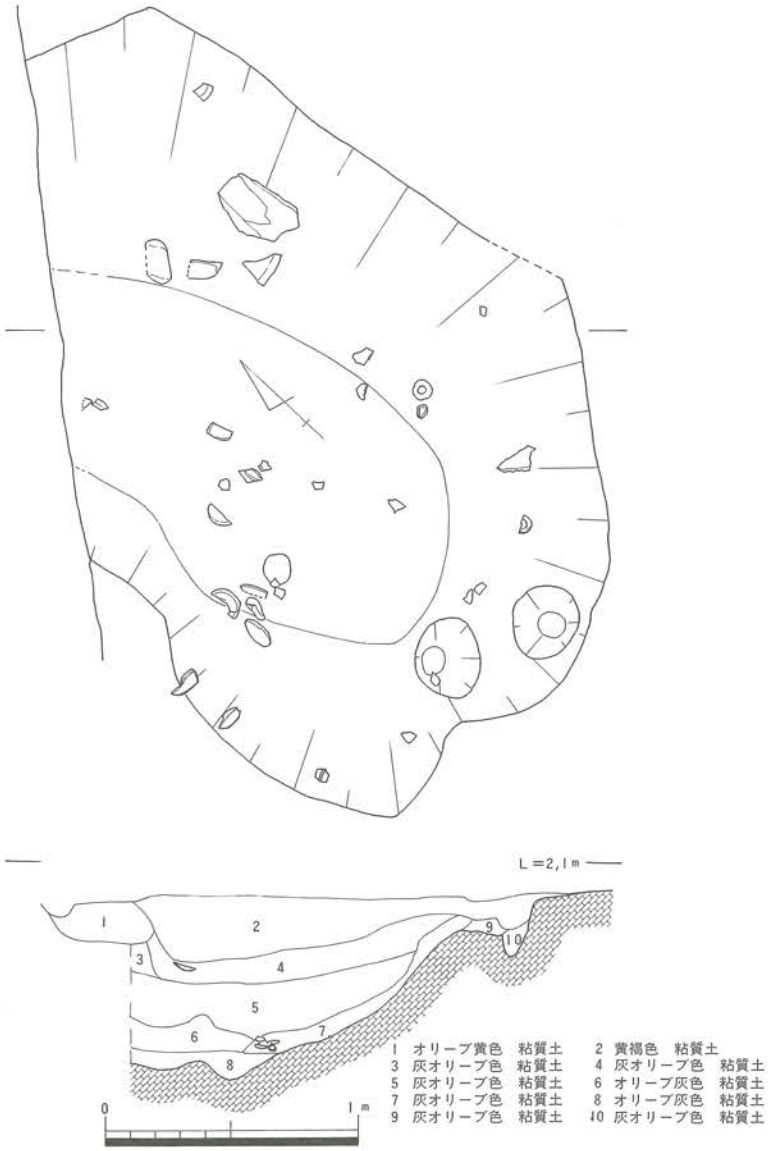
・遺構（第117図）

Ｅ調査区東北隅で、調査区北壁にかかって検出された不整形の土坑で、長軸3.33m・短軸1.77m・深さ0.73mの規模である。埋土底には青灰色の粘土層の堆積が見られた。土坑242・溝227を切る。

・遺物（第118図、表55、図版31・32）

出土遺物としては約200点の土器片が出土。

361～365は土師質の杯である。361～363は通有の杯ＡＩａのタイプ。364は底部を回転糸切りで切り離す点では杯ＡＩａと同じであるが、底径が小さく、底部外面に板目を留める点、さらには体部から口縁部にかけての形態等から見て、他と区別されるべき個体であり、杯Ｂ



第117図　土坑238 実測図

とした。この形態及び法量等は備前地方の産と見られる椀に極めて近く、その焼成不良品とも考えられるが、胎土に砂粒が多く含まれることから模倣品であると考えられる。366・367は土師質皿である。皿B（366）と皿C（367）がある。368の土師質椀はほぼ完形に復原され、口径10.6cm・器高3.4cm・高台径4.4cmを測る。体部上位で大きく屈曲し、外面に明瞭な稜を持つ。高台は貼り付けで、断面は三角形状で、低い。口縁部外面ヨコナデ、体部外面粗いナデ、内面は丁寧なナデで仕上げられる。

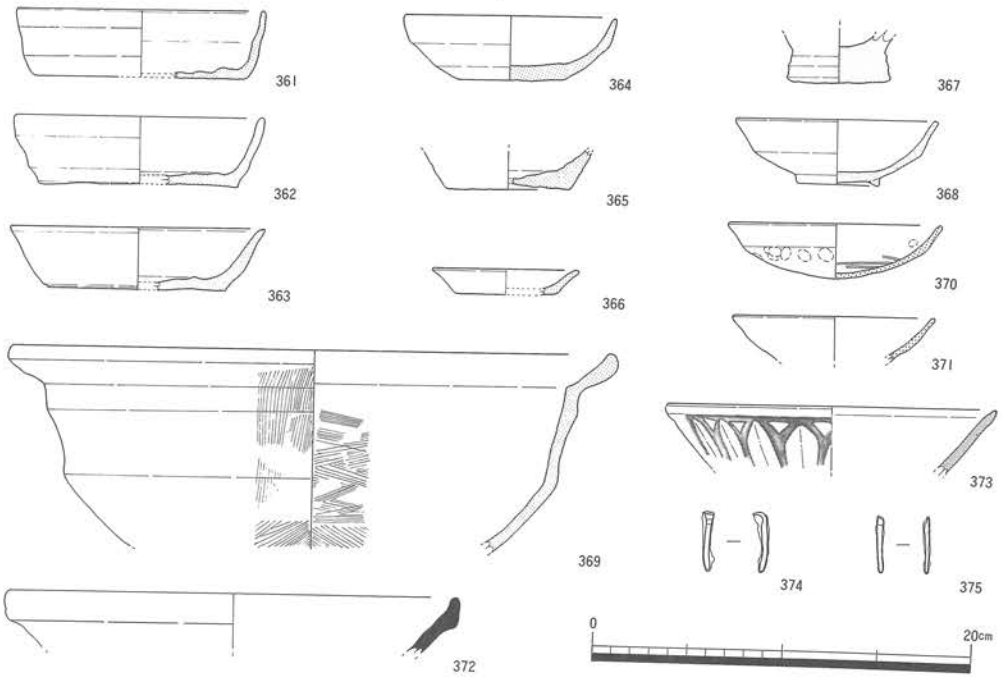
369は土師質の鍋である。鍋Bのタイプで、口縁部外面・体部外面に縦方向の細かいハケ目、体部内面に縦横の細かいハケ目が施される。復原値であるが、口径32.0cmである。

370・371は瓦器椀。370は無高台で、口径11.3cm・器高2.9cm。内面には簡略化された暗文が施される。和泉型瓦器椀の終末期に属する資料と見られる。

372はこね鉢。口径23.4cmに復原される小形の製品である。口縁端部を上下に拡張し、端面はわずかに凹面となる。

373は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類に属し、口径17.2cmで比較的大きい。体部からやや直線的に外上方に立ち上がる尖り気味の口縁を持ち、体部外面に片切彫りにより鎬蓮弁文と間弁が規則正しく削り出されている。釉は淡緑色でやや厚めに施される。

374・375は鉄釘。



第118図　土坑238 出土遺物

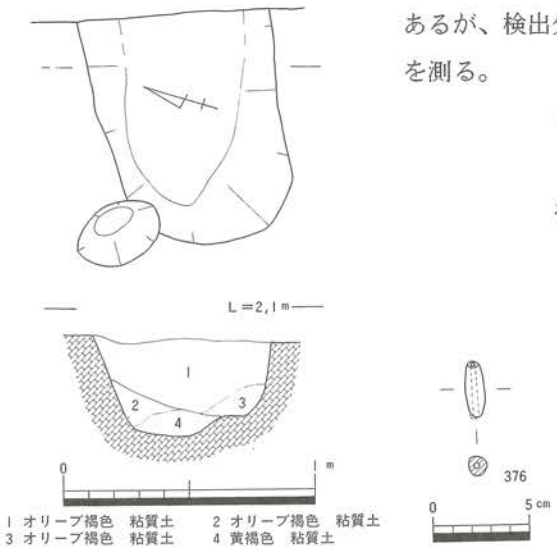
㉞土坑239（ＳＫ239）

・遺構（第119図）

Ｅ調査区東壁にかかる形で検出。全体の形状は不明であるが、検出分の長辺0.92m・短辺0.72m・深さ0.38mを測る。

・遺物（第119図、表56）

出土遺物は少なく、わずかに土錘（376）を図示し得たのみである。



第119図　土坑239 実測図・出土遺物

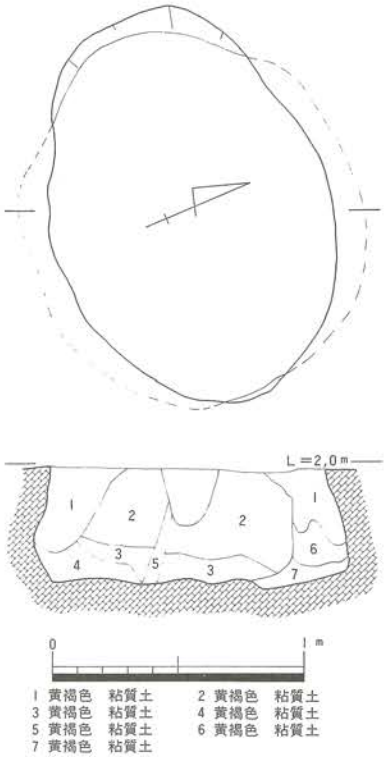
㉟土坑240（ＳＫ240）

・遺構（第120図）

Ｅ調査区東北部で検出された土坑で、不整な円形を呈する。掘り方は袋状となり、肩部はオーバーハングの状態を示す。ピットと溝227がこの土坑と重複する。

・遺物

出土遺物は土師質の杯・椀の小片が23点出土したのみで、図示可能なものはない。



第120図　土坑240 実測図

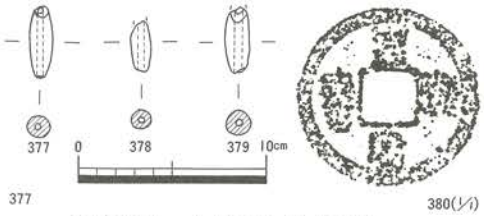
㊱土坑241（ＳＫ241）

・遺構（第122図）

Ｅ調査区東北隅で検出したもので、土坑242と重複し、全体的な規模不明。

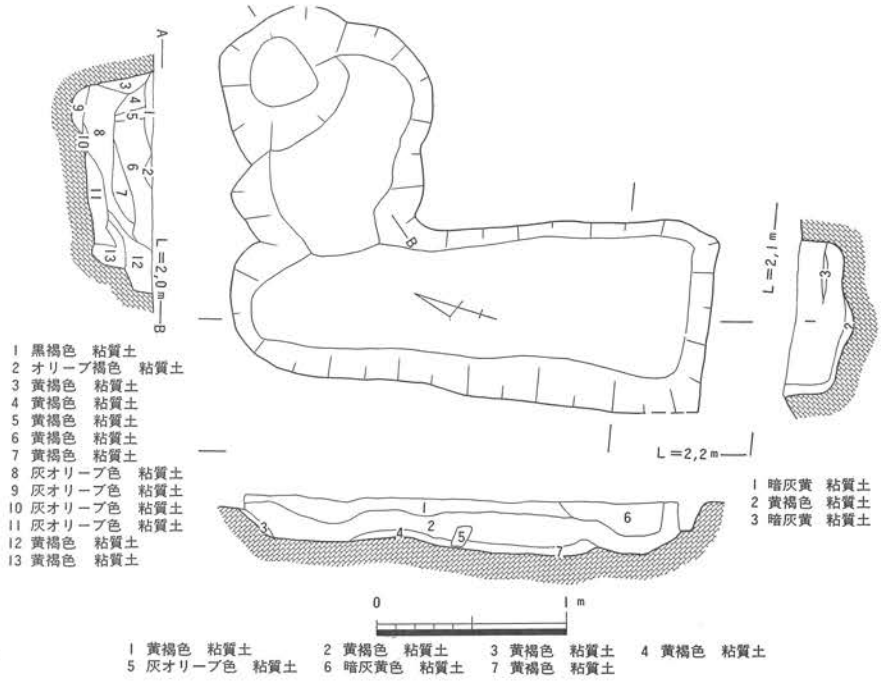
・遺物（第121図、表57、図版32）

出土遺物は土師質の杯・皿・椀・鍋、瓦器の椀、石鍋の細片などが約20点出土しているが、図示できたのは土錘と銅銭のみである。



第121図　土坑241 出土遺物

377～379は土錘である。いずれも小形の管状土錘である。380は「皇宋通宝」で、初鋳年は1039年。



第122図　土坑241・242 実測図

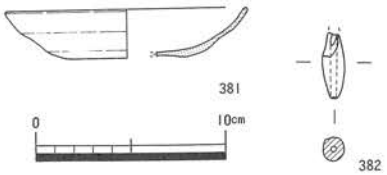
㊲土坑242（ＳＫ242）

・遺構（第122図）

Ｅ調査区東北隅で検出。長辺2.52m・短軸0.89m・深さ0.25mの規模で、形状はほぼ長方形を示す。土坑241・溝234と重複し、土坑238に切られる。

・遺物（第123図、表58、図版32）

出土遺物は土師質の杯のほか、土錘、鉄釘、鉄滓などが出土した。



第123図　土坑242 出土遺物

381は土師質の杯である。口径12.6cm・器高2.6cm・底径6.0cmに復原される。底部回転糸切りの赤色系の杯であるが、器壁が薄く、通有の杯ＡＩａとは形態の上でも細分可能な個体であり、杯Ｃに分類した。382は土錘である。

㊳土坑243（ＳＫ243）

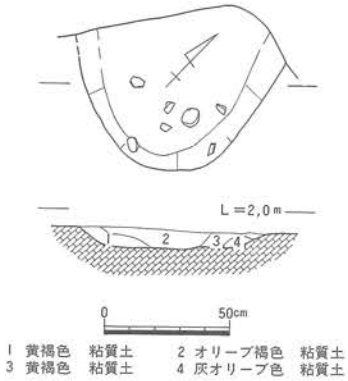
・遺構（第124図）

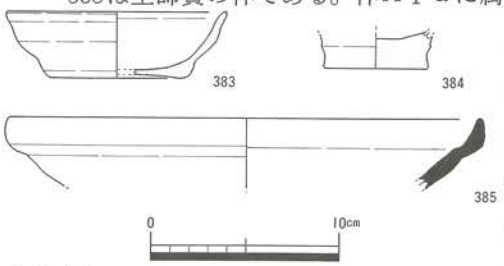
Ｅ調査区東北隅の壁面にかかる形で検出。正確な形状・規模は不明であるが、検出分で長

軸0.84m・短軸0.69m・深さ0.07mを測り、比較的浅い。埋土中には炭化物を多く含む。

・遺物（第124図、表59、図版32）

383は土師質の杯である。杯ＡＩａに属するタイプであるが、体部外面の形状がゆるやかなＳ字を描く点に特徴が見られる。内面は丁寧なロクロナデで平滑に仕上げられる。384は土師質の高台付皿で、皿Ｃに属する。





第124図　土坑243 実測図・出土遺物

385のこね鉢は口縁部の小片であり、復原値はやや不正確である。口縁端部を強いロクロナデにより内湾させ、先端部をやや尖り気味に仕上げる。

㊴土坑244

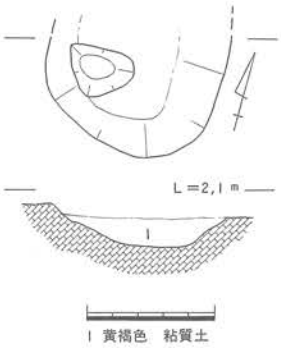
（ＳＫ244）

・遺構（第125図）

Ｅ調査区東部の北壁沿いで検出。溝233に切られ、全体の形状・規模は不明。

・遺物

出土遺物は土師質の杯の細片が数点出土したのみで、図示可能なものはない。



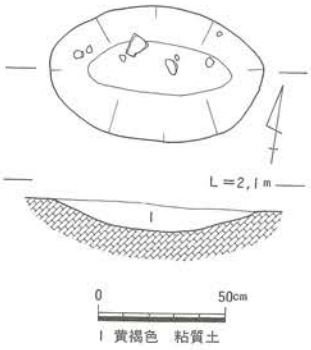
第125図　土坑244 実測図

㊵土坑245

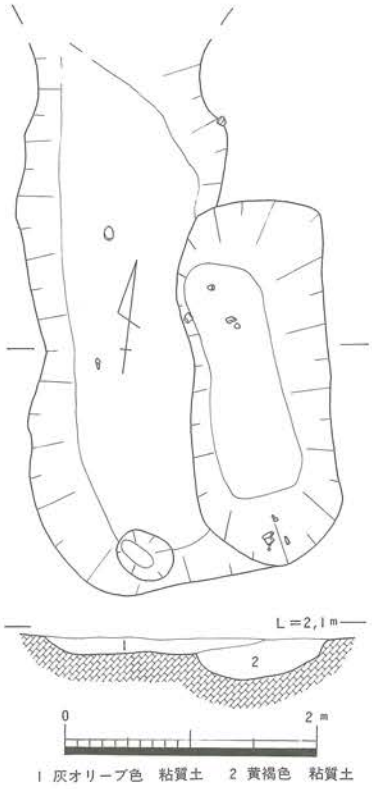
（ＳＫ245）

・遺構（第126図）

Ｅ調査区東部やや北寄りの地点で検出した、長径0.84m・短径0.53m・深さ0.1mの長円形の小



第126図　土坑245 実測図



第127図　土坑246 実測図

土坑である。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。

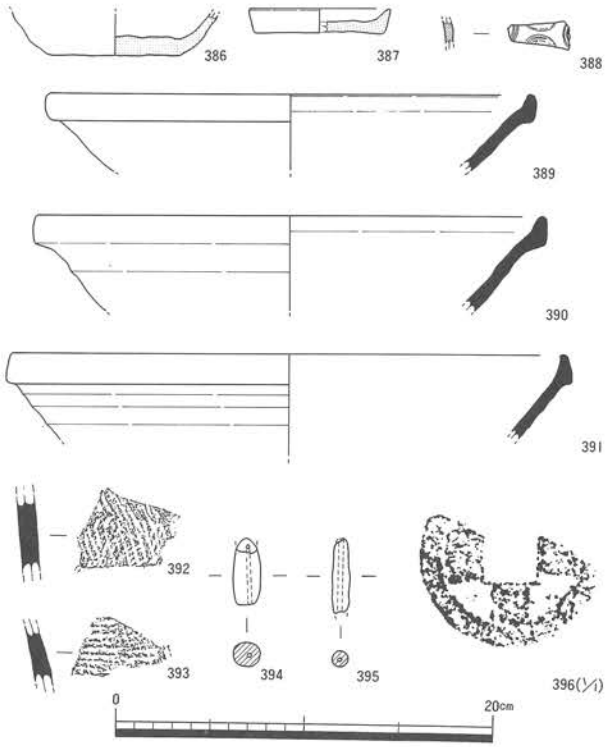
㊶土坑246（ＳＫ246）

・遺構（127図）

Ｅ調査区中央部やや北寄りの地点で検出。不整形の土坑で、北端は調査区外に延びる。壁面に近い部分は土色が変色しており、掘り方の確認が困難であった。

・遺物（第128図、表60、図版32）

出土遺物は土師質の杯・皿・鍋、瓦器の椀、瓦質土器（火鉢か）、陶器のこね鉢・甕、青磁の碗、土錘、砥石、銅銭、鉄釘など多様なものが出土しているが、図示可能なものは限られている。



第128図　土坑246 出土遺物

386は土師質の杯、387は土師質の皿である。388は青白磁の梅瓶の小片である。

389～391は魚住焼のこね鉢で、26.8cm～28.6cmの口径を持ち、いずれも口縁端部を上下に拡張する。全体にロクロナデが施されるが、391の体部外面のナデは粗い。

392・393の甕はともに体部の小片で、全体の形状等は不明。392の外面にはやや粗雑な斜格子状の叩き、393の外面には平行条線の叩きが施される。ともに産地は特定し難い。

394・395は土錘。396の銅銭は銭種不明である。

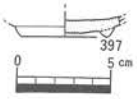
㊷土坑247（ＳＫ247）

・遺構（第130図）

Ｅ調査区西北部で検出されたほぼ長方形を呈する土坑で、長辺2.38m・短辺1.03m・深さ0.36mを測る。土坑248と重複するが、新旧関係は不明。

・遺物（第129図、表61）

出土遺物は土師質土器・瓦器・陶器・白磁の細片約50点があるが、図示し得たのは土師質の椀（397）のみである。

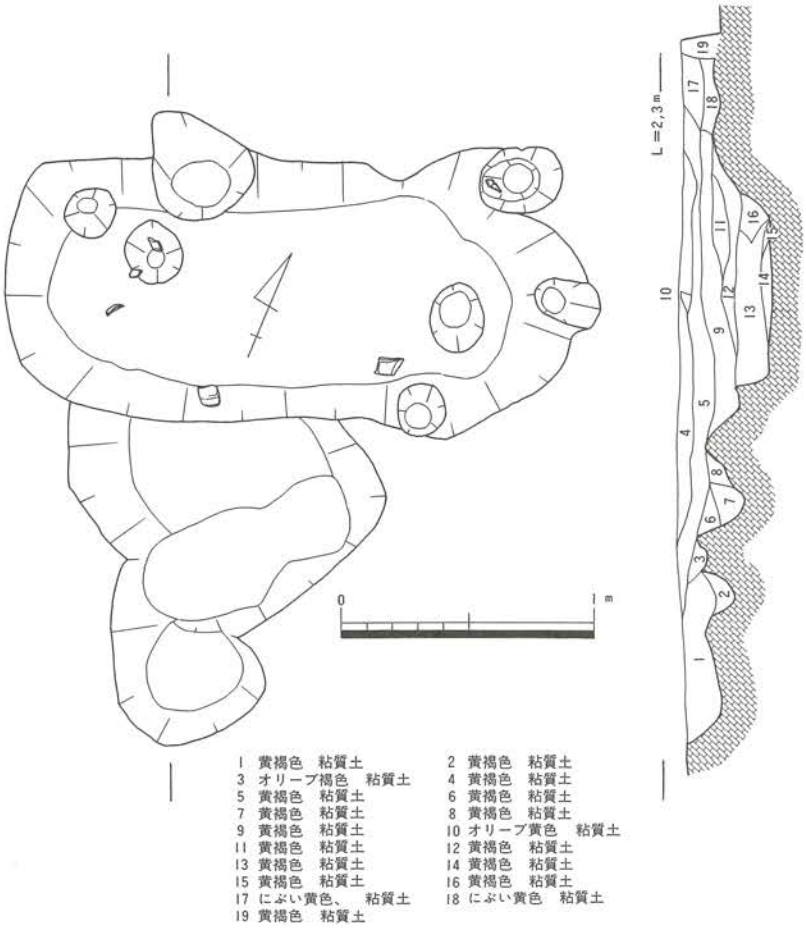


第129図　土坑247 出土遺物

㊸土坑248（ＳＫ248）

・遺構（第130図）

土坑247と重複。２～３の小土坑が重複する可能性あり。形状・規模不明。



第130図　土坑247・248 実測図

・遺物

図示可能な遺物はない。

㊹土坑249（ＳＫ249）

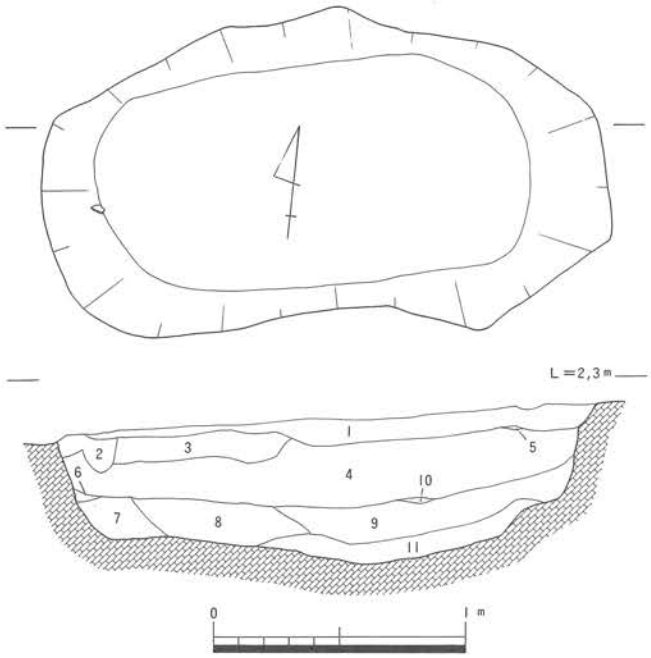
・遺構（第131図、図版22）

土坑247・土坑248に隣接して検出。ほぼ長方形を呈し、長辺2.25m・短辺1.16m・深さ0.57mの規模である。形状・規模から考えて土壙墓の可能性が高いが、副葬品等の出土は見られなかった。

・遺物（第132図、表62、図版32）

出土遺物として土師質土器・陶器・白磁・鉄釘等の細片が約40点出土した。

398～400の土師質の杯はいずれも小片であるが、398は口径11.5cm・器高3.0cm・底径6.6cm、399は口径11.1cm、400は口径11.8cmに復原される。いずれも底部の切り離し方法は明瞭



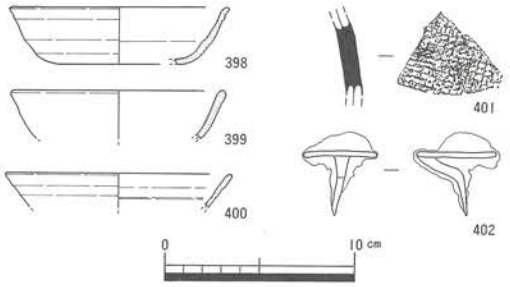
1 黄褐色　粘質土
2 黄褐色　粘質土
3 黄褐色　粘質土
4 黄褐色　粘質土
5 黄褐色　粘質土
6 黄褐色　粘質土
7 灰オリーブ色　粘質土
8 黄褐色　粘質土
9 灰オリーブ色　粘質土
10 黄褐色　粘質土
11 黄褐色　粘質土

第131図　土坑249 実測図

でないが、焼成及び胎土の特徴から見て、杯Cに分類される。

401は甕の破片。須恵質で外面にやや形の崩れた格子目の叩きを施す。産地は不詳。

402の鉄製品は鋲ないしは円形の鉄板に釘が錆付いたものかと見られる。



第132図　土坑249 出土遺物

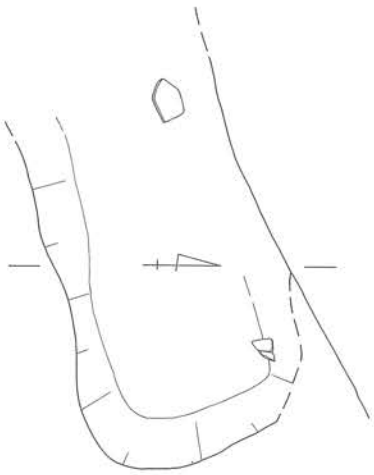
㊺土坑250（ＳＫ250）

・遺構（第133図）

Ｅ調査区西北隅で、壁面にかかる形で検出。正確な形状・規模は不明であるが、長方形状と見られる。溝235と重複。

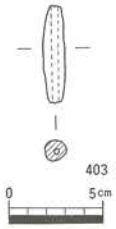
・遺物（第134図、表63）

出土遺物は土師質の杯・鍋などの細片が約25点出土したが、図示し得たのは土錘（403）1点のみである。この土錘は長さ5.2cm・胴径1.2cm・重さ5.8gの小形の管状土錘で、全体に丁寧なナデを施している。



1 黄褐色 粘質土
2 黄褐色 粘質土

第133図 土坑250 実測図

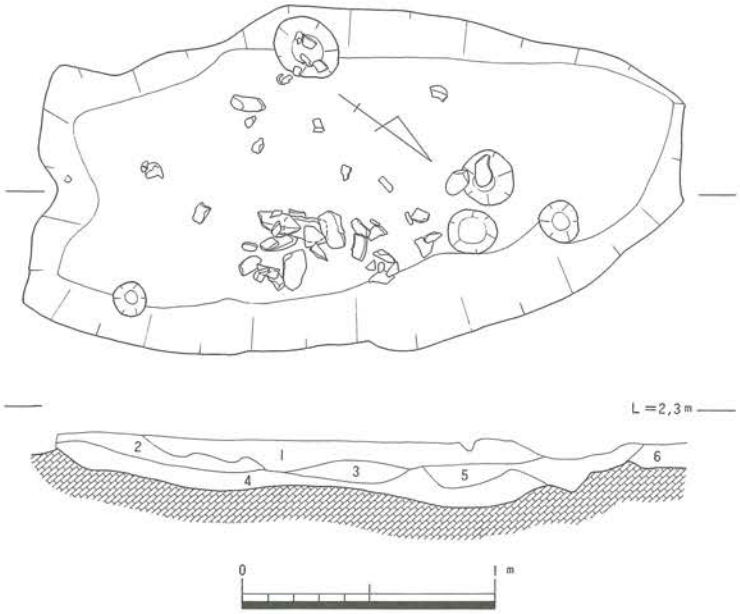


第134図 土坑250 出土遺物

㊻土坑251（ＳＫ251）

・遺構（第135図）

Ｅ調査区西部で検出した不整形な形状の土坑で、長軸2.64m・短軸1.35m・深さ0.25mを測る。埋土には炭化物が多く含まれていた。北端部で井戸201に切られる。



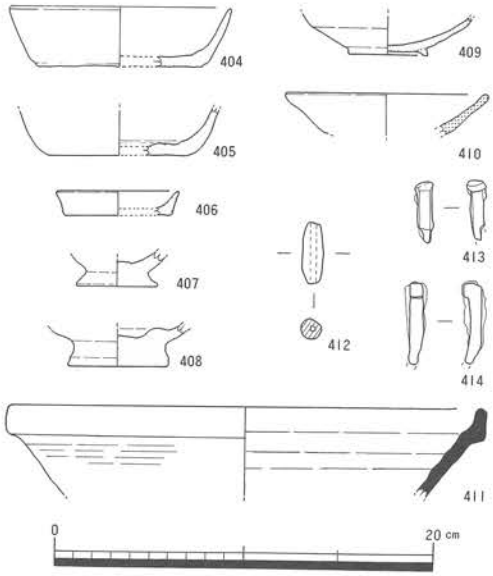
1 黄褐色 粘質土　2 黄褐色 粘質土　3 黄褐色 粘質土
4 黄褐色 粘質土　5 黄褐色 粘質土　6 黄褐色 粘質土

第135図 土坑251 実測図

・遺物（第136図、表64、図版32）

出土遺物としては土師質土器・瓦器の細片が約75点出土している。

404・405の杯はいずれも杯ＡＩａのタイプ。404は口径11.5cm・器高3.2cm・底径8.7cmに復原され、体部・口縁部はほぼ直線的に立ち上がる。406～408の皿には皿Ａ（406）と皿Ｃ（407・408）がある。406は口径6.5cm・器高1.3cm・底径5.6cmに復原され、口縁部はやや外反気味。407は高台付の杯の可能性もある個体である。底部はヘラで切り離される。408の高台付皿の底部には静止糸切り痕がわずかに残る。409は土師質の椀である。



第136図　土坑251 出土遺物

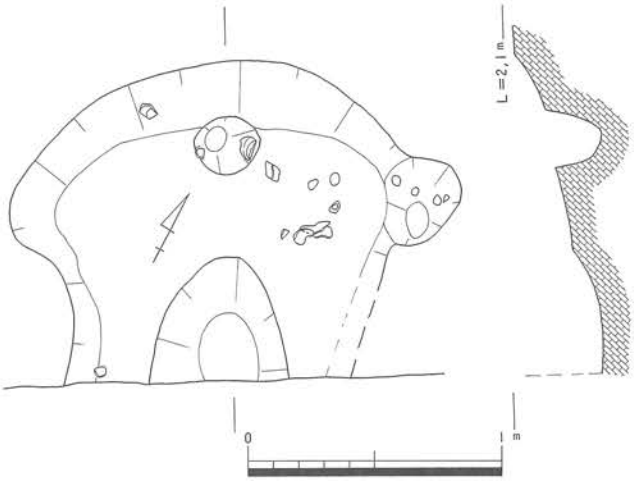
410は瓦器椀。

411のこね鉢は口径25.4cmに復原される。口縁端部を上下に拡張し、やや幅広の端面を平坦に仕上げる。口縁端面には重ね焼による自然釉がかかる。

412は土錘である。413・414は鉄釘で、ともに頭部が前方に張り出し、角頭形を呈する。

㊼土坑252（ＳＫ252）

・遺構（第137図）



第137図　土坑252 実測図

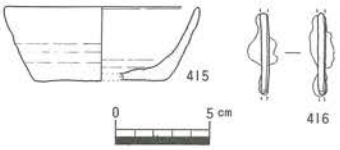
Ｅ調査区西部の南壁にかかる形で検出。全体の形状・規模については不明であるが、検出分については長軸1.65m・短軸1.21m・深さ0.17mを測る。

・遺物（第138図、表65）

出土遺物は土師質土器・陶器・輸入陶磁器などの細片が約265点出土したが、図示し得たのは土師質の杯（415）、鉄製品

（416）のみである。

415の杯は口径10.4cm・器高4.0cm・底径7.0cmに復原され、やや深めの製品である。底部の切り離しは不明であるが、色調・胎土等から見て、杯ＡＩａに属すると見られる。

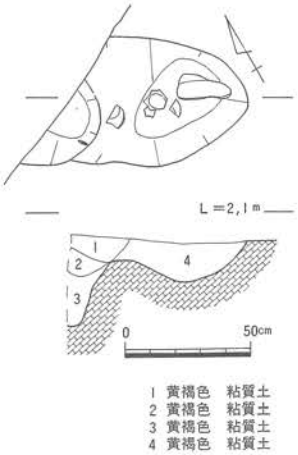


第138図　土坑252 出土遺物

㊽土坑253（ＳＫ253）

・遺構（第139図）

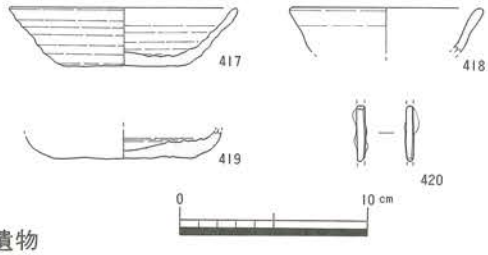
Ｅ調査区東部の北壁にかかる形で検出。全体の形状・規模は不明。溝238を切る。



・遺物（第139図、表66、図版32）

遺物は土師質土器の細片が約35点出土している。

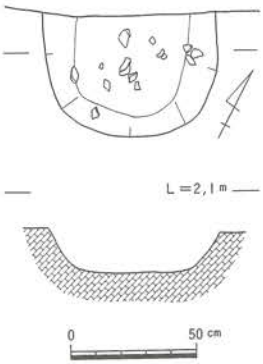
417～419は土師質の杯である。417は口径12.0cm・器高3.1cm・底径6.4cmを測る。体部・口縁部内外面には成形による凹凸が顕著に見られる。底部は回転ヘラ切りで切り離され、全体に回転によるナデを施す。色調は灰白色で、杯ＦＩの典型例である。420は鉄釘である。



第139図　土坑253 実測図・出土遺物

㊾土坑254（ＳＫ254）

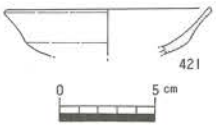
・遺構（第140図）



Ｅ調査区東部の北壁にかかる形で検出。全体の形状・規模不明。溝233と重複する。

・遺物（第140図、表67）

出土遺物は少なく、土師質土器片などが約10点出土したのみ。図示した土師質の椀（421）は体部から口縁部にかけての破片である。体部外面に稜を持つ。口縁部外面はヨコナデ、内面全体に丁寧なナデが施される。口径10.7cmに復原される。



第140図　土坑254 実測図・出土遺物

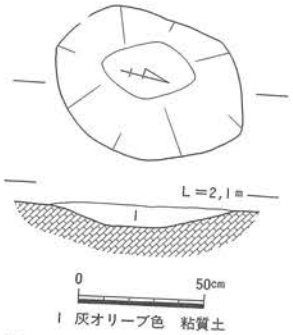
⑤⓪土坑255（ＳＫ255）

・遺構（第141図）

Ｅ調査区西南隅で検出。上部は削平を受ける。形状は長円形で、検出面で長径0.8m・短径0.56m・深さ0.08mを測る。

・遺物

出土遺物はない。



第141図　土坑255 実測図

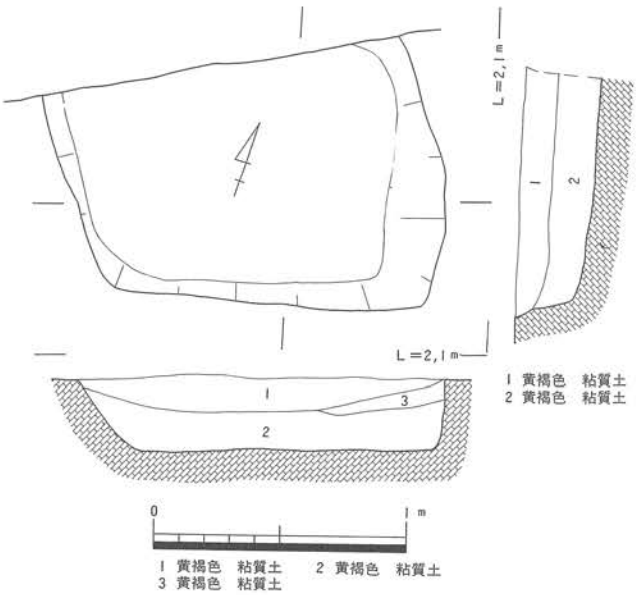
⑤①土坑256（ＳＫ256）

・遺構（第142図）

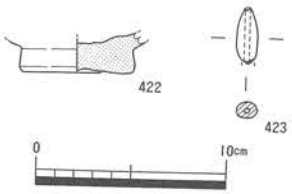
Ｅ調査区中央部の北壁にかかる形で検出。全体の形状は正確には不明であるが、長方形の可能性が高い。規模は検出分で、長辺1.48m・短辺1.24m・深さ0.28mである。溝238と重複する。

・遺物

出土遺物は土師質の杯・椀・鍋、鉄釘などの細片が約30点出土しているが、図示可能なものはない。



第142図　土坑256 実測図



第143図　土坑257 出土遺物

⑤②土坑257（ＳＫ257）

・遺構

Ｅ調査区東端部の溝222・溝232間で検出。遺構の存在は確認されたが、大半が二本の溝に削平を受け、全体の形状・規模は不明である。

・遺物（第143図、表68）

出土遺物は少なく、土師質の杯・皿・椀・鍋などの細片が約20点出土。図示した皿（422）

は高台底部の径が5.7cmで、回転糸切り痕を留める。423は小形の土錘である。

㊸土坑258（ＳＫ258）

・遺構

Ｅ調査区東端部で、溝222に切られる形で検出。全体の形状・規模不明。

・遺物

出土遺物少なく、図示可能なものはない。

㊹土坑259（ＳＫ259）

・遺構（第144図）

Ｅ調査区西端部で検出。第１遺構面の溝102に切られ、残存するのは一部のみで、全体の形状・規模は不明。

・遺物

出土遺物はない。

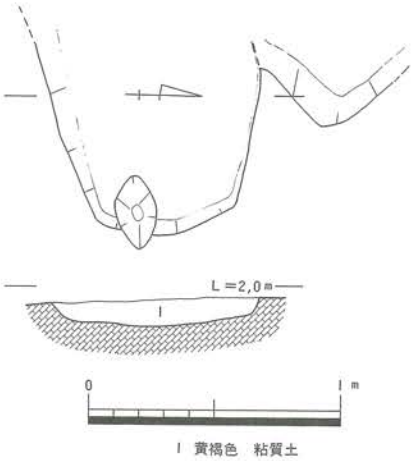
㊺土坑260（ＳＫ260）

・遺構（第145図）

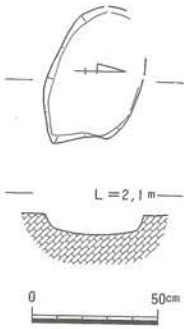
Ｅ調査区西北隅で検出。壁面にかかり、全体の形状・規模は不明。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。



第144図　土坑259 実測図

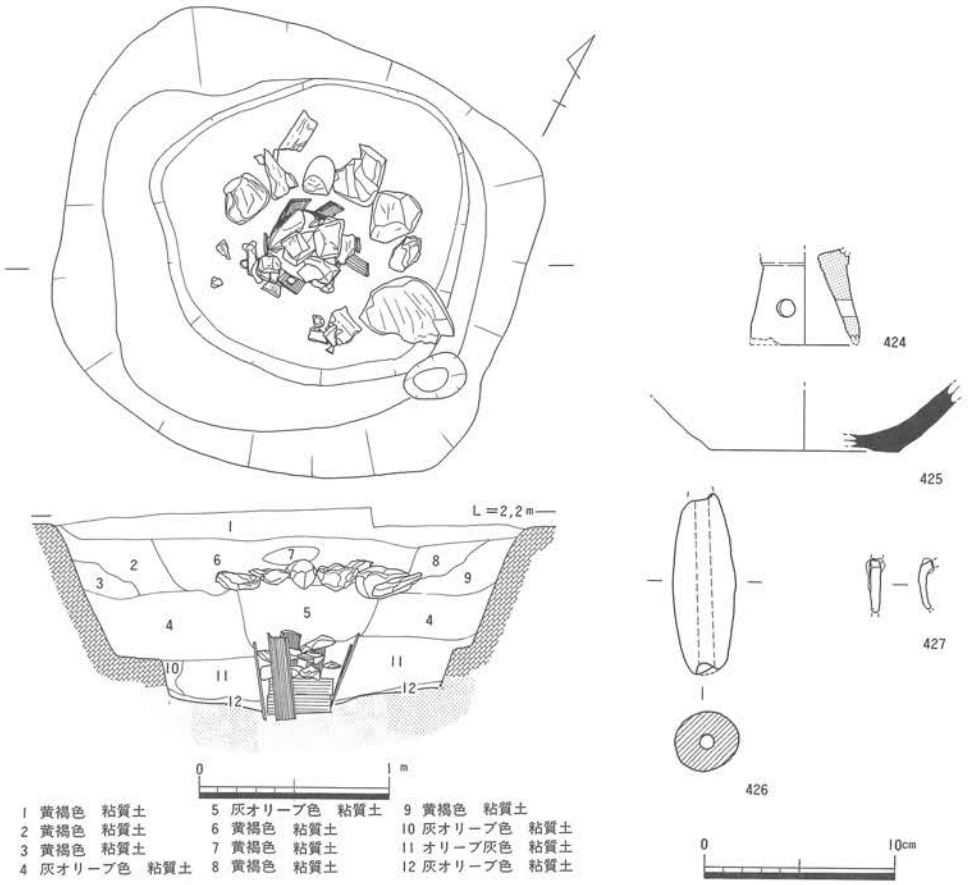


第145図　土坑260 実測図

（４）井戸と出土遺物

①井戸201（ＳＥ201）

・遺構（第146図、図版23・24）



第146図　井戸201 実測図・出土遺物

E調査区西部のほぼ中央部で検出。形状はやや四角張った円形で、直径2.4m・深さ約1mを測る。構築状況はまず湧水層である砂礫層まで掘り込み、直径約65cm・高さ約10cmの曲物を2段に積んで、井筒とし、その外周部に幅10cm・厚さ1cm・長さ41～46cmの板材を計6枚立てめぐらす。当初はこの板材の上部まで、曲物が数段にわたって積まれていたとも考えられるが、詳細は不明であった。この板材の上端部の周囲に拳大から人頭大の石を円形に配置する。この石列は遺存状況が良好ではないが、当初から1段程度の石列であったと見られ、肩の崩壊を防ぐための施設であったと考えられる。

・遺物（第146図、表69、図版32）

出土遺物は比較的少なく、土師質の杯・椀・鍋、瓦質の鍋、土錘などの細片が約35点出土したのみであり、図示可能なものは少ない。

424は土師質の高杯ないしは器台の脚部と見られる。摩耗が著しいことなどから、井戸の

掘り方を掘ったときなどに、下部の砂層から出土した遺物であった可能性が高い。

425はこね鉢である。瓦質に近い焼成で、底部にはわずかに回転糸切り痕を留める。外面は黒色を呈するが、内面は灰色である。

426は土錘である。この土錘は当遺跡出土の土錘の中では最も大形のもので、長さ9.5cm・胴径3.4cm・重さ82.6gを測る。

427は鉄釘の断片である。

（5）自然流路と出土遺物

①自然流路

・遺構（第147図、図版15～18）

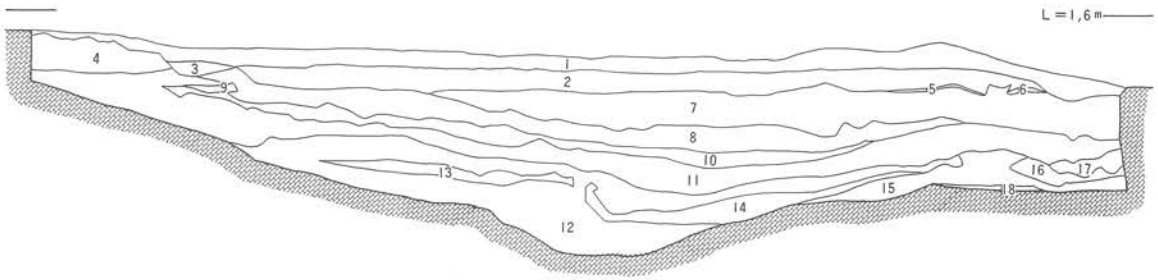
C・D両調査区の西端部で検出。この流路はB調査区の調査の段階では確認できなかったが、C調査区の調査において、まず流路の落ち込みを確認し、掘り下げを行った。この段階では一部拡張を行ったものの、西岸を検出するには到らず、D調査区の調査において、さらに西に10m拡張し西岸の検出に努めた。その結果幅17.5m・深さ約2.15mの規模を持つ流路であることが確認された。C・D両調査区において検出したのは約23m分であった。流路の方向はほぼ南北方向であり、地形から見て、本来は南から北へ流れていたと見られる。しかし、埋土は水分を多く含む青灰色粘土層・砂層の互層から成り、沼状を呈していたと考えられる。底は湧水帯のある下部の砂礫層に達しており、調査中も湧水が絶えない状態であった。

・遺物（第148～151図、表70、図版33～35）

出土遺物はこれまでの遺構等から出土した遺物が、大まかにいって中世前半の年代感を示すのに対して、この流路から出土するものは中世後半の年代感を示しており、明らかに時期が異なっている。

428～430は土師質の皿である。いずれも完形ないしはほぼ完形に復原される。428は口径10.6cmとやや小形で、やや厚手の作りであるが、429・430はともに13.4cmと口径がやや大きく、器壁が極めて薄い。調整はいずれも体部外面下半部から底部にかけて丁寧にユビオサエし、内面をヨコナデで仕上げる。ともに底部内面周縁部を強くナデた後、末端を上方に引き上げた痕が明瞭に残る。いずれも在地の土器でなく、当時、京都を中心とする地域で使用された土器である。なお、429・430は2枚が合わせ口に重ねられた状態で出土したが、その内部から炭化物に混じって「永楽通宝」1枚を含む2枚の銅銭が出土した。こうした出土状況から見て、この2枚の皿は何らかの呪いに使用されたものと考えられる。

431～436は輸入陶磁器である。431・433は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－5類で体部外面にはいずれも蓮弁文が施されている。431は器肉の厚い底部と、やや丸みのある畳付け部と外側に張り出し気味の高台を持ち、内面および内底面に幾何学的な沈線文が施されている。432と434は



1 灰色　粘質土　2 灰色　粘質土　3 灰色　粘質土　4 灰オリーブ色　砂質土
5 灰オリーブ色　粘質土　6 灰オリーブ色　粘質土　7 灰色　粘質土　8 灰色　砂質土
9 灰オリーブ色　砂質土　10 灰オリーブ色　粘土　11 暗オリーブ色　粘質土　12 灰色　粘土
13 灰色　粘土　14 灰色　粘土　15 灰色　砂質土　16 灰オリーブ色　粘質土
17 暗オリーブ色　粘土　18 灰色　粘質土

第147図　自然流路土層図

青磁細蓮弁文碗に属すると考えられるものである。432は肉厚の底部と畳付け部が丸く比較的高い高台を持ち、体部外面には非常に細い沈線によって細蓮弁文が描かれている。また、434も432同様蓮弁文が平板な線刻になった蓮弁文としては著しく簡略化されたタイプのものである。435と436は景徳鎮窯系と考えられる白磁皿である。435は断面三角形の高台からやや内湾気味に外上方に延びる体部と、細かく波状に波打った口縁部を持ち、体部の外面には細い沈線文が、また内部には陰刻の蓮弁文が施されている。436の皿は畳付けの端部が鋭く、かなり内傾した断面三角形の高台部を持っている。

437・438は土師質の鍋である。437の鍋は口縁部を拡張し、下端部を鍔状にするタイプで、鍋ＣⅠに分類される。底部外面には粗い目の格子目叩きが施される。438の鍋は内面ヘラケズリ、外面には粗い平行叩きが施される。底部は平底状である。全体に器壁は薄い。外面には煤の付着が著しい。鍋ＣⅡである。

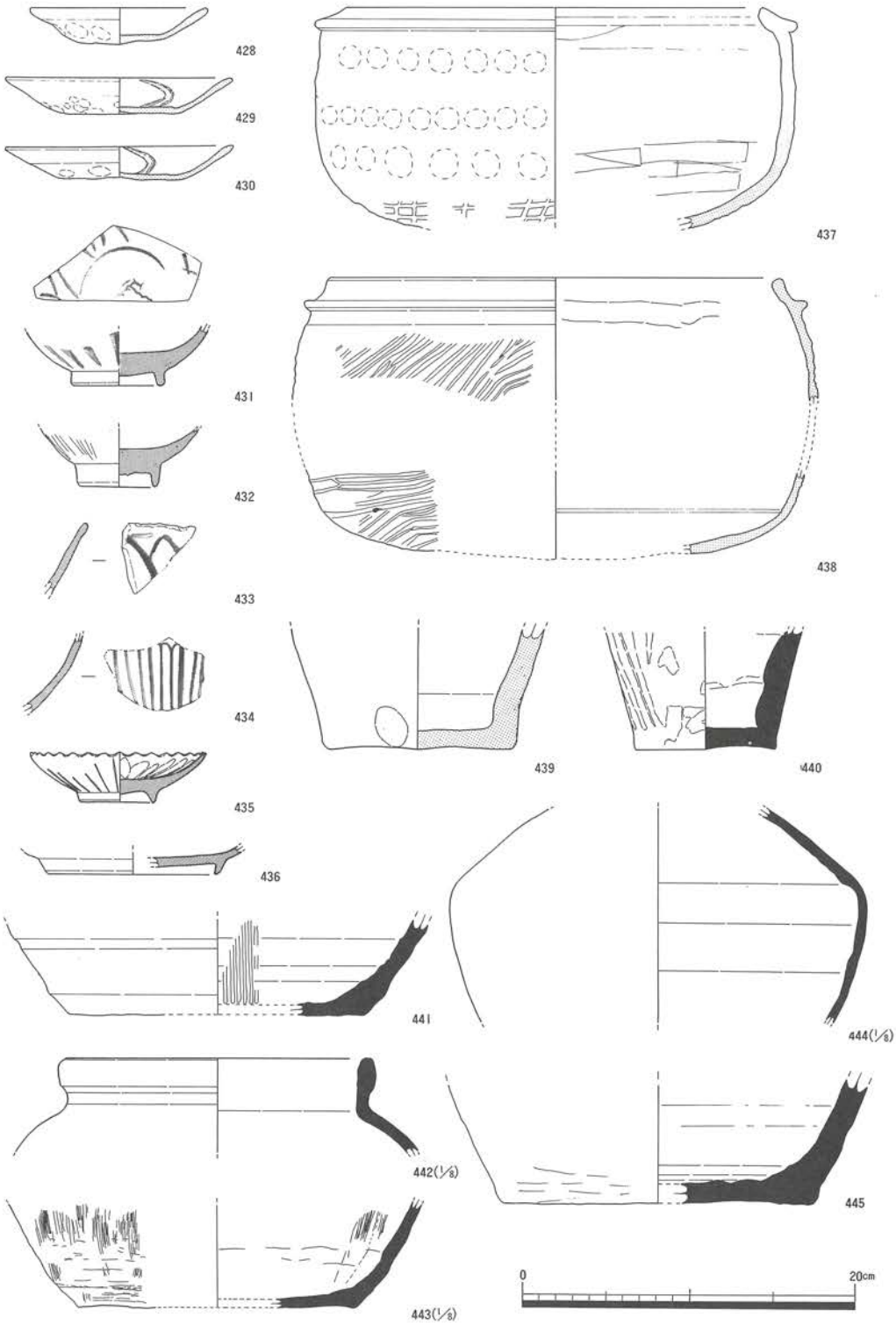
439は鉢と推定される。胎土は砂粒を多量に含み、色調は淡黄灰色を呈する。土師質として取り扱ったが、焼き締まっており、陶器の焼成不良品である可能性もある。

440～445は国内産陶器である。440は瀬戸焼。全体の器形は不明であるが、梅瓶の可能性が高い。内面には粘土の巻き上げ痕と継目部のユビオサエが明瞭に認められる。体部外面には淡黄褐色釉が薄く施される。441は備前焼のすり鉢である。底部の破片であるが、内面には７条以上を単位とする櫛描条線が施される。体部内外面はヨコナデ、底部内面はナデで仕上げられ、底部外面は未調整。442の甕は玉縁状の口縁を持つ備前の大甕で、口径35.6㎝を測る。443・445も備前の大甕の底部破片。444は大甕の肩部から胴部にかけての破片である。肩部に班点状に緑色が混じる自然釉が厚くかかる。胎土・器形から常滑焼と見られる。

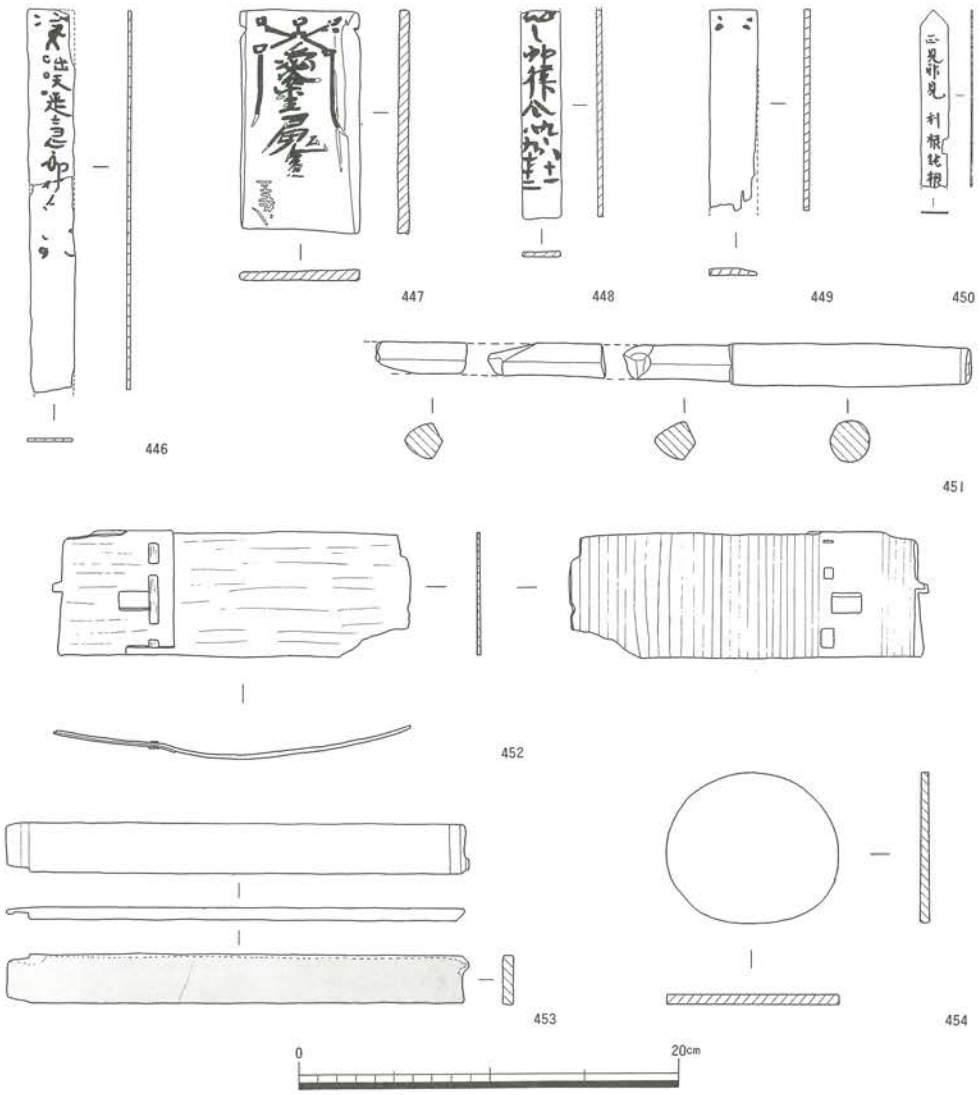
446～463は木製品類である。木製品類は大きく分けて、墨書木札類・日常用具類・工具類・その他に分かれる。

墨書木札類には呪符木簡（446～449）と柿経（450）がある。446は表面を平滑に削った長方形の薄板に「咄呋啞急々如□□」の呪句を墨書したもので、ほぼ完存するが、中央部で折れた状態で出土した。447はやや厚みのある板材を使用し、上端部に一対の切欠きをいれる。丁寧に削り整えた表面にやや不鮮明ながら「愛染王魔急 ▭ 九・八十一 二十七九八」の墨書が認められる。448は上半分を欠失するが、「（々）如律令 九丶八十一 八九七十二」の墨書が鮮明に残る。449は下半分を欠失。水点と見られる墨痕がわずかに認められる程度で、墨書内容については不明。450は極めて薄いへぎ板を用いた柿経で、頭部を圭頭状に作る。墨書は極めて鮮明で、「正見邪見利根鈍根」と判読できる。これは妙法蓮華経薬草　品の一節であり、同経を書写した柿経の一枚であることを示している。

次に、日常用具類であるが、これには柄杓の側板と見られるもの（452）・漆塗の折敷の側板（453）・柄杓の底板に使用されたと見られる長円形の板（454）・曲物容器の蓋と推定され



第148図　自然流路出土遺物(Ⅰ)



第149図　自然流路出土遺物（２）

写真８　作業風景（２）

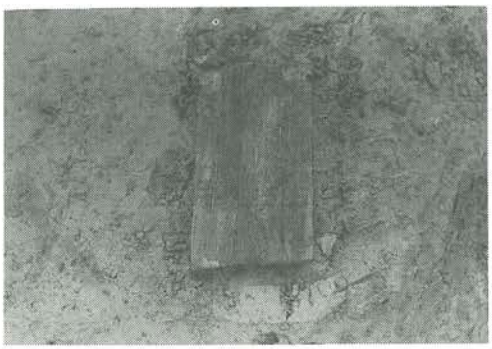
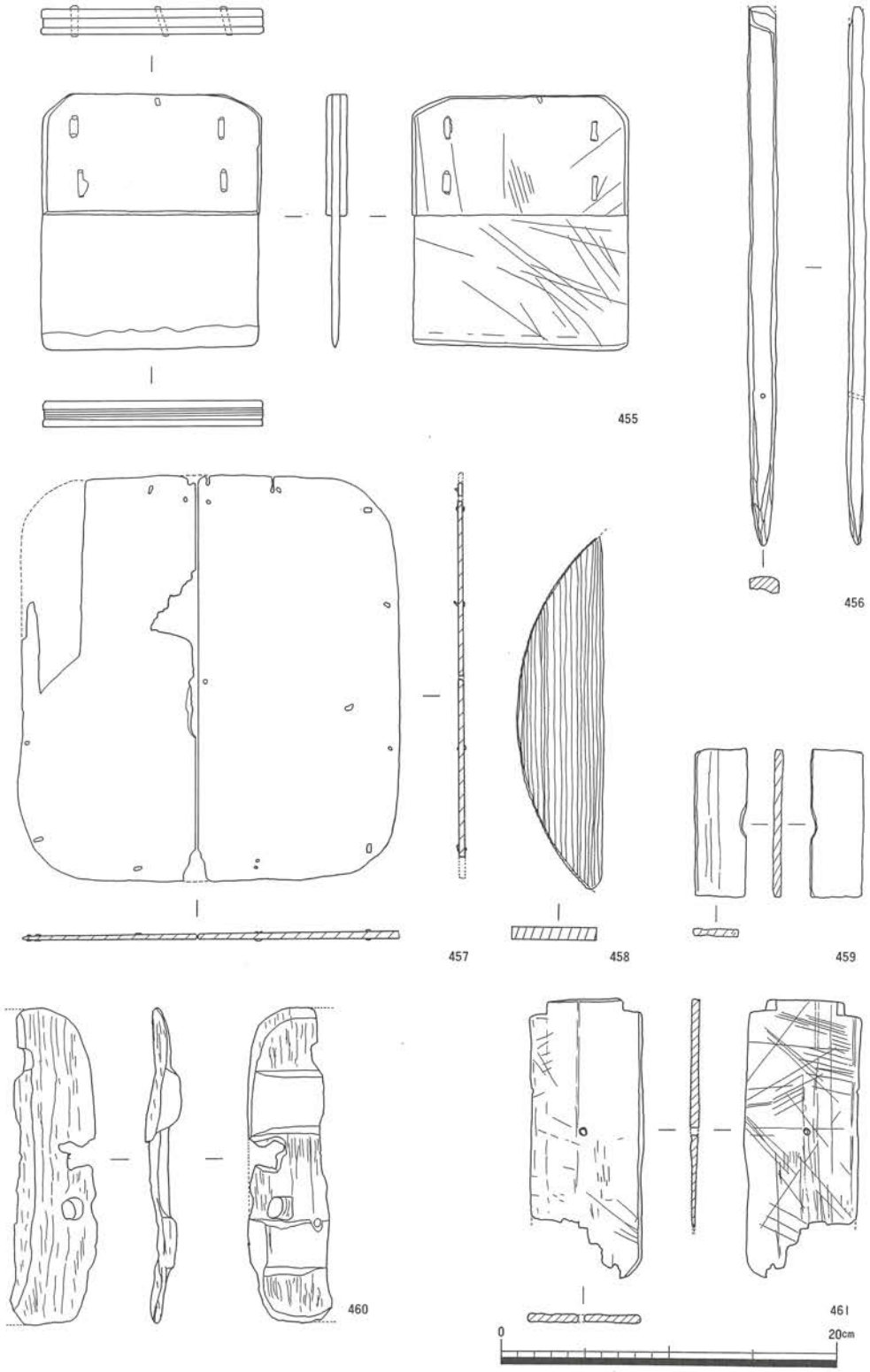


写真９　「呪符木簡」出土状況



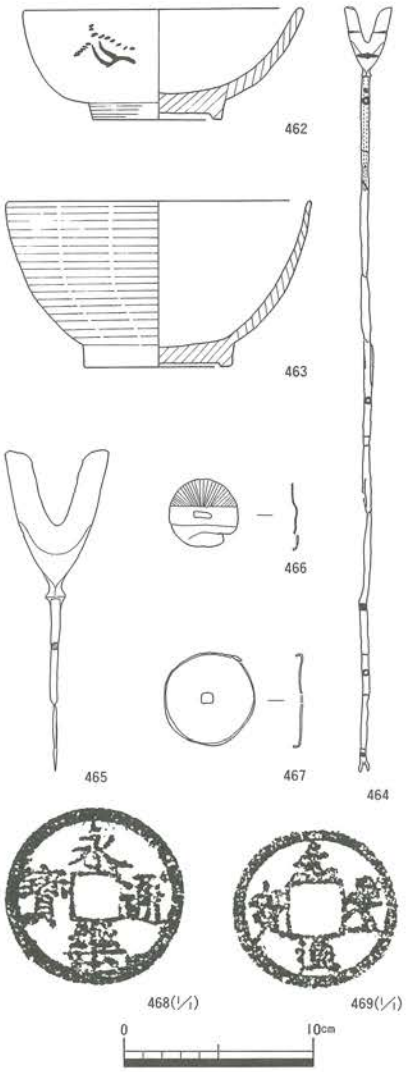
第150図　自然流路出土遺物（３）

るもの（457）・曲物の底板（458）・下駄（460）・漆椀（462・463）などがある。452・460は腐食が激しい。453の側板の両端部には合い欠き部が作られる。457は隅を丸くした正方形に近い形状であるが、2枚の薄板を使用し、中央部で桜皮によって綴じ合わせたもののようである。周辺部には側板を固定するための孔と桜皮が認められる。462の漆椀には外面に朱漆で松の文様を描く。

工具と思われるものに455の製品がある。これは柄と身に分かれ、身部は四角形の一辺を尖らせ、柄部は身部の板を両側から桜皮で綴じ合わせて作る。用途は特定し難いが、ハケ状の工具と推定される。

その他の木製品としては刀形（451）、串（456）、加工板（459・461）などがある。

464は矢である。この矢は粘土中にほぼ水平の状態で埋まり、土圧による変形・折損が見られたものの、矢羽を固定する巻糸の一部も認められるなど、遺存状態は比較的良好であった。但し、鉄鏃の柄部は腐食のために折損し、装着部も腐食が進み、鉄鏃をどのように固定していたかは不明であった。また、鏑は出土していない。鉄鏃も含めた全長は83.0cmで、柄部の径は約1.0cm。矢竹を使用しており、節間は30～35cmである。鉄鏃については後述する。



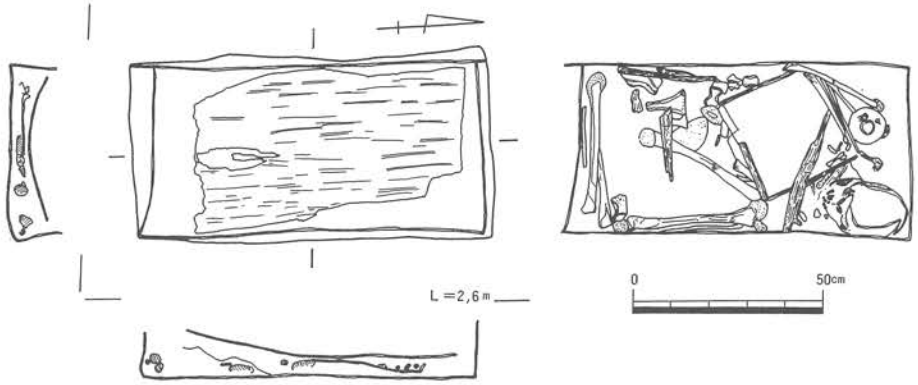
第151図　自然流路出土遺物（4）

465～469は金属製品である。465は雁股の鉄鏃。この鉄鏃は前掲の矢に装着した状態で出土したもので、茎が腐食のため折損するが、残存長は16.8cmで、身部の最大幅は5.5cmを測る。466は銅製の筒状容器の蓋と見られる金具。径4.8cmで、中央部に方形の穴が穿たれていることから、摘みが取付けられていたと見られる。467は装飾金具と見られる金具で、放射状の刻線が施される。468・469は銅銭である。この銅銭はすでに述べたように土師質の皿（429・430）の中から出土したもので、468は「永楽通宝」、469は「元豊通宝」である。「永楽通宝」の初鋳年は1408年であるから、この自然流路の埋没時期が少なくとも15世紀初頭以後のことであったことを示している。

（6）その他の遺構と出土遺物

①木棺墓

・遺構（第152図、図版4）



第152図　木棺墓実測図

B調査区西端で検出された。長辺0.88m・短辺0.44m・深さ0.15mの木棺に人骨のほか、折敷1・漆椀1が副葬される。人骨は二次埋葬と見られ、大腿骨は揃えられて、棺の南に東西に据えられていた。頭骨は棺の北東の隅に位置する。検出された地点はC・D調査区で検出した自然流路の延長上にあたり、流路が埋没した後に木棺が埋葬されたと考えられる。埋葬時期は特定し難いが、戦国期から近世期にかけての墓の可能性が高いと思われる。

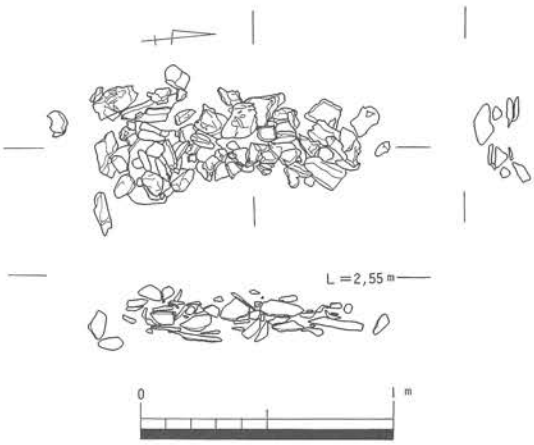
・遺物

副葬品として漆椀・折敷があるが、図示できなかった。

②集石遺構201（SX201）

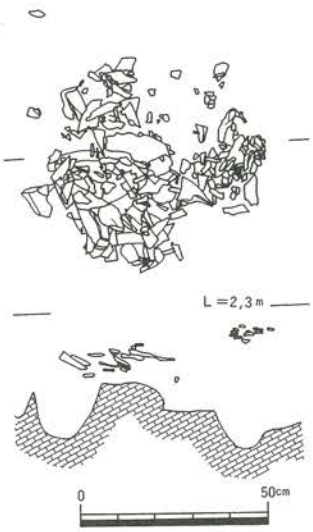
・遺構（第153図、図版2）

A調査区で検出。拳大から人頭大よりやや小さい片岩・砂岩の角礫が長さ約1.3m・幅約0.5mの範囲に集中して検出されたが、土器の混入はほとんど見られなかった。墓の可能性が推定されたが、埋葬施設等は検出されず、性格については不明とせざるを得ない。なお、集石を除去後、その下部で、溝219を検出したことや検出面のレベルから考えて、2次調査での第1遺構面上の遺構に対応する遺構と考えられる。

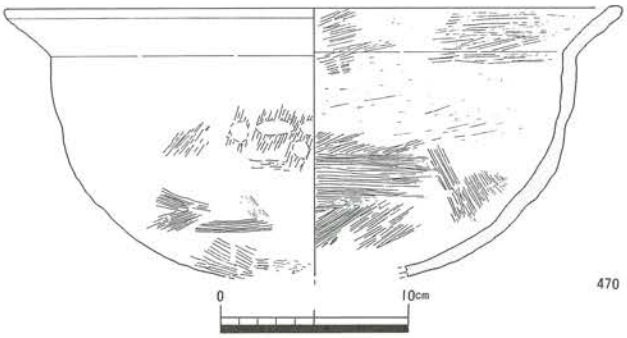


第153図　集石遺構201 実測図

・遺物



第154図　集石遺構202 実測図



第155図　集石遺構202 出土遺物

出土遺物はない。

③集石遺構202（ＳＸ202）

・遺構（第154図）

Ｃ調査区の東北隅で検出。確認調査時に土鍋片・炭化物が出土した地点にあたり、板状になった片岩の細片と炭化物が集まった遺構である。当初は火葬墓と考えられたが、調査段階ではすでに上部が削平された状態であったため、確認できなかった。なお、石を取り除いた部分にピットが検出されたが、これは直接集石とは関係がないと考えられた。

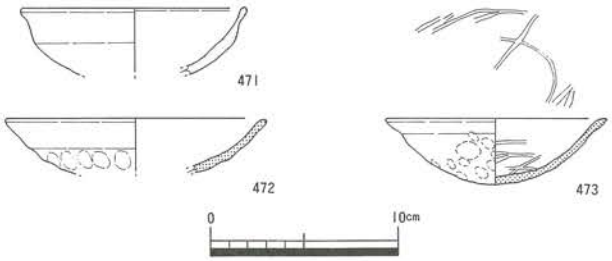
・遺物（第155図、表71、図版34）

出土遺物には土師質の鍋(470)などがある。この鍋は口縁部が外反するタイプのもので、鍋Ｂに分類される。口径は29.8cmに復原される。口縁部外面・体部外面には粗い縦方向のハケ目、口縁部内面・体部内面には横方向のハケ目が施される。なお、この鍋は当遺跡発見のきっかけとなった２回目の試掘調査時に取り上げられたもので、出土状況は正確には不明である。

④不明遺構

・遺構

Ｅ調査区の北壁の断面で確認した浅い土坑状と見られる遺構であるが、面的には調査できなかった。遺構の端の部分が壁面にかかったものと見られる。



第156図　不明遺構出土遺物

・遺物（第156図、表72）

壁面に突き刺さるかたちで見えていた遺物を取り上げたものである。

471は土師質の椀。472・473は和泉型の瓦器椀である。473は無高台で、体部はやるやかに内湾しながら立ち上がる。口縁部はわずかに外反する。体部内面には細い暗文が施される。

第4節　包含層出土遺物

当遺跡ではすでに述べてきたように2面にわたって遺構面が検出されたが、第1遺構面に伴う包含層は後世の水田化によって撹乱を受けているため、ここで取り上げる遺物は第1遺構面下層から第2遺構面直上までの層から出土した遺物を対象とする。ただ、これもすでに指摘したように1次調査においては工事によって包含層が大きく削平・撹乱を受けた状況下で調査に着手したため、遺物の取り上げも層序毎に行うことができず、中には重機の残土中から採集したものであっても、年代感に大きな懸隔が認められないものについては包含層出土として取り上げた。したがって、中世の遺物ではあっても、やや時期差が考えられる遺物も合わせて掲載したことをお断りしておきたい。

包含層出土遺物についても、基本的には本章第1節で述べたような分類が可能であるが、木製品は出土していない。したがってここでは、土師質土器、瓦器・瓦質土器、国内産陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品を取り上げた。掲載した遺物の総数は563点である。なお、紙幅の都合上、図示した個々の遺物の法量、形態・技法上の特徴については末尾の観察表に譲る。

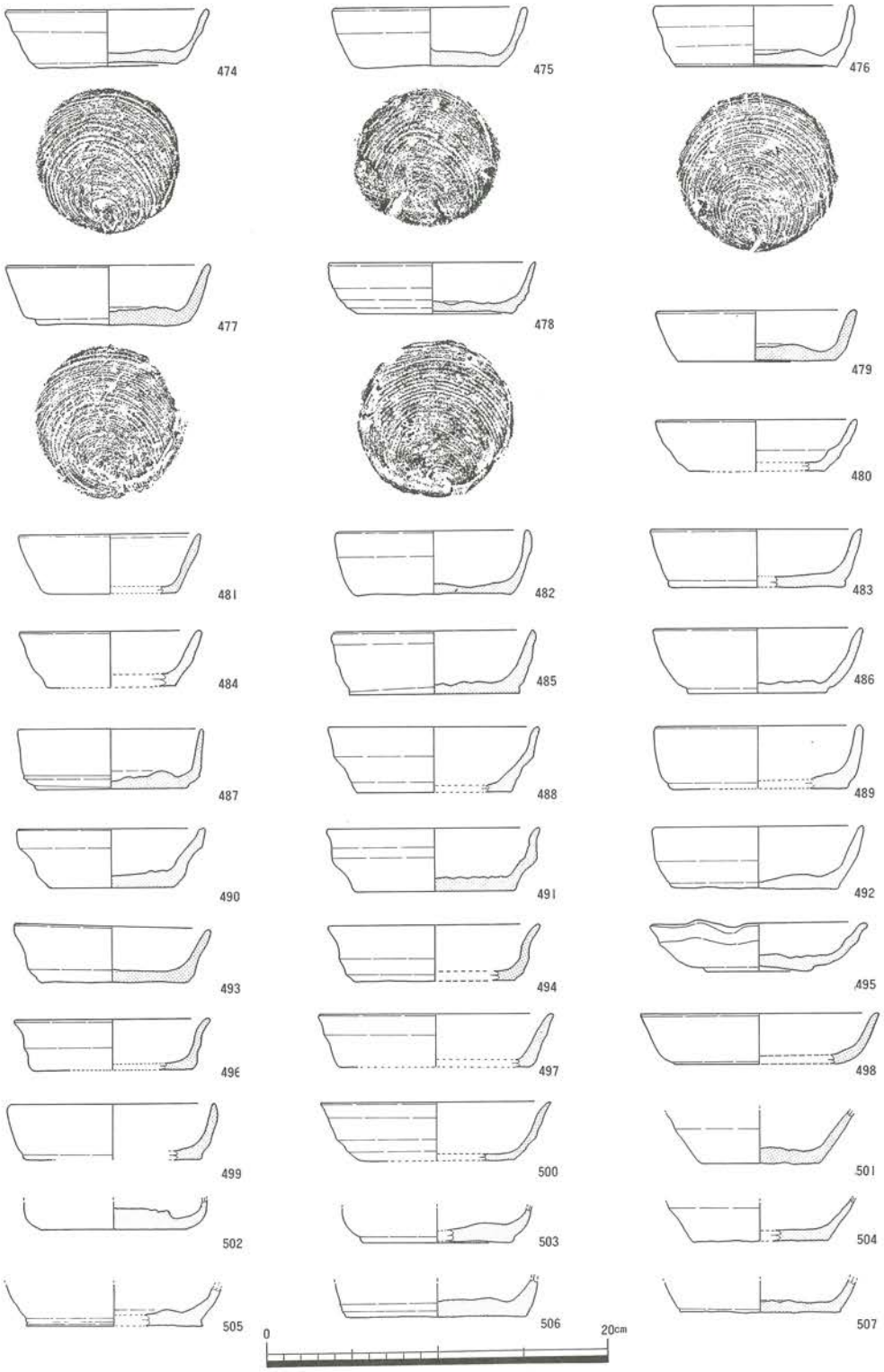
（1）土師質土器

土師質土器としては杯・皿・椀・鍋・羽釜・脚部・すり鉢・竈などがあり、総点数で276点を数える。これは掲載した包含層出土遺物の総点数の48％にあたる。

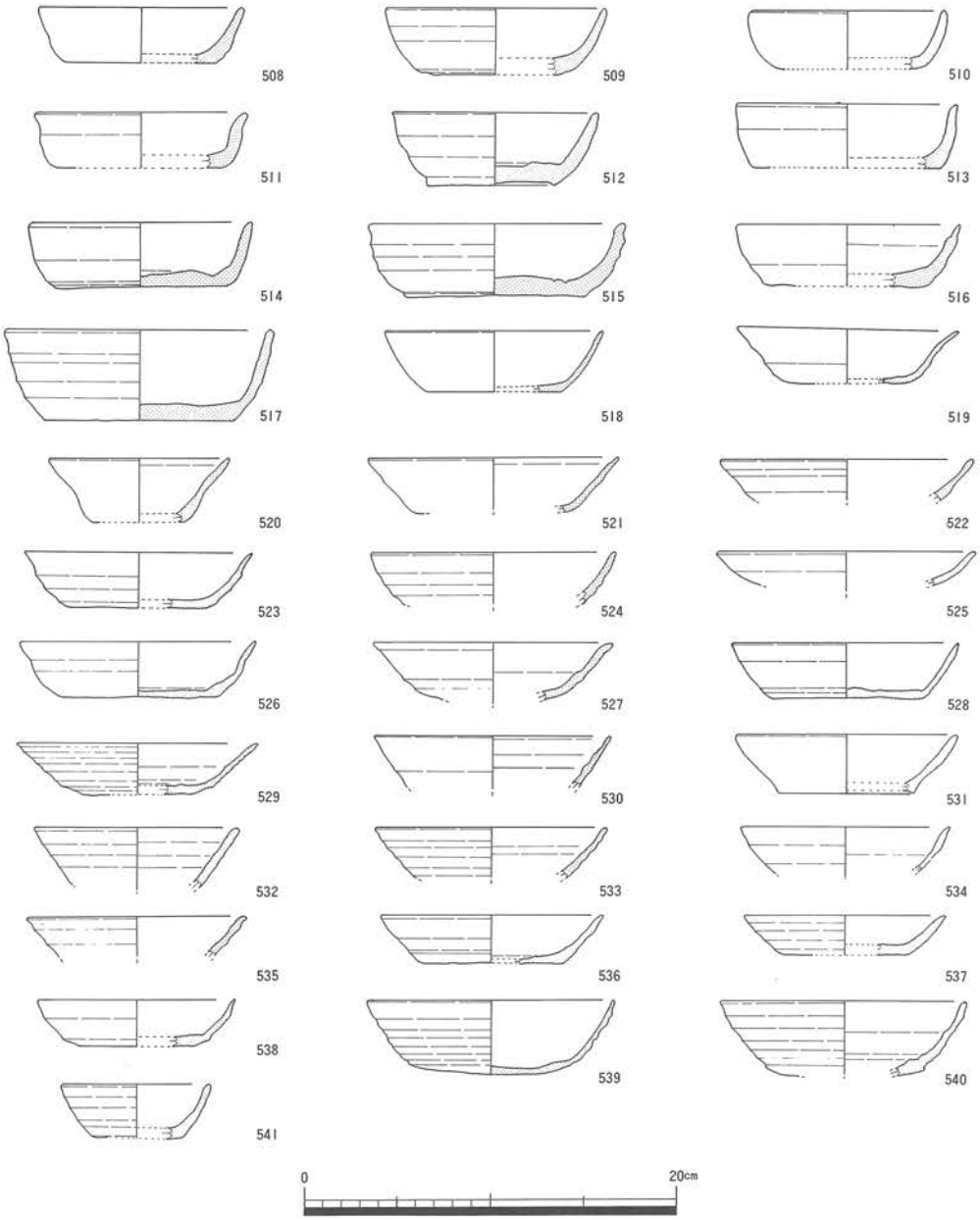
杯（第157・158図、表73、図版36・37）

杯は総数で68点（474～541）図示した。これは掲載した土師質土器の25％にあたる。包含層から出土した杯には、杯ＡⅠａ・杯ＡⅠｂ・杯ＡⅡ・杯Ｃ・杯Ｅ・杯ＦⅠ・杯ＦⅡａ・杯ＦⅡｂの各タイプのものがある。

杯ＡⅠａに分類される杯は39点であり、包含層出土の杯全体の57％を占め、最も量的に多い。39点のなかで、完形および完形に近いものは474～477・493・512・514の7個体である。この7個体の法量は口径11.0～11.8㎝・器高3.3～4.0㎝・底径7.5～9.3㎝の間に分布し、平均値は口径11.5㎝・器高3.5㎝・底径8.6㎝である。全体にこの杯ＡⅠａは、口径に対して底径の値が大きいという特徴が見られるが、これは体部から口縁部にかけて、かなりの急角度で立ち上がる形態に拠るものである。体部から口縁部は急角度で立ち上がるものが一般的であるが、その形態には直線的に延びるもの（474・477・481・487など）、やや内湾気味に立ち上がるもの（476・482・499など）、口縁部がやや外反するもの（494・495など）などがあり、比較的バリエーションに富む。また、底部周縁部および体部外面下部の粘土をヘラで削



第157図　包含層出土遺物(Ⅰ)－土師質 杯①－



第158図　包含層出土遺物(２)－土師質 杯②－

り取り、器壁の厚さを減じるものが多く見られ、中にはそのために底部と体部の境界付近に段が形成されるものも認められる（474・477・485・486など）など、微細な点では形態差が顕著である。

杯ＡＩａの底部は回転糸切りで切り離され、その痕跡を明瞭に留めるものが比較的多いが、その痕跡を丁寧にナデ消すもの（例えば486・490など）も認められる。調整は底部外面以外をロクロの回転を利用したナデで仕上げるが、その程度には精粗が見られる。全体に胎土は粗く、焼成も軟質のものが大半を占める。また、全般に色調は赤褐色系統を呈する。

515・517の２点は杯ＡＩｂに分類される杯である。515は口径13.7cmに復原されるやや大形の製品であり、底部の器肉が特に厚い。517はさらに大形で、口径14.0cm・器高6.9cmと、特に器高値が極めて大きい。

478・500は杯ＡⅡに該当すると見られる。478はほぼ完形で、口径12.0cm・器高3.0cm・底径8.9cmの法量を持つ。全体にヘラで器壁を減じており、口縁部は特に薄く作り、端部を尖り気味に仕上げている。500は焼成がやや堅緻な製品である。

518・519は杯Ｃである。518は体部やや内湾気味に立ち上がり、底部に明瞭な糸切り痕が認められる。519は極めて器肉が薄く、体部から口縁部が大きく外方に開く。521は底部の切り離し方法は不明であるが、色調・焼成から杯Ｃの可能性がある。

520は口径9.5cm・器高3.4cm・底径4.7cmに復原されるやや小形の杯で、口径に比して器高値が大きく、体部中位で屈曲して、外傾する口縁部に続く。特異な形態のものであり、ほかに類例がないが、杯Ｅとして細分した個体である。

522～541はいずれも杯Ｆ類である。このうち、541は杯ＦⅡａ、539・540は杯ＦⅡｂとして細分される。この３点以外は杯ＦＩに分類される。

杯ＦＩは16点あり、点数としては杯ＡＩａに次いで多い。いずれも底部ヘラ切りで、やや白っぽい色調を呈する。いずれも破片であり、正確な法量は得られないが、復原値によると口径10.3～13.9cm・器高2.2～3.0cm・底径5.7～8.2cmの間に分布し、全体に器高値が低いことが窺える。調整はロクロ回転によるナデで仕上げられるが、内外面に成形によると見られる凹凸を顕著に留めるものが目立つ。

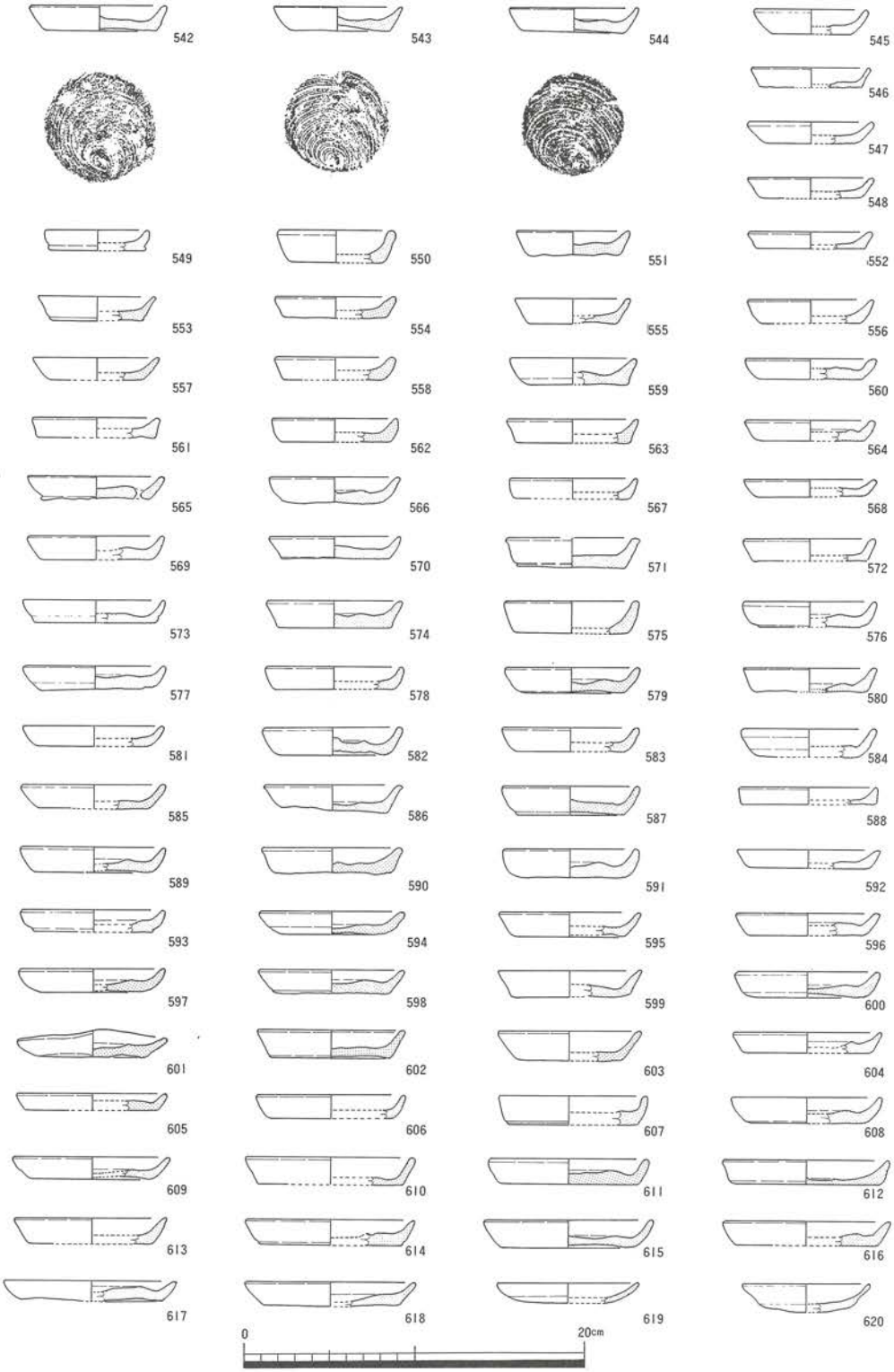
541は杯ＦⅡａと見られるが、器形が小さく杯ＦⅡａの中でもやや特異なものである。

539・540は杯ＦⅡｂと見られるが、いずれも底部は丸底状で、器高値も4.0以上と深いものである。ともに底部はヘラ切り後丁寧なナデを施したと見られる。

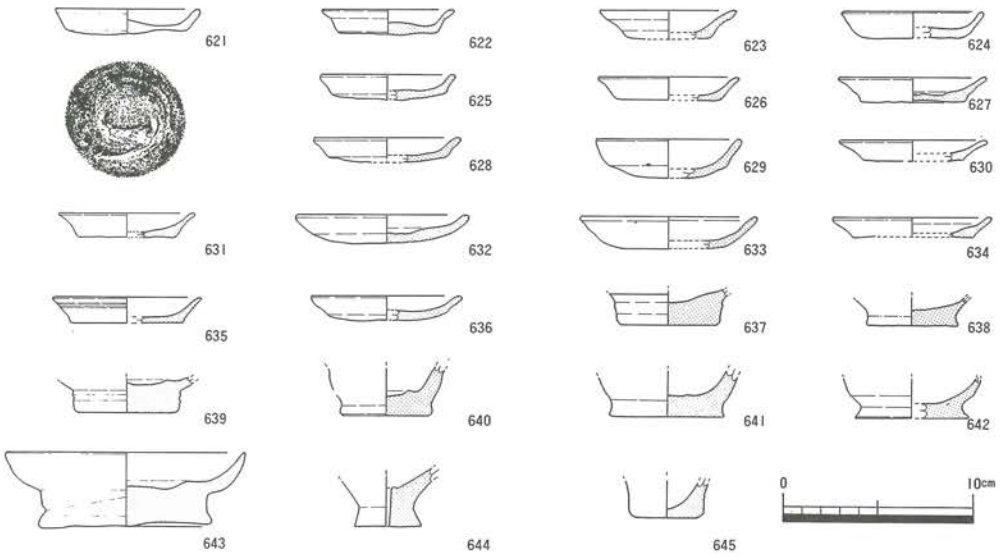
Ⅲ（第159・160図、表74、図版37・38）

Ⅲは総数で104点（542～645）図示した。包含層出土の土師質土器全体の38％と、最も多数を占める。

542～620はⅢＡに分類されるもので、Ⅲの中では最も一般的なタイプであり、出土数も多



第159図　包含層出土遺物(３)－土師質 Ⅲ①－



第160図　包含層出土遺物(４)－土師質 皿②－

い。全体に器壁の厚いものが大半を占めるが、中には619のように器壁の薄いものもある。この619は胎土・色調から皿Ａに含めたが、やや特異な形態であり、細分し得る可能性を残している。また同様に620は底部が丸底状で、特異なタイプであり、細分し得る可能性を残している。

皿Ａの口径は549のように6.0cmとやや小さいものから、610・612・614～618のように10cm前後のものまであるが、８cm前後のものが最も多い。器高は最小1.0cm（552・568・605）・最大2.0cm（602）であるが、1.5cm前後のものが最も多い。口縁部は直立気味に短く立ち上がるものが通例である。底部は回転糸切り痕を明瞭に留めるもの（例えば542～544など）、その痕跡を部分的にナデ消すもの（571・587・601）、丁寧にナデ消すもの（612）などがある。また、杯Ａ類と同様に底部の周縁部の粘土をヘラで削り取ったために段がつくもの(549・593・614）も少数認められる。565の底部には孔が穿たれる。

621～635は底部をヘラで切り離す皿Ｂに分類される。このうち632は当遺跡全体の基盤層となっている砂礫層から出土したもので、他の遺物に比べると時期の古いものである。636は底部切り離し不明であるが、色調・形態から皿Ｂに含まれる可能性が高い。皿Ｂの口径は最小7.0cm（622・623・625）・最大9.3cm（633）であり、８cm前後のものが比較的多い。器高値の最小は1.1cm（630・634）、最大値は2.0cm（629）であるが、1.3～1.5cmのものが最も多い。形態上では底部を平底に仕上げるものが通例であるが、やや丸底状のもの（629）もある。また、口縁部は全体に外反気味であるが、直線に近いもの（624など）も見られる。

637～641・643の皿は高台付のもので、皿Ｃに分類される。643はＣ地区の遺構面直上で出土したもので、ほぼ完形に復原される。口径12.6cm・器高4.0cm・底径8.9cmと皿Ｃの中では特に大きい（この個体のみ皿ＣⅡ、ほかは皿ＣⅠ）。皿Ｃはこの大形の643以外は皿部を欠

くが、本来は643のような短い口縁部を持つ皿部が付いていたものであろう。底部は回転糸切りで切り離し、全体にやや粗雑なロクロナデを施すのが通例である。638のものは底部を回転糸切りで切り離すが、丁寧なナデが施される。胎土・色調から見て、通例の皿Cと異なり、あるいは細分可能か。

642は底部をヘラで切り離している点、色調・胎土から通例の皿Cとは異なる可能性が高い。あるいは高台付きの杯か。644・645も特異なタイプで、本来の器形については正確には不明である。644には孔が穿たれる。

椀（第161図、表75、図版38）

椀はいずれも中部瀬戸内地方で「早島式土器」[註5]と称されている椀のタイプで、総数で53個体を図化した。包含層出土の土師質土器全体の約19％を占める。

646～648は無高台で、椀Aに分類される。いずれも破片であるが、口径11.3～12.0cmに復原される。

649～664・679～698は底部に高台を貼り付ける椀Bである。このタイプは土師質の椀の大半を占めるタイプと見られ、底部を欠いている665～678の大半も本来は貼り付け高台を持つタイプであったと考えられる。

椀Bの口径は最小値9.8cm（649）・最大値13.0（664・678）で、11cm前後のものが最も多い。器高の明らかなものは2.7～4.7cmの間に収まる。また、高台径は3.7～5.6cmである。高台断面の形状は逆台形状のもの（649・652・684など）と三角形状のもの（655・656・657など）があるが、全体に退化傾向が顕著である。

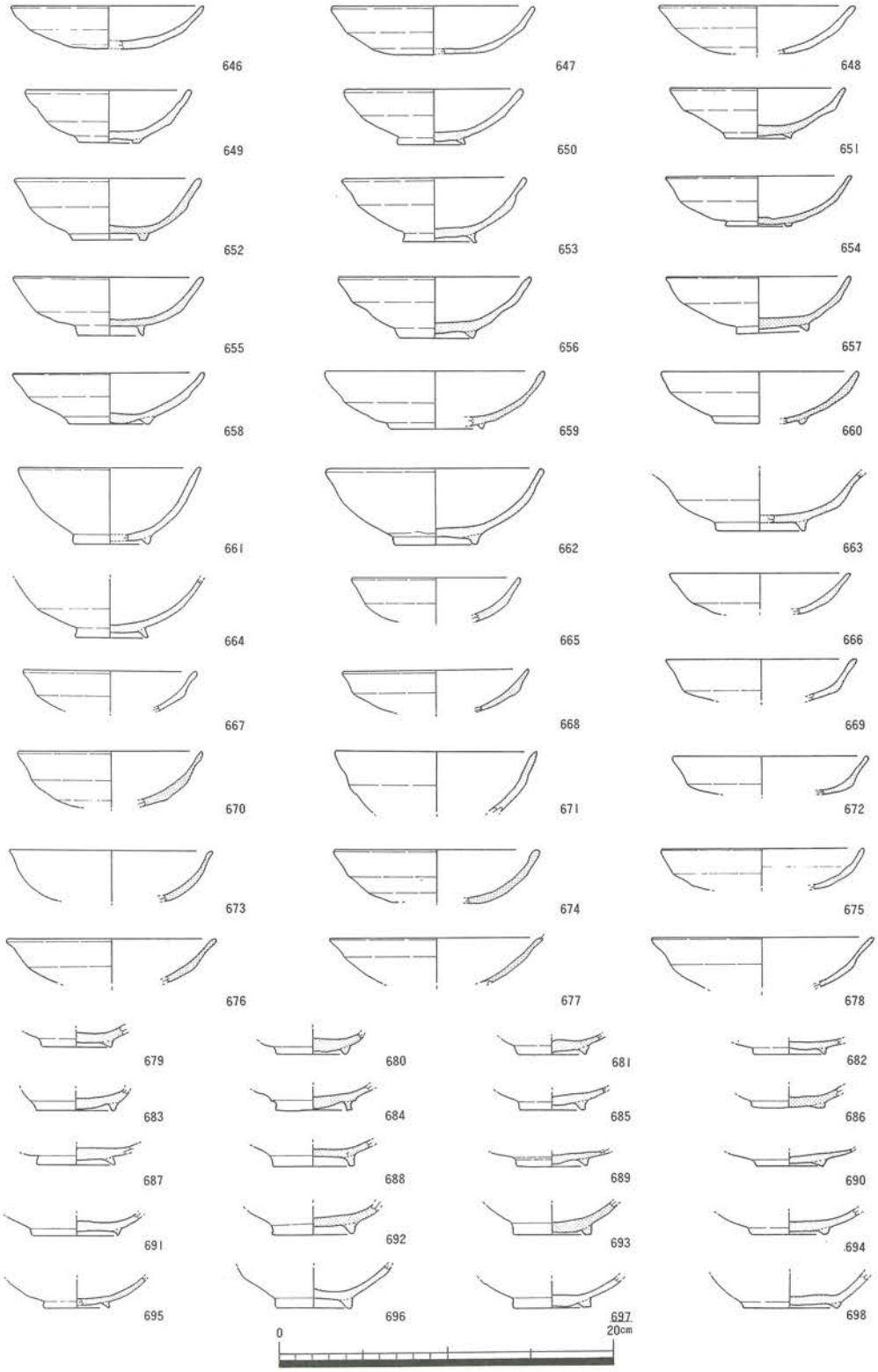
鍋・羽釜・すり鉢（第162～165図、表76、図版39）

鍋は26点（699～719・725～727・729・730）ある。これは包含層出土の土師質土器全体の9％にあたる。

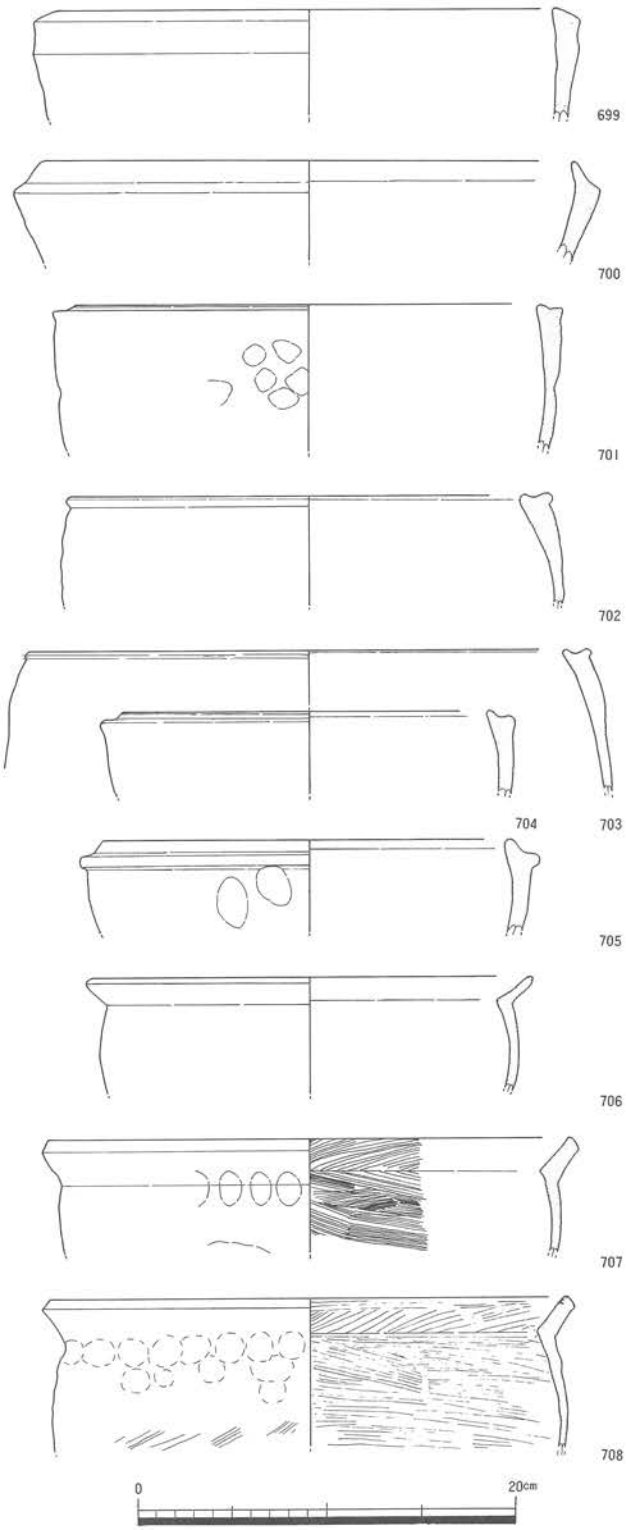
699～705は口縁部が直立するタイプであり、鍋Aに分類される。699のように端部をほとんど拡張しないものから、702～705のように端部が拡張によって凹面となるものまである。口径は細片からの復原値であるためやや不正確であるが、最小のもので19.5cm（704）、最大のもので29.4cm（703）である。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はユビオサエ、ないしはその後に粗いナデ、体部内面はナデが施される。いずれも胎土は砂粒を多く含む。外面には煤が付着し、良く使用されている。

706～719は口縁部が「く」の字状に屈曲するタイプで、鍋Bに分類される。このうち、706～716は口縁部上面が平坦面となる鍋BⅠで、717～719は凹面となる鍋BⅡである。

鍋BⅠには体部がやや膨らみを持つと見られるもの（706～708）と、そうでないもの(709～716）がある。口径は小片による復原値であるが、最小23.3cm（706）・最大33.6cm（716）である。体部内面をナデで仕上げるもの（706・710）、横方向のハケ目のもの（708・709・



第161図　包含層出土遺物(5)－土師質 椀－



第162図　包含層出土遺物（６）－土師質 鍋①－

712・713・716）がある。体部外面はユビオサエ後縦方向のハケ目を施すものが多い。

鍋ＢⅡの中で、718は鍋ＢⅠに近い形態であるが、口縁部がやや内湾気味に立ち上がるため、鍋ＢⅡに含めた。717はこのタイプの典型例で、口縁部を外反させた後内湾させる。719は口縁部の小片であり、端部をやや拡張する。特異なタイプであるが、口縁部の形態から鍋ＢⅡに含めた。

725～727は鍔が付くタイプで、鍋Ｃに分類される。725は口縁部が内湾するタイプで鍋ＣⅠ、726・727は口縁部が外反することから鍋ＣⅡに分類される。726は外面に粗い平行叩きが施され、器壁も全体に薄く仕上げられる。727は口縁部の先端部を外反させ、断面三角形の小さい突起状の鍔が付く。

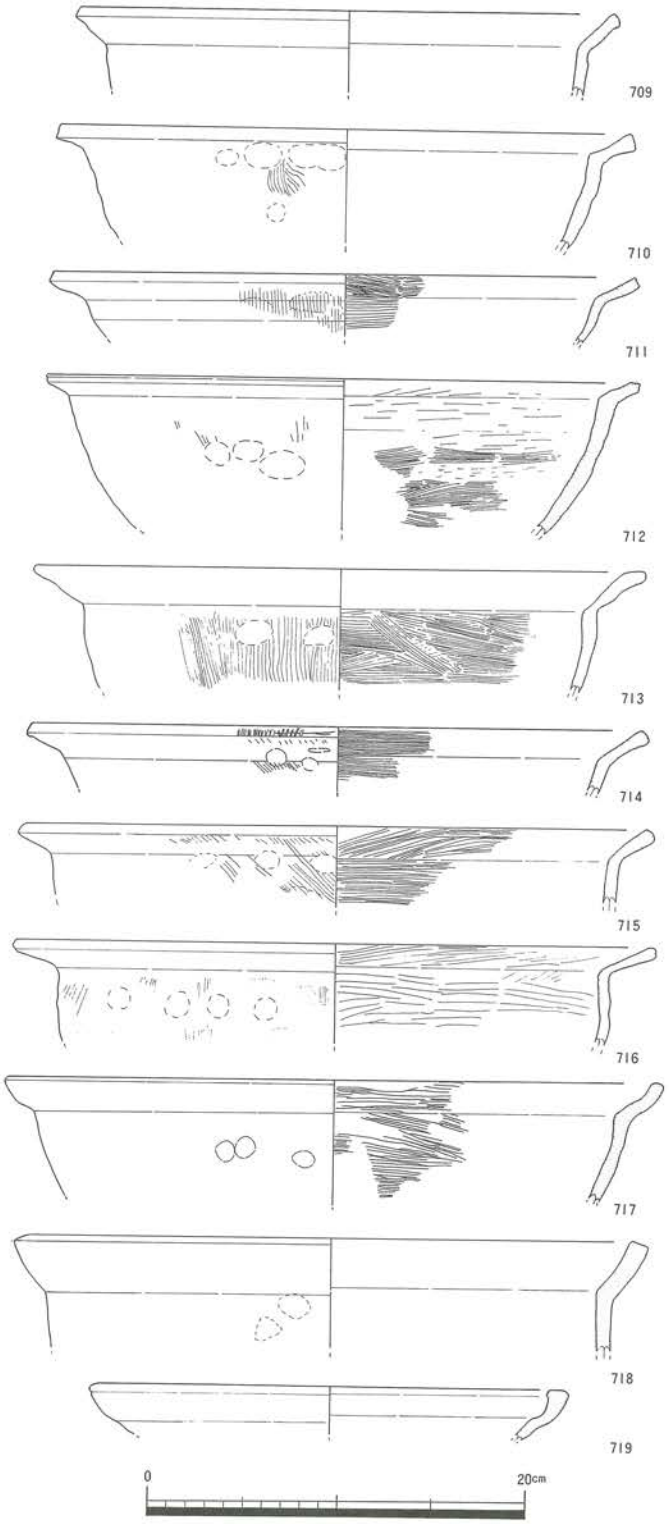
729は特異なタイプの鍋か。730は鍋の底部と見られる。

720～724・728・731～737は羽釜であり、13点ある。これは包含層出土の土

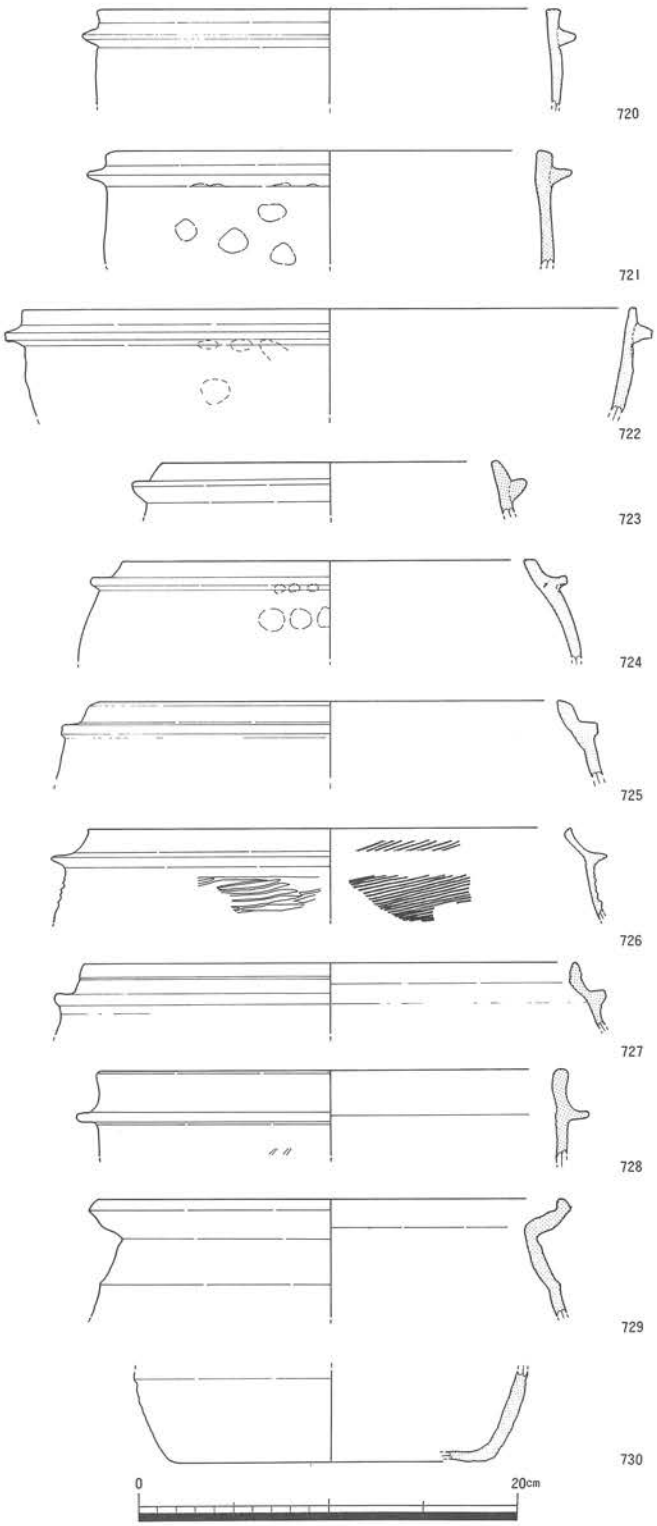
師質土器全体の５％で、その量は少ない。

羽釜には口縁部が直立気味の羽釜Ａ（720～722・733～735）、内湾気味の羽釜Ｂ（723・724・731・732）、脚付きの羽釜Ｃ（736・737）がある。なお、723・731は脚付きの羽釜に多い口縁部の形態であり、羽釜Ｃの可能性も残る。また、736は鍔が小さく、鍔が付く鍋の可能性もある。

731は粘土紐の輪積みによって成形されたと見られ、体部内面には粘土の継目部分に明瞭なユビオサエを留める。体部外面には粗くナデが施されるが、成形時のユビオサエが残る。鍔は貼り付けたものでなく、体部上部の粘土を外方に折り曲げて鍔を作り、その後、粘土を継ぎ足して口縁部を形作ったと見られる。732・735は口縁部・鍔部ともヨコナデ、体部内外面をナデで仕上げる。733は口縁部・鍔部をヨコナデ、体部外面をユビオサエ後縦方向のハケ



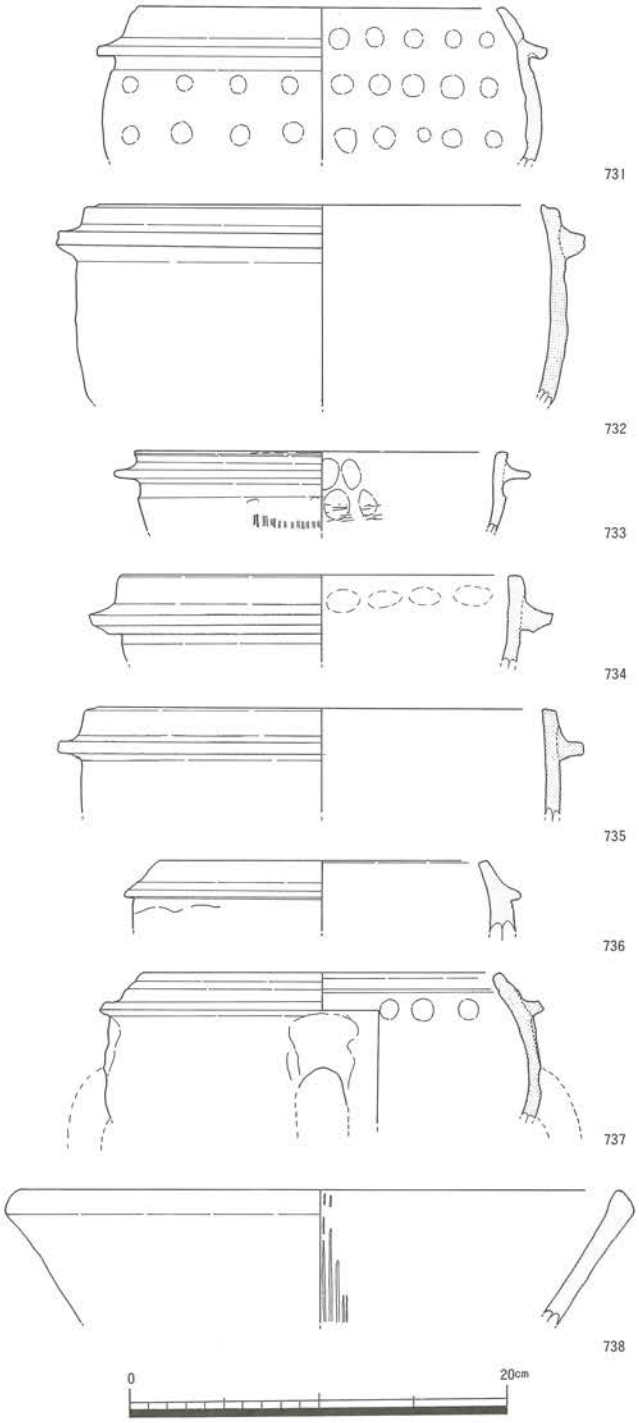
第163図　包含層出土遺物（７）－土師質 鍋②－



第164図　包含層出土遺物(８)－土師質 鍋③・羽釜①－

目、同内面を横方向のハケ目で仕上げる。734は体部外面にユビオサエ、同内面に丁寧なナデを施す。鍔はいずれも貼り付けであり、732・734は部厚い。734の口縁部内面には鍔貼り付け時のユビオサエ痕が明瞭に残る。736・737には脚を貼り付けた痕跡が認められる。

738はすり鉢であり、１点のみである。内面に５条以上を１単位とする櫛描条線を施す。

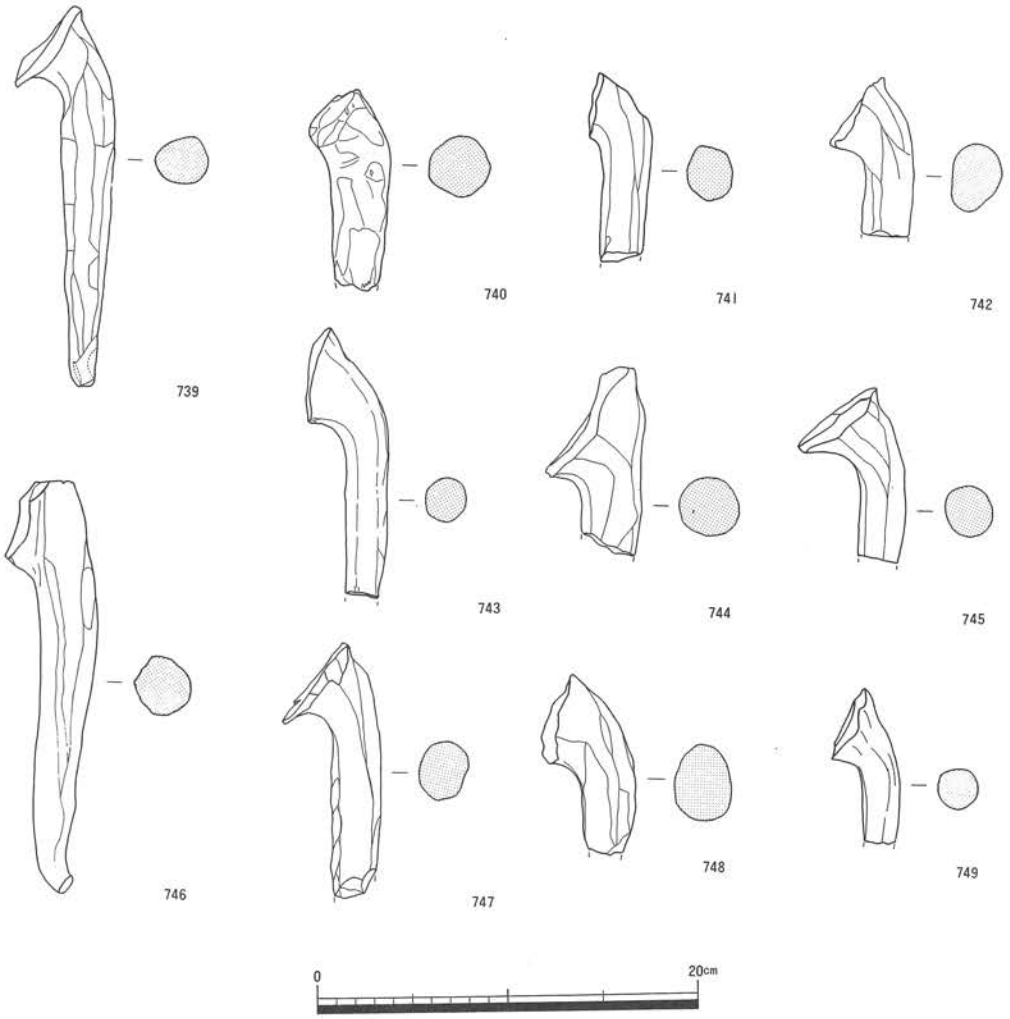


第165図　包含層出土遺物(９)－土師質 羽釜②・すり鉢－

脚部（第166図、表77、図版39）

鍋ないしは羽釜の脚部が多数出土しているが、そのうち11点（739〜749）を図示した。

739・746はほぼ完形である。739は長さ16.1cm、中央やや上部の径2.7cmを測る。全体にユビオサを施した後にヘラで形を整えたと見られる。746は長さ約21.5cm、ほぼ中央部の径3.0cmを測る。先端部はわずかに外方に屈曲する。全体をヘラで削り整えた後、丁寧な縦方向のナデを施している。その他のものはいずれも下部を折損する。断面は円形〜長円形で、径の最小のものは2.1cm（743・749）、最大のものは3.5cm（742）である。調整はヘラで削り整えた後に縦方向のナデで仕上げるものが多い。



第166図　包含層出土遺物(10)－土師質 脚部－

（2）瓦器・瓦質土器

瓦器・瓦質土器としては椀・皿・鍋・釜・脚部などがあり、総点数で82点を図化した。これは掲載した包含層出土遺物全体の14％にあたる。

椀・皿（第167・168図、表78、図版40・41）

椀は総数で38点（750～787）図示した。これは掲載した瓦器・瓦質土器の46％にあたる。38点の中で、787が特異な瓦質の椀であるほかはいずれも和泉型の瓦器椀と考えられる。

750～763は無高台ないしは無高台と推定される一群である。口径は10.0～12.8cmの間に分布する。底部は丸底状のものが多いが、やや尖底状のもの（761・762）もある。いずれも体部はやや内湾気味に斜め上方に立ち上がる。750・751・760は体部内面から見込部にかけて、簡略化された渦巻状の暗文が施され、752にはさらに簡略化された暗文が施される。色調は炭素の吸着により暗灰色～黒灰色を呈するものと、炭素未吸着のため灰白色を呈するもの（752・756）がある。

764～770・772～774は高台を貼り付けるものである。高台は径2.1cm～3.8cmで、いずれも粘土紐を貼り付けただけの低いものであり、全体に退化傾向が著しい。暗文は不明瞭のため図示しなかったものもあるが、いずれにも施される。見込に暗文を施すものとしては764・768・769・771・772などがある。このうち、764・768・771は平行線状で、769・772は鋸歯状である。

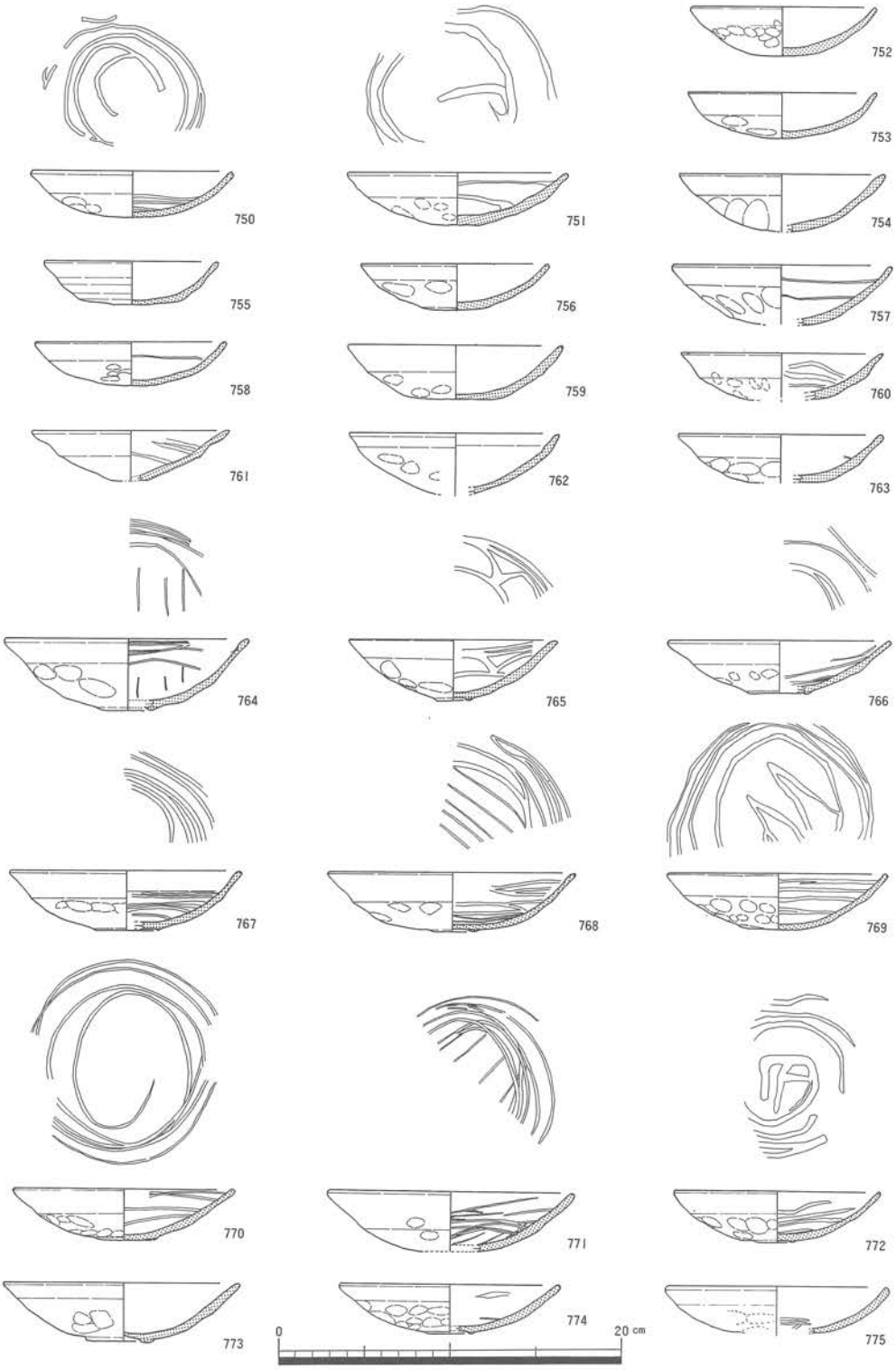
771・775～786は体部から口縁部にかけての破片である。

787は瓦質の椀と見られるもので、底径7.0cmと大形である。底部無高台で、全体に器壁厚い。全体に丁寧なナデで仕上げられるが、内面にはハケ目が施される。このタイプの瓦質土器は当遺跡ではほかに出土していない。

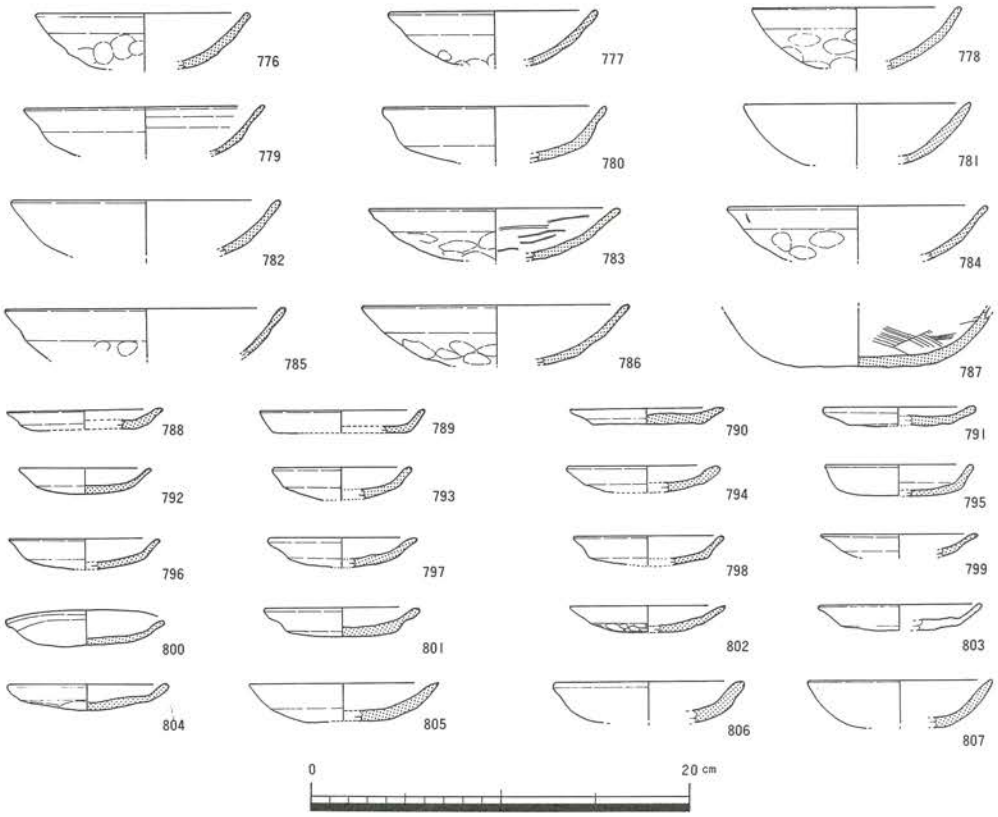
788～807は皿である。計20個体ある。このうち788～804は和泉型の皿と見られるが、805～807は和泉型以外のタイプと見られ、厳密には瓦質土器とすべき個体である可能性が高い。

788～804の皿について見ると、口径は最小値6.8cm（792）・最大値8.4cm（803）であり、8cm前後のものが最も多い。形態上は口縁部を外反させるものがほとんどであるが、端部は肥厚させるもの（791・794・801など）と、やや尖り気味に仕上げるもの（796・799・803など）がある。底部の形状が明らかになるものについては平底状のもの（790・791・801など）とやや丸底状のもの（792・793・800など）がある。明瞭な暗文を持つものはなく、色調は灰色～黒灰色を呈する。

805～807はいずれも器壁が厚く、法量がやや大きい。いずれも炭素の吸着は不十分で、灰色を呈する。このうち、805・807は同一タイプで、806はやや異なるタイプと見られる。



第167図　包含層出土遺物(11)－瓦器 椀①－



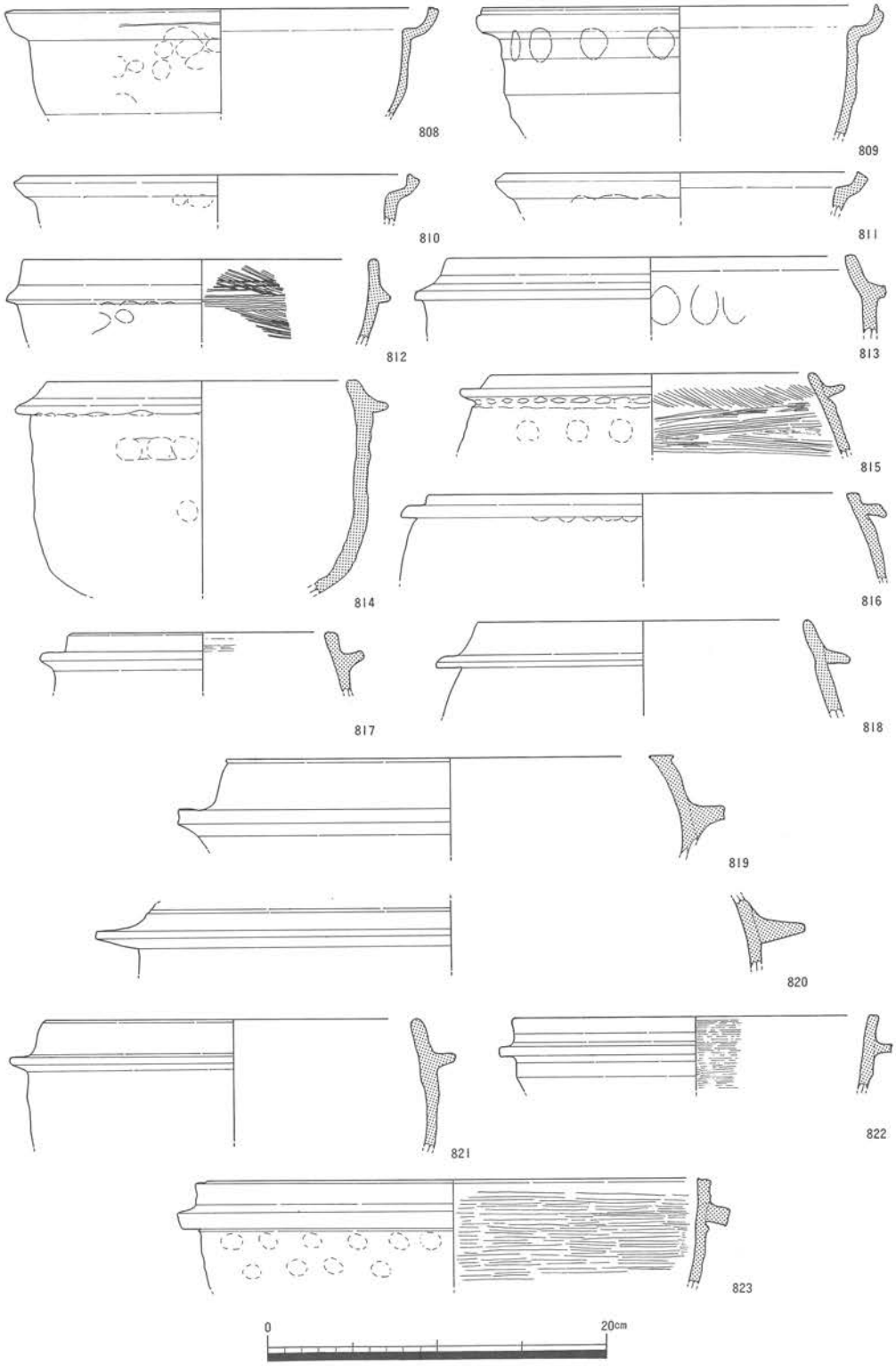
第168図　包含層出土遺物(12)－瓦器 椀②・皿－

鍋・羽釜・脚部（第169・170図、表79、図版42）

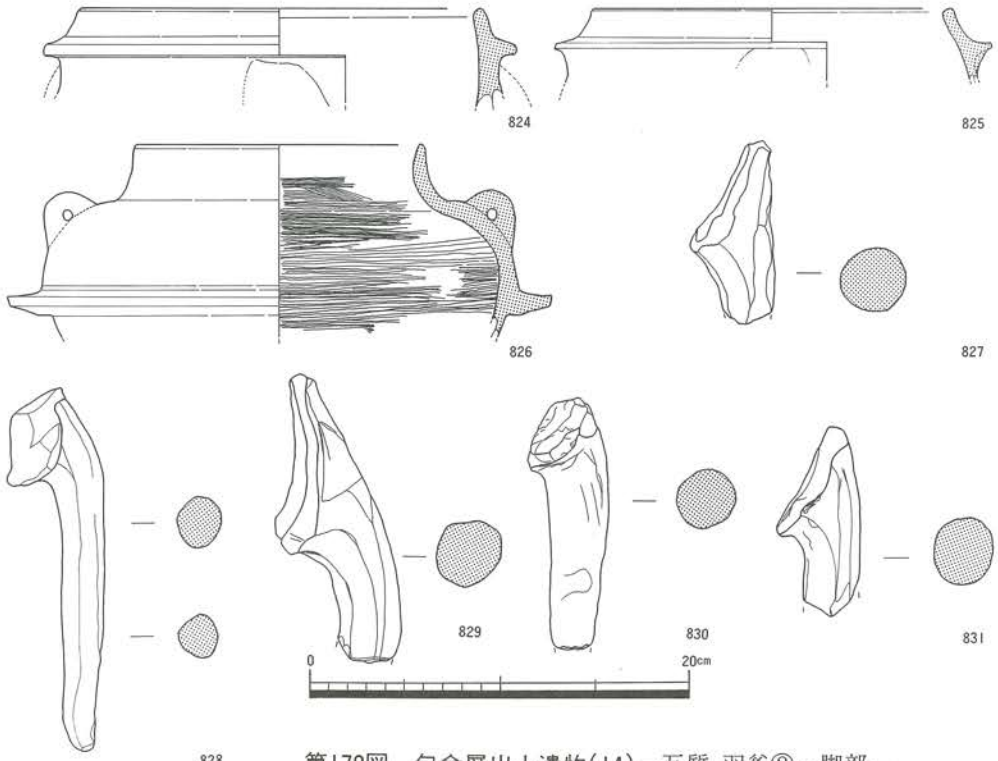
808～811・813・814は鍋である。このうち808～811は土師質土器の鍋ＢⅡと共通する形態のもので、「受け口」状の口縁部に特徴が見られる。口縁端部を平坦に仕上げるもの（808・811）と、やや尖り気味に仕上げるもの（809・810）がある。調整はいずれも口縁部内外面・体部内面をヨコナデないしはナデで比較的丁寧に仕上げ、体部外面にはユビオサエを施す。口径は21.0～24.6cmに復原される。

813・814は鍔が付くタイプの鍋と見られるが、羽釜の可能性もある。814は口径18.2cmに復原されるやや小形のものであり、体部はほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部を押し広げて幅広く作り、下端部を鍔状に張り出す。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面はナデ後部分的に斜め方向のハケ目、同外面はユビオサエ後部分的に横及び斜め方向のハケ目で仕上げられる。

812・815～825は羽釜である。819・820・822・823は確実に瓦質と見られるが、その他のものは焼成が瓦質に近いために瓦質の羽釜としたが、土師質の可能性も残るものである。いずれも口縁部の小片であり、全体の形状等が明らかになるものはない。口縁部が直立気味のもの(822・823)と口縁部がやや内湾するもの（812・815～821)、脚付きのもの（824・825）



第169図　包含層出土遺物(13)－瓦質 鍋・羽釜①－



第170図　包含層出土遺物(14)－瓦質 羽釜②・脚部－

などがある。

815は口縁部短く、断面三角形状の鍔が付く。口縁部内外面・鍔部にヨコナデ、体部外面にユビオサエ、同内面に横方向の細かいハケ目を施す。技法上では鍔の貼り付け時に鍔下部の接合部を棒状工具の先端で圧迫して接合を強化する技法が取られている点に特徴が窺える。こうした技法は818・823のほか、土師質の鍋にも見られる。819は口縁部がやや長めで、端部は平坦に仕上げる。鍔は断面台形状で、しっかりしている。820は口縁部を欠くが、819と同様に内湾する口縁部を持つと推定される。この羽釜は鍔の径が40cmを超える大形のものである。

822・823はともに断面方形の鍔を貼り付けるもので、内面には横方向のハケ目が施される。823の体部外面にはユビオサエの痕跡が明瞭に残る。824・825は鍔に接して脚が貼り付けられた痕跡が認められる。

826はいわゆる「茶釜」と呼ばれるタイプのもので、口径は15.0cmに復原され、口縁部は直立気味で、体部上位に耳、中位に鍔が付く。体部内面に横方向の細かいハケ目を施す。

827～831は脚部である。ほぼ完形である828は長さ19.1cm・径2.2cmを測る。先端部をわずかに外方に屈曲する。全体にヘラケズリを施した後、縦方向のナデで仕上げる。そのほかの

ものはいずれも下部を欠失する。

（3）国内産陶器

国内産陶器として掲載した遺物はすり鉢・こね鉢・椀・小椀・壷・甕などであり、計94点を図示した。これは掲載した包含層出土遺物全体の17％にあたる。

すり鉢（第171・172図、表80、図版42）

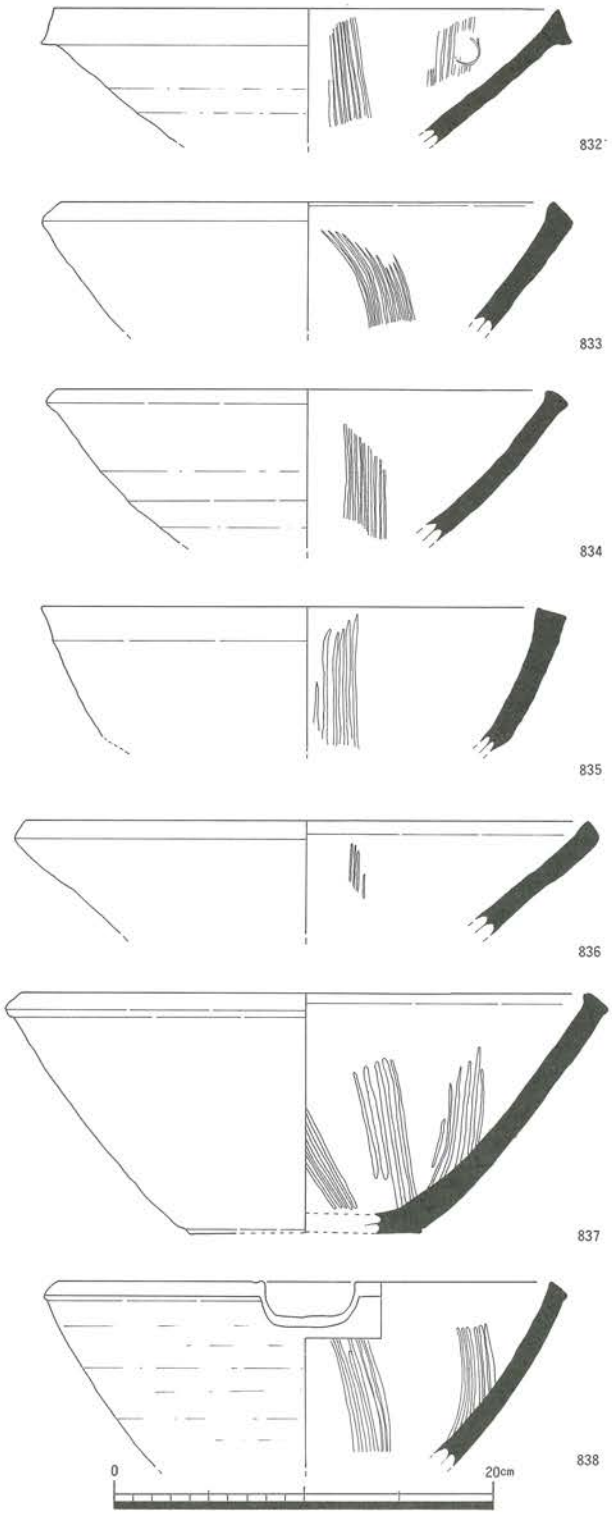
すり鉢は総数で12点図示した。これは掲載した包含層出土の国内産陶器の13％にあたる。12点の中で、833が産地を特定し難いほかは、いずれも備前焼と考えられる。837が底部の一部を残すほかはいずれも口縁部から体部にかけての破片で、器形全体が明らかになる個体は出土していない。

法量は破片からの復原値であるため幾分正確さに欠けるが、口径は最小25.8cm（834）・最大31.0cm（842）であり、26～27cmのものが最も多い。体部内面にはいずれも櫛描条線を施してすり目とする。その条数は単位が明らかなものについて言えば、843が4～5条、835・837・838が6条、840が7条、841が8条、832・834・839が9条、833が11条となっている。体部・口縁部の形態では、ほぼ直線的に斜め上方に延びるものとやや内湾気味に立ち上がるものがある。また、口縁端部を拡張するものが大半を占めるが、その程度については835・836・838のようにあまり拡張しないものから、841のように幅広い口縁帯を形成するものまで見られる。ただ、841・842のように幅広い口縁帯を持つものは、遺構面直上からは出土せず、包含層の上部からの出土である。成形はロクロ成形で、内外面の調整にもロクロナデが使用されている。色調は一部灰白色を呈するもの（836）も見られるが、全体的には灰色系統の色調を呈する。いずれも胎土には砂粒ないしは微砂粒が多く含まれる。842の体部外面には重ね焼の痕跡と見られる輪状の変色が認められる。843は底径14.3cmに復原される底部破片である。底部外面は粗いナデが認められるが粗面を留める。

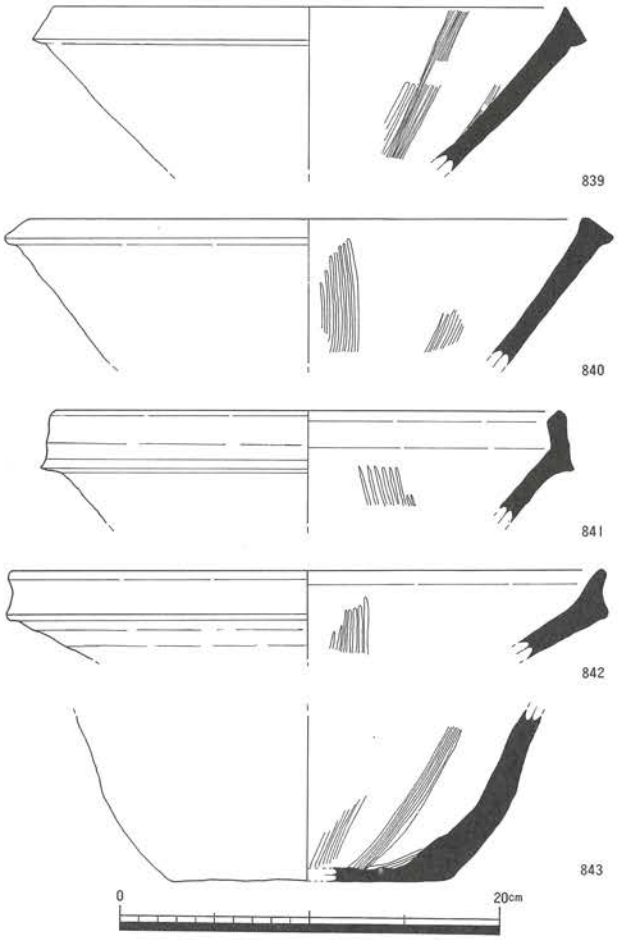
こね鉢（第173～175図、表81、図版43）

こね鉢の口縁部・体部の破片は調査区全域の包含層から数多く出土している。これらはいずれも東播系須恵器と見られるものである。このうち、図示し得たのは39点（844～882）で、掲載した包含層出土の国内産陶器全体の42％にあたる。

図示したものも小破片が大半を占めるため、法量もやや正確さを欠くが、復原した口径について見てみると、最小のものは19.8cm（844）・最大のものは31.8cm（881）となり、口径にはかなりの幅があることが分かり、器形に大小の別が存在することが窺える。大小の区別は必ずしも明確ではないが、口径20cm前後の法量を持つもの（844・845・847・848・854・856・858など）は小形の製品と見られ、一方、口径が30cm前後のもの（862・864・865・869・870・871・872・873・880・881・882など）はやや大形の製品と見られる。比較的多数を



第171図　包含層出土遺物(15)－陶器 すり鉢①－

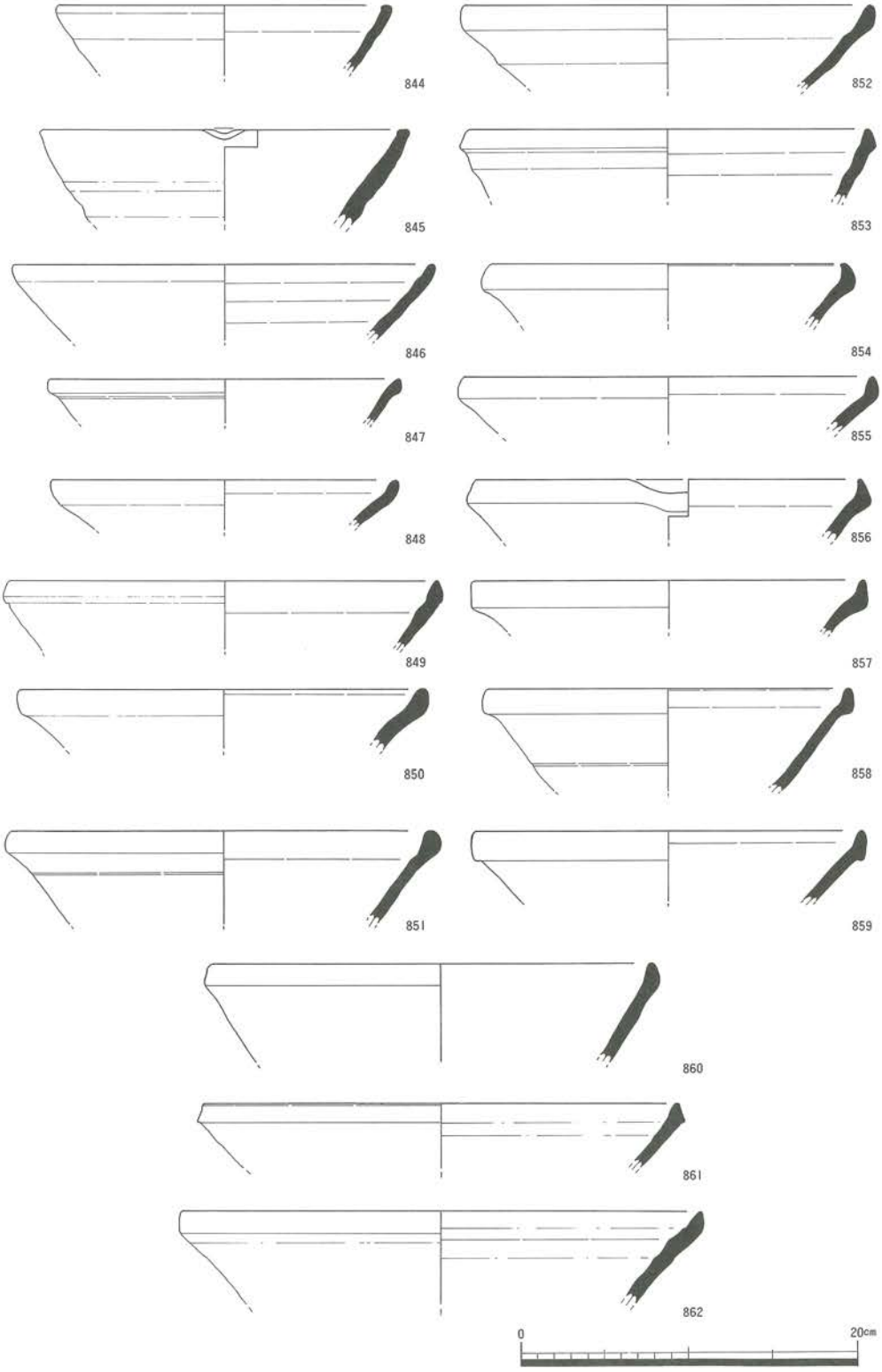


第172図　包含層出土遺物(16)－陶器 すり鉢②－

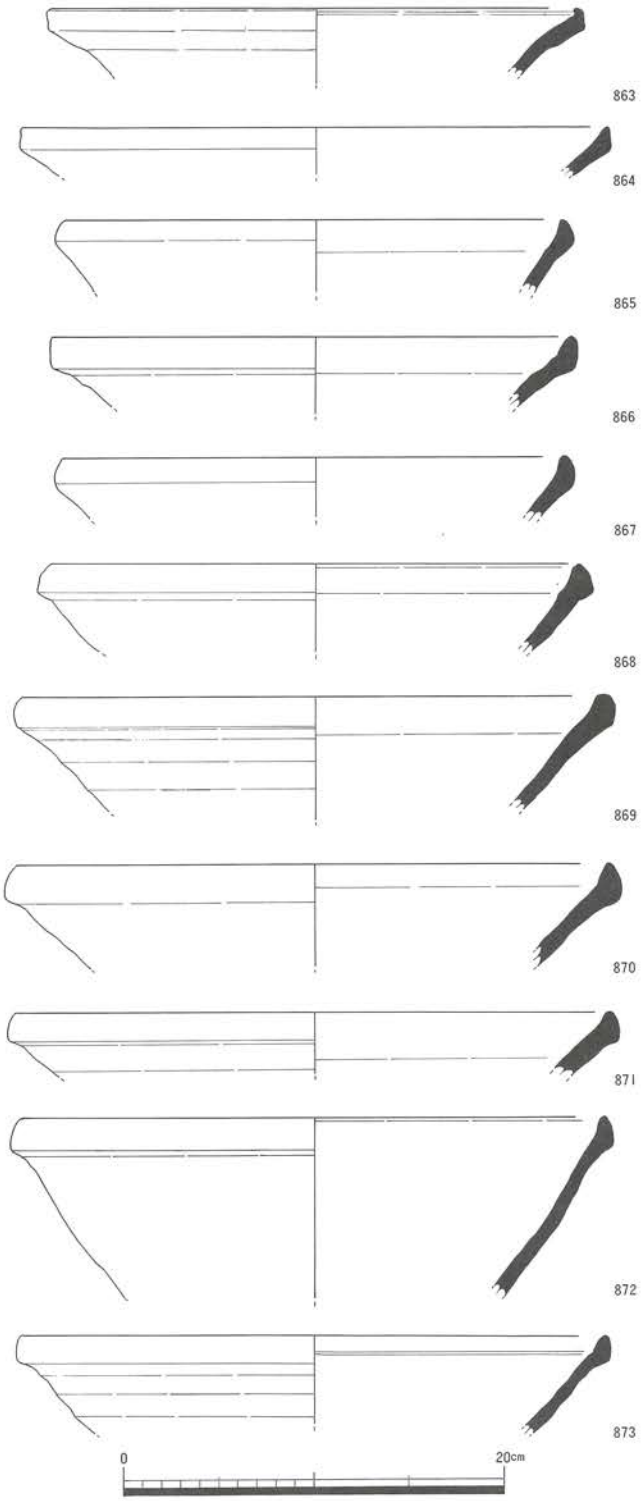
占めるのは口径25cm～28cmの間に収まる製品である。

形態上は体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に斜め上方に延びるものが大部分を占めるが、なかには863のように口縁部が外反するものも少数ながら見られる。口縁端部は全般に口径の小さいものほど拡張の度合いが少ない傾向が窺えるが、854・858のように小形品ではあっても拡張の著しいものもある。また、口縁端部の拡張は上方に摘み上げるもの（例えば855・860・866など）と上下に押し広げて大きく拡張するもの（例えば859・876・879など）があるが、比較的後者のものが目立つ。成形はロクロを使用して行われたと見られ、調整にもロクロ回転によるナデが口縁部を中心に施される。体部外面は比較的丁寧にナデが施されるものとやや粗面を留めるものがある。体部内面は縦横に仕上げナデが施されるものがある。なお、本来は845・856のように、図示したものの大半に片口が付いていたと推定されるが、破片のため片口部が残存しないものがほとんどを占めている。

胎土は全体に均質であるが、微砂粒を多く含み、器面もややザラザラした手触りがある。

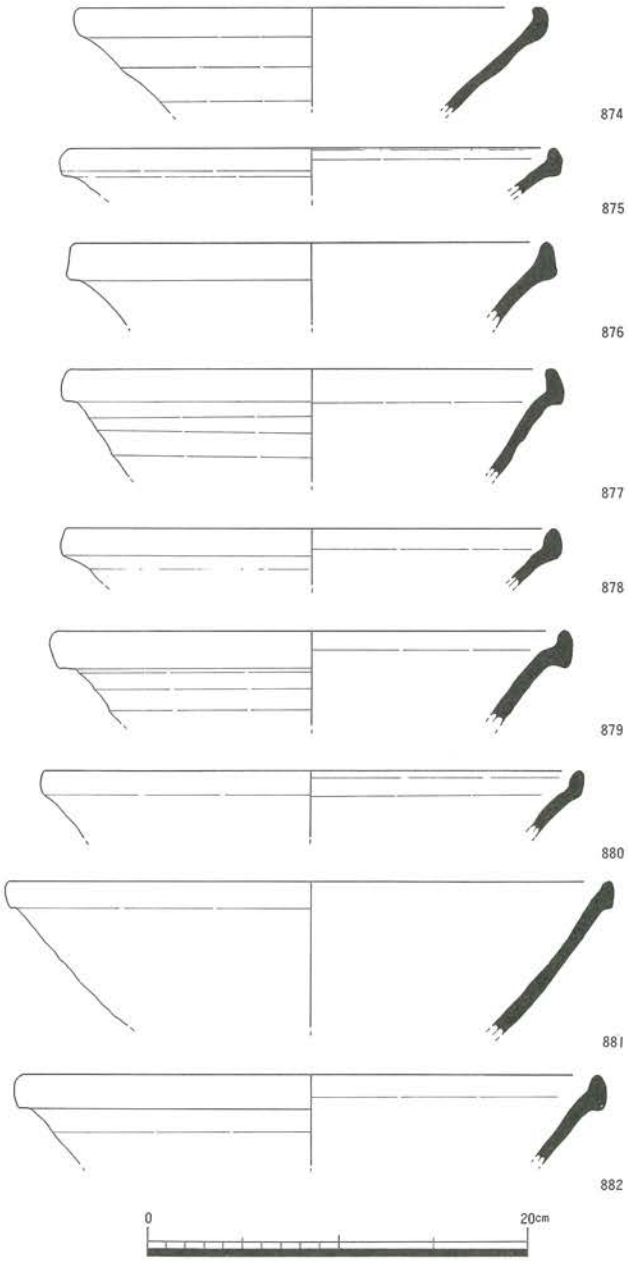


第173図　包含層出土遺物(17)－陶器 こね鉢①－



第174図　包含層出土遺物(18)－陶器 こね鉢②－

色調は灰色系統のものが大半を占めるが、全体に白っぽい色調のものもある。口縁部外面に重ね焼によると見られる黒色帯（自然釉）が認められるものが大半を占める。



第175図　包含層出土遺物(19)－陶器 こね鉢③－

椀・壷・甕（第176・177図、表82、図版43・44）

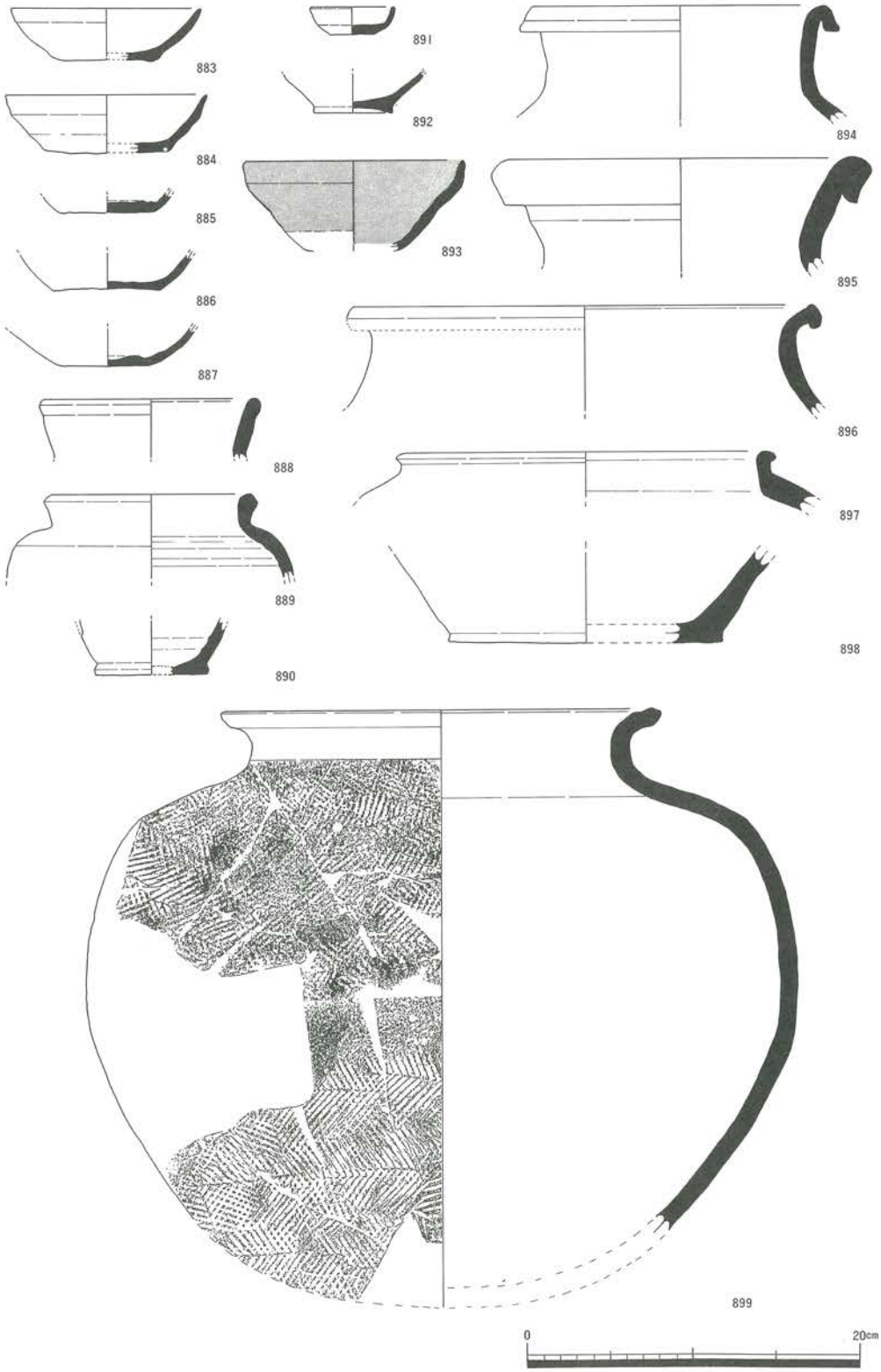
883～887は備前産と推定される椀である。883は口径11.2cm・器高3.1cm・底径6.1cm、884は口径12.0cm・器高3.4cm・底径7.3cmに復原される個体で、ともに体部・口縁部が内湾気味に立ち上がり、底部に回転糸切り痕を留める。焼成は瓦質に近く、灰白色を呈する。

891の小椀は瀬戸系と見られる。892は瀬戸灰釉陶器と見られる椀で、体部は直線的に斜め上方に立ち上がり、やや粗雑な高台が付く。893は天目茶碗で、瀬戸・美濃系の製品と見られる。

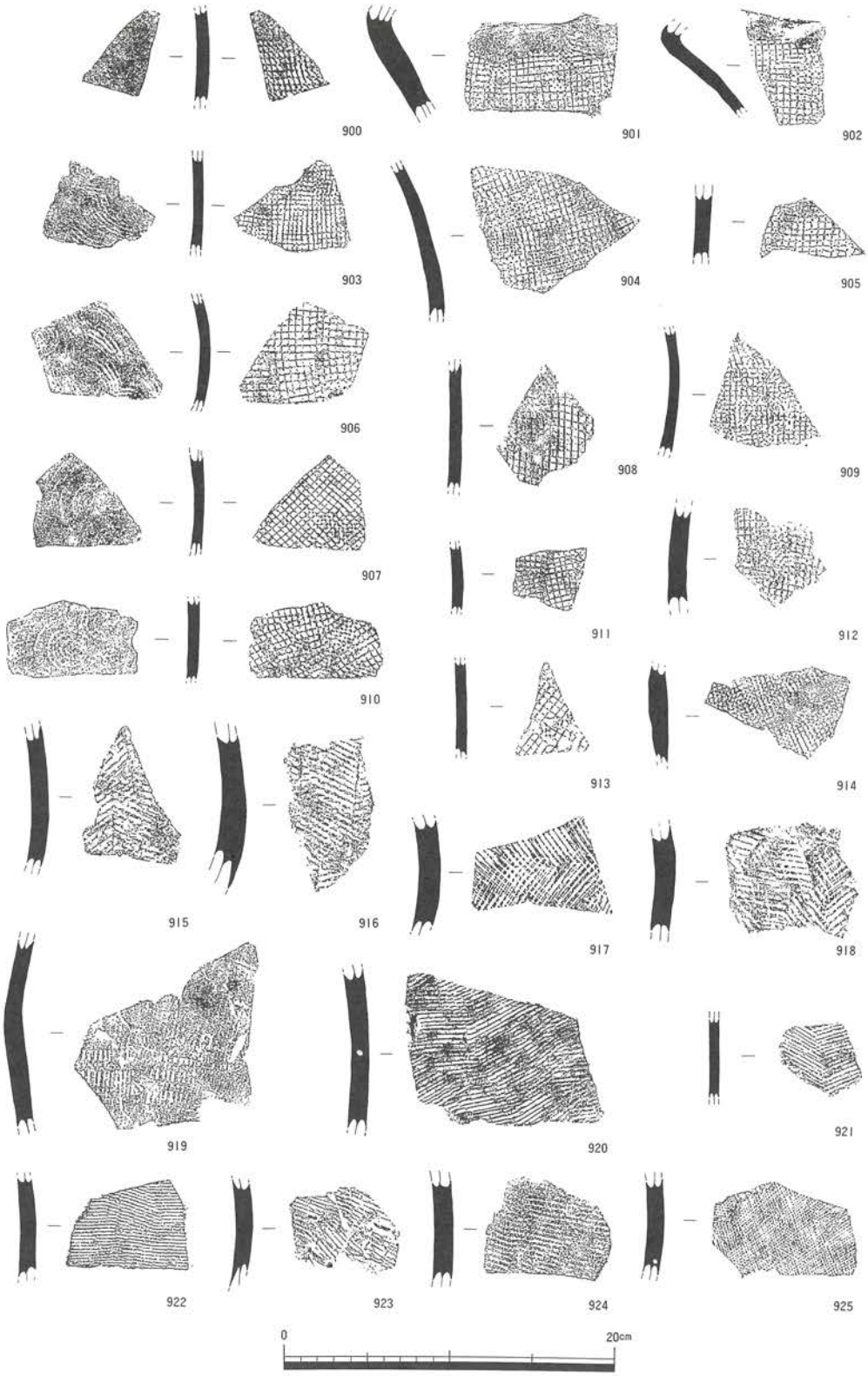
888～890・894・895・897は壷である。このうち、888～890は備前焼、894・895は常滑焼と見られる。894は頚部直立し、口縁端部を大きく折り曲げる。895も同様であるが、全体に器肉が厚く、口縁部全体が外反する。897は備前焼かと思われるが、確定できない。

896・898～925は甕である。896は常滑焼の大甕の口縁部破片である。口縁部大きく外反し、口縁端部を上下に拡張する。898は甕の底部破片である。産地を特定し得ないが、胎土の特徴から常滑焼の可能性が高い。899は丸胴で、口縁部は大きく外反する。口縁端部をつまみ出し、先端部を尖り気味に仕上げている。口縁部から頚部にかけてはロクロナデ、体部内面はナデが施されるが、体部外面には綾杉状の叩きが全面に施される。色調は黄褐色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。口径25.4cm・胴径42.7cmに復原される。

900～925は甕の体部小片であり、いずれも外面には叩き目が認められるため、拓影を示した。叩きは、細かい格子目のもの（900～914）、綾杉状のもの（915～918）、平行条線のもの（921～925）などがある。919・920は格子目のスタンプが押印されたものであり、常滑焼と見られる。内面は全体にナデが施されるが、なかには青海波文の叩きをナデ消すもの（901・903・906・907・909～911・913・924）がある。この青海波文をナデ消す甕は亀山焼の可能性が高いと考えられる。



第176図　包含層出土遺物(20)－陶器 椀・壺・甕①－

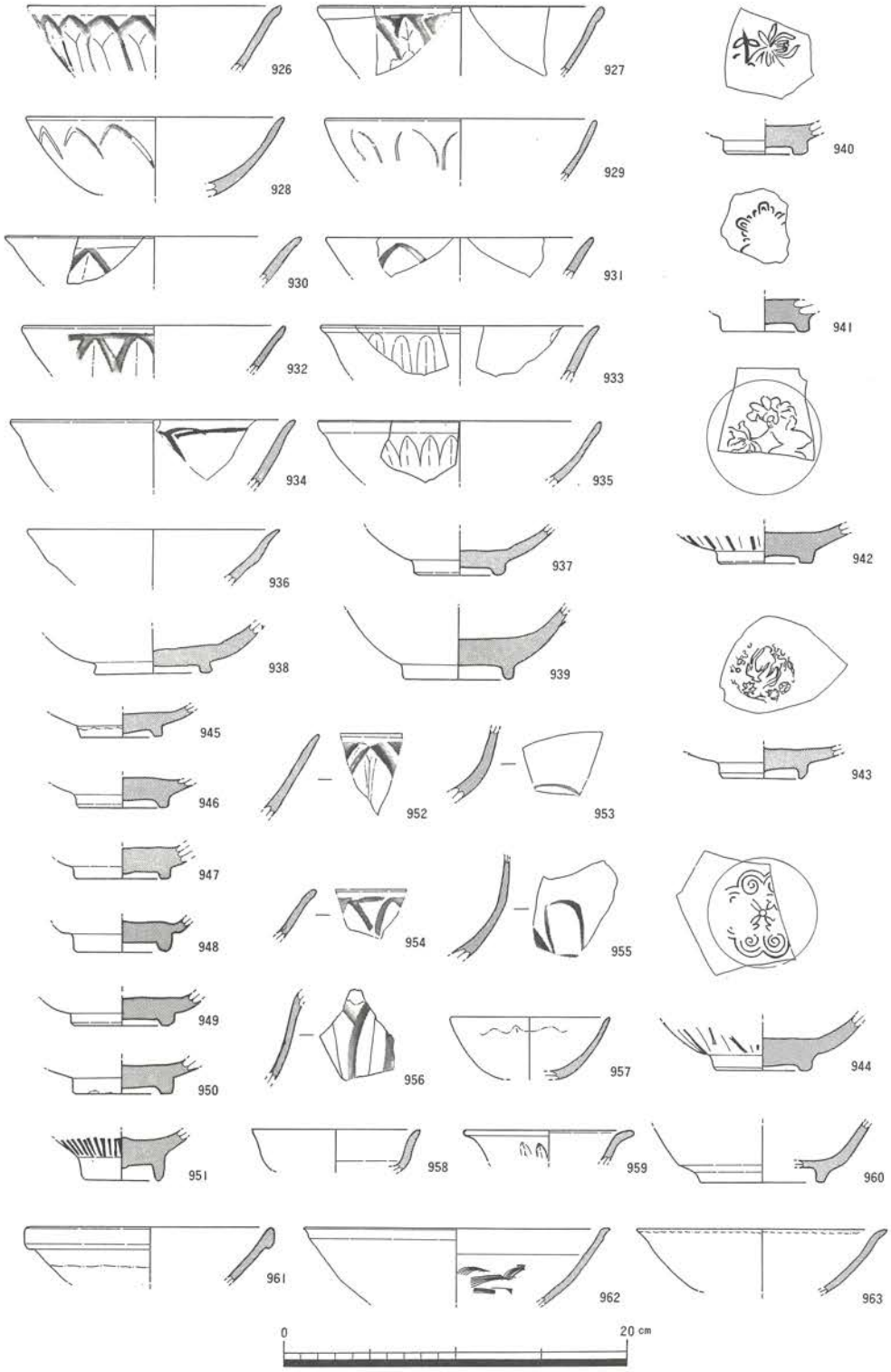


第177図　包含層出土遺物(21)－陶器 甕②－

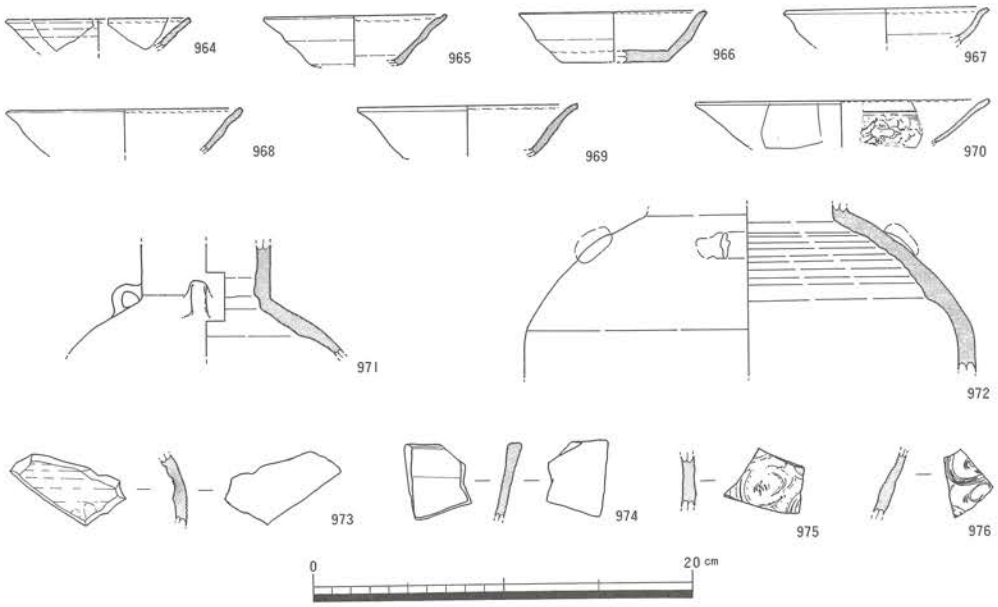
（４）輸入陶磁器（第178・179図、表83、図版45・46）

輸入陶磁器として掲載した遺物には碗・小碗・杯・皿・水注・四耳壷・香炉・梅瓶などがあり、計51個体を図示した。これは掲載した包含層出土遺物全体の９％にあたる。

926～956は青磁碗である。このうち、926～932・937～950・952～956は龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類に属すると考えられるもので、体部には926・927・930・932・942・944・952・956のように片切彫りによる幅の広い鎬蓮弁文が施されるものと、928・929・931・953～955のように蓮弁に鎬を持たないもの、934・936～939のように無文と見られるものがある。また、底部の破片は一般に肉厚で、断面方形に近い比較的安定した高台が付いている。底部への施釉は、940・941・943・944・947～950のように畳付け、底部外面が露胎のものがほとんどであるが、内外面ともに施釉されるもの（945）が若干含まれる。また内面見込み部は無文のものが多いが、940～943のような蓮華や鳳凰文のような花鳥文や、944のように渦文風の幾何学文をスタンプによって施文したものも出土している。933・935は同じく龍泉窯系青磁碗Ⅲ類に属するもので、細い鎬蓮弁文が浮彫風に施されている。また934はⅠ－４類に属する可能性のあるものである。951の底部の破片は底部外面の釉を輪状に掻き取り、畳付け部を丸く仕上げたやや高めの高台を持ち、体部には細線による蓮弁文が施された細蓮弁文碗の型式に属すると考えられる個体であり、自然流路出土の青磁碗とともに中島田遺跡のほかの輸入陶磁器とは、その年代を若干異にするものである。957は龍泉窯系青磁小碗Ⅲ－１類に属するもので、内湾する体部に尖り気味の口唇部が付いている。959は杯Ⅲ－４類で、外上方に直線的に立ち上がる体部に強く外反する口縁部が付き、体部には碗Ⅲ類同様、片切彫りで浮彫り風に削り出された幅の狭い鎬蓮弁文が施されている。961は白磁碗Ⅳ類で、玉縁状口縁と器肉の厚い体部を持ち、体部下半は露胎となっている。963～970は白磁皿Ⅸ類とされる口縁端部の釉を掻き取ったいわゆる口禿のもので、中島田遺跡の輸入陶磁器の中では、青磁碗Ⅰ－５類とともに出土数の最も多い型式である。器形的には、直線的またはやや内湾気味に外上方に立ち上がる体部が口縁近くでわずかに外反する器形のものと、体部の中ほどで弱く屈曲するものがある。文様の描かれていないものがほとんどであるが、970のように内面に型押しで梅花文が施されたものも存在する。971は白磁の水注と考えられるもので、筒状の頸部と球形に近い胴部を持ち、頸部から肩部にかけて小さな環状の把手が付いている。972・973も同じく白磁の四耳壷の破片で、973は小片のため全形を窺うことはできないが、972は横耳の付いた痕のある肩部の破片で、内面には顕著なロクロ目を持ち、内外面ともに灰色の釉が施されている。975・976は梅瓶の体部破片で、いずれも刻線により渦文、または波涛文と思われる文様が描かれ、青白色の釉が施されている。



第178図　包含層出土遺物(22)－輸入陶磁器①－



第179図　包含層出土遺物(23)－輸入陶磁器②－

（5）土製品・石製品・金属製品（第180・181図、表84、図版46・47）

977～991は土製品である。土製品として図示したのは坩堝1点・土錘14点である。

977は坩堝である。E地区東北隅で出土したもので、口径8.7cm・器高3.7cmを測る。形状は半球形で、器壁厚く、小さな片口が付く。内面全体は高熱のため部分的に熔変する。口縁部にわずかながら緑青が付着することから、銅の鋳造に使用された可能性が高い。

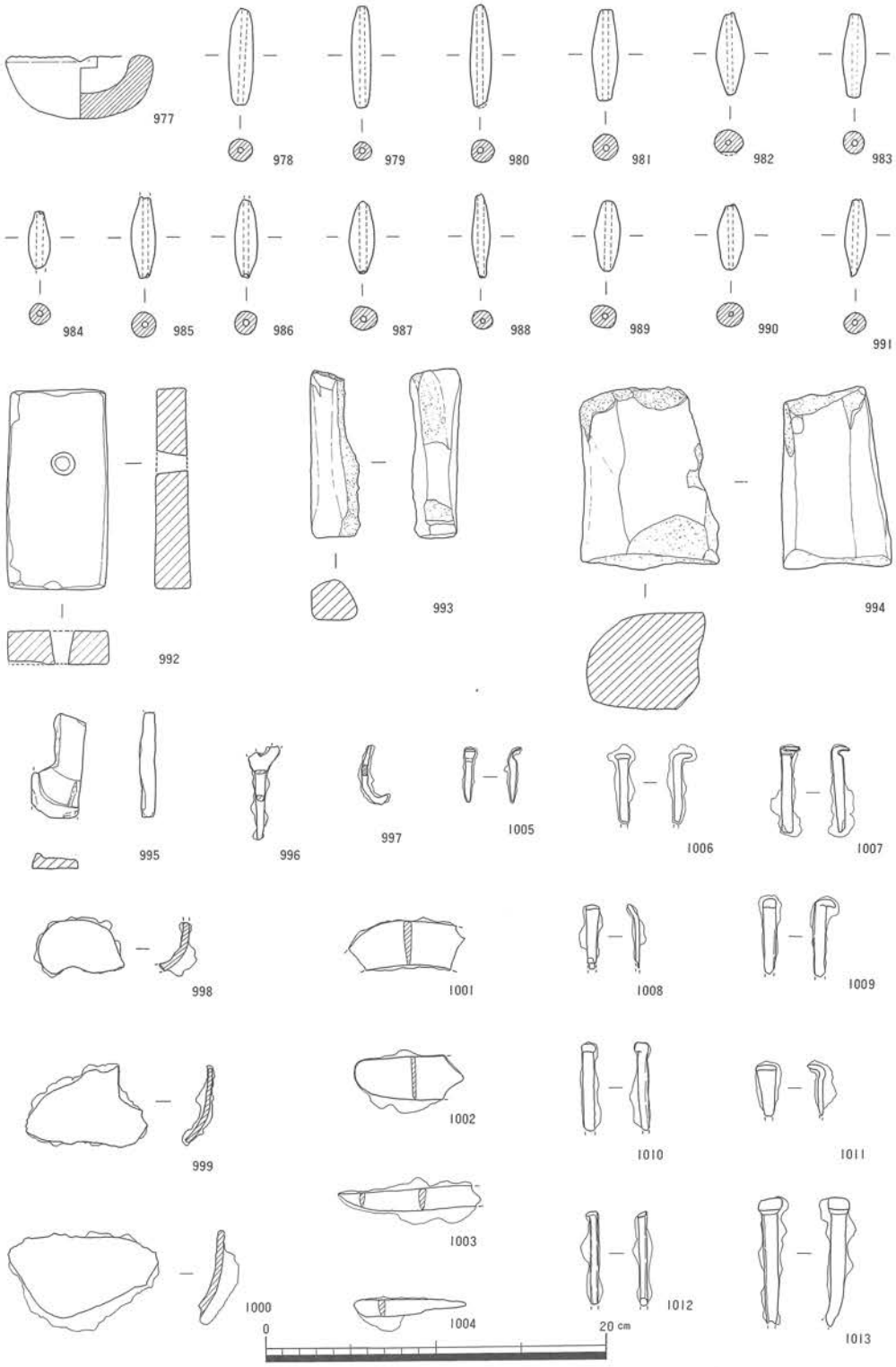
978～991は土錘である。土錘は調査区全体から500点以上出土しているが、形状はすべて図化した土錘と同じ紡錘形の管状土錘である。

992～995は石製品である。石板・砥石・硯を計4点図示した。992は滑石製の有孔石板で、ほぼ完存する。縦11.7cm・横5.8cm・厚さ1.8cmを測る。中央やや上端部に孔があけられる。孔径は1.0～1.3cmである。全体に丁寧な研磨が施される。

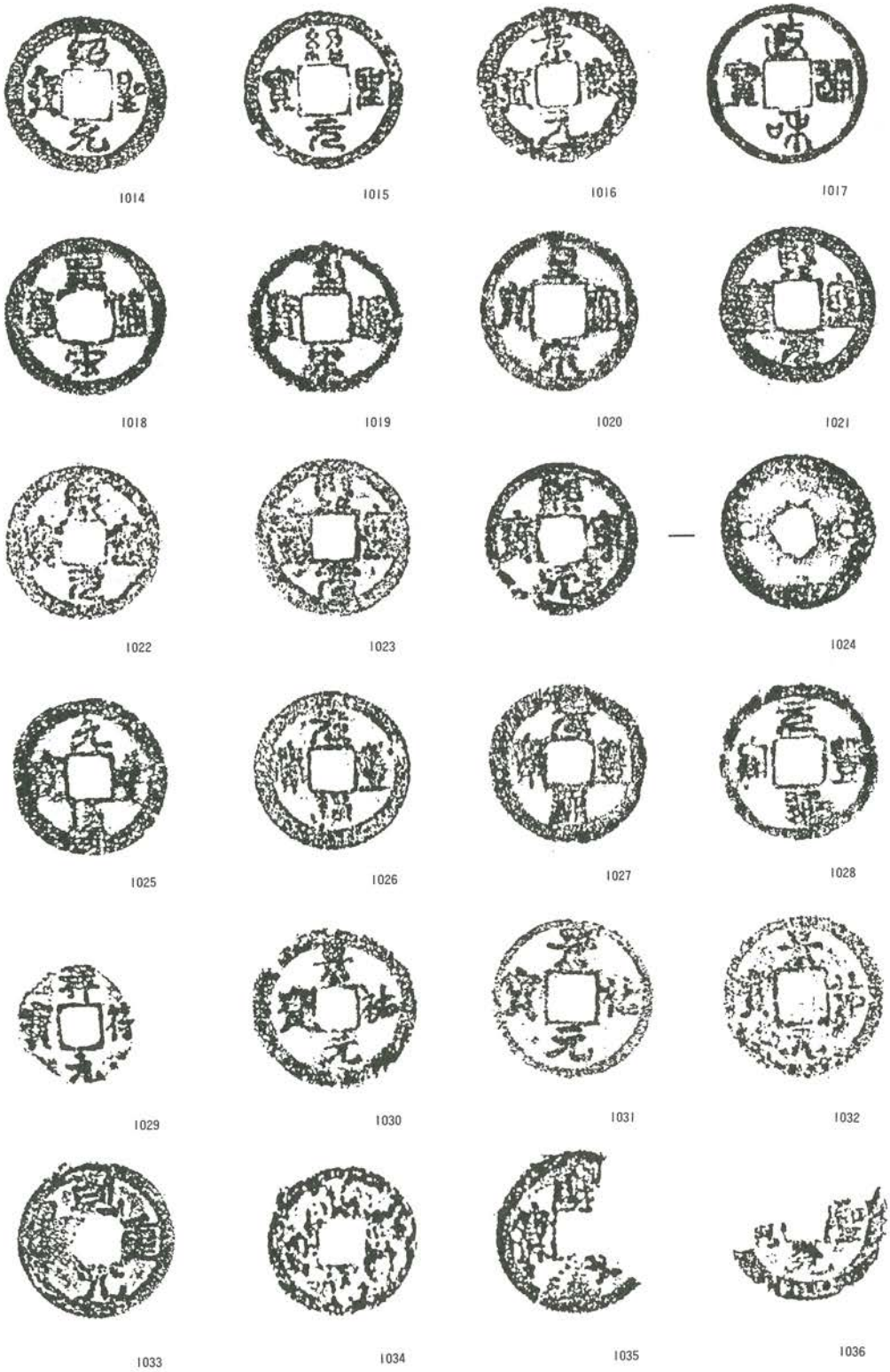
993・994は砥石である。いずれも砂岩製で、目は緻密であり、仕上げ砥と見られる。995は硯の断片であるが、本来は隅丸長方形の形状であったと見られる。海部の彫り込みは比較的浅い。

996～1036は金属製品である。鉄鏃・つり針・鉄鍋・刀子・鉄釘・銅銭などがあり、計41点を図示した。

996は形状から雁股の鉄鏃の断片と見られるが、やや不明確である。997はつり針である。998～1000は鉄鍋の体部の小片であるが、同一個体を別個に図化した可能性もある。1001は形状から鎌の可能性が高い。1002～1004はそれぞれ刀子の断片である。1005～1013は鉄釘である。いずれも断面が方形を呈する角釘であるが、1008・1011は偏平である。頭部が残るも



第180図　包含層出土遺物(24)－土製品・石製品・金属製品①－



第181図　包含層出土遺物(25)－金属製品②－　(縮尺はすべて 1/1)

のはいずれもＬ字形を呈する。

1014以下は銅銭で、計23個出土した。1033が「乾元重宝」で中国唐代のものであるほかは、いずれも北宋銭である。初鋳年代の最も新しいものは1111年の「政和通宝」（1017）である。

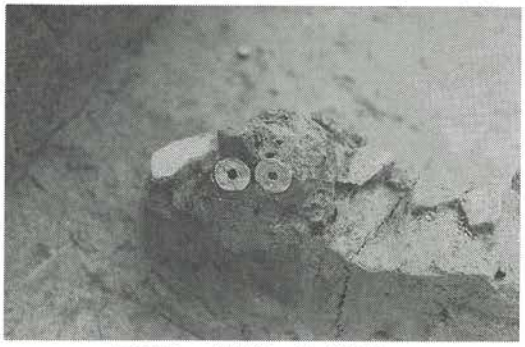


写真10　「銅銭」出土状況

註記

註１　Ａ調査区の南側約160㎡を徳島市教育委員会が昭和61年４～５月に調査を実施した。その概要は徳島市教育委員会『第７回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』（1986年）に紹介されている。

註２　本書で用いる輸入陶磁器の分類は、横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入陶磁器について一型式分類と編年について－」（九州歴史資料館『研究論集』４　1978年）・上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」（貿易陶磁研究会『貿易陶磁研究』№２　1982年）に拠った。以下、本文では、原則として横田・森田分類に拠る場合については特にことわらないものとする。

註３　広島県草戸千軒町遺跡出土の土師質土器の分類については、同遺跡調査研究所が年次的に刊行している各調査概報に拠る。

註４　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡－第32次発掘調査概報－1983』1985年。

註５　早島式土器については、福田正継「瀬戸内海中部北岸域の土師質椀について」（日本中世土器研究会『中世土器の基礎的研究』1985年）に詳しい。

第５章　遺構・遺物の検討

第１節　遺構の検討

中島田遺跡は鮎喰川の右岸に位置し、標高約3.5mの比較的低い平坦地に立地する。今回の調査は道路建設に伴う調査であったために、面的に広がる遺跡の限られた地域を帯状に調査したに過ぎず、遺跡全体の範囲を明確にするには到らなかった。ただ、西側については１次調査に平行して実施した確認調査によって、室町後半頃と見られる自然流路より西側には遺跡が広がらないことが確認された。西側以外の三方については、今回検出した遺構の状況から考えて、さらに調査区外にも遺構が広がることは確実と見られる。

今回の調査区内では、すでに述べたように掘立柱建物・溝・土坑[註1]・井戸・木棺墓・集石遺構などの遺構が検出された。ここでは第２遺構面で検出された主な遺構について若干の検討を加えることにしたい。

（１）建物跡

掘立柱建物跡は復原可能なものは全部で８棟であった。このうち建物203と建物204、建物207と建物208が重複することから、少なくとも２時期にわたって建物が営まれたことが窺える。しかし、その先後関係と個々の建物の時期差を識別することはできなかった。

復原し得た建物の規模は調査区外に延びると見られるものを除けば、２間×１間に復原される建物が２棟、２間×３間のものが２棟である。調査区外に延びる建物についてもこれ以上の規模の建物とは考え難いことから、当遺跡においては２間×１間から２間×３間程度の規模の建物が一般的であったと考えられる。柱間距離は1.3～1.5mとやや間隔が狭いものと、2.4mとやや長めのものがあるが、1.7～2.1mが最も一般的である。柱穴の規模についても径0.3～0.5mのものが大半を占め、特に建物間で差異は認められない。検出された柱穴群の中には結晶変岩の平石を用いた根石を持つものもあるが、復原し得た建物で根石を持つ柱穴は極めて少ない。このことは当遺跡ではまだ根石を据える建物は一般的でなかったけれども、一部では根石を持つ建物も出現しつつあったという過度的な段階にあったと考えられる。建物の向きについては軸方向を北を中心として計測すると、ほぼ磁北に沿う方向のものが建物201と建物203の２棟、４～６°西に振るものが建物202・建物204～208の６棟である。棟の方向は全体が不明なものが少なくないため、全体の傾向は不明とせざるを得ないが、建物201・建物203・建物204は南北の方向、建物205は東西方向と見られる。

（2）溝・溝状遺構

次に溝について検討を加える。溝は全部で40条近く検出されたが、これらの溝の中には一部が検出されたのみで、全体の規模や方向が明瞭でないものも若干含まれる。こうした不明瞭なものを除けば、当遺跡で検出した溝は、明らかに水路として機能していたと見られる比較的規模の大きな溝と、幅１m前後で、深さも0.1～0.2mと小規模な溝の２種類に大きく区分される。前者の溝としては溝203・溝204・溝205・溝206・溝219などがあり、後者には溝201・溝202・溝221・溝222・溝223などが上げられる。これらの溝の相互関係を見てみると、溝203・溝204・溝205は溝205埋没後に溝204、溝204埋没後にさらに溝203が掘られたと見られ、新旧関係は明瞭である。溝205・溝206はともに調査区を東西に横断し、ほぼ平行する。両者の規模を比較することは、ともに削平が著しいために困難な状況であるが、最も遺存状態の良好な東端部では比較的良く似た規模の溝として検出され、埋土も底に青灰色に近い粘土が堆積するなど、比較的良く似た状況を示す。この２本の溝は同時期に存在していた可能性が高いと見られるが、工事による削平により層序の上での確認は困難であった。次に、溝206・溝219は溝219が溝206に直交する関係にある。合流部は削平によって溝の基底部しか遺存していなかったため断定し難いが、溝219の埋土や遺存状態が良好であったＡ調査区や徳島市の調査区での状況から判断して、両者は一連の溝であった可能性が高い。

以上見てきたように、調査地内では、調査地を東西に横断する２条の溝と、その南側の溝に合流する南北方向の溝が流れていたものと考えられる。なお、平行して東西に延びる溝205と溝206の間の距離は約４～５mであるが、この２条の溝にはさまれた帯状の地域には全く遺構は認めることができなかった。ほぼ全面に遺構が広がる調査区内ではやや特異であり、この帯状の空間が道路として利用された可能性を示唆しているようにも思われる。しかし、この点については今回の調査では削平のために確認できなかったので、今後、延長部分の調査が行われる際に解明されることを期待したい。[註2]

次に、小規模の溝についてであるが、これらの溝の中には、溝201・溝202・溝220のように一端ないしは両端を閉塞することが確認されたものがあり、本来、水路としての機能を持たなかったことを示している。溝の方向はいずれも東西ないしは南北の方向であり、復原される建物の方向と一致することや、建物が復原される地点で検出されること、さらには溝223などのように、建物（建物207・建物208）を囲む形で延びていることなどから、これらの溝は建物ないしは屋敷地を区画するための溝であったと見られる。

（3）土坑

土坑は計60基検出されたが、これらの土坑は形状も方形・円形・不整形とまちまちであり、規模も様々である。こうした土坑ないしは土坑状の遺構の性格としては、墓、貯蔵用の穴、

ゴミ捨て場、さらには井戸などが想定されるが、出土遺物や施設などから明確に性格を決定し得る土坑は皆無に近い。そうした中で、土壙墓としての性格が有力と見られるのが、長方形あるいは長方形状と推定される土坑202・土坑205・土坑210・土坑213・土坑214・土坑216・土坑217・土坑218・土坑221・土坑239・土坑242・土坑247・土坑249などである。これらが土壙墓であるとすると、その特徴として副葬品を全く持たない点が上げられる。中世の土壙墓の検出例が県内では少ないために、比較し難いが、他県における検出例[註3]では土師質の椀・杯・皿、青磁や白磁の碗などが副葬される場合がむしろ多数を占めているのと際立った差異を示していることになり、今後の調査による資料の増加が望まれる。

（4）井戸

井戸は施設を伴うものはE調査区で検出された1基（井戸201）のみであるが、土坑として把握した土坑220・土坑228も素掘り井戸の可能性がある。井戸201は曲げ物の井筒・石列を伴う井戸であったが、廃絶時に一部の曲げ物や石の抜取りが行われた可能性が高い。検出された石列は肩の崩壊防止のために巡らされたものと思われるが、石組井戸の先駆的な形態とも考えられる。なお、この井戸は周辺の2～3棟の建物に伴う共用井戸であったと考えておきたい。

（5）自然流路

調査区の西端部で検出した自然流路はこれまで述べてきた遺構が営まれた時期と異なるものであり、集落廃絶後に流入した河川であったと考えられる。遺物が埋没したと見られる16世紀代にはすでに流路としての機能はなく、沼状となっていたことが、厚い粘土層の堆積から窺える。なお、この自然流路の西側一帯には厚い砂層の堆積が認められ、旧河道の様相を呈しているが、こうした河川の流入が中島田の集落の廃絶に何らかの影響を与えた可能性が高いと思われる。

第2節　遺物の検討

すでに第4章第1節において当遺跡出土遺物の概要についてごく簡単に触れたが、ここでは遺跡の年代観を示すことを前提として、これまで関係部分で個別的に取り上げてきた遺物のうち、主要な器種について、総括的な検討を加えることにしたい。

なお、検討の対象とする遺物は遺構出土の一括遺物に恵まれないため、本書に掲載した遺物全体とする。その点数は表1に示したように遺構出土遺物473点・包含層出土遺物563点の総計1,036点である。

表1　中島田遺跡出土遺物一覧表

区分	土師質土器									小計	瓦器・瓦質土器							小計	国内産陶器			
	杯	皿	椀	鍋	羽釜	脚部	すり鉢	竈	その他		椀	皿	鍋	羽釜	脚部	火鉢	その他		椀	小椀	すり鉢	こね鉢
遺構	107	49	55	19	7	3	1	1	2	244	29	6	1	4	2	1		43	9	1	4	32
比率(%)	44	20	22	8	3	1	0.5	0.5	1	(52)	68	14	2	9	5	2		(9)	15	2	7	52
包含層	68	104	53	26	13	11	1			276	38	20	6	12	5		1	92	7	1	12	39
比率(%)	24.5	38	19	9	5	4	0.5			(49)	46.5	24.5	7	15	6		1	(14)	7	1	13	42
計	175	153	108	45	20	15	2	1	1	520	67	26	7	16	7	1	1	125	16	2	16	71
比率(%)	33.6	29	20.8	9	4	2.8	0.4	0.2	0.2	(50)	54	21	6	12	5	1	1	(12)	10	1	10	46

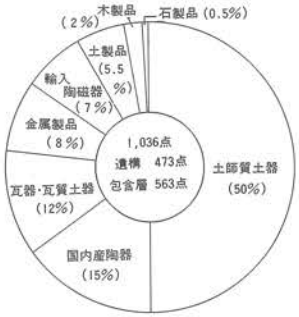
区分	国内産陶器			小計	輸入陶磁器								小計	土製品			小計	石製品			小計	
	壷	甕	その他		碗	小碗	杯	皿	梅瓶	四耳壷	水注	香炉		土錘	坩堝	羽口		砥石	石板	硯		銅銭
遺構		13	2	61	12	1		4	2				19	43		1	44	2			2	11
比率(%)		21	3	(13)	63	5		21	11				(4)	98		2	9.5	100			(0.5)	27
包含層	6	29		94	33	1	2	9	2	2	1	1	51	14	1		15	2	1	1	4	23
比率(%)	6	31		(17)	65	2	4	17	4	4	2	2	(9)	93	7		3	50	25	25	(1)	56
計	6	42	2	155	45	2	2	13	4	2	1	1	70	57	1	1	59	4	1	1	6	34
比率(%)	4	28	1	(15)	64	3	3	19	6	3	1	1	(7)	96	2	2	(5.5)	66	17	17	(0.5)	41

区分	金属製品						小計	木製品		小計	計
	鉄釘	刀子	鉄鏃	つり針	鍋	その他		木簡	その他		
遺構	21	2	2			5	41	5	14	19	473
比率(%)	51	5	5			12	(8)	26	74	(4)	(100)
包含層	9	3	1	1	3	1	41				563
比率(%)	22	8	2	2	9	2	(7)				(100)
計	30	5	3	1	3	6	82	5	14	19	1036
比率(%)	37	6	4	1	4	7	(8)	26	74	(2)	(100)

（1）出土遺物の器種構成

遺跡から出土する遺物の器種構成を見る場合、その素材としては良好な遺構出土の一括遺物を基に分析が加えられなければならないが、当遺跡ではすでに述べたように良好な一括遺物に恵まれない。そこで、資料操作上多くの難点があるが、ある程度の大枠を把握する手段として、本書で図示した遺物全体を素材として分析を加える。また、合わせて、今回の調査の中では最も良好な一括遺物として把握される溝206の土器だまり出土の遺物も単独で検討の対象として、前者の欠を多少なりとも補いたい。

本書で図示した遺物の全てを器種・器形ごとに示したのが表1である。この表に示した器種ごとの比率をさらに円グラフに示すと第182図のようになる。これによると当遺跡では土師質土器が全体の半分を占め、最も数量が多いことが改めて明らかになる。以下、国内産陶器、瓦器・瓦質土器、金属製品、輸入陶磁器、土製品、木製品、石製品の順となるが、土製品のうち土錘は図示可能なものを多数割愛したため、実際の比率はさらに高くなり、点数だけでは土師質土器に次ぐ位置を占めると考えられる。金属製品の比率が比較的高いのは銅銭に加えて、多数の鉄釘を図示したためである。



第182図　中島田遺跡出土遺物の分類

次に、溝206出土遺物についても同様の検討を加える。

次の表2は図示した溝206出土遺物の中から土器だまり以外の出土遺物を除いた遺物の点数を示したものである。

表2　溝206－土器だまり－出土遺物の器種構成

区　分	土師質土器					小計	瓦器		小計	陶器	小計	土製品	小計	計
	杯	椀	鍋	釜	竈		椀	皿		椀		土錘		
遺物数	33	17	1	1	1	53	2	1	3	3	3	1	1	60
比　率	(54)	(28)	(2)	(2)	(2)	88	(3)	(2)	5	(5)	5	(2)	2	100

表によると図示した60点の遺物のうち、土師質土器が88%と圧倒的多数を占めるのに対し、その他の遺物が極めて少ない比率であることが知られる。

以上、図示した遺物全体と溝206の土器だまりでのそれぞれの器種構成を見てきたが、ここで確かな事実として指摘できることは、中島田遺跡を営んだ人々が日常生活に使用した土

器の中では土師質土器の比率が圧倒的に高く、次いで陶器・瓦器が使用されたという点である。輸入陶磁器は当時かなり普及していたことは確実であるにしても、その比率は小さく、依然として磁器は貴重品として珍重されたことが推察される。

なお、遺物全体の中で、土製品－とりわけ土錘の占める比率が相対的に高い点は当遺跡が河川に近い地理的位置にあったことと関連するものであろう。また、金属製品の中でも銅銭・鉄釘が比較的多い点は既述したように当遺跡が流通ルートとのかかわりが推定される集落遺跡であったことと無縁ではないと考えられる。

以上、今回の調査で出土した遺物の器種構成について簡単な素描を行ったが、次に主要な器種・器形について検討を加え、当遺跡に年代観を与える手掛かりとしたい。

（2）土師質杯

杯は表からも窺えるように、掲載した遺物全体の50％を占める土師質土器の中でも約34％の比率を占め、図示した遺物の中では遺構出土107点・包含層出土68点の計176点と最も点数の多いものである。

本書に掲載した杯は、形態・手法等の差異によって杯A～杯Gに分類することができる。

杯A

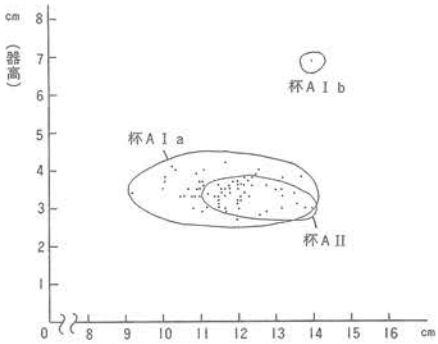
杯Aは杯の中では最も器肉が厚く、体部から口縁部にかけては直線的、またはやや内湾しながら、急激に上方に立ち上がり、口縁端部を丸く、またはやや尖り気味に仕上げる。底部はいずれも平底で、器表内面は全面にロクロ回転によるナデを施している。底部内面には成形によると見られる凹凸が顕著に認められるものが多い。外面についてもほぼ同様であるが、底部外面には回転糸切り痕を明瞭に留めるものと、その痕跡を丁寧にナデ消しているもの、両者の中間のものがある。胎土は全体に粗く、砂粒ないしは微砂粒を多く含む場合が多い。焼成はやや軟質で、赤褐色・橙色を呈するものが多い。また、底部と体部の境界付近に段が付くものも少なからず認められる。

このような杯Aは「粘土塊ロクロ法」[註4]によって製作されたと考えられる。粘土塊からロクロ回転を利用して体部・口縁部を引き出し、器肉の厚い部分、特に体部下半部をヘラ状工具で削り取った後、内面から外面にかけて回転を利用したナデを施し、最後に糸を用いて底部を粘土塊から切り離したと見られる。底部と体部の境界付近にまま見られる段は器肉を削り取った時、ないしは糸で切り離された時点でできたものが、そのまま残されたものであろう。

杯全体の中で、この杯Aに分類可能なものは、遺構出土のもの73・包含層出土のもの43の計116個体であり、杯全体の中でも圧倒的にこのタイプの杯が多い。ところが、この杯Aには形態・手法は同一でありながら通例の杯Aと比べて著しく器壁の薄いタイプのものが少数認められる。したがって、この薄手のものを杯AⅡとして分別することが可能である。（前

者の厚手のものを杯ＡＩとする）

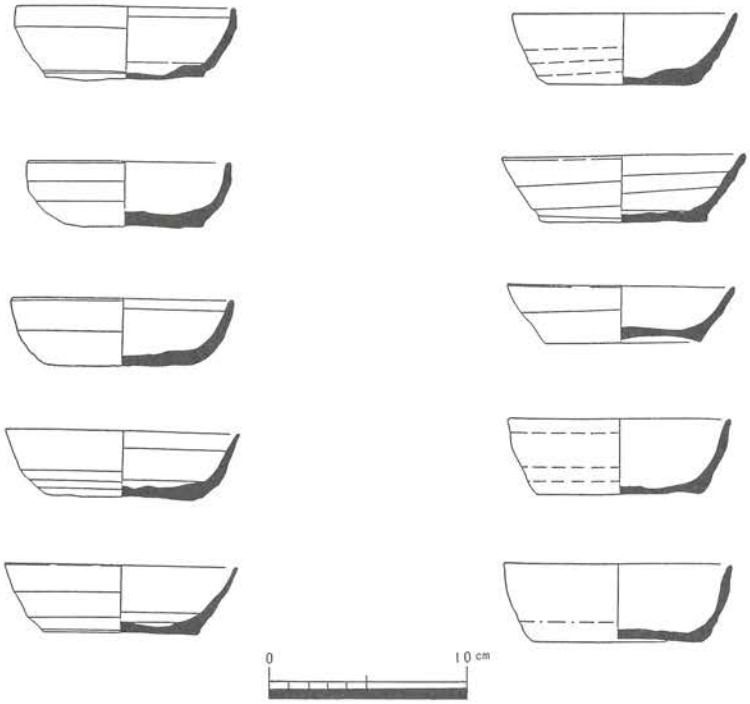
杯ＡＩは杯Ａの大部分を占めるもので、当遺跡で出土する杯の中では最も通有のものである。図示した個体数で、遺構出土のもの67・包含層出土のもの39の計106個体を数える。このうち、完形および完形に近いものは12個体ある。この12個体の法量は口径11.0〜11.9㎝・器高3.3〜4.0㎝・底径7.5〜9.3㎝の間に分布し、平均法量は口径11.6㎝・器高3.2㎝・底径8.0㎝となる。口径値と底径値の差がさほど大きくないのは杯Ａのタイプの大きな形態的特徴である。なお、破片をも含めた法量について見ると、口径の最小値は9.2㎝・最大値は14.0㎝、器高はそれぞれ2.7㎝・6.9㎝、底径は6.2㎝・11.5㎝であり、法量にはかなりのばらつきが認められる。そのことは杯Ａの口径・器高の分布を示した図（第183図）によっても裏付けることができるが、この図によるとただ１点のみ並みはずれて器高の大きい個体が存在することも判明する。この個体（517）は包含層出土のものであり、口径（復原値)14.0㎝・器高6.9㎝・底径10.0㎝を測る。ただ１点のみの出土であるが、器高値が極めて大きいことから、細分し得る個体と考えられる。通例のものを杯ＡＩａとし、この個体のように全体に法量が大きく、とりわけ器高値の大きいものを杯ＡＩｂとする。



第183図　杯Ａの法量分布

ところで杯ＡＩは調査区全体で普遍的に出土すること、胎土に結晶片岩の細粒を含むことなどから、在地産のものと考えて誤りないと思われる。しかし、徳島県内では中世遺跡の調査例が乏しいこともあり、在地で生産された杯については資料の蓄積が少なく、未だ編年的な試みも着手されていない現状にあるため、この杯ＡＩの変遷及び年代観についても不明な部分が多い。そうした中で、近年調査が行われた石井町ひびき岩16号墳の調査時に石室内から出土した一群の遺物は注目に価する。第184図がその土器であるが、[註5]ここには10個体の土師器（質）の杯が含まれている。この杯の形態的特徴はほぼ当遺跡出土の杯ＡＩに合うものである。法量について見てみると、平均値は口径11.7㎝・器高3.6㎝となり、法量の上でもほとんど同一である。胎土・色調がやや異なるものの両者が同系列の杯であることはほぼ確実と見られる。しかし、底部の切り離し方法に関して言えば、両者の間には技術的な差異が認められる。即ち、ひびき岩出土の杯はいずれも底部は回転ヘラ切りであり、糸切りのものは１点も見られない。このことはひびき岩出土の杯が製作された時期と中島田杯ＡＩの製作時期との間に技術的な転換が行われたことを示している。この転換の時期は在地産の土師器に糸切り手法が採用された時期にもあたり、土器製作上の画期と位置付けられる。では、その時期はいつごろに求められるであろうか。杯単独では年代を与えることは困難な現状であ

るので、共伴した白磁碗を手掛かりとして検討する。この白磁碗は玉縁の形状等から横田・森田分類のⅣ－２類に該当するとみられるが、Ⅳ－２類は12世紀後半以降に出土することが報告されている。したがって、ひびき岩出土の杯の年代もおおよそ12世紀後半以降と考えることができるが、下限については明らかにできないため、さしあたり中島田遺跡の年代以前の13世紀半ばまでの幅の広い時期と考えておきたい。



第184図　ひびき岩16号墳出土遺物

杯ＡⅡは杯ＡⅠに比して出土点数が少なく、図示したのは遺構出土のもの６・包含層出土のもの２の計８個体のみである。このうちほぼ完形に近いものは包含層出土の478のみである。この個体は口径12.0cm・器高3.0cm・底径8.9cmを測る。全体の法量の平均値は口径12.8cm・器高3.3cm・底径9.0cmであり、法量の上では杯ＡⅠとさほど大きな差異は認められない（第183図）。

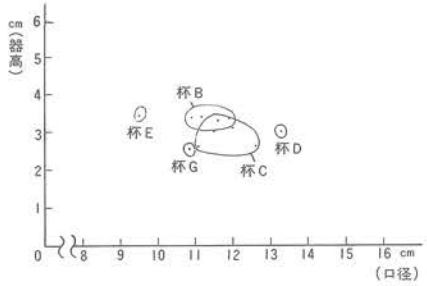
杯Ｂ

杯Ｂは底部を回転糸切りで切り離す点、赤褐色系の色調を示す点では、杯Ａと同じ特徴を持っている。しかし、第７図の分類図に例示した個体の形態からも知られるように、底径が小さく、体部下半部が大きく内湾する形態を示す。また、調整の上でも底部外面に板目が認められるものがあり、底部内面に一方向のナデが認められる点など、明らかに杯Ａのタイプとは分別されるものである。この杯Ｂは形態の上でも、また手法の上でも備前産と見られる陶器（須恵質）椀に近似しており、その摸倣品である可能性が高いと思われる。出土例は比

較的少なく、遺構出土のもの３点のみである。完形ないしは完形に近いものは出土していないが、復原値による平均法量は口径11.3cm・器高3.4cm・底径6.6cmである（第185図）。ちなみにこの杯Ｂの原形と推定した陶器椀の完形に近い個体の平均法量は11.7cm・器高3.4cm・底径5.8cmであり、比較的近い値を示す。

杯Ｃ

杯Ｃは底部を回転糸切りで切り離し、全体の器壁を極めて薄く仕上げるタイプの杯で、体部から口縁部にかけてはほぼ直線的に斜め上方に立ち上がるものと全体がやや内湾気味に立ち上がるもの、口縁部が大きく外反するものがある。全般に胎土は精良で色調は赤褐色～橙色を呈する。調整はロクロ回転によるナデが主体であるが、全体に丁寧な調整が加えられる。このタイプと見られる個体は遺構出土のもの３・包含層出土のもの２の計５個体と少ない。いずれも破片であり、正確な法量は得られないが、復原値による平均法量は口径11.8cm・器高2.9cm・底径6.5cmであり、全体に器高が低いという特徴が窺える（第185図）。



第185図　杯Ｂ～Ｅ・Ｇの法量分布

杯Ｄ

杯Ｄは図示可能であったのはわずか１点（１）のみである。体部が大きく外方に開く形態に特徴が見られ、胎土に微砂粒を多く含み、色調は橙色を呈する。底部の切り離し方法は不明である。このタイプのものは第２遺構面の遺構からは出土しておらず、わずかに第１遺構面の溝102から１点だけ出土している点や、本書第２篇に掲載した南島田遺跡第１包含層出土の杯に同タイプのものが認められることなどから、やや時期が下る可能性が高いと思われる。法量は小片からの復原値であるが、口径13.3cm・器高3.0cm・底径8.0cmである（第185図）。

杯Ｅ

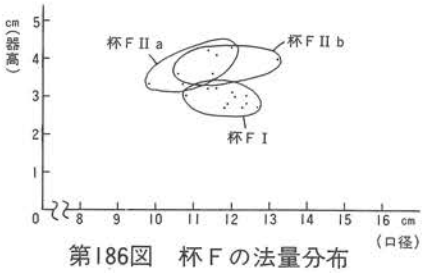
杯Ｅも出土例は包含層出土の１点（520）のみで、しかも破片のものである。この杯の特徴は口径に比して器高が大きく、椀形に近い形状を呈する点にある。体部は中位で大きく屈曲し、外反する口縁部に続く。胎土は微砂粒を含み、焼成はやや堅緻で、後述する杯Ｆに近いが、色調は淡赤褐色で、杯Ｆが灰白色系の色調を呈するのとは異なる。法量は復原値であるが、口径9.5cm・器高3.4cm・底径4.7cmである（第185図）。

杯Ｆ

杯Ｆは底部を回転ヘラ切りで切り離す杯で、色調は灰白色～黄褐色を呈し、杯Ａが赤褐色系の土器であるのに対し、白色系の土器と位置付けられる。体部から口縁部にかけては、斜

め上方へほぼ直線的に立ち上がるものが大半を占めるが、やや内湾気味のもの、口縁部が外反するものも少数認められる。この杯Fには口径に対する器高の比が比較的小さいものと器高が大きく、やや椀形に近い形状のものがある。口径に比して器高の小さいものはいずれも底部が平底状であるが、後者のものの中には平底状のものと丸底状のものが認められる。前者を杯FⅠ、後者を杯FⅡに分類し、後者をさらに底部の形状により杯FⅡaと杯FⅡbに細分する。

杯FⅠは遺構出土のもの11・包含層出土のもの8の計19個体出土している。完形および完形に近いものは出土していないが、正確な法量が得られる3個体の平均法量は口径11.5cm・器高3.0cm・底径6.6cmである。また全体の復原値による平均値では口径12.3cm・器高2.9cm・底径7.0cmである。このタイプのものには器高3.2cmを超えるものはない（第186図）。



第186図　杯Fの法量分布

このような杯FⅠの製作工程も基本的には杯AⅠと同様と考えられるが、底部には板目を留めるものがある。また、全体に器表の調整が丁寧に行われている。杯FⅠの胎土・焼成は後に述べる土師質椀に酷似しており、両者はセット関係にあるものと見られる。この土師質椀は後に指摘するように中部瀬戸内系の土器であることから、この杯FⅠもまた同系の土器と考えられる。確かに中部瀬戸内地方においては土師質椀とともに淡褐色を基調とする色調で、器形・法量が良くにている杯が多量に出土している。ただ、この杯には底部内面に一方向のナデを施すものが多いことが報告されているが、当遺跡出土のものでは明瞭でないなど、細部では技法上の差異が認められる。[註6] 細部ではなお検討を要するが、大筋としてはこの杯が中部瀬戸内系の杯であることは認められるように思われる。

中部瀬戸内地方の杯については草戸千軒町遺跡の出土資料に基づく編年観が見られるが、これによって中島田出土の杯FⅠの年代を推定すると、草戸のⅠ期新段階[註7]に位置付けられ、鎌倉時代の後期頃という年代観が与えられる。

一方、杯FⅡは杯FⅡaが遺構・包含層合わせて7個体、杯FⅡbが同じく4個体の合計11個体出土している。やはり完形および完形に近いものは出土していないが、正確な法量が得られる杯FⅡaの2個体の平均法量は口径11.1cm・器高3.5cm・底径5.5cm、杯FⅡbの1個体の法量は口径13.2cm・器高4.0cmである。また全体の復原値による平均値では杯FⅡaが口径10.5cm・器高3.6cm・底径5.6cm、杯FⅡbが口径11.1cm・器高3.9cmである。なお、杯FⅡaのなかには口径7.7cm・器高2.9cm・底径4.5cmと法量の小さいものが1点含まれる。この個体は法量の上ではやや特異であるが、細片のため細分しなかった。

杯G

杯Gは底部を回転ヘラ切りで切り離す点では杯Fと共通するものの、形態・胎土・焼成の点で、極めて器壁が薄く、胎土も水漉した精良な粘土が使用され、焼成もやや軟質であるなど全く異なる。このタイプに分類される個体は極めて少なく、法量が明らかになるのは土坑207出土の1点（325）のみである。この杯は口径10.9cm・器高2.7cm・底径9.0cm（第185図）を測り、底部をヘラで切り離した後、丁寧なナデを施している。底部外面には板目が認められ、底部内面には一方向のナデが施される。体部から口縁部にかけての器肉は特に薄く、全体に丁寧な作りの土器である。このタイプの杯の系譜については明らかではない。

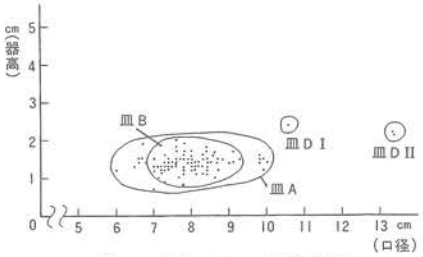
（3）土師質皿

ここで取り上げる皿は普通小皿と呼ばれる小形の皿がほとんどであるが、一部小皿に属さないものも見られるので、本書では一括して皿として取り扱った。皿は遺構出土のもの49、包含層出土のもの104、総数で153個体を図示したが、この数は、杯に次いで多くなっている。土師質土器全体の中では29%を占め、杯・椀と並ぶ主要な器形となっている。

本書に掲載した皿は、底部の切り離し方法および形態から大きく4つに分類される（以下、皿A～皿Dと表記する）。

皿A

皿Aは底部を回転糸切りで切り離すものであり、分類可能な皿の約70%を占める。短い口縁部がほぼ直立気味に付くものと、やや内湾気味に立ち上がるものが大半を占め、口縁部を外反させるものはほとんど見られない。器肉が厚く、胎土が粗いものが通例であるが、わずかながら器肉の薄いものが認められる。底部には回転糸切り痕を明瞭に留めるものと、丁寧にナデ消すもの、その中間のものがある。また、底部と体部の境界付近に段が付くものも認められる。色調は赤褐色系で、焼成はやや軟質である。完形および完形に近い12個体の平均法量は口径7.7cm・器高1.5cm・底径6.1cmである（第187図）。



第187図　皿の法量分布

以上のような特徴はすでに述べた杯AⅠaに共通するもので、両者はセット関係にあると見られ、製作技法もほぼ同一である。この皿と杯AⅠaとは共伴することが多いことから、年代についても杯AⅠaと同時期と考えられる。

この皿の系譜についても在地産の皿の資料が不足しているため、ほとんど明らかではないが、土師器の皿の法量が小形化する傾向は庄遺跡徳大体育館地点の水路状遺構出土の皿[註8]に見られるように平安時代半ば頃の段階に始まると考えられ、その傾向は鎌倉時代に入ってもな

お続いたと見られ、前述したひびき岩16号墳出土遺物に含まれる２点の小皿より、中島田出土の小皿がさらに法量を減じていることが、その事実を示している。

なお、皿Ａには口径が10㎝前後のやや大形のものも少数認められるが、良好な資料に恵まれなかったので今回は細分していない。今後資料の増加によっては細分の可能性を残していることを付け加えておきたい。

皿Ｂ

皿Ｂであるが、皿Ｂは皿全体の14％程度の検出率で、出土量そのものはさほど多くない。この皿の特徴は底部を回転ヘラ切りで切り離す点にあるが、形態の上でも口縁部が外反気味に斜め上方に立ち上がるものが多いなどの特徴が窺える。色調は、皿Ａが赤褐色系の赤色土器と見られるのに対し、全体に白っぽい色調を呈する。胎土・焼成は杯ＦＩに共通し、両者はセット関係にあることが窺える。確実な法量が得られるものは３点のみであるが、その平均値は口径7.8㎝・器高1.4㎝・底径6.0㎝である（第187図）。なお、この皿Ｂも中部瀬戸内系土器の一つと見られるが、中部瀬戸内地方において底部をヘラ切りするこのタイプの皿（小皿）が盛行したことに対し、中島田遺跡では糸切り底の小皿が中心であったことは注目される。[註9] こうした傾向が徳島県全体の傾向であったのか、あるいは中島田遺跡周辺の限られた傾向であったのかは、今後の重要な検討課題となろう。

皿Ｃ

次に皿Ｃであるが、この皿Ｃは底部が高台状に突出する特異な形態のものである。図示した点数は18点で、さほど多くないが、このうち半数以上は遺構内から出土しているものである。しかし、ほぼ完形に近いものは、皿Ｃの中では極めて大形で特異な位置を占める包含層出土の１点（643）のみであり、そのほかはいずれも分厚い底部のみの破片で、通常の皿Ｃの形態的特徴全体を知ることはできない。（前者を皿ＣⅡ、後者を皿ＣＩとする。）

皿Ｃの中では法量の上で特異なものではあるが、大形品である643を例にとると、分厚い底部に内湾気味に立ち上がる短い口縁部が付き、先端部を尖り気味に仕上げている。底部はナデが施されているが、回転糸切り痕を留める。底部外面以外にはロクロナデが施される。色調は淡褐色で、胎土には微砂粒を多く含み、焼成は軟質である。皿部を欠失するその他の個体も調整・色調等ではこうした特徴が窺える。ところで、こうした特徴は基本的に杯ＡＩａ・皿Ａに共通するものであり、この三種の土器はセット関係にあると考えることが可能である。

なお、皿Ｃと同形態の皿は岡山県地方でも出土しており、「小形深皿」の名称で呼ばれている。[註10]

皿Ｄ

皿Ｄは手づくねによって成形された土器で、自然流路から出土した３点（428～430）が検

出されたのみである。この3点の皿はいずれも京都系の土師皿の特徴を備えている。16世紀頃のものであろう。口径の大小によってⅠ、Ⅱに分別される。

なお、徳島県内ではこうしたタイプの土師皿の出土例は珍しいが、筆者の実見したところでは、藍住町勝瑞城付近で出土したと伝えられる皿がこのタイプであった。今後、出土例が増加することと思われる。[註11]

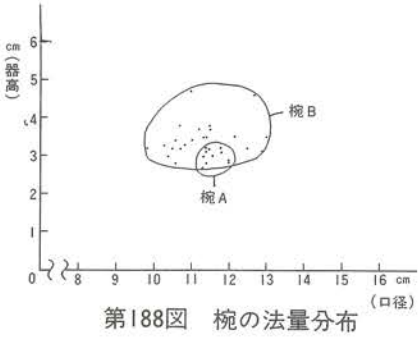
（4）土師質椀

本書に掲載した土師質椀は遺構出土55点・包含層出土53点の計108点で、これは土師質土器全体の約21％にあたる。

当遺跡で出土する土師質椀はすべて中部瀬戸内地方を中心として多量に出土する「早島式土器」と呼ばれているタイプの椀に限られる。この椀は高台の有無によって大きく椀A・椀B[註12]に分けることができる。

椀A

椀Aは無高台のものであるが、出土点数は少なく、図示したのは遺構1・包含層3の計4点で、分類可能な椀全体の約5％に過ぎない上、完形のものは出土していない。復原値による平均法量は口径11.7cm・器高2.9cmである（第188図）。



第188図　椀の法量分布

椀B

椀Bは土師質椀の主要なもので、底部に高台を貼り付けるタイプである。確実な法量が得られる個体の平均法量は口径11.2cm・器高3.3cm・高台径4.4cmである（第188図）。

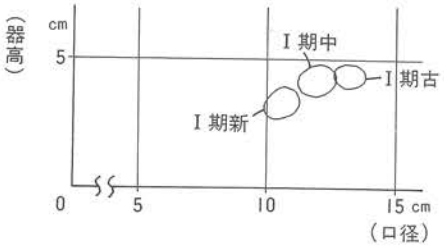
この椀は体部から口縁部にかけてゆるやかに内湾しながら立ち上がるもの、体部中位から上部にかけて屈曲し、体部外面に稜を形成するものが大半を占める。口縁端部をわずかに肥厚し、丸く仕上げるものが多い。胎土は微砂粒を含み、焼成は比較的堅緻であり、灰白色を呈するものが多い。

このような土師質椀が中部瀬戸内系の土器に属することはすでに述べたが、中部瀬戸内地方で出土する土師質椀については当該地方における中世土器の中でもとりわけ研究が進んでいる土器であるので、以下、そうした研究に依拠しつつ、当遺跡出土の土師質椀の年代について検討を加えたい。

中部瀬戸内地方でこのような土師質椀が出現するのは11世紀後半といわれ、その背景には畿内の瓦器椀の影響が想定されている。[註13] 中部瀬戸内地方ではこうした椀は室町時代後半頃まで使用されたといわれるが、[註14] 出現期から衰退期にかけての間の変遷は基本的に技術の簡略化

・法量の減少化として現れるという。

以上のような中部瀬戸内地方における土師質椀の変遷を念頭において、当遺跡出土の椀について見てみると、先に示した平均法量が注目される。草戸千軒町遺跡ＳＤ1290出土土器を検討した鈴木の報告[註16]によると、草戸Ｉ期の古段階から新段階にかけての高台付椀（草戸分類の椀ＢＩ）の法量変化は第189図のように示される。この図にしたがうと、中島田出土の椀の平均法量はＩ期中段階と新段階の中間的な有り方を示している。草戸千軒町遺跡で設定されるＩ期は鎌倉時代を中心とした時期、Ⅱ期は南北朝時代を中心とした時期と考えられていることから、当遺跡出土の椀の年代も鎌倉時代後半頃、13世紀後半から14世紀初頭頃に位置付けられると考えられる。



第189図　椀ＢＩの法量変化

なお、土師質椀の層位的把握が可能であった尾道市街地遺跡の例では、室町時代後半とされる第８層から第14層までの間においては椀Ａ（丸底のもの）[註17]のみが出土し、室町時代前半を中心とする時期に比定される第15層から第18層までの間では椀Ａ・椀Ｂ（高台付のもの）・椀Ｃ（底部を押えて安定させるもの）が出土し、特に椀Ａが多いことが報告されている。

以上のような報告を参照すると中島田遺跡では法量の減少化・高台の退化傾向が顕著な椀に混じってごく少量の無高台の椀が認められるという傾向は尾道市街地遺跡における第18層形成直前の状況を示すものと考えられ、中島田遺跡の土師質椀は鎌倉時代後期から室町時代初期頃の年代観が想定される。

以上の検討により、当遺跡出土の土師質椀についてはほぼ鎌倉時代後半から室町時代初期頃のものと考えることが可能と思われる。

（５）鍋

当遺跡で出土した鍋は遺構出土のもの20・包含層出土のもの32の計52個体である。この鍋には土師質のものと瓦質のものがある。瓦質に分類したものの中には土師質の可能性が残るものも若干含まれるが、土師質として図示したものは遺構19・包含層26の計45個体、瓦質は遺構１・包含層６の計７個体であり、全体の87％が土師質である。

土師質の鍋は口縁部の形態から大きく鍋Ａ・鍋Ｂ・鍋Ｃに分類される。

鍋Ａ

鍋Ａは口縁部が直立気味のもので、計７点ある。遺構からの出土例はなく、いずれも包含層からの出土である。形態上は口縁端部をあまり拡張しないものから、端部を押し広げて、端面を凹面に作るものまで認められ、時期差があるものと考えられる。口径はいずれも小片

のため正確さに欠けるが、最小のもので19.5㎝、最大のもので29.4㎝に復原され、平均値は約25㎝である。

このタイプの鍋は高知県田村遺跡などで類例が知られ（田村分類の土師質土器鍋Ｂ－Ⅴ類）[註18]、15～16世紀頃の遺構から出土している。

鍋Ｂ

鍋Ｂは口縁部が「く」の字状に大きく外反するタイプのもので、遺構出土のもの14・包含層出土のもの11の計25点を図示した。これは土師質・瓦質の鍋全体の48％にあたり、この鍋Ｂが当遺跡では最も通有なタイプの鍋であったことを示している。形態上の特徴は外反する口縁部にあるが、体部は大きく内湾し、その傾きから器高の大きいものとやや小さいものがあることが窺える。底部は丸底を呈すると見られる。調整については口縁端部はいずれもヨコナデを施している。内面の口縁部には横または斜め方向のハケ目を施すものとヨコナデを施すものがある。内面の体部には、横方向のハケ目が顕著に認められるものが多い。外面の器表面にはユビオサエが施され、口縁部から体部にかけて縦方向または斜め方向のハケ目が施されるものもある。器壁はいずれも薄手であるが、やや特異なものとして器壁が極めて厚いものが１点（261）だけ出土している。胎土はいずれも砂粒を多く含み、焼成は比較的堅緻である。色調は外面に煤が付着するものが大半であるため、外面は黒色を呈するが、内面は褐色系の色調を呈する。完形のものは出土しておらず、いずれも破片であるが、復原により確実な法量が得られた個体では口径27.0㎝・器高12.9㎝を測る。やや正確さに欠けるが口径の復原値の平均は29.9㎝で、最小値は25.0㎝・最大値は36.0㎝である。この数字によると器形の大小によって分別される可能性があるが、良好な資料に恵まれないため、今回は細分していない。

ところで、このようなタイプの鍋は県内では鳴門市中内遺跡Ｅ調査区ＳＤ201出土遺物のなかに類例が見られ、調査者によって室町時代末～安土桃山時代の年代観が与えられている[註19]。また、杯の項で言及したひびき岩16号墳の石室内出土遺物の中にも口縁部を外反させる脚付きの鍋が見られる。この鍋は中島田出土のものとは体部の形態等が異なるものの、中島田出土の鍋の初源的な形態のものである可能性が高い。

なお、鍋Ｂには口縁部の上面を平坦に作るものと、凹面に作るものが認められる。前者を鍋ＢⅠ、後者を鍋ＢⅡとする。

鍋ＢⅡは口縁部が「受け口」状を呈するもので、図示したのは遺構出土のもの１・包含層出土のもの３の計４点と数は極めて少ない。この形態のものはむしろ典型的には瓦質のものに認められ、瓦質の鍋はすべてこのタイプと同形態である。

このタイプの鍋は百間川当麻遺跡出土資料を分析した福田の報告によると、鍋ＢⅠのタイプの鍋と共伴して出土することから、両者の相違は「同時期におけるそれぞれの土器の個体[註20]

差による現象と推定され、時間的な経過によって生じた形態の変化と理解するのは無理である」と指摘されている。中島田遺跡においてもほぼ同時期と見られる遺構から両者とも出土することから、そうした結論は支持されるものと思われる。鍋ＢⅡに一応分類した個体のなかには鍋ＢⅠとの中間的な形態のものが認められることも両者の間にさほど懸隔が無いことを示している。にもかかわらず、ここでこのタイプを分別したのは先に述べたように瓦質の鍋がもっぱらこの形態であることから、単なる個体差として捉えるより、このタイプの鍋が瓦質の鍋の形態を模倣して作成した可能性が考えられることによる。この点については、なお資料不足で結論を出すことができないが、今後の課題としてさらに検討を加えたいと思う。

瓦質の鍋についても簡単に述べておきたい。すでに述べたように瓦質の鍋の出土点数は比較的少ないが、形態的にはいずれも土師質の鍋Ｃと同じ、口縁部が「受け口」状に屈曲する形態を示す。いずれも細片であるが、復原される口径の平均値は22.6㎝であり、土師質の鍋に比して小形品であることが判明する。調整はいずれも口縁部に丁寧なヨコナデを施し、内面にナデ、外面にユビオサエを施す。比較的丁寧な作りのものが多い。

このような瓦質の鍋は平安京で比較的多く出土しており、同志社中学校体育館ＳＤ2302・常磐井殿町遺跡ＳＫ306などに類例が見られる。前者は平安京のⅡ期、後者は同Ⅲ期に位置付けられており、[註21]ほぼ鎌倉時代から南北朝期のものとされる。したがって、当遺跡出土のものも鎌倉時代から南北朝期のものと考えて差支えないものと思われる。

鍋Ｃ

最後に鍔が付く鍋Ｃであるが、このタイプの鍋は口縁部の形状等によってさらに鍋ＣⅠと鍋ＣⅡに細分される。

鍋ＣⅠは口縁部全体が内傾するものである。鍋ＣⅠは出土例が少なく、わずかに自然流路から１点（437）出土したのみである。この鍋は口縁部を内側に折り曲げて、端面を幅広く作る。拡張した端部の下端部は鍔状に張り出す。体部は直立気味に立ち上がるが、底部は丸底状である。口縁部はヨコナデ、内面の体部から底部にかけてはヘラケズリ、体部外面にはユビオサエ、底部外面には粗い目の格子目叩きが施される。共伴する輸入陶磁器などから考えて15世紀末から16世紀前半の年代観が想定される。

鍋ＣⅡは口縁部が外反し、体部外面に叩き目が施されるものである。このタイプのものは出土点数が少なく、自然流路から出土した１点（438）と包含層から出土した３点（725～727）の計４点のみである。自然流路出土の438は口径27.2㎝に復原される。体部から口縁部にかけては内湾気味で、口縁端部はやや外反する。口縁部全体はヨコナデで仕上げられるが、内面はヘラケズリが施され、外面の器表面には粗い目の平行叩きが施される。平行叩きは726にも認められる。

鍋ＣⅡは高知県田村遺跡において鍋Ａに分類されるタイプのものである。この鍋Ａが出土

する遺構は多いが、ほぼ同様の形態のものが出土する遺構としてはＬｏｃ．25のＳＤ１[註22]がある。この溝は15世紀代に機能していたと考えられている。中島田遺跡出土の鍋Ｄもほぼ同時期と考えて差支えないであろう。

（６）羽釜

羽釜は遺構出土のもの11・包含層出土のもの25の計36個体図示した。羽釜にも土師質のものと瓦質のものがあり、土師質は20・瓦質は16を数える。口縁部の形態・脚の有無等により羽釜Ａ・羽釜Ｂ・羽釜Ｃに分類できる。

羽釜Ａ

羽釜Ａは口縁部が直立気味のもので、土師質のもの11・瓦質のもの４の計15点ある。いずれも破片で、全体の法量・形状等が明らかになるものはない。小片による復原値のためやや不正確なものもあるが、口径は19.4～32.2㎝の間に分布し、法量は変化に富む。調整はいずれも口縁部から鍔部にかけてはヨコナデまたはナデで仕上げられるが、体部外面はユビオサエのものとユビオサエ後にナデを施すもの、縦方向のハケ目を施すものなどが見られる。また、体部内面はナデで仕上げるものが一般的であるが、中には横または斜め方向のハケ目を施すものも少数認められる。鍔は貼り付けのものが一般的である。なお、鍔の下部に棒状工具の先端で圧着した痕跡が認められるものも土師質・瓦質を問わず認められる。

羽釜Ｂ

羽釜Ｂは口縁部が内湾するもので、土師質のもの５・瓦質のもの11の計16個体ある。復原による口径は15.0～26.4㎝の間に分布するが、口径不明ながら鍔の径が40㎝を超える大形のものが１点（820）認められる。口縁部・鍔部はヨコナデまたはナデで仕上げられるのが一般的であるが、体部外面はユビオサエのものとナデを施すものがある。体部内面はナデで仕上げるものが多い。このタイプのものにも棒状工具の圧痕が認められるものがある。

羽釜Ｃ

羽釜Ｃは脚が付くもので、土師質のもの３・瓦質のもの２の計５点ある。以上の５点はいずれも脚の貼り付け痕跡が認められたもので、口縁部の形態から本来は脚がついたと推定されるものも羽釜Ｂの中には認められる。いずれも破片であり、口径は復原値であるが、14.2～21.0㎝の間に分布する。この口径分布から見て、羽釜Ｃの口径が羽釜Ａ・Ｂに比較してやや小さいことが判明する。鍔はいずれも小さく、その直下に脚部を貼り付ける。調整は全体にヨコナデ・ナデで仕上げられるが、体部外面はユビオサエが施されるものがある。

なお、以上のほかにいわゆる「茶釜」と呼ばれるタイプのものが、包含層から１点（826）出土している。この茶釜は瓦質のものであり、時期的にやや下るものであろう。

（7）瓦器

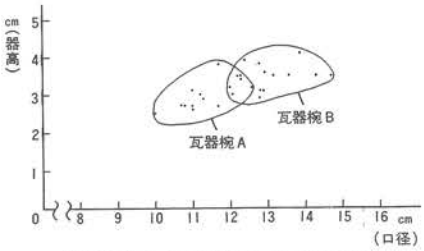
中島田遺跡で出土した瓦器には椀と皿がある。椀は遺構・包含層合わせて67個体を図示した。これは瓦器・瓦質土器全体の54％を占め、最も多い。椀は高台の有無によって瓦器椀Ａ・瓦器椀Ｂに分類される。

瓦器椀Ａ

瓦器椀Ａは無高台のもので、遺構４・包含層14の計18個体を図示した。これは瓦器の椀全体の約53％にあたり、むしろ無高台の椀の方が多いことが知られる。法量が正確に得られるものの平均値は口径11.4cm・器高2.8cmである（第190図）。このような高台を消失した瓦器椀が出現するのはⅣ－２期からで、Ⅴ期には高台を有するものは見られなくなることが報告されている。[註23] 当遺跡の瓦器椀ＡもⅣ－２期から３期にかけてのものと考えられる。

瓦器椀Ｂ

高台を貼り付ける瓦器椀Ｂは遺構６・包含層10の計16点図示した。法量が正確に得られるものは４点と少ないが、この平均は口径12.8cm・器高3.4cmである。また、遺構出土のもの５点の平均法量は12.9cm・器高3.6cm・高台径3.5cmであり、包含層出土のものも加えた15点の平均法量は口径12.2cm・器高3.2cm・高台径3.2cm（第190図）となる。高台はいずれも粘土紐を貼り付けただけの退化したものである。また、暗文は、底部内面については平行線状の暗文を持つものが３点（いずれも包含層出土）、鋸歯状の暗文のものが１点（包含層出土）認められるのみでほかは省略されており、体部内面は簡略化された渦巻状のものと暗文を省略するものがある。暗文の上からも瓦器椀としては退化傾向が窺えるものが多い。



第190図　瓦器椀の法量分布

以上のような法量・高台の形状・暗文等は、いずれもⅣ－１期から２期にかけての瓦器椀の特徴を示すものと考えられる。Ⅳ期の実年代観は14世紀代とされることから、[註24] 当遺跡出土の瓦器椀はほぼ14世紀代前半の年代観が与えられる。

瓦器皿

次に皿についてであるが、皿は遺構６・包含層20の計26点を図示した。このうち、３点はやや大形で、器壁が厚く、和泉型とは異なるタイプと見られる。この３点を除いた法量は、口径6.0～8.6cm・器高0.8～1.9cmの間に分布する。その平均法量は口径7.8cm・器高1.4cmである。完形のものは１点しかないが、この法量は口径8.2cm・器高1.9cmである。底部は平底状のものとやや丸底状のものがあり、口縁部をやや外反させ、端部を肥厚させるものが多い。法量から考えてⅣ－１期ないしは２期に属するものと考えられる。

皿の中には先に指摘したようにやや厚手で、口径が10㎝前後のやや大きいものがごく少数認められる。いずれも包含層出土のものであるが、このうち、806は端部を丸く収めるが、805・807は尖り気味に仕上げており、やや特異である。この皿が和泉型に属するかどうかは不明であるが、口縁部の形態・手法は南島田遺跡出土の瓦器椀B・Cに共通すると見られるので、瓦器椀B・Cとセットで製作されたと推定される。

（8）魚住焼

当遺跡では東播系須恵器と見られる遺物が多数出土しているので、これらを一括して検討を加える。器形としては椀・鉢・甕があるが、量的に多いのは鉢である。

鉢は通称こね鉢と称されているもので、破片の中に片口が付くものが認められることから、本来は片口を持つものが多かったと考えられる。本書では遺構出土のもの32・包含層出土のもの39の計71点を図示したが、いずれも破片で、完形のものは認められない。破片からの復原のため、法量はやや不正確であるが、口径は19.8〜34.0㎝の間に分布し、口径の平均は26.5㎝である。器高が明らかになるものはない。

当遺跡出土の鉢の形態的特徴は口縁端部の拡張が著しいものが目立つこと、端面に丸みを持つものが多いことである。底部の形状等は資料が乏しく詳らかにできないが、遺存する例では平底で、回転糸切り痕を留めるものばかりである。また、口縁部外面は重ね焼によって黒色を呈するものが目立つ。成形・調整はロクロによって行われる。内面の器表面には丁寧なナデを施すものも見られる。外面の調整はやや粗く、中には器面に凹凸を留めるものが見られる。

東播系須恵器の生産地としては、すでに神出窯跡・魚住窯跡などが知られているが、当遺跡のものは共伴する遺物の年代などから13世紀後半から14世紀前半頃の年代観が想定されるので、この時期に活発に生産を行っていた魚住窯の製品であると推定される。魚住窯跡出土の鉢についてはすでに中尾川支群の窯出土資料および赤根川支群の表採資料に基づく報告があるが、[註25]これによると当遺跡出土のこね鉢の大半は魚住窯跡の中でも、13世紀後半に中尾川支群から生産の中心地が移動したとされる赤根川支群の製品と共通する形態上の特徴を備えている。この赤根川支群における生産の状況については窯跡の調査が行われていないことから不明な部分が多いが、消費地遺跡の出土資料によって、「圧倒的多数の片口鉢とごく少量の甕が生産されたこと、形態的な変遷もあまり大きな変化はない」こと、さらに「14世紀前半代を法量のピークとしてそれ以降は徐々に、特に器高と口径の退化が著しいこと、14世紀初頭前後に口縁部外面を支点とする重ね焼きが導入されたと推定される」ことなどが指摘されている。[註26]

次に甕についてであるが、図示した甕の中で、魚住焼と見られるものには溝206出土の219

がある。219は口縁部破片で、大きく外反する。色調は黒色を呈し、焼成は瓦質に近い。包含層出土の899は、口縁部の形状等から東播系の製品と考えられるが、色調・焼成等がやや特異であり明確ではない。この甕は破片を接合した結果、ほぼ器形全体が復原できたもので、口径25.4cm・胴径42.7cmを測り、丸胴を呈する。口縁部は大きく外反し、胴部外面には綾杉状の叩きが全面に施され、色調は黄褐色で、焼成はやや軟質である。この甕とほぼ同様の器壁で外面に綾杉状の叩きを施したものが包含層から数点出土しており、拓影を示した（915～918・921）。これらも東播系の甕の可能性があるが明確ではない。

なお、徳島県内ではこれまでにも少量の東播系須恵器が出土した遺跡はあるが、当遺跡のように量的にもまとまって出土したのは初めてである。このことは当遺跡出土の遺物が示す[註27]年代である13世紀後半から14世紀前半頃に到ってこうした製品が阿波国内に大量に流入したことを示しているように思われる。

（9）備前焼

当遺跡からは備前焼と見られるすり鉢・壷・甕などのほか、備前焼の窯から出土する瓦質に近い椀に形態・手法がほぼ共通するものも出土している。椀以外はいずれも細片のものが多いが、先学の研究成果等に拠りつつ、当遺跡出土遺物の年代を検討したい。

まず、すり鉢であるが、本書に掲載したすり鉢は遺構出土のもの4・包含層出土のもの12点である。いずれも破片で完形ないしは完形に近いものは出土していない。したがって法量は復原によるものであるが、口径は25.8～31.0cmの間に分布し、平均は28.2cmである。内面の櫛描条線は6～9条で、6条のものと9条のものが比較的多い。口縁部の形態等によって、その時期について見ると、間壁編年のⅢ期は土坑206出土の323・包含層出土の834・836～838、Ⅳ期前半は包含層出土の832[註28]・835・839・840、Ⅳ期後半は包含層出土の842、Ⅴ期は包含層出土の841となると見られる。Ⅲ期は鎌倉時代後半から南北朝期前半頃、Ⅳ期は南北朝期後半から室町時代半ば頃、Ⅴ期は室町時代末から江戸時代初頭頃に比定される。当遺跡出土の場合、遺構出土のものは点数が少ないがⅢ期と見られることから、遺構に伴う備前焼のすり鉢は鎌倉時代後半から南北朝期にかけての年代が与えられる。しかし、包含層出土のものについては、遺構出土のものと同時期のものが比較的多いが、南北朝期後半以降のものも含まれる。

次に甕についてであるが、備前焼の甕と見られるものは溝205出土の143・自然流路出土の442・443・445の4点を図示したのみで、その数は少ない。このうち、443・445は底部破片である。143は断面が球形に近い形状であり、Ⅲ期に属すると考えられる。442は口縁の玉縁が下方に長く垂れ下がるものであるが、外面には凹凸が見られず、ほぼⅣ期後半の時期に属すると見られる。

壷は出土点数が少なく、図示し得たのはわずかに包含層出土の３点（888〜890）のみである。888はやや外方に開き気味の口縁部破片で、端部はわずかに玉縁状に作る。Ⅲ期か。889は体部から口縁部にかけての破片であり、内面には顕著なロクロナデの痕跡を留める。口縁部は短く立ち上がり、わずかに玉縁となる。Ⅲ期か。890は底部の破片であるが、やや突出気味の底部に特徴が認められる。時期は特定し難いが、やや時期が下る可能性がある。

備前産と見られる椀は遺構出土のもの８・包含層出土のもの５の計13点である。このうち、溝206出土の214、溝223出土の292はほぼ完形で、前者は口径12.0㎝・器高3.2㎝・底径6.6㎝、後者は口径11.3㎝・器高3.6㎝・底径5.0㎝の法量を持つ。破片も含めた法量は口径10.0〜12.2㎝・器高2.8〜3.6㎝・底径5.0〜7.3㎝の間に分布し、平均法量は11.5㎝・器高3.2㎝・底径6.3㎝である。この椀の特徴は体部から口縁部にかけてやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。比較的器壁が薄く、丁寧な作りのものが多いが、器壁に凹凸が目立つ。口縁部外面は重ね焼によって黒色を呈するものが多い。底部はいずれも回転糸切りによって切り離され、その痕跡を明瞭に留める。また、板目が認められるものもある。器表面は内外面ともロクロナデ、内面の底部に一方向のナデを施す。このような特徴を持つ椀は岡山県百間川当麻遺跡などから出土しているが、当遺跡出土のものと比べて全体に法量が大きい。例えば鎌倉時代と考えられている百間川当麻遺跡右岸用水調査区井戸３出土の完形品２点は口径16.4〜16.5㎝・器高4.9〜5.1㎝・底径6.8〜7.3㎝、口径16.5㎝・器高4.8〜5.0㎝・底径6.4〜6.7㎝であり、当遺跡出土のものより一回り以上大きい。この井戸３出土の椀に酷似するものが平安時代終末期から鎌倉時代初期に属する備前焼成立期の窯跡から採集されていることが報告されており、井戸３出土の椀は中島田出土のものより古い時期のものと考えられる。[註30] したがって、法量の大小は時期差を反映するものと見られ、鎌倉初期には口径16㎝前後のものが、同後半頃には11〜12㎝に縮小したと考えられる。[註29]

（10）常滑焼

当遺跡で出土した常滑焼には壷・甕があるが、その点数は少なく、図化したのは壷２点・甕５点である。

壷はいずれも包含層出土のもので、口縁部の破片である。復原径は894が17.5㎝・895が21.0㎝である。894は頸部が直立気味に立ち上がり、口縁端部を外方に折り曲げる。895は頸部がやや外反気味に立ち上がり、口縁端部を外方に折り曲げて拡張する。時期については特定し難いが、常滑焼編年のⅢ－１期に属する可能性が高い。

甕は体部小片のものを含めて５点図示したが、このうち遺構に伴うものは土坑201出土の318と自然流路出土の444の２点のみである。前者は口径51.3㎝に復原される大甕の口縁部破片である。常滑焼編年のⅣ－１期と見られる。後者は胴径50.4㎝に復原される破片であるが、[註31]

胎土・形態から常滑焼大甕と見られる。包含層出土の896のものは大きく外反する口縁部の破片であり、口径27.4cmに復原される。時期については特定し難い。

（11）輸入陶磁器

輸入陶磁器は遺構出土のもの19・包含層出土のもの51の計70点である。青磁・白磁・青白磁がある。

青磁

青磁には碗・小碗・杯・皿などがある。

碗は遺構出土のもの11・包含層出土のもの31の計42点あり、輸入陶磁器の中では最も点数が多い。しかし、いずれも細片のもので、全体の形状等が明らかになるものはない。

碗の中では体部外面に蓮弁文を施すものが圧倒的に多い。蓮弁には①鎬を持つもの（35・373・926・927・930・932・952・956）、②鎬のないもの（89・133・305・431・432・928・929・931・946・953～955）、③細長い鎬蓮弁のもの（933・935）、④細線蓮弁文のもの（432・434・951）がある。①は横田・森田分類のⅠ－５ｂ類、②は同Ⅰ－５ａ類、③は同Ⅲ類、④は上田分類のＢ－Ⅳ類に属すると見られる。[註32] また、碗の中には内面を沈線によって区画するもの（934）[註33] も認められ、横田・森田分類のⅠ－４類と見られる。さらに内面の底部にスタンプ文を施すもの（941～944）は同分類のⅠ－５ｃ類に分類される。

次に小碗であるが、小碗は134・957の２点のみである。前者は口縁部に輪花を持たないⅢ－１ａ類と考えられる。後者もⅢ－１類に該当する製品と見られる。

杯は点数が少なく、わずかに包含層出土の２点のみである。959は体部外面に幅の狭い鎬蓮弁文を施す。杯Ⅲ－４類であろう。960は体部下半が大きく屈曲するタイプで、杯Ⅲ－１類と見られる。

皿は溝205の底から１点（135）のみ出土。内面の底部にヘラによる片彫りと櫛によるジグザグ文様が施される。同安窯系青磁皿Ⅰ－１ｂ類に属する製品である。

白磁

白磁には碗・皿・水注？などがあるが、皿が圧倒的に多い。

碗は包含層から２点出土したのみで、その点数は少ない。961は白磁碗Ⅳ類に分類される碗で、口縁部は玉縁を呈する。962は内面に櫛描文を施す白磁碗で、Ⅴ－４類に属すると見られる。

皿は435・436以外はいずれも白磁皿Ⅸ類に分類されるもので計８個体ある。この白磁皿はいずれも包含層出土である。自然流路出土の２個体のうち、435は内部に蓮弁文を削り出すものである。また、436は断面三角形で、高台先端部が鋭く内傾する低い高台が付く。ともに景徳鎮窯系の製品かと推定されるが確定的でない。この２個体は共伴する遺物から15世紀

末から16世紀前半頃のものと考えられる。

青白磁

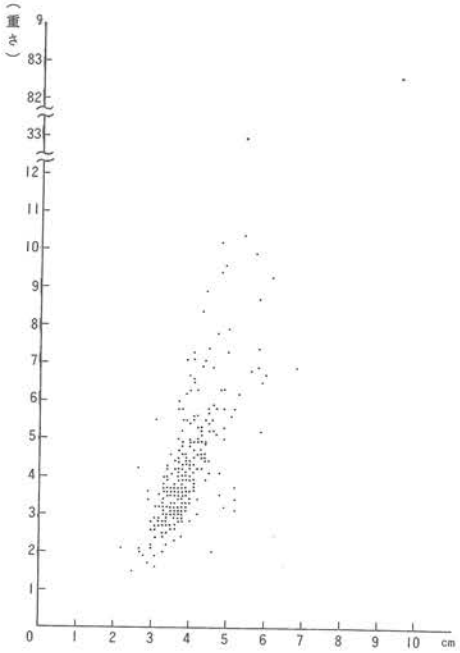
青白磁には梅瓶の小片が遺構・包含層ともに２点ずつ出土している。小片のため全体の形状等は不明であるが、いずれも体部外面に沈線状の渦文ないしは波涛文と見られる文様を施し、青白色釉を施釉する。

当遺跡出土の輸入陶磁器は、その大部分が青磁・白磁によって占められ、それに若干の青白磁が伴うという組成を示している。また、出土遺物の中心を占める青磁・白磁には、青磁碗・小碗・杯・皿、白磁碗・皿・水注、四耳壷などがあり、その中でも龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類、白磁皿Ⅸ類が数量的には最も多くて、組成の中心となっている。以下、これらの各形式の組成を参考にしながら遺物の年代について検討を加えたい。

中島田遺跡で包含層・遺構を問わず最も出土数の多い龍泉窯系青磁碗Ⅰ－５類は、蓮弁に鎬を持つものと持たないものの２種類が存在するが、年代的に先行する鎬蓮弁文のものは、その出土が13世紀中葉に最も多く、14世紀代前半まで存続する形式だと考えられているものである。また、鎬を持たない型式のものは、蓮弁の形から14世紀代の中でその年代をおさえられる遺物だと考えられ、青磁碗Ⅰ－５類からは、13世紀中葉から14世紀代全般にかけてというかなり時間的に幅のある年代観しか考えることができない。しかし、同じ青磁でも、13世紀中葉にはまだ出土率の比較的高かった同安窯系青磁がわずか皿Ⅰ類１点しか出土していないことや、青磁碗Ⅰ－５類と同じく出土数の多かった口禿の白磁皿Ⅸ類の出土の中心が13世紀後半から14世紀中葉までということを考えれば、その年代の上限を若干引き下げて13世紀後半から末葉とするほうが妥当ではないかと思われる。一方、年代の下限については、青磁碗Ⅰ－５類の蓮弁文の年代からは14世紀のいつごろという明確な年代は明らかにし得ないが、前述の白磁皿の年代などを考慮にいれると、14世紀代中葉くらいに位置付けられるものと思われる。ただ、調査区西端部を流れる自然流路から出土した青磁碗（432・434）・白磁皿（435・436）に関しては、青磁碗が細蓮弁文碗と呼ばれる15世紀後半から16世紀全般を通じて出土する型式であり、白磁皿もともに横田・森田分類でＥ群とされるほぼ16世紀代に位置付けられる資料で、包含層や他の遺構から出土した資料とは年代を異にする資料であり、この遺跡に14世紀後半から15世紀代にかけて一時的な断絶の時期のあったことが分かる。また、以上の年代観をあてはめてみたとき、13世紀末から14世紀初頭にかけて青磁碗の中心的存在であったⅢ類がわずか２点しか出土していないということは注目される。

(12) 土錘

当遺跡では調査区の全面にわたって多数の土錘が出土した。このうち2分の1以上が残るものは624点を数える。このうち完形品230点を抽出して、その法量分布を示すと第191図の通りである。この図によると、長さ9.5cm・胴径3.4cm・重さ82.6gを測る井戸201出土の426と、長さ5.4cm・胴径2.6cm・重さ33.0gの319を例外とするほかは、いずれも重さ10g前後から下のものばかりである。その分布の中心は長さ3～4cm・重さ2～5gの間にあり、当遺跡出土の土錘の大半が小形のもので占められていることが改めて確認される。



第191図　土錘の法量分布

ところで、このような土錘の分類を基に使用された網類の検討を行った小田原は長さ3～4cm・重さ3～4gのもの（同氏分類のⅠ類a－①②）は投網、長さ4～5cm・重さ5～11gのもの（同前Ⅰ類a－③④）は建網・刺網に使用したと推定する。[註34] 投網は今日でも河川における網漁業の中心として多用されているが、当遺跡の立地環境から考えても、こうした投網が盛んであったことは十分に推定可能であり、小形の土錘が多く出土する事実はそうした推定を補強するものといえよう。

(13) 銅銭

中島田遺跡で出土した銅銭は1次調査で28点・2次調査で8点の計36点である。このうち本書に掲載したのは折損著しいものを除く34点である。内訳は遺構出土のもの11点、包含層出土のもの23点で、包含層出土のものが約2倍以上を占めている。この34点の銅銭はいずれも中国銭である。銭種不明のものを除いて銭種別に分類した表3によると、最も出土点数の多いのは「元豊通宝」（7点）、以下「熙寧元宝」（5点）・「皇宋通宝」（4点）・「景祐元宝」（4点）・「紹聖元宝」（2点）・「嘉祐通宝」（1点・以下同じ）・「永楽通宝」・「景徳元宝」・「政和通宝」・「祥符元宝」・「乾元重宝」・「五銖」の順となっている。また、初鋳年代別に見ると表4のようになる。これによると中国北宋のものが大半を占め、一部後漢・唐代のものが混入するという状況を示している。このうち、「五銖」は隋代に到るまで鋳造されたとされることから、実際の鋳造年代は初鋳年代より大幅に下るものと考えられる。しかし、

表3　中島田遺跡銅銭一覧表

番号	銭種名	遺構出土	包含層出土	計
1	元豊通宝	3	4	7
2	熙寧元宝	1	4	5
3	景祐元宝	1	3	4
4	皇宋通宝	1	3	4
5	紹聖元宝	0	2	2
6	嘉祐通宝	1	0	1
7	五　銖	1	0	1
8	永楽通宝	1	0	1
9	景徳元宝	0	1	1
10	政和通宝	0	1	1
11	祥符元宝	0	1	1
12	乾元重宝	0	1	1
13	不　明	2	3	5
計		11	23	34

表4　銅銭初鋳年一覧表

初鋳年		銭種
漢	BC118年	五　銖
唐	758	乾元重宝
宋	1004	景徳元宝
〃	1008	祥符元宝
〃	1034	景祐元宝
〃	1039	皇宋通宝
〃	1056	嘉祐通宝
〃	1068	熙寧元宝
〃	1078	元豊通宝
〃	1094	紹聖元宝
〃	1111	政和通宝
明	1408	永楽通宝

いずれにしても「五銖」はこれまで県内で発見された貨幣としては最古のものである。

出土した銅銭の中には加工銭と見られるものが少数見られる。加工銭には方穿の部分を星形に加工したもの（1033)、縁帯を削って小さくしたもの（1029）などがある。また、小さな孔を2箇所穿っているもの（1024）もあるが、これは紐などを通して垂飾として使用したか、なにか呪い的な用途に使用したものと推定される。

以上のような銅銭はいずれも中島田の集落で生活した人々が日常的に使用していたものと考えられ、多量の商品として流通していたと見られる輸入陶磁器や国内産陶器の出土とともに中島田遺跡の中世集落における流通経済の一端を物語る資料といえよう。

（14）呪符木簡

自然流路から出土した木製品の中に5点の墨書木札が含まれているが、この5点の墨書木札は形態から大きく三種類に分けることができる。すなわち①短冊状の薄板を使用したもの、②厚手の長方形の板材を使用し、一対の切り欠きを施したもの、③極めて薄い板材の頭部を三角形に削り出したものである。①に分類されるものは3点あるが、このうちほぼ原形を保っているのは1点のみで、ほかは上半分または下半分を欠損する。ほぼ完存するものもほぼ中央部で折れた状態で出土したが、この木札には「咄呋啞急々如□□」（律令）の墨書が見られ、

いわゆる「天罡」符であることが知られる。「天罡」は道教思想の中では最も重要な位置を占め、呪符中の主格とされ、天変地異の鎮め、病気の平癒、死者・祖先の霊魂の救済、現世の人々の安寧など絶大な力を有していたといわれる。「急々如律令」は速やかな秩序回復を祈願する常套的な呪句であり、呪符中最も一般的なものとして古くから使用され、現在に到るまで護符などに多用されている。この呪句は447にも見られるが、この呪符には九々の記載が見られる。この九々は、「九々八十一」が陰数の極数（最大の数）、「八九七十二」が陽数の極数を意味し、やはり道教思想に基づく効験を期待するものと考えられる。[註35]

次に②の形態のものであるが、447がこれに該当する。この呪符の墨書はやや判読し難い面があるが、赤外線カメラ・写真ネガ等によって判読したところ「（呪図）愛染王厲急□（々如律令）九丶八十一二十七九八」と判明した。呪符に絶大な法験を持つと信じられていた「愛染大明王」が記載される呪符は文献によっては知られていたが、遺跡からの出土例は管見の限りでは類例がなく、本例は全国的にも希有な「愛染王」符であると考えられる。その効力は病気平癒にあるとされるものであるが、この呪符には紐等によって固定するためと見られる一対の切り欠きが認められることから、門戸や家の四方などに取付けて流行病などの侵入を予防する目的で使用したものと推測される。[註36][註37]

③はすでに述べたように柿経である。普通、柿経は大量に出土する場合が多いが、本例は単独の出土である。書写された経文は「妙法蓮華経薬草喩品」の一節である。[註38]

以上のような墨書木札は徳島県内では初の出土例であり、これまで文献資料の上でもほとんど解明されていない中世の庶民信仰の実態を物語る貴重な資料と見られる。

註記

註１　県道をはさんでＤ・Ｅ調査区と隣接する地域で遺構の拡がりが認められることが、成稿後の平成元年２～３月に実施された街路事業中島田常三島線に伴う確認調査によって判明した。

註２　第４章註１参照。

註３　第13回埋蔵文化財研究会『古代・中世の墳墓について』1983年。

註４　田中啄「古代・中世窯業の地域的特質－畿内－」（河野書房『日本の考古学』Ⅵ　1967年）。

註５　石井町教育委員会『ひびき岩16号墳発掘調査報告書』1986年。

註６　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡－第31次発掘調査概報－1982』1984年。

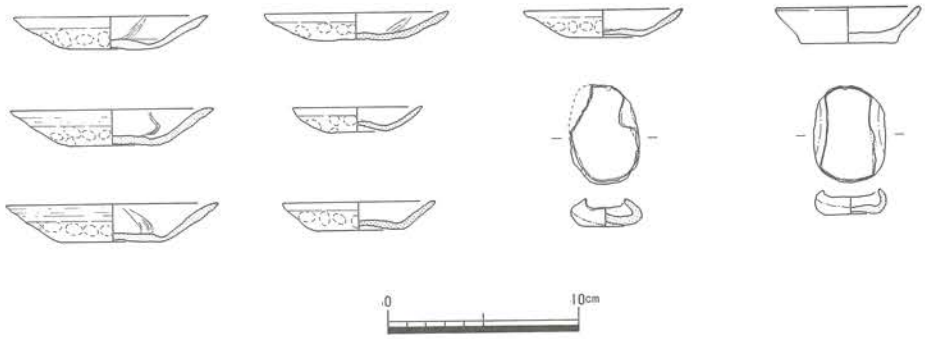
註７　志道和直「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器椀編年試案」（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒（調査研究ニュース）』№48　1977年）。

註８　未報告であるが、調査を担当した筆者（福家）の実見に拠る。

註９　岡山県百間川遺跡・広島県草戸千軒町遺跡の調査報告参照。

註10　岡山県文化財保護協会『百間川原尾島遺跡２』1984年。

註11　現在藍住町教育委員会保管。当資料の所在については同町教委三好昭一郎氏の御教示を得た。



（参考図）藍住町勝瑞　出土遺物

註12　第４章註参照。

註13・14　第４章註５の福田論文参照。

註15　福田正継「中世の土器について」（建設省岡山河川工事事務所・岡山県教育委員会『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』1981年）。

註16　鈴木康之「草戸千軒町遺跡ＳＤ1290出土の土器類について」（註６掲示報告書）。

註17　尾道中世遺跡発掘調査団『尾道中世遺跡発掘調査報告書－尾道市土堂二丁目所在－』1980年。

註18　高知県田村遺跡出土の土師質土器の分類については、高知県教育委員会『田村遺跡群』第10分冊（1986年）に拠った。

註19　徳島県教育委員会『中内遺跡』1981年。

註20　註15参照。

註21　同志社大学校地学術調査委員会『同志社キャンパス内出土の遺構と遺物』1978年。

註22　高知県教育委員会『田村遺跡群』第８分冊　1986年。

註23　和泉型の瓦器椀の編年は鈴木秀典「瓦器椀の編年」（大阪市文化財協会『長原遺跡発掘調査報告』Ⅱ　1982年）に拠った。

註24　同前。

註25　兵庫県教育委員会『魚住古窯跡群』1983年。

註26　森田稔「中世須恵器の検討」（ニューサイエンス社『考古学ジャーナル』№299　1988年）。

註27　例えば徳島市南庄遺跡・名東遺跡・鳴門市中内遺跡・土成町前田遺跡など。

註28　間壁忠彦・間壁葭子「備前焼研究ノート（１）～（３）」（倉敷考古館『倉敷考古館研究集報』第１・２・５号　1966～1968年）。

註29　建設省岡山河川工事事務所・岡山軒教育委員会『旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅱ』1981年。

註30　註28参照。

註31　常滑焼の編年は愛知県教育委員会『愛知県古窯跡群分布調査報告Ⅳ（常滑古窯跡群）』1984年に拠った。

註32　横田・森田分類については第4章註2参照。

註33　上田分類についは第4章註2参照。

註34　小田原昭嗣『草戸千軒（調査研究ニュース）』№86・96　1980・1981年）。

註35　志田原重人「中世遺跡出土の呪符」（第4会中世遺跡研究集会資料『中世の呪術資料』1984年。

註36　判読にあたっては奈良大学水野正好氏、国立奈良文化財研究館野和巳氏（当時）・佃幹雄氏の御教示・御協力を得た。記して謝意を表する。

註37・38　水野正好氏の御教示に拠る。

第Ⅱ篇　南島田遺跡

第１章　位置と環境

第１節　地理的環境

南島田遺跡は徳島市南島田町３丁目に所在し、中島田遺跡の西方約500mの地点に位置する。調査地の地目は水田で、地表面の標高は約４mである。当遺跡の基本的な地理的環境は中島田遺跡とほぼ同様であり、鮎喰川東岸の沖積低地の一画に立地する遺跡である。しかし、現状では中島田遺跡よりさらに鮎喰川本流に近く、東岸の堤防からはわずかに200m程度しか離れていない。また、中島田遺跡と南島田遺跡の間は、現在の耕作土直下より砂質の強い土層となり、１mも掘り下げると河川によって運ばれた砂の厚い堆積層が認められ、旧河道ないしは氾濫原の様相を呈している。こうした状況は南島田遺跡の調査区の北半分についても同じであったが、この部分では本文でも触れるように、自然流路が検出された。以上のような周辺の土層堆積等からみても、当遺跡が鮎喰川沿いの極めて低湿な土地に立地する遺跡であったことが窺える。

第２節　周辺の遺跡

第Ⅰ篇第１章第２節参照。

第３節　歴史的環境

南島田遺跡は中世後期に属する遺跡と見られ、中島田遺跡に比べて１世紀前後時期的に新しい遺跡と考えられる。しかし、当遺跡を取り巻く歴史的環境は基本的には中島田遺跡とほぼ同様と考えられるので、詳細な歴史的環境については第Ⅰ篇第１章第３節を参照されたい。

第192図　南島田遺跡と中島田遺跡の位置関係　（この地図は徳島市調整の 1/2500 都市計画図を転載したものである。）

第２章　調査の契機と経過

第１節　調査の契機

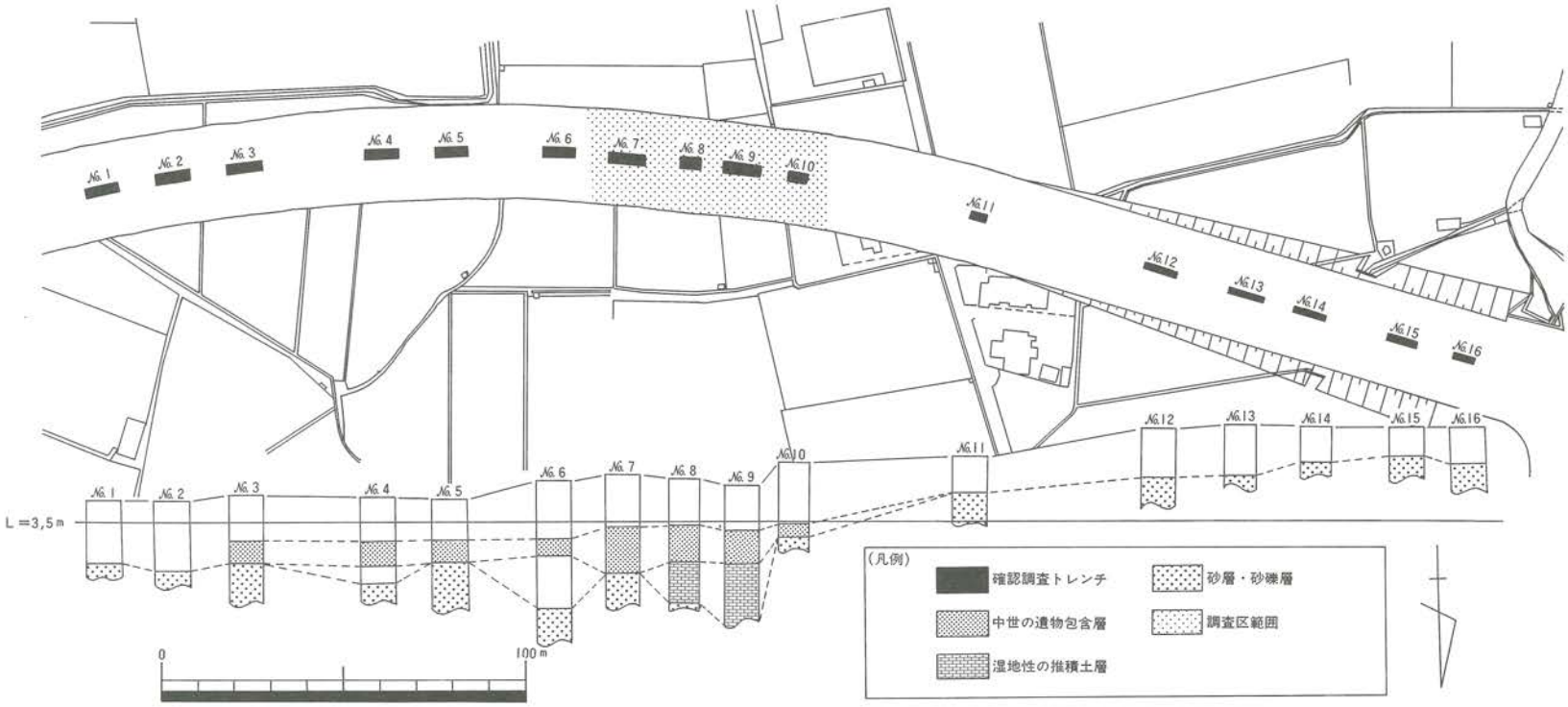
南島田遺跡の調査の契機は、県道徳島鴨島線道路改良工事に伴って、中島田工区に引き続いて、南島田工区でも埋蔵文化財の確認調査が行われた事にある。この確認調査は昭和61年度当初の県道路建設課・徳島土木事務所・文化課による協議によって実施することになったもので、中島田遺跡の調査と平行して実施した（第Ⅰ篇第２章第２節（１）参照)。確認調査は道路延長で約400mにわたって、原則として10mおきに10m×３mのトレンチを計16箇所設定して行った（第193図参照)。その結果、東から数えて７番目から10番目までのトレンチにおいて、中世の遺物が出土し、遺跡の所在が明らかになった。この確認調査の結果を基に、道路建設課と協議を行った結果、工事着手時期の関係で中島田遺跡の調査終了後、直ちに南島田遺跡の調査を始めることとなり、中島田遺跡の調査が終盤に近づいた昭和61年11月17日に調査を開始した。

第２節　調査の経過

（１）調査の経過

11月17日に中島田遺跡の調査事務所を調査区の西側に移転し、翌日より本格的な掘り下げを開始した。確認調査で確認した土層を基に、表土及び旧水田土壌を重機で掘削し、全体にマンガンの沈殿が見られ、暗茶褐色を呈する面まで掘り下げを行う。11月20日には土層確認のために設定した調査区西端の試掘溝で、溝状遺構と見られる落ち込みを確認。掘り下げとともに調査区北半分全体に砂が広がり、調査区のかなりの部分が自然流路となる可能性が考えられた。その自然流路の規模を把握するために設定した試掘溝の掘り下げによって、砂層の厚さが少なくとも５m以上であること、南岸部の川底に堆積した青灰色粘土層中に中世遺物が含まれることなどが明らかになった。この結果、自然流路部分については、南岸の検出と、遺物を含む粘土層に限定した調査を行うこととし、自然流路の南側一帯での遺構の検出に努めることにした。

自然流路南側では掘り下げにしたがって遺物の出土が多くなったが、遺構の検出は極めて困難であった。しかし、連日にわたる慎重な精査の結果、調査区中央部南側一帯で土坑等の遺構、調査区西端部で２条の溝状遺構を検出した。この遺構面の調査を昭和62年４月16日に完了し、引き続いて自然流路部分以外の調査区全体の掘り下げを行った。これは土層の断面



第193図　南島田確認調査トレンチ配置図・南島田遺跡調査区位置図

観察では判然としなかったが、下層からも遺物が出土するため、さらに遺構面が存在する可能性が考えられたために掘り下げを行ったものである。その結果、第1遺構面を約0.2〜0.3m掘り下げた面で、建物跡を伴う遺構を検出した。この遺構面の調査を同年5月下旬まで行って、同月29日には調査を完了した。

なお、調査が終盤に近づいた5月23日（土）には現地説明会を実施し、多数の見学者に調査の中間報告を行った。

（2）調査体制

第Ⅰ篇第2章第2節（3）参照。

第3節　調査日誌抄

（昭和61年度調査）

昭和61年

11月18日（火）晴

資材搬入。表土の除去開始。

写真11　表土剝ぎ取り

11月20日（木）晴

調査区西端部を土層確認のために深く掘り下げる。溝と見られる落ち込み確認。

11月28日（金）晴

調査区の杭打ち開始。重機の残土処理と包含層の掘り下げを平行して実施する。テストトレンチの掘り下げにより、厚い砂礫層が堆積する自然流路101を確認する。包含層より「皇宋通宝」出土。

12月4日（木）晴

表土の剝ぎ取りが重機の都合でやや遅れ気味。包含層の掘り下げが進展している地点から遺構確認を進める。自然流路101の規模を確認するためのトレンチを掘り下げる。底の粘土層から木株・自然木に混じって中世陶器などの遺物が出土する。

12月8日（月）

表土剝ぎ完了し、ベルトコンベアー設置。重機残土処理、包含層の掘り下げ継続。調査区の北側半分が自然流路にかかることが推定された。

12月11日（木）晴

調査区南部で水田跡確認。近世期のものと見られるが、畦畔・足跡等の検出に努める。

12月22日（月）曇時々雨

引き続き包含層の掘り下げと遺構の確認を行う。調査区中央部南寄りの地点で、固く締まった帯状の層を確認し、追跡するが性格不明。

12月26日（金）晴

事務所内の清掃及び現場の保安を点検して、

今年の調査を終える。

昭和62年

1月6日（火）晴

調査を再開する。調査区の排水と清掃作業、包含層の掘り下げを行う。

1月9日（金）晴

自然流路101掘り下げ開始。溝101の掘り下げ開始。

1月19日（月）晴

溝101掘り下げ完了。直角に曲がるコーナーが検出される。遺構面上の土器実測開始。自然流路101の掘り下げを引き続き行うが、砂層が厚く、時間がかかる。

1月26日（月）晴

溝101に平行する形で検出された溝102の掘り下げ開始。

2月6日（金）晴

近世水田跡内から土坑を検出する。水田との関係を追及するが不明。遺構確認は分かりづらく困難を極める。

2月12日（木）曇後雨

溝101、溝102、自然流路101西部の完掘状況の写真撮影を行う。

2月16日（月）曇

土坑102・103・104掘り下げ。出土遺物は少ない。

2月18日（水）曇

溝102、自然流路101西部の平面図作成開始。近世水田跡の下層を掘り下げ、自然流路102検出。土坑103・104完掘。遺物少なく、年代決定に苦慮する。

3月3日（火）晴

自然流路102の掘り下げを進める。粘土層の堆積が1m近くあり、自然木等が遺存することから、木製品の出土が想定されたが、遺物は少ない。

写真12　作業風景（3）

3月30日（月）曇時々雨

この間、自然流路102の掘り下げ続行。遺物が少ないため、全体の検出は放棄する。資材を整理して、昭和61年度の調査を終える。

（昭和62年度調査）

4月8日（水）晴

新年度の調査を開始する。調査区の排水作業を行った後、全面清掃。一部の包含層を掘り下げ、遺構の再精査を行う。

4月10日（金）晴

遺構土層図作成後、遺構の完掘を順次進める。

4月16日（木）晴

第1遺構面の遺構完掘状況の写真撮影。明日より、さらに全体を掘り下げる。

4月24日（金）晴

第2包含層の掘り下げ続行。細片ながら遺物の出土が見られるが、明確な遺構面は断面観察でも把握できないため、数センチ単位で掘り下げと精査を繰返す。土坑と見られる円形の落ち込み確認。「至道元宝」出土。

4月28日（火）晴

調査区中央部の南壁付近で、ピット検出。全体に識別が困難であるが、柱列の検出に努める。土坑202より青白磁の碗、羽釜などが出土する。埋土には炭化物が多く含まれる。

5月7日（木）晴

全体に砂質が強くなる層の上面まで掘り下げて遺構の確認に努める。建物跡と見られる柱列確認。土坑202出土土器実測。

5月9日（土）晴

ピットの底で根石検出。建物跡であることを確認し、さらに残りの柱列の検出に努める。

5月19日（火）晴

さらに数個所でピットを確認し、一部ながら2棟分の建物跡を復原する。遺構平面図・断面図の作成開始。

5月23日（土）雨

激しい雨の中で、現地説明会開催。建物跡については材木で柱を復原して示す。

写真13　現地説明会

5月28日（木）晴

図面の補足。第2遺構面の遺構完掘状況の写真撮影を行う。

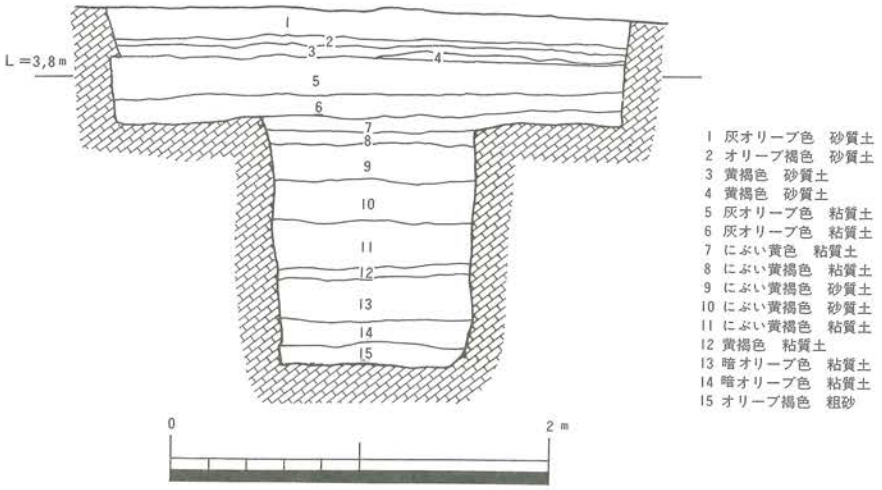
5月29日（金）晴

最終確認を終える。漏水が激しい用水路の補修・環境整備・安全対策を行って、すべての調査を終えた。

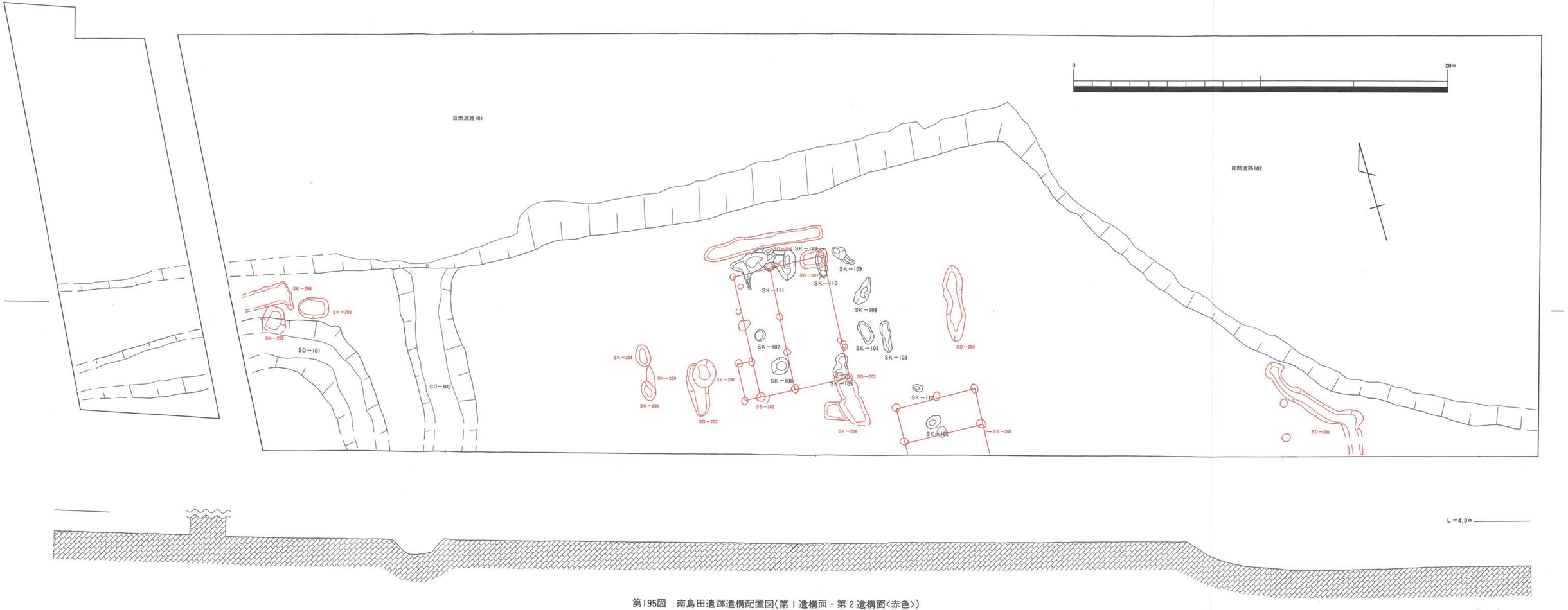
第3章　層　序

調査区内の土層堆積の状況は調査区内の北半分と南半分では大きく異なる。これは北側が大規模な自然流路にかかったためで、この自然流路の地点では厚い砂礫層の堆積となっている。南島田遺跡の基本的な土層はこの自然流路の南側一帯で認められた微高地部分で確認される。以下、第194図に示した調査区中央部の土層図（確認調査№7トレンチ東壁土層図）にしたがって簡単な説明を加える。

第1層は現在の水田耕作土である。第2層はそれに伴う床土層。第3層から第8層までは現水田の前身をなす旧の水田面で近世初期以降の開発によるものと見られる。この間の土層は整然とした互層となり、調査区内では間層として洪水によると見られる細砂が認められる箇所もあった。第9層は層厚約18cmで、上面には多量のマンガンの沈殿が認められる。上面には近世陶磁器を少量含むが、第9層は中世の遺物包含層として把握される。この層以下が人為的な撹乱を受けていない層となる。第10層は第9層と土質が共通するが、第9層に比較してマンガンの沈殿が少なく、幾分色調が明るくなる。層厚約20cmで、この層に第1遺構面の遺構が掘り込まれている。第10層中からも中世の遺物が出土する。第11層はにぶい黄褐色砂質土層で、この層の上面に第2遺構面の遺構が掘り込まれる。第12層は黄褐色粘質土層で、層厚約5cmと薄く、地点によってはこの層は途切れる。第13・14層は暗オリーブ色砂質土層であるが、やや粘性もある。無遺物層と見られる。第14層は調査地点全体の基盤層と見られる層で、粗い砂層である。図示していないが、この砂層をさらに掘り込むと粗砂に多量の礫を含む層となる。この第15層とその下層の砂礫層は中世以前に鮎喰川によって堆積した土層と見られ、中世以前においては当地域が居住に不適な立地であったことを示している。



第194図　南島田確認調査№7トレンチ東壁土層図



第195図　南島田遺跡遺構配置図(第１遺構面・第２遺構面<赤色>)

第４章　遺構と遺物

第１節　概　要

（１）遺構について

南島田遺跡では２面にわたって遺構が検出された。しかし、両遺構面の間には遺物に拠る限りでは明確な時期差を識別することはできず、第２遺構面埋没後短期間の内に第１遺構面の遺構が営まれたものと考えられる。検出された主な遺構は第１遺構面では溝２条・土坑13基・自然流路２条、第２遺構面では建物２棟・溝５条・土坑９基などである（第195図参照）。第１遺構面では特に生活跡に伴う遺構は検出されなかったが、第２遺構面では集落の北端部にあたると考えられる建物跡が検出された。第１遺構面で確認した自然流路は鮎喰川の旧河道であった可能性があり、第２遺構面上で集落が営まれた時点においても、川が集落のすぐ北側を流れていたと考えられる。

（２）遺物について

出土遺物は調査面積の割には少ない上、細片のものが大半を占める。その総量は整理箱で約60箱である。当遺跡の場合も遺構に伴う遺物は比較的少ない。遺物の大半は中世のもので、日常雑器類が大部分を占める。

第２節　第１遺構面の遺構と遺物

第１遺構面の遺構は地表下約0.7mで検出された。検出された遺構はすでに述べたように溝・土坑・自然流路などであり、直接、生活の痕跡を証明する遺構は認められないが、２条の溝は館などの比較的規模の大きい建物に伴う可能性が想定される。土坑は不整形のものが多い上、出土遺物が極めて少なく、いずれも性格については明らかにできない。

なお、第１遺構面の上層では一部近世初期と見られる水田跡と、それに伴う土坑を１基検出したが、水田跡については説明を省略した。

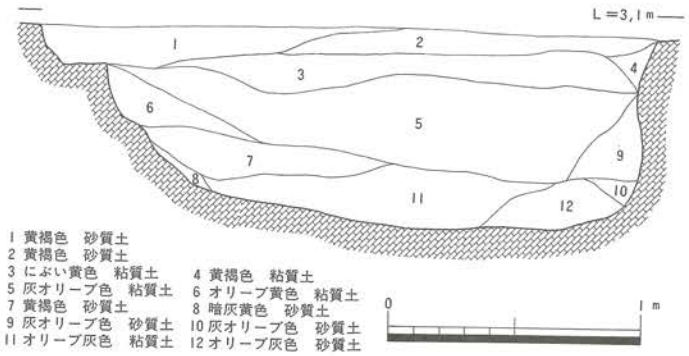
（１）溝と出土遺物

①溝101（ＳＤ101）

・遺構（第196図、図版50）

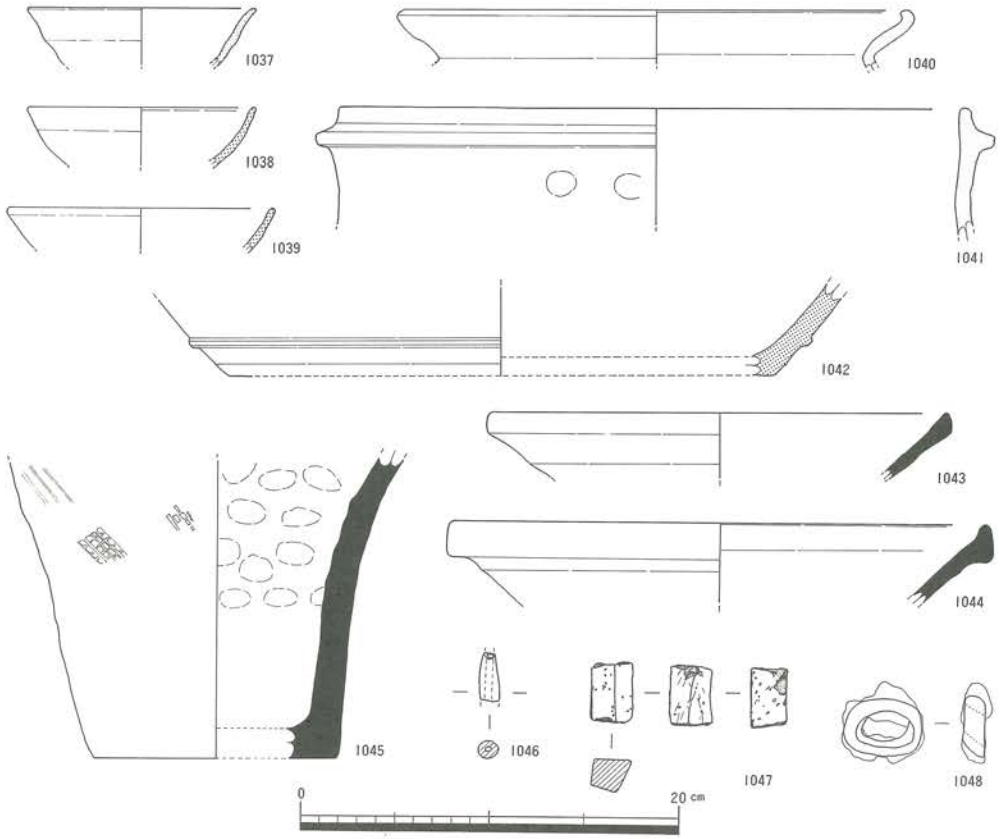
調査区の西南部で検出。幅2.4m・深さ0.8mの規模であり、延長で約18m分を検出したが、

両端は調査区外に延びる。検出した個所はほぼ直角に曲がるコーナー部分にあたる。溝102とほぼ同様の規模を持つ上、両者は南北方向部分で平行関係にあり、同時期に二重の堀として機能していたと考えられる。掘り方は基盤層である砂礫層に達するが、底は鉄分の沈殿が見られ、赤褐色を呈していた。また、埋土の下部は青灰色の粘土の堆積が見られた。



第196図　溝101 土層図

・遺物（第197図、表85, 図版59）



第197図　溝101 出土遺物

出土遺物は土師質土器を中心として約160点出土したが、図示し得たものは少ない。

1037は土師質の杯である。口縁部の小片であるが、口径12cmに復原される。口縁部やや外反気味で端部は尖る。全体にロクロナデを施す。胎土は精良で、色調は淡赤褐色を呈する。1038・1039は瓦器椀の小片である。いずれも和泉型と見られる。

1040は土師質の鍋である。口縁部が大きく外反するタイプのものであるが、中島田遺跡出土の鍋Bのタイプとは異なり、甕状の器形となるか。口縁端部を内側に折り曲げる点に特徴が認められる。1041は土師質の羽釜である。体部上半部・口縁部が直立し、断面方形の短い鍔が付く。鍋に分類し得る可能性も残るが、ここでは羽釜に含めた。

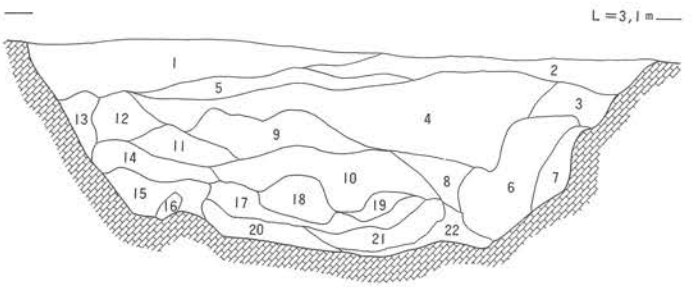
1042は瓦質の火鉢と見られるが、底部の細片であり、法量はやや不正確である。体部下部外面に突帯が1条めぐる。

1043・1044はこね鉢である。1043は口縁部がやや肥厚するが、端部の拡張は大きくない。一方1044は口縁端部を上下に大きく拡張する。ともに魚住焼と見られる。1045は須恵質陶器の底部破片である。体部外面に格子目叩きが部分的に残る。内面には粘土の継目の部分にユビオサエが施される。全体に焼成時の歪が顕著である。

1046は小形の管状土錘。1047は砥石の断片。1048はリング状の鉄製品であるが、用途は不明である。

②溝102（ＳＤ102）

・遺構（第198図、図版51）



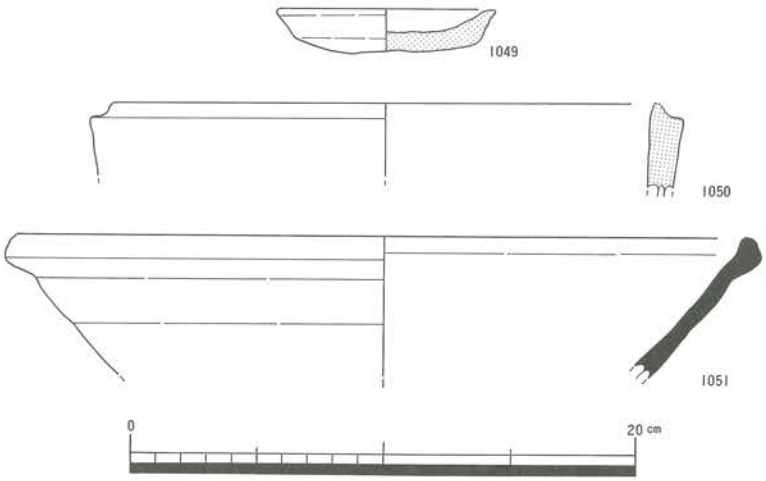
第198図　溝102 土層図

調査区の西南部で溝101に隣接して検出。規模は溝101とほぼ同様である。北端は自然流路101と合する。延長で約9.7m分を検出した。埋土下部の青灰色粘土層は自然流路101との合流部にも堆積しており、この溝が自然流路に流れ込んでいたことを示している。

・遺物（第199図、表86、図版59）

出土遺物は約40点と少ない。

1049は土師質の皿である。完形品で、口径8.5cm・器高1.7cm・底径7.0cmを測る。底部はやや丸底状を呈するが、回転糸切り後ナデが施される。1050は土師質の鍋である。口縁部が直立し、端部を凹面に仕上げる。この鍋は、中島田遺跡の土師質鍋Aのタイプにあたる。



第199図　溝102 出土遺物

1051はこね鉢で、口縁端部の拡張が著しい。

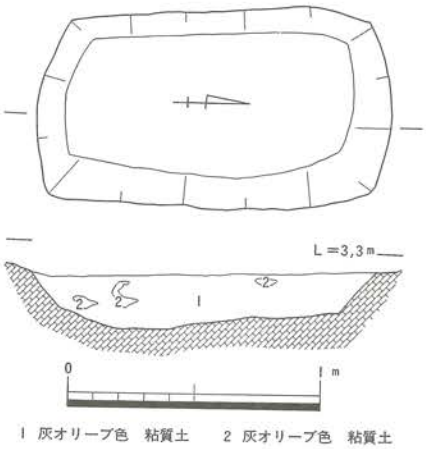
（2）土坑と出土遺物

土坑状の遺構は第1遺構面の上層で検出した土坑も含めて、計13基が検出されたが、出土遺物がほとんど見られず、いずれも性格は明らかでない。以下、規模・形態について簡単な説明を加える。

①土坑101（SK101）

・遺構（第200図）

調査区東部で、近世水田跡の水田土壌を除去した段階で、畦畔に接して検出された。本来は第1遺構面の時期より新しい時期の遺構である。縦1.37m・横0.78m・深さ0.22mの長方形を呈する。水田に伴う何らかの施設の可能性が高いが性格については不明である。



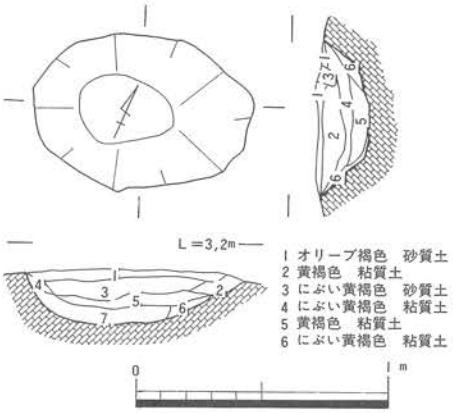
第200図　土坑101 実測図

・遺物

出土遺物は土師質土器の細片と鉄釘の細片が計15点出土したのみで、図示可能なものはない。

②土坑102（ＳＫ102）

・遺構（第201図）



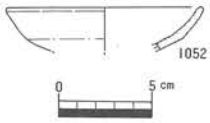
1 オリーブ褐色　砂質土
2 黄褐色　粘質土
3 黄褐色　粘質土
4 にぶい黄褐色　砂質土
5 にぶい黄褐色　粘質土
6 褐色　砂質土
7 にぶい黄褐色　粘質土

第201図　土坑102 実測図

調査区中央部南手で検出。形状は長円形で、長径0.85m・短径0.62m・深さ0.22mを測る小規模の土坑である。

・遺物（第202図、表87）

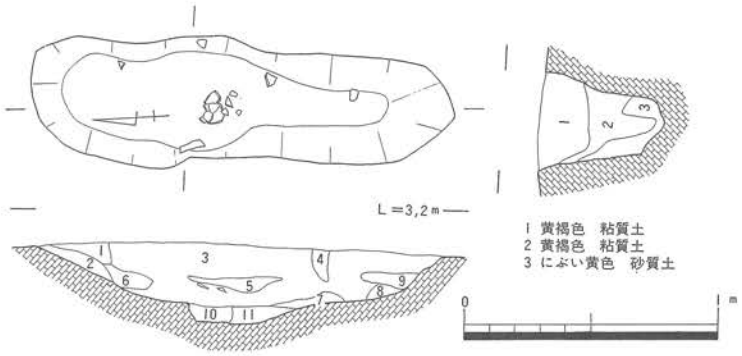
出土遺物は少なく、図示可能であったのは土師質の椀（1052）のみである。この椀は細片であるが、径10.3cmに復元される。体部から口縁部にかけてやや内湾し、口縁部を肥厚させる。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面はナデで仕上げられる。中部瀬戸内系の椀と見られる。



第202図　土坑102 出土遺物

③土坑103（ＳＫ103）

・遺構（第203図、図版52）



1 にぶい黄褐色　粘質土　2 にぶい黄褐色　粘質土　3 にぶい黄褐色　粘質土
4 黄褐色　粘質土　5 にぶい黄褐色　粘質土　6 にぶい黄褐色　粘質土
7 黄褐色　粘質土　8 にぶい黄褐色　粘質土　9 黄褐色　粘質土
10 黄褐色　粘質土　11 オリーブ褐色　粘質土

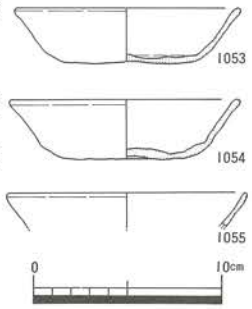
第203図　土坑103 実測図

調査区中央部やや東寄りの地点で検出。形状は長楕円形を呈し、長軸1.67m・短軸0.52m・深さ0.49mを測る。

・遺物（第204図、表88、図版59）

出土遺物に乏しい第１遺構面の中で、この土坑からは比較的残りの良い土師質の杯が出土している。1053・1054はともに土師質の杯である。1053は口径11.8cm・器高2.8cm・底径7.0

cm、1054は口径12.0cm・器高3.2cm・底径6.4cmに復原される。両者は形態・法量ともに良く似ているが、底部は1053が回転糸切り、1054が回転ヘラ切りで切り離される。1053は中島田遺跡出土の土師質杯ＡⅠａの通有のタイプと比較して、器壁が薄い。1055は土師質の椀である。口径12.6cmに復原される口縁部の細片である。



第204図　土坑103 出土遺物

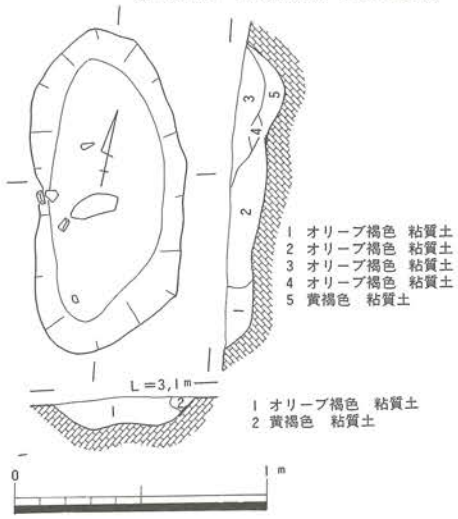
④土坑104（ＳＫ104）

・遺構（第205図）

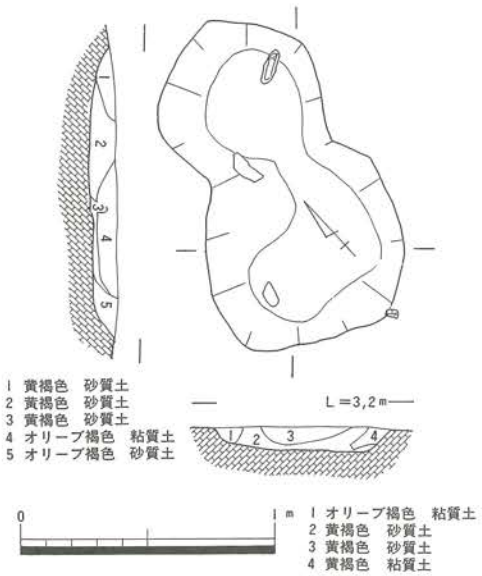
土坑103の直ぐ西側で検出。形状は長円形を呈し、長軸1.22m・短軸0.57m・深さ0.19mを測る。

・遺物

出土遺物は土師質土器・瓦器・陶器の細片が計11点出土したのみで、図示可能なものはない。



第205図　土坑104 実測図



第206図　土坑105 実測図

⑤土坑105（ＳＫ105）

・遺構（第206図）

調査区のほぼ中央部で検出。形状は中央部がややくびれた長円形を呈し、長軸1.15m・短軸0.7m・深さ0.11mを測る。

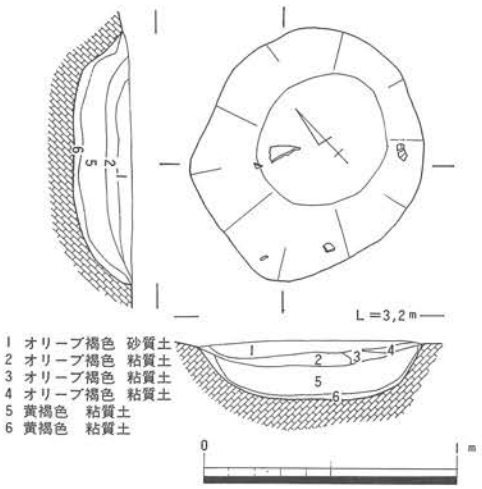
・遺物

出土遺物は土師質土器・陶器・鉄滓の細片が計９点出土したのみで、図示可能なものはない。

⑥土坑106（ＳＫ106）

・遺構（第207図）

調査区のほぼ中央部やや南寄りの地点で検出。形状は長円形を呈し、長軸1.10m・短軸0.88m・深さ0.24mを測る。

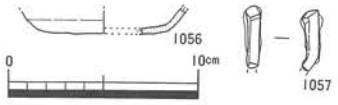


第207図　土坑106 実測図

・遺物（第208図、表89）

出土遺物は土師質土器・瓦器の細片が約50点出土したが、図示可能なものは少ない。

1056は土師質の杯の細片で、1057は鉄釘の断片である。



第208図　土坑106 出土遺物

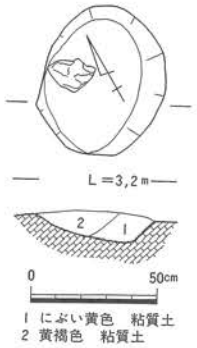
⑦土坑107（ＳＫ107）

・遺構（第209図）

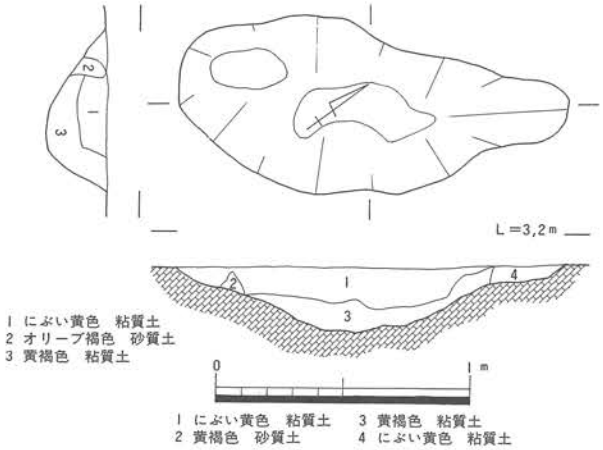
調査区のほぼ中央部南寄りで、土坑106に隣接して検出。形状は長円形を呈し、長軸1.10m・短軸0.88m・深さ0.24mを測る。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。



第209図　土坑107 実測図



第210図　土坑108 実測図

⑧土坑108（ＳＫ108）

・遺構（第210図、図版52）

調査区のほぼ中央部で検出。形状は不整な長円形を呈し、長軸1.53m・短軸0.64m・深さ0.26mを測る。

・遺物

出土遺物は土師質土器・瓦器の細片が14点出土したのみで、図示可能なものはない。

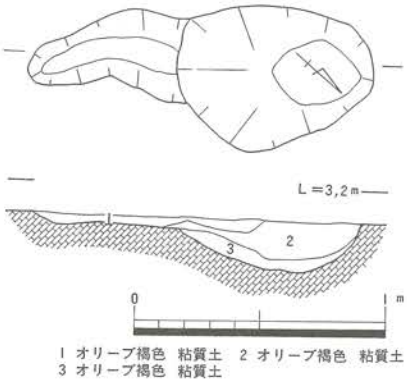
⑨土坑109（ＳＫ109）

・遺構（第211図）

調査区のほぼ中央部で検出。形状は不整形で、2基の小土坑が重複した可能性もある。長軸1.31m・短軸0.58m・深さ0.2mを測る。

・遺物

出土遺物は土師質土器片などが約20点出土したのみで、図示可能なものはない。



第211図　土坑109 実測図

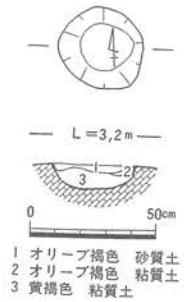
⑩土坑110（ＳＫ110）

・遺構（第212図）

調査区のほぼ中央部で検出。形状はほぼ円形で、直径は約0.33m・深さ0.1mである。土坑113と重複する。

・遺物

出土遺物はない。



第212図　土坑110 実測図

⑪土坑111（ＳＫ111）

・遺構（第214図）

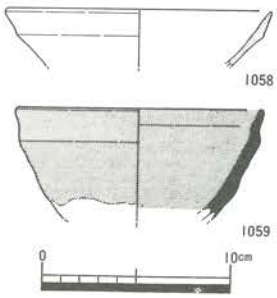
調査区のほぼ中央部で検出。数基の土坑が重複したものであるが、個々の土坑の規模・形状等については明らかでない。

・遺物（第213図、表90、図版59）

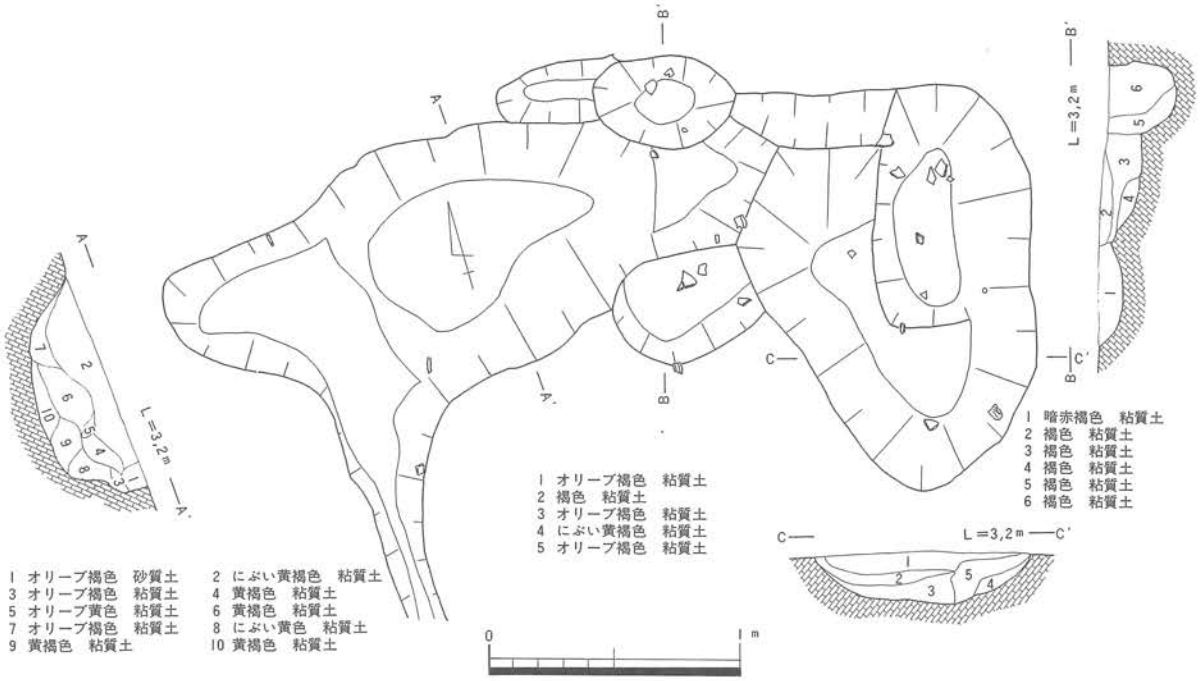
出土遺物は土師質土器の細片を中心に、瓦器・陶器などが約80点出土したが、図示可能なものは少ない。

1058は土師質の椀である。口縁部の細片で、体部は直線的に延び、やや内湾する口縁部に続く。口縁端部は尖り気味に仕上げる。口径の復原値はやや不正確であるが、13.9cmに復原される。

1059は天目椀である。口径12.9cmに復原される。口縁部はゆるやかなＳ字状を描き、端部を尖らせる。体部外面下部が露胎のほかは鉄釉を施す。口縁部は内外面とも茶褐色に発色する。素地は灰白色で、微細な黒粒がわずかに含まれる。瀬戸・美濃系の製品であろう。



第213図　土坑111 出土遺物



第214図　土坑111 実測図

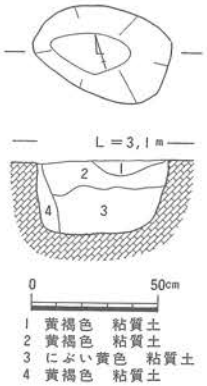
⑫土坑112（ＳＫ112）

・遺構（第215図）

調査区中央部の南寄りの地点で検出。形状は長円形で、長軸0.53m・短軸0.35m・深さ0.3mを測る。

・遺物

出土遺物は土師質土器の細片が14点出土したのみで、図示可能なものはない。

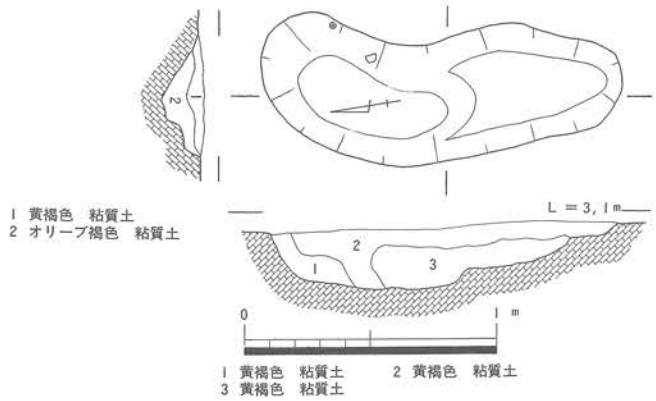


第215図　土坑112 実測図

⑬土坑113（ＳＫ113）

・遺構（第216図）

調査区中央部で土坑110と重複して検出。形状は不整形で、縦軸1.38m・横軸0.48m・深さ0.25mを測る。



第216図　土坑113　実測図

・遺物（第217図、表91、図版59）

出土遺物は少ないが、初鋳年621年の唐銭である「開元通宝」（1060）が1点出土した。

1060(1/1)

第217図　土坑113 出土遺物

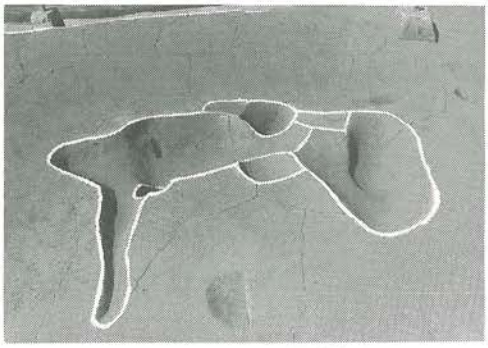
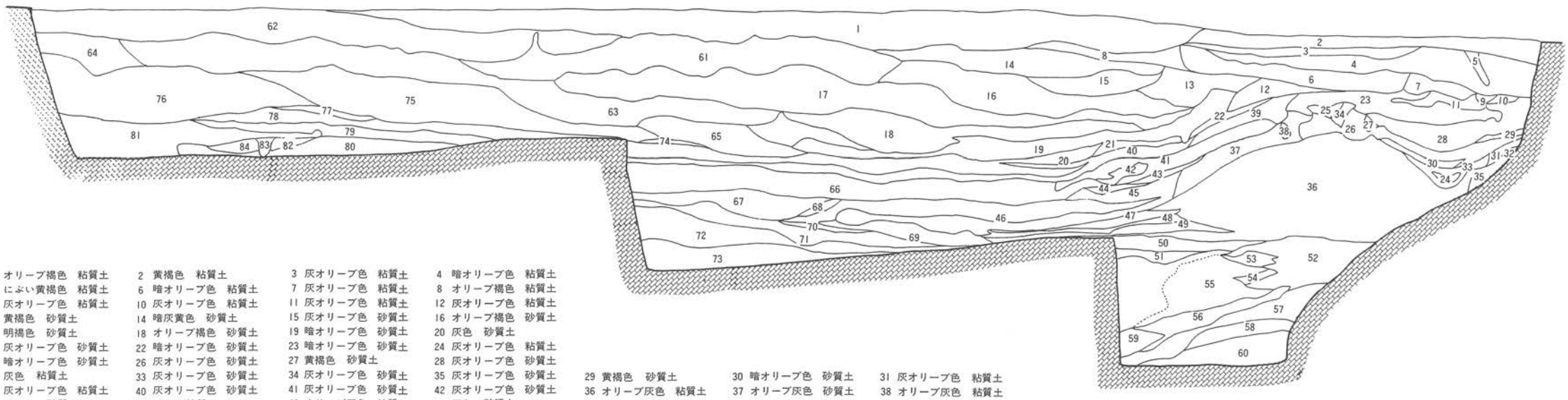


写真14　土坑111検出状況



1 オリーブ褐色 粘質土
2 黄褐色 粘質土
3 灰オリーブ色 粘質土
4 暗オリーブ色 粘質土
5 にぶい黄褐色 粘質土
6 暗オリーブ色 粘質土
7 灰オリーブ色 粘質土
8 オリーブ褐色 粘質土
9 灰オリーブ色 粘質土
10 灰オリーブ色 粘質土
11 灰オリーブ色 粘質土
12 灰オリーブ色 粘質土
13 黄褐色 砂質土
14 暗灰黄色 砂質土
15 灰オリーブ色 砂質土
16 オリーブ褐色 砂質土
17 明褐色 砂質土
18 オリーブ褐色 砂質土
19 暗オリーブ色 砂質土
20 灰色 砂質土
21 灰オリーブ色 砂質土
22 暗オリーブ色 砂質土
23 暗オリーブ色 砂質土
24 灰オリーブ色 粘質土
25 暗オリーブ色 砂質土
26 灰オリーブ色 砂質土
27 黄褐色 砂質土
28 灰オリーブ色 砂質土
29 黄褐色 砂質土
30 暗オリーブ色 砂質土
31 灰オリーブ色 粘質土
32 灰色 粘質土
33 灰オリーブ色 砂質土
34 灰オリーブ色 砂質土
35 灰オリーブ色 砂質土
36 オリーブ灰色 粘質土
37 オリーブ灰色 砂質土
38 オリーブ灰色 粘質土
39 灰オリーブ色 粘質土
40 オリーブ灰色 砂質土
41 オリーブ灰色 砂質土
42 オリーブ灰色 砂質土
43 灰色 粘質土
44 灰オリーブ色 粘質土
45 灰色 砂質土
46 黄褐色 砂質土
47 灰色 粘質土
48 オリーブ灰色 粘質土
49 灰色 粘質土
50 オリーブ褐色 粗砂
51 オリーブ褐色 粗砂
52 オリーブ褐色 粗砂
53 灰色 砂質土
54 灰色 粘質土
55 オリーブ灰色 粘質土
56 オリーブ褐色 粗砂
57 赤褐色 砂質土
58 黒褐色 砂質土
59 暗オリーブ灰色 粘質土
60 茶褐色 粗砂
61 オリーブ褐色 粗砂
62 オリーブ褐色 粗砂
63 褐色 粗砂
64 オリーブ褐色 粗砂
65 オリーブ褐色 粗砂
66 オリーブ褐色 粗砂
67 茶褐色 粗砂
68 オリーブ褐色 粗砂
69 オリーブ褐色 砂砂
70 灰色 粗砂
71 オリーブ褐色 粗砂
72 オリーブ褐色 砂質土
73 黄褐色 粗砂
74 オリーブ褐色 砂質土
75 オリーブ褐色 砂質土
76 オリーブ褐色 砂質土
77 オリーブ褐色 砂質土
78 オリーブ褐色 砂質土
79 オリーブ褐色 砂
80 オリーブ褐色 砂質土
81 オリーブ褐色 砂質土
82 オリーブ褐色 砂質土
83 オリーブ褐色 砂質土
84 オリーブ褐色 砂質土

第218図　自然流路101 土層図

（3）自然流路と出土遺物

①自然流路101

・遺構（第218図、図版53・54）

調査区の西北部を斜めに横切る形で検出された大規模な川跡である。調査区内にかかる南岸部は検出できたが、北岸については調査区外であり、確認できなかった。したがって川幅については不明であるが、調査区内で確認した最大幅は17.25mであった。深さについても正確には不明であるが、少なくとも4m以上である。今回検出したのは延長で約60mである。埋土は上部はやや粗い粒子の砂層であったが、下部は細かい粒子の砂層と粘土の互層で、砂礫層に達している底には青灰色の粘土の堆積が見られた。流路は南岸の方向でN80°Eであり、水流はほぼ東西方向に流れていたと見られる。この自然流路は規模・方向から考えて、現在調査区の西方を流れる鮎喰川本流の旧河道であったと考えて大過ないと思われる。また、この流路は第1遺構面上で検出したが、第2遺構面の遺構が営まれた時期にも流れていたと考えられる。

・遺物（第219図、表92、図版59）

出土遺物は主に底に堆積した青灰色粘土層に含まれる。この層は自然流路102及び溝102などから流入した土が堆積したものと見られる。土師質土器・瓦器・陶器・磁器・土製品・石製品・金属製品など多様な遺物が約190点出土しているが、図示可能なものは比較的少ない。

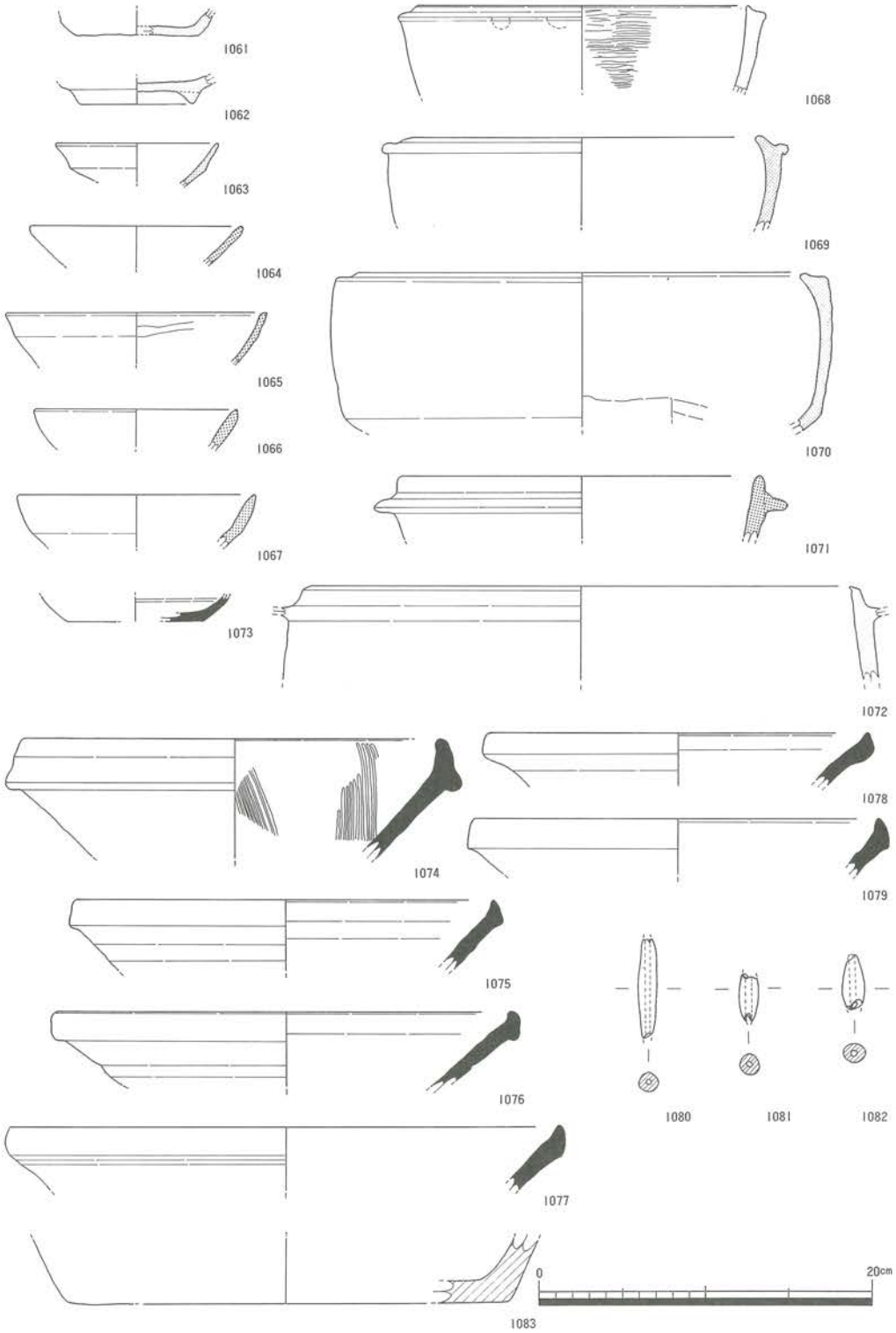
1061は土師質の杯、1062は土師質の皿である。1062の皿は高台が付くタイプであるが、古い時期のタイプで、混入品と見られる。1063は土師質の椀。

1064～1067は瓦器椀である。1064・1065は和泉型と見られるが、1066・1067は和泉型とは区別される厚手のタイプである。

1068～1070は土師質の鍋である。いずれも口縁部を外反させないタイプで、口縁端部を拡張し、端面を凹面に仕上げる。1069・1070は口縁部をやや内湾させるが、1068はほぼ直立気味である。1071は瓦質・1072は土師質の羽釜である。ともに口縁部は直立するタイプである。1072は大形で、口径37.3cmに復原される。

1073は備前地方の産と見られる椀の底部である。1074は備前焼のすり鉢である。すり鉢は内面に9条単位の櫛描条線が施される。口縁端部を大きく拡張し、口縁帯を幅広く仕上げる。1075～1079は魚住焼のこね鉢である。個体差は見られるもののいずれも口縁端部を拡張する。

1080～1082は土錘である。1080は長さ5.9cmとやや長めであるが、重さは6.4gとさほど重くはない。1083は石鍋の底部の小破片であり、底径27.4cmに復原される。内面は丁寧なケズリで仕上げられる。体部外面には縦方向のケズリ後に、横方向のケズリを施す。底部外面にも粗いケズリが施される。



第219図　自然流路101 出土遺物

②自然流路102

・遺構（第220図、図版53・54）

調査区東北部を斜めに横切る形で検出された川跡で、自然流路101に合流する。自然流路101と同102が本来別個の流路であったことは、両者の埋土の状況や深さが異なる点から判断される。全体の規模は調査区外に延びるため不明であるが、検出幅で11.25m・深さ1.05mを測る。今回調査可能であったのは南岸の延長で約33mであった。この流路では砂層の堆積は上部のみで、砂層を除去すると青灰色粘土層の厚い堆積が認められた。遺物はこの粘土層に包含される。

・遺物（第221図、表93、図版59）

自然流路101とほぼ同様の遺物が約250点出土しているが、細片のものが多い。

1084は土師質の杯の口縁部細片であるが、口径11.0cmに復原される。薄手の製品で、内面にロクロナデの痕跡を明瞭に留め、口縁端部を尖り気味に仕上げる。1085・1086は土師質の椀である。1085は中部瀬戸内系の土師椀であるが、高台の有無については不明。体部外面には明瞭な稜を持つ。1086は1085とは明らかに異なるタイプの椀で、やや瓦質に近い焼成である。器壁が厚く、口縁端部が尖る点に特徴がある。

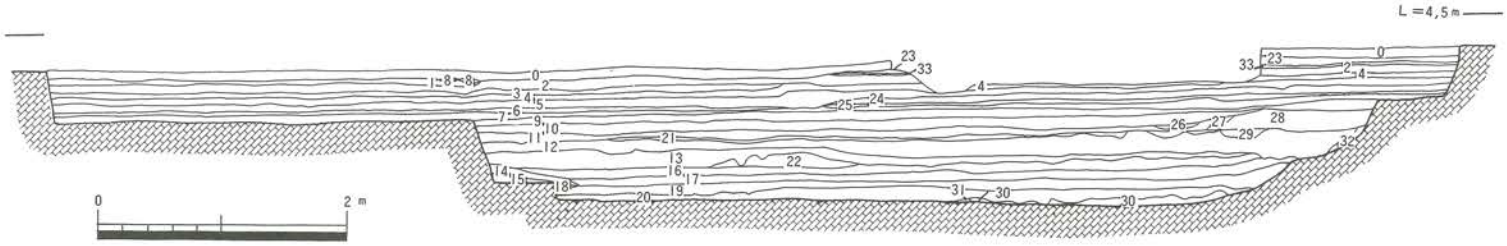
1087は瓦器の皿で、和泉型と見られる。口径7.5cm・器高1.3cm・底径5.5cmに復原され、底部は平底である。

1088・1089は龍泉窯系の青磁碗と見られる。1088の青磁碗は底部内面にスタンプ文が施される以外は無文である。削り出し高台の外側面に段が付く。1089はいわゆる輪花碗で、内面にはヘラによる片彫りが施される。1090は白磁碗の底部破片で、高台径7.1cmを測り、高台は高く削り出す。体部外面の高台付近は露胎。1091は四耳壷の小片である。

1092・1093は土師質の鍋と見られる。1092は口縁部が外反するタイプ、1093は口縁部が直立気味に立ち上がり、口縁端部を拡張するタイプで、下端部は鍔状となる。1094・1095は土師質の羽釜である。1094は口縁部直立し、断面三角形の小さい鍔が付く。1096は瓦質の羽釜と見られる。断面方形の短い鍔が付く。口縁部の器壁薄く、端部はやや尖る。体部外面ユビオサエ。

1097は瓦質の火鉢の口縁部の小片で、全体の形状等は不明である。1098は備前焼のすり鉢である。口縁端部をやや拡張し、端面を凹面に仕上げる。内面には9条単位の櫛描条線を施す。1099も備前焼と見られる壷で、玉縁状の口縁に作り、口径14.3cmに復原される。1100・1101はいずれも甕の細片であるが、1100の体部外面には平行条線、1101には細かい格子目の叩き目が施される。

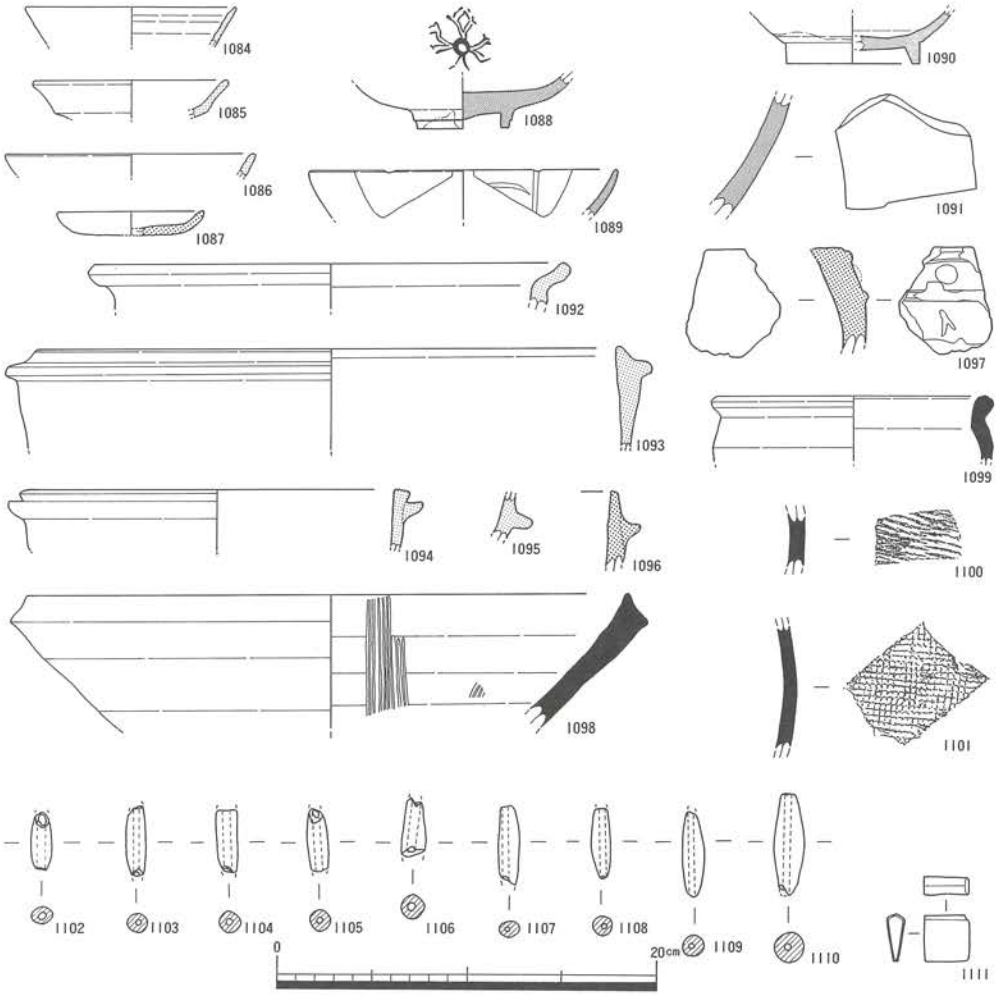
1102～1110は土錘で、いずれも通有の管状土錘である。1110が12.3gを測るほかは、いずれも2.8g～6.0gの間に収まる小形品である。1111は鏃で、薄い銅板を折り曲げて作り、刃



0 表土
1 にぶい黄色 砂質土
2 にぶい黄色 粘質土
3 明黄褐色 粘質土
4 オリーブ黄色 粘質土
5 オリーブ黄色 粘質土
6 明黄褐色 粘質土
7 黄褐色 粘質土
8 暗オリーフ色 粘質土
9 にぶい黄色 粘質土
10 にぶい黄色 粘質土
11 明黄褐色 砂質土
12 オリーブ色 粘質土
13 オリーブ色 粘質土
14 灰オリーブ色 粘質土
15 黄褐色 砂
16 灰オリーブ色 粘質土
17 暗オリーブ色 粘質土
18 オリーブ褐色 砂
19 暗オリーブ色 粘質土
20 暗オリーブ色 粘質土
21 黄褐色 粘質土
22 オリーブ灰色 粘質土
23 黄褐色 砂質土
24 にぶい灰色 粘質土
25 黄褐色 粘質土
26 黄褐色 砂質土
27 黄褐色 粘質土
28 黄褐色 粘質土
29 黄褐色 粘質土
30 暗オリーブ色 粘質土
31 オリーブ褐色 砂
32 黄褐色 粘質土
33 黄褐色 砂質土

第220図 自然流路102 土層図

先部で結合する。棟部は山形に作る。縦2.4cm・横2.4cm・最大の厚さ1.0cmを測る。



第221図　自然流路102 出土遺物

第3節　第2遺構面の遺構と遺物

第2遺構面の遺構は第1遺構面を約20cm掘り下げて検出したが、遺構面の識別は極めて困難であった。そのため、遺構の確認が困難であった箇所では砂質が強くなるまで掘り下げて、遺構を確認した。第2遺構面では直接人々の生活を示す建物跡2棟のほか、溝状遺構5条、土坑9基が検出された。

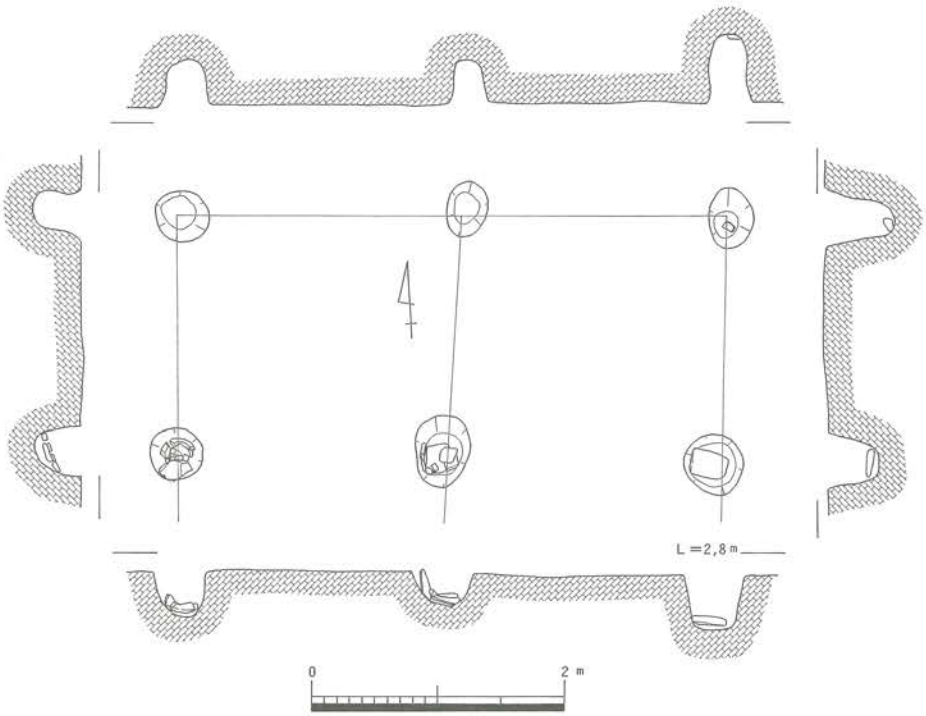
出土遺物は比較的少なく、土坑202から羽釜・輸入陶磁器などが若干出土したのが目立つ程度である。

（1）建物跡・柱穴と出土遺物

①建物201（ＳＢ201）

・遺構（第222図、図版56）

調査区中央部の南壁に沿って検出された建物跡で、検出したのは東西２間×南北１間分であるが、調査区外に延びていると見られ、全体の規模はさらに大きくなるものと考えられる。柱穴の規模は径0.41～0.55m・深さ0.28～0.55mであり、柱間距離は約2.1～2.3mである。検出された柱穴６箇所のうち、３箇所に根石が認められた。棟方向は南北方向と推定される。

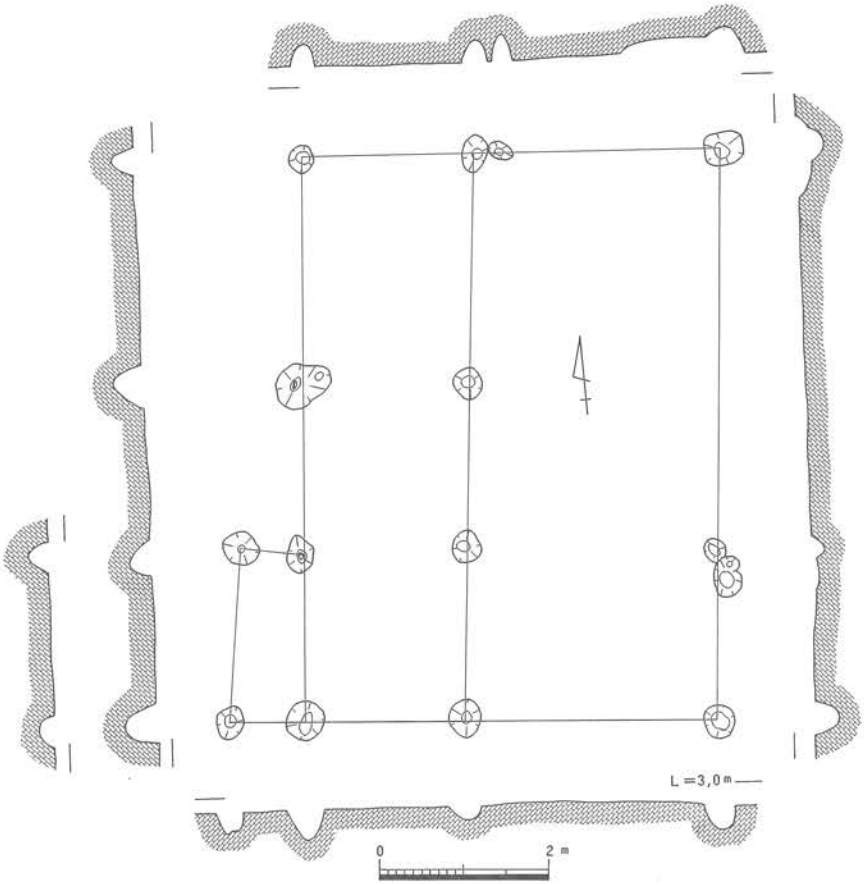


第222図　建物201 実測図

②建物202（ＳＢ202）

・遺構（第223図）

調査区のほぼ中央部で検出された建物跡で、東西２間×南北３間に１間分の張出し部が西側に付く。柱穴の規模は径0.28～0.51m・深さ0.15～0.40mである。柱穴が検出できなかった箇所があることや柱穴が不揃いなのは、全体に遺構の検出が困難であったことに拠る可能性も考えられる。張出し部を除く柱間距離は、2.0～3.0mと広狭があり、やや変則的な間取りとなっている。柱穴は計13箇所検出されたが、根石を持つものはない。なお、この建物に近接して土坑201が検出されたが、この土坑は井戸の可能性もあるものである。



第223図　建物202 実測図

③その他の柱穴

・遺構

調査区東部の南壁付近で約1.8mの間隔で南北に並ぶピットが2箇所検出された。これが建物に伴うものかどうかは不明である。

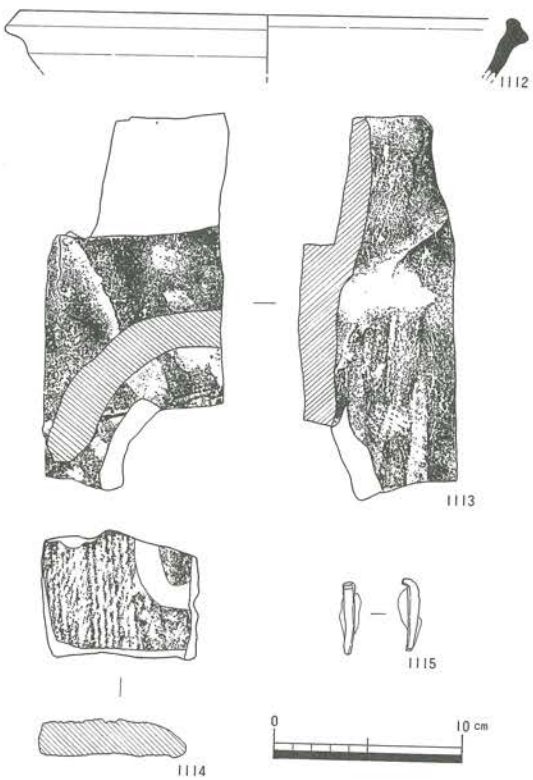
・遺物（第224図、表94、図版60）

柱穴から出土した遺物を一括して掲載するが、出土遺物は極めて少ない。

1112は建物201の柱穴から出土した魚住焼と見られるこね鉢で、細片ではあるが口径26.0cmに復原される。口縁端部は大きく拡張され、端面はわずかに凹む。色調は灰色で、胎土には砂粒を多く含む。

1113・1114は調査区の東部で検出された2個のピット内から、玉石などとともに出土した瓦片であり、柱の根固めのために転用された可能性があるものである。

1113は玉縁を持つ比較的大形の軒丸瓦の断片で、凹面には細かい布目痕が認められる。凸面は端縁と平行するナデが施され、玉縁の上面には粗い縄目状の叩き目が残る。全体に黒灰色を呈する。1114は凸面に粗い縄目状の叩きを施す平瓦の小片である。これらの瓦が南島田の集落の建物に伴うとすれば、周辺に寺院跡などの規模の大きな建物があることになる。1115は建物201の柱穴から出土した鉄釘で、長さ3.8cmの短釘である。頭部はL字形に屈曲する。



第224図　柱穴出土遺物

（2）溝と出土遺物

5条の溝ないしは溝状遺構が検出されたが、いずれも規模が小さい上、末端が閉塞しているもので、水路としての機能を持たなかったと見られる。また、出土遺物も極めて少ない。

①溝201（SD201）

・遺構

調査区東部の南壁寄りの地点で検出。溝の西端は自然流路102に切られるが、東端部は閉塞ないしは削平のため掘り方不明瞭となり、途切れる。検出したのは5.56m分で、規模は幅0.72m・深さ0.09mである。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。

②溝202（SD202）

・遺構

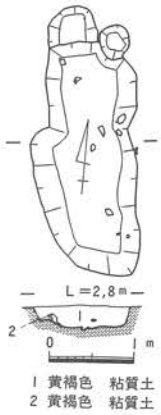
調査区の中央部の南寄りの地点で検出した遺構である。土坑201と重複する。土坑201は井戸の可能性がある土坑で、これに伴う溝と推定されるが、形状からは細長い土坑となる可能性も残る。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。

③溝203（ＳＤ203）

・遺構（第225図）



第225図　溝203 土層図

調査区中央部の南壁沿いで検出した。幅1.13m・深さ0.28mで、約3.25mを検出したが、さらに調査区外に延びると見られる。形状から見て、土坑が重複した可能性も残る。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。

④溝204（ＳＤ204）

・遺構

調査区中央部やや東寄りの地点で検出された南北方向の溝状遺構で、両端は閉塞する。幅約１m・深さ0.23mで、長さ3.09mである。両端が閉塞していることから、流路としての機能は持たず、何らかの区画のための溝であったと思われる。

・遺物

出土遺物は土師質土器・鉄滓の細片が数点出土したのみで、図示可能なものはない。

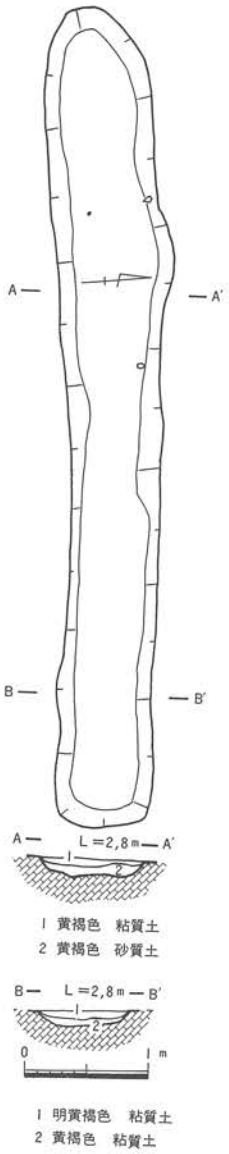
⑤溝205（ＳＤ205）

・遺構（第226図、図版57）

調査区のほぼ中央部で検出した東西方向の溝状遺構で、両端は閉塞する。幅0.84m・深さ0.14mの規模で、長さ6.51mであった。この溝のすぐ南側に建物202が位置することから、この建物に伴う溝であった可能性が高い。

・遺物

出土遺物は土師質土器の細片が数点出土したのみで、図示可能なものはない。



第226図　溝205 実測図

（３）土坑と出土遺物

計10基検出。土坑の形状は大別してほぼ円形のもの３基・長円形のもの４基・ほぼ長方形のもの３基に分かれる。円形のものの中には、井戸としての機能が考えられるものもある。

すでに述べたように出土遺物は全体に少なく、土坑202出土遺物が比較的目立つ程度である。

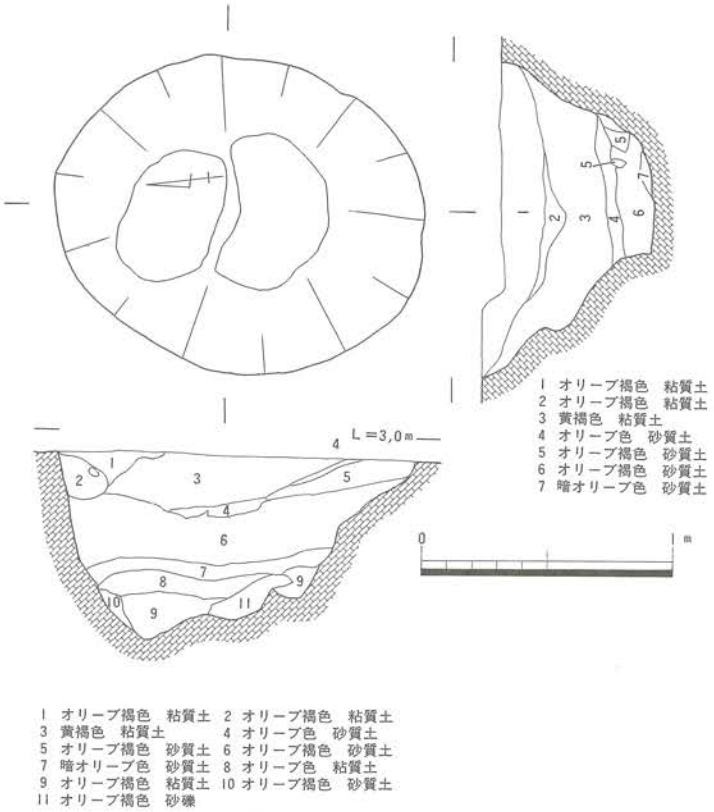
①土坑201（ＳＫ201）

・遺構（第227図、図版58）

調査区中央部の、建物202張出し部のすぐ西で検出したほぼ円形の土坑で、直径1.25～1.41m・深さ0.74mの規模を持つ。掘り方が当遺跡の基盤層を構成する砂礫層まで達していたことから素掘りの井戸であった可能性もある。

・遺物

出土遺物は土師質土器・瓦器などが約40点出土したが、いずれも細片であり、図示可能なものはない。



第227図　土坑201　実測図

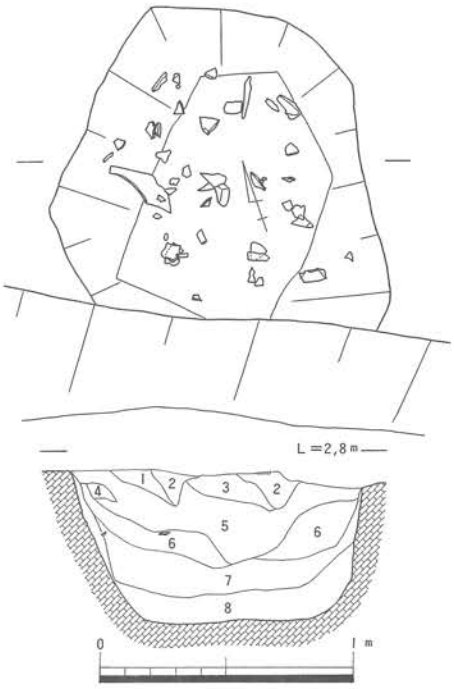
②土坑202（ＳＫ202）

・遺構（第228図、図版58）

調査区西部で検出。溝101に切られ、全体の形状・規模は不明であるが、やや不整な円形の土坑と見られる。東西の径は約1.16mで、深さは0.69mを測る。埋土は全体に粘性が強く、炭化物が多く認められた。

・遺物（第229図、表95、図版59）

出土遺物は、土師質土器・瓦質土器・輸入陶磁器・鉄製品などが約80点出土し、第２遺構面の遺構の中では最も多数の遺物が出土している。



1 黄褐色　粘質土　2 オリーブ褐色　粘質土
3 にぶい黄褐色　粘質土　4 オリーブ褐色　粘質土
5 オリーブ褐色　粘質土　6 褐色　粘質土
7 黄褐色　粘質土　8 オリーブ褐色　粘質土

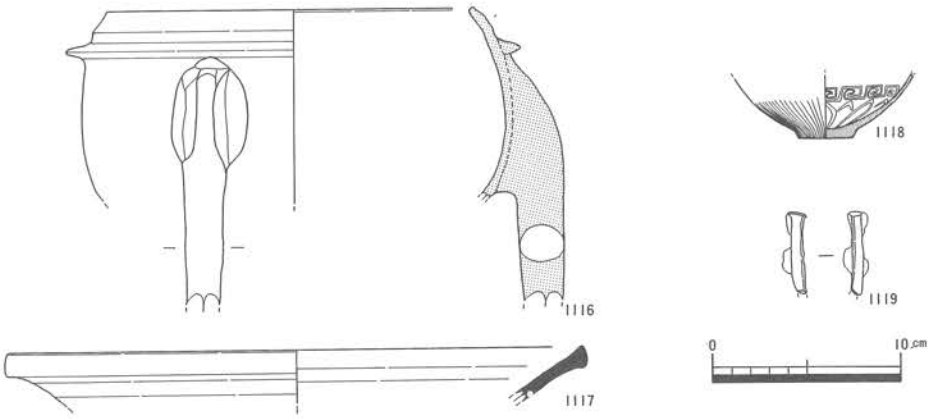
第228図　土坑202 実測図

1116は瓦質の羽釜である。口縁部1点・脚部2点の計3点が出土したが、同一個体のため図上で復原した。脚付きの羽釜で、口縁部・体部は内湾し、小さい鍔を貼り付ける。脚は鍔の直下に付く。口縁部内外面・鍔部ともヨコナデ、体部内外面はナデで仕上げられる。色調は灰色で、胎土には砂粒を多く含む。

1117は魚住焼と見られるこね鉢で、全体に器壁は薄い。口縁端部を上下に拡張し、先端部を平坦に仕上げる。口縁部外面には重ね焼痕が認められる。

1118は青白磁の碗である。径2.9cmの平高台が付くもので、体部内面に蓮弁文・雷文を浮き彫りし、体部外面には細線を施す。全体に器壁薄く、丁寧な製品である。

1119は鉄釘である。



第229図　土坑202 出土遺物

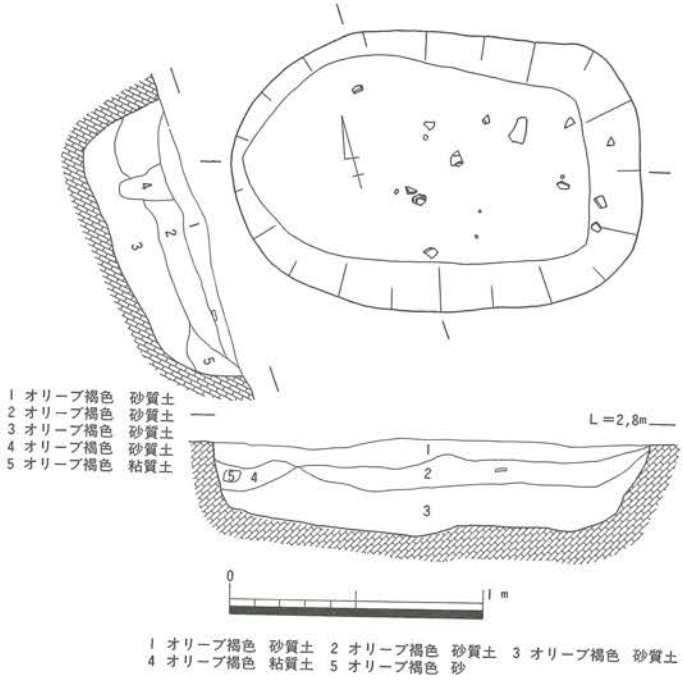
③土坑203（ＳＫ203）

・遺構（第230図）

調査区西部で検出。土坑202・土坑206に隣接する。形状は長円形で、長径1.73m・短径1.15m・深さ0.38mを測る。

・遺物

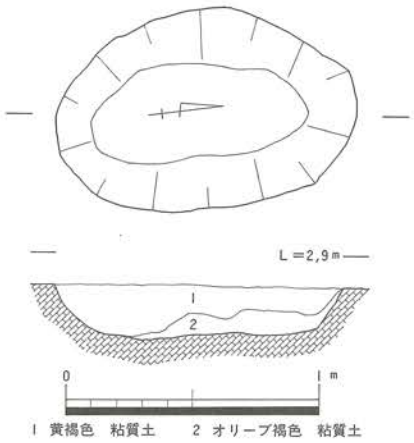
出土遺物は土師質土器を中心に瓦器・陶器・鉄滓などが56点出土したが、いずれも細片で、図示可能なものはない。



第230図　土坑203　実測図

④土坑204（ＳＫ204）

・遺構（第231図）



第231図　土坑204 実測図

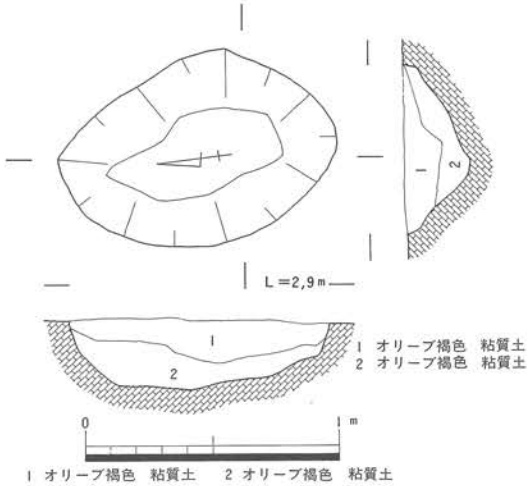
調査区ほぼ中央部やや南寄りの地点で検出した長円形の小土坑で、長径1.73m・短径1.14m・深さ0.22mを測る。

・遺物

出土遺物は土師質土器の細片が約10点出土したが、図示可能なものはない。

⑤土坑205（ＳＫ205）

・遺構（第232図）



第232図　土坑205 実測図

土坑204の南で検出されたやや不整な長円形で、長径1.02m・短径0.67m・深さ0.28mを測る。土坑209と重複する。

・遺物

出土遺物は土師質土器・瓦器・鉄釘などが約50点出土したが、いずれも細片であり、図示可能なものはない。

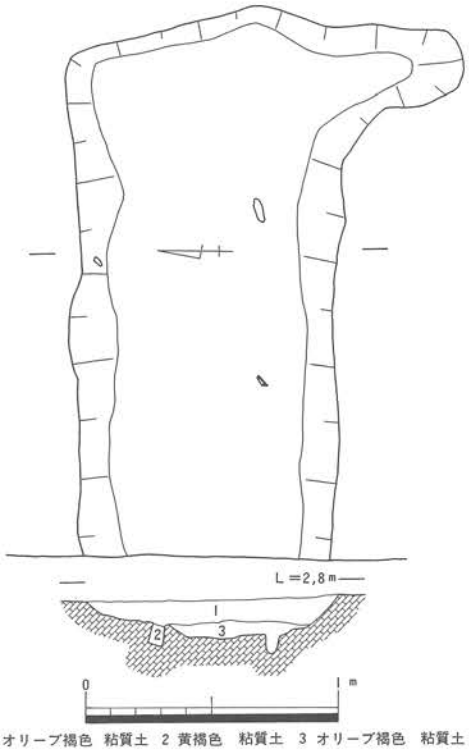
⑥土坑206（ＳＫ206）

・遺構（第233図）

調査区西部で、土坑202の北側で検出した土坑で、西端部を試掘溝のために削平してしまったために、全体の形状・規模は不明ながら、検出分で長辺2.18m・短辺1.01m・深さ0.17mの規模を持つ。

・遺物（第233図、表96）

出土遺物は土師質土器・鉄滓などの細片が13点出土したが、土師質の杯（1120）を図示し得たのみである。この杯は底径10.0cmに復原されるやや大形品である。底部は回転糸切りで、赤褐色を呈する。



第233図　土坑206 実測図・出土遺物

⑦土坑207（ＳＫ207）

・遺構（第234図）

調査区のほぼ中央部で検出した長方形に近い形状の土坑である。長辺1.46m・短辺1.00m・深さ0.17mを測る。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。

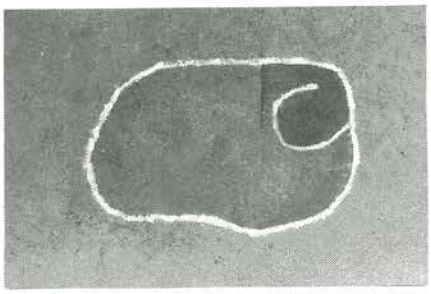
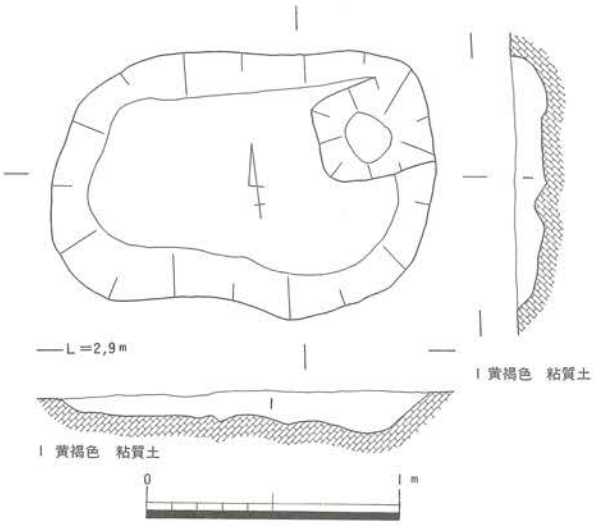


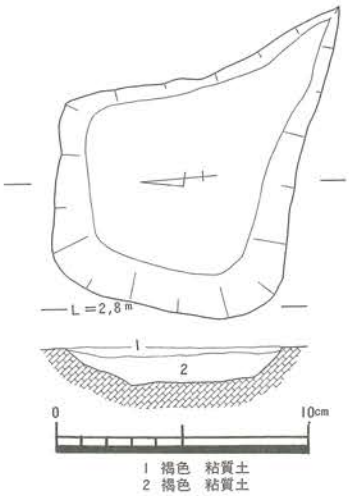
写真15　土坑207検出状況



第234図　土坑207 実測図

⑧土坑208（ＳＫ208）

・遺構（第235図）



第235図　土坑208 実測図

調査区中央部南壁沿いで、溝203に重複して検出された。全体の形状・規模は不明であるが、深さ0.15mと比較的浅い。

・遺物

出土遺物は少なく、図示可能なものはない。

⑨土坑209（ＳＫ209）

・遺構

調査区中央部で、土坑205と重複して検出されたもので、全体の規模・形状は不明である。

・遺物

出土遺物は見られなかった。

第4節　第1包含層出土遺物

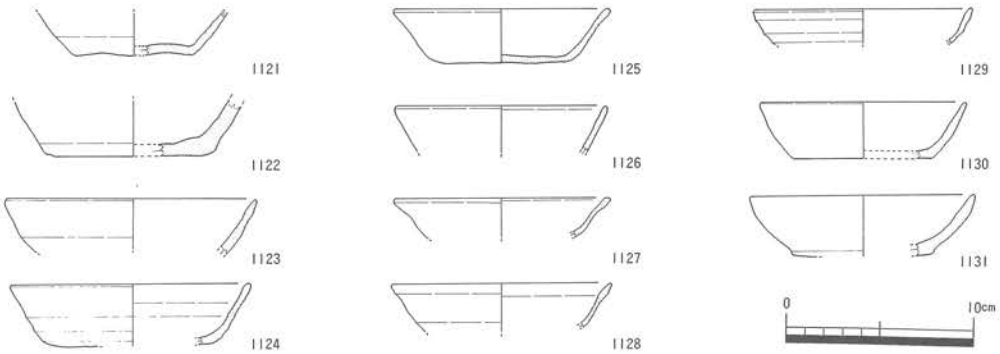
本節では第1遺構面に伴う遺物包含層（以下、第1包含層）から出土した遺物を取り上げる。第1包含層出土遺物には土師質土器、瓦器・瓦質土器、国内産陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品がある。

（1）土師質土器

土師質土器としては杯・皿・椀・鍋・羽釜が出土している。

杯（第236図、表97、図版60）

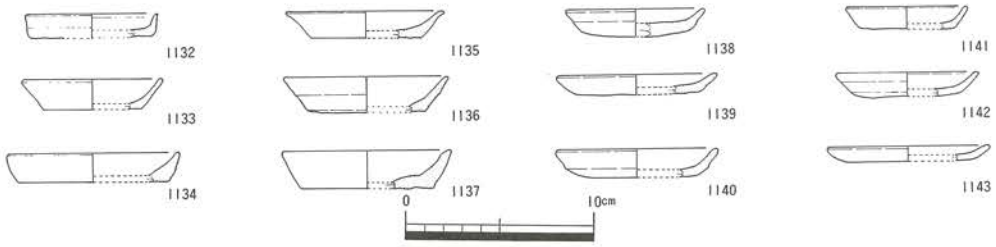
計11点（1121～1131）図示した。これは第1包含層出土の土師質土器全体の28％にあたる。いずれも破片であり、完形ないしは完形に近いものは見られない。底部が残るものについて見ると、底部を回転糸切りで切り離すもの（1122）とヘラで切り離すもの（1121・1125）がある。1122は底部から体部にかけての破片で、底径の復原値は7.4cmである。1125は復原値であるが、口径11.2cm・器高2.9cm・底径7.5cmの法量である。口縁部やや外反し、端部は丸く仕上げる。



第236図　第1包含層出土遺物(1)－土師質 杯－

皿（第237図、表98、図版60）

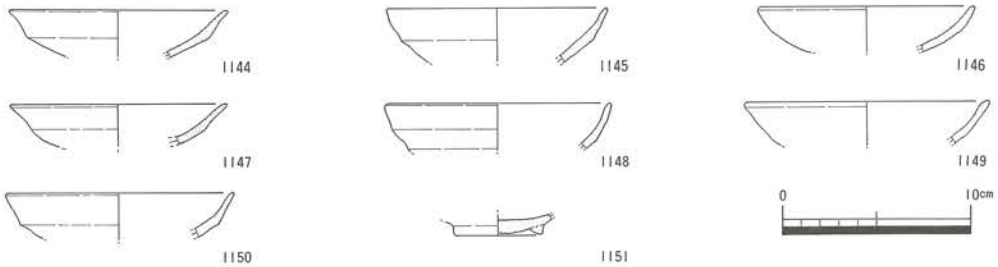
計12点（1132～1143）ある。これは土師質土器の30％にあたる。いずれも破片である。底部の切り離しは糸切りのもの（1132）とヘラ切りのもの（1135・1136）があるほか、底部外面にユビオサエを施すもの（1138～1140）がある。口径は6.8～8.4cmの間に分布し、いずれも小皿である。口縁部は直線的に延びるものとやや外反気味のもの、わずかに内湾させるものがある。器壁の厚さも個体差が顕著であるが、全体にヘラ切りと見られるものは薄手の作りである。



第237図　第Ⅰ包含層出土遺物(２)－土師質 皿－

椀（第238図、表99）

計８点（1144～1151）を図示したが、いずれも破片である。口径の復原値は9.9～12.3cmの間に分布する。体部中位ないしは上位で屈曲し、外面に弱い稜を持つものがほとんどであるが、中には稜が不明瞭なものもある。いずれも口縁部外面をヨコナデし、体部外面にナデを施す。内面は全体に丁寧なナデを施し平滑に仕上げている。1151は底部の破片であるが、断面三角形の低い高台を貼り付ける。以上の椀は形態・手法・色調から見て中部瀬戸内系の土師質椀と見られる。



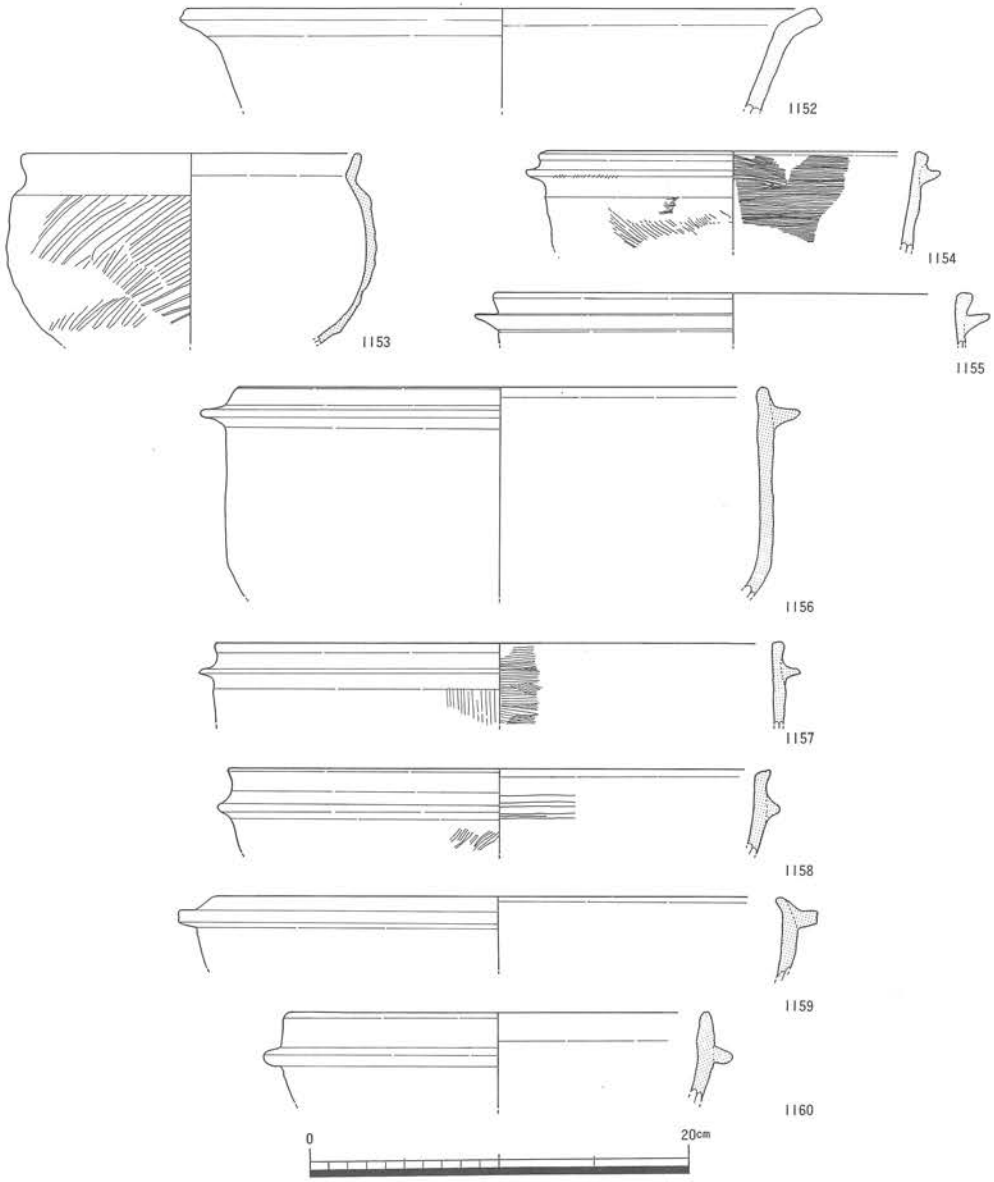
第238図　第Ⅰ包含層出土遺物(３)－土師質 椀－

鍋・羽釜（第239図、表100、図版60）

1152・1153・1158は鍋と見られる。1152・1153は口縁部を外反させるが、1152は体部が内傾し、1153は球形状を呈する。1153の体部外面には斜め方向の粗い平行叩きが施される。1158は短い口縁部に鍔が付くタイプであり、口縁部はやや外反し、体部内面に横方向のハケ目、同外面に斜め方向の粗い平行叩きを施す。

1154～1157・1159・1160は羽釜である。口縁部が直立気味のもの（1154・1156・1157）、わずかに外反するもの（1155）、内湾気味のもの（1159・1160）がある。鍔はいずれも貼り付ける。いずれも口縁部・鍔部にはヨコナデが施されるが、体部内面は横方向のハケ目を施すもの（1154・1157）とナデを施すもの（1156・1159・1160）があり、同外面は縦または斜め方向のハケ目のもの（1154・1157）とユビオサエを施すもの（1160）、ナデを施すもの

(1156・1159) などがある。



第239図　第Ⅰ包含層出土遺物(4)－土師質 鍋・羽釜－

(2) 瓦器・瓦質土器 (第240図、表101)

椀と皿がある。

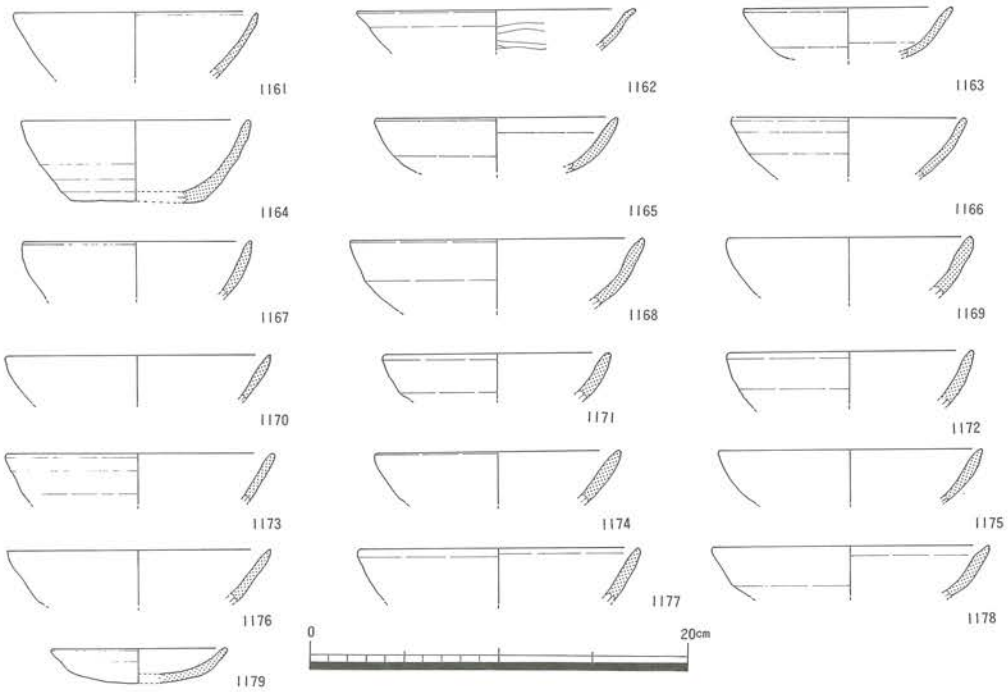
1161～1178は椀である。いずれも体部から口縁部にかけての小片であり、完形ないしは完形に近いものは出土していない。椀には和泉型の瓦器椀と見られるやや薄手のもの (瓦器椀

A）とやや厚手で、成形・調整にロクロを使用したと見られる椀（瓦器椀B・C）がある。前者に該当するのは1161・1162・1166・1173で、ほかは後者に属する。後者は厳密には瓦質土器と称すべきものであろう。

和泉型と見られる椀は復原値で口径12.2～14.8cmの間に分布するが、小片による復原のため、口径はやや不正確である。

和泉型以外の椀は復原値で口径11.0～15.6cmの間に分布する。この椀の特徴はすでに述べたように器壁が全体に厚いこと、口縁端部を尖り気味に仕上げること、いずれも炭素の吸着がほとんど見られないか、極めて不十分なこと、口縁部内外面にロクロ回転によると見られるナデが施され、成形・調整にあたってロクロが使用されたと考えられることなどである。

1179は皿である。口径9.0cm・器高1.9cmに復原される。口縁部はやや外反し、端部は尖り気味に仕上げる。器壁やや厚く、厚手の瓦器椀とセットで製作されたものと考えられる。



第240図　第Ⅰ包含層出土遺物（５）－瓦器 椀・皿－

（３）国内産陶器（第241図、表102、図版60）

すり鉢・こね鉢・盤・甕がある。

1180は備前焼と見られるすり鉢で、内面に９条単位の櫛描条線をほどこす。

1181～1190はこね鉢で、いずれも魚住焼の製品と考えられる。1185は口径25.8cm・器高

9.4cm・底径6.1cmに復原される。体部はほぼ直線的に斜め上方に立ち上がり、口縁端部を外方にやや折り曲げて、大きく上下に拡張する。底部外面に糸切り痕を留め、体部内外面にロクロナデを施す。体部外面は成形によると見られる凹凸が顕著に認められる。色調は灰白色で、胎土には砂粒が多く含まれる。その他のものはいずれも細片である。口縁端部の形態はバリエーションに富み、端部をあまり拡張しないもの（1183・1187・1189）、拡張が著しいもの（1181・1188）まで見られる。

1191は瀬戸焼の盤と見られる細片である。断面が円形に近い玉縁状の口縁で、全体に黄褐色釉を施す。

1192～1197は甕の体部の小片である。いずれも体部外面に叩き目を施す。叩き目には細かい格子目のもの（1192・1193・1197）と綾杉状のもの（1194～1196）がある。内面にはいずれもナデが施されるが、1192・1193・1195・1197はわずかに青海波文の叩きが残る。

（4）輸入陶磁器（第242図、表103、図版60）

輸入陶磁器は図示可能なものが少なく、わずかに青白磁の瓶と推定されるものの注口部（1198）と白磁の口縁部（1199）を図示したのみである。1199は玉縁状口縁の碗で、白色の素地に白色透明釉が施される。

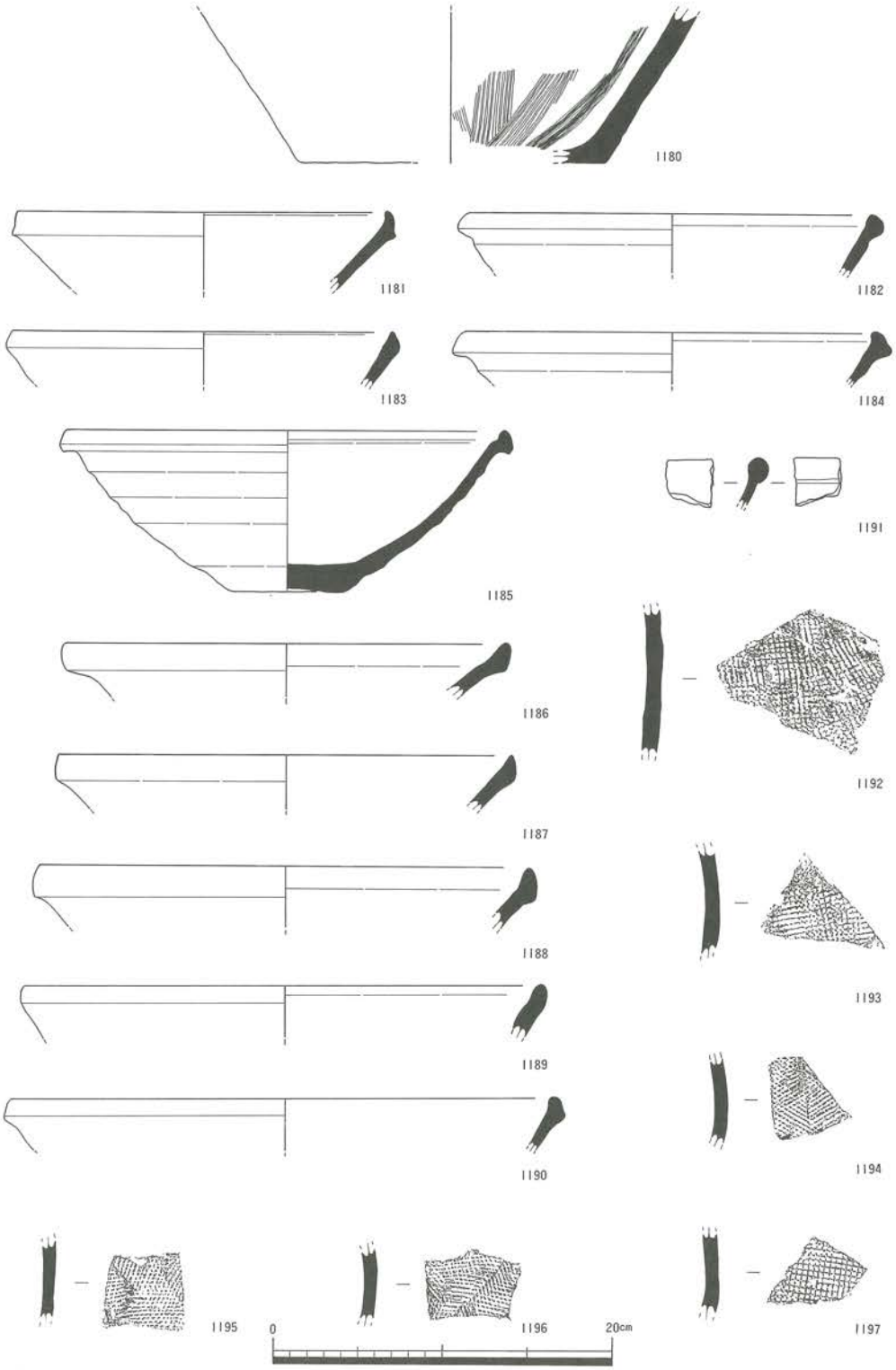
（5）土製品・石製品・金属製品（第243図、表104、図版60）

1200～1208は土錘で、いずれも紡錘形の管状土錘である。一部欠損するものもあるが、法量は長さ2.8～7.4cm・胴径1.0～1.7cm・重さ2.3～22.3gの間に収まる。

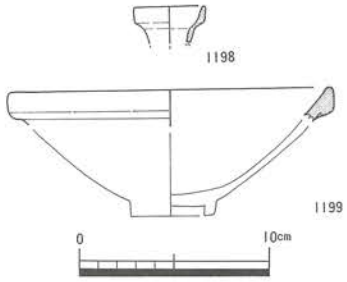
1209～1211は砥石である。1209・1211は表裏2面使用し、1210は4面とも使用している。石材は1209が凝灰岩、1211が泥岩と見られるが、1210については不明である。

1212・1213は銅銭である。1212は1101年初鋳の「聖宋元宝」、1213は1039年初鋳の「皇宋通宝」である。

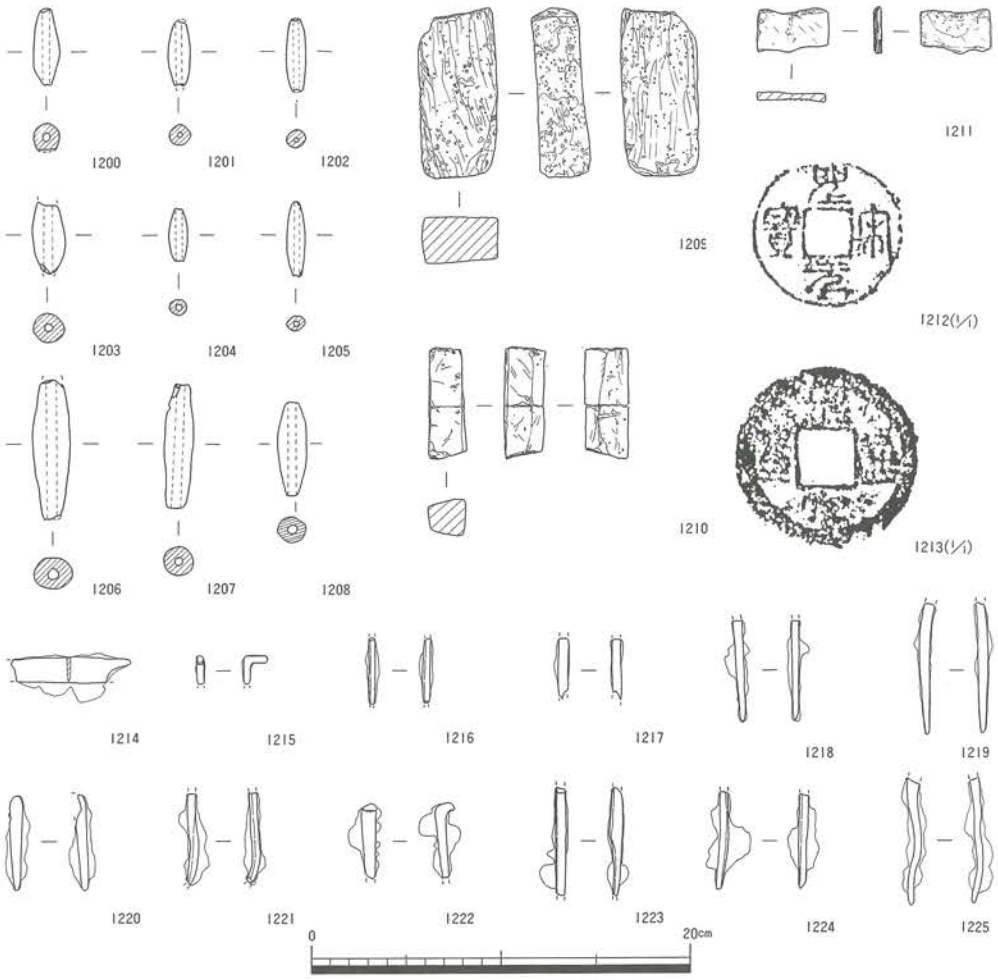
1214は刀子の断片、1215は釘かとも思われるが正確には不明である。1216以降は釘と見られるが、いずれも欠損品である。



第241図　第Ⅰ包含層出土遺物(６)－陶器 すり鉢・こね鉢・盤・甕－



第242図　第Ⅰ包含層出土遺物(７)－輸入陶磁器－



第243図　第Ⅰ包含層出土遺物(８)－土製品・石製品・金属製品－

第５節　第２包含層出土遺物

本節では第２遺構面に伴う遺物包含層（以下、第２包含層）から出土した遺物を取り上げる。第２包含層出土遺物には土師質土器、瓦器・瓦質土器、国内産陶器、輸入陶磁器、土製品、石製品、金属製品がある。

（１）土師質土器（第244図、表105、図版60）

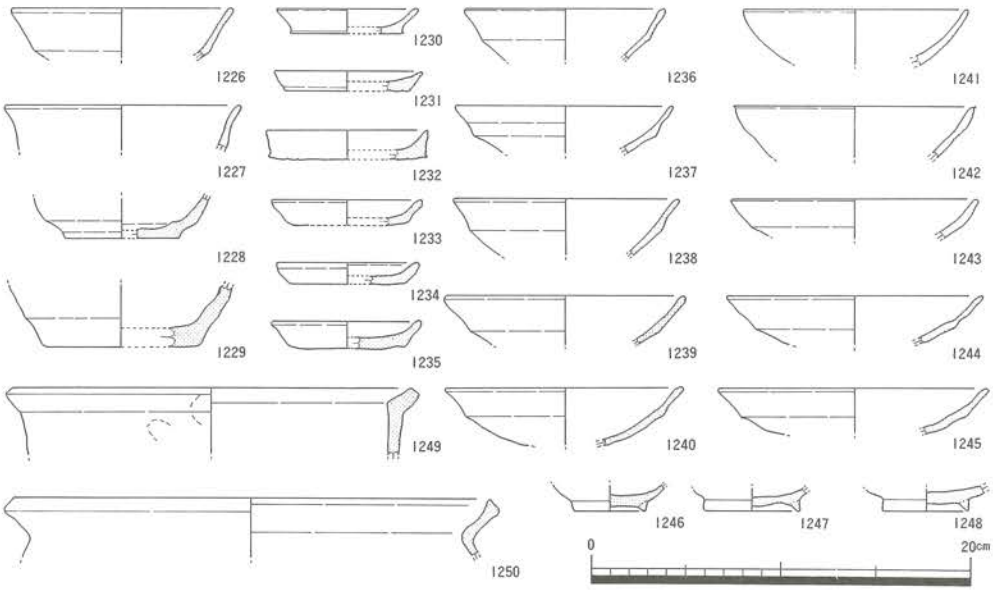
土師質土器としては杯・皿・椀・鍋がある。

杯

1226～1229は杯である。いずれも破片であり、完形ないしは完形に近いものは見られない。1228は底部回転糸切り。1229も同様と見られる。1226・1227は底部を欠くがヘラ切りの可能性が高い。1229は器壁厚く、大形の製品と見られる。

皿

1230～1235は皿である。底部の切り離しは糸切りのもの（1230）とヘラ切りのもの（1231・1232）があるほか、底部外面にユビオサエを施すもの（1233～1235）がある。いずれも破片のため、法量は復原値であるが、口径は7.3～8.4cm、器高は1.1～1.6cmの間に分布する。口縁部は直線的に延びるもの（1230～1232・1235）、やや外反気味のもの（1233）、わずかに内湾させるもの（1234）がある。調整は底部外面以外はいずれもロクロナデで仕上げられる。



第244図　第２包含層出土遺物(Ⅰ)－土師質 杯・皿・椀・鍋－

椀

1236～1248は椀である。計13点を図示したが、いずれも破片である。口径の復原値は11.4～14.2cmの間に分布する。体部中位ないしは上位で屈曲し、外面に弱い稜を持つものがほとんどであるが、中には1241のように稜が見られないものもある。いずれも口縁部外面をヨコナデし、体部外面にナデを施す。内面は全体に丁寧なナデを施し平滑に仕上げている。1246～1248は底部破片である。いずれも断面三角形の低い高台を貼り付ける。

以上の椀は形態・手法・色調から見て中部瀬戸内系の土師質椀と見られる。

鍋

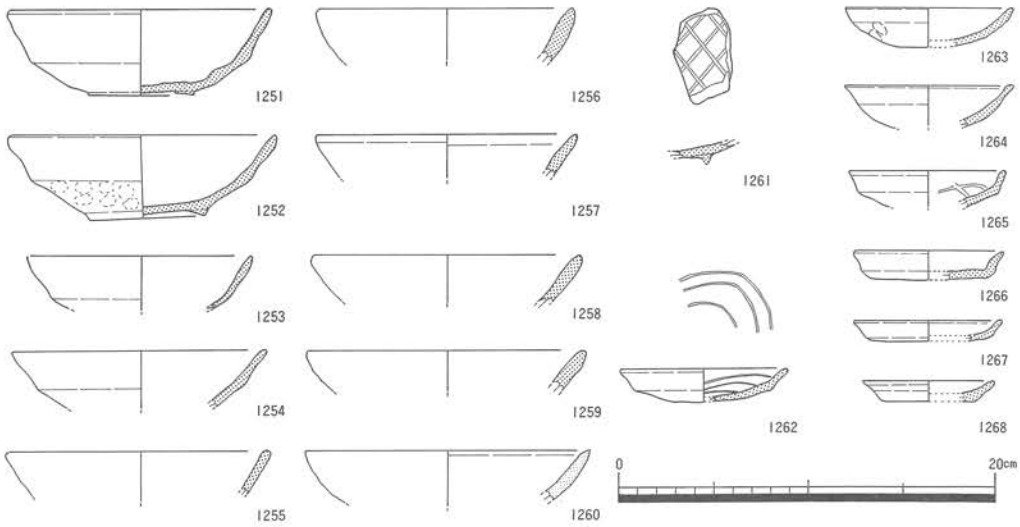
1249・1250は鍋と見られる。ともに口縁部を外反させるが、1249は体部が直立気味、1250は甕状を呈すると見られる。

（２）瓦器・瓦質土器（第245図、表106、図版60）

椀と皿がある。

椀

1251～1261は椀である。椀には和泉型の瓦器椀（瓦器椀Ａ）と和泉型とは異なるタイプのもの（瓦器椀Ｂ・Ｃ）がある。前者に属するのは1254のみで、その数は少ない。ほかはいずれも厳密には瓦質土器と称するのが適当なもので、全体に厚手のものが多い。しかし、中には1253のようにやや器壁の薄いものもある。1251は厚手のタイプではあるが、他のものと色調・胎土などが異なり、やや特異なタイプと見られるものである。復原値で口径13.4cm・器高4.5cm・高台径5.5cmを測る大形品である。体部内湾気味に立ち上がり、口縁端部はわずかに外反し、丸く仕上げる。幅広で極めて低い高台を貼り付ける。ロクロを使用して成形し



第245図　第２包含層出土遺物（２）－瓦器 椀・皿－

たと見られる。色調は灰色で、胎土は微砂粒を含む。1252はほぼ完形に復原される。口径13.8cm・器高4.4cm・高台径6.0cmを測る大形品である。口縁部やや外反し、端部を尖らせる。体部外面にユビオサエ、口縁部内外面にヨコナデ、体部内面にナデを施す。色調は灰褐色。1256～1260も器壁が厚く、口縁端部を尖らせる。1252と同様のタイプと見られる。1261は底部内面に斜格子状の暗文が施される。和泉型と見られる。

皿

1262～1268は皿である。いずれも破片であり、完形ないしは完形に近いものはない。復原による口径は6.9～8.9cmの間に分布する。1262には粗い渦巻状の暗文が施される。

（3）国内産陶器（第246図、表107）

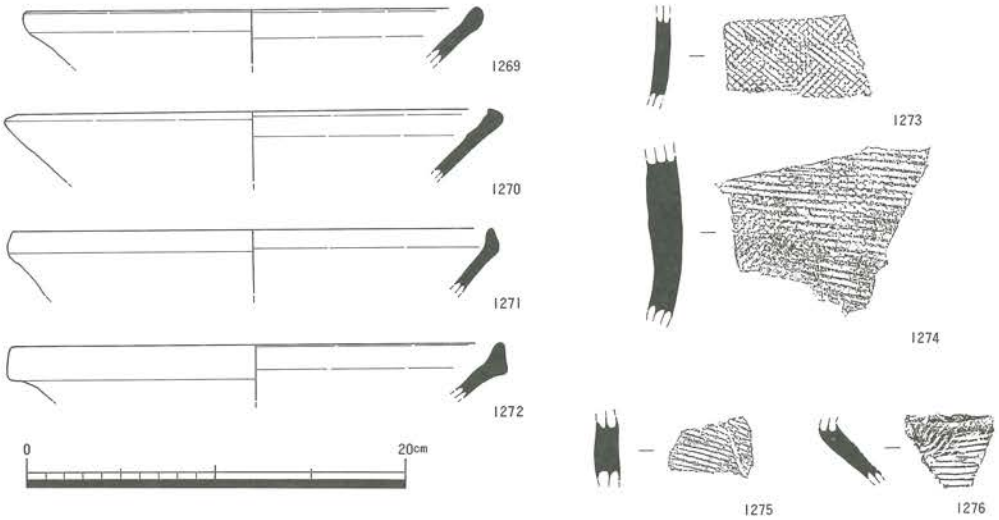
こね鉢と甕が出土している。

こね鉢

1269～1272は魚住焼のこね鉢である。いずれも細片であるが、口径は23.8～25.8cmに復原される。口縁端部をわずかに拡張するもの（1269・1270）と大きく拡張するもの（1271・1272）がある。

甕

1273～1276は甕の体部小片である。外面に細かい格子目叩きを施すもの（1273）と平行条線叩きを施すもの（1274～1276）があり、内面はいずれもナデで仕上げる。



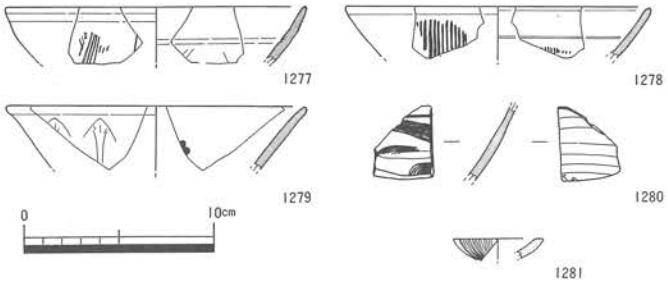
第246図　第２包含層出土遺物（３）－陶器 こね鉢・甕－

（4）輸入陶磁器（第247図、表108）

青磁の碗（1277～1279）と白磁の碗（1280）・白磁小皿？（1281）が出土したが、いずれ

も細片である。

1277・1278は体部内外面に櫛目文・内面に沈線が施される。同安窯系の青磁碗である。1279は外面に鎬蓮弁文を削り出すもので、龍泉窯系の製品である。



第247図　第２包含層出土遺物(４)－輸入陶磁器－

1280は内面に櫛目文を施す白磁碗である。

1281は細片のため器形不詳であるが、小皿と見られる。外面に沈線を放射状に施す。

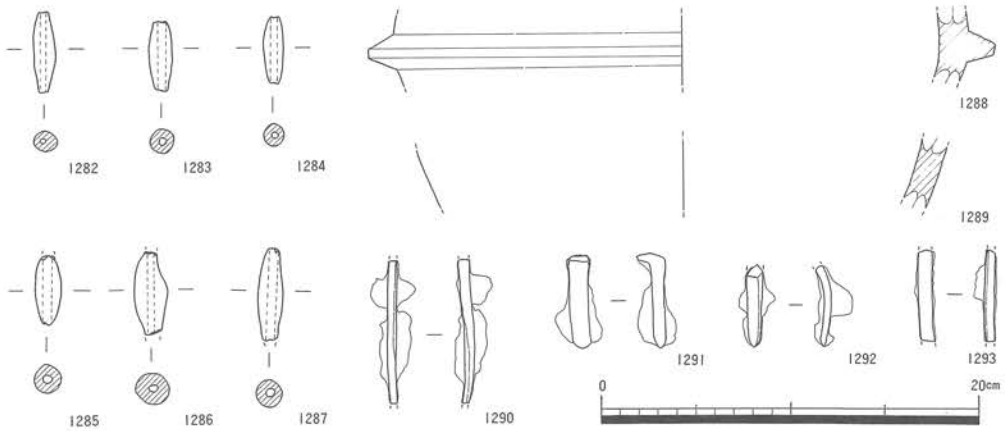
（５）土製品・石製品・金属製品（第248・249図、表109、図版60）

1282～1287は土錘で、いずれも紡錘形の管状土錘である。一部欠損するものもあるが、法量は長さ3.5～4.9cm・胴径1.1～1.8cm・重さ5.2～9.7ｇの間に収まる比較的小形のものばかりである。

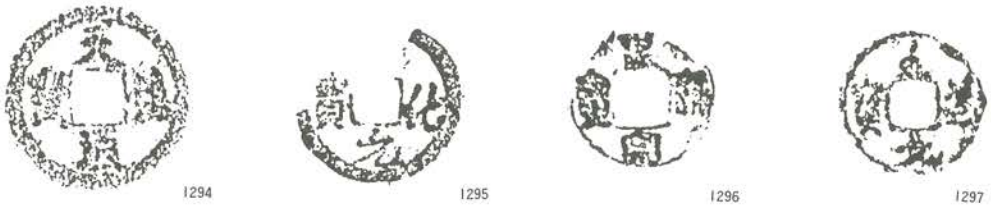
1288・1289はともに滑石製の石鍋の小片である。

1290～1293は鉄釘である。1291の頭部はＬ字形に屈曲する。いずれも断面は方形。

1294～1297は銅銭である。1294は1017年初鋳の「天禧通宝」、1295は990年初鋳の「淳化元宝」、1296は1039年初鋳の「皇宋通宝」、1297は995年初鋳の「至道元宝」である。



第248図　第２包含層出土遺物(５)－土製品・石製品・金属製品①－



第249図　第２包含層出土遺物（６）－金属製品②－　（縮尺は1/1）

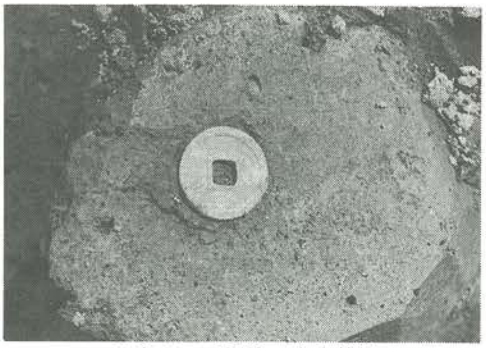


写真16　「銅銭」出土状況

第５章　遺構・遺物の検討

第１節　遺構の検討

南島田遺跡は中島田遺跡同様鮎喰川の右岸に位置し、標高約４ｍの比較的低平な平坦地に立地するが、位置的には中島田遺跡に比べて鮎喰川により近い。確認調査による知見では今回の調査区の東側・西側では遺構の広がりが確認されず、北側についても調査結果から見て、河川堆積の可能性が高いため、今回検出した集落は調査区の南側に向かって広がるものと考えられる。

今回の調査区内では、すでに述べたように２面の遺構面が検出され、第１遺構面では溝跡・土坑・自然流路、第２遺構面では建物跡・溝跡・土坑などが検出された。ここではその主なものについて若干の検討を加えることにしたい。

（１）第１遺構面の遺構

溝跡は２条検出されたが、この２条の溝はすでに指摘したようにほぼ同規模で、平行して掘られており、両者は有機的な関係を持つ溝であったと考えられる。全体を検出していないため断言できないが、二重の堀としての機能が想定される。というのも溝101はほぼ直角に曲がるコーナーを有しており、この溝が単に用排水路であったとすれば地形上わざわざ直角に曲げる必然性は少ないと見られるからである。二重の堀と考えた場合、外側にあたる溝102は自然流路101と合する形となるが、これは埋積土を見る限りでは、当初から合流していたと見られ、外側の堀は川に接続されていたと考えることができる。その目的は正確には不明ながら、堀を通して川に排水する機能も合せ持っていたとも考えられる。

次に13基検出された土坑であるが、形状から見ると、長方形のもの（土坑101）、長円形のもの（土坑102・103・104・105・106・107・108・112）、円形のもの（土坑110）、不整形のもの（土坑109）などがある。土坑111は数基の土坑が重複したものと見られるので、個々の形状については不明である。このうち、土坑101は検出面が他の土坑と比べてやや新しい時期のものである上、水田跡に伴って検出されたものであり、他の土坑とは基本的に性格が異なるものと見られるが、その性格については水田の何らかの施設に伴うものであったか、墓として掘られた可能性が想定されるだけで、正確には明らかでない。その他の土坑については、２個体分の土師質の杯が出土した土坑103が小規模の墓壙となる可能性が考えられるほかは性格については不明とせざるを得ない。

自然流路101は調査区の北半分からさらに調査区外にかけて流れる大規模な川であるが、

厚く堆積した砂層と砂礫層の状況からかっての鮎喰川の河道と考えられる。自然流路102は自然流路101を本流とする流路の支流と考えられるものである。ほぼ同時期に存在していたと見られることは合流地点で、自然流路102で見られた青灰色粘土層が自然流路101の岸へ流れ込んだ状況で堆積していたことから判断される。しかし、本流と見られる自然流路101が厚い砂層で覆われていたのに対し、自然流路102の方は粘土層の堆積が厚く、両者の埋没の状況は明らかに異なっている。自然流路102の方は流れが止まり、河跡湖となった時期があったと考えられる。出土した遺物の大半はそうした時期に埋没したものであろう。

（2）第2遺構面の遺構

第2遺構面ではすでに述べたように建物跡2棟・溝跡5条・土坑9基が検出されたが、これらの遺構は当地点で、人々が初めて営んだ集落に伴うものである。

建物跡2棟はその位置関係から考えて同時期に存在したと見られる。建物で注目されるのは建物201の柱穴に比較的しっかりした根石を持つものが3個認められることと、建物202の建物に張り出し部が付く点とやや変形の間取りが見られる点であろう。

建物の向きについては軸方向を北とすると、建物201がN1°W、建物202がN2°Wであり、ほぼ磁北に沿う方向を持っている。棟方向はいずれも南北方向と推定される。

次に溝であるが、いずれも規模が小さい上、両端が閉塞するものが見られることから、建物を区画する溝であった可能性が高い。溝同志が切り合うものはない。

土坑は形状で見ると、円形のものと長円形のもの、長方形のものがある。性格が明らかになるものはないが、土坑201は素掘り井戸の可能性がある。また、長方形状のものは墓壙の可能性がある。

第2節　遺物の検討

本書に掲載した南島田遺跡出土遺物の総点数は表5に示したように262点であるが、その大半は自然流路出土遺物と包含層出土遺物で占められ、遺構に伴う出土遺物は極めて少ない。遺構に伴う遺物が少ないため、遺構および遺跡の年代を決定する上に大きな困難を生じるが、主要な遺物の検討を通して、遺物及び遺跡の年代を検討したい。

（1）土師質杯

土師質杯は細片が大部分で図示し得たのは遺構出土8点・包含層15点の計23点に過ぎない。杯は底部の切り離しによって大きく二つに区分され、回転糸切りのものを杯A、ヘラ切りのものを杯Bとする。

表5　南島田遺跡出土遺物一覧表

区分	土師質土器					小計	瓦器・瓦質土器				小計	国内産陶器						小計	輸入陶磁器				小計
	杯	皿	椀	鍋	釜		椀	皿	羽釜	火鉢		椀	すり鉢	こね鉢	壷	甕	その他		碗	皿	瓶	四耳壺	
遺構	8	2	5	7	4	26	6	1	3	2	12	2	2	10	2	2		18	4			1	5
比率(%)	31	8	19	27	15	(31)	50	8	25	17	(14)	11	11	56	11	11		22	80			20	(6)
包含層	15	18	21	5	6	65	29	8			37		1	14		10	1	26	5	1	1		7
比率(%)	23	28	32	8	9	(37)	78	22			(21)		4	54		38	(4)	15	72	14	14		(4)
計	23	20	26	12	10	91	35	9	3	2	49	2	3	24	2	12	1	44	9	1	1	1	12
比率(%)	25	22	29	13	11	(35)	72	18	6	4	(19)	4	7	56	4	27	(2)	17	76	8	8	8	(4)

区分	土製品		小計	石製品		小計	金属製品				小計	計
	土錘	瓦		砥石	石鍋		銅銭	鉄釘	刀子	その他		
遺構	13	2	15	1	1	2	1	3		2	6	84
比率(%)	87	13	(18)	50	50	(2)	17	49		34	(7)	
包含層	15		15	3	2	5	6	15	1		22	177
比率(%)	100		(8)	60	40	(3)	27	68	2		(12)	
計	28	2	30	4	3	7	7	18	1	2	28	261
比率(%)	93	7	(11)	57	43	(3)	25	63	4	8	(11)	

杯A

底部を回転糸切りで切り離していることが認められるのは4個体のみである。その内訳は遺構出土3点（1053・1061・1120）、包含層出土1点（1122）である。このうち1053は器壁が薄く（杯AⅠ）、1061・1120・1122の3点は器壁が厚い（杯AⅡ）。器壁が厚いタイプの中には胎土の粗い1061・1122（杯AⅡa）と極めて精良な1120（杯AⅡb）がある。

底部の切り離し不明のものについて見ると、1229が杯AⅡaのタイプと見られ、底部の糸切り痕をナデ消す。

杯Aの中で、中島田遺跡出土の杯AⅠaの通有のタイプと共通するのは杯AⅡaであるが、焼成はより堅緻で、焼き締めが進んでいるものが多い。

杯B

底部をヘラで切り離すタイプである。底部が残り、確実にヘラ切りと判断されるものは図化したものの中ではわずか4点に過ぎないが、色調・焼成等から杯Bとみなされるものは比較的多い。杯Bはいずれも器壁が薄く、色調も黄褐色系の色調を呈する。土坑103出土の1054は口径12.0cm・器高3.2cm・底径6.4cmを測るもので、口縁部やや外反し、端部を丸く仕上げる。底部外面以外はロクロナデで仕上げられ、内面の底部は一方向のナデを施す。この個体は杯Bの典型例であるが、土坑103からはすでに述べた杯AⅠに属するタイプの杯(1053)も出土しており、杯AⅠと杯Bは確実に共伴する。

以上の杯は編年研究の遅れから単独では年代を与えることができないため、共伴遺物等によって年代を検討するしか方法がないが、年代を特定し得る共伴遺物は出土していない。

（2）土師質皿

土師質の皿は20個体図示したが、遺構出土のものは2点と極めて少ない。底部の切り離し方法の差異・高台の有無等によって大きく4つに区分される。

皿A

底部を糸切りで切り離すもので、3点図示した。遺構出土は溝102出土の1点（1049）のみであるが、この皿は完形品で、口径8.5cm・器高1.7cm・底径7.0cmを測る。底部は器壁厚く、やや丸底状を呈する。底部外面は糸切り後、全体にナデを施す。この皿の形態は南島田遺跡出土の皿の中では特異である（皿AⅡ）。溝の底から出土したため、下部の砂礫層に伴う遺物であった可能性も残る。他の2点はともに第1包含層から出土したもので、1132は短い口縁部が直立気味に立ち上がり、1134はやや内湾気味に立ち上がる。法量は小片のためやや不正確である。この皿は中島田遺跡出土の皿Aとほぼ同様なタイプである（皿AⅠ）。

皿B

底部をヘラで切り離すもので7点あるが、いずれも包含層出土で、第1・第2包含層とも

に見られる。法量は小片による復原値で、口径7.2〜8.9cm・器高1.1〜2.0cm・底径5.1〜8.2cmの間に分布する。形態はいずれも底部平底であるが、口縁部は直線的に立ち上がるものとやや外反するものがある。また、器高が極めて低いものと高めのものがあり、形態の上ではバリエーションに富み、とくに1137・1232は特異なタイプであり、細分可能と見られる。

皿C

底部にユビオサエの痕跡を留めるものであり、6個体を図示した。いずれも包含層出土であるが、第1包含層・第2包含層とも出土している。法量は復原値であるが、口径7.2〜8.3cm・器高1.1〜1.5cm、底径5.5〜7.5cmの間に分布する。器壁は1138がやや厚いほかはいずれも薄手である。また底部の形状は丸底状のものと平底のものがある。調整はいずれも底部外面以外はロクロナデで仕上げられる。

皿D

高台が付くタイプであるが、このタイプのものは自然流路101から出土した1点（1062）のみである。この皿は摩耗が激しいことや形態的に時期の古いタイプと見られることから、混入品と考えられる。

以上の皿についても単独では年代を与えることができない。

（3）土師質椀

椀は遺構出土5点・包含層出土21点を図示したが、いずれも細片で、完形ないしは完形に近いものは出土していない。形態・手法はいずれも中部瀬戸内系の土師質椀に共通するものである。土師質椀の変遷は法量の縮小化、高台の退化傾向として把握されているが、当遺跡のものは細片が多いため、法量を手掛かりとすることには問題が多いので、[註1]わずか4点のみであるが、高台が残る個体について検討を加える。高台が残る個体はいずれも包含層からの出土であり、第1包含層から1点（1151）、第2包含層から3点（1246〜1248）出土している。1151は一部剝落するが、高台径3.4〜4.6cmに復原される。長円形で、断面三角形の退化傾向の顕著な高台である。1246は径3.9cmの低い高台で、やはり退化傾向が著しいものである。1247はやや高台高が高く、比較的安定した高台である。1248は径4.5cmで、やや外方に張り出し気味の高台が付く。高台の形態を見る限りでは前2個体と後2個体ではやや時期差が考えられるように思われる。広島県尾道中世遺跡の調査例ではこうした高台付椀は室町時代後半までに消滅し、後半になると底部に高台を[註2]貼り付けない丸底状のもののみとなることが報告されている。こうした例と高台の退化傾向から見て、当遺跡出土の椀は室町時代前半頃の年代が考えられる。

（4）鍋

鍋はいずれも土師質で、瓦質のものは出土していない。図示したのは遺構7点・包含層5点の計12点である。口縁部・体部の形態から大きく4つに分類可能である。

鍋A

口縁部を折り曲げないタイプで、溝102から1点、自然流路101から3点、同102から1点の計5点ある。いずれも細片であり、法量の復原値はやや正確さを欠く。口縁端部はいずれも拡張するが、拡張の度合いが少ないものから、著しい拡張のために下端部が鍔状に巡るものまで見られる。体部は直立気味のものとやや内湾するものが見られる。いずれも口縁部にヨコナデを施し、内面の体部にナデを施すが、1070には体部下部にヘラケズリが施される。外面の体部にはユビオサエ後粗いナデが施される。

鍋Aは中島田遺跡出土の鍋Aと同一のタイプである。

鍋B

口縁部が外反し、端部を平坦に仕上げるタイプである。自然流路102より1点・第1包含層より1点・第2包含層より1点の計3点が出土している。いずれも口縁部の破片である。口縁部にヨコナデ、体部内面にナデを施す。1152の体部外面はナデ、1249はユビオサエを施す。この1249は他の2点と色調・焼成・体部の形態が異なり、細分可能である（鍋BⅠ）。この鍋BⅠは中島田遺跡出土の鍋Bと形態・手法が共通する。他の2点（鍋BⅡ）は中島田遺跡では出土していない。

鍋C

口縁部外反し、甕状の体部を持つタイプである。1153がこのタイプに属する。また、1040と1250は前者とタイプがやや異なるものの、やはり甕型の体部となる可能性がある。

1153は口径17.7㎝に復原され、「く」の字状に屈曲する短い口縁部が球形の体部に付く。口縁部内外面にはヨコナデ、内面の体部にはヘラケズリ、外面の体部には斜め方向の粗い平行叩きが施される。このタイプの鍋は中島田遺跡では出土していない。類例は高知県田村遺跡Ｌｏｃ．６ＳＤ１[註3]出土遺物に見られ、田村遺跡の分類では土師質鍋Ｂ－Ⅰ類に該当するものと見られる。このＳＤ１は14世紀から15世紀初頭に位置付けられている。

鍋D

鍔が付くタイプで、口縁部はやや外反する。出土例は少なく、図示し得たのは第1包含層出土の1点（1158）のみである。体部外面に斜め方向の叩きが施される。中島田遺跡の土師質鍋Dと同一タイプである。また、前掲の田村遺跡Ｌｏｃ．６ＳＤ１からも同タイプのものが出土しており、鍋Cと同時期のものと考えられる。

（5）羽釜

羽釜には土師質のものと瓦質のものがある。土師質のものは10点、瓦質のものは3点ある。このうち、遺構出土のものは土師質のもの4点、瓦質のもの3点である。口縁部から体部にかけての細片が大部分を占める。口縁部の形態・脚の有無等によって大きく三区分される。

羽釜A

口縁部が直立気味に立ち上がるタイプのもので、土師質・瓦質合わせて10点ある。口縁部はいずれもヨコナデを施すが、内面の体部にはナデを施すものと横および斜め方向の細かいハケ目を施すものがある。外面にはユビオサエを施すものと縦および斜め方向の細かいハケ目を施すものがある。

羽釜B

口縁部が内湾するタイプである。土師質・瓦質合わせて2点とその数は少なく、ともに第1包含層からの出土である。1159は口縁部極めて短く、断面方形の短い鍔が付く。口縁部・鍔部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。1160は1159と異なり、口縁部やや長め。断面三角形の小さい鍔を貼り付ける。口縁部内外面にヨコナデ、体部内面ナデ、同外面ユビオサエを施す。いずれも小片のため法量はやや不正確である。

羽釜C

脚付きのタイプであるが、このタイプは土師質のものはなく、瓦質のものが土坑202から1点（1116）出土したのみである。この羽釜は口径19.3cmに復原されるやや小形のもので、断面三角形で突起状の小さい鍔の直下に脚が付く。口縁部・鍔部にヨコナデ、体部内外面にナデを施す。このタイプの羽釜は平安京[註4]・岡山県百間川原尾島遺跡[註5]・広島県草戸千軒町遺跡[註6]などでも出土しており、平安京では鎌倉時代と見られる遺構、百間川では13世紀以後とされる遺構、草戸ではⅡ～Ⅲ期の遺構から出土しており、おおよそ鎌倉時代から室町時代後半頃までの比較的長期間にわたって使用された羽釜であることが知られる。

以上、羽釜について説明を加えてきたが、羽釜もまた土師質のものは地域色が認められるため、単独では年代を与えることができない現状下にある。そうした中で、羽釜Cは他遺跡の出土例から幾分幅があるものの鎌倉時代から室町時代にかけての時期のものであると考えることが可能である。

（6）瓦器・瓦質土器

ここでは瓦器と、前項で取り上げた羽釜以外の瓦質土器を取り上げる。瓦器には椀と皿がある。また瓦質土器にはすでに述べた羽釜のほかに火鉢がある。なお、瓦器の椀として上げた中には、瓦質土器に含めるべきものも認められるが、ここでは一括して瓦器として取り上げたことを付記しておく。

瓦器の椀は遺構出土６点・包含層出土２９点を図示したが、大部分が細片で、法量の復原値がやや不正確なものもある。椀には大きく分けて二種類ある。一つは和泉型の瓦器椀と見られる比較的器壁の薄いタイプ（瓦器椀Ａ）で、他の二つは明らかに和泉型とは異なるタイプのもので、全体に器壁が厚く、大形のものが多い。瓦質土器と呼ぶに相応しい土器である。この厚手の椀にも二種類あり、一つは焼成が明らかに瓦質と識別可能で、口縁端部を丸く仕上げ、炭素の吸着が比較的良好なもの（瓦器椀Ｂ）と、焼成が瓦質と土師質の中間的な状態を呈し、口縁端部を尖り気味に仕上げ、炭素の吸着が不良なもの（瓦器椀Ｃ）である。

瓦器椀Ａ

図示したものの中で、瓦器椀Ａに属すると見られるのは10点である。このうち、遺構出土は溝101の２点のみで、ほかは自然流路101から２点と、第１包含層から４点、第２包含層から２点出土している。いずれも口縁部あるいは口縁部から体部にかけての細片である。小片のため暗文については不明なものが多いが、明らかに暗文が施されていることが判明するのは、1065・1162・1261の３点のみである。前二者は体部内面に幅広の暗文が認められ、渦巻状の暗文となる可能性が高い。後者の１点は内面の底部に斜格子状の暗文が施される。炭素の吸着は1162と1166が未吸着に近いが、ほかは内外面に炭素を吸着させる。ただし、吸着が極めて良好なものは認められない。底部が残るものは1261の１点のみであり、全体的に高台の有無及び形状を検討できないが、1261の高台は幅広く粘土紐を貼り付けて、断面三角形の低い高台に仕上げる。

以上の瓦器椀Ａはいずれも和泉型と見られるものであるが、確実な法量が得られる個体がないことや小片のため暗文の状況が明らかでないこと、さらには高台の形状等が不明であることなどから、所属する年代を詳らかにすることは極めて困難である。だだし、1261は高台の形状・斜格子状の暗文などから比較的古相を保っていると見られ、中島田遺跡出土の瓦器椀とほぼ同時期か、それより一時期古いⅢ－３期に属する可能性がある。[註7]

瓦器椀Ｂ

瓦器椀Ｂに属すると見られるものは21点ある。その出土状況は自然流路から２点・第１包含層から13点・第２包含層から６点出土している。第１包含層・第２包含層出土のものはほぼ同一形態で、そこには時期差を想定することは困難である。第２包含層から出土した１点（1252）がほぼ完形に復原可能であったほかは、いずれも口縁部ないしは口縁部から体部にかけての破片で、中には極めて小さい破片のものもある。したがって法量の復原値はやや不正確であるが、ほぼ完形のものの法量は口径13.8㎝・器高4.4㎝・高台径6.0㎝を測り、復原値による全体の平均口径も13.5㎝となり、全体に瓦器椀Ａに比べると大形品であることが知られる。このタイプの椀は全体に器壁が厚く、いずれも口縁端部を尖り気味に仕上げる点に形態的特徴が窺えるが、高台の形状も極めて特徴的である。すなわち、幅1.0㎝前後の幅広

い粘土紐を貼り付けて、断面が低い三角形の高台に仕上げており、高台高が低い割には径が大きい高台となっている。調整は口縁部内外面にヨコナデ、体部・底部内面にナデ、同外面にユビオサエ後粗いナデを施す。口縁部のヨコナデは比較的粗い目の布などのためか、ハケ目に近い筋状の痕跡が認められるものが多く、中には成形・調整にロクロを使用したとも考えられるナデ痕を留めるものもある。焼成が良好なものは素地が灰白色を呈するが、やや不良なものの中には土師質との区別が困難な色調を呈するものもある。炭素を内外面に吸着させるものと、内面に吸着が認められないもの、全体に未吸着のものがある。内面に炭素が吸着しないものも口縁部内面は黒色となるものが多いことから、これは重ね焼によって、内面が未吸着になったと推定される。内外面に炭素を吸着させるものもあたかも煤が付着したかのような状態であり、典型的な瓦器椀の炭素吸着に比較するとその技術は極めて劣ったものと考えざるを得ない。胎土は粗砂をほとんど含まないが、微砂粒を含むため器面の手触りは平滑ではない。

以上の瓦器椀Ｂは厳密には瓦質土器と呼ぶべきものであるが、その生産地および系譜については詳らかにできない。中島田遺跡ではこうしたタイプのものは細片がごく少数包含層から出土しているが、和泉型の瓦器椀が専ら使用されていたことが知られる。ところが南島田遺跡では和泉型の瓦器椀の比率は低下し、こうした瓦質土器と言うべき椀が多く使用されている。このような全般的な傾向から推定して、和泉型の瓦器椀が衰退期に入り、阿波への供給量が減少した段階で、その代替品として生産されたのが、こうしたタイプの椀であったと考えられる。

瓦器椀Ｃ

やはり和泉型の瓦器椀と区別される厚手の椀であるが、瓦器椀Ｂと区別されるのは口縁部が丸く仕上げられること、焼成が明らかに瓦質と識別可能で、炭素の吸着が良好であることなどである。ただし、全体的な形態および調整等は瓦器椀Ｂに共通する点もあり、瓦器椀Ｂの丁寧な作りの製品である可能性も残る。

このタイプのものは比較的少なく、第２包含層から２点出土しているのみである。1251のものは底部から口縁部にかけての比較的大きな破片で、口径13.4cm・器高4.5cm・高台径5.5cmに復原される。体部中位で屈曲し、口縁部はわずかに外反気味。端部は丸みを持つ。調整は口縁部内外面・体部外面上位・体部内面・高台部にヨコナデ、底部内面にナデ、体部外面下部・底部外面にヨビオサエ後ナデを施す。色調は口縁部全体と外面が暗灰色、内面が灰色を呈する。内面は重ね焼のためか、炭素の吸着は不十分である。

1251は口縁部の小片であるが、やはり口縁端部を丸く仕上げ、内外面に炭素を吸着させる。なお以上の２点のほかに、このタイプに近い椀（杯の可能性もある）が第１包含層から１点（1164）出土している。これは無高台であり、やや特異であるが、ここでは色調・焼成の共

通性から一応このタイプの椀に含めておき、細別については資料の増加を待ちたい。

以上の瓦器椀については、Aタイプ以外はこれまで県内では報告例がないと見られるため、正確な年代については明らかにすることができない。しかし、すでに述べたように、厚手の瓦器（瓦質）椀が和泉型の瓦器椀の補完として生産されたと仮定するならば、その時期は和泉型の瓦器椀が衰退期を迎える14世紀末から15世紀初頭の頃と推定することが可能であろう。

皿

瓦器の皿は出土点数が少なく、図示し得たのはわずか9点に過ぎない上、いずれも細片である。このうち遺構出土のものはなく、自然流路102出土のものが1点（1087）、第1包含層出土のものが1点（1179）あるほかは第2包含層出土である。

底部が平底のものとやや丸底状のものがあり、器肉も薄いものとやや厚めのものがある。しかし、瓦器椀Bとセットになるような厚手の皿はなく、いずれも和泉型の瓦器皿と考えられる。このように皿については和泉型のものしか見られない点が椀と対象的であるが、その理由については単に偶然によるものか別の要因があるのかは不明である。なお、瓦器椀Bとセットになるような厚手の皿が生産されたことは、中島田遺跡の包含層出土の瓦器皿の中に、厚手で口縁端部を尖らせ、色調・焼成が瓦器椀Bに共通する皿が少量認められることから判明する。

（7）国内産陶器

南島田遺跡で出土した国内産陶器には、魚住焼のこね鉢、備前焼のすり鉢・椀・壷、瀬戸の天目椀・盤、産地不詳の甕などがある。総点数で44点を掲載した。

魚住焼

魚住焼にはこね鉢がある。こね鉢は遺構出土10点・包含層出土14点の計24点を図示した。いずれも細片で法量の復原値はやや不正確なものもある。わずかに1185は全体の形状が知られる唯一の個体であり、口径25.8cm・器高9.4cm・底径6.1cmに復原される。口縁端部は拡張がさほど顕著でないものから、上下に大きく拡張するものまでバリエーションに富む。いずれも赤根川支群の製品[註8]と見られ、時期的には14世紀から15世紀頃のものと見られる。

備前焼

備前焼と見られるものは、椀・すり鉢・壷・甕があるが、甕は体部の小片のため図示していない。

椀は底部を回転糸切りで切り離すもので、自然流路101から1点（1073）だけ出土している。

すり鉢は自然流路101・同102・第1包含層から各1点出土しているのみである。自然流路101の1074は口縁端部を上下に大きく拡張し、内面に9条単位の櫛描条線を施す。口縁端部

の形状から見て、備前焼のⅣ期後半に位置付けられる。自然流路102出土の1098はやはり内面に9条単位の櫛描条線[註9]を施すが、口縁端部の拡張はさほど顕著でなく、Ⅳ期前半に位置付けられる。第1包含層出土の1180は内面に9条単位の櫛描条線を施す。やはりⅣ期のものであろう。備前焼のⅣ期は14世紀末から15世紀代と考えられている。

壷は自然流路102から1点出土したのみ。1099は玉縁状の口縁が付くもので、時期は特定し難いが、Ⅲ～Ⅳ期前半に属すると見られる。

瀬戸焼

天目椀・盤が出土しているが、全体に瀬戸・美濃系の陶器は少なく、常滑焼も図示可能なものはない。

なお、産地は特定し難いが、体部外面に格子目叩き、平行叩き、綾杉状の叩きを施し、内面にナデあるいは青海波文をナデ消す甕の体部破片が出土している。細かい格子目叩きのものは亀山焼の製品の可能性がある。

以上の国内産陶器の検討からは、14世紀から15世紀にかけての時期のものが大半を占めることが明らかになった。

（8）輸入陶磁器

輸入陶磁器には青磁・白磁・青白磁がある。

青磁

青磁には碗と四耳壷があるが、四耳壷は体部の小片のみである。碗は自然流路102から2点、第2包含層から3点の計5点図示し得たのみである。自然流路102出土の1088は底部破片で、高台径4.8cmを測る。外面は無文と見られるが、底部内面にはスタンプ文を施す。高台の内側を削り、高台を高めに仕上げる。また、高台の外側には段が付く。自然流路102出土の1089は輪花碗で横田・森田分類のⅠ－4b類に該当すると見られる。ともに龍泉窯系の製品と見られる。龍泉窯系のもの[註10]としてはほかに1279がある。この青磁碗は外面に幅広の鎬蓮弁文を削りだすもので、横田・森田分類のⅠ－5b類に該当する。1277・1278は内面に櫛目文を施す碗で、同安窯系の製品と見られ、横田・森田分類のⅢ類に該当する製品と見られる。

白磁

白磁には碗と小皿？が各1点ある。このうち碗の1090は底部の破片で、細高い高台が付く。高台径は7.1cmに復原される。横田・森田分類のⅤ類と見られる。

青白磁

青白磁には碗と瓶と見られるものの注口部が各1点出土している。このうち碗（1118）は土坑202から出土したもので、器壁極めて薄く、体部はやや内湾気味に立ち上がる。内面に

雷文帯を巡らし、蓮弁文を浮き彫りする。高台は所謂平高台である。このような青白磁は比較的出土例が少ないと見られる。

以上の輸入陶磁器の年代であるが、青磁Ⅰ－4類・Ⅰ－5類は12世紀後半以降、白磁Ⅴ類は11世紀後半以降に出現するとされ、いずれも比較的長期にわたって使用されたものであり、当遺跡出土のものについては年代については幅広い年代を想定せざるを得ない。

（9）石鍋

当遺跡から出土した石鍋は細片も含めると5点である。このうち図示し得たのは自然流路101出土の1点と第2包含層出土の2点の計3点である。いずれも小片であり、全体の形状が明らかになるものは出土していない。

石鍋は、滑石製の鍋形をした器で、平安時代末～中世の遺跡より出土する。中世特有の遺物であるといわれ、長崎県西彼杵半島に製造所跡[註11]が知られている。

現在のところ、石鍋には口縁部直下に削り出し突起を全く持たないもの、口縁部直下に瘤状・縦長状の把手が付くもの、口縁部直下に鍔が周るものの三つの型式に大きく分けられる。今回の調査で出土した石鍋には、断面台形状の鍔部[註12]があり、口縁部直下に鍔の周る型式のものと見られる。出土した破片のうち、底部の一部が残るものについて見ると、底部は平底で、体部下部がやや内湾しており、底部径が口縁部よりも小さくなった型の石鍋である。鍔部と底部外面には煤の付着が認められ、実際に使用されていたことが窺える。

第250図　石鍋出土地分布図

石鍋は中島田遺跡でも2次調査において体部小片が出土しているが、このほかにも徳島県内では徳島市名東遺跡[註13]・徳島市阿波国府跡[註14]で出土したことが報告されている。また、実見していないため、断定し難いが、鳴門市大麻町で採集されて、「鳴門市史」[註15]が盤として写真を掲載している遺物も石鍋と考えられる。

（10）銅銭

南島田遺跡で出土した銅銭は計7点である。その内訳は遺構に伴うもの1点、第1包含層出土のもの2点、第2包含層出土のもの4点である。銭種別に見ると、「皇宋通宝」2点のほかは、「開元通宝」・「聖宋元宝」・「淳化元宝」・「至道元宝」・「天禧通宝」が各1点である。初鋳年について見ると、中国唐代が1点（「開元通宝」）認められるほかは全て中国

宋代のもので、最も新しいものは「聖宋元宝」の1101年である。なお、「聖宋元宝」・「皇宋通宝」・「至道元宝」は縁帯部を打ち欠いており、加工銭と見られる。

表6　南島田遺跡銅銭一覧表

番号	銭種名	初　鋳　年	出土地点	備　考
1	開元通宝	唐　621年	土坑113	
2	皇宋通宝	宋　1039年	第1包含層	加工銭
3	聖宋元宝	宋　1101年	第1包含層	加工銭
4	皇宋通宝	宋　1039年	第2包含層	
5	淳化元宝	宋　990年	第2包含層	
6	至道元宝	宋　995年	第2包含層	加工銭
7	天禧通宝	宋　1017年	第2包含層	

註記

註1　第Ⅰ篇第5章註15参照。

註2　第Ⅰ篇第5章註17参照。

註3　高知県教育委員会『田村遺跡群』第6分冊　1986年。

註4　平安京調査会『平安京跡発掘調査報告　左京四条一坊』1975年。

註5　岡山県文化財協会『百間川原尾島遺跡2』1984年。

註6　広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒町遺跡－第33次発掘調査概報－1984』1986年。

註7　和泉型の瓦器椀の編年については第Ⅰ篇第5章註23参照。

註8　第Ⅰ篇第5章註25参照。

註9　備前焼の編年については第Ⅰ篇第5章註28参照。

註10　輸入陶磁器の分類については第Ⅰ篇第4章註2参照。

註11　長崎県大瀬戸町教育委員会『大瀬戸石鍋製作所遺跡』1980年。

註12　木戸雅寿「草戸千軒町遺跡出土の石鍋」（広島県草戸千軒町遺跡調査研究所『草戸千軒（調査研究ニュース）』№112　1982年）。

註13　徳島県教育委員会『埋蔵文化財資料展　掘ったでよ　阿波』1986年。

註14　徳島市教育委員会『第7会埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』1986年。

註15　鳴門氏『鳴門市史』上巻　1976年。

第Ⅲ篇　ま　と　め

第１章　中島田遺跡における中世日常雑器の構成とその特質

第１節　はじめに

近年、中世考古学の進展には目覚ましいものがあり、全国的な研究会の開催や研究機関誌の刊行等によって、全国各地域の中世土器の様相が次第に解明され、それぞれの共通性や異質性についての論議も深められつつある。

四国地方の場合、そうした全国的な動向[註1]の中にあって、中世土器の研究は遅れ気味であったが、近年、中世遺跡の調査例が増加する傾向の中で、ようやく中世土器に関する研究の気運が高まってきている。

しかし、徳島県内[註2]に限っていえば、これまで中世遺跡の調査例に乏しい上、数少ない調査例についても正式な報告がなされていないために、遺憾ながら中世土器の具体相についてはほとんど明らかにはなっていない。

こうした現状にあるため、県下では質量ともに最も豊富な中世の遺物が出土した中島田遺跡の出土遺物を素材として阿波の中世土器の様相を検討することも、今後の研究の進展にとっては必要な作業と思われる。単独の、しかも限定された時期の遺跡から出土した遺物をもって、県下全域の中世土器群の全体像を捉えることはできないが、少なくとも13世紀から14世紀にかけての吉野川下流域における具体相を呈示することは可能となるものと考える。

第２節　中島田遺跡出土遺物の機能的分類

すでに本文で詳述したように中島田遺跡では、木製品や石製品、金属製品を含む多様な中世の日常生活用品が出土している。この日常生活用品を機能面から分類すると、食膳具・調理具・煮沸具・貯蔵具・暖房具等に分類されると考えられるので、以下、この機能面での分類に従って、改めて中島田遺跡の出土遺物の概要をまとめておきたい。

１　食膳具

食器として利用されたと見られる遺物としては、杯・椀・皿などがある。

杯には土師質のものと磁器のものが認められるが、後者は極めて数が少ない。杯の大部分を占めた土師質のものの中では、在地で生産されたと考えられる底部糸切りで、赤褐色系の杯（杯Ａ）が最も量的には多く、それに底部ヘラ切りで、白色系の杯等（杯Ｆほか）が

表7　中島田遺跡出土遺物の構成

区分	器形	土器		国内産陶器	輸入陶磁器	土製品	金属製品	石製品	木製品
		在地産	搬入品						
食膳具	杯	土師質	土師質		青磁				
	皿	土師質	土師質 瓦　器		青磁 白磁				
	椀		土師質 瓦　器	瀬戸 備前	青磁 白磁				漆器
	水注				白磁				
調理具	こね鉢			魚住					
	すり鉢			備前					
煮沸具	鍋	土　師　質	瓦　質				鉄鍋	石鍋	
	羽釜	土　師　質	瓦　質						
	竈	土　師　質							
貯蔵具	壺			瀬戸 常滑 備前	青磁　四耳壺 青白磁　梅瓶				
	甕			常滑 備前 魚住 亀山					
工具等						土錘 羽口 坩堝	釣針 刀子 鉄釘	砥石	ハケ？
その他			瓦質 火鉢		青白磁　合子		銅銭 矢	硯 石板	呪符木 簡 折敷 曲物

少数混じるという組成を示す。

次に椀には土師質・瓦器・陶器・磁器のほか、木製のものも認められ、器種が豊富であったことが知られる。このうち、量的に多いのは土師質のものと瓦器であり、陶器と磁器のものは比較的少ない。木製のものは遺存する例が限られるため、比較の対象とはし難いが、絵巻物等の絵画資料[註3]から考えても、実際には木製のものも多数使用されていたと見られる。

椀は磁器のものが法量としては最も大きく、瓦器がそれに次ぐ。量的に多い土師質の椀は比較的法量が小さい。このような法量上での差異は、椀の中でもその大小によって用途の差異（例えば飯椀・汁椀など）が存在した可能性を示唆するが、具体的には不明である。

最後に皿であるが、皿にも椀と同様、土師質のもの、瓦器、磁器がある。量的に圧倒的に多いのは土師質のもので、瓦器・磁器のものは比較的少ない。

土師質の皿には在地産と見られる底部糸切りで、赤褐色系のもの（皿A）と底部ヘラ切りで、白色系のもの（皿B）のほか、少数ながら高台状に底部が突出するタイプのもの（皿C）がある。この中でも皿Aのタイプのものが圧倒的に多い。

土師質の皿はいずれも小皿で、法量が極めて小さいのが特徴である。このことは一般的な皿としては、前掲の杯が使用されたことを示していると考えられる。

以上のほか、出土点数がわずか1点と少ないため、日常雑器とは見られないが、輸入陶磁器の水注もある。

2　調理具

調理具として分類される遺物にはこね鉢とすり鉢がある。

こね鉢はいずれも魚住焼の製品であり、すり鉢はその大半が備前焼と見られる。こうしたこね鉢・すり鉢が日常雑器の中でも比較的大きな位置を占めるようになるのは、生産地遺跡の状況から、鎌倉時代中期以降と見られる。こね鉢・すり鉢の多用は食生活上の変化とも密接な関連を持つと考えられるから、この時期にそうした変化が生じていたものと見られる。

3　煮沸具

鍋・羽釜・竈が出土している。

鍋には土師質のもの、瓦質のもの、石製のもの、鉄製のものがあり、素材が豊富である。このうち、土師質の鍋の中には在地産の可能性があるものもあるが、特に本県特有のものは認められず、広く瀬戸内・畿内に流通していたものが搬入された可能性も高いと考えられる。瓦質のもの・石製のものは明らかな搬入品である。

羽釜には土師質のものと瓦質のものがある。量的に多いのは土師質のものである。瓦質のものの中には明らかな搬入品も含まれる。

竈は移動式のものが出土しているが、全体の形状が推定できるものは1個体のみである。その形態は広島県草戸千軒町遺跡などで出土しているものとほぼ同一で、中部瀬戸内地方

で広く使用された通例の形態のものである。

4　貯蔵具

水や穀物等の貯蔵用としては、壺や甕がある。

壺は備前産のもの、常滑産のもののほか、輸入陶磁器も少数出土している。

甕も備前産のもの、常滑産のものが目立つが、そのほかに亀山産と見られるものや産地不明のものもある。この中には特定できないが県内で生産されたものも含まれる可能性もある。

5　暖房具

瓦質の火鉢が出土しているが、この製品も搬入品と見られる。なお、滑石製の石板が1点出土しているが、この種の石板の用途については「温石」との報告例もあることから、暖房具の1種と考えることもできる。[註4]

6　その他

以上のほか、当遺跡からは工具類に属する砥石・釘類・木製品など、魚具である土錘・釣針、喫茶用具である茶釜・茶碗（天目）などが出土している。

第3節　中島田遺跡出土の中世土器の特質

本節では、前節で概観した中島田遺跡出土の中世遺物の構成を基として、遺物の中でも主要な位置を占める土器・陶磁器の特質について考えてみることにしたい。

まず、土器・陶磁器の日常雑器類の生産地について注目すると、13～14世紀の阿波国の、特に吉野川下流域の中世集落で使用された日常雑器の中では、在地で生産された土器の種類が極めて少なく、むしろ他国産の搬入品の種類の方が多い点に注目される。

前節でも述べたように明らかに在地産と見られるものは食膳具の中の杯や皿、木製の椀にほぼ限られており、産地が特定できない鍋・釜・甕の中には在地で生産されたものが含まれるとしても、その種類は少ない。これに対し、明らかに搬入された製品と考えられるものとしては、和泉地方の産とされる和泉型の瓦器、魚住焼のこね鉢・甕、備前焼の椀・こね鉢・壺・甕、常滑焼の壺・甕、亀山焼の甕、瓦質の鍋・釜・火鉢、輸入陶磁器などがあるほか、白色系の土師質土器である土師質の高台付椀や杯・皿も中部瀬戸内地方から搬入された可能性が高いと考えられる。

こうした生産地別の遺物を機能別に見ると、日常生活用具の中でも、食膳具の場合は在地で生産した製品、中部瀬戸内地方や畿内方面で生産されたもの、遠隔地から運ばれた輸入陶磁器が混じるという組成を示している。煮沸具の場合もほぼ同様の傾向が窺えるが、ここには輸入陶磁器は認められない。調理具の場合は魚住焼・備前焼ともに中部および東部の瀬戸内地方で生産されたものが中心を占めており、在地産のものは現状では認められない。貯蔵

具は比較的近国である備前国産（備前焼・亀山焼）のほか、遠国にあたる常滑産のものもある。また、すでに述べたように産地不詳の甕の中には在地の窯で生産されたものも含まれる可能性もある。

以上のように把握される中島田遺跡の中世土器の特質を、服部実喜が分析を行った鎌倉における日常生活用品の特質と比較すると、地域性に基づく細部の差異[註3]等を別にすると基本的には同一と考えられる。服部は鎌倉における特質を、基本的には京都・太宰府・博多などの都市遺跡で共通して認められるとして、都市型とでもいうべき消費形態の反映であると指摘する。この指摘に従う限りでは、中島田における中世日常雑器に見られる特質は、都市型と規定されるものである。しかし、中島田の集落はわが国を代表する前記の中世都市遺跡と同列視することはできず、中島田遺跡の遺物組成を都市型とする規定そのものに問題があると考えられる。中島田遺跡と中世の都市遺跡の遺物組成の特質にさほど懸隔が認められないということは、一面では、中島田遺跡の集落が「マチ」的要素を持っていた集落であったことを暗示しているということでもあるが、他面では、13〜14世紀頃の「都鄙」間では、日常生活用品に限っていえば、さほどの懸隔がなかったことを示しているとも思われる。徳島県内についていえば、「マチ」に対置される「農村」部の調査例が乏しいため、厳密には比較し難いが、見通しとしては、中島田で認められるような遺物組成は基本的に当時の農村集落でも同じような傾向が認められる可能性が高いと考える。

以上、本章では中島田遺跡出土遺物の中で、日常雑器を取り上げて、その特質を検討したが、その結果は、予想以上に搬入品が豊富であるという事実を再確認するというものであった。調査成果を地域史の中に正しく位置付けることも発掘調査の使命の一つと考えるならば、こうした事実を阿波の中世史の上にどのように位置付けるかが次の課題として浮かび上がってくるが、その中でも特に重要と考える中世阿波の水運とのかかわりに限定して、次章で検討を加えることにしたい。

註記

註1　中でも「日本中世土器研究会」の活動はめざましく、その成果の一端は機関誌『中近世土器の基礎的研究』（既刊4冊）にまとめられている。

註2　主要な研究成果としては、大山真充「香川県西村遺跡出土の瓦器」（前掲『中近世土器の基礎的研究』所収）、松田直則「高知県における中世土器の様相」（同『中近世土器の基礎的研究』Ⅲ所収）、中野良一「愛媛県における古代末から中世の土器・陶磁器」（同『中近世土器の基礎的研究』Ⅳ所収）などがある。

註3　例えば、「遊行上人縁起絵」巻3の尾張国甚目寺での施行の場面では、内面に朱漆、外面に黒漆を塗った木製の椀が専ら使用されている。

註4　神奈川県立埋蔵文化財センター『千葉地東遺跡』1986年。

註5　服部実喜「関東地方における中世土器群の構成とその特質について」(神奈川考古同人会『神奈川考古第22号・神奈川考古同人会10周年記念論集』1986年)

第２章　阿波中世の流通と中島田遺跡出土遺物

第１節　はじめに

前章で述べたように、中島田遺跡出土遺物の中には、多数の搬入品が認められる。このような搬入品の多くは、当時、商品として広大な流通圏を形成していた製品と見られ、当時の物資の流通・交易を物語る具体的な資料となり得るものと考えられる。

中世の阿波を舞台にした流通・交易については、これまでのところ、十分に解明されていないが、すでに第Ⅰ篇第１章第３節の項で簡単に触れたように、中世の阿波の水運にかかわる文献史料[註1]もわずかながら伝わっているので、以下、こうした文献史料を援用しつつ、中島田遺跡出土遺物が当地にもたらされた歴史的条件について検討を加えたい。

第２節　中世阿波の海運について

中島田遺跡出土遺物の中には、中国との貿易によってもたらされた陶磁器類のほか、常滑・瀬戸・備前・魚住などの国内産陶器類、和泉地方の産と考えられる瓦器椀、中部瀬戸内系の土師質土器などの製品が多数含まれていることについては、すでに本文でも詳述した通りである。阿波国の地理的条件から考えて、これらの製品が阿波国にもたらされる過程で、海運が利用されたことは自明のことであるが、中世阿波の海運の実態については残念ながら史料に乏しく、これまでのところ十分に明らかにされていない。

そこで、ここでは、わが国全体の水運史料としては白眉のものである「兵庫北関入船納帳」[註2]・「兵庫北関雑船納帳」に表れた阿波の船舶の動向を通して、当時の阿波の海を舞台にした水運の状況について概括[註3]することとしたい。

「兵庫北関入船納帳」は文安２（1444）年正月・２月のものが早くから知られていたが、近年、同年３月から翌年正月までの分が林屋辰三郎氏によって発見・紹介されたため、文安２年１年間については、兵庫北関を通過する船舶の動向が明らかになった。一方の「兵庫北関雑船納帳」もその存在は比較的古くから知られてはいたが、全文が紹介されたのは比較的最近のことであり、阿波の水運とのかかわりで、この記録を使用した研究は皆無である。

まず初めに、「入船納帳」と「雑船納帳」に記載されている阿波国の港津の所在地を示すと図251の通りである。比定地不詳とした「惣寺院」を含めて計11箇所の港津が見えるが、このうち、阿波国の北部に位置し、紀伊水道に面した港津が、北泊・土佐泊・撫養・木津・

第251図　中世阿波の港津

別宮の５箇所、阿波国の南部に位置し、太平洋に面した港津が平島・橘・牟岐・海部・宍喰の５箇所となっている。惣寺院については、吉野川を遡った現在の山川町域に比定されているが、海関である兵庫北関に入関する船舶の船籍地としては、内陸部に偏した位置であることと、比定の根拠がやや弱いため、ここでは比定地不詳として取り扱った。[註4]

以上の港津のほかにも、中世の文献史料には「小清（勢）津」[註5]「富田庄内之内津」[註6]「国津」[註7]「小松島浦津」[註8]などの港津の所在が確認されるところから、「入船納帳」「雑船納帳」に現れた港津が当時の阿波の港津のすべてではなく、ほかにもいくつか港津が存在していたと見られる。

次に、「入船納帳」に現れる阿波の船舶の月別入関数を示すと、表８の通りである。この表によると、阿波船の兵庫北関入関は、１・２月を除けば、毎月９～16回で、ほぼ２・３日に１回の割りで、入関していたことが知られる。また、最も入関数の多いのは、海部で、56回と群を抜いている。以下、平島・宍喰・牟岐と阿波国の南部の船が続く。

表８　文安２年に兵庫北関に入関した阿波船の月別回数

船籍地＼月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	合計
土佐泊							1				2		3
撫　養						1	1						2
別　宮												1	1
惣寺院			1	1									2
平　島	1		3	1		6		2	2	3	1	2	21
橘								1	1		1		3
牟　岐	1		2	1	1	2	2		1	2		2	14
海　部		1	6	5	9	4	8	4	10	3	4	2	56
宍　喰		1		4	1	2	4	2	1	2	1	2	20
合　計	2	2	12	12	11	15	16	9	15	10	9	9	122

また、阿波の船舶が畿内方面に向けて積み出した船荷についてまとめた表９によると、阿波国南部の港津に船籍を持つ船舶の大半は、材木・榑を運び、北部の船舶は藍・米・麦・胡麻などの比較的雑多な荷物を運んでいたことが知られる。また、「雑船納帳」に現れた鳴門方面の船舶は専ら薪材を運んでいる。

阿波の場合、地域によって、船荷に顕著な相違が認められ、それぞれの地域の特性と産物との関連が注目されるが、この点については本稿の課題ではないので、別の機会に述べることにしたい。

なお、以上のような船荷に対応して、船舶の規模も、材木類を運搬する阿波国南部の船舶は100石以上のものが多いのに対して、北部の船舶は100石以下の小形のものが多いという際

表9　阿波船の積載品目とその数量

（単位　石）

区分		積載品目								
		樗	材木	米	大麦	小麦	藍	胡麻	アラメ	阿波塩
船籍地	土佐泊			12	15	10	4			
	撫養					6	30			
	別宮							41.5		
	惣寺院						14			
	平島	735	1095						140	
	橘	430								
	牟岐	1680								
	海部	9440								
	宍喰	2210	250							
合計		14495	1345	12	15	16	48	41.5	140	
参考	地下	3620	260				371		480	305
	由良	14100					23		265	300
	甲浦	1200	1760							
合計		18920	2020				394		745	605

立った対照を示している点も、阿波の海運を考える場合注目される点であろう（表10）。

表10　阿波船の規模

船籍地	50石未満	50石～100石	100石～150石	150石～200石	200石以上
土佐泊	3				
撫養	2				
別宮	1				
惣寺院	2				
平島	1	7	8	3	
橘			1	2	
牟岐			14		
海部			20	31	5
宍喰		1	15	4	
計	9	8	58	40	5

以上、中世後期の阿波の海運の展開を概観してきたが、太平洋に面した阿波国の南部では大形船舶を用いた、材木類を主要な船荷とする海運の活発な展開が見られる一方、紀伊水道に面した北部の船舶は小形で、種々雑多な産物を畿内に供給するという相違は認められるものの、総じて、当時の海運が予想以上に活発な展開を遂げていたことが窺える。

第3節　大山崎油座商人と吉野川の水運

上述のような海運の展開状況のもとで、中島田遺跡との関連で、とりわけ注目されるのは「別宮」である。中世の「別宮」は石清水八幡宮領萱島荘内に位置し、荘園の鎮守として本家である京都の石清水八幡宮を勧請したと伝える現在の「別宮八幡神社」に因む地名で、現在の徳島市川内町上別宮に比定される。上別宮は、現在、吉野川に面しているが、通説では、この吉野川は、近世には「別宮川」[註9]と呼ばれる吉野川の支流であったとされ、往古の吉野川の本流は現在の「旧吉野川」にあたるといわれている。この説に従うと、中世の「別宮」は吉野川の一支流である「別宮川」の河口に面した港津であったことになるが、鎌倉時代初期の史料によると、現在の徳島市に比定される春日神社領富田荘の北辺部を流れる川を「吉野[註10]

川」と呼称していることから、「別宮川」にあたる川が中世初期には「吉野川」と呼ばれていたことは明らかである。この「吉野川」が本流であったかどうかは定かではないが、その名称から推して、当時も本流であった可能性が高い。通説に反してこのように考えると、中世の「別宮」は吉野川本流の河口に面した港津ということになり、その位置付けは一支流の港津であるより、さらに重要な意味を持つ。というのも、吉野川水系の水運と畿内方面との海運との結節点に位置する港津として位置付けられるからである。

「別宮」をこのように吉野川水系の水運と畿内方面の海運を結ぶ中継港として考えると、当然、吉野川を舞台にした水運についても検討を加えなければならないが、史料が乏しくその実態についてはほとんど不明の状態である。ここでは、わずかに伝わる大山崎の油座商人の活動にかかわる史料を通して、吉野川の水運について検討を加えることにしたい。

中世の頃、大山崎の油座商人が、阿波を含む西国一帯で原料の荏胡麻の買い付け等で、排他的な特権を有して、幅広く活動していたことはすでに良く知られているが、[註11]阿波の中世史の上では、この油座商人が吉野川を舞台に活動していたことはこれまであまり明らかにされていないようである。

次の史料[註12]は大山崎油座商人による吉野川流域での活動を伝える初見のものである。

（端書）
「院宣案」

八幡宮大山崎神人等申、阿波國吉野河新關事、尚清
法印状副具書如此、任先例、可停止新關之由、可令下
知之旨、院宣所候也、仍上啓如件

「應長元」　　（源）
後六月廿一日　　宮内卿資榮

謹上　中御門前中納言殿

この史料は、応長元（1311）年に大山崎油座の商人が、阿波国の吉野川に設置された新関によって原料等の輸送が妨害されたために、その実情を本所（石清水八幡宮）に訴えたところ、石清水八幡宮からに院（伏見上皇）に奏請があり、これに対して院が新関停止を下知した際の院宣である。

この院宣によって、鎌倉時代末期頃の吉野川に川関が設置されて、関銭（通行税）が徴収されていたことや、そうした動きに対して、従来から免税特権を有していた大山崎の油座商人が関銭の納入を拒否し、トラブルが発生していたことなどが知られる。

ところで、元徳元（1329）年の「六波羅御教書」によると、吉野川に新関を構えて、油座商人の活動を妨害していた勢力が、[註13]「阿波国柿原四郎入道笑三師房並国衙雑掌以下輩」であっ

たことが見えている。柿原氏は吉野川中流域に位置する板野郡柿原荘の地頭であり、国衙雑掌は中島田遺跡とも至近距離に位置する阿波の国府に勤仕する在地の領主層と見られる。こうした動きは在地における新興勢力が、吉野川の水運を自己の経済基盤として取り込みつつあった状況を示すもので、換言すれば、当時すでに吉野川の水運は経済的な収奪の対象として注目されるほどに活発化していたことを物語るものである。

このような水運に対する経済的収奪の動きは、度重なる院や幕府の禁止にもかかわらず、鎌倉時代末期から南北朝時代・室町時代に至るまで止むことはなかったようで、応安6（1373）年には幕府から阿波国守護細川頼有に対して、吉野川の所々において「津料」を徴収することを禁止する御教書が発せられているほか、応永18（1411）年にも同様な命令が守護を通じて下されている。[註14]

以上の断片的な史料からも窺えるように、鎌倉時代末期から室町時代にかけて、吉野川を舞台とする水運は予想以上に発展していたと見られ、吉野川水系に属する鮎喰川の川縁に営まれた集落と考えられる中島田の集落も、このような水運の影響下にあったと考えられる。[註15]

第4節　中島田遺跡出土遺物と流通

これまで、中世の阿波の水運の概況について検討を加えてきたが、以上の水運の展開は改めていうまでもなく、広く瀬戸内全体を舞台にした水運の展開と密接な関連の下で理解されるものである。中世の瀬戸内水運の展開については、ここでは詳述しないが、「入船納帳」に現れる船舶の動向がその実態を如実に物語っており、極めて活発な展開を示していたことが知られる。

瀬戸内水運の大きな特徴は消費地都市京都を中心とする畿内方面への求心的傾向と各地の物産に見られる分業的構造にあると思われる。そうした各地の生産地と消費地を結ぶ物流の太いパイプとして発展したのが水運であるが、一度開通したパイプは生産地相互間、あるいは消費地から生産地へも物資の移動を可能とし、物資の動きをより多面的なものとする役割を果たしたと考えられる。

中島田遺跡出土遺物の中には、大阪和泉地方の産と考えられている瓦器、兵庫県明石市で生産された魚住焼を中心とする東播系の陶器類、備前焼の製品など、網の目のように張り巡らされた瀬戸内水運のパイプを通じて、各地に流通したと見られる製品が多数含まれている。このような製品が、いかなる経路によって阿波に運ばれ、消費地である中島田の集落にもたらされたかについては不明であるが、瀬戸内水運の一環として阿波における水運も活発に展開していたことを考慮に入れるならば、藍・塩・材木等の阿波の産物を運ぶ船が、畿内方面から阿波に下る時に、土器や陶磁器などの物資を阿波に運び込んだと考えるのが自然であろ

う。とすれば、中島田遺跡から出土したそうした遺物は、一度、「別宮」などの海運の拠点に陸揚げされた後、吉野川の水運を荷なう川船によってさらに内陸部に運搬されたと考えられる。

当時の阿波国にも「倉本下市」・「山崎市」などが吉野川・鮎喰川流域に成立していたことについては、本文の冒頭[註16]でも触れたが、上述のようにして運ばれてきた物資はこのような市[註17]で交易されたと見られる。

これまで、文献史料を通して、阿波の水運の状況を見てきたが、中島田遺跡から出土した各地からの搬入品は、広域にわたる流通圏の末端に位置する消費地（集落）での受容形態を具体的に示す遺物としての性格を持っている。このような中島田遺跡の出土遺物が、今後、中世阿波の流通・交易を研究する上でも貴重な資料として、有効に活用されることを期待して、本書の締め括りとしたい。

註記

註１　従来の研究の到達点は、徳島県『徳島県史』第２巻（1966年）所収の第７章第２節４「中世における阿波の港」に示される。

註２　燈心文庫　林屋辰三郎編『兵庫北関入船納帳』中央公論美術出版1981年。

註３　東大寺図書館所蔵。今谷　明「兵庫関雑船納帳」（兵庫史学会『兵庫史学』第70号　1984年）。

註４　今谷　明「瀬戸内制海権の推移と入船納帳」（前掲『兵庫北関入船納帳』所収）。

註５　応長元年閏６月21日「雑掌申状」東大寺文書（『鎌倉遺文』24360号）。

註６・註７　承久４年３月「大江泰兼愁状」大東家文書（『鎌倉遺文』2937号）。

註８　年月日不詳「高実書状」熊野新宮文書（小杉榲邨編『阿波国徴古雑抄』）。

註９　「角川日本地名大辞典」編纂委員会『徳島県地名大辞典』角川書店　1986年。

註10　元久元年９月「阿波富田庄立券文案」春日神社文書（『鎌倉遺文』1481号）。

註11　例えば、豊田武「大山崎油神人の活動」（『歴史地理』62の５　1933年）などに詳しい。

註12　「伏見上皇院宣案」疋田家本離宮八幡宮文書（島本町『島本町史』史料編）。

註13　元徳元年11月２日「六波羅御教書」離宮八幡宮文書（島本町『島本町史』史料編）。

註14　応安６年８月10日「室町将軍家御教書」離宮八幡宮文書（島本町『島本町史』史料編）。

註15　応永18年９月21日「阿波国守護細川満久書下状」離宮八幡宮文書（島本町『島本町史』史料編）。

註16　第Ⅰ篇第１章註29参照。

註17　正慶元年11月「阿波国御衣御殿人契約状写」三木家文書（小杉榲邨編『阿波国徴古雑抄』）。

表11　中島田－溝102（ＳＤ102）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1	土師質　杯	口径（13.3） 器高　3.0 底径　（8.0）	体部・口縁部直線的。口縁部の器壁薄く、端部は丸く仕上げる。	底部切り離し不明。体部・口縁部内外面とも丁寧なロクロナデ。	橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
2	陶器　こね鉢	底径（10.6）	体部下半部大きく外方に開く。底部平底。	底部回転糸切り。体部外面下半部粗いナデ。同内面仕上げナデ。底部外面未調整。	灰黄色	微砂粒を多く含む。	不良	
3	土製品　土錘	長さ　3.7 胴径　1.3 重さ　4.7g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形後ナデ。	褐灰色	微砂粒を少量含む。	不良	

※（　）内は復原値。

表12　中島田－土坑101（ＳＫ101）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
4	陶器　瓶子口?	口径　（4.5）	瓶子の注口部と見られる小片。やや外反気味に立ち上り、口縁端部をやや拡張し、凹面に仕上げる。	全体をヨコナデで仕上げる。外面の一部を除き、淡緑色の灰釉がかかる。	素地灰白色	精良	良好	瀬戸焼。
5	磁器　碗	－	体部から口縁部にかけてやや内湾。口縁端部はやや尖る。	全体を丁寧にロクロナデ。全体に灰色を帯びた白色透明釉を施し、外面に雲文風の文様を描く。	素地灰白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	輸入陶磁器か。産地不詳。

表13　中島田－集石遺構101（ＳＸ101）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
6	土師質　椀	口径（11.1）	体部・口縁部内湾。口縁端部丸い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	やや良好	
7	陶器　椀	口径（15.4）	体部直線的。口縁部上方でやや内傾。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内外面やや粗いナデ。	暗緑灰色	砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
8	土師質 すり鉢	口径（28.8）	体部直線的に斜め上方に立ち上り、口縁部やや内湾気味。口縁端部拡張し、先端部を丸く仕上げる。	口縁部内面・同端部ロクロナデ。体部内面仕上げナデにより平滑。同外面ユビオサエ後粗いナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

表14　中島田－柱穴出土遺物（１）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
9	土師質　杯	口径　11.8 器高　3.4 底径　8.9	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部丸い。体部外面上位に稜。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。底部外面下半部ヘラで器壁を削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形
10	土師質　杯	口径（10.9） 器高　3.3 底径（8.2）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデないしはヘラナデ。底部外面以外ロクロナデ。	黄褐色	精良	良好	
11	土師質　杯	口径（10.1） 器高　3.8 底面（7.4）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。底部外面下半部ヘラで器壁を削り取る。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
12	土師質　杯	口径（12.0） 器高　2.7 底径（8.4）	体部・口縁部内湾。口縁端部丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
13	土師質　杯	口径（12.2）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。	底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
14	土師質　杯	口径（11.8） 器高　2.7 底径　（7.8）	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。体部外面成形による稜顕著。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	灰城色	微砂粒を多く含む。	良好	
15	土師質　皿	口径　（7.6） 器高　1.5 底面　（6.1）	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
16	土師質　皿	口径　（7.3） 器高　0.9 底径　（6.0）	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を極く少量含む。	やや不良	
17	土師質　皿	口径　（7.8） 器高　1.2 底径　（7.2）	口縁部断面三角形で短く、直立。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
18	土師質　皿	口径　（8.3） 器高　1.3 底径　（7.4）	口縁部断面三角形で短く、直立。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
19	土師質　皿	口径　（9.0） 器高　1.1 底径　（7.8）	口縁部短くやや外反。口縁端部丸い。器壁やや薄い。	底部切り離し不明。外面未調整。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
20	土師質　皿	口径　（9.1） 器高　1.4 底径　（7.9）	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
21	土師質　皿	口径　（7.8） 器高　1.8 底径　（4.0）	口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、丸い。底部やや丸底状。	底部切り離し不明。底部外面粗いユビオサエ。底部外面以外ロクロナデ。	茶褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
22	土師質　椀	口径（10.4）	体部上位大きく内湾。口縁部器壁薄く端部丸い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
23	土師質　椀	高台径(4.4)	高台断面逆台形状で低い。	内面丁寧なナデ。高台部貼り付け後ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	不良	
24	土師質　椀	高台径 4.1	高台断面三角形で小さい。	内面丁寧なナデ。高台部貼り付け後ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
25	瓦器　椀	口径（14.7） 器高　3.5 高台径(3.6)	体部内湾。口縁部外反。口縁端部外方にやや尖る。退化した高台がつく。	器面剝落のため調整不明。体部外面ユビオサエ。貼り付け高台。	灰色	微砂粒を少量含む。	二次加熱を受ける。	
26	瓦器　椀	口径（12.3） 器高　3.4 高台径(2.9)	体部・口縁部内湾。口縁端部肥厚。高台退化著しい。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下部ユビオサエ。内面ナデ。簡略化された暗文を施す。高台部粘土紐を貼り付け。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	不良	和泉型。
27	瓦器　皿	口径　(8.6)	口縁部やや内湾。底部と口縁部の境に稜。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面未調整。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
28	瓦質　羽釜	口径（23.7）	口縁部直立。口縁端部わずかに拡張し、平坦に仕上げる。断面三角形の鍔がほぼ水平に付く。	口縁部・鍔部丁寧なロクロナデ。鍔貼り付け。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
29	陶器　椀	口径（11.9） 器高　3.0 底径　(6.2)	体部内湾。口縁部直線的。口縁部の器壁薄く、端部尖る。	底部回転糸切り。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ、内面丁寧なナデ。底部内面一方向のナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	重ね焼。 備前産か。
30	陶器　椀	口径（12.2） 器高　3.3 底径　(6.9)	体部内湾。口縁部直線的。口縁部の器壁薄く、端部尖る。	底部回転糸切り。口縁部内外面・体部外面ヨコナデ。底部内面一方向のナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	重ね焼。 備前産か。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
31	陶器　こね鉢	口径（19.9）	口縁部やや内湾。口縁端部をやや拡張。端面やや丸みを持ち、先端部を尖らせる。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
32	陶器　こね鉢	口径（27.0）	口縁端部をやや拡張。端面やや丸みを持つ。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
33	陶器　こね鉢	口径（28.0）	口縁部やや外反。口縁端部を上下に拡張。端面やや丸みを持つ。	口縁部内外面・体部外面上半部ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
34	陶器　こね鉢	口径（33.3）	口縁部直線的。口縁端部を大きく上下に拡張。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	重ね焼。魚住焼
35	磁器　碗	－	体部やや内湾。体部外面に鎬蓮弁文。	全面に丁寧なロクロナデ。濃緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰色	精良	良好	龍泉窯系青磁。
36	土製品　土錘	長さ　3.4 胴径　1.0 重さ　2.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
37	土製品　土錘	長さ　3.4 胴径　0.9 重さ　2.7g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後丁寧なナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
38	土製品　土錘	長さ　3.1 胴径　1.0 重さ　2.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	黒褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
39	土製品　土錘	長さ　3.8 胴径　1.2 重さ　4.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後粗いナデ	暗赤褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
40	土製品　土錘	長さ　4.5 胴径　1.2 重さ　5.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後粗いナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
41	銅製品　銅銭	径　2.2	「元豊通宝」　初鋳年　宋（1078年）　行書体。					
42	鉄製品　鉄釘	長さ3.6、幅0.4、厚さ0.3	頭部Ｌ字形に屈曲。断面方形。					
43	鉄製品　鉄釘	長さ3.7、幅0.3、厚さ0.3	頭部Ｌ字形に屈曲。断面方形。					
44	鉄製品　鉄釘	長さ3.0、幅0.6、厚さ0.5	先端部欠損。断面方形。					
45	鉄製品　鉄釘？	長さ3.3、幅0.6、厚さ0.3	頭部Ｌ字形に屈曲。断面方形。					
46	鉄製品　鉄鏃？	長さ11.5、幅0.5、厚さ0.5	両端部尖る。断面方形。					

表15　中島田－柱穴出土遺物（２）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
47	土師質　杯	口径（12.6） 器高　4.0 底径　（8.4）	体部・口縁部直線的。口縁端部平坦に仕上げる。体部内外面ともにやや凹凸あり。底部やや突出気味。	底部回転糸切り後、粗いナデ。口縁部外面ロクロナデ。体部内外面粗いナデ。底部と体部の境界の粘土をヘラ状工具で掻き取る。	にぶい黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
48	土師質　杯	口径（11.9） 器高　3.4 底径　7.4	体部・口縁部やや内湾。口縁部の器壁薄くし、端部を丸く仕上げる。体部内外面の器壁凹凸あり。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
49	土師質　杯	口径（10.9） 器高　3.4 底径　（6.5）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや丸い。底部の器壁薄い。	底部回転糸切り。器面剝落のため、全体の調整不明。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
50	土師質　皿	口径　7.0 器高　0.7 底径　5.7	口縁部やや内湾気味で短い。口縁端部は丸い。全体に器形の歪顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
51	土師質　椀	口径（12.9） 器高　3.1 高台径(4.9)	体部大きく外方に開いた後、内湾。口縁部やや外半気味。先端部やや肥厚。高台断面逆台形で、一部押しつぶれる。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。	浅黄橙色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	やや不良	底部内面に重ね焼痕。
52	土師質　椀	口径（11.5） 器高　3.2	体部直線的に外方に開いた後、大きく屈曲。口縁部やや内湾し、端部を丸く仕上げる。無高台。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面・底部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。	浅黄橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
53	土師質　椀	口径（12.0）	体部直線的に外方に開いた後、大きく屈曲。口縁部やや内湾し、端部を丸く仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面やや粗いナデ。同内面丁寧なナデ。	浅黄橙色	微砂粒を多く含む。	良好	内外面に煤付着。
54	土師質　椀	口径（13.3）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸く仕上げる。体部から口縁部にかけ大きく屈曲。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面・底部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。	浅黄橙色 一部黒色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
55	土師質　椀	口径（10.8）	体部・口縁部やや内湾気味。口縁端部は丸みを持つ。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
56	土師質　椀	口径（12.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。体部下半部の器壁やや薄い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を少量含む。	不良	
57	土師質　椀	口径（12.0）	体部大きく内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖り気味に仕上げる。	口縁部外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。	浅黄橙色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
58	土師質　鍋	口径（29.6）	「く」の字状の口縁。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面・体部内面細かい横ハケ目。体部外面ユビオサエで成形後、縦方向の粗いハケ目。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	良好	内外面煤付着。
59	瓦器　椀	口径（13.3）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。器壁やや薄め。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエ後粗いナデ。体部外面炭素未吸着。	黒灰色 一部灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
60	陶器　すり鉢	－	体部から口縁部にかけてやや内湾。体部内面に9条単位の櫛描条線。	体部内面丁寧なロクロナデ。同外面ナデか。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	外面に自然釉。備前焼。
61	陶器　こね鉢	口径（23.8）	体部・口縁部直線的。口縁端部を内側に屈曲させ、先端部をやや尖り気味に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。同外面ナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
62	土製品　土錘	長さ　2.7 胴径　0.9 重さ　2.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
63	土製品　土錘	長さ　3.1 胴径　0.7 重さ　1.6g	紡錘形の管状土錘。小形。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデ。	橙色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
64	土製品　土錘	長さ　3.4 胴径　0.9 重さ　2.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
65	鉄製品　鉄釘	長さ3.3、幅0.7、厚さ0.6　頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。						
66	鉄製品　鉄釘	長さ3.8、幅0.7、厚さ0.6　頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。						

表16　中島田－建物に伴う出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
67	土師質　杯	口径（11.1） 器高　3.7 底径　6.6	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸く仕上げる。底部中央部やや凹み、器壁薄い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。底部周縁部の粘土を掻き取る。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
68	土師質　杯	底径　（7.5）	体部下半部やや内湾。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
69	土師質　杯	口径（12.0） 器高　4.3 底径　（6.8）	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。全体に成形による凹凸顕著。器高やや高め。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面共ロクロナデ。	淡黄色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
70	土師質 高台付皿	高台径 4.6	高台部の器壁厚い。底部中央部凹む。全体に器形の凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
71	土師質 高台付皿	高台径 6.7	高台部の器壁厚い。底部中央に穿孔。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデか。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
72	土師質　椀	口径（12.0） 器高　2.8 高台径 3.8	体部ゆるやかに内湾しながら斜め上方に立ち上がる。口縁部やや肥厚し、わずかに外反。高台断面三角形状で、低い。体部外面上位に稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	不良	
73	土師質　椀	高台径 4.7	高台断面三角形で、極めて低い。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰褐色	微砂粒を多く含む。	良好	瓦質の可能性あり。
74	土師質　鍋	口径　27.0 器高　12.9	「く」の字状の口縁部を持つ。底部から体部にかけて大きく内湾。底部丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上位ユビオサエ後細かい縦方向のハケ目。同内面横方向のハケの後ナデ。底部内外面縦横の細かいハケ目。	外面灰褐色、内面明褐色。	微砂粒を多く含む。	良好	
75	土師質　鍋	口径（27.2）	「く」の字状の口縁部を持つ。底部から体部にかけて大きく内湾。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面縦及び横方向のハケ目。同内面下部横方向の細かいハケ目。	外面褐色 内面にぶい橙色。	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
76	土師質　鍋	口径（36.0）	「く」の字状の口縁部を持つ。体部上半部やや内湾。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面斜め方向の細かいハケ目。同内面横方向のハケ目をナデ消す。	外面褐色 内面にぶい橙色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
77	瓦器　椀	口径（11.2） 器高　3.0	体部外方に大きく開き気味に立ち上がる。口縁部直線的で、端部は丸く仕上げる。無高台。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ後ナデ。同内面ナデ後、細い暗文を施す。	黒褐色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
78	瓦質　脚部	残存長15.0 径　2.3	断面円形。鍋ないしは羽釜の脚部。脚端部やや屈曲。	粘土を棒状に成形。全面ユビオサエ後縦方向のナデを施す。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
79	陶器　こね鉢	口径（25.5）	口縁部直線的。口縁端部を上下に拡張。上端部をやや尖り気味に仕上げる。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	青灰色	微砂粒を少量含む。	良好	魚住焼か。
80	陶器　こね鉢	－	体部・口縁部直線的。口縁端部を拡張し、やや内傾させる。端面はほぼ平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面ユビオサエ後粗いロクロナデ。同内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
81	鉄製品　鉄釘	長さ4.9、幅0.4、厚0.4　両端部欠損。断面方形。						

表17　中島田－溝201（ＳＤ201）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
82	土師質　杯	口径（11.2） 器高　3.4 底径　（7.5）	体部直線的。口縁部外反。口縁端部丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
83	土師質　杯	底径　（7.1）	体部やや内湾。全体に器壁厚いが、底部中央は薄い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
84	土師質　杯	底径　（7.6）	体部やや内湾。体部と底部の境に稜。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
85	土師質　杯	底径　（8.6）	体部やや内湾か。体部に比べて、底部の器壁薄い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	精良	良好	

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
86	土師質　杯	底径　（7.3）	体部の器壁厚いが、底部中央部は薄い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。板目。	赤褐色	精良	やや不良	
87	土師質　椀	口径（10.8）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
88	陶器　椀	底径　6.2	体部内湾。底部内面わずかに凹凸。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。底部内面一方向のナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	不良	備前産か。
89	磁器　碗	高台径 5.3	体部下部直線的。高台断面逆台形状。体部外面に蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付け部・底部外面以外淡青緑釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を少量含む。	良好	龍泉窯系青磁。
90	陶器　甕	－	体部小片。	外面平行条線の叩き。内面ナデ。	淡褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	
91	土師質　羽釜	口径（22.7）	体部・口縁部内湾。鍔部断面台形状で小さい。口縁部平坦。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	淡褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

表18　中島田－溝202（ＳＤ202）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
92	土師質　高台付皿	高台径 5.8	底部高台状に突出。底部内面中央部凹む。短い口縁部付くか。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
93	陶器　こね鉢	口径（29.9）	口縁部直線的で、やや肥厚。口縁端部を上下にわずかに拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。

表19　中島田－溝203（ＳＤ203）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
94	土師質　羽釜	口径（26.0）	直立する口縁部に、断面台形状の小さい鍔が付く。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。	淡灰色	微砂粒を多く含む。	不良	
95	陶器　こね鉢	口径（20.8）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部は肥厚し、やや上下に拡張。端面は丸みを持つ。	口縁部内外面・体部内面ロクロナデ。体部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
96	陶器　こね鉢	口径（29.0）	体部・口縁部直線的。口縁端部上下に拡張。端面は丸みを持つ。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	重ね焼。魚住焼。
97	陶器　こね鉢	口径（34.0）	口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張。端面は丸みを持つ。	口縁部内外面ロクロナデ。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	内面煤付着。重ね焼。魚住焼。
98	土製品　土錘	長さ　5.9 胴径　1.1 重さ　6.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。外面ナデにより平滑に仕上げる。	淡赤褐色	精良	良好	
99	銅製品　銅銭	径　2.5	「熙寧元宝」　初鋳年　宋（1068年）　真書体。					
100	銅製品　銅銭	径　2.4	「嘉祐通宝」　初鋳年　宋（1056年）　真書体。					

表20　中島田－溝204（ＳＤ204）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
101	陶器　こね鉢	－	口縁部やや内湾。口縁端部上下に大きく拡張。端部は丸みを持つ。	口縁部内外面・体部内面ロクロナデ。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	内面煤付着。魚住焼。
102	磁器　梅瓶	－	体部外面に渦文ないしは波涛文。	全面丁寧なロクロナデ。外面に青白色釉をやや厚めに施す。内面は露胎。	素地白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	青白磁。
103	鉄製品　刀子	長さ7.6、幅1.8、棟厚0.2　切先の断片。						

表21　中島田－溝205（ＳＤ205）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
104	土師質　杯	底径　9.2	体部やや内湾。体部と底部の境界付近にヘラによる沈線が認められる。突出した高台状の底部で中央部の器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
105	土師質　杯	底径　7.7	体部外反。体部と底部の境界に明瞭な段が認められる。底部高台状に突出。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
106	土師質　杯	底径　5.8	体部外面に成形による稜が認められる。器壁厚く、底部やや丸底状。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
107	土師質　皿	口径　(9.1) 器高　1.7 底径　(7.0)	口縁部短く直線的。口縁端部やや尖る。底部と口縁部の境界付近に段が認められる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
108	土師質　皿	口径　(8.6) 器高　1.6 底径　(6.0)	口縁部内湾。口縁端部わずかに肥厚。	底部切り離し不明。口縁部内外面ロクロナデ。	淡茶褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
109	土師質　皿	口径　(7.2) 器高　1.2 底径　(4.0)	口縁部外反。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切りか。口縁部内外面ロクロナデ。底部外面ナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
110	土師質　椀	高台径4.3	断面三角形の低い高台が付く。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	やや不良	底部内面に煤付着。
111	土師質　椀	高台径(4.1)	断面三角形の低い高台が付く。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
112	土師質　椀	高台径 4.9	断面台形の細高い高台が付く。器壁やや薄い。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	不良	
113	土師質　椀	高台径(5.1)	断面逆台形状で、やや外方に踏ん張る低い高台が付く。高台大きく歪む。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	精良	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
114	瓦器　椀	口径（12.3） 器高　3.5 高台径(3.9)	体部やや内湾。口縁部やや外反し、端部わずかに肥厚。退化した高台が付く。	口縁部外面ヨコナデ。内面ナデ。体部外面ユビオサエ。貼り付け高台。わずかに暗文が認められる。	明黄灰色 外面黒色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
115	瓦器　椀	口径（12.9） 器高　3.6 高台径(4.4)	体部内湾、口縁部やや内湾。口縁端部丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面・見込部ナデ。体部外面ユビオサエ。	明灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
116	瓦器　椀	口径（12.3）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部丸い。	口縁部内外面・見込部丁寧なナデ。体部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
117	瓦器　椀	口径（11.3）	口縁部やや内湾。口縁端部わずかに肥厚し、先端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面下部ユビオサエ。内面丁寧なナデ。部分的に暗文あり。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
118	瓦器　椀	高台径 2.9	体部下部外方に大きく開く。退化した高台が付く。	体部外面ユビオサエ。見込部に粗い暗文を施す。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
119	土師質　鍋	口径（25.0）	「く」の字状の口縁部を持ち、端部を上下にやや拡張し、平坦に仕上げる。	口縁部内外面ともヨコナデ。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
120	土師質　鍋	口径（26.1）	「く」の字状の口縁部を持ち、端部を上下にやや拡張し、平坦に仕上げる。	口縁部内外面ともヨコナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
121	土師質　鍋	口径（27.4）	「く」の字状の口縁部を持ち、端部は丸い。器壁は薄め。	口縁部内面に粗い横方向のハケ目を施す。口縁部外面ヨコナデ。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
122	土師質　羽釜	－	直立する口縁部に断面台形状の小さい鍔が水平方向に付く。口縁端部は丸い。	口縁部内外面・鍔上面ヨコナデ。体部外面未調整。鍔の下部圧痕をナデ消す。	淡灰色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
123	土師質　鍋	口径（28.0）	「く」の字状の口縁部を持ち、端部をやや肥厚させ、平坦に仕上げる。	口縁部内面ヨコナデ。口縁部外面に縦方向のハケ目を施す。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	不良	体部外面に煤付着。
124	土師質　鍋	口径（29.6）	「く」の字状の口縁部を持ち、端部をわずかに肥厚させ、丸く仕上げる。	体部・口縁部内面きめ細かいハケ目。口縁部外面ヨコナデ。体部外面縦方向のハケ目。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	体部外面に煤付着。
125	瓦質　鍋	口径（21.7）	口縁部外反した後、内湾。端部は凹面となる。	口縁部内外面丁寧なヨコナデ。口縁部外面下部ユビオサエ。	灰色	精良	良好	体部外面に煤付着。
126	瓦質　羽釜	口径（22.7）	内湾する口縁部に断面三角形の短い鍔が付く。口縁端部を平坦に仕上げる。	口縁部・体部内面に粗い横方向のハケ目。口縁部外面・鍔上面丁寧なヨコナデ。鍔下部・体部外面粗いヨコナデ。	黒灰色	砂粒を多く含む。	良好	
127	瓦質　羽釜	口径（25.1）	内湾する口縁部に断面方形の短い鍔が水平に付く。口縁端部はやや凹む。	口縁部内外面とも丁寧なナデ。鍔部丁寧なヨコナデ。鍔貼り付け。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
128	土師質　羽釜	口径（27.2）	直立する口縁部に断面三角形の小さい鍔が付く。口縁端部肥厚し、平坦に仕上げる。底部と体部の境界は丸みを持ち、体部は直立気味。	口縁部内面は細かいハケの後ヨコナデ。外面ヨコナデ。体部内外面粗いハケ目。鍔貼り付け。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	体部外面に煤付着。
129	瓦質　羽釜	口径（21.4）	直立する口縁部に、断面方形で水平方向にやや長目に張り出す鍔が付く。体部やや内湾。口縁端部はやや内側に傾斜する平坦面をなす。	口縁部内外面・鍔上面丁寧なヨコナデ。体部外面未調整であるが、一部ユビオサエが認められる。	灰褐色 外面黒色	微砂粒を少量含む。	良好	体部外面に煤付着。
130	土師質　羽釜	口径　14.2	体部球形。口縁部大きく内湾。断面方形の鍔がほぼ水平に付く。脚付き。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内外面ユビオサエ。	茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	体部外面に煤付着。
131	土師質　脚部	残存長10.0 径　3.5	断面円形。羽釜ないしは土鍋の脚。	粘土を棒状に成形。全面にヘラケズリを施した後ナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	一部煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
132	瓦質　脚部	残存長 7.2 径　3.3	断面不整円形。羽釜の脚か。	粘土を棒状に成形。全面にヘラケズリを施した後ナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	全面に煤付着。
133	磁器　碗	－	体部内湾。体部外面に幅広の蓮弁文。	全体に丁寧なロクロナデ。淡黄緑色釉を薄めに施す。	素地灰色	精良	良好	龍泉窯系青磁。
134	磁器　小碗	口径　（7.9）	体部・口縁部内湾。口縁端部は尖り気味。外面貫入顕著。	全体に丁寧なロクロナデ。体部・口縁部内外面に濃緑色釉をやや厚めに施し、口縁端部の釉を掻き取る。	素地灰白色	精良	良好	龍泉窯系青磁。
135	磁器　皿	口径　10.7 器高　2.0 底径　5.6	体部中位で屈曲。口縁部やや外反し、端部は丸く仕上げる。底部内面に櫛によるジグザク文様・ヘラによる片彫りが施される。	全体に丁寧なロクロナデ。底部と体部の境を大きくヘラで削り取る。底部外面以外に淡緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。 同安窯系青磁。
136	陶器　すり鉢	底径（15.1）	体部直線的。体部内面に6条単位の櫛描条線。	体部外面粗い縦横のナデ。体部内面ヨコナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	良好	内面に自然釉。 備前焼。
137	陶器　こね鉢	口径（20.0）	口縁部肥厚し、上下に拡張。口縁端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
138	陶器　こね鉢	口径　23.3	体部・口縁部直線的。口縁端部やや上下に拡張。端面は平坦。	全体にロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼
139	陶器　こね鉢	口径（26.5）	口縁端部外反し、上下に大きく拡張。端面はわずかに丸みを持つ。	全体にロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
140	陶器　こね鉢	口径（25.0）	体部直線的。口縁部やや肥厚し、端部を上下に大きく拡張。端面は丸みを持つ。	口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部外面粗いロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	暗灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	魚住焼。
141	陶器　こね鉢	口径（28.6）	体部直線的。口縁部やや内湾。端部拡張。端面は平坦。口縁部外面に焼成時亀裂が入る。	口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部外面粗いロクロナデ。体部内面ロクロナデ後仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
142	陶器　こね鉢	口径（33.9）	口縁部外反。口縁端部上下に拡張。先端部尖る。端面はやや丸みを持つ。	口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部外面ロクロナデか。体部内面ロクロナデ後仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
143	陶器　甕	口径（30.4）	口縁部やや外反。口縁端部を下方に折り曲げ、玉縁状に作る。	口縁部内外面ともヨコナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	口縁部に自然釉。 備前焼。
144	瓦質　火鉢	口径（35.5）	輪花形。体部・口縁部やや内湾。端面は平坦。外面に菊花文スタンプ。	内外面とも丁寧なヘラミガキ。	暗黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
145	陶器　甕	－	体部小片。	外面綾杉状の叩き。内面ナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
146	陶器　甕	－	体部小片。	外面ナデ後、部分的に格子目状のスタンプを押印。内面粗いナデ。	灰赤色	砂粒を多く含む。	良好	
147	土製品　土錘	長さ　4.3 胴径　1.4 重さ　8.4g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にユビオサエ後粗いナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
148	土製品　土錘	長さ　4.9 胴径　1.5 重さ　10.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にユビオサエ後ナデ。	淡黒褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
149	土製品　土錘	長さ　3.8 胴径　1.5 重さ　5.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にユビオサエ後ナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
150	土製品　土錘	長さ　3.9 胴径　1.3 重さ　5.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
151	石製品　砥石	長さ　7.9 幅　5.0 厚さ　2.9	平面・断面長方形。	4面とも使用。	淡褐色	（砂岩製）		仕上げ砥。
152	鉄製品　鉄釘	長さ5.0、幅0.4、厚さ0.4　両端部欠損。断面方形。						
153	銅製品　銅銭	径　2.5	「景祐元宝」　初鋳年　宋（1034年）　行書体。					

表22　中島田－溝206（ＳＤ206）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
154	土師質　杯	口径（10.0） 器高　3.5 底径（6.1）	体部・口縁部直線的。口縁端部やや尖る。底部やや突出。器形に歪が認められる。	底部回転糸切り後ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
155	土師質　杯	口径（11.1） 器高　2.6 底径（5.7）	体部直線的。口縁端部は丸い。底部丸底状で、底部と体部の境界不明瞭。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
156	土師質　杯	口径（11.1） 器高　2.9 底径（8.3）	体部やや内湾。口縁部外反。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
157	土師質　杯	口径（10.1） 器高　3.7 底径（7.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。器壁薄い。体部外面に稜。	底部回転糸切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
158	土師質　杯	口径（11.5） 器高　3.1 底径（8.9）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切りか。体部・口縁部内外面ともロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
159	土師質　杯	口径（12.1） 器高　3.2 底径　（9.4）	体部・口縁部直線的。口縁端部の器壁薄い。体部外面下部に弱い稜。	底部回転糸切りか。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
160	土師質　杯	口径　10.9 器高　3.9 底径　7.1	体部やや内湾。口縁部の器壁やや薄く端部は丸い。体部外面に稜。全体に器壁厚い。	底部回転糸切り後ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
161	土師質　杯	口径（12.3） 器高　3.3 底径　（9.4）	体部直線的。口縁部外反。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
162	土師質　杯	口径（12.8） 器高　2.9 底径（10.4）	体部直線的。口縁端部は丸い。口縁部の器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
163	土師質　杯	口径　11.1 器高　3.6 底径　7.1	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部と体部の境界弱い稜となる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
164	土師質　杯	口径（12.2） 器高　3.6 底径　（8.2）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
165	土師質　杯	口径（13.2） 器高　3.0 底径　（6.3）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部外面以外全体に丁寧なロクロナデ。	淡褐色	精良	やや不良	
166	土師質　杯	口径　11.4 器高　3.3 底径　8.1	体部直線的。口縁部やや肥厚。端部は丸い。底部と体部の境界付近弱い段となる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	ほぼ完形。
167	土師質　杯	口径　12.4 器高　3.8 底径　9.5	体部内湾。口縁部やや外反。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
168	土師質　杯	口径（14.0） 器高　3.0 底径　（9.8）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部丸い。体部外面上位に明瞭な稜。底部内面凹凸顕著。薄手。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
169	土師質　杯	口径　11.9 器高　3.7 底径　9.3	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。体部外面に弱い稜。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	完形。
170	土師質　杯	口径　13.2 器高　3.8 底径（11.5）	体部やや内湾。口縁部外反。口縁端部丸い。底部内面凹凸顕著。大形。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
171	土師質　杯	底径　7.8	体部直線的。体部外面・底部内面凹凸顕著。底部中心部の器壁薄い。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
172	土師質　杯	底径　（7.0）	体部内湾か。体部と底部の境界付近の器壁厚い。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロデテ。底部内面ナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
173	土師質　杯	底径　8.1	底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。体部外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
174	土師質　杯	底径　（7.2）	底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部内面ナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
175	土師質　杯	底径　（8.0）	体部外反した後内湾。体部上部の器壁厚い。体部と底部の境界に段がつく。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。底部内面ナデか。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
176	土師質　杯	底径　（9.2）	体部内湾か。底部と体部の境界に明瞭な段を持つ。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
177	土師質　杯	底径　（7.0）	体部直線的。	底部回転糸切り後ナデ。体部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
178	土師質　杯	底径　9.1	体部直線的。底部内面凹凸顕著。底部と体部の境界強い段となる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
179	土師質　杯	底径　8.5	体部直立気味。底部内面凹凸。底部と体部の境界明瞭。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
180	土師質　杯	底径　9.2	体部やや内湾か。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。体部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
181	土師質　杯	口径　11.4 器高　3.2 底径　6.6	体部直線的。口縁部やや外反。体部外面に稜が認められる。底部内面凹凸顕著。	底部回転ヘラ切り後ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
182	土師質　杯	口径　10.7 器高　3.3	体部やや内湾。口縁端部は尖る。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
183	土師質　杯	口径（11.9） 器高　2.8 底径　（7.6）	体部直線的。口縁部やや内湾。体部外面に稜が認められる。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
184	土師質　杯	口径（10.6） 器高　3.6	体部内湾。口縁部直線的。体部外面に稜が数条認められる。底部丸底状。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
185	土師質　杯	口径（12.3） 器高　2.7 底径　（7.6）	体部・口縁部直線的。口縁端部は尖る。体部外面に弱い稜が認められる。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
186	土師質　杯	口径　10.8 器高　3.0 底径　5.7	体部やや内湾。口縁部直線的。体部外面に稜が認められる。底部内面凹凸顕著。	底部回転ヘラ切り後ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
187	土師質　杯	口径（11.6） 器高　4.1	体部内湾。口縁部直線的。体部外面に稜が数条認められる。底部丸底状。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
188	土師質　杯	口径　12.4 器高　2.8 底径　7.5	体部・口縁部直線的。体部外面に稜が認められる。	底部回転ヘラ切り後ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
189	土師質　杯	口径　12.0	体部・口縁部直線的。口縁端部尖る。体部と口縁部の境界付近の器壁厚い。体部外面下部に稜が認められる。	底部回転ヘラ切りか。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
190	土師質　杯	口径（11.4）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部尖る。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
191	土師質　皿	底径　6.1	器壁の厚い平坦な底部に短い口縁部がつく。	底部回転糸切り。口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
192	土師質　椀	口径　10.8 器高　3.3 高台径 4.2	体部大きく外方に開く。口縁部やや内湾。断面方形の高台がやや外方に踏ん張る。高台の径は小さい。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
193	土師質　椀	口径　10.7 器高　3.2 高台径 4.2	体部大きく外方に開いた後やや内湾。口縁部直線的で、やや肥厚。断面逆台形状の小さい高台を持つ。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
194	土師質　椀	口径　11.4 器高　3.2 高台径 5.2	体部やや内湾。口縁端部やや肥厚。高台断面三角形。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部未調整。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	やや不良	完形。
195	土師質　椀	口径（11.0）	体部・口縁部内湾。口縁部の器壁薄く、先端部尖らせる。口縁部外面に調整による沈線めぐる。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ナデ。内面全体丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
196	土師質　椀	口径（11.2）	体部・口縁部内湾。口縁端部肥厚。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面全体ナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
197	土師質　椀	口径（12.3）	体部・口縁部内湾。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部未調整。内面全体丁寧なナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
198	土師質　椀	高台径 4.7	体部やや内湾。高台断面三角形で低い。	体部外面粗いナデ。内面全体ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	不良	
199	土師質　椀	口径　10.5 器高　3.2 高台径 3.8	体部内湾。口縁部やや内湾。体部上半部から口縁部にかけて器壁を厚くする。高台断面三角形で、低い。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。ナデは一部上部・口縁部にも及ぶ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
200	土師質　椀	口径　11.8 器高　3.2 高台径 5.0	体部やや内湾。口縁端部肥厚。底部内面凹凸顕著。高台断面三角形で、低い。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ユビオサエ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
201	土師質　椀	口径　12.2 器高　3.5 高台径 4.8	体部大きく内湾。口縁端部肥厚。高台楕円形で断面三角形。全体に歪が認められる。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ユビオサエ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
202	土師質　椀	口径　12.5 器高　3.2 高台径 4.8	体部大きく外方に開く。口縁部やや内湾。高台断面三角形で、低い。	口縁部・体部外面ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。底部内面一方向のナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	良好	
203	土師質　椀	口径（11.8）	体部・口縁部内湾。口縁端部やや肥厚。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
204	土師質　椀	口径（12.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁部の器壁を薄くし、先端部をやや尖らせる。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面全体丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
205	土師質　椀	高台径 5.9	体部内湾。高台断面三角形。	体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面全体ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
206	土師質　椀	口径　11.4 器高　2.8 高台径 4.8	体部外方に開いた後内湾。口縁部内湾。断面三角形の低い高台を持つ。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	完形。
207	土師質　椀	口径　11.6 器高　3.0 高台径(4.0)	体部外方に開いた後内湾。口縁部内湾。断面三角形の低い高台を持つ。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
208	土師質　椀	口径　11.4 器高　3.5 高台径 3.8	体部やや内湾。口縁部内湾。高台断面三角形で、部分的につぶれて逆台形となる。	口縁部・体部外上部ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ユビオサエ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
209	瓦器　椀	口径（11.0） 器高　3.1	体部大きく外方に開く。口縁部内湾。口縁端部は丸い。無高台。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後、細い粗雑な暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
210	瓦器　椀	口径（11.3）	体部・口縁部やや内湾。口端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
211	瓦器　椀	口径（11.3）	体部・口縁部内湾。	口縁部・体部外面ナデ。内面全体丁寧なナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
212	瓦器　皿	口径　（7.6）	口縁部外反。口縁端部肥厚し、丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面粗いナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	不良	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
213	陶器　椀	口径（11.8） 器高　2.8 底径　（6.9）	体部外方に開いた後内湾。口縁部は直立気味で、端部を尖らせる。底部と体部の境は明瞭な稜をなす。底部はやや突出気味。	底部回転糸切り後部分的にナデ。口縁部・体部内外面ロクロナデ後、部分的に乱ナデ。底部内面ナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	重ね焼。 備前産か。
214	陶器　椀	口径　12.0 器高　3.2 底径　6.6	体部外方に開いた後内湾。口縁部は直立気味で、端部を尖らせる。底部と体部の境は明瞭な稜をなす。	底部回転糸切り。板目。口縁部内外面・体部内面ロクロナデ。底部内面一方向のナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。 重ね焼。 備前産か。
215	陶器　椀	口径（10.0）	体部外方に開いた後内湾。口縁部は直立気味で、端部を尖らせる。	口縁・体部内外面ロクロナデ。体部外面部分的に乱ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	重ね焼。 備前産か。
216	土師質　鍋	口径（29.5）	体部ほぼ直線的。口縁部を大きく外方に折り曲げた後内湾。口縁端部やや肥厚。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面横方向のハケ目。外面粗いナデ。	赤褐色 一部黒色	砂粒を多く含む。	良好	
217	土師質　鍋	口径（35.3）	「く」の字状の口縁部を持ち、口縁部全体を肥厚させ、先端部を丸くする。体部はやや内湾気味。	口縁部内外面ヨコナデ後、外面に横方向のハケ目。体部外面に縦方向のハケ目。内面粗いナデ。	茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	体部内外面の一部に煤付着。
218	土師質　羽釜	口径（22.6）	直立する短い口縁部に断面方形の鍔が水平につく。口縁端部は平坦。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。鍔は貼り付け。	淡褐色	砂粒を多く含む。	不良	鍔下部に煤付着。
219	陶器　甕	口径（25.4）	口縁部大きく外反し、端部を上下に拡張。	口縁部内面ロクロナデ。同外面平行条線状の叩きナデ消し。	黒色	微砂粒を多く含む。	やや不良	瓦質。 魚住焼。
220	土師質　竈	上部径（38.0） 高さ（27.5）	円筒形の断面に台形の焚口の上方に廂を持つ。焚口両側に鰭状の粘土帯あり。	粘土紐輪積みによって成形。体部内外面とも粗いナデ。粘土帯貼り付け後粗いナデ。	灰褐色	砂粒を多く含む。		
221	土製品　土錘	長さ　3.6 胴径　0.9 重さ　2.7g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
222	土製品　土錘	長さ　3.5 胴径　1.1 重さ　4.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にナデ。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
223	土製品　土錘	長さ　4.5 胴径　1.2 重さ　5.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にナデ後部分的にユビオサエ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
224	土製品　土錘	長さ　3.6 胴径　1.1 重さ　4.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にナデ。	黒褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
225	土製品　土錘	長さ　3.6 胴径　1.2 重さ　4.0g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土紐を巻き付けて成形。全体にナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
226	土製品　羽口	残存長 9.0 胴径　(9.6) 孔径　(3.4)	円筒状。先端部熔変。外面の器壁剥落により凹凸顕著。	棒に粘土を巻き付けて成形。外面ナデ。	灰褐色 一部赤褐色	砂粒を多く含む。		

表23　中島田－溝208（ＳＤ208）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
227	瓦器　椀	口径（13.2）	体部直線的。口縁部外面調整により凹面をなす。口縁端部は尖る。	口縁先端部強いヨコナデ。口縁部内面・体部内外面ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
228	土師質　脚部	－	鍋ないしは羽釜の脚部。断面長円形。	粘土を棒状に成形。全体にユビオサエ後、粗いナデを施す。	黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	
229	鉄製品　鉄釘	長さ3.2、幅0.6、厚さ0.4　先端部欠損。断面方形。						
230	鉄製品　鉄釘	長さ2.9、幅0.5、厚さ0.5　両端部欠損。断面方形。						

表24　中島田－溝209（ＳＤ209）出土遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
231	磁器　碗	高台径 5.5	体部大きく外方に開いた後内湾か。体部外面に蓮弁文と見られる凹凸が認められる。高台断面方形で高い。	内面全体丁寧なロクロナデ。底部外面以外青緑色釉を厚めに施す。	素地灰白色	微細な粒子を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
232	土製品　土錘	長さ　4.4 胴径　1.2 重さ　4.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

表25　中島田－溝210（ＳＤ210）出土遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
233	土師質　皿	口径　(7.8) 器高　1.6 底径　(6.6)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。口縁部内外面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

表26　中島田－溝212（ＳＤ212）出土遺物観察表

番号	器　種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
234	土師質　杯	底径　(9.8)	体部内湾。底部高台状に突出。大形。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
235	土師質　皿	口径　(8.6) 器高　1.3 底径　(7.0)	口縁部短くやや内湾気味。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。口縁部内外面ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
236	土師質　椀	高台径(5.8)	断面方形の高台がやや外方に踏ん張る。	体部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	黄褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
237	瓦器　皿	口径　(7.0) 器高　1.0 底径　(5.1)	口縁部短く、外反する。口縁端部は尖る。	器壁剝落のため調整不明。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
238	陶器　こね鉢	底径　(9.7)	体部下部やや内湾気味に斜め上方に立ち上がる。底部平底。	底部回転糸切り。体部外面ロクロナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	内面煤付着。魚住焼。

表27　中島田－溝213（ＳＤ213）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
239	土師質　杯	口径（10.6）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。体部外面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
240	土師質　鍋	口径（25.2）	体部やや内湾か。「く」の字状の口縁部で、端部やや肥厚し、平坦に仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面・体部内面横方向のハケ目。体部外面縦方向のハケ目。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	体部外面に煤付着。

表28　中島田－溝214（ＳＤ214）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
241	土師質　皿	口径　(7.4) 器高　1.2 底径　(6.5)	口縁部短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	暗赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
242	土師質　皿	口径　(8.4) 器高　1.2 底径　(7.1)	口縁部短く直線的。口縁端部は尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
243	土師質　椀	口径　(9.9)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。内面全体丁寧なナデ。	口縁部・体部外面ヨコナデ。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
244	瓦器　椀	口径（13.3）	体部大きく外方に開いた後内湾。口縁端部はやや外反。口縁端部はやや肥厚し、丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。体部内面丁寧なナデ後粗雑な暗文を施す。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	和泉型。

表29　中島田－溝215（ＳＤ215）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
245	土師質　椀	口径（12.1）	体部・口縁部やや内湾。口縁部肥厚し、端部は丸く仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。内面全体丁寧なナデ。体部外面ユビオサエ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
246	土師質　椀	高台径(6.0)	断面方形の低い高台が、外方に踏ん張る。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
247	土師質　椀	高台径(5.3)	高台断面方形で低い。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
248	土師質　鍋	口径（33.5）	体部大きく内湾した後直立。「く」の字状の口縁。口縁端部外反。底部は丸みを持つか。	口縁部内面ヨコナデ。外面ヨコナデ後、縦方向のハケ目。体部・底部内面横方向のハケ目。体部外面縦方向のハケ目。底部外面横・斜め方向のハケ目。	黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	体部外面に煤付着。

表30　中島田－溝216（ＳＤ216）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
249	土師質　杯	口径（12.0） 器高　3.2 底径　（8.2）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや尖る。体部の器壁厚い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
250	土師質　杯	底径　（8.4）	体部内湾。底部突出。やや大形。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
251	土師質　杯	底径　（8.9）	体部の破損部全体に刻み目状の打撃痕。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	皿に転用か。
252	土師質　皿	口径　（8.4） 器高　1.8 底径　（8.0）	口縁部断面三角形で短く、直立気味。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
253	土師質　椀	高台径(5.6)	高台断面三角形で低い。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
254	土師質　椀	高台径 5.7	高台断面台形状でやや低い。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
255	土師質　椀	高台径 5.1	高台断面三角形で低い。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	淡黒褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
256	瓦質　椀	底径　（6.5）	体部やや内湾。無高台であるが、底部やや突出。	体部外面ユビオサエ、内面ヨコナデ。底部内面一方向のナデ。内面に暗文を施す。底部外面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
257	瓦器　椀	口径（10.7）	体部・口縁部内湾。口縁部肥厚し、端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面丁寧なナデ後幅広の暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
258	瓦器　椀	口径（14.1）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面丁寧なナデ後粗雑な暗文を施す。	灰色	精良	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
259	瓦器　椀	口径（14.8）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面丁寧なナデ後粗雑な暗文を施す。	灰色	精良	良好	
260	瓦器　皿	口径　（7.2）	口縁部やや肥厚。端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
261	土師質　鍋	－	「く」の字状の口縁部の先端をやや尖らせる。器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面横方向のハケ目。	暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面に煤付着。
262	陶器　こね鉢	口径（33.2）	体部直線的。口縁部わずかに外反後内湾。口縁端部上方に拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。	内外面ロクロナデ。体部外面一部ユビオサエ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
263	陶器　こね鉢	－	体部直線的。口縁部やや肥厚し、端部尖る。端面はやや丸みを持つ。	内外面ロクロナデ。体部外面粗いナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
264	土製品　土錘	長さ　4.6 胴径　1.3 重さ　6.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。調整不明。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
265	土製品　土錘	長さ　4.1 胴径　1.1 重さ　4.0g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にユビオサエ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
266	鉄製品　刀子	長さ4.2、幅1.6、棟厚0.2　切先の断片。刃部断面三角形。						
267	鉄製品　鉄釘	長さ3.0、幅0.4、厚さ0.3　頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。						
268	鉄製品　鉄釘	長さ4.0、幅0.7、厚さ0.7　両端欠損。断面方形。						

表31　中島田－溝217（ＳＤ217）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
269	土師質　皿	底径　（5.9）	口縁部断面三角形で短くやや内湾。底部の器壁厚い。	底部回転糸切り。口縁部内外面ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

表32　中島田－溝218（ＳＤ218）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
270	土師質　椀	高台径 4.3	断面台形状で低い高台が付く。	底部内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 内面黒色	微砂粒を多く含む。	不良	

表33　中島田－溝219（ＳＤ219）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
271	陶器　椀	口径（11.5） 器高　3.4 底径　6.2	体部・口縁部内湾。口縁部丸い。底部内面凹凸顕著。全体に器壁厚い。	底部回転糸切り。板目。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内面一方向のナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	備前産か。

表34　中島田－溝220（ＳＤ220）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
272	土師質　皿	底径　（5.2）	底部平底。底部中央部の器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	橙色	精良	良好	
273	土師質　椀	口径（10.6） 器高　3.4 高台径(3.2)	体部内湾。口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、先端部丸く仕上げる。高台断面逆台形状で低い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	外面灰白色、内面黒色。	微砂粒を多く含む。	良好	内面煤付着。
274	陶器　こね鉢	－	口縁部やや外反。口縁端部を上下に大きく拡張し、上端部をやや尖り気味に仕上げる。端面は丸みをもつ。	口縁部全体丁寧なロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
275	土製品　土錘	長さ　3.0 胴径　1.2 重さ　3.1g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
276	鉄製品　鉄釘	長さ6.7、幅0.4、厚さ0.4　頭部屈曲。断面方形。						

表35　中島田－溝221（ＳＤ221）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
277	土師質　杯	口径　(9.2) 器高　3.4 底径　(6.2)	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
278	土師質　皿	口径　(7.4) 器高　1.3 底径　(6.2)	断面三角形状の短い口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
279	土師質 高台付皿	高台径 5.5	高台部の器壁厚い。底部内面大きく凹む。全体に器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外粗いロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
280	土師質 高台付皿	高台径 5.4	高台部の器壁厚い。底部内面に成形による同心円状の沈線が認められる。全体に器面の凹凸顕著。	底部回転切り。底部外面以外粗いロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
281	鉄製品　不明	長さ3.6、幅0.4、厚さ0.4　L字形に屈曲。上方断面方形。下方断面円形。						鎹か。

表36　中島田－溝222（ＳＤ222）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
282	土師質　皿	口径　(8.2)	断面三角形状の短い口縁部がほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味に仕上げる。	底部回転糸切りか。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
283	土製品　土錘	長さ　3.3 胴径　1.0 重さ　3.2g	紡錘状の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
284	土製品　土錘	長さ　3.0 胴径　0.9 重さ　2.1g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	赤灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
285	土製品　土錘	長さ　3.7 胴径　1.2 重さ　3.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	赤橙色	微砂粒を少量含む。	良好	

表37　中島田－溝223（ＳＤ223）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
286	土師質　杯	底径　(8.4)	体部やや外方に開く。底部と体部の境界付近の器壁厚い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデか。	橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
287	土師質　杯	底径　(5.6)	体部直線的に斜め上方に立ち上がる。全体に薄手で、丁寧な作りである。	底部回転ヘラ切り。体部内外面丁寧なロクロナデ。底部内面ナデか。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
288	土師質　杯	口径　11.5 器高　3.6 底径　6.0	体部・口縁部直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸い。内外面に成形による凹凸が見られる。	底部回転ヘラ切り後、丁寧なナデ。板目。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
289	土師質 高台付皿	高台径 5.0	高台部の器壁厚い。底部内面大きく凹む。全体に器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外粗いロクロナデ。	にぶい橙色。	微砂粒を多く含む。	良好	
290	土師質　椀	口径　11.5 器高　3.8 高台径 4.8	体部ゆるやかに内湾しながら斜め上方に立ち上がる。口縁部やや外反。端部は丸い。高台断面三角形状で、部分的につぶれる。体部外面上位に稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	褐灰色	微砂粒を多く含む。	不良	ほぼ完形。
291	瓦器　椀	口径（11.2）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	外面全体やや粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	褐灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	和泉型。
292	陶器　椀	口径　11.3 器高　3.6 底径　5.0	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部やや肥厚。全体に成形による凹凸が見られる。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡黄色	精良	良好	体部内面煤付着。備前産か。ほぼ完形。

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
293	陶器　小椀	口径　(8.2) 器高　2.6 底径　(5.2)	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部やや尖る。全体に丁寧な作り。	底部外面未調整。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡黄色	精良	良好	瀬戸焼か。

表38　中島田－溝225（ＳＤ225）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
294	土師質　椀	口径　10.6 器高　2.8 高台径 3.8	体部ゆるやかに内湾しながら斜め上方に立ち上がる。口縁部ほぼ直線的。端部は丸い。高台断面三角形状で径小さく、低い。体部外面上位に稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。

表39　中島田－溝227（ＳＤ227）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
295	土師質　杯	口径（11.4）	体部・口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、端部は丸く仕上げる。器面平滑で、丁寧な作り。	底部切り離し不詳。口縁部外面強いロクロナデ。同内面・体部内外面ロクロナデ。	明褐灰色	精良	良好	

表40　中島田－溝229（ＳＤ229）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
296	土師質　杯	口径（11.6） 器高　3.2 底径　(6.8)	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面共丁寧なロクロナデ。底部内面ナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
297	土師質　杯	口径（11.8） 器高　3.6 底径　(7.3)	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部切り離し不詳。体部・口縁部内外面共丁寧なロクロナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

表41　中島田－溝232（ＳＤ232）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
298	土師質　杯	口径（10.8） 器高　3.3 底径　（7.0）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖り気味に仕上げる。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
299	土師質　杯	口径（10.5） 器高　3.3 底径　（8.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。器形に歪が見られる。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
300	土師質　椀	口径（11.9）	口縁部やや外反。全体に器壁薄い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
301	瓦器　皿	口径　（6.0）	口縁部外反。口縁端部は丸い。底部の器壁厚く、やや丸底か。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面粗いナデか。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
302	土製品　土錘	長さ　3.3 胴径　1.0 重さ　3.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
303	鉄製品　鉄釘	長さ6.1、幅0.7、厚さ0.5　頭部Ｌ字形に屈曲。断面方形。						

表42　中島田－溝233（ＳＤ233）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
304	土師質　杯	口径（11.4） 器高　4.2 底径　5.9	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部の器壁厚く、中央部やや盛り上がる。器高やや高め。	底部回転ヘラ切り。板目。底部外面以外ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
305	磁器　碗	口径（13.8）	体部上半部・口縁部直線的。口縁端部は尖る。体部外面に幅広で、やや粗雑な蓮弁文。	全体に丁寧なロクロナデ。全面に淡緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を少量含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。
306	土製品　土錘	長さ　5.3 胴径　1.3 重さ　6.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	

表43　中島田－土坑201（ＳＫ201）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
307	土師質　杯	口径　12.0 器高　3.6 底径　6.9	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、丸く仕上げる。底部内面の周縁部、調整により凹む。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
308	土師質　杯	口径（12.5） 器高　3.9 底径　（8.2）	体部内湾。口縁部やや外反。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
309	土師質　杯	口径（12.5）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部やや尖る。器壁厚い。	口縁部・体部内外面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
310	土師質　杯	底径　（6.2）	体部内湾。底部やや突出。	底部回転糸切り後粗いナデを施す。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
311	土師質　杯	底径　（6.8）	体部内湾か。底部突出。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部内面ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
312	土師質　皿	口径　（6.6） 器高　1.5 底径　（5.7）	口縁部短く、やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
313	土師質　椀	高台径 4.0	高台小さく、変形著しい。	内面ナデ。貼り付け高台。高台部粗いナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	外面煤付着。
314	瓦器　椀	口径（10.4）	体部外方に開いた後、やや内湾。口縁部やや肥厚し、端部を丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。体部内面ナデ。暗文不明。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
315	磁器　碗	高台径（5.5）	高台断面逆台形状。高台畳付部は外方から面取りを施す。	全体に丁寧なロクロナデ。高台部以外全面に淡緑色釉を薄く施す。釉は高台部外面に垂れる。	素地灰白色 高台部赤味を帯びる。	微細な黒粒を含む。	不良	龍泉窯系青磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
316	磁器　皿	口径　(9.0)	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。口縁部内面に幅広い凹みがめぐる。	体部・口縁部へラケズリ後ロクロナデ。口縁端部内面を除き、全面にやや淡緑色を帯びる白色透明釉を施す。底部外面釉を薄く施した後、部分的に強く掻き取る。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	口禿皿。白磁。
317	陶器　こね鉢	口径（27.4）	口縁端部逆「く」の字状に大きく屈曲。内面器壁剝落。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面ナデか。	灰色	微砂粒を多く含む。	不良	二次加熱　重ね焼。魚住焼。
318	陶器　甕	口径（51.3）	口頸部直立気味。口縁端部折り曲げ。端面は凹面となる。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	常滑焼。
319	土製品　土錘	長さ　5.4 胴径　2.6 重さ　33.0g	紡錘形の管状土錘。やや大形。	棒に粘土を巻き付けて成形後全体にナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
320	土製品　土錘	長さ　3.7 胴径　1.1 重さ　3.7g	紡錘形の管状土錘。やや大形。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
321	鉄製品　不明	長さ8.1、径0.3　断面円形。用途不詳。						

表44　中島田－土坑206（ＳＫ206）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
322	土師質　羽釜	口径（30.2）	口縁部直立。断面三角形状の短い鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。鍔貼り付け。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
323	陶器　すり鉢	口径（30.8）	体部・口縁部内湾。口縁端部外方にやや拡張。端面は平坦。体部内面に６条単位の櫛描条線。	口縁部内外面・体部内面ロクロナデ。口縁端部ナデ。体部外面乱ナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	内面に自然釉。備前焼。

表45　中島田－土坑207（ＳＫ207）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
324	土師質　杯	口径　12.2 器高　3.4 底径　9.0	体部大きく内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部やや突出。体部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
325	土師質　杯	口径　10.9 器高　2.7 底径　9.0	体部直線的。口縁部やや外反。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り後丁寧ナデ。板目。口縁部内外面丁寧なロクロナデ。底部内面一方向のナデ。底部と体部の境をヘラで削り取る。	淡赤褐色	精良	良好	

表46　中島田－土坑213（ＳＫ213）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
326	石製品　砥石	長さ　5.0 幅　3.6 厚さ　0.6	折損。偏平。平面・断面とも長方形。	表裏両面使用。	にぶい黄橙色	(粘板岩製)	－	仕上げ砥。
327	銅製品　銅銭	径　2.3	「五銖」　初鋳年　漢（ＢＣ118年）					
328	銅製品　銅銭	径　2.5	銭種不明。					

表47　中島田－土坑215（ＳＫ215）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
329	土師質　杯	口径（13.2） 器高　3.5 底径（11.1）	体部・口縁部やや内湾。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
330	瓦器　椀	口径（11.8）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、先端部は丸い。無高台と見られる。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ後粗雑な暗文。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
331	瓦器　椀	口径（12.4） 器高　3.9 高台径 2.8	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、先端部は丸い。退化した小さい高台が付く。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面丁寧なナデ後幅広の暗文。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。

表48　中島田－土坑216（ＳＫ216）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
332	瓦器　椀	口径（15.2）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。全体に器壁厚い。歪顕著。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面丁寧なナデ後幅広の暗文。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。 法量不正確。

表49　中島田－土坑219（ＳＫ219）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
333	土師質　杯	口径（11.7） 器高　2.9 底径　（8.0）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部やや尖る。体部外面に稜あり。	底部回転糸切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
334	土師質　杯	口径（12.3）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部の器壁薄い。	口縁部・体部内外面丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
335	土師質　杯	口径（12.5）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや尖る。体部外面に稜あり。	口縁部・体部内外面丁寧なロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
336	土師質　杯	底径（9.4）	体部と底部の境、明瞭な稜となる。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部内面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
337	土師質　皿	口径（8.2） 器高　1.3 底径（6.7）	口縁部やや内湾気味で短い。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
338	土師質　皿	口径（7.3） 器高　1.4 底径（6.0）	口縁部断面三角形。底部やや凹凸あり。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。口縁部内外面・底部内面ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
339	土師質　皿	口径（9.3） 器高　1.5 底径（8.0）	口縁部直立気味で、断面三角形。器形の歪顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
340	土師質　皿	口径（7.0） 器高　1.5 底径（6.0）	口縁部やや内湾気味、断面三角形。	底部回転糸切り。調整不明。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
341	土師質　皿	口径（7.7） 器高　0.8 底径（6.3）	口縁部やや外反気味で短い。口縁端部は尖る。	底部切り離し不明。底部外面以外ロクロナデ。底部外面未調整。	灰白色	微砂粒を含む。	良好	
342	土師質　皿	口径（8.1） 器高　1.2 底径（6.5）	口縁部やや外反気味で短い。口縁端部やや肥厚し、先端部尖る。器壁薄い。	底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ。底部外面以外ロクロナデ。	灰褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
343	土師質 高台付皿	高台径 4.4	円形の小さな底部が高台状に突出する。底部内面中央部大きく凹む。変形著しい。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデか。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
344	土師質　椀	口径（11.5） 器高　3.8 高台径 5.1	体部外方に開いた後大きく内湾。口縁部肥厚。断面三角形の安定した高台がやや外方に踏ん張る。	口縁部外面ヨコナデ。。体部外面ユビオサエ。内面全体丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部丁寧なヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
345	瓦器　皿	口径　（7.4） 器高　1.3 底径　（3.4）	口縁部短く、外反気味に外方に開く。底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。内面ナデ。底部外面ユビオサエか。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
346	土師質　羽釜	口径（30.0）	口縁部内湾。口縁端部を上下に大きく拡張。下方は鍔状。拡張した面は凹面となる。脚付きか。	口縁部内外面・鍔部・体部外面ともヨコナデ。体部内面ヘラで切り取るか。	赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面に煤付着。
347	土師質　脚部	残存長 6.0 長径　2.4	鍋の脚部。断面楕円形。	粘土を棒状に成形。ユビオサエ後ナデ。	橙色	砂粒を多く含む。	良好	
348	土製品　土錘	長さ　4.3 胴径　1.3 重さ　6.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
349	土製品　土錘	長さ　5.0 胴径　1.4 重さ　7.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	不良	

表50　中島田－土坑221（ＳＫ221）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
350	土師質　皿	口径　（7.9）	口縁部短く、やや外反気味。口縁端部をやや肥厚させ、丸く仕上げる。	底部外面以外ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。	暗茶褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	

表51　中島田－土坑226（ＳＫ226）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
351	瓦器　椀	口径（14.5）	体部大きく外方に開いた後やや内湾。口縁部やや内湾。口縁端部やや肥厚。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面全体に丁寧なナデ後暗文。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。

表52　中島田－土坑227（ＳＫ227）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
352	土師質　杯	口径（12.4） 器高　3.6 底径　（8.5）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部器壁薄い。体部内外面凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。口縁部内外面ロクロナデか。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
353	土師質　杯	口径　（9.8） 器高　3.3 底径　（5.0）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。体部外面下部ヘラケズリ後、内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
354	陶器　こね鉢	口径（25.7）	口縁部直線的で、肥厚。口縁端部上方に拡張。端面は平坦。	口縁部端面丁寧なロクロナデ。内面ロクロナデ。体部外面粗いロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。

表53　中島田－土坑230（ＳＫ230）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
355	土師質　杯	口径（11.7） 器高　4.2 底径　（8.8）	体部内湾。底部の器壁厚く、内外面凹凸顕著。	底部回転糸切り。体部内外面・底部内面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
356	土師質　皿	口径　（7.7） 器高　1.5 底径　（5.7）	口縁部直線的で短い。口縁端部は丸い。歪顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

表54　中島田－土坑234（ＳＫ234）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
357	土師質　杯	口径　11.6 器高　3.4 底径　9.0	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部丸い。底部内面・体部外面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
358	土師質　杯	口径　11.8 器高　3.5 底径　9.0	体部・口縁部直立気味。口縁端部丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
359	土師質　皿	口径　(7.6) 器高　1.4 底径　(5.8)	口縁部短く、直線的。口縁端部丸い。底部湾曲し、へそ皿状に中央部が盛り上がる。	底部回転糸切り。口縁部内外面ロクロナデ。体部外面ナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
360	銅製品　銅銭	径　2.3	「元豊通宝」　初鋳年　宋（1078年）　篆書体。					

表55　中島田－土坑238（ＳＫ238）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
361	土師質　杯	口径（13.0） 器高　3.5 底径　(8.0)	体部・口縁部ゆるやかなＳ字を描きながら、ほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖る。器形やや歪あり。	底部回転糸切り後、部分的にナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
362	土師質　杯	口径（12.8） 器高　3.6 底径　10.4	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部は丸く仕上げる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
363	土師質　杯	口径（13.2） 器高　3.3 底径　9.2	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部やや尖り気味。外面の器壁凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
364	土師質　杯	口径（11.2） 器高　3.4 底径　5.8	体部下半部大きく外方に開いた後、大きく屈曲。口縁部直線的。底部の器壁厚い。器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面に板目痕。口縁部内外面・体部ヨコナデ。体部外面粗いヨコナデ。底部内面ナデ。	にぶい黄褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
365	土師質　杯	底径　（6.9）	底部中央部の器壁極めて薄く、底部と体部の境界付近の器壁を厚くする。	底部・体部外面調整不明。底部内面・体部内面ロクロナデ。	内面黒褐色、外面淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	二次加熱を受けるか。
366	土師質　皿	口径　（7.8） 器高　1.3 底径　（5.4）	口縁部やや外反。口縁端部は丸く仕上げる。底部平底か。	底部回転ヘラ切りか。口縁部内外面ロクロナデ。	橙色	精良	良好	
367	土師質	高台径 5.5	高台の器壁厚い。底部内面中央部大きく凹む。高台部の器面凹凸顕著。	高台底部回転糸切り後ナデ。高台外側面をヘラ状工具の先で削り取る。	橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
368	土師質　椀	口径　10.6 器高　3.4 高台径 4.4	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸く仕上げる。体部から口縁部にかけ大きく屈曲。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。貼り付け高台。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
369	土師質　鍋	口径（32.0）	「く」の字状の口縁を持つ。口縁部やや肥厚。頸部内面に稜。体部中位で大きく屈曲。底部丸底か。	口縁部内面ヨコナデ。同外面・体部外面縦方向の細かいハケ目。体部内面縦横の細かいハケ目。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
370	瓦器　椀	口径（11.3） 器高　2.9	体部大きく外方に開き、やや内湾しながら立ち上がる。口縁部直線的。無高台。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ後粗雑な暗文を施す。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
371	瓦器　椀	口径（10.7）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、端部を丸く仕上げる。	口縁部内外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。同内面器面剝落につき調整不明。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	内外面に煤付着。 和泉型。
372	陶器　こね鉢	口径（23.4）	口縁部直線的。口縁端部を上下に拡張し、上端部を丸く仕上げる。	口縁部内外面・体部外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
373	磁器　碗	口径（17.2）	体部・口縁部直線的。口縁端部は尖る。体部外面に鎬蓮弁文を削り出す。	全体に丁寧なロクロナデ。全面に淡緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
374	鉄製品　鉄釘	長さ3.2、幅0.3、厚さ0.3　頭部偏平でやや屈曲。断面方形。						
375	鉄製品　鉄釘	長さ2.9、幅0.2、厚さ0.2　頭部欠損。断面方形。						

表56　中島田－土坑239（ＳＫ239）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
376	土製品　土錘	長さ　3.0 胴径　1.0 重さ　2.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	

表57　中島田－土坑241（ＳＫ241）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
377	土製品　土錘	長さ　3.8 胴径　1.2 重さ　4.6g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
378	土製品　土錘	長さ　2.7 胴径　1.1 重さ　2.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
379	土製品　土錘	長さ　3.4 胴径　1.3 重さ　5.1g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
380	銅製品　銅銭	径　2.4	「皇宋通宝」　初鋳年　宋（1039年）　篆書体。					

表58　中島田－土坑242（ＳＫ242）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
381	土師質　杯	口径（12.6） 器高　2.6 底径　（6.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。全体に器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡橙色	精良	良好	
382	土製品　土錘	長さ　3.4 胴径　1.2 重さ　4.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

表59　中島田－土坑243（ＳＫ243）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
383	土師質　杯	口径（11.6） 器高　3.5 底径.（7.0）	体部・口縁部ゆるやかなＳ字を描く。口縁端部やや尖り気味。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
384	土師質 高台付皿	高台径 5.5	高台部の器壁厚い。底部内面中央部やや凹む。高台部外側面の器面凹凸顕著。	高台底部回転糸切り。高台外側面をヘラ状工具の先で削り取る。底部内面の調整不明。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
385	陶器　こね鉢	口径（24.8）	体部上半部直線的。口縁部内湾。口縁端部はやや尖り気味。	全体にロクロナデで仕上げるが、口縁部内面は特に強くナデる。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。

表60　中島田－土坑246（ＳＫ246）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
386	土師質　杯	底径　6.9	体部下半部直線的。底部の器壁厚く、内面やや凹凸あり。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
387	土師質　皿	口径　7.4 器高　1.3 底径　6.8	口縁部断面三角形で、ほぼ直立気味に立ち上がる。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
388	磁器　梅瓶	－	体部小片。体部外面に唐草文。	全体に丁寧なロクロナデ。外面に青白色釉を施す。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	青白磁。
389	陶器　こね鉢	口径（26.8）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部を上下に拡張し、上端部をやや尖り気味に仕上げる。下端部は明瞭な稜をなす。	口縁部内外面・体部外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	青灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
390	陶器　こね鉢	口径（27.6）	体部・口縁部直線的。口縁端部をわずかに上下に拡張し、上端部を丸く仕上る。下端部は明瞭な稜をなす。	口縁部内外面・体部外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
391	陶器　こね鉢	口径（28.6）	体部直線的。口縁部をわずかに内湾。口縁端部を上下に拡張し、上端部を平坦にする。下端部は明瞭な稜なす。全体に器壁薄い。	口縁部内外面・体部内面ロクロナデ。体部外面粗いナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
392	陶器　甕	－	体部小片。	外面にやや粗雑な斜格子状の叩きを施す。内面ヘラケズリ。	赤褐色	砂粒を多く含む。	不良	
393	陶器　甕	－	体部小片。	外面に平行条線の叩きを施す。内面ナデか。	黒色	砂粒を多く含む。	やや不良	
394	土製品　土錘	長さ　3.5 胴径　1.5 重さ　6.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
395	土製品　土錘	長さ　3.9 胴径　0.9 重さ　3.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	褐灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
396	銅製品　銅銭	径　2.4	銭種不明。					

表61　中島田－土坑247（ＳＫ247）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
397	土師質　椀	高台径 4.6	高台断面三角形。底部の器壁やや厚い。	底部内面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	内面黒色 外面灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	内面煤付着。

表62　中島田－土坑249（ＳＫ249）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
398	土師質　杯	口径（11.5） 器高　3.0 底径　（6.6）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部切り離し不詳。体部・口縁部内外面とも丁寧なロクロナデ。	にぶい橙色	精良	良好	
399	土師質　杯	口径（11.1）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、端部は丸い。	体部・口縁部内外面とも丁寧なロクロナデ。	にぶい橙色。	精良	良好	
400	土師質　杯	口径（11.8）	体部・口縁部直線的。口縁部わずかに肥厚し、端部は丸い。	体部・口縁部内外面とも丁寧なロクロナデ。	にぶい橙色	精良	良好	
401	陶器　甕	－	体部小片。	外面に格子目の叩きを施す。内面ナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
402	鉄製品　鋲？	頭部径3.9、高さ3.4　形状は円形の鉄板に釘が付いた形態を示す。用途不詳。						

表63　中島田－土坑250（ＳＫ250）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
403	土製品　土錘	長さ　5.2 銅径　1.2 重さ　5.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。丁寧なナデ。	にぶい褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

表64　中島田－土坑251（ＳＫ251）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
404	土師質　杯	口径（11.5） 器高　3.2 底径　（8.7）	体部・口縁部ほぼ直線的。口縁端部はやや尖り気味に仕上げる。全体に器壁の凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外粗いロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
405	土師質　杯	底径　（7.3）	体部やや内湾。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
406	土師質　皿	口径　（6.5） 器高　1.3 底径　（5.6）	口縁部断面三角形で短く、端部は丸く仕上げる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	精良	良好	
407	土師質 高台付皿	高台径 4.2	高台部の器壁厚い。皿部の形状不詳。	底部ヘラ切り。高台底部以外ロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	
408	土師質 高台付皿	高台径 5.2	高台部の器壁厚い。底部内面中央部やや凹む。全体に器壁の凹凸顕著。	底部静止糸切り。高台底部以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
409	土師質　椀	高台径 4.2	体部大きく外方に開き、ゆるやかに内湾しながら立ち上がる。高台断面逆台形状で低い。部分的につぶれる。	体部外面粗いナデ。同内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色、一部茶褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
410	瓦器　椀	口径（10.4）	体部わずかに内湾気味。口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、端部を丸く仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面の調整不明。	灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
411	陶器　こね鉢	口径（25.4）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部を上下に拡張し、上端部を丸く仕上げる。下端部は明瞭な稜をなす。内面の器面凹凸あり。	口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部外面やや粗雑なロクロナデ。同内面ナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
412	土製品　土錘	長さ　3.3 胴径　1.1 重さ　3.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
413	鉄製品　鉄釘	長さ3.2、幅0.7、厚さ0.6　頭部屈曲。先端部欠損。断面方形。						
414	鉄製品　鉄釘	長さ4.3、幅0.7、厚さ0.6　頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。						

表65　中島田－土坑252（ＳＫ252）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
415	土師質　杯	口径（10.4） 器高　4.0 底径　（7.0）	体部・口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。器高やや高い。	底部切り離し不明。底部外面ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
416	鉄製品　鉄釘	長さ4.2、幅0.4、厚さ0.4　両端欠損。断面方形。						

表66　中島田－土坑253（ＳＫ253）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
417	土師質　杯	口径（12.0） 器高　3.1 底径　6.4	体部・口縁部直線的に斜め上方に延びる。口縁端部は丸い。内外面に凹凸が見られる。	底部回転ヘラ切り。板目。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
418	土師質　杯	口径　（9.9）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	体部・口縁部内外面とも丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
419	土師質　杯	底径　（7.4）	底部内面凹凸顕著。器壁厚い。	底部回転糸切り後ナデ。底部内面ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
420	鉄製品　鉄釘	長さ2.9、幅0.5、厚さ0.4　断面方形。						

表67　中島田－土坑254（ＳＫ254）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
421	土師質　椀	口径（10.7）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、端部は丸い。	口縁部外面ヨコナデ。同内面丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	良好	

表68　中島田－土坑257（ＳＫ257）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
422	土師質 高台付皿	高台径 5.7	高台部の器壁厚い。底部内面わずかに凹む。全体に器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外粗いロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
423	土製品　土錘	長さ　2.9 胴径　1.1 重さ　2.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

表69　中島田－井戸201（ＳＥ201）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
424	土師質 器台？脚部	脚径　(5.8) 脚高　5.0	基部から直線的に脚端部に開く。脚端部はやや尖り気味に仕上げる。脚部中央部に小さな円形の穴を穿つ。穴は4箇所と見られる。やや摩耗が見られる。	全体に丁寧なナデを施す。	灰褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
425	陶器　こね鉢	底径　(9.9)	体部下半部大きく外方に開く。底部の器壁やや薄い。	底部回転糸切りか。体部外面下半部粗いロクロナデ。同内面仕上げナデ。	外面黒色 内面灰色	砂粒を多く含む。	良好	瓦質に近い。
426	土製品　土錘	長さ　9.5 胴径　3.4 重さ　82.6g	紡錘形の管状土錘。大形。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	
427	鉄製品　鉄釘	長さ2.7、幅0.5、厚さ0.4　両端欠損。断面方形。						

表70　中島田－自然流路出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
428	土師質　皿	口径　10.6 器高　2.4 底径　5.1	体部直線的。口縁部外反。体部・底部外面凹凸顕著。器形に歪が認められる。	口縁部内外面・体部内面・底部内面の一部ヨコナデ。底部内面中央部ナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ。	淡赤褐色	精良	良好	完形。
429	土師質　皿	口径　13.4 器高　2.2 底径　7.0	体部直線的。口縁部やや外反。体部・底部外面わずかに凹凸。器壁薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面周縁部を右まわりに1回強くナデ、末端を上方へ引き上げる。内面全体丁寧なナデ。体部・底部外面丁寧なユビオサエ。	淡赤褐色	精良	良好	完形。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
430	土師質 皿	口径 13.4 器高 2.1 底径 7.4	体部・口縁部直線的に外方に開く。口縁端部はやや尖る。器壁薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面周縁部を右まわりに1回強くナデ、末端を上方へ引き上げる。体部内面ヨコナデ。体部・底部外面丁寧なユビオサエ。底部内面一方向のナデ。	淡黄褐色一部黒色	精良	良好	底部内外面の一部に煤付着。ほぼ完形。
431	磁器 碗	高台径 5.5	体部内湾。高台細身で、断面方形。畳付け部は丸みを持つ。体部外面に蓮弁文。体部内面・底部内面周縁部に文様。	内外面全体に丁寧なロクロナデ。底部外面・高台内面の一部を除き全面濃緑色釉を施す。釉切れ部は赤味を帯びる。	素地灰白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	龍泉窯系青磁。
432	磁器 碗	高台径 4.5	体部内湾。高台高く、断面方形。畳付け部は丸みを持つ。体部外面に線描蓮弁文。	内外面全体に丁寧なロクロナデ。底部外面以外青緑色釉。釉は厚めで、釉切れ部は赤味を帯びる。	素地灰白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	龍泉窯系青磁。
433	磁器 碗	－	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁部尖る。体部外面に鍋蓮弁文削り出し。	全面に丁寧なロクロナデ。濃緑釉を厚めに施す。	素地灰色	精良	良好	龍泉窯系青磁。
434	磁器 碗	－	体部やや内湾。体部外面に縞状の蓮弁文削り出し。体部内面に貫入。	全面に丁寧なロクロナデ。濃緑色釉を厚めに施す。	素地灰色	精良	良好	龍泉窯系青磁。
435	磁器 皿	口径 10.5 器高 3.0 高台径 4.3	体部・口縁部やや内湾。高台断面三角形。畳付け部はやや丸みを持つ。体部内面に菊花文を彫り込み、内面に沈線を放射状に施す。	内外面ロクロナデ。底部外面・高台内側を除き、やや淡緑色を帯びた白色透明釉を施す。	素地灰白色 高台内側・底部外面の一部赤く変色。	精良	良好	景徳鎮窯系白磁か。
436	磁器 皿	高台径(9.8)	高台断面三角形で、畳付け部内傾。	内外面丁寧なロクロナデ。高台畳付け部以外全面に白色透明釉を薄く施す。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	景徳鎮窯系白磁か。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
437	土師質　鍋	口径　25.2	体部やや内湾。口縁部内湾。口縁端部を大きく拡張し、端面を幅広く作る。端面は凹面となる。拡張した下端部は鍔状となる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。同内面ナデ。底部外面粗い格子目叩き。同内面ヘラケズリ。	暗褐色。外面黒色。	砂粒を多く含む。	良好	外面全体に煤付着。
438	土師質　鍋	口径　27.2	体部やや内湾。口縁部内湾。口縁端部やや肥厚し、丸い。やや上向きの短い鍔がつく。底部やや丸底。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ。体部外面上部斜め方向の粗い平行叩き、体部外面下部粗い平行叩きを施す。	暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面全体に煤付着。
439	土師質？鉢？	底径　11.0	体部やや外反。底部平底で、器壁薄い。	全体にナデを施すが、内面に比べて外面のナデは粗い。	淡黄灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	
440	陶器　梅瓶？	底径　（8.3）	梅瓶の底部か。体部下部直線的。底部平底で、器壁は体部に比べて薄い。	巻き上げ成形。体部外面下部縦位のヘラケズリ後ロクロナデ。内面粘土の継目部ユビオサエ後、全体に横方向のナデ。底部外面未調整。体部外面に淡黄褐色釉を薄く施し、下地とする。体部外面下部に淡緑色釉がなだれる。	素地灰色	最大２ミリの石英粒を含む。	良好	瀬戸焼。
441	陶器　すり鉢	底径（17.5）	体部やや内湾。体部に比べて底部の器壁を薄くする。体部内面に７条以上を単位とする櫛描条線。	体部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。底部外面未調整。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
442	陶器　甕	口径　35.6	体部内湾。口縁部ほぼ直立。口縁端部を折り曲げて、幅広い玉縁状口縁を作る。	口縁部内外面ヨコナデ。頸部内面斜め方向のナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	頸部白色自然釉。備前焼。
443	陶器　甕	底径（33.2）	体部やや内湾。	体部内外面・底部内面ナデ。底部外面粗いナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
444	陶器　甕	胴径（50.4）	体部内湾し、肩部大きく張る。体部内面凹凸顕著。	粘土紐巻き上げ成形。体部内外面ナデ。	暗茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	肩部やや緑色を帯びた白色自然釉。常滑焼。
445	陶器　甕	底径（18.6）	体部直線的に斜め上方に延びる。底部の器壁は体部に比べて薄くする。	体部内外面・底部内面ナデ。底部外面粗いナデ。	暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
446	木製品 墨書木礼	長さ　21.5 幅　2.3 厚さ　0.2	長方形の薄板。表面に呪句墨書。	長方形の板材を削り出し、上端部を水平に仕上げ、表面を丁寧に削り整える。柾目材。				
447	木製品 墨書木礼	長さ　11.8 幅　6.4 厚さ　0.6	長方形でやや厚みあり。上端部両側片に三角形の切り欠き。呪句墨書。	長方形の板材を削り出し、上端部を水平に仕上げ、表面を丁寧に削り整える。裏面は粗く削る。柾目材。				
448	木製品 墨書木礼	残存長11.0 幅　2.1 厚さ　0.3	上半部欠失。長方形。薄板。呪句墨書。	長方形の板材を削り出し、表面・裏面とも平滑に整える。柾目材。				
449	木製品 墨書木礼	残存長10.6 幅　2.5 厚さ　0.3	下半部欠失。長方形。薄板。わずかに墨痕を留める。	長方形の板財を削り出し、表面を平滑に整える。裏面は粗く削る。柾目材。				
450	木製品 柿経	残存長　9.3 幅　0.9 厚さ　0.1	下部欠失。頭部圭頭状。身部長方形。極薄。経文墨書。	長方形の板材をへぎ板状に削り出し、頭部を三角形に削り出す。柾目材。				
451	木製品 刀形	長さ28.8以上 幅　2.1 厚さ　2.0	柄部断面円形。身部は峰を幅広い山形とし、刃部は断面三角形とする。	棒状の材の樹皮を丁寧に削り出す。広葉樹使用。				折損著しい。
452	木製品 柄杓側板	残存長19.0 幅　6.5 厚さ　0.3	元来は円形と見られる。四角形の孔を１個穿つ。	長方形薄板の片面に切り目を施して折り曲げ、材の両端を重ね合わせて桜皮で結合。				破損著しい。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
453	木製品 側板	長さ 24.4 幅 2.1 厚さ 0.6	長方形。やや厚目。両端部に合い欠き部。	長方形板材を削り、表面を平滑に整えた後、黒漆を塗る。柾目材。				方形の折敷の側板か。
454	木製品 円板	長径 9.0 短径 7.9 厚さ 0.5	長円形。薄板。	柾目材の板材を削り出し、両面を丁寧に削り整えて、平滑に仕上げる。				柄杓の底板ないしは蓋か。
455	木製品 ハケ状工具	長さ 15.1 幅 12.8 厚さ 1.5	柄部と身部からなる。身部は方形で、先端部にあたる1辺尖る。柄部は身部の板材を長方形の板材2枚ではさむ。	身部と柄部の結合には桜皮を使用し、4箇所で綴じる。全体に丁寧な加工を施す。				用途不明。
456	木製品 串	残存長39.5 幅 2.1 厚さ 1.1	上部欠失。先端部尖る。釘孔1箇所。	棒状の材を四角に削り出し、先端部を荒く削って尖らせる。				用途不明。
457	木製品 蓋	長さ 29.0 幅 27.5 厚さ 0.3	1辺がやや長めの方形で、隅は丸みを持つ。中央部に2枚の板を綴じるための孔が3個あけられる。周囲に側板を固定するための孔があけられ、桜皮が付着する。	薄板2枚を中央部で綴じあわせる。柾目材。				
458	木製品 曲物底板	残存長21.0 残存幅 5.2 厚さ 0.8	円形の底板の破片。断面は台形状を呈する。	薄板を円形に削り出す。全体丁寧な加工を施す。柾目材。				
459	木製品 加工板	長さ 8.8 幅 3.1 厚さ 0.5	長方形。薄板。長辺の一辺に円弧状の削り欠きあり。	薄板を長方形に削り出し、両面を平滑に仕上げる。柾目材。				一部焦げる。用途不明。
460	木製品 下駄	長さ 19.0 残存幅 4.8 残存厚 1.4	約二分一欠損。連歯下駄。歯部は使用のため摩耗著しい。台部は隅を丸くする。鼻緒孔を3個穿つ。	腐食はなはだしく調整不明。鼻緒孔は斜めにあける。				破損・変形著しい。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
461	木製品 加工板	残存長16.5 幅 6.5 厚さ 0.5	長方形。薄板。短辺の一辺に合い欠き部。ほぼ中央部に釘孔1個穿つ。	薄板を長方形に削り出す。表面は平滑に仕上げ、裏面は粗く削る。両面に多数の切り目。				用途不明。
462	木製品 漆椀	口径 14.6 器高 5.8 高台径 6.9	体部内湾。高台部高いが内面の削りは浅い。	ロクロで挽き出す。内外面に黒漆を施し、外面に朱漆で文様を描く。				土圧による変形・破損著しい。
463	木製品 漆椀	口径 16.0 器高 8.7 高台径 8.0	体部大きく内湾。高台高い。体部外面にロクロによる成形痕を明瞭に留める。	ロクロで挽き出す。内外面に黒漆を施す。				土圧による変形・破損著しい。
464	矢	長さ 83.0 径 1.0	節間30～35cmの矢竹使用。雁股の鉄鏃装着。同装着部・矢羽固定部に巻糸の一部残る。	矢竹の節を丁寧に削り取る。筈部削り出し。鉄鏃・矢羽固定には細糸を巻き、漆で固めたと見られる。				土圧による折損・変形著しい。
465	鉄製品 鉄鏃	残存長16.8 最大幅 5.5 厚さ 0.6	茎部断面四角形。身部幅広で、先端部は鋭くする。	鍛造。身部全体を丁寧に研磨。				茎の一部欠損のほかは完存。
466	銅製品 蓋？	径 4.8 厚さ 0.1	円形の銅板の周縁部を折り曲げ、中央部に摘みを固定するためと見られる方形の孔を1個穿つ。	表面を丁寧に研磨。				筒型容器の蓋か。
467	銅製品 不明	径 3.6 厚さ 0.1	円形の銅板の中央部に長方形の孔を穿つ。本来は矩形に折り曲げて使用したと見られる。	折り曲げられた一方の面に放射状の線を刻む。				装飾金具か。
468	銅製品 銅銭	径 2.4	「永楽通宝」 初鋳年 明（1408年） 真書体。					
469	銅製品 銅銭	径 2.2	「元豊通宝」 初鋳年 宋（1078年） 行書体。					

表71　中島田－集石遺溝202（ＳＸ202）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
470	土師質　鍋	口径（29.8）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端部を上下に拡張し、平坦に仕上げる。	口縁部外面・体部外面ユビオサエ後粗いタテハケ目。口縁部内面・体部内面ヨコハケ目。	暗灰黄色	砂粒を多く含む。	良好	内外面煤付着。

表72　中島田－不明遺溝出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
471	土師質　椀	口径（11.8）	体部・口縁部内湾。口縁部やや肥厚し、端部を丸く仕上げる。体部外面上位に稜。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	外面浅黄橙色、内面黒色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
472	瓦器　椀	口径（13.5）	体部外方に大きく開き気味に立ち上がる。口縁部やや外半気味。端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ後部分的にナデ。同内面ナデ。	黒褐色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
473	瓦器　椀	口径（11.7） 器高　3.8	体部外方に大きく開き気味に立ち上がる。口縁部やや外反気味。端部は丸く仕上げる。無高台。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ後、部分的にナデ。同内面ナデ後、粗い暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。

表73　中島田－包含層出土遺物（土師質　杯）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
474	土師質　杯	口径　11.7 器高　3.3 底径　8.5	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面わずかに凹凸あり。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部と底部の境付近をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
475	土師質　杯	口径　11.0 器高　3.5 底径　8.5	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面中心部突起状に突出する。	底部回転糸切り後部分的にナデ。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
476	土師質　杯	口径　11.5 器高　3.6 底径　9.3	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖る。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部と底部の境界付近をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
477	土師質　杯	口径　11.8 器高　3.5 底径　9.0	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部と底部の境界付近をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
478	土師質　杯	口径　12.0 器高　3.0 底径　8.9	体部・口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。
479	土師質　杯	口径（11.5） 器高　3.0 底径　8.9	体部やや内湾。口縁部やや直線的。口縁端部は丸い。底部の器壁厚く、内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。底部周縁部をわずかにヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
480	土師質　杯	口径（11.7） 器高　3.0 底径（8.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。全体に器壁やや薄い。	底部回転糸切りか。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
481	土師質　杯	口径（10.7） 器高　3.5 底径（7.8）	体部・口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	口縁端部煤付着。
482	土師質　杯	口径（11.0） 器高　3.7 底径（9.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
483	土師質　杯	口径（12.2） 器高　3.4 底径（10.3）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部尖る。底部内面平滑。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。底部外面周縁部をヘラで削り取る。	黒褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
484	土師質　杯	口径（10.6） 器高　3.3 底径（7.6）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
485	土師質　杯	口径（12.0） 器高　3.7 底径　（9.9）	体部や内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部突出気味。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで削り取る。	淡褐色	精良	良好	
486	土師質　杯	口径（12.2） 器高　3.8 底径　7.5	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。底部内面凹凸顕著。底部やや突出。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部外面以外ロクロナデ。底部外面周縁部をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
487	土師質　杯	口径　11.0 器高　3.3 底径　9.0	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。底部外面周縁部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
488	土師質　杯	口径（12.2） 器高　3.8 底径　（9.0）	体部直線的。口縁部内湾。口縁端部は丸い。器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
489	土師質　杯	口径（11.9） 器高　3.7 底径（10.3）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。調整不明。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
490	土師質　杯	口径（10.9） 器高　3.5 底径　（7.6）	体部内湾。口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。器壁の歪顕著。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで大きく削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
491	土師質　杯	口径（12.3） 器高　3.7 底径　（9.0）	体部外方に開いた後内湾。口縁部直線的。口縁端部やや尖る。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。板目。底部外面ロクロナデ。内面全体ヘラナデか。体部外面下半部をヘラで大きく削り取る。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
492	土師質　杯	口径　12.1 器高　3.6 底径　9.7	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで削り取る。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
493	土師質　杯	口径　11.5 器高　3.3 底径　8.5	体部直線的。口縁部外反。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部と底部の境をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
494	土師質　杯	口径（12.3） 器高　3.3 底径　（9.4）	体部内湾。口縁部外反。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。底部周縁部をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
495	土師質　杯	口径（12.6） 器高　2.8 底径　8.0	体部・口縁部大きく外方に開く。口縁端部は丸い。体部・口縁部大きく歪む。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデか。体部と底部の境界付近をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
496	土師質　杯	口径（10.4） 器高　3.0 底径　（9.3）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
497	土師質　杯	口径（13.6） 器高　3.1 底径（11.0）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖る。	底部回転糸切りか。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
498	土師質　杯	口径（13.8） 器高　3.0 底径（10.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
499	土師質　杯	口径（12.1） 器高　3.3 底径（10.4）	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
500	土師質　杯	口径（13.5） 器高　3.4 底経緯(8.9)	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖り気味に仕上げる。全体に器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデにより、器面を平滑に仕上げる。	黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
501	土師質　杯	底径　7.0	体部直線的に斜め上方に開く。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
502	土師質　杯	底径　8.0	体部内湾。底部の器壁厚く、内面の周縁部大きく凹む。	底部回転糸切り後ナデ。底部内面周縁部強いロクロナデ。底部外面以外粗いロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
503	土師質　杯	底径　（8.8）	体部器壁薄く、内湾。底部の器壁厚く、やや突出。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで大きく削り取る。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
504	土師質　杯	底径　（7.8）	体部外反。底部内面平滑。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	黒褐色	精良	良好	
505	土師質　杯	底径（10.4）	体部内湾。底部内面凹凸顕著。体部と底部の境、明瞭な稜をなす。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下部をヘラで大きく削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
506	土師質　杯	底径（10.4）	底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
507	土師質　杯	底径　（9.4）	体部内湾。器壁やや薄い。やや粗製。	底部回転糸切り後ナデか。調整不明。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
508	土師質　杯	口径（10.8） 器高　3.0 底径　（8.0）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。粗製。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外粗いロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
509	土師質　杯	口径（11.8） 器高　3.6 底径　（6.8）	体部口縁部内湾。口縁端部やや尖る。体部下半部は丸みを持つ。	底部切り離し不明。体部外面ヘラケズリ後ロクロナテ。体部内面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
510	土師質　杯	口径（10.3） 器高　4.1 底径　（9.3）	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。体部と底部の境不明瞭。	底部回転糸切り後ナデか。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	法量不正確。
511	土師質　杯	口径（11.2） 器高　3.0 底径　（9.0）	体部内湾。口縁部外反。口縁端部は丸い。体部と底部の境付近丸みを持つ。	底部回転糸切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
512	土師質　杯	口径　11.1 器高　4.0 底径　7.5	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。底部突出。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部外面下半部をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	ほぼ完形。
513	土師質　杯	口径（11.8） 器高　3.5 底径（10.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
514	土師質　杯	口径　11.7 器高　3.5 底径　9.1	体部やや内湾。口縁部大きく外方に開く。口縁端部はやや尖る。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。体部と底部の境付近をヘラで削り取る。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。
515	土師質　杯	口径（13.7） 器高　3.8 底径（9.5）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。底部中央部の器壁厚い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
516	土師質　杯	口径（12.0） 器高　3.5 底径（8.2）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部の器壁を薄くし、尖らせる。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	法量不正確。
517	土師質　杯	口径（14.0） 器高　6.9 底径　10.0	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。大形。	底部回転糸切り。板目。底部外面以外ロクロナデ。体部外面をヘラで削り取る。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
518	土師質　杯	口径（11.6） 器高　3.3 底径（7.2）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖る。全体に器壁薄く、丁寧な作り。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	
519	土師質　杯	口径（12.0） 器高　3.1 底径（6.8）	体部直線的。口縁部大きく外反。口縁端部はやや尖る。器壁極めて薄く、全体に丁寧な製品。	底部回転糸切り後ナデ。底部内面ナデか。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
520	土師質　杯	口径（9.5） 器高　3.4 底径（4.7）	体部中位で外反対。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部切り離し不明。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
521	土師質　杯	口径（13.3） 器高　3.0 底径　（8.1）	体部・口縁部斜め上方にやや開き気味に立上がり、口縁端部を尖り気味に仕上げる。	底部切り離し不明。体部・口縁部内外面丁寧なロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
522	土師質　杯	口径（13.5）	体部・口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、先端部を丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
523	土師質　杯	口径（12.1） 器高　3.0 底径　（7.4）	体部内湾。口縁部やや外反。口部の器壁薄く、端部は尖る。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
524	土師質　杯	口径（13.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。外面に成形による稜。	体部・口縁部内外面丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	法量不正確。
525	土師質　杯	口径（13.9）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、先端部を丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	法量不正確。
526	土師質　杯	口径（12.4） 器高　3.0 底径　（8.2）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖る。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り後丁寧なナデ。板目。底部内面ナデ。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	
527	土師質　杯	口径（12.8）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
528	土師質　杯	口径（12.1） 器高　3.0 底径　8.2	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。底部内面やや凹凸あり。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	暗赤褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
529	土師質　杯	口径（12.7） 器高　2.7 底径　（5.7）	体部・口縁部直線的に斜め上方に開く。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	暗茶褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
530	土師質　杯	口径（12.6）	体部・口縁部直線的に斜め上方に開く。口縁端部やや尖る。内面に成形による稜。	体部・口縁部内外面丁寧なロクロナデ。	にぶい黄橙色	精良	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
531	土師質　杯	口径（11.8） 器高　3.1 底径　（7.3）	体部直線的。口縁部内湾。口縁端部は丸い。底部やや突出。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
532	土師質　杯	口径（10.3）	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
533	土師質　杯	口径（12.3）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。外面に成形による稜。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡黄色	精良	良好	
534	土師質　杯	口径（11.2）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖る。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
535	土師質　杯	口径（11.4）	体部・口縁部ほぼ直線的。口縁端部は平坦に近い。外面に成形による稜。	体部・口縁部内外面丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	
536	土師質　杯	口径（12.0） 器高　2.6 底径　（7.6）	体部・口縁部直線的で、斜め上方に開く。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
537	土師質　杯	口径（10.7） 器高　2.2 底径　（6.6）	体部・口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
538	土師質　杯	口径（10.4） 器高　2.5 底径　（6.1）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部やや尖る。	底部回転ヘラ切りか。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	法量不正確。
539	土師質　杯	口径　13.2 器高　4.0 底径　8.5	体部・口縁部内湾。口縁端部は尖る。体部外面凹凸顕著。底部丸底状。	底部切り離し不明。底部外面ナデ、内面ナデか。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
540	土師質　杯	口径（13.2）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。内外面凹凸顕著。	底部切り離し不明。底部外面以外ロクロナデ。	茶褐色	精良	良好	
541	土師質　杯	口径　（7.7） 器高　2.9 底径　（4.5）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切り。板目。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

表74　中島田－包含層出土遺物（土師質　皿）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
542	土師質　皿	口径　7.8 器高　1.5 底径　6.5	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。底部内面中央部突起状に盛り上がる。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
543	土師質　皿	口径　7.4 器高　1.5 底径　5.8	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
544	土師質　皿	口径　7.5 器高　1.4 底径　6.0	口縁部短く、やや内湾。口縁端部は尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
545	土師質　皿	口径　(6.6) 器高　1.5 底径　(4.6)	口縁部直線的にやや外方にのびる。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
546	土師質　皿	口径　(7.0) 器高　1.2 底径　(6.0)	口縁部直立気味で、端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
547	土師質　皿	口径　(7.3) 器高　1.3 底径　(5.5)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
548	土師質　皿	口径　(7.3) 器高　1.3 底径　(5.8)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
549	土師質　皿	口径　(6.0) 器高　1.2 底径　(5.5)	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
550	土師質　皿	口径　(6.7) 器高　1.9 底径　(5.6)	口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
551	土師質 皿	口径 (6.6) 器高 1.4 底径 (5.4)	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
552	土師質 皿	口径 (7.2) 器高 1.0 底径 (6.4)	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
553	土師質 皿	口径 (6.7) 器高 1.5 底径 (5.5)	口縁部やや外反気味。口縁端部は丸い。底部の器壁厚い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
554	土師質 皿	口径 (7.0) 器高 1.3 底径 (6.1)	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
555	土師質 皿	口径 (6.7) 器高 1.5 底径 (5.2)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
556	土師質 皿	口径 (7.4) 器高 1.4 底径 (6.0)	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
557	土師質 皿	口径 (7.2) 器高 1.3 底径 (5.3)	口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
558	土師質 皿	口径 (6.8) 器高 1.4 底径 (5.8)	口縁部短く、直線的。口縁端部は丸い。全体的に器壁厚い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
559	土師質 皿	口径 7.3 器高 1.6 底径 5.8	口縁部外反。口縁端部は丸い。全体に器壁厚く、歪顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。口縁部外面下半部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
560	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.2 底径 (6.1)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
561	土師質 皿	口径 (7.2) 器高 1.1 底径 (6.7)	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
562	土師質 皿	口径 (7.3) 器高 1.4 底径 (6.4)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
563	土師質 皿	口径 (7.6) 器高 1.4 底径 (6.7)	口縁部断面三角形で短く、直立気味。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
564	土師質 皿	口径 (7.6) 器高 1.2 底径 6.3	口縁部短く、やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
565	土師質 皿	口径 7.8 器高 1.3 底径 6.2	口縁部内湾。口縁端部は丸い。底部穿孔。	底部回転糸切り．底部外面以外ロクロナデ。底部と口縁部外面の境をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
566	土師質 皿	口径 (7.7) 器高 1.5 底径 (5.8)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
567	土師質 皿	口径 (7.3) 器高 1.2 底径 (6.8)	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
568	土師質 皿	口径 (7.7) 器高 1.0 底径 (6.4)	口縁部短く、直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
569	土師質 皿	口径 (7.9) 器高 1.5 底径 (6.4)	口縁部短く、やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
570	土師質 皿	口径 7.6 器高 1.3 底径 6.4	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
571	土師質 皿	口径 7.6 器高 1.8 底径 6.4	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。全体に器壁厚い。	底部回転糸切り後部分的にナデ。底部内面ナデ。口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。
572	土師質 皿	口径 (7.6) 器高 1.3 底径 (6.7)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
573	土師質 皿	口径 (8.1) 器高 1.4 底径 (7.0)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	茶褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
574	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.6 底径 6.7	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	やや不良	
575	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.9 底径 (6.8)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
576	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.5 底径 (6.0)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
577	土師質 皿	口径 8.0 器高 1.4 底径 6.5	口縁部短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。口縁部外面下半分をヘラで削り取るか。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
578	土師質 皿	口径 (8.0) 器高 1.3 底径 (7.1)	口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
579	土師質 皿	口径 (7.9) 器高 1.5 底径 (6.0)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
580	土師質 皿	口径 (7.9) 器高 1.4 底径 (6.6)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部内面凹顕著。全体に器壁厚い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
581	土師質 皿	口径 (8.0) 器高 1.2 底径 (6.5)	口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
582	土師質 皿	口径 (8.0) 器高 1.6 底径 6.5	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
583	土師質 皿	口径 (8.0) 器高 1.4 底径 (6.6)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
584	土師質 皿	口径 (7.6) 器高 1.7 底径 (6.1)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。底部外面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
585	土師質 皿	口径 (8.2) 器高 1.4 底径 (6.2)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
586	土師質 皿	口径 8.0 器高 1.5 底径 6.2	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
587	土師質　皿	口径　(8.0) 器高　1.7 底径　6.4	口縁部やや内湾。口縁端部やや尖る。	底部回転糸切り後部分的にナデ。底部外面以外ロクロナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
588	土師質　皿	口径　(8.1) 器高　1.0 底径　(7.8)	口縁部短く、直立気味。口縁端部は丸い。底部の器壁薄い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	茶褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
589	土師質　皿	口径　7.8 器高　1.3 底径　6.2	口縁部短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。底部穿孔。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
590	土師質　皿	口径　(8.0) 器高　1.5 底径　(7.0)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
591	土師質　皿	口径　(7.8) 器高　1.7 底径　(6.1)	口縁部短く、内湾。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
592	土師質　皿	口径　(8.4) 器高　1.1 底径　(7.2)	口縁部断面三角形で短く直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
593	土師質　皿	口径　(8.1) 器高　1.3 底径　(6.9)	口縁部断面三角形で短く、やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
594	土師質　皿	口径　(8.4) 器高　1.4 底径　(6.2)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
595	土師質　皿	口径　(8.2) 器高　1.4 底径　(6.9)	口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
596	土師質　皿	口径　(8.5) 器高　1.4 底径　(6.9)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
597	土師質　皿	口径　(8.3) 器高　1.5 底径　(6.2)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
598	土師質　皿	口径　(8.4) 器高　1.3 底径　(6.7)	口縁部内湾。口縁端部は尖る。口縁部の器壁薄い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
599	土師質　皿	口径　(8.4) 器高　1.5 底径　(6.9)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
600	土師質　皿	口径　(8.8) 器高　1.5 底径　(6.8)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
601	土師質　皿	口径　8.6 器高　2.0 底径　(5.8)	口縁部短く、外反。口縁端部はやや尖る。器形の歪顕著。	底部回転糸切り後部分的にナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	ほぼ完形。
602	土師質　皿	口径　(8.6) 器高　2.0 底径　(7.1)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
603	土師質　皿	口径　(8.4) 器高　1.7 底径　(6.0)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
604	土師質　皿	口径　(8.7) 器高　1.2 底径　(7.5)	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部は尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
605	土師質 皿	口径 (8.6) 器高 1.0 底径 (7.6)	口縁部短く、やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	茶褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
606	土師質 皿	口径 (8.7) 器高 1.4 底径 (7.4)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデか。底部外面以外ロクロナデ。	褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
607	土師質 皿	口径 (8.6) 器高 1.7 底径 (7.7)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
608	土師質 皿	口径 (8.8) 器高 1.5 底径 (7.0)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
609	土師質 皿	口径 (9.0) 器高 1.4 底径 (6.9)	口縁部やや内湾。口縁端部やや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
610	土師質 皿	口径 (9.8) 器高 1.6 底径 (8.6)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。やや大形。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
611	土師質 皿	口径 (9.3) 器高 1.5 底径 (8.1)	口縁部内湾。口縁端部は丸い。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	茶褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
612	土師質 皿	口径 (10.0) 器高 1.4 底径 8.7	口縁部断面三角形で短く、直立気味。口縁端部は尖る。やや大形で、全体に丁寧な作り。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡黄褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
613	土師質 皿	口径 (8.7) 器高 1.5 底径 (6.9)	口縁部断面三角形で短く、直線的。口縁端部はやや尖る。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
614	土師質 皿	口径 (9.8) 器高 1.5 底径 (8.4)	口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。やや大形。	底部回転糸切り後粗いナデ。底部外面以外ロクロナデ。口縁部外面下半部をヘラで削り取る。	褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
615	土師質 皿	口径 (9.8) 器高 1.6 底径 7.9	口縁部内湾。口縁端部は丸い。やや大形。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロデデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
616	土師質 皿	口径 (9.8) 器高 1.4 底径 (8.4)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。やや大形。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
617	土師質 皿	口径 (9.9) 器高 1.2 底径 (8.6)	口縁部直線的に斜め上方にのびる。口縁端部は丸い。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
618	土師質 皿	口径 (9.9) 器高 1.5 底径 (7.9)	口縁部短く、やや外反気味。口縁部は丸い。器形やや歪む。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色。	微砂粒を少量含む。	やや不良	法量不正確。
619	土師質 皿	口径 (8.3) 器高 1.1 底径 (4.4)	口縁部外方に開いた後、内湾。口縁端部は尖る。底部やや丸底状。	底部切り離し不明。底部外面ユビオサエ後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	
620	土師質 皿	口径 (7.6) 器高 1.7 底径 (5.5)	口縁部大きく外反。口縁端部肥厚し、外面以外ロクロナデ。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
621	土師質 皿	口径 7.5 器高 1.3 底径 5.4	口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、丸い。底部の中心部の器壁厚い。	底部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面中央部ナデ。周縁部ロクロナデ。口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
622	土師質 皿	口径 7.0 器高 1.3 底径 5.1	口縁部大きく外反。口縁端部わずかに肥厚し、やや尖る。底部中央部の器壁厚い。	底部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面ナデ。口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
623	土師質　皿	口径　（7.0） 器高　1.5 底径　（4.0）	口縁部大きく外反。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切りか。口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	口縁部内外面に煤付着。
624	土師質　皿	口径　（7.4） 器高　1.4 底径　（5.2）	口縁部直線的で短い。口縁端部はわずかに肥厚し、先端部を丸く仕上げる。	底部回転ヘラ切り。口縁部内外面ロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	口縁部内外面に煤付着。
625	土師質　皿	口径　（7.0） 器高　1.3 底径　（4.5）	口縁部外反。口縁端部肥厚し、やや尖る。	底部回転ヘラ切り後ナデ。底部内面中央部ナデ。口縁部内外面、底部内面周縁部ロクロナデ。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
626	土師質　皿	口径　（7.4） 器高　1.2 底径　（5.4）	口縁部外反。口縁端部肥厚し、やや尖る。全体に丁寧な作り。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	
627	土師質　皿	口径　（7.8） 器高　1.2 底径　（5.4）	口縁部外反。口縁端部は丸い。全体に丁寧な作り。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤橙色	精良	良好	
628	土師質　皿	口径　（7.8） 器高　1.3 底径　（6.3）	口縁部外反。口縁端部肥厚し、丸い。口縁端部はやや尖る。	底部回転ヘラ切り後ナデ。口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
629	土師質　皿	口径　（7.6） 器高　2.0 底径　6.1	口縁部外反。口縁端部肥厚し、丸い。底部外面凹凸顕著。	底部切り離し不明。底部外面ユビオサエないしは粗いナデ。口縁部内外面ロクロデデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
630	土師質　皿	口径　（7.8） 器高　1.1 底径　5.2	口縁部外反。口縁部わずかに肥厚し、先端部を丸く仕上げる。	底部回転ヘラ切りか。底部外面以外ロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	
631	土師質　皿	口径　（7.1） 器高　1.3 底径　（5.2）	口縁部外反し、端部をわずかに尖らせる。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	黄褐色	精良	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
632	土師質 皿	口径 8.8 器高 1.5 底径 7.4	口縁部外方に開いた後、やや内湾。口縁端部は丸い。底部丸底状。	底部回転ヘラ切り後ナデ。板目。底部内面中央部一方向のナデ。口縁部内外面、底部内面周縁部ロクロナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。底部内面煤付着。
633	土師質 皿	口径 (9.3) 器高 1.5 底径 7.4	口縁部直線的に外方に開く。口縁端部は丸い。	底部回転ヘラ切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
634	土師質 皿	口径 (8.3) 器高 1.1 底径 (6.3)	口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、丸い。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡灰褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
635	土師質 皿	口径 (7.6) 器高 1.4 底径 (5.8)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。器面平滑。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	浅黄橙色	精良	良好	
636	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.3 底径 (6.2)	口縁部外反。口縁端部やや肥厚し、丸い。底部はやや丸底状。	底部切り離し不明。底部外面ユビオサエ後ナデか。底部外面以外ロクロナデ。	淡黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
637	土師質 高台付皿	底径 5.2	高台の器壁極めて厚く、底部中央部をやや凹ませる。器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り後粗いナデ。底部外面以外粗いロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
638	土師質 高台付皿	底径 4.8	底部高台状に突出。全体に丁寧な作り。	底部回転糸切り後丁寧なナデ。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	灰白色	精良	良好	
639	土師質 高台付皿	底径 5.1	底部の器壁極めて厚い。全体に器面の凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。底部外面周縁部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
640	土師質 高台付皿	底径 4.7	底部の器壁厚く、中央部大きく凹む。	底部回転糸切り。底部外面以外粗いロクロナデ。底部外面周縁部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
641	土師質 高台付皿	底径　6.0	底部の器壁厚く、中央部やや凹む。	底部回転糸切り後粗いナデ。底部外面周縁部をヘラで削り取る。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
642	土師質 高台付皿	底径　7.2	底部高台状に突出。器面平滑。全体に丁寧な作り。	底部回転ヘラ切りか。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	淡黄褐色	精良	良好	杯の可能性あり。
643	土師質 高台付皿	口径　12.6 器高　4.0 底径　8.9	口縁部内湾。口縁端部は尖る。底部の器壁厚く、突出。全体に器壁の凹凸顕著。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	淡褐色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
644	土師質 高台付皿？	底径　3.6	底部高台状で、底部の器壁極めて厚い。底部中央部大きく凹む。中央部に穿孔。	底部ヘラ切りか。板目。全体に丁寧なロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	
645	土師質 高台付皿？	底径　2.5	底部（？）内面中央部大きく凹む。器面平滑。	手づくねによる成形か。全体に丁寧なナデ。	淡赤褐色	精良	良好	

表75　中島田－包含層出土遺物（土師質　椀）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
646	土師質　椀	口径（11.3） 器高　2.7 底径　（4.8）	体部大きく外方に開いた後、内湾。口縁部やや内湾。体部外面凹凸顕著。無高台。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
647	土師質　椀	口径（12.0） 器高　2.9 底径　（5.6）	体部・口縁部内湾。口縁端部やや肥厚。無高台。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面丁寧なナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
648	土師質　椀	口径（11.8）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁部やや肥厚し、端部は丸い。無高台。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ及び一部ヘラミガキ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	不良	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
649	土師質　椀	口径　(9.8) 器高　3.2 高台径 3.7	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。高台畳付け部変形し、低い。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部未調整。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
650	土師質　椀	口径　10.3 器高　3.3 高台径 4.0	体部・口縁部やや内湾。口縁端部わずかに肥厚。高台断面三角形で、低い。	口縁部・体部外面上部強いヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
651	土師質　椀	口径（10.4） 器高　3.0 高台径 3.9	体部上位で大きく屈曲。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。高台幅広で低い。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	不良	底部外面煤付着。
652	土師質　椀	口径　11.2 器高　3.7 高台径 4.5	体部・口縁部内湾。口縁端部やや肥厚。高台低く、やや変形。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	やや不良	底部外面煤付着。
653	土師質　椀	口径　10.7 器高　3.8 高台径 4.4	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部肥厚。高台断面逆台形状で、やや外方に踏ん張る。	口縁部・体部外面上部強いヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	完形。
654	土師質　椀	口径　11.3 器高　3.0 高台径 4.0	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部やや肥厚。高台断面逆台形状で、低い。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。
655	土師質　椀	口径（11.3） 器高　3.5 高台径4.0	体部中位で屈曲。口縁部直線的。口縁端部は丸い。高台断面三角形で、小さい。	口縁部・体部外面上部強いヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
656	土師質　椀	口径（11.5） 器高　3.7 高台径 4.4	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。高台断面三角形で、やや粗雑な作り。	外面剝落のため調整不明。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
657	土師質　椀	口径　11.0 器高　3.4 高台径 4.3	体部中位で屈曲。口縁部直線的。口縁端部は丸い。高台断面三角形で、小さい。	口縁部・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰褐色	微砂粒を多く含む。	不良	二次加熱を受けるか。
658	土師質　椀	口径（11.4） 器高　3.1 高台径 4.8	体部・口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。高台幅広で、低い。	口縁部・体部外面上部強いヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
659	土師質　椀	口径（11.0） 器高　4.7 高台径(4.4)	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。高台変形。器高高い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
660	土師質　椀	口径（11.8） 器高　3.1 高台径(5.4)	体部直線的。口縁部内湾。口縁端部は丸い。高台断面逆台形状で、低い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	暗褐色 高台付近黒色。	微砂粒を多く含む。	不良	
661	土師質　椀	高台径 4.4	体部内湾。高台断面方形で、やや低く、外方に踏ん張る。	体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 部分的に灰褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
662	土師質　椀	口径（12.7） 器高　4.6 高台径 4.8	体部・口縁部内湾。口縁端部やや肥厚。高台断面逆台形状で、低い。	口縁部・体部外面上部強いヨコナデ。体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
663	土師質　椀	高台径 5.4	体部内湾。口縁部やや外反。高台断面逆台形状。	体部外面上部強いヨコナデ。体部外面下部ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
664	土師質　椀	口径（13.0） 器高　3.5 高台径(5.6)	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。高台断面三角形で、低い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
665	土師質　椀	口径（10.2）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。体部外面上位に弱い稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。内面丁寧なナデ。	褐灰色	微砂粒を多く含む。	不良	
666	土師質　椀	口径（10.7）	体部・口縁部内湾。口縁部の器壁薄く、端部はやや尖る。体部外面上位に弱い稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
667	土師質　椀	口径（10.6）	体部内湾。口縁部やや肥満厚し、わずかに外反。口縁端部は丸い。体部外面上位に弱い稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
668	土師質　椀	口径（11.1）	体部・口縁部大きく内湾。口縁端部は丸い。体部外面上位に弱い稜。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。内面丁寧なナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
669	土師質　椀	口径（10.4）	体部中位で大きく屈曲。口縁部肥厚し、やや外反。口縁端部やや尖る。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
670	土師質　椀	口径（11.2）	体部外方に開いた後、内湾。口縁部やや外反。口縁部の器壁薄く、端部は丸い。体部の器壁はやや厚い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面丁寧なナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
671	土師質　椀	口径（12.0）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
672	土師質　椀	口径（11.6）	体部中位で大きく屈曲。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	不良	
673	土師質　椀	口径（12.2）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。稜なし。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
674	土師質　椀	口径（12.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。体部内面ナデ。	外面黒色 内面橙色	微砂粒を多く含む。	不良	二次加熱を受けるか。
675	土師質　椀	口径（12.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。体部内面ナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	良好	
676	土師質　椀	口径（12.6）	体部外方に開いた後ゆるやかに内湾。口縁部やや肥厚し、わずかに外反。端部は丸い。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	良好	
677	土師質　椀	口径（12.7）	体部やや内湾。口縁部やや外反気味。口縁部わずかに肥厚し、端部は丸く仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
678	土師質　椀	口径（13.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁部わずかに肥厚し、端部はやや尖る。口縁部の器壁薄い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
679	土師質　椀	高台径 4.2	高台変形著しく、粗雑な作り。	内面丁寧なナデ。底部外面未調整。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
680	土師質　椀	高台径 4.2	高台断面三角形で、粗雑な作り。	体部・底部外面ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
681	土師質　椀	高台径 4.0	高台断面三角形で、低い。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
682	土師質　椀	高台径 3.7	高台断面三角形で、低い。	内面丁寧なナデ。底部外面未調整。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	
683	土師質　椀	高台径 4.8	高台断面三角形で、低い。	内面丁寧なナデ。底部外面ユビオサエ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
684	土師質　椀	高台径 4.6	高台断面逆台形状で、低い。	内面丁寧なナデ。底部外面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を多く含む。	不良	
685	土師質　椀	高台径 4.0	高台断面三角形で、低い。	体部外面下部粗いナデ。内面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
686	土師質　椀	高台径 4.4	高台幅広で、極めて低い。	内面丁寧なナデ。底部外面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
687	土師質　椀	高台径 4.8	高台断面逆台形状で、低く、やや外方に踏ん張る。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
688	土師質　椀	高台径 4.9	高台断面方形で、安定的。	体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	内面褐色 外面暗灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	
689	土師質　椀	高台径 4.3	高台断面三角形で、低い。	内面丁寧なナデ。底部外面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
690	土師質　椀	高台径 4.0	高台断面三角形で、低く、幅広い。	体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
691	土師質　椀	高台径 4.9	高台断面三角形で、低い。	体部外面未調整か。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色.	微砂粒を多く含む。	良好	
692	土師質　椀	高台径 5.0	高台断面三角形で、やや大きい。	内面丁寧なナデ。底部外面未調整。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	底部内面に重ね焼痕。

番号	器　種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
693	土師質　椀	高台径 4.7	高台断面逆台形状。	体部外面下部粗いナデ。底部外面板目。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
694	土師質　椀	高台径 4.6	体部やや内湾。高台低く、やや歪む。	体部外面下部ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
695	土師質　椀	高台径 3.9	体部外方に開く。高台断面三角形で、低い。	体部外面下部ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
696	土師質　椀	高台径 4.6	体部やや内湾。高台断面逆台形状で、しっかりしている。	体部外面下部ナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	
697	土師質　椀	高台径 4.7	体部やや内湾。高台断面三角形。	体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
698	土師質　椀	高台径 5.4	体部内湾。高台断面逆台形状で、低い。やや大形か。	体部外面下部粗いナデ。内面ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

表76　中島田－包含層出土遺物（土師質　鍋・羽釜・すり鉢）観察表

番号	器　種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
699	土師質　鍋	口径（26.4）	口縁部・体部やや内湾。口縁端部やや拡張。端面は平坦。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。同内面ナデ。	茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
700	土師質　鍋	口径（26.9）	口縁部内湾。口縁端部を拡張し、先端部を尖らせる。端面はわずかに凹面となる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	灰白色 外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
701	土師質　鍋	口径（24.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、端面は凹面に仕上げる。	口縁部・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	暗褐色 外面黒色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着顕著。
702	土師質　鍋	口径（25.7）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、端面は凹面に仕上げる。	口縁部・端面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着顕著。
703	土師質　鍋	口径（29.4）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、端面は凹面に仕上げる。	口縁部外面・端面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	にぶい褐色・外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着顕著。
704	土師質　鍋	口径（19.5）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、端面は凹面に仕上げる。	口縁部外面・端面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	にぶい褐色・外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着顕著。
705	土師質　鍋	口径（21.4）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部大きく拡張し、端面を凹面に仕上げる。拡張した上方の端部を丸く仕上げ、下方を鍔状にめぐらせる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	不良	鍔より下に煤付着。
706	土師質　鍋	口径（23.3）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	灰白色 外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	体部外面煤付着。
707	土師質　鍋	口径（27.6）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端面は平坦。	口縁部内面・体部内面斜め方向のハケ目。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
708	土師質　鍋	口径（27.3）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端面は平坦。	口縁部内面斜め方向のハケ目。同外面ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目。同外面ユビオサエ後、粗いハケ目。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
709	土師質　鍋	口径（28.1）	「く」の字状口縁。口縁部やや肥厚。口縁端面はわずかに丸みを持つ。	口縁部内面細かいヨコハケ目。口縁部外面・体部外面ユビオサエ後、細かいタテハケ目。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面全体に煤付着。
710	土師質　鍋	口径（30.0）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁部肥厚し、端面は平坦に仕上げる。	口縁部内面・体部内面ヨコナデ。内縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後、部分的にタテハケ目。	黄褐色 外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
711	土師質　鍋	口径（30.9）	「く」の字状口縁。口縁部わずかに肥厚し、端面は平坦に仕上げる。	口縁部内面斜め方向の細かいハケ目。体部外面ユビオサエ後、粗いタテハケ目。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	内外面煤付着。
712	土師質　鍋	口径（31.1）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端面は平坦。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目。同外面ユビオサエ後、部分的にタテハケ目。	茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
713	土師質　鍋	口径（32.0）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端部は尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面タテハケ目。同内面ヨコハケ目。	黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
714	土師質　鍋	口径（32.4）	「く」の字状口縁。口縁部肥厚し、端面は平坦に仕上げる。	口縁部内面ヨコナデ。口縁端面に刻み目状のハケ目。口縁部外面ユビオサエ。体部外面斜め方向のハケ目か。	橙色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
715	土師質　鍋	口径（32.6）	「く」の字状口縁。口縁部肥厚し、端面を平坦に仕上げる。	口縁部内面・体部内外面上部細かいハケ目。口縁部外面・体部外面上部ユビオサエ後、細かい斜め方向のハケ目。	橙色	砂粒を多く含む。	良好	
716	土師質　鍋	口径（33.6）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁部肥厚し、端面を丸く仕上げる。	口縁部内面斜め方向のハケ目。同外面ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目。同外面ユビオサエ後、細かいハケ目。	黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	体部外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
717	土師質　鍋	口径（34.3）	体部内湾。口縁部屈曲した後内湾。口縁端面は平坦。	口縁部・体部とも内面ナデ。口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	黒褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	内外面煤付着。
718	土師質　鍋	口径（32.1）	「く」の字状口縁。口縁部やや内湾し、端面は平坦。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面丁寧なナデ。同外面ユビオサエ後粗いナデ。	黄褐色 外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
719	土師質　鍋	口径（24.7）	口縁部大きく外反した後内湾。口縁端部肥厚し、端面を平坦に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。	赤褐色 外面黒色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
720	土師質　羽釜	口径（24.5）	口縁部直立。端部肥厚し、端面は平坦に仕上げる。断面三角形の短い鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。同内面斜め方向の細かいハケ目。鍔貼り付け。	にぶい褐色、外面暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
721	土師質　羽釜	口径（22.5）	直立する短い口縁部に断面三角形の短い鍔が水平に付く。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いタテハケ目。同内面細かいヨコハケ目。鍔貼り付け。貼り付け部に棒状工具による圧痕あり。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
722	土師質　羽釜	口径（32.2）	体部・口縁部直立気味。断面方形の短い鍔が水平に付く。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。鍔貼り付け。貼り付け部に棒状工具の圧痕あり。	灰褐色	砂粒を多く含む。	不良	鍔部煤付着。
723	土師質　羽釜	口径（17.8）	口縁部内湾。断面三角形の短い鍔がやや上方向に付く。口縁端部はやや丸く仕上げる。	口縁部内外面丁寧なヨコナデ。鍔部分ヨコナデ。体部内面ナデか。鍔貼り付け。	灰白色	砂粒を多く含む。	不良	
724	土師質　羽釜	口径（21.8）	体部・口縁部内湾。断面方形の短い鍔が水平に付く。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面・鍔上面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。同内面ナデ。鍔下部に棒状工具による圧痕あり。	灰黄色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
725	土師質　鍋	口径（17.7）	口縁部内湾。端部は丸みを持つ。断面三角形の突起状の鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。	灰白色	砂粒を多く含む。	良好	
726	土師質　鍋	口径（25.6）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、端面を丸く仕上げる。断面台形状の短い鍔が水平に付く。	口縁部外面・鍔部ヨコナデ。口縁部内面斜め方向のハケ後部分的にヨコナデ。体部外面粗い平行叩き。同内面ヨコハケ目。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	
727	土師質　鍋	口径（26.0）	外反気味の口縁部に、断面三角形の短い鍔が付く。口縁部外面に浅い沈線を1条めぐらせる。口縁端部は丸い。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目。鍔引き出し。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
728	土師質　羽釜	口径（24.3）	ほぼ直立気味の口縁部に断面方形の短い鍔が水平に付く。口縁端部肥厚し、端面は丸みを持つ。	口縁部内外面強いヨコナデ。鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエか。同内面ナデ。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	鍔下部煤付着。
729	土師質　鍋	口径（26.4）	体部内湾。「く」の字状口縁。口縁端部を上下に拡張し、端面を丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエ後粗いナデ。	黒褐色	砂粒を多く含む。	良好	
730	土師質　鍋	底径（17.1）	底部平底。体部ほぼ直立気味に上方に立ち上がる。内外面凹顕著。	摩耗著しく調整不詳。	暗褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	体部外面煤付着。
731	土師質　羽釜	口径（18.6）	体部・口縁部大きく内湾。断面方形の短い鍔が水平に付く。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ユビオサエ後ヨコナデ。鍔は体部上端部を折り曲げて作り、後で口縁部を貼り付ける。鍔部ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面ナデ。	灰褐色 内面淡黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	
732	土師質　羽釜	口径（23.5）	体部やや内湾。口縁部直立。端面は平坦。断面台形状の短い鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面粗いナデ。同内面ナデ。鍔貼り付け。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
733	土師質　羽釜	口径（19.4）	直立する短い口縁部に断面方形の鍔が水平に付く。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面。鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後タテハケ目。同内面ヨコハケ目、一部ユビオサエ。鍔貼り付け。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	不良	外面煤付着。
734	土師質　羽釜	口径（20.7）	直立気味の口縁部に部厚い鍔が水平に付く。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内面ユビオサエ後ヨコナデ。鍔先端部下部の粘土を削り取り、段を付ける。体部外面ユビオサエ。同内面丁寧なナデ。鍔貼り付け。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	
735	土師質　羽釜	口径（23.5）	体部・口縁部直立。端面は弱い凹面となる。断面方形のしっかりした鍔が付く。	口縁部・鍔部ヨコナデ。体部内外面ナデ。鍔貼り付け。	灰白色	砂粒を多く含む。	良好	
736	土師質　羽釜	口径（17.1）	体部・口縁部内湾。口縁部拡張。拡張した下方を鍔状にめぐらせる。脚が付くか。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	淡黄灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	鍋の可能性あり。
737	土師質　羽釜	口径（18.6）	体部・口縁部大きく内湾。断面方形の短い鍔がやや上向きに付く。口縁端面は平坦に仕上げる。	口縁部内外面・鍔上面ヨコナデ。鍔下面・体部内面ナデ。同外面ユビオサエ。鍔貼り付け。脚付き。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	不良	
738	土師質　すり鉢	口径（31.8）	体部・口縁部直線的。口縁端部やや拡張。内面に5条以上の櫛描条線。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	淡褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	

表77　中島田－包含層出土遺物（土師質　脚部）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
739	土師質　脚部	長さ　16.1 径　2.7	断面ほぼ円形。基部大きく屈曲。身部直線的。先端部は丸く納める。	全体にユビオサエ。外側面にヘラケズリを施す。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
740	土師質　脚部	残存長16.1 径　3.2	断面ほぼ円形。基部大きく屈曲。身部直線的。	全体にユビオサエ。外側面にヘラケズリを施す。	にぶい橙色	砂粒を多く含む。	不良	
741	土師質　脚部	残存長 9.5 径　2.5	断面不整円形。基部大きく屈曲。	全体にヘラケズリ後、縦方向のナデを施す。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	煤付着。
742	土師質　脚部	残存長 8.5 長径　3.5	断面長円形。基部屈曲。身部直線的。	全体にユビオサエ後、ヘラケズリ及び縦方向のナデを施す。	にぶい黄褐色	砂粒を多く含む。	良好	
743	土師質　脚部	残存長13.5 径　2.1	断面ほぼ円形。基部大きく屈曲。身部直線的。	全体にヘラケズリ後ナデを施す。	明褐色	砂粒を多く含む。	良好。	
744	土師質　脚部	残存長10.0 径　3.2	断面円形。基部わずかに屈曲。身部直線的。	全体にヘラケズリ後、縦方向の粗いナデを施す。	灰黄色	砂粒を多く含む。	不良	
745	土師質　脚部	残存長 8.3 径　2.5	断面ほぼ円形。基部屈曲。身部直線的。	全体にユビオサエ後、ヘラケズリ、さらにナデを施す。	灰褐色	砂粒を多く含む。	不良	
746	土師質　脚部	長さ　21.5 径　3.0	断面ほぼ円形。基部わずかに屈曲。身部直線的。先端部わずかに外方に折り曲げた後、丸く収める。	全体にヘラケズリ後、丁寧な縦方向のナデを施す。	灰色	砂粒を多く含む。	不良	
747	土師質　脚部	残存長13.0 長径　3.1	断面長円形。基部大きく屈曲。身部直線的。	全体にユビオサエ後ヘラケズリを施す。	にぶい赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	部分的に煤付着。
748	土師質　脚部	残存長10.0 長径　4.0	断面長円形。基部大きく屈曲。	全体にユビオサエ後ヘラケズリを施す。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	良好	煤付着。
749	土師質　脚部	残存長 8.0 径　2.1	断面円形。基部屈曲。身部直線的。	全体にヘラケズリ後、縦方向のナデを施す。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	良好	

表78　中島田－遺溝に伴わない出土遺物（瓦器　椀・皿）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
750	瓦器　椀	口径（11.7） 器高　2.7	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁部わずかに肥厚し、丸い。無高台で、底部丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ。体部内面・見込部、簡略化された渦巻状の暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
751	瓦器　椀	口径（12.0） 器高　3.2	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、丸い。無高台で、底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面幅広の渦巻状の暗文を施す。底部外面ユビオサエ。同内面一方向のナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
752	瓦器　椀	口径　10.7 器高　2.7	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。無高台で、底部丸底。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面ナデ後、きわめて簡略な暗文を施す。炭素未吸着。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
753	瓦器　椀	口径　11.0 器高　2.7	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。無高台で、底部丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面ヘラミガキか。暗文不明瞭。	明灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
754	瓦器　椀	口径（12.0）	体部やや内湾。口縁部直線的でやや肥厚。口縁端部はやや尖る。無高台。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面ナデ後粗雑な暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
755	瓦器　椀	口径（10.0） 器高　2.5	体部・口縁部やや内湾。口縁部わずかに肥厚し、端部は丸い。無高台で、底部は平底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部・底部外面ユビオサエ後ナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	和泉型。
756	瓦器　椀	口径　10.8 器高　2.7	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。無高台で、底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。暗文なし。粘土紐巻き上げ痕が認められる。炭素未吸着。	明灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
757	瓦器　椀	口径（12.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。無高台か。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後幅広の粗雑な暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
758	瓦器　椀	口径（11.0） 器高　2.6	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。無高台で、底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後簡略化された暗文を施す。底部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
759	瓦器　椀	口径　12.6 器高　3.2	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。無高台で、底部平底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ。体部内面・見込部ナデ。暗文なし。	黒灰色 一部灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
760	瓦器　椀	口径（12.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、丸い。無高台で、底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面幅広の渦巻状の暗文を施す。底部外面ユビオサエ。内面一方向のナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
761	瓦器　椀	口径（11.4）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部肥厚。底部平底で、無高台か。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面ナデ。２～３条の暗文を施す。	灰色	微砂粒を多く含む。	不良	和泉型。
762	瓦器　椀	口径（12.2）	体部やや内湾。口縁部内湾。口縁端部は尖る。無高台か。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。見込部ナデか。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
763	瓦器　椀	口径（12.0）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚。無高台で、底部平底状。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面・底部外面ユビオサエ。内面ナデ後、簡略化された渦巻状の暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
764	瓦器　椀	口径（13.9） 器高　4.1 高台径(2.6)	体部・口縁部内湾。口縁端部肥厚し、丸い。体部外面凹凸顕著。断面方形の低い高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後数条の渦巻状の暗文を施す。見込部ナデ後、平行線状の暗文を施すか。貼り付け高台。	茶灰色	微砂粒を少量含む。	不良	和泉型。 二次加熱を受けるか。
765	瓦器　椀	口径（12.2） 器高　3.5 高台径(2.1)	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後粗い暗文を施す。貼り付け高台。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
766	瓦器　椀	口径（12.9） 器高　3.1 高台径(3.7)	体部斜め外方に大きく開き、口縁部はやや外反。口縁端部はわずかに肥厚し、丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後粗い暗文を施す。貼り付け高台。	灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	和泉型。
767	瓦器　椀	口径（13.2） 器高　3.5 高台径(3.8)	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや肥厚し、丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後数条の暗文を施す。見込部ナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
768	瓦器　椀	口径（14.3） 器高　3.5 高台径(2.5)	体部内湾。口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。高台断面三角形で、小さい。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後渦巻条の暗文、見込部に平行線状の暗文を施す。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	内面灰白色・外面灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
769	瓦器　椀	口径　12.8 器高　3.8	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部やや肥厚し、丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後、数条の渦巻状の暗文を施す。見込部ナデ後、簡略化された鋸歯状の暗文を施す。高台粘土紐貼り付け後ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
770	瓦器　椀	口径　12.8 器高　3.1 高台径 3.6	体部ほぼ直線的。口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面に4～5条の渦巻条の暗文を施す。見込部ナデ後、平行線状の暗文。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	ほぼ完形。 和泉型。
771	瓦器　椀	口径（13.7）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。無高台で、底部丸底状。	口縁部外面ヨコナデ。内面ヨコナデ後ナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ後、細い渦巻状の暗文を施す。見込部ナデ後、沈線状の平行線状の暗文を施す。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
772	瓦器　椀	口径　12.1 器高　3.0 高台径 2.2	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。退化した高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後数条の渦巻状の暗文を施す。見込部ナデ後、簡略化された鋸歯状の暗文を施す。高台粘土紐貼り付け。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
773	瓦器　椀	口径　13.6 器高　3.5 高台径 3.8	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。退化した高台が付く。高台の一部剝落。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。暗文不明瞭。見込部ナデ。暗文不明。高台粘土紐貼り付け後ヨコナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	不良	和泉型。 二次加熱を受けるか。
774	瓦器　椀	口径（12.8） 器高　2.9 高台径(2.7)	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。断面三角形の退化した高台が付く。器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後2～3条の渦巻状の暗文を施す。見込部平行線状の暗文か。貼り付け高台。	灰白色 外面灰色	精良	やや不良	和泉型。
775	瓦器　椀	口径（13.1）	体部・口縁部わずかに内湾。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後暗文。炭素未吸着。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
776	瓦器　椀	口径（11.2）	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。暗文なし。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
777	瓦器　椀	口径（10.7）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。暗文なし。	明灰色一部黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
778	瓦器　椀	口径（11.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。暗文なし。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
779	瓦器　椀	口径（12.6）	体部中位で大きく内湾。口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、丸い。全体に器壁薄く、内面を平滑に仕上げる。	口縁部内外面強いヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ヘラミガキか。	灰白色	精良	良好	
780	瓦器　椀	口径（11.7）	体部中位で大きく内湾。口縁部やや内湾。口縁端部の器壁薄く、尖る。	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面・体部内面ナデ。体部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
781	瓦器　椀	口径（11.9）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。内面ヨコナデ。	黄灰色	微砂粒を少量含む。	不良	内面煤付着。
782	瓦器　椀	口径（14.0）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面ナデ。	灰褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	二次加熱を受けるか。
783	瓦器　椀	口径（13.1）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ後暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	和泉型。
784	瓦器　椀	口径（13.5）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ、内面ナデ後暗文を施す。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
785	瓦器 椀	口径（14.6）	体部・口縁部やや内湾。口縁部やや肥厚し，端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。法量不正確。
786	瓦器 椀	口径（14.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部肥厚し、丸い。体部外面凹凸顕著。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面ナデ。見込部に沈線状の暗文を施す。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
787	瓦質 椀	底径 （7.0）	体部内湾。無高台で底部平底であるが、底部と体部との境界は丸みを持つ。全体に器壁厚い。	体部外面・底部外面丁寧なナデ。体部内面・底部内面ナデ後ハケ目。	明灰色 内面灰色	微砂粒を多く含む。	不良	底部外面に多数のヘラキズ有り。
788	瓦器 皿	口径 （8.0） 器高 1.1 底径 （6.3）	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
789	瓦器 皿	口径 （8.6） 器高 1.2 底径 （7.3）	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
790	瓦器 皿	口径 （8.1） 器高 0.8 底径 （5.8）	口縁部外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
791	瓦器 皿	口径 （7.7） 器高 1.0 底径 （5.5）	口縁部外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
792	瓦器 皿	口径 （6.8） 器高 1.3 底径 （5.2）	口縁部外反。口縁端部は丸い。底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
793	瓦器 皿	口径 （7.2） 器高 1.8 底径 （6.2）	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
794	瓦器 皿	口径 (8.2) 器高 1.1 底径 (7.0)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
795	瓦器 皿	口径 (7.8) 器高 1.6 底径 (6.5)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。内面ナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
796	瓦器 皿	口径 (7.9) 器高 1.6 底径 (6.2)	口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
797	瓦器 皿	口径 7.7 器高 1.6 底径 5.8	口縁部大きく外反。口縁端部は丸い。底部外面凸凹顕著で平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。同周縁部・底部内面ナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
798	瓦器 皿	口径 (7.8) 器高 1.6 底径 (6.4)	口縁部外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
799	瓦器 皿	口径 (8.1) 器高 1.3 底径 (6.0)	口縁部大きく外反。口縁端部は尖る。底部平底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
800	瓦器 皿	口径 8.2 器高 1.9 底径 7.0	口縁部大きく外反。口縁端部肥厚し、丸い。底部丸底状。器形の歪顕著。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	茶褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	完形。 和泉型。
801	瓦器 皿	口径 (8.0) 器高 1.5 底径 (5.9)	口縁部大きく外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面ナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
802	瓦器 皿	口径 (8.2) 器高 1.4 底径 (5.8)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
803	瓦器　皿	口径　(8.4) 器高　1.4 底径　(6.1)	口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ。内面ナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	和泉型。
804	瓦器　皿	口径　(8.3) 器高　1.4 底径　(6.1)	口縁部やや外反。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
805	瓦器　皿	口径　(9.9) 器高　2.0 底径　(4.4)	口縁部直線的。口縁端部は尖る。底部やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	精良	良好	法量不正確。
806	瓦器　皿	口径（10.1）	口縁部外反。口縁端部はやや尖る。底部丸底状。全体に器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
807	瓦器　皿	口径　(9.6)	口縁部直線的。口縁端部は尖る。底部丸底状か。全体に器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

表79　中島田－包含層出土遺物（瓦質　鍋・羽釜・脚部）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
808	瓦質　鍋	口径（24.6）	体部内湾。口縁部大きく外反した後、内湾。口縁端部やや肥厚し、わずかに凹面に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面丁寧なナデ。同外面ユビオサエ。	淡黄灰色 外面黒色	微砂粒を少量含む。	良好	外面煤付着。
809	瓦質　鍋	口径（23.3）	体部やや内湾。口縁部大きく外反した後、直立。口縁部は鋭く尖る。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。口縁端部強いヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	褐灰色 外面黒色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
810	瓦質　鍋	口径（22.6）	口縁部大きく外反した後、直立。口縁端部は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁折り曲げ部ユビオサエ。	灰白色 外面黒色	精良	良好	外面煤付着。
811	瓦質　鍋	口径（21.0）	口縁部大きく外反した後、内湾。口縁端部やや肥厚し、わずかに凹面に仕上げる。	口縁部・体部とも内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	淡黄褐色 外面黒色	微砂粒を少量含む。	良好	外面煤付着。
812	瓦質　羽釜	口径（20.4）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は平坦に仕上げる。断面三角形の短い鍔が突起状に付く。	口縁部内面上部・外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面・口縁部内面下部横・斜め方向のハケ目。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
813	瓦質　鍋	口径（23.8）	体部内湾。口縁部やや内湾。口縁端部は平坦に仕上げる。断面三角形の短い鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面粗いナデか。同内面ユビオサエ。鍔貼り付けか。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
814	瓦質　鍋	口径（18.2）	体部ほぼ直立。口縁部やや内湾。口縁端部は平坦に仕上げる。断面三角形の短い鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。鍔は口縁部を拡張して作るか。	灰白色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
815	瓦質　羽釜	口径（18.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸みを持つ。断面三角形の短い鍔が水平に付く。	口縁部内外面・鍔上面ヨコナデ。鍔下面粗いナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ハケ目。鍔貼り付け。貼り付け部に棒状工具による圧痕あり。	黒灰色	砂粒を多く含む。	不良	
816	瓦質　羽釜	口径（25.5）	体部・口縁部内湾。口縁端部は平坦。断面方形の短い鍔が水平に付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。鍔下部に棒状工具による圧痕。	黒灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	
817	瓦質　羽釜	口径（15.0）	体部やや内湾か。口縁部内湾。口縁端部やや肥厚し、平坦に仕上げる。断面方形の短い鍔がやや上向きに付く。	口縁部内外面・鍔部丁寧なヨコナデ。体部外面ナデか。同内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
818	瓦質　羽釜	口径（19.4）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸みを持つ。断面三角形の短い鍔が水平に付き、鍔先端部は丸い。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内外面ナデ。鍔は体部上端部を折り曲げて作るか。鍔貼り付け。貼り付け部に棒状工具による圧痕あり。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
819	瓦質　羽釜	口径（26.4）	口縁部内湾。口縁端部やや拡張し、平坦に仕上げる。断面台形状の鍔が水平に付く。	口縁部内外面・鍔部丁寧なヨコナデ。	暗灰色	砂粒を多く含む。	良好	
820	瓦質　羽釜	－	断面台形状のやや幅広の鍔が水平に付く。大形。	鍔部ヨコナデ。内面ナデ。鍔貼り付け。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	鍔下面煤付着。
821	瓦質　羽釜	口径（20.5）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸みを持つ。断面台形状の短い鍔が付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	淡灰褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
822	瓦質　羽釜	口径（21.0）	体部上部・口縁部直立。口縁端部やや肥厚し、平坦に仕上げる。断面方形の短い鍔が水平に付く。	口縁部外面・鍔部・体部内面丁寧なヨコナデ。口縁部内面ハケ目。体部外面上部ナデ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
823	瓦質　羽釜	口径（29.0）	体部内湾。口縁部直立。口縁端部平坦。断面方形のやや厚手の短い鍔が付く。	口縁部外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面・口縁部内面ハケ目。鍔貼り付け。	黒灰色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
824	瓦質　羽釜	口径（21.0）	体部・口縁部内湾。口縁端部は丸い。断面台形状の短い鍔が付く。脚付き。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。脚貼り付けの痕跡あり。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
825	瓦質　羽釜	口径（18.9）	口縁部内湾し、長い。口縁端部肥厚し、平坦に仕上げる。断面方形の短い鍔が水平に付く。脚付き。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。脚貼り付け。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
826	瓦質　茶釜	口径（15.0）	体部上位で大きく内湾。口縁部直立。体部上位に耳、中位に断面台形状の鍔が水平に付く。鍔先端部は丸みを持つ。	口縁部内外面・肩部外面・体部外面・鍔部ヨコナデ。内面ハケ目。耳・鍔貼り付け。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
827	瓦質　脚部	残存長 9.5 径　3.5	断面ほぼ円形。基部わずかに屈曲。	全体にユビオサエ後ヘラケズリ。	黒色	砂粒を多く含む。	良好	煤付着。
828	瓦質　脚部	長さ　19.1 径　2.2	断面ほぼ円形。基部屈曲。身部直線的。先端部わずかに外方に屈曲し、丸く収める。	全体にヘラケズリ後、縦方向のナデを施す。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	煤付着。
829	瓦質　脚部	残存長16.0 径　3.4	断面ほぼ円形。基部屈曲。身部直線的。大形。	全体にヘラケズリ後、縦方向のナデを施す。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
830	瓦質　脚部	残存長13.3 径　3.1	断面ほぼ円形。基部大きく屈曲。身部直線的。	全体にユビオサエ後ヘラケズリ。	灰黄色	砂粒を多く含む。	良好	
831	瓦質　脚部	残存長10.0 径　3.0	断面ほぼ円形。基部屈曲。身部直線的。	全体にヘラケズリ後ナデ。	黒灰色	砂粒を多く含む。	良好	

表80　中島田－包含層出土遺物（国内産陶器　すり鉢）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
832	陶器　すり鉢	口径（26.0）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部拡張し、端面を広く仕上げる。先端部は鋭く尖る。体部内面に9条単位の櫛描条線。	口縁部・体部内外面ロクロナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼か。
833	陶器　すり鉢	口径（26.0）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部わずかに拡張。先端部は尖る。体部内面に11条単位のやや粗い櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内面丁寧なナデ。同外面粗いナデ	暗灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
834	陶器　すり鉢	口径（25.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部拡張し、端面を平坦に仕上げる。体部内面に9条単位の櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面粗いナデ。同内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	体部内面自然釉。備前焼。
835	陶器　すり鉢	口径（27.9）	体部・口縁部やや内湾。口縁部やや肥厚し、端面を平坦に仕上げる。体部内面に6条単位の櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面乱ナデ。同内面上部ロクロナデ。下部乱ナデか。	暗赤灰色 外面赤灰色	微砂粒を多く含む。	良好	口縁部内外面自然釉。備前焼。
836	陶器　すり鉢	口径（29.7）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端面は平坦に仕上げる。体部内面に4条以上を1単位とする櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内外面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	口縁部内外面煤付着。備前焼
837	陶器　すり鉢	口径（29.9） 器高　12.6 底径（12.1）	体部・口縁部直線的。口縁端部拡張し、端面を平坦に仕上げる。体部内面に6条単位の櫛描条線。	口縁部・体部内外面ロクロナデ。底部外面未調整。	灰色 内面暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
838	陶器　すり鉢	口径（26.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端面は平坦。片口が付く。体部内面に6条単位の櫛描条線。	口縁部・体部内外面ロクロナデ。片口は指で押し出す。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
839	陶器　すり鉢	口径（27.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、先端部を鋭く尖らせる。体部内面に9条単位の櫛描条線。	口縁部・体部内外面ロクロナデ。	灰色 外面・口縁部褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
840	陶器　すり鉢	口径（29.2）	体部・口縁部直線的。口縁端部拡張し、端面をやや幅広く作る。体部内面に7条単位の櫛描条線。	口縁部・体部内外面ロクロナデ。口縁端面ナデ。	赤灰色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
841	陶器　すり鉢	口径（26.4）	体部直線的。口縁部内側へ屈曲。口縁端部大きく上下に拡張。体部内面に8条単位の櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。	茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
842	陶器　すり鉢	口径（31.0）	口縁部直線的。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部を尖らせる。端面は凹面に作る。体部内面に7条以上を1単位とする櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。体部外面の一部ナデ。	にぶい黄褐色	砂粒を多く含む。	不良	体部外面に重ね焼痕。 備前焼

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
843	陶器　すり鉢	底径（14.3）	体部内湾。器壁厚い。内面に4～5条を1単位とする櫛描条線。	体部内外面ロクロナデ。底部外面粗いナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。

表81　中島田－包含層出土遺物（国内産陶器　こね鉢）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
844	陶器　こね鉢	口径（19.8）	体部直線的。口縁部やや内湾し、端面は平坦に仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
845	陶器　こね鉢	口径（21.9）	体部直線的。口縁部やや内湾し、端面は平坦に仕上げる。片口が付く。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。片口は指押え。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
846	陶器　こね鉢	口径（24.7）	体部直線的。口縁部やや内湾し、先端部は丸く仕上げる。器壁はやや薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼 魚住焼。
847	陶器　こね鉢	口径（20.7）	口縁部直線的。口縁端部下方にわずかに拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦に仕上げる。器壁は薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
848	陶器　こね鉢	口径（20.5）	口縁部やや内湾。口縁端部を尖り気味に、端面を丸く仕上げる。器壁はやや薄め。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
849	陶器　こね鉢	口径（25.3）	口縁部やや内湾し、肥厚。口縁端部を尖り気味に、端面を丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	内面に煤付着。 重ね焼。 魚住焼。
850	陶器　こね鉢	口径（24.1）	口縁部わずかに外反。口縁端部上下にやや拡張し、先端部・端面とも丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	やや不良	魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
851	陶器　こね鉢	口径（24.8）	口縁部わずかに外反。口縁端部上方に大きく拡張し、先端部・端面とも丸く仕上げる。片口が付く。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。片口は指押え。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
852	陶器　こね鉢	口径（24.5）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部上方に拡張し、端面は丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
853	陶器　こね鉢	口径（23.7）	口縁部やや内湾。口縁端部上下にやや拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦に仕上げる	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	内面煤付着。 重ね焼。 魚住焼。
854	陶器　こね鉢	口径（20.8）	口縁部直線的。口縁端部上方に大きく拡張し、先端部を鋭く尖らせる。端面は平坦。片口が付く。器壁やや薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
855	陶器　こね鉢	口径（24.3）	口縁部直線的。口縁端部上方に大きく拡張し、先端部・端面は丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
856	陶器　こね鉢	口径（21.9）	口縁部直線的。口縁端部上方に大きく拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。片口が付く。	口縁部内外面ロクロナデ。片口は指押え。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
857	陶器　こね鉢	口径（23.3）	体部直線的。口縁端部上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
858	陶器　こね鉢	口径（21.5）	体部・口縁部直線的。口縁端部上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面はやや丸みを持つ。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
859	陶器　こね鉢	口径（23.0）	口縁部やや内湾。口縁端部下方に拡張し、先端を尖らせる。端面は丸い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
860	陶器　こね鉢	口径（26.2）	体部・口縁部直線的。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部・端面とも丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。口縁部内外面の一部にユビオサエの痕跡あり。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
861	陶器　こね鉢	口径（28.4）	体部直線的。口縁部わずかに内湾。口縁端部上下にやや拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。片口付くか。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
862	陶器　こね鉢	口径（30.9）	体部・口縁部直線的。口縁先端部を尖らせ、端面は丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	魚住焼。
863	陶器　こね鉢	口径（27.9）	体部直線的。口縁部外反。口縁端部を上方に拡張した後、先端部を内側に折り曲げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
864	陶器　こね鉢	口径（30.9）	口縁部直線的。口縁端部上方に拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	精良	不良	魚住焼。
865	陶器　こね鉢	口径（31.0）	口縁部直線的。口縁端部上方にやや拡張し、先端部を尖らせる。端面はやや丸みを持つ。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	砂粒を多く含む。	不良	魚住焼。二次加熱を受けるか。
866	陶器　こね鉢	口径（27.3）	口縁部直線的。口縁端部上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
867	陶器　こね鉢	口径（26.4）	口縁部肥厚。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部・端面とも丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
868	陶器　こね鉢	口径（27.8）	口縁部やや内湾し、端部を下方に大きく拡張。先端部は丸く、端面は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
869	陶器　こね鉢	口径（30.8）	体部・口縁部ほぼ直線的。口縁部わずかに肥厚し、端部を上下にやや拡張。口縁先端部・端面とも丸みを持つ。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
870	陶器　こね鉢	口径（31.0）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁部肥厚し、端部を上下に大きく拡張。先端部は尖る。端面は丸みを持つ。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	暗灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	重ね焼。魚住焼。
871	陶器　こね鉢	口径（31.2）	口縁部直線的で、端部を上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸い	口縁部内外面ロクロナデ。	黄灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
872	陶器　こね鉢	口径（30.6）	体部わずかに内湾。口縁部直線的。口縁端部を上下に大きく拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
873	陶器　こね鉢	口径（30.6）	体部・口縁部直線的。口縁端部を上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
874	陶器　こね鉢	口径（24.0）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁部わずかに肥厚し上下に拡張。端部尖り気味で、端面は丸い。器壁は薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色 外面灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
875	陶器　こね鉢	口径（25.5）	口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部・端面を丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
876	陶器　こね鉢	口径（24.7）	口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張し、端面は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色 内面茶灰色	微砂粒を多く含む。	不良。	内面煤付着。二次加熱。魚住焼。
877	陶器　こね鉢	口径（25.5）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部を丸く仕上げる。端面は丸い。器壁は薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
878	陶器　こね鉢	口径（23.7）	口縁端部上下に大きく拡張し、先端部・端面とも丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
879	陶器　こね鉢	口径（26.9）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部・端面を丸く仕上げる。器壁は薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
880	陶器　こね鉢	口径（28.3）	口縁部やや外反。口縁端部上方に拡張し、先端部・端面を丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	魚住焼。
881	陶器　こね鉢	口径（31.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部上下にやや拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦。器壁は薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
882	陶器　こね鉢	口径（30.3）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。

表82　中島田－包含層出土遺物（国内産陶器　椀・壷・甕）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
883	陶器　椀	口径（11.2） 器方　3.1 底径　（6.1）	体部・口縁部内湾。口縁端部の器壁薄く、先端部尖る。平底。	底部回転糸切り。口縁部・体部内外面ロクロナデ。体部内外面・底部内面ナデ。	灰白色	精良	良好	瓦質。重ね焼。備前産か。
884	陶器　椀	口径（12.0） 器高　3.4 底径　（7.3）	体部・口縁部内湾。口縁端部の器壁薄く、先端部尖る。平底。	底部回転糸切り。口縁部内外面ロクロナデ。体部内外面・底部内面ナデ。	灰白色	精良	良好	瓦質。重ね焼。備前産か。
885	陶器　椀	底径　（5.6）	平底。	底部回転糸切り。底部内面ロクロナデ。	淡黄色	精良	不良	備前産か。
886	陶器　椀	底径　6.3	体部下半部やや内湾。平底。	底部回転糸切り。体部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	淡黄色	精良	不良	備前産か。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
887	陶器　椀	底径　(6.1)	体部内湾。平底。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ	灰色	精良	良好	備前産か。
888	陶器　壷	口径（12.8）	口縁部直立。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰赤色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
889	陶器　壷	口径（11.8）	口縁部短く直立気味。肩部外方に張り出すか。口縁端部を外方に折り曲げ、先端部を尖り気味に仕上げる。	全体に丁寧なロクロナデ。	灰白色 内面茶褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
890	陶器　壷	底径　(6.7)	体部下半部内湾。底部平底で、高台状に突出。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤灰色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
891	陶器　小椀	口径　5.0 器高　1.7 底径　2.6	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部の器壁やや厚い。	底部回転糸切り。底部外面以外丁寧なロクロナデ。	明黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	ほぼ完形。 瀬戸焼。
892	陶器　椀	底径　(4.7)	体部下半部直線的に斜め上方に開く。断面三角形で、低い粗雑な高台が付く。	底部外面板目か。底部内面中央部ナデ。その他は丁寧なロクロナデ。高台削り出し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	瀬戸焼。
893	陶器　椀	口径（13.0）	体部上位で屈曲。口縁部やや内湾。同端部はわずかに外反し、尖る。	全体丁寧なロクロナデ。体部下部以外鉄釉。体部下部露胎。	素地浅黄色	微砂粒を少量含む。	良好	瀬戸焼。 天目茶碗。
894	陶器　壷	口径（17.5）	頸部直立。口縁部下方に折り曲げ。端部やや拡張。	全体にロクロナデ。	暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	常滑焼。
895	陶器　壷	口径（21.0）	頸部やや外反。口縁部折り曲げ。端部上下に大きく拡張。	全体にロクロナデ。	暗褐色 外面灰色	砂粒を多く含む。	良好	常滑焼。
896	陶器　瓮	口径（27.4）	口縁部大きく外反し，端部上下に拡張。	全体にロクロナデ。	暗褐色	砂粒を多く含む。	良好	常滑焼。
897	陶器　壷	口径（21.6）	口縁部短く，直立。口縁端部わずかに拡張し，端面を幅広に作る。	全体にロクロナデ。	暗赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
898	陶器　瓮	底径（16.4）	体部下半部斜め上方に直線的に延びる。底部平坦。	底部外面未調整。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。同内面粗いナデ。	褐灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	
899	陶器　甕	口径（25.4） 胴径（42.7）	丸胴。口縁部大きく外反。端部を外方につまみ出し，先端部を尖り気味に仕上げる。	口縁部から頸部にかけてロクロナデ。体部外面綾杉状の叩き。同内面ナデ。	黄褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	
900	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面細かいハケ目。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	亀山焼。
901	陶器　甕	－	体部から頸部にかけての小片。器壁厚い。	外面細かい格子目叩き。頸部付近はナデ消す。内面青海波文ナデ消し。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
902	陶器　甕	－	体部から頸部にかけての小片。	外面細かい格子目叩き。頸部付近はナデ消す。内面ナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
903	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
904	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい格子目叩き。内面縦横のナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
905	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい格子目叩き。内面縦横のナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	
906	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	瓦質。
907	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
908	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい格子目叩き。内面丁寧なナデ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	瓦質。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
909	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
910	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
911	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	やや瓦質。
912	陶器　甕	－	体部小片。器壁やや厚い。	外面細かい格子目叩き。内面器壁剝落につき調整不明。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	瓦質。
913	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	暗灰色	砂粒を少量含む。	良好	瓦質。
914	陶器　甕	－	体部小片。内面凹凸顕著。	外面細かい格子目叩き後部分的にナデ。内面ナデ後部分的にユビオサエ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
915	陶器　甕	－	体部小片。器壁やや厚い。	外面綾杉状の叩き。内面ナデ。	灰色	砂粒を少量含む。	やや不良	瓦質。
916	陶器　甕	－	体部小片。器壁厚い。	外面綾杉状の叩き。内面ナデ。	黄褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	
917	陶器　甕	－	体部小片。	外面綾杉状の叩き。内面粗いナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
918	陶器　甕	－	体部小片。器壁厚い。	外面綾杉状の叩き。内面ナデ。	黄褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	
919	陶器　甕	－	体部小片。	外面ナデ後、格子目状のスタンプ文を押印。内面粗いナデ。	黒灰色	砂粒を多く含む。	良好	常滑焼。
920	陶器　甕	－	体部小片。器壁やや厚い。	外面ナデ後、格子目状のスタンプ文を押印。内面粗いナデ。	褐灰色	砂粒を多く含む。	良好	内面煤付着。常滑焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
921	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい綾杉状の叩き。内面ナデ。	褐灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
922	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい平行条線叩き。内面粗いナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
923	陶器　甕	－	体部小片。器壁薄い。	外面細かい平行条線叩き。内面ナデ。	褐灰色	砂粒を多く含む。	やや不良	
924	陶器　甕	－	体部小片。器壁やや厚い。	外面細かい平行条線叩き。内面青海波文ナデ消し。	明灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
925	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい平行条線叩きを縦横に施す。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	瓦質。

表83　中島田－包含層出土遺物（輸入陶磁器）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
926	磁器　碗	口径（14.6）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部は尖る。体部外面に幅広の鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。やや厚めの濃緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
927	磁器　碗	口径（16.5）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部肥厚。体部外面に鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
928	磁器　碗	口径（14.9）	体部内湾。口縁部やや内湾後、外反。口縁端部はやや尖る。体部外面に幅広の蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。淡緑色釉を薄めに施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
929	磁器　碗	口径（15.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。体部外面に幅広の蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉を薄めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
930	磁器　碗	口径（17.1）	体部直線的。口縁部外反。口縁端部は尖る。体部外面に鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
931	磁器　碗	口径（15.5）	口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。体部外面に幅広の蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃黄緑色釉を薄めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。
932	磁器　碗	口径（15.2）	口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。体部外面にやや幅広の鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
933	磁器　碗	口径（16.2）	口縁部やや外反。口縁端部やや尖る。体部外面に細い鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。淡緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
934	磁器　碗	口径（16.5）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部尖る。内面を沈線で区画する。外面無文。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
935	磁器　碗	口径（16.5）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部尖る。体部外面にやや細めの鎬蓮弁文を削り出す。貫入が認められる。	全面丁寧なロクロナデ。淡緑色釉を厚めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
936	磁器　碗	口径（14.6）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部尖る。内外面無文。	内面丁寧なロクロナデ。外面やや粗いロクロナデ。全面に淡黄緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。
937	磁器　碗	高台径 5.4	底部の器壁厚い。高台断面逆台形状で、やや低め。	全面丁寧なロクロナデ。底部外面以外、淡緑色釉を薄く施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
938	磁器　碗	高台径(6.8)	底部の器壁厚い。高台断面方形で、安定する。	全面丁寧なロクロナデ。底部外面以外、濃緑色釉を薄く施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
939	磁器　碗	高台径(6.5)	体部内湾。底部の器壁厚い。高台断面方形で高い。同畳付部は丸みを持つ。内外面無文。	全面丁寧なロクロナデ。底部外面中央部以外、緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。
940	磁器　碗	高台径 5.3	底部の器壁厚い。高台断面方形で、やや低め。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付部・底部外面以外、やや厚めの淡黄緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
941	磁器　碗	高台径 5.2	底部の器壁厚い。高台断面逆台形状で、しっかりしている。底部内面にスタンプ文。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付部・底部外面以外、やや厚めの濃緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
942	磁器　碗	高台径 5.5	底部の器壁厚い。高台断面方形、内部の削り出しは浅い。底部内面にスタンプ文。体部外面に鎬蓮弁文。	全面丁寧なロクロナデ。高台底部外面以外、淡緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
943	磁器　碗	高台径 4.7	底部中央部の器壁厚い。高台断面方形で、やや高め。底部内面にスタンプ文。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付部・底部外面以外、濃緑色釉を施す。釉は底部外面になだれる。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
944	磁器　碗	高台径 5.8	底部の器壁厚い。体部外面に幅広の鎬蓮弁文を削り出す。高台断面逆台形状で安定する。底部内面にスタンプ文。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付部・底部外面以外、濃緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
945	磁器　碗	高台径 4.8	底部中央部の器壁厚い。高台断面逆台形状で、やや低め。	全面丁寧なロクロナデ。内外面に淡緑色釉を薄く施す。釉は高台外側面・底部外面になだれる。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	底部内面に重ね焼痕。 龍泉窯系青磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
946	磁器　碗	高台径 5.4	底部の器壁厚い。体部外面に蓮弁文を削り出すか。高台断面逆台形状で、低い。	全面丁寧なロクロナデ。高台内側面・底部外面以外、濃緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
947	磁器　碗	高台径 5.6	底部の器壁厚い。高台断面逆台形状で低い。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付け部・底部外面以外、濃緑色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
948	磁器　碗	高台径 5.6	底部の器壁厚い。高台断面逆台形状で、しっかりしている。	全面丁寧なロクロナデ。高台部外面以外、濃緑色釉を薄く施す。釉は底部外面になだれる。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
949	磁器　碗	高台径(6.0)	底部の器壁厚い。高台断面逆台形状で、やや低い。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付部・底部外面以外、濃緑色釉を薄く施す。底部内面周縁部に沈線をめぐらす。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
950	磁器　碗	高台径 5.7	高台断面逆台形状で、内側の削り出しは浅い。	全面丁寧なロクロナデ。高台畳付部・底部外面以外、濃緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。
951	磁器　碗	高台径 4.8	底部の器壁厚い。体部外面に線描き状の蓮弁文を削り出す。高台断面方形で、高め。同畳付部は丸く仕上げる。	全面丁寧なロクロナデ。全面に淡緑色釉を施した後、底部外面の釉を輪状に掻き取る。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
952	磁器　碗	－	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。体部外面に鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
953	磁器　碗	－	体部内湾。外面に幅広の蓮弁文を削り出すか。	全面丁寧なロクロナデ。淡黄緑色釉を薄く施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	やや不良	龍泉窯系青磁。
954	磁器　碗	－	口縁部やや外反。口縁端部は尖る。体部外面に蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
955	磁器　碗	－	体部大きく内湾。体部外面に幅広の蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉を施す。底部内面周縁部に沈線をめぐらす。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
956	磁器　碗	－	体部やや内湾。口縁部やや外反。体部外面に鎬蓮弁文を削り出す。	全面丁寧なロクロナデ。濃緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
957	磁器　小碗	口径　(9.3)	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。口縁部内外面に波状の凹みが認められる。	全面丁寧なロクロナデ。淡緑色釉を全面に施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
958	磁器　皿	口径　(9.8)	口縁部やや外反。口縁端部は平坦。体部外面に細かい貫入が認められる。	全面丁寧なロクロナデ。口縁端部以外，淡黄緑色釉を施す。口縁端部の釉は掻き取る。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
959	磁器　杯	口径（10.0）	体部直線的。口縁部大きく外反。口縁部は丸い。体部外面に鎬蓮弁文を削り出す	全面丁寧なロクロナデ。緑色釉をやや厚く施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
960	磁器　杯	高台径(7.2)	体部大きく屈曲した後、直線的に口縁部に続く断面方形のやや細身で高い高台が付く。	全面丁寧なロクロナデ。高台内面を大きく削り、高台を高めに仕上げる。高台畳付部以外、濃緑色釉を厚めに施す。畳付部の釉は掻き取る。釉切れ部は赤味を帯びる。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
961	磁器　碗	口径（14.2）	口縁部やや内湾し、玉縁につくる。口縁端部はやや尖る。	全面丁寧なロクロナデ。灰色味を帯びた白色透明釉を施す。体部下半は露胎。	素地灰白色	やや粗く、わずかに黒粒を含む。	良好	白磁。
962	磁器　碗	口径（18.0）	体部やや内湾。口縁部やや尖る。口縁端部は平坦に仕上げる。内面に櫛描文。	全面丁寧なロクロナデ。灰色味を帯びた白色透明釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
963	磁器　皿	口径（14.5）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖る。	全面丁寧なロクロナデ。青味を帯びた白色透明釉を施し、口縁端部の釉を掻き取る。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	法量不正確。白磁。
964	磁器　皿	口径　9.7	口縁部やや外反。口縁端部は尖る。体部外面に顕著なロクロ成形痕を留める。	全面丁寧なロクロナデ。灰色味を帯びた白色透明釉を施し、口縁端部の釉を掻き取る。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。
965	磁器　皿	口径（10.5）	体部やや内湾。口縁部外反。口縁端部はやや尖る。体部内面下部に沈線がめぐる。	全面丁寧なロクロナデ。青味を帯びた白色透明釉を施し、端部の釉を掻き取る。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。
966	磁器　皿	口径　（9.8）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部内面面取り。底部の器壁やや厚い。	全面丁寧なロクロナデ。底部外面・体部外面下部以外に白色透明釉を施し、端部の釉を掻き取る。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。
967	磁器　皿	口径（10.5）	体部やや内湾。口縁部外反。口縁端部は平坦。	全面丁寧なロクロナデ。青味を帯びた白色透明釉を施し、端部の釉を掻き取る。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。
968	磁器　皿	口径（12.2）	体部内湾。口縁部外反。口縁端部は水平。	全面丁寧なロクロナデ。白色透明釉を施した後、口縁端部の釉を掻き取る。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。
969	磁器　皿	口径（11.5）	体部やや内湾。口縁部外反。口縁端部は平坦。	全面丁寧なロクロナデ。青味を帯びた白色透明釉を施し、端部の釉を掻き取る。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。
970	磁器　皿	口径（15.6）	体部やや内湾。口縁部外反。口縁端部は平坦。内面に梅花文を浮き彫り。	全面丁寧なロクロナデ。白色透明釉を施した後、口縁端部の釉を掻き取る。	素地灰白色	精良	良好	白磁。法量不正確。
971	磁器　水注？	－	体部内湾。頸部直立。小さな縦耳が付く。	全面丁寧なロクロナデ。やや灰色味を帯びる透明釉を外面に厚く、内面に薄く施す。	素地灰白色。	微細な黒粒を少量含む。	良好	白磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
972	磁器　四耳壺	－	体部上半部球形に近い。体部内面ロクロ成形痕を顕著に留める。肩部外面に横耳が付く。	全面丁寧なロクロナデ。内外面に灰色味を帯びた透明釉を薄く施す。	素地灰色	微細な黒粒を少量含む。	良好	白磁。
973	磁器　四耳壺	－	体部小片につき全体の形状不明。体部内面にロクロ成形痕を顕著に留める。	全面丁寧なロクロナデ。内外面に灰色味を帯びた透明釉を薄く施す。	素地灰白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	白磁。
974	磁器　香炉	－	口縁部肥厚し、口縁端部を平坦に仕上げる。体部は直線的。	全面丁寧なロクロナデ。体部内面以外に明緑色釉を薄く施す。体部内面は露胎。	素地白色	精良	良好	青磁。
975	磁器　梅瓶	－	体部小片。体部外面に渦文、または波涛文。	全面丁寧なロクロナデ。外面に青白色釉をやや厚めに施す。内面は露胎。	素地灰白色	微細な黒粒を多く含む。	良好	青白磁。
976	磁器　梅瓶	－	体部小片。体部外面に渦文、または波涛文。	全面丁寧なロクロナデ。外面に青白色釉をやや厚めに施す。内面は露胎。	素地灰白色	微細な黒粒を多く含む。	良好	青白磁。

表84　中島田－包含層出土遺物（土製品・石製品・金属製品）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
977	土製品　坩堝	口径　8.7 器高　3.7	半球形。全体に器壁厚く、片口が付く。	全体にユビオサエ後粗いナデ。片口は指押え。	黄褐色	粗砂粒を多く含む。		高熱を受ける。
978	土製品　土錘	長さ　5.7 胴径　1.4 重さ　9.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	黒褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
979	土製品　土錘	長さ　6.0 胴径　1.1 重さ　6.7g	紡錘形の管状土錘。細めで長い。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデを施す。	灰褐色	精良	良好	
980	土製品　土錘	長さ　6.1 胴径　1.3 重さ　9.3g	紡錘形の管状土錘。細めで長い。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデを施す。	淡褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
981	土製品　土錘	長さ　5.4 胴径　1.5 重さ　10.4g	紡錘形の管状土錘。やや太め。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデを施す。	淡赤褐色	精良	不良	
982	土製品　土錘	長さ　4.9 胴径　1.7 重さ　9.6g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にユビオサエを施す。	暗赤褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
983	土製品　土錘	長さ　5.0 胴径　1.4 重さ　8.7g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデを施す。	茶褐色	精良	良好	
984	土製品　土錘	長さ　3.4 胴径　1.2 重さ　4.4g	紡錘形の管状土錘。太めで短い。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
985	土製品　土錘	長さ　4.8 胴径　1.5 重さ　9.4g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	褐色 一部黒色	微砂粒を少量含む。	不良	
986	土製品　土錘	長さ　4.7 胴径　1.3 重さ　7.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後、粗いナデを施す。	褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
987	土製品　土錘	長さ　4.3 胴径　1.6 重さ　4.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
988	土製品　土錘	長さ　4.9 胴径　1.2 重さ　5.0g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後、粗いナデを施す。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
989	土製品　土錘	長さ　4.5 胴径　1.4 重さ　5.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後、粗いナデを施す。	暗赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
990	土製品　土錘	長さ　3.9 胴径　1.5 重さ　7.1g	紡錘形の管状土錘。やや太めで短い。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	暗赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
991	土製品　土錘	長さ　4.6 胴径　1.3 重さ　5.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデを施す。	淡赤褐色	精良	良好	
992	石製品　石板	長さ　11.7 幅　5.8 厚さ　1.8	形状長方形。中央上端部に穿孔（孔径1.0～1.3cm）。	全体に丁寧な研磨を施す。側辺部の一部に切断痕が認められる。	黒色	（滑石製）		温石か。
993	石製品　砥石	長さ　9.8 幅　2.8 厚さ　2.6	ほぼ完存。平面・断面とも方形。良く使用されており、中央部やや凹む。	3面使用。	青灰色	（砂岩製）		仕上げ砥。
994	石製品　砥石	長さ　10.7 幅　6.9 厚さ　5.7	折損。平面・断面とも不整な方形。中央部凹む。	3面使用。1面は自然面を留める。	灰色	（砂岩製）		仕上げ砥。
995	石製品　硯	長さ　6.1 幅　2.8 厚さ　0.8	本来は隅丸長方形か。海部・陸部の断片。陸部は中央に向けてやや凹む。	海部の彫り込み浅い。底面は切断痕をわずかに留める。	暗灰色	（粘板岩製）		
996	鉄製品　鉄鏃	長さ5.5、幅0.7、厚さ0.2　雁股の断片と見られる。茎断面方形。						
997	鉄製品　釣針	長さ3.5、太さ0.4～0.6　やや幅広。先端部を折り曲げて尖らせる。						

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
998	鉄製品　鍋	縦3.2、横5.0、厚さ0.4	体部から底部にかけての断片。					
999	鉄製品　鍋	縦4.8、横7.2、厚さ0.3	体部から底部にかけての断片。					
1000	鉄製品　鍋	縦5.0、横8.8、厚さ0.4	体部断片。					
1001	鉄製品　鎌？	長さ6.7、幅2.6、棟厚0.4	先端部の断片。形状から鎌と見られるが特定し難い。					
1002	鉄製品　刀子?	長さ7.5、幅1.3、棟厚0.4	切先断片。先端部やや丸い。					
1003	鉄製品　刀子	長さ8.4、幅1.3、棟厚0.4	切先断片。断面三角形で、先端部鋭く尖る。					
1004	鉄製品　刀子	長さ6.6、幅1.0、棟厚0.4	茎部から刃部にかけての断片。					
1005	鉄製品　鉄釘	長さ3.1、幅0.4、厚さ0.4	頭部屈曲し、偏平。短い釘。断面方形。					
1006	鉄製品　鉄釘	長さ4.0、幅0.5、厚さ0.5	頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。					
1007	鉄製品　鉄釘	長さ5.1、幅0.6、厚さ0.6	頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。					
1008	鉄製品　鉄釘	長さ3.3、幅0.6、厚さ0.2	頭部やや屈曲。先端部欠損。断面偏平。					
1009	鉄製品　鉄釘	長さ4.7、幅0.7、厚さ0.7	頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。					
1010	鉄製品　鉄釘	長さ5.1、幅0.7、厚さ0.6	頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。					
1011	鉄製品　鉄釘	長さ3.0、幅0.9、厚さ0.3	頭部屈曲。幅広。先端部欠損。断面偏平。					
1012	鉄製品　鉄釘	長さ5.5、幅0.5、厚さ0.4	頭部わずかに拡張。先端部欠損。断面方形。					
1013	鉄製品　鉄釘	長さ7.8、幅0.9、厚さ0.8	頭部わずかに拡張。先端部欠損。比較的大形。断面方形。					
1014	銅製品　銅銭	径　2.5	「紹聖元宝」　初鋳年　宋（1094年）　行書体。					
1015	銅製品　銅銭	径　2.4	「紹聖元宝」　初鋳年　宋（1094年）　篆書体。					
1016	銅製品　銅銭	径　2.5	「景徳元宝」　初鋳年　宋（1004年）　行書体。					
1017	銅製品　銅銭	径　2.5	「政和通宝」　初鋳年　宋（1111年）　篆書体。					

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1018	銅製品　銅銭	径　2.4	「皇宋通宝」　初鋳年　宋（1039年）	真書体。				
1019	銅製品　銅銭	径　2.4	「皇宋通宝」　初鋳年　宋（1039年）	真書体。				
1020	銅製品　銅銭	径　2.4	「皇宋通宝」　初鋳年　宋（1039年）	真書体。				
1021	銅製品　銅銭	径　2.4	「熙寧元宝」　初鋳年　宋（1068年）	篆書体。				
1022	銅製品　銅銭	径　2.4	「熙寧元宝」　初鋳年　宋（1068年）	篆書体。				
1023	銅製品　銅銭	径　2.4	「熙寧元宝」　初鋳年　宋（1068年）	篆書体。				
1024	銅製品　銅銭	径　2.4	「熙寧元宝」　初鋳年　宋（1068年）	真書体。加工銭。小孔２個穿つ。				
1025	銅製品　銅銭	径　2.4	「元豊通宝」　初鋳年　宋（1078年）	行書体。				
1026	銅製品　銅銭	径　2.4	「元豊通宝」　初鋳年　宋（1078年）	篆書体。				
1027	銅製品　銅銭	径　2.5	「元豊元宝」　初鋳年　宋（1078年）	篆書体。				
1028	銅製品　銅銭	径　2.5	「元豊通宝」　初鋳年　宋（1078年）	篆書体。				
1029	銅製品　銅銭	径　1.8	「祥符元宝」　初鋳年　宋（1008年）	行書体。加工銭。縁帯を打ち欠く。				
1030	銅製品　銅銭	径　2.5	「景祐元宝」　初鋳年　宋（1034年）	行書体。				
1031	銅製品　銅銭	径　2.5	「景祐元宝」　初鋳年　宋（1034年）	行書体。				
1032	銅製品　銅銭	径　2.5	「景祐元宝」　初鋳年　宋（1034年）	行書体。				
1033	銅製品　銅銭	径　2.4	「乾元重宝」　初鋳年　唐（758年）	加工銭。				
1034	銅製品　銅銭	径　2.0	銭種不明。					
1035	銅製品　銅銭	径　2.5	銭種不明。					
1036	銅製品　銅銭	径　2.5	銭種不明。					

表85　南島田－溝101（ＳＤ101）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1037	土師質　杯	口径（12.0）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖る。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	
1038	瓦器　椀	口径（11.8）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖り気味に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエ後、粗いナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1039	瓦器　椀	口径（13.9）	体部やや内湾か。口縁部やや外反。口縁部肥厚し、端部を丸く仕上げる。	口縁内部外面ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエ。暗文なし。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1040	土師質　鍋	口径（26.5）	口縁部外反。口縁端部やや肥厚し、先端部を内側に大きく折り曲げ、鋭く尖らせる。体部甕形か。	口縁部内外面ヨコナデ。	にぶい赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	
1041	土師質　羽釜	口径（32.3）	体部直立気味。口縁部直立し、短い。端部は平坦。断面台形状の短い鍔がやや下向きに付く。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	
1042	瓦質　火鉢	底径（28.8）	体部下部斜め上方にほぼ直線的に立ち上がる。外面に突帯が１条めぐる。底部平底か。	体部内外面ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1043	陶器　こね鉢	口径（24.0）	口縁部直線的。口縁端部を下方に拡張し、先端部を尖らせる。端面は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。魚住焼。
1044	陶器　こね鉢	口径（28.0）	口縁部やや外反。口縁端部上下に大きく拡張し、先端部を丸くする。端面は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	暗灰色	砂粒を多く含む。	良好	内面煤付着。魚住焼。
1045	陶器　壺？	底径（13.1）	体部直線的。全体に器壁の凹凸顕著。	体部外面ナデ。胴部外面に格子状の叩き目を部分的に施す。同内面ユビオサエ。	灰色	砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1046	土製品　土錘	長さ　2.6 胴径　1.1 重さ　1.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	橙色	精良	良好	
1047	石製品　砥石	長さ　3.1 幅　2.1 厚さ　2.1	平面方形。断面台形状。	4面使用。	灰白色	（凝灰岩製）		仕上げ砥。
1048	鉄製品　不明	長径4.2、短径3.0、厚さ1.1　円形。用途不詳。						

表86　南島田－溝102（ＳＤ102）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1049	土師質　皿	口径　8.5 器高　1.7 底径　7.0	口縁部やや外反。口縁端部丸い。底部の器壁厚く、やや丸底状。	底部回転糸切り後ナデ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい褐色	微砂粒を少量含む。	良好	完形。
1050	土師質　鍋	口径（21.5）	口縁部直線的。口縁端部やや拡張し、凹面に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ヨコナデか。	にぶい黄褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	法量不正確。
1051	陶器　こね鉢	口径（28.8）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部上下にやや拡張し、先端部を丸くする。器壁はやや薄め。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰白色	砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。

表87　南島田－土坑102（ＳＫ102）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1052	土師質　椀	口径（10.3）	体部・口縁部やや内湾。口縁部やや肥厚し、端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ナデ。同内面丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	良好	

表88　南島田－土坑103（ＳＫ103）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1053	土師質　杯	口径（11.8） 器高　2.8 底径　（7.0）	体部やや内湾。口縁部外反。底部内面凹凸顕著。	底部回転糸切り。底部外面・同内面中央部以外ロクロナデ。底部中央部ナデ。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1054	土師質　杯	口径　12.0 器高　3.2 底径　6.4	体部直線的。口縁部外反。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。底部外面・同内面中央部以外ロクロナデ。底部中央部ナデ。	黄褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1055	土師質　杯	口径（12.6）	口縁部直線的で、端部は丸く仕上げる。器壁薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	にぶい橙色	精良	不良	

表89　南島田－土坑106（ＳＫ106）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1056	土師質　杯	底径　（6.7）	全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	
1057	鉄製品　鉄釘	長さ3.3、幅0.7、厚さ0.6　頭部平坦。先端部欠損。断面方形。						

表90　南島田－土坑111（ＳＫ111）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1058	土師質　椀	口径（13.9）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
1059	陶器　椀	口径（12.9）	体部やや内湾。口縁部やや内湾後外反。口縁端部は尖る。	全面丁寧なロクロナデ。体部外面下部以外黒色釉を施す。口縁部内外面は茶褐色釉。	素地灰白色	微細な黒粒をわずかに含む。	良好	瀬戸焼。 天目茶碗。

表91　南島田－土坑113（ＳＫ113）出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1060	銅製品　銅銭	径　2.4	「開元通宝」　初鋳年　唐（621年）					

表92　南島田－自然流路101出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1061	土師質　杯	底径　（7.8）	体部やや内湾。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色内面黄灰色	微砂粒を多く含む。	不良	皿に転用か。
1062	土師質　高台付皿	高台径 6.5	高台付き。高台断面三角形。短い口縁部が付くか。	摩耗激しく調整不明。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
1063	土師質　椀	口径　（8.9）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸く仕上げる。口縁部の器壁薄い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。同面内丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	良好	
1064	瓦器　椀	口径（12.4）	体部やや内湾。口縁部やや外反し、やや肥厚。先端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。内面ヘラミガキか。体部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	法量不正確。
1065	瓦器　椀	口径（15.5）	体部や内湾。口縁部やや外反し、やや肥厚。先端部は丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面全体ナデ後幅広の暗文を施す。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
1066	瓦器　椀	口径（12.0）	口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。器壁は厚め。	口縁部内外面ヨコナデ。	暗灰色	精良	良好	
1067	瓦器　椀	口径（14.1）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面・体部内面・体部外面上部ヨコナデ。体部外面下部ユビオサエ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	口縁部煤付着。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1068	土師質　鍋	口径（19.9）	口縁部直線的で、やや肥厚。口縁端部やや拡張し、端面を凹面に仕上げる。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	にぶい黄橙色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
1069	土師質　鍋	口径（21.0）	体部・口縁部内湾。口縁部肥厚。口縁端部拡張し、上端をつまみ上げ、下端を水平に広げて鍔状に作る。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
1070	土師質　鍋	口径（27.0）	体部・口縁部内湾。口縁部肥厚。口縁端部を拡張し、端面を凹面に仕上げる。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後、粗いナデ。底部・体部内面の境をヘラで削る。	にぶい褐色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
1071	瓦質　羽釜	口径（21.5）	短い口縁部に水平に張り出す鍔が付く。口縁端部は丸い。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内外面ナデ。鍔貼り付け。	褐灰色	砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
1072	土師質　羽釜	口径（37.3）	体部上半部・口縁部直立。水平に張り出す鍔が付く。鍔の幅は欠損につき不明。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。鍔貼り付け。	褐灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	外面煤付着。
1073	陶器　椀	底径　（8.0）	体部内湾。平底。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	灰白色	精良	良好	備前産か。
1074	陶器　すり鉢	口径（25.1）	体部直線的。口縁部内湾。口縁端部上下に大きく拡張。体部内面に9条単位の櫛描条線。	口縁部内外面ロクロナデ。体部内面ヨコナデ。同外面ユビオサエ後ヨコナデ。	赤褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	備前焼。
1075	陶器　こね鉢	口径（25.2）	口縁部直線的。口縁部やや外反。口縁端部上下に拡張し、先端部を鋭く尖らせる。端面は平坦。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
1076	陶器　こね鉢	口径（27.4）	体部直線的。口縁部やや肥厚。口縁端部上下に拡張し、先端部を内側に折り曲げる。片口が付くか。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1077	陶器　こね鉢	口径（32.9）	口縁部直線的でやや肥厚。口縁端部上下にやや拡張し、先端部尖らせる。端面は丸い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
1078	陶器　こね鉢	口径（22.7）	口縁部やや外反。口縁端部上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
1079	陶器　こね鉢	口径（24.2）	口縁部やや肥厚。口縁端部上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸く仕上げる。片口が付くか。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	内面煤付着。 重ね焼。 魚住焼。
1080	土製品　土錘	長さ　5.9 胴径　1.2 重さ　6.4g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデを施す。	にぶい橙色。	微砂粒を少量含む。	良好	
1081	土製品　土錘	長さ　2.8 胴径　1.2 重さ　3.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。粗いナデを施す。	にぶい褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1082	土製品　土錘	長さ　3.3 胴径　1.4 重さ　4.6g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1083	石製品　石鍋	底径（27.4）	体部下部やや内湾。底部平底。内面平滑。外面やや凹凸あり。	内面全体丁寧なケズリ。体部外面縦方向のケズリ後、横方向のケズリ。底部外面粗いケズリ。	灰褐色	（滑石製）		外面煤付着。

表93　南島田－自然流路102出土遺物観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1084	土師質　杯	口径（11.0）	体部・口縁部直線的。口縁端部は尖る。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	橙色	精良	良好	法量不正確。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1085	土師質　椀	口径（10.1）	体部内湾か。口縁部直線的で、やや肥厚し、端部は丸い。体部外面上部に稜。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ナデ。同内面丁寧なナデ。	灰黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
1086	土師質　椀	口径（13.0）	口縁端部は丸い。	口縁部外面強いヨコナデ。同内面丁寧なナデ。	灰黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
1087	瓦器　皿	口径　（7.5） 器高　1.3 底径　5.5	口縁部内湾し、短い。口縁端部は丸い。底部平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。同外面ユビオサエ。	灰色	精良	良好	
1088	磁器　碗	高台径(4.8)	体部外方に大きく開いた後内湾。高台外側面に段が付く。底部中央部の器壁厚い。内面にスタンプ文。	全体に丁寧なロクロナデ。高台内面以外全体に淡緑色釉を薄く施す。高台削り出し。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
1089	磁器　碗	口径（16.0）	口縁部内湾。口縁部に輪花。口縁端部やや尖る。	全体に丁寧なロクロナデ。全体に濃緑色釉を施す。内面にヘラで浅い片彫りを施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
1090	磁器　碗	高台径(7.1)	体部やや内湾。断面逆台形状で、細身の高い高台が付く。底部内面周縁部に圏線。	全体に丁寧なロクロナデ。体部半部ヘラケズリ。内面全体・体部上半部に白色透明釉を施す。	素地白色	やや粗い。	良好	白磁。
1091	磁器　四耳壺	－	体部小片。	内外面丁寧なロクロナデ。外面淡緑色釉・内面黄褐色釉を施す。	素地灰色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁か。
1092	土師質　鍋	口径（24.5）	「く」の字状口縁。口縁端部やや肥厚し、丸く仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。	褐灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1093	土師質　鍋	口径（30.4）	体部・口縁部やや内湾。口縁部肥厚。口縁端部を拡張し、凹面に仕上げる。下端部は鍔状となる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ、外面ユビオサエ。	灰褐色	砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1094	土師質　羽釜	口径（18.9）	口縁部短く、直立気味。断面三角形の短い鍔がやや上向きに付く。口縁端部肥厚し、平坦に仕上げる。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。鍔貼り付け。	にぶい褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
1095	土師質　羽釜	－	断面台形状の短い鍔がやや上向きに付く。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。	褐灰色	砂粒を多く含む。	良好	
1096	瓦質　羽釜	－	口縁部やや内湾。断面方形の短い鍔が付く。口縁端部の器壁を薄くし、先端を尖らせる。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部外面ヨコナデ、外面ユビオサエ。鍔貼り付け。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
1097	瓦質　火鉢	－	口縁部小片。口縁部やや内湾。口縁端面は平坦。外面に2条の突帯と円形の浮文がめぐる。	内外面ヨコナデ。突帯・浮文貼り付け。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1098	陶器　すり鉢	口径（31.3）	体部直線的。口縁部やや内湾。口縁端部やや拡張し、端面を凹面に仕上げる。体部内面に9条単位の櫛描条線。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
1099	陶器　壺	口径（14.3）	口縁部外側に屈曲させ、小さい玉縁とする。外面凹凸顕著。	口縁部内外ロクロナデ。体部内面ヘラケズリか。同外面調整不明。	灰褐色 内面にぶい赤褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	備前焼。
1100	陶器　甕	－	体部小片。	外面平行条線叩き。内面縦横のナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1101	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1102	土製品　土錘	長さ　3.1 胴径　1.2 重さ　2.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	にぶい褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1103	土製品　土錘	残存長 3.7 胴径　1.1 重さ　3.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1104	土製品　土錘	残存長 3.3 胴径　1.1 重さ　3.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	灰黄色	精良	良好	
1105	土製品　土錘	残存長 3.3 胴径　1.1 重さ　3.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全面にナデを施す。	灰赤色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1106	土製品　土錘	長さ　3.1 胴径　1.3 重さ　3.7g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	にぶい黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1107	土製品　土錘	長さ　4.2 胴径　1.1 重さ　3.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	淡赤橙色	精良	やや不良	
1108	土製品　土錘	残存長 3.7 胴径　1.1 重さ　4.0g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデを施す。	褐灰色	精良	不良	
1109	土製品　土錘	長さ　4.5 胴径　1.2 重さ　6.0g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻付けて成形。全体にナデを施す。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む	良好	
1110	土製品　土錘	長さ　5.5 胴径　1.7 重さ　12.3g	紡錘形の管状土錘。やや大形。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体に丁寧なナデを施す。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1111	銅製品　鏃（はばき）	縦　2.4 横　2.4 厚さ　1.0	棟部は山形に作り、最大幅を持つ。刃先部断面三角形。刀身装着部は空洞。	薄い銅板を折り曲げる。刀先部で接合。棟部の一端に切欠きを施す。腐食により装飾等は不明。	緑灰色			腐食著しい。

表94　南島田－柱穴出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1112	陶器　こね鉢	口径（26.0）	口縁部やや内湾。口縁端部大きく拡張。端面はわずかに凹面となる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1113	土製品　瓦	長さ　20.1 幅　9.2 厚さ　2.4	丸瓦の断片。凹面きめの細かい布目痕。玉縁。	凸面は端縁と平行ナデ。凹面縁辺部の布目痕をナデ消す。側縁部はヘラケズリ。玉縁上面粗い縄目状の叩き。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1114	土製品　瓦	長さ　6.5 幅　7.8 厚さ　1.9	平瓦の断片。凹面きめの細かい布目痕。凸面に焼成前の凹みあり。	凸面側縁と平行の粗い縄目状の叩き。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1115	鉄製品　鉄釘	長さ3.8、幅0.5、厚さ0.5　頭部L字形に屈曲。断面方形。						

表95　南島田－土坑202（ＳＫ202）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1116	瓦質　羽釜	口径（19.3）	口縁部内湾。体部大きく内湾。断面三角形の短い鍔が水平に付く。全体に器壁薄い。脚付き。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内外面ナデ。鍔・脚部貼り付け。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
1117	陶器　こね鉢	口径（30.2）	体部直線的。口縁部やや肥厚。口縁端部上下に拡張し、先端部を平坦に仕上げる。端面は平坦。器壁は薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。体部内面仕上げナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	重ね焼。 魚住焼。
1118	磁器　碗	高台径 2.9	体部内湾。体部内面に蓮弁文・雷文を浮き彫り。同外面に細線。全体に器壁薄い。	全体に丁寧なロクロナデ。底部外面以外青白色釉を施す。高台削り出し。同内部は削り出さない。	素地白色	微細な黒粒をわずかに含む。	良好	青白磁。
1119	鉄製品　鉄釘	長さ4.4、幅0.6、厚さ0.6　頭部平坦。先端部欠損。断面方形。						

表96　南島田－土坑206（ＳＫ206）出土遺物観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1120	土師質　杯	底径（10.0）	体部やや内湾。やや大形か。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	赤褐色	精良	良好	

表97　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　杯）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1121	土師質　杯	底径　（6.0）	体部直線的。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1122	土師質　杯	底径　（7.4）	体部やや外反。全体に器壁厚いが、特に体部下位の器壁厚い。	底部回転糸切り。体部外面下部ナデか。体部内面・底部内面ロクロナデ。	暗褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
1123	土師質　杯	口径（13.0）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁部やや肥厚し、端部は尖る。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	
1124	土師質　杯	口径（12.4） 器高　3.2 底径　（8.2）	体部直線的。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	底部切り離し不明。体部・口縁部内外面ロクロナデ。	黄褐色	精良	良好	
1125	土師質　杯	口径（11.2） 器高　2.9 底径　（7.5）	体部・口縁部やや外反。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部回転ヘラ切り。体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部内外面ナデ。	黄褐色	精良	良好	
1126	土師質　杯	口径（11.1）	体部・口縁部直線的。器壁薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1127	土師質　杯	口径（11.3）	体部内湾。口縁部外反。口縁部肥厚し、端部は丸い。口縁部下位の器壁薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	橙色	精良	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1128	土師質　杯	口径（11.6）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁部肥厚し、端部は尖る。器壁薄い。	体部・口縁部内外面丁寧なロクロナデ。	淡黄色	精良	良好	
1129	土師質　杯	口径（11.6）	口縁部やや内湾。口縁部やや肥厚し、端部は尖る。	口縁部内外面ロクロナデ。	黄灰白色	精良	良好	
1130	土師質　杯	口径（10.9） 器高　3.0 底径　（7.4）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。全体に器壁薄い。	底部切り離し不明。摩耗により調整不明。	淡黄灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1131	土師質　杯	口径（12.0） 器高　3.2 底径　（7.5）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	底部切り離し不明。摩耗により調整不明。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	

表98　南島田－第1包含層出土遺物（土師質　皿）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1132	土師質　皿	口径　（6.8） 器高　1.3 底径　（6.4）	口縁部短く直立気味。口縁端部はやや外反し、先端部を尖らせる。底部平底。	底部回転糸切り。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	口縁部煤付着。法量不正確。
1133	土師質　皿	口径　（7.2） 器高　1.6 底径　（5.1）	口縁部直線的で、やや肥厚。口縁端部は丸い。底部平底。	底部回転ヘラ切りか。口縁部内外面ロクロナデ。	淡橙色	精良	良好	
1134	土師質　皿	口径　（9.0） 器高　1.5 底径　（7.9）	口縁部断面三角形で、やや内湾。口縁端部は尖る。底部平底。	底部回転糸切りか。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1135	土師質 皿	口径 (8.2) 器高 1.4 底径 (5.8)	口縁部外反。口縁端部は丸い。底部平底。	底部回転ヘラ切り。底部外面以外ロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	口縁部煤付着。
1136	土師質 皿	口径 (8.6) 器高 1.9 底径 (6.2)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部平底。	底部回転ヘラ切り。口縁部外面ロクロナデ。口縁部外面以外調整不明。	橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1137	土師質 皿	口径 (8.9) 器高 2.0 底径 (7.0)	口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。底部平底。器壁厚い。	底部回転ヘラ切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1138	土師質 皿	口径 (7.2) 器高 1.5 底径 (5.5)	口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。底部丸底。	底部外面ユビオサエ。底部外面以外ロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
1139	土師質 皿	口径 (8.2) 器高 1.1 底径 (6.4)	口縁部直線的。口縁端部は丸い。底部平底か。	底部外面ユビオサエ。底部外面以外ロクロナデ。	浅黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
1140	土師質 皿	口径 (8.3) 器高 1.5 底径 (7.5)	口縁部直線的でやや肥厚。口縁端部はやや尖る。底部丸底か。	底部外面ユビオサエ。底部外面以外ロクロナデ。	赤橙色	微砂粒を少量含む。	良好	口縁部煤付着。
1141	土師質 皿	口径 (6.4) 器高 1.2 底径 (4.7)	口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。底部丸底。	摩耗により調整不明。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1142	土師質 皿	口径 (7.4) 器高 1.3 底径 (5.5)	口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。底部平底か。	底部切り離し不明。口縁部内外面ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1143	土師質 皿	口径 (8.4) 器高 0.8 底径 (6.5)	口縁部短く、直線的。口縁端部は丸い。器壁やや薄い。底部平底か。	底部切り離し・調整不明。口縁部内外面ロクロナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	口縁部煤付着。	

表99　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　椀）観察表

番号	器　種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1144	土師質　椀	口径（11.4）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は丸い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1145	土師質　椀	口径　（9.9）	体部内湾。口縁部直線的で、端部は尖る。口縁部の器壁薄い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
1146	土師質　椀	口径（11.9）	体部・口縁部内湾。体部上位に膨らみを持つ。口縁端部は尖る。	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ナデ。内面丁寧なナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1147	土師質　椀	口径（11.4）	体部・口縁部直線的で、やや肥厚。口縁端部は尖る。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	灰黄褐色	微砂粒を多く含む。	不良	
1148	土師質　椀	口径（11.9）	体部内湾か。口縁部直線的。口縁端部は尖る。口縁部の器壁薄い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ナデか。内面丁寧なナデか。	橙色	精良	良好	
1149	土師質　椀	口径（12.3）	体部やや内湾。口縁部直線的で、肥厚。口縁端部は丸い。体部の器壁厚い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1150	土師質　椀	口径（12.0）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖る。口縁部の器壁薄い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	淡黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1151	土師質　椀	高台径(4.6)	体部内湾。断面三角形の低い高台が付く。	体部外面下部粗いナデ。内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	

表100　南島田－第１包含層出土遺物（土師質　鍋・羽釜）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1152	土師質　鍋	口径（33.1）	「く」の字状口縁。口縁端部わずかに肥厚し、端面を平坦に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデ。	にぶい褐色	砂粒を多く含む。	やや不良	
1153	土師質　鍋	口径（17.7）	体部球形。口縁部「く」の字状に屈曲。口縁端部を平坦に仕上げる。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ヘラケズリ、外面斜め方向の粗い平行叩き目。	黒褐色	微砂粒を多く含む。	良好	
1154	土師質　羽釜	口径（19.6）	体部・口縁部直線的。断面三角形状の小さい鍔が付く。口縁端部わずかに肥厚し、平坦に仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。内面全体横方向のハケ目。同外面斜め方向のハケ目。鍔貼り付け。	にぶい橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
1155	土師質　羽釜	口径（24.5）	口縁部やや外反。断面三角形状の小さい鍔が付く。口縁端部肥厚し、平坦に仕上げる。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。鍔貼り付け。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	鍔下部煤付着。
1156	土師質　羽釜	口径（27.5）	体部・口縁部直線的。短い口縁部に、断面台形状の短い鍔が水平に付く。口縁端部は丸い。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエ後、縦方向のナデ。鍔貼り付け。	褐灰色	砂粒を多く含む。	良好	鍔下部煤付着。
1157	土師質　羽釜	口径（30.0）	体部・口縁部直立。断面台形状の短い鍔が水平に付く。口縁端部やや肥厚し、平坦に仕上げる。	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面・体部内面ハケ目。体部外面縦方向のハケ目。鍔貼り付け。	にぶい赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	
1158	土師質　鍋	口径（28.4）	体部やや内湾。口縁部やや外反。断面三角形状の短い突起状の鍔が付く。口縁端部は尖る。	口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面・体部内面横方向のハケ目。体部外面斜め方向の粗い叩き目。鍔貼り付け。	にぶい赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	鍔下部煤付着。
1159	土師質　羽釜	口径（29.5）	体部直線的。口縁部内湾。断面方形の短い鍔が水平に付く。口縁端部は丸い。	口縁部内外面・鍔部ヨコナデ。体部内外面ナデ。鍔貼り付け。	褐色	砂粒を多く含む。	良好	鍔下部煤付着。

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1160	土師質　羽釜	口径（22.0）	体部・口縁部やや内湾。断面三角形状の小さい鍔が付く。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエ。鍔貼り付け。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	鍔下部煤付着。

表101　南島田－第１包含層出土遺物（瓦器　椀・皿）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1161	瓦器　椀	口径（12.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ヨコナデ、内面ナデ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
1162	瓦器　椀	口径（14.8）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後ナデ。同内面ナデ後、幅広の暗文を施す。	暗褐色	微砂粒を少量含む。	良好	和泉型。
1163	瓦器　椀	口径（11.0）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部はやや尖る。器壁厚め。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。底部外面ナデ。	灰白色 一部黒色	微砂粒を少量含む。	良好	
1164	瓦器　椀	口径（11.8） 器高　4.3 底径　（7.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。無高台。	口縁部・体部内外面ヨコナデ。	灰白色	精良	良好	
1165	瓦器　椀	口径（12.8）	体部・口縁部内湾。体部の器壁厚め。	調整不詳。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
1166	瓦器　椀	口径（12.2）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。同内面ナデ。	黒褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	和泉型。
1167	瓦器　椀	口径（11.9）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	摩耗により調整不明。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1168	瓦器　椀	口径（15.6）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖る。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	暗灰色	精良	良好	
1169	瓦器　椀	口径（12.9）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。器壁厚い。	口縁部・体部内外面ヨコナデ。	褐灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	法量不正確。
1170	瓦器　椀	口径（13.9）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	口縁部・体部内外面ヨコナデ。	灰色	精良	良好	
1171	瓦器　椀	口径（11.8）	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部はやや尖る。	口縁部・体部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	明灰色	精良	良好	法量不正確。
1172	瓦器　椀	口径（12.9）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部はやや尖る。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	灰色	精良	やや不良	法量不正確。
1173	瓦器　椀	口径（14.1）	口縁部直線的。口縁端部は丸い。	口縁部内外面強いヨコナデ。体部内面ナデ後ヘラケズリか。同外面ユビオサエ後ナデ。	灰色	精良	良好	和泉型。法量不正確。
1174	瓦器　椀	口径（13.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。	口縁部・体部上部内外面ヨコナデ。	暗灰色	精良	良好	
1175	瓦器　椀	口径（14.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。	口縁部内外面・体部内面ロクロナデ。体部外面ユビオサエ。	暗灰色	精良	良好	
1176	瓦器　椀	口径（13.9）	口縁部直線的。口縁端部は尖る。	調整不詳。	灰黄色	微砂粒を多く含む。	良好	
1177	瓦器　椀	口径（14.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を含む。	良好	
1178	瓦器　椀	口径（14.5）	体部内湾。口縁部やや外反。口縁端部は尖る。	口縁部内外面・体部内面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。	灰白色	精良	良好	
1179	瓦器　皿	口径　（9.0） 器高　1.9 底径　（7.2）	口縁部短く、やや外反。口縁端部は尖る。器壁厚め。	口縁部内外面強いヨコナデ。底部内面ナデ。同外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	

表102　南島田－第１包含層出土遺物（国内産陶器　すり鉢・こね鉢・盤・甕）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1180	陶器　すり鉢	底径（18.2）	体部直線的。平底。体部内面に９条単位の櫛描条線。	体部内外面ロクロナデ。底部外面ユビオサエ後ナデ。	淡赤褐色	砂粒を多く含む。	良好	備前焼。
1181	陶器　こね鉢	口径（21.6）	口縁部直線的。端部上下に拡張し、先端部を尖らせる。端面はやや凹面に仕上げる。器壁薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む	良好	魚住焼。
1182	陶器　こね鉢	口径（23.8）	口縁端部上下に拡張し、先端部を丸くする。端面は丸く仕上げる。器壁はやや薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1183	陶器　こね鉢	口径（22.2）	口縁部やや内湾。端部やや肥厚し、下方にやや拡張。先端部は尖る。端面は平坦に仕上げる。器壁薄い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1184	陶器　こね鉢	口径（24.0）	口縁端部やや外反し、上下に拡張。先端部は丸い。端面は凹面に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1185	陶器　こね鉢	口径（25.8） 器高　9.4 底径　（6.1）	体部・口縁部直線的。端部上下に大きく拡張し、先端部を丸くする。端面は平坦に仕上げる。体部外面凹凸顕著。器壁薄い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。底部糸切り後粗いナデを施す。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1186	陶器　こね鉢	口径（26.0）	口縁部やや外反。端部上下に拡張し、端面を平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1187	陶器　こね鉢	口径（26.7）	口縁端部やや肥厚し、上下にわずかに拡張。先端部は尖る。端面は平坦に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1188	陶器　こね鉢	口径（28.8）	口縁部直線的。端部上下に大きく拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸い。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1189	陶器　こね鉢	口径（30.4）	口縁部やや外反後、内湾。先端部・端面とも丸く仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1190	陶器　こね鉢	口径（32.1）	口縁端部やや肥厚し、上下に拡張。先端部は丸い。端面は凹面に仕上げる。	口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を多く含む。	不良	魚住焼。
1191	陶器　盤	－	口縁部球形に近い玉縁状。	口縁部内外面ロクロナデ。黄褐釉を施す。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	良好	瀬戸焼。
1192	陶器　甕	－	体部小片。	外面に細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1193	陶器　甕	－	体部小片。	外面に細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1194	陶器　甕	－	体部小片。	外面に綾杉状の叩き。内面ナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
1195	陶器　甕	－	体部小片。	外面に綾杉状の叩き。内面青海波文ナデ消し。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
1196	陶器　甕	－	体部小片。	外面に綾杉状の叩き。内面丁寧なナデ。	灰色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
1197	陶器　甕	－	体部小片。	外面に細かい格子目叩き。内面青海波文ナデ消し。	灰色	微砂粒を多く含む。	良好	

表103　南島田－第１包含層出土遺物（輸入陶磁器）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1198	磁器　瓶？	口径　（3.7）	注口部の小片。口縁部外反した後直立。口縁端部は丸い。	全体に丁寧なロクロナデ。内外面に青白色釉をやや厚めに施す。	素地白色	やや粗い。	良好	青白磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1199	磁器　椀	口径（16.8）	口縁部大きな玉縁。	全体にロクロナデ。白色透明釉を施す。口縁部外面の釉厚く、部分的になだれる。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	白磁。 法量不正確

表104　南島田－第1包含層出土遺物（土製品・石製品・金属製品）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1200	土製品　土錘	長さ　4.1 胴径　1.4 重さ　7.1g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	褐色	微砂粒を少量含む。	不良	
1201	土製品　土錘	長さ　3.5 胴径　1.2 重さ　3.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1202	土製品　土錘	長さ　3.9 胴径　1.9 重さ　2.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	橙色	精良	良好	
1203	土製品　土錘	長さ　3.8 胴径　1.7 重さ　7.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1204	土製品・土錘	長さ　2.8 胴径　1.0 重さ　2.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1205	土製品　土錘	長さ　4.0 胴径　1.0 重さ　9.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	明褐灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1206	土製品　土錘	長さ　7.4 胴径　2.0 重さ　22.3g	紡錘形の管状土錘。やや大形。	棒に粘土を巻き付けて成形。ユビオサエ後ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1207	土製品　土錘	長さ　6.5 胴径　1.5 重さ　12.9g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	褐灰色	精良	不良	
1208	土製品　土錘	長さ　5.0 胴径　1.5 重さ　9.5g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	明黄褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1209	石製品　砥石	長さ　9.0 幅　4.1 厚さ　2.4	平面・断面とも長方形。折損。	表裏２面使用。	淡黄色	（凝灰岩製）		中砥。
1210	石製品　砥石	長さ　5.9 幅　1.8 厚さ　2.0	平面長方形。断面台形。折損。	４面とも使用。	灰白色	（岩質不詳）		仕上げ砥。
1211	石製品　砥石	長さ　2.2 幅　3.7 厚さ　0.4	偏平。平面・断面とも長方形。片面の中央部凹む。折損。	表裏２面使用。	にぶい褐色	（泥岩製）		仕上げ砥。
1212	銅製品　銅銭	径　2.0	「聖宋元宝」　初鋳年　宋（1101年）　篆書体。加工銭。					
1213	銅製品　銅銭	径　2.4	「皇宋通宝」　初鋳年　宋（1039年）　篆書体。					
1214	鉄製品　刀子	長さ6.3、幅1.4、厚さ0.2　先端部欠損。刃部断面三角形。						
1215	鉄製品　釘？	長さ3.0、幅0.4、厚さ0.3　L字形に屈曲。						
1216	鉄製品　釘	長さ3.5、幅0.4、厚さ0.3　両端欠損。断面方形。						
1217	鉄製品　釘	長さ3.2、幅0.5、厚さ0.5　両端欠損。断面方形。						
1218	鉄製品　釘	長さ5.3、幅0.4、厚さ0.3　頭部欠損。断面方形。						

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1219	鉄製品　釘	長さ6.9、幅0.5、厚さ0.5　頭部欠損。断面方形。						
1220	鉄製品　釘	長さ5.0、幅0.6、厚さ0.5　頭部偏平。断面方形。						
1221	鉄製品　釘	長さ4.8、幅0.5、厚さ0.4　両端欠損。断面方形。						
1222	鉄製品　釘	長さ4.0、幅0.6、厚さ0.5　頭部L字形に屈曲。断面方形。						
1223	鉄製品・釘	長さ5.7、幅0.6、厚さ0.5　両端欠損。断面方形。						
1224	鉄製品　釘	長さ5.2、幅0.5、厚さ0.5　頭部欠損。断面方形。						
1225	鉄製品　釘	長さ6.7、幅0.4、厚さ0.4　頭部欠損。断面方形。						

表105　南島田－第２包含層出土遺物（土師質　杯・皿・椀・鍋）観察表

番号	器　　種	法量（cm）	形　態　の　特　徴	手　法　の　特　徴	色　調	胎　土	焼　成	備　　考
1226	土師質　杯	口径（11.8）	体部・口縁部直線的。口縁端部は丸い。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	淡赤褐色	精良	良好	
1227	土師質　杯	口径（10.4）	体部やや外反。口縁部外反。口縁端部は丸く仕上げる。	体部・口縁部内外面ロクロナデ。	黄灰色	精良	良好	
1228	土師質　杯	底径（6.1）	体部内湾。底部やや突出。	底部切り離し不明。底部外面以外ロクロナデ。底部外面周縁部の粘土をヘラで削り取る。	淡赤褐色	精良	良好	
1229	土師質　杯	底径（8.2）	体部やや内湾。底部の器壁厚い。大形の製品か。	底部回転糸切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1230	土師質　皿	口径　（7.4） 器高　1.4 底径　（5.9）	口縁部斜め上方に立上り、先端部を丸く仕上げる。平底で、底部と口縁部の境は鋭い稜をなす。	底部回転ヘラ切り。口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	橙色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1231	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.1 底径 (6.5)	口縁部斜め上方に短く立ち上がる。口縁端部やや外反し、先端部を尖らせる。平底。	底部回転ヘラ切り。口縁部内外面ロクロナデ。	浅橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1232	土師質 皿	口径 (8.4) 器高 1.6 底径 (8.2)	断面三角形の短い口縁部が垂直気味に立ち上がる。口縁端部は尖る。平底。	底部回転ヘラ切りか。底部外面以外ロクロナデ。	淡赤橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1233	土師質 皿	口径 (7.7) 器高 1.4 底径 (6.5)	口縁部斜め上方に立ち上り、先端部を丸く仕上げる。平底か。	底部外面ユビオサエか。全体摩耗により調整不明。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1234	土師質 皿	口径 (7.3) 器高 1.2 底径 (5.9)	口縁部やや内湾し、斜め上方に延びる。先端部を丸く仕上げる。平底。	底部外面ユビオサエ。底部外面以外ロクロナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1235	土師質 皿	口径 (7.8) 器高 1.4 底径 (6.0)	口縁部斜め上方に直線的に立ち上り、先端部を丸く仕上げる。平底。	底部外面ユビオサエ。口縁部内外面ロクロナデ。底部内面ナデ。	赤橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1236	土師質 椀	口径 (11.6)	体部やや内湾。口縁部直線的。口縁端部やや肥厚し、先端部を丸く仕上げる。	口縁部強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面全体ナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
1237	土師質 椀	口径 (11.5)	体部・口縁部直線的。口縁端部やや肥厚し、先端部を丸く仕上げる。体部外面上位に稜が認められる。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ナデ。内面全体丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
1238	土師質 椀	口径 (11.4)	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部やや肥厚し、先端部を丸く仕上げる。体部の器壁やや厚い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ナデ。内面全体丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	良好	
1239	土師質 椀	口径 (12.6)	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部やや肥厚し、先端部は丸い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	にぶい褐色	微砂粒を少量含む。	やや不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1240	土師質　椀	口径（12.6）	体部内湾。口縁部直線的で、やや肥厚。口縁端部は丸い。器壁は薄い。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面粗いナデ。内面丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を少量含む。	良好	体部内外面煤付着。
1241	土師質　椀	口径（11.8）	体部内湾。口縁部やや内湾。口縁先端部は丸い	口縁部外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ後粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	淡赤橙色	微砂粒を多く含む。	不良	
1242	土師質　椀	口径（12.8）	体部・口縁部やや内湾。口縁部やや肥厚。口縁端部外反し鋭く尖る。	全体に丁寧なヨコナデ。	淡黄色	精良	良好	
1243	土師質　椀	口径（12.9）	体部やや内湾か。口縁部斜め上方に直線的に立ち上がる。	体部・口縁部外面粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
1244	土師質　椀	口径（11.9）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部やや肥厚し、先端部を丸く仕上げる。	口縁部外面強いヨコナデ。体部外面ユビオサエ後、粗いナデ。内面全体丁寧なナデ。	淡黄色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
1245	土師質　椀	口径（14.2）	体部上位で屈曲。口縁部直線的。口縁端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面ユビオサエ。内面全体丁寧なナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	不良	
1246	土師質　椀	高台径 3.9	断面三角形、部分的に方形状の安定した高台が付く。体部内湾。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	
1247	土師質　椀	高台径 5.1	断面三角形で、やや楕円形を呈するやや高めの高台が付く。やや大形か。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1248	土師質　椀	高台径 4.5	断面三角形、部分的に方形状の安定した高台が付く。やや大形か。	内面丁寧なナデ。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	浅黄橙色	微砂粒を多く含む。	良好	
1249	土師質　鍋	口径（20.9）	「く」の字状口縁。口縁端部平坦。	口縁部内外面ヨコナデ。	にぶい褐色	微砂粒を多く含む。	良好	外面煤付着。
1250	土師質　鍋	口径（25.1）	「く」の字状口縁。口縁端部拡張し、先端部を尖らせる。	口縁部内外面ヨコナデ。	赤褐色	微砂粒を多く含む。	良好	

表106　南島田－第２包含層出土遺物（瓦器　椀・皿）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1251	瓦器　椀	口径（13.4） 器高　4.5 高台径(5.5)	体部内湾。口縁部やや外反し、端部を丸く仕上げる。幅広で低い高台が付く。	口縁部内外面・体部内面・底部内面周縁部ヨコナデ。底部内面中央部ナデ。同外面ユビオサエ。貼り付け高台。	暗灰色	精良	良好	
1252	瓦器　椀	口径（13.8） 器高　4.4 高台径(6.0)	体部上位で屈曲。口縁部やや外反し、端部は尖る。幅広で低い高台が付く。	口縁部内外面ヨコナデ。体部・底部内面ナデ。体部外面ユビオサエ。貼り付け高台。	灰褐色	微砂粒を多く含む。	やや不良	ほぼ完形。
1253	瓦器　椀	口径（11.7）	体部内湾。口縁部直線的。口縁端部は尖る。	口縁部内外面ヨコナデ。内面ナデ。体部外面ユビオサエ。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
1254	瓦器　椀	口径（11.8）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや肥厚し、先端部は丸い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内面ナデ。同外面ユビオサエか。	暗灰色	精良	やや不良	和泉型。
1255	瓦器　椀	口径（13.6）	口縁部やや内湾し、先端部丸い。器壁厚め	口縁部内外面ヨコナデ。	暗灰色	精良	良好	
1256	瓦器　椀	口径（13.3）	口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。	黒色	微砂粒を多く含む。	良好	
1257	瓦器　椀	口径（13.6）	口縁部やや外反し、端部尖る。器壁厚い。	内外面ヨコナデ。炭素未吸着。	灰白色	微砂粒を少量含む。	良好	
1258	瓦器　椀	口径（14.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部内外面ナデか。	暗灰色	微砂粒を多く含む。	良好	
1259	瓦器　椀	口径（14.5）	口縁端部尖る。器壁厚い。	口縁部内外面ヨコナデ。	暗灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1260	瓦器　椀	口径（14.9）	体部やや内湾。口縁部斜め上方に直線的に立ち上がる。先端部は丸い。器壁厚い。	摩耗のため調整不明。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1261	瓦器 椀	－	体部下半部大きく外方に開く。低い高台が付く。	底部内面ナデ後、斜格子状の暗文を施す。貼り付け高台。高台部ヨコナデ。	黒灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1262	瓦器 皿	口径 (8.7) 器高 1.7 底径 (7.0)	口縁部大きく外反。口縁先端部は丸い。やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ後、粗い渦巻状の暗文を施す。外面ユビオサエ。	灰色 黒褐色	微砂粒を少量含む。	良好	
1263	瓦器 皿	口径 (8.8)	口縁部内湾。口縁先端部やや尖る。丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデか。外面ユビオサエ。	灰色	精良	良好	
1264	瓦器 皿	口径 (8.9)	口縁部器壁薄く、やや外反。口縁先端部は尖る。丸底状。	口縁部内外面強いヨコナデ。底部内面ナデ。外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	法量不正確。
1265	瓦器 皿	口径 (8.3)	口縁部外反。口縁端部肥厚し、先端部丸い。やや丸底状。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ後、簡略化された暗文を施す。底部外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1266	瓦器 皿	口径 (7.9) 器高 1.4 底径 (7.1)	口縁部直立後、やや外反。口縁先端部尖る。平底。	口縁部内外面・底部内面周縁部ヨコナデ。外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1267	瓦器 皿	口径 (7.9) 器高 1.1 底径 (6.8)	口縁部外反。口縁先端部やや尖る。平底。	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデ。同外面ユビオサエ。	灰色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1268	瓦器 皿	口径 (6.9) 器高 1.1 底径 (5.0)	口縁部外反。口縁端部肥厚し、先端部は丸い	口縁部内外面ヨコナデ。底部内面ナデか。同外面ユビオサエ。	黒灰色	微砂粒を多く含む。	良好	

表107　南島田－第２包含層出土遺物（国内産陶器　鉢・甕）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1269	陶器　こね鉢	口径（23.8）	口縁部やや内湾。端部をわずかに上方につまみ上げる。端面は丸い。	口縁部内外面ロクロナデ。内面仕上げナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	不良	魚住焼。
1270	陶器　こね鉢	口径（25.2）	口縁部やや外反。端部やや肥厚し、内側にわずかに屈曲。端面は丸い。	口縁部内外面・体部外面ロクロナデ。体部内面ナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1271	陶器　こね鉢	口径（25.2）	口縁部やや内湾。端部上方に拡張し、先端部を尖らせる。端面は丸い。	内外面ロクロナデ。内面仕上げナデ。	灰白色	微砂粒を多く含む。	良好	魚住焼。
1272	陶器　こね鉢	口径（25.8）	口縁端部大きく拡張。端面は平坦。	内外面ロクロナデか。	黄灰色	微砂粒を多く含む。	不良	魚住焼。
1273	陶器　甕	－	体部小片。	外面細かい格子目叩き。内面ナデ。	灰色	微砂粒を少量含む。	良好	
1274	陶器　甕	－	体部小片。器壁厚い。	外面平行条線叩き。内面ユビオサエ後粗いナデ。	灰色	砂粒を多く含む。	良好	
1275	陶器　甕	－	体部小片。器壁やや厚い。	外面平行条線叩き。内面ナデ。	浅黄色	微砂粒を多く含む。	やや不良	
1276	陶器　甕	－	体部から頸部にかけての小片。	外面平行条線叩き。内面ナデ。	黒色	微砂粒を多く含む。	良好	瓦質。 魚住焼。

表108　南島田－第２包含層出土遺物（輸入陶磁器）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1277	磁器　碗	口径（15.8）	体部やや内湾。口縁部やや外反。口縁端部やや尖る。内外面に櫛目文、内面に幅広の沈線を施す。	全体に丁寧なロクロナデ。内外面にやや黄色味を帯びた淡緑色釉を施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	同安窯系青磁。

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1278	磁器　碗	口径（16.0）	体部・口縁部やや内湾。口縁端部は尖る。内外面に櫛目文、内面に沈線を施す。	全体に丁寧なロクロナデ。内外面にやや黄色味を帯びた淡緑色釉を施す。	素地白色	微細な黒粒を含む。	良好	同安窯系青磁。
1279	磁器　碗	口径（15.7）	口縁部やや外反。口縁先端部は尖る。外面に幅広の鎬蓮弁文を施す。	全体に丁寧なロクロナデ。内外面に緑色釉をやや厚めに施す。	素地灰白色	微細な黒粒を含む。	良好	龍泉窯系青磁。
1280	磁器　碗	－	内面に櫛目文。	全体に丁寧なロクロナデ。黄色味を帯びた白色透明釉を施す。	素地灰白色	精良	良好	白磁。
1281	磁器　小皿？	口径（4.8）	体部内湾。端部平坦。体部外面に放射状の沈線。	型作り。内面は丁寧なナデにより、平滑に仕上げる。端部から内面に白色透明釉を施す。	素地白色	微細な黒粒を少量含む。	良好	白磁。

表109　南島田－第２包含層出土遺物（土製品・石製品・鉄製品）観察表

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1282	土製品　土錘	長さ　4.3 胴径　1.1 重さ　5.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1283	土製品　土錘	長さ　3.8 胴径　1.2 重さ　5.3g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。ナデ。	にぶい橙色	精良	良好	
1284	土製品　土錘	長さ　3.5 胴径　1.1 重さ　5.2g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	

番号	器種	法量（cm）	形態の特徴	手法の特徴	色調	胎土	焼成	備考
1285	土製品　土錘	長さ　3.7 胴径　1.4 重さ　6.8g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	良好	
1286	土製品　土錘	長さ　4.4 胴径　1.8 重さ　9.7g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	浅黄橙色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1287	土製品　土錘	長さ　4.9 胴径　1.4 重さ　7.4g	紡錘形の管状土錘。	棒に粘土を巻き付けて成形。全体にナデ。	にぶい橙色	微砂粒を少量含む。	やや不良	
1288	石製品　石鍋	－	鍔部小片。断面台形状の鍔が付く。	内外面とも丁寧なケズリを施し、器面を平滑に仕上げる。	黒色	（滑石製）		煤付着。
1289	石製品　石鍋	－	体部小片。	内外面とも丁寧なケズリを施し、器面を平滑に仕上げる。	灰赤色	（滑石製）		
1290	鉄製品　鉄釘	長さ7.7、幅0.5、厚さ0.5　両端欠損。断面方形。						
1291	鉄製品　鉄釘	長さ4.9、幅1.0、厚さ0.6　頭部L字形に屈曲。先端部欠損。断面方形。						
1292	鉄製品　鉄釘	長さ4.3、幅0.7、厚さ0.4　頭部欠損。断面方形。						
1293	鉄製品　鉄釘	長さ4.8、幅0.8、厚さ0.6　両端欠損。断面方形。						
1294	銅製品　銅銭	径　2.5	「天禧通宝」　初鋳年　宋（1017年）　真書体。					
1295	銅製品　銅銭	径　2.3	「淳化元宝」　初鋳年　宋（990年）　行書体。					
1296	銅製品　銅銭	径　1.8	「皇宋通宝」　初鋳年　宋（1039年）　真書体。加工銭。					
1297	銅製品　銅銭	径　1.9	「至道元宝」　初鋳年　宋（995年）　草書体。加工銭。					

県道徳島鴨島線改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中島田遺跡
南島田遺跡

発行年月日　平成元年3月31日
編集・発行　徳島県教育委員会
徳島市万代町1丁目1
印　　刷　㈱教育出版センター
徳島市川内町平石流通団地

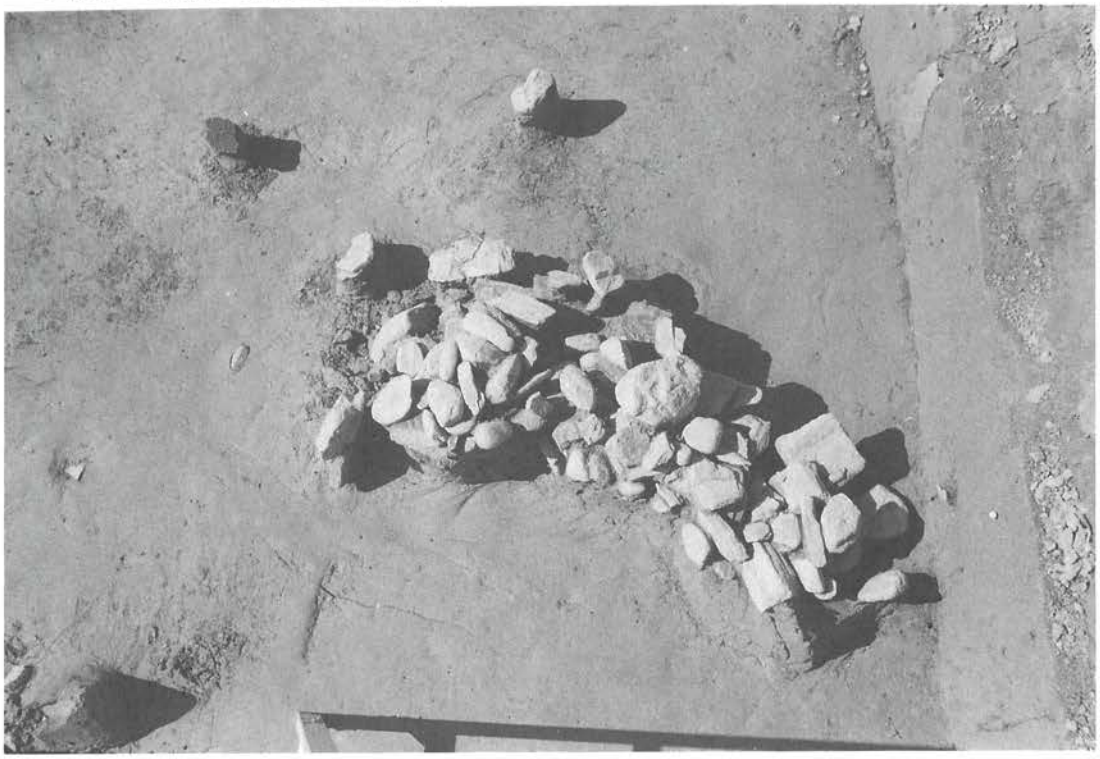
図　　版

図版１　中島田遺跡全景

(1) 遠景（眉山より望む）

(2) 近景（北より望む）

図版２　中島田－Ａ調査区の遺構(1)

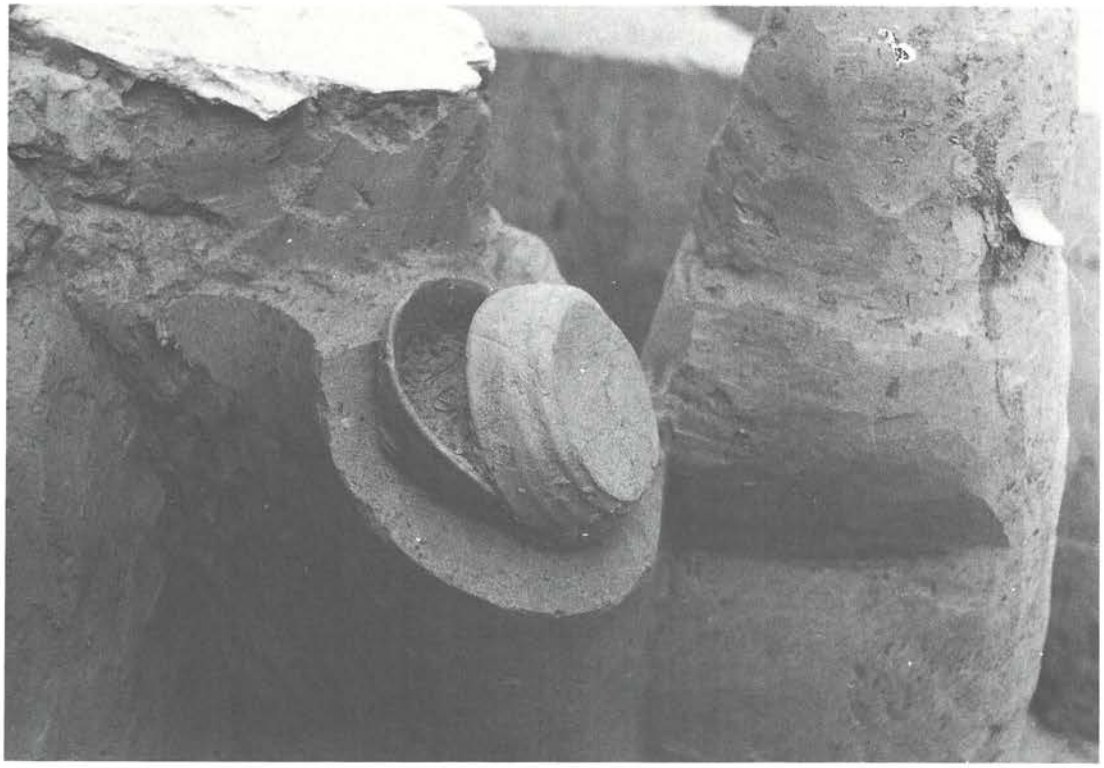


(1) 集石遺構201 検出状況

(2) 溝219 検出状況

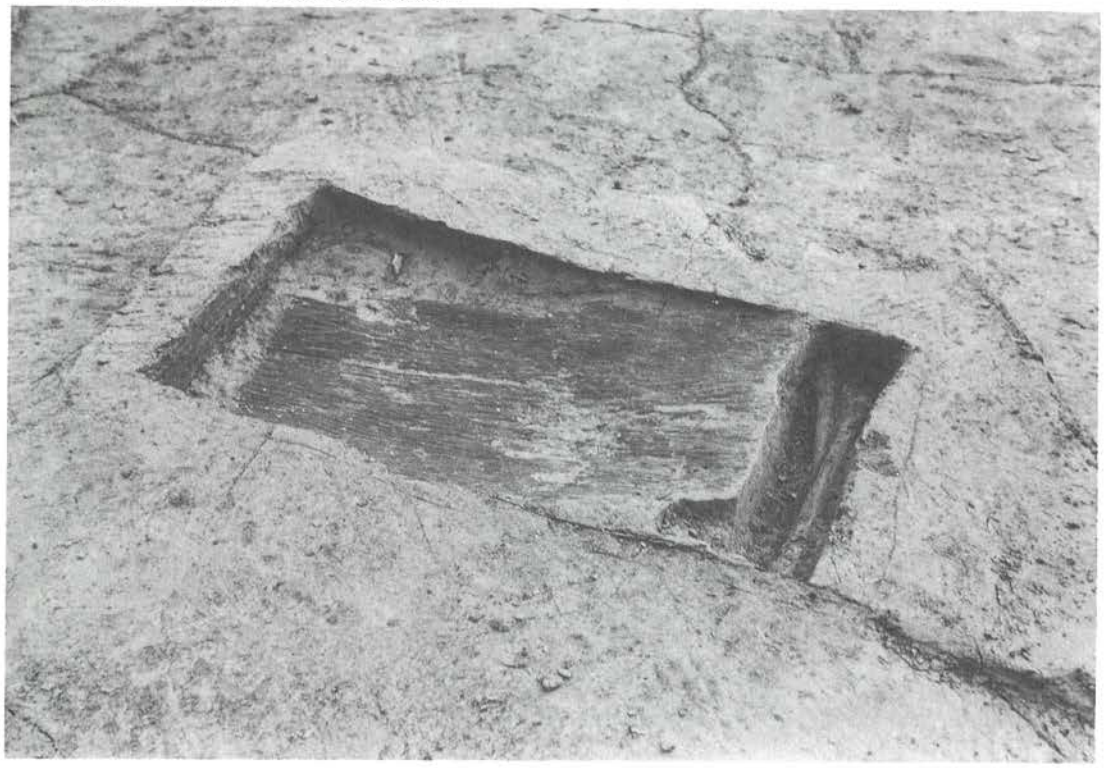
図版３　中島田－Ａ調査区の遺構(2)

(1) 土坑228 検出状況



(2) 土坑234「土師質杯」出土状況

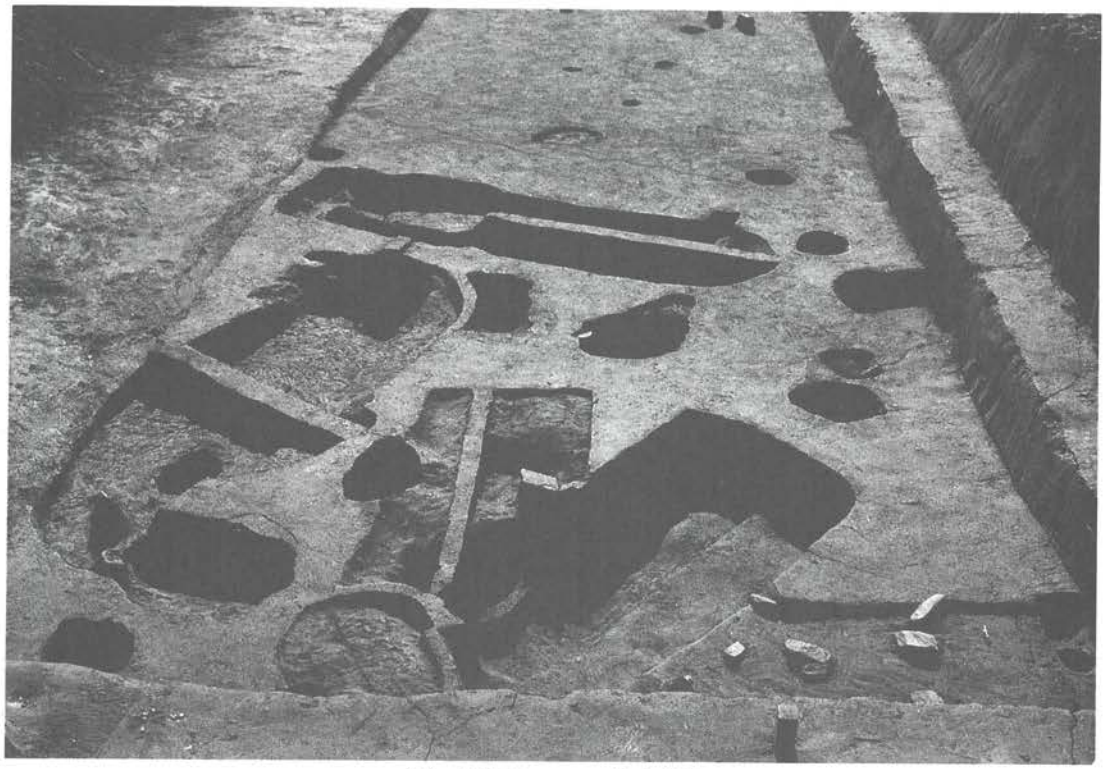
図版４　中島田－Ｂ調査区の遺構(1)



(1) 木棺墓 検出状況①

(2) 木棺墓 検出状況②

図版５　中島田－Ｂ調査区の遺構(2)

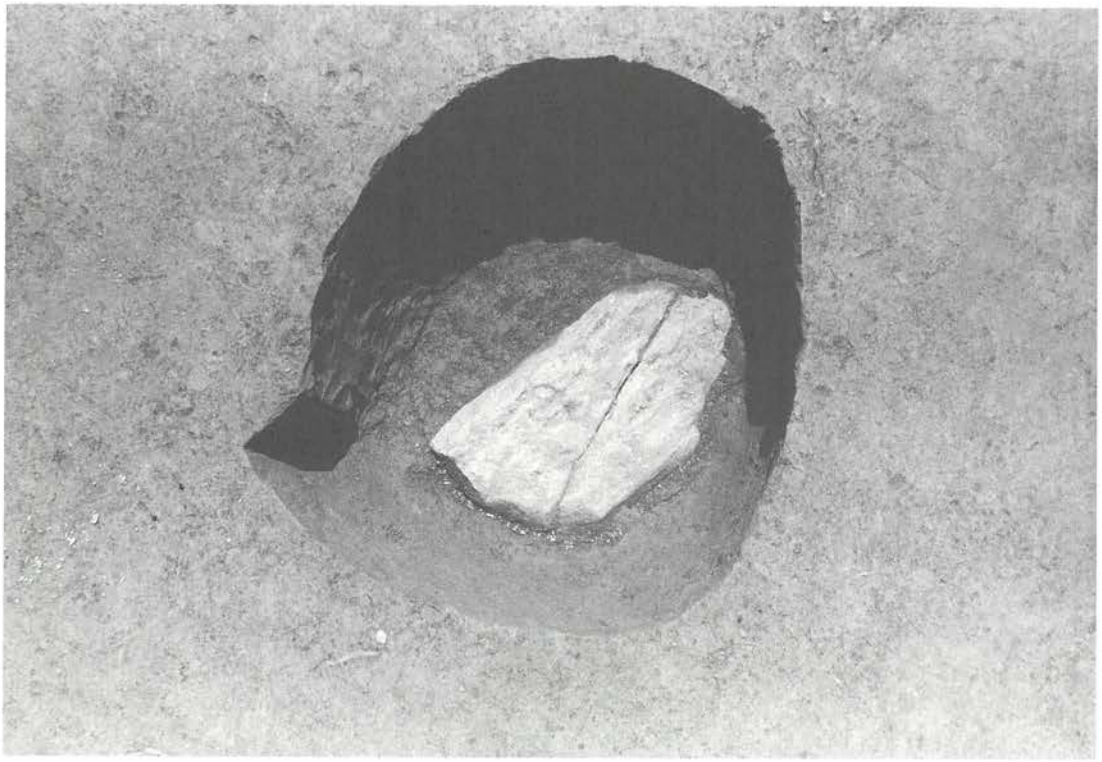


(1) 土坑202～205 検出状況

(2) 土坑207 検出状況

図版６　中島田－Ｂ調査区の遺構(3)

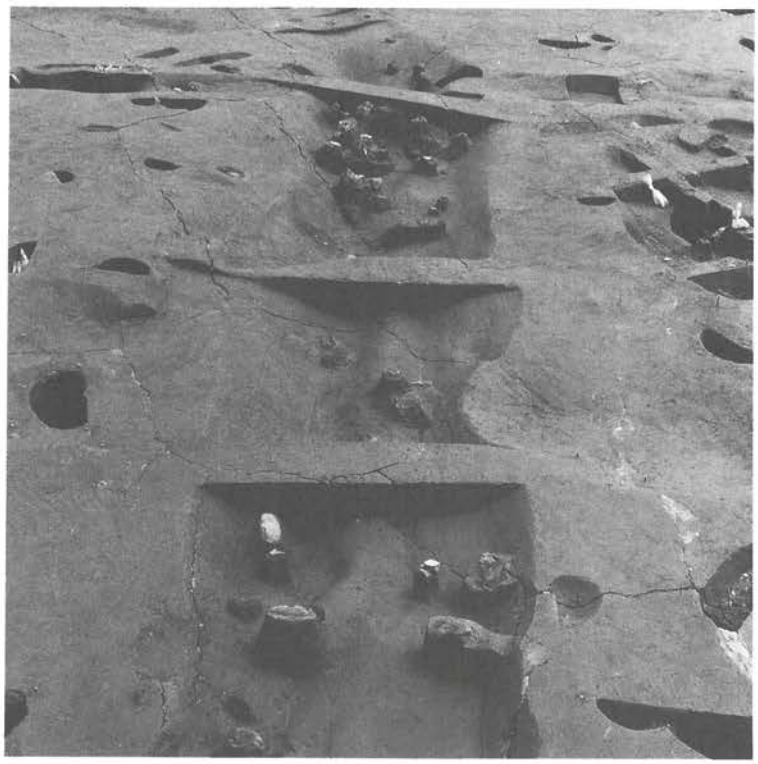
(1) 柱穴 検出状況



(2) 柱穴内の根石検出状況

図版７　中島田－Ｃ調査区の遺構(1)

(1) 全景（東より）



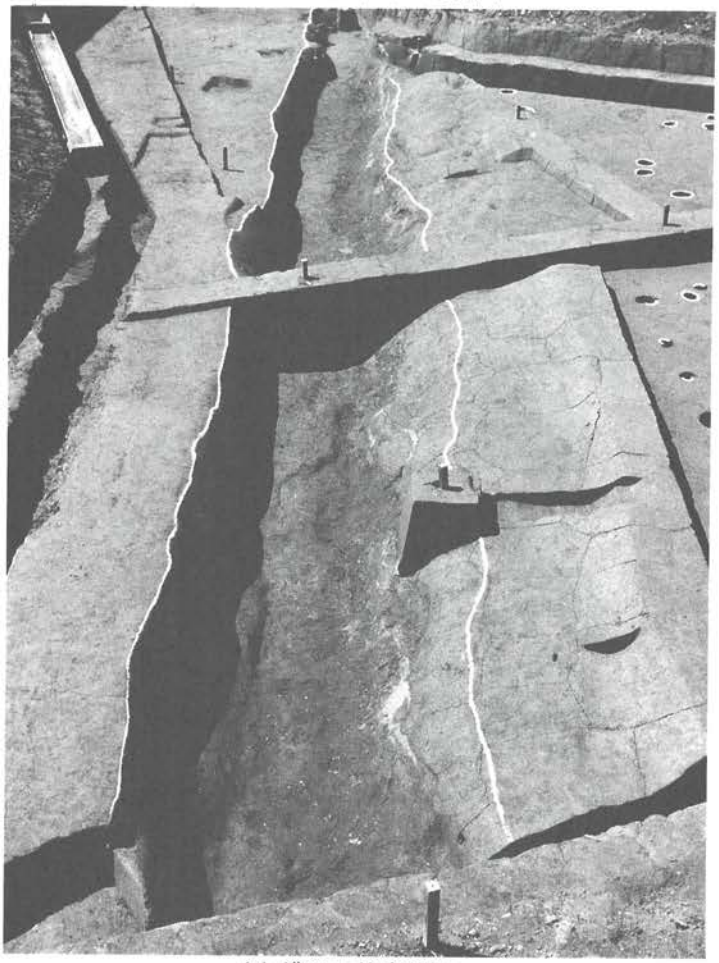
(2) 溝201 検出状況

図版８　中島田－Ｃ調査区の遺構(2)

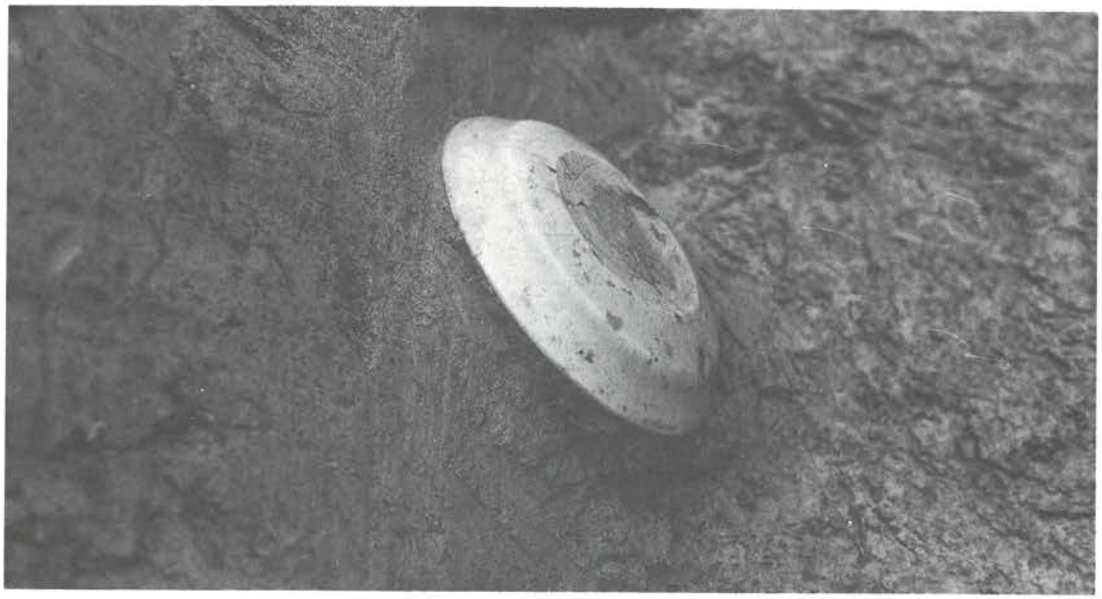
(1) 溝205 検出状況

(2) 土坑201 遺物出土状況

図版 9　中島田－D調査区東部の遺構(1)



(1) 溝205 検出状況



(2) 溝205「青磁皿」出土状況

図版10　中島田－D調査区東部の遺構(2)

(1) 溝206 検出状況

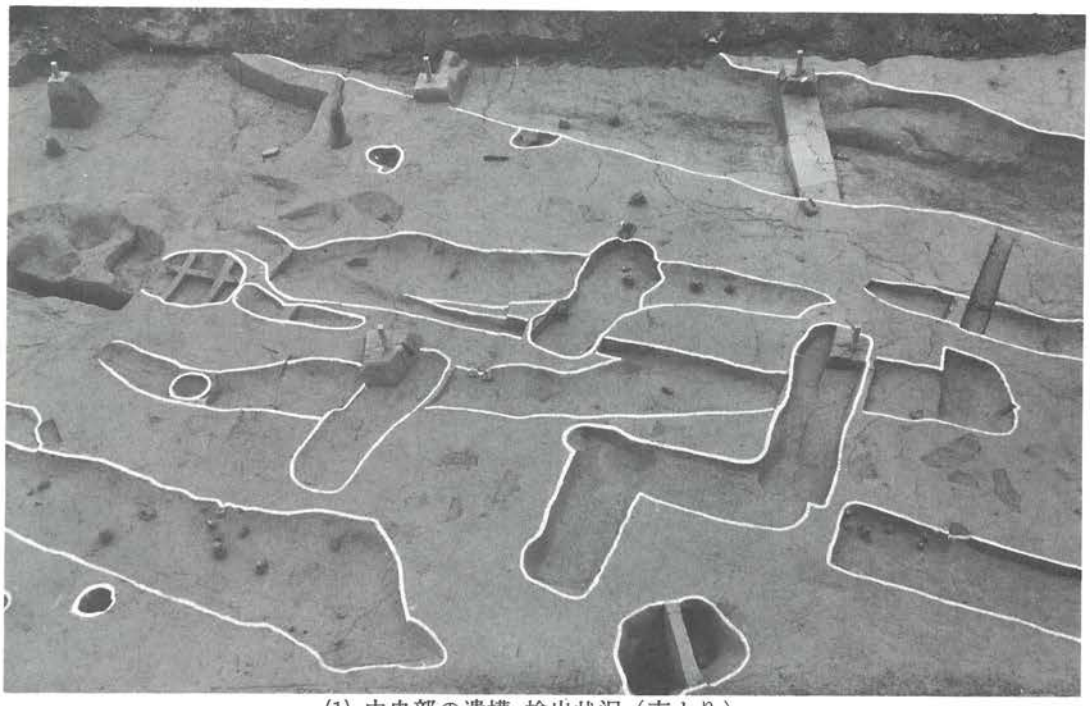
(2) 溝206 土器だまり 検出状況

図版11　中島田－D調査区西部の遺構(1)

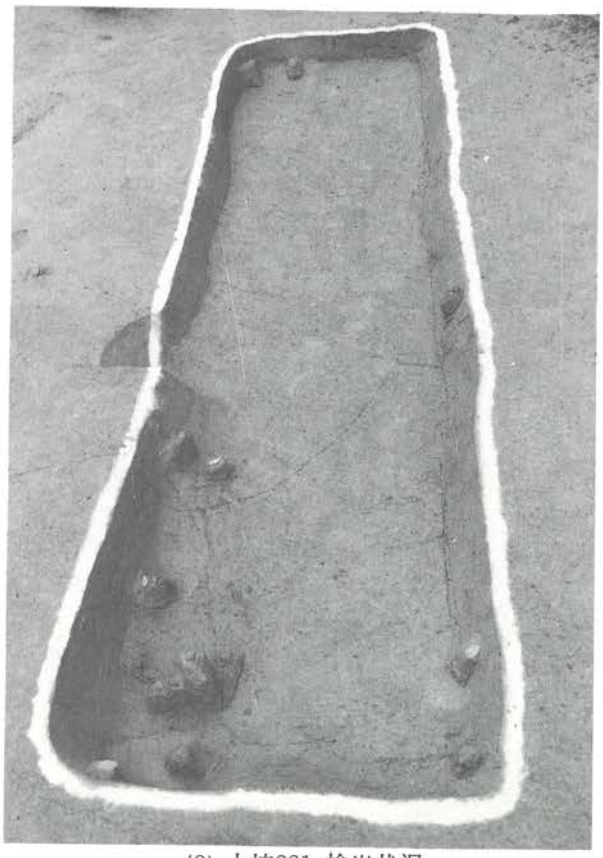
(1) 全景（東より）

(2) 全景（西より）

図版12　中島田－D調査区西部の遺構(2)

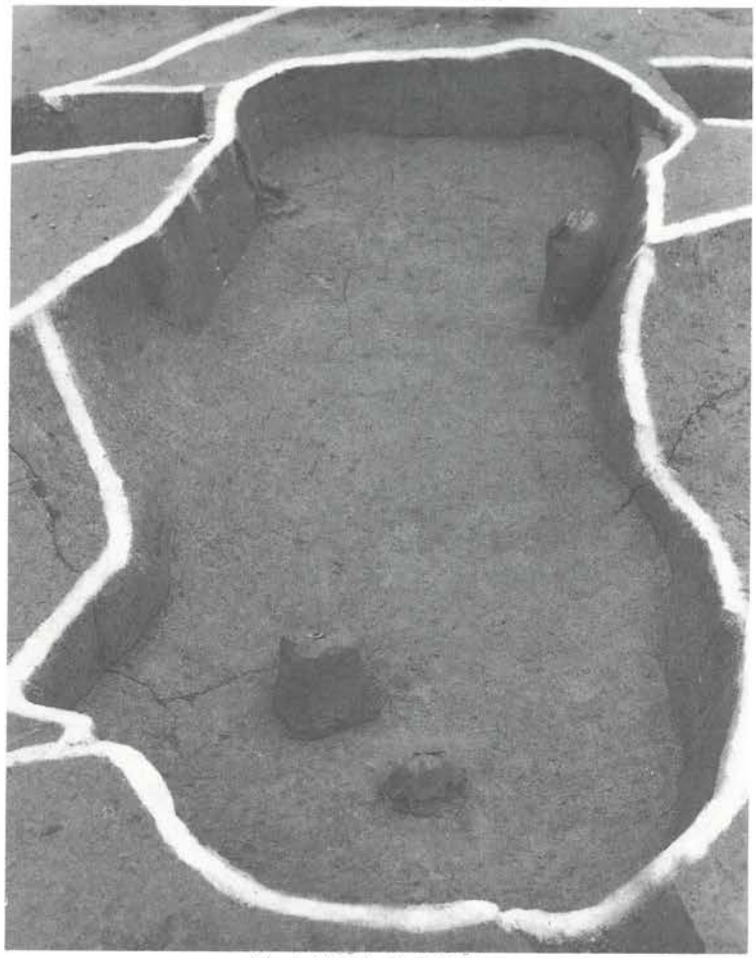


(1) 中央部の遺構 検出状況（南より）

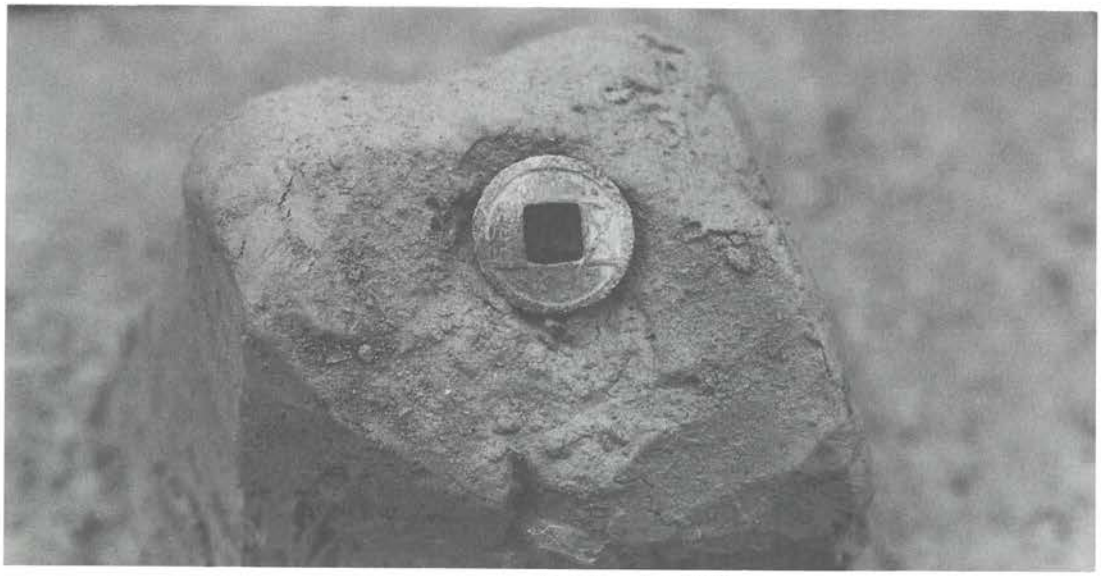


(2) 土坑221 検出状況

図版13　中島田－D調査区西部の遺構(3)

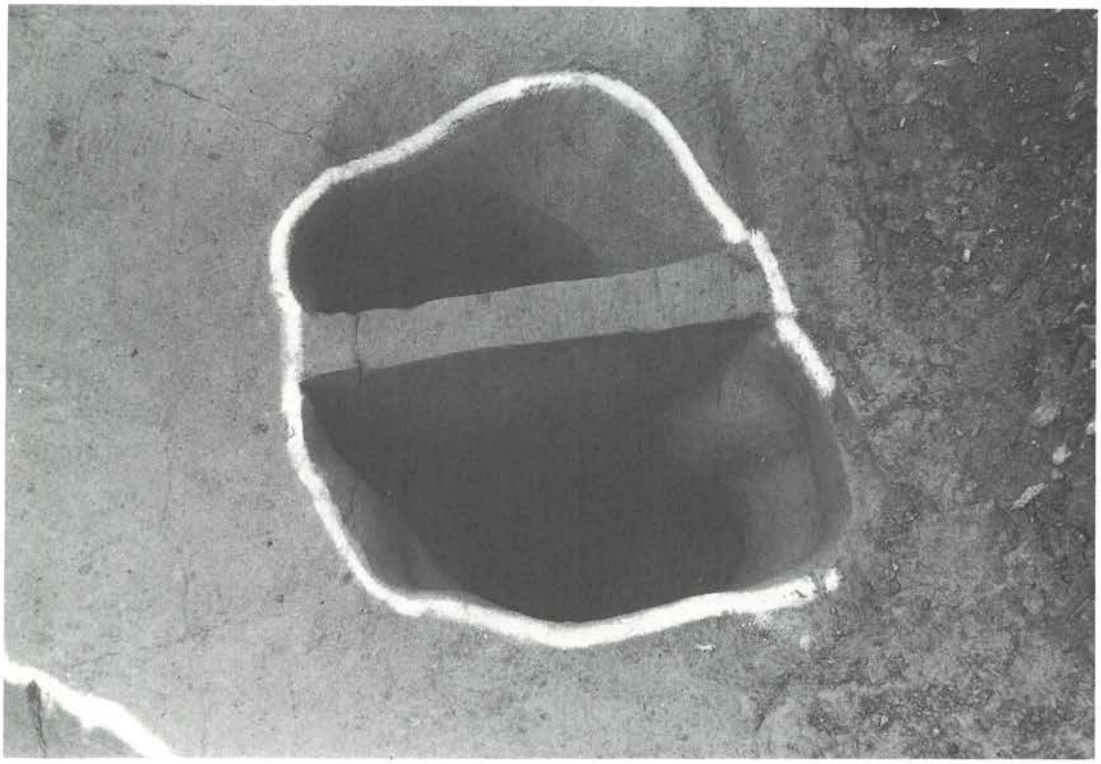


(1) 土坑213 検出状況



(2) 土坑213「五銖」出土状況

図版14　中島田－D調査区西部の遺構(4)

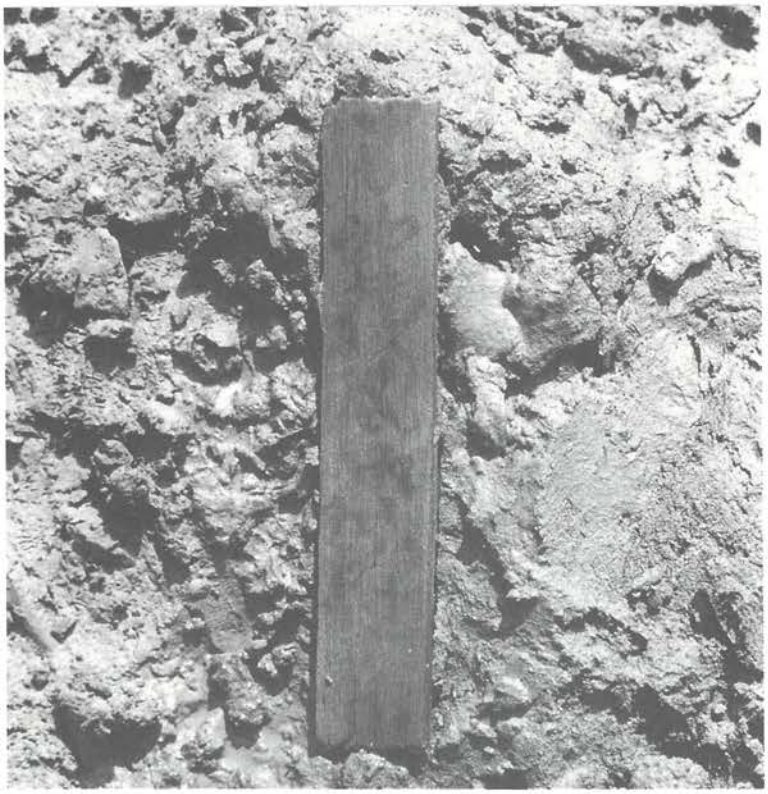


(1) 土坑220 検出状況

(2) 土坑219 遺物出土状況

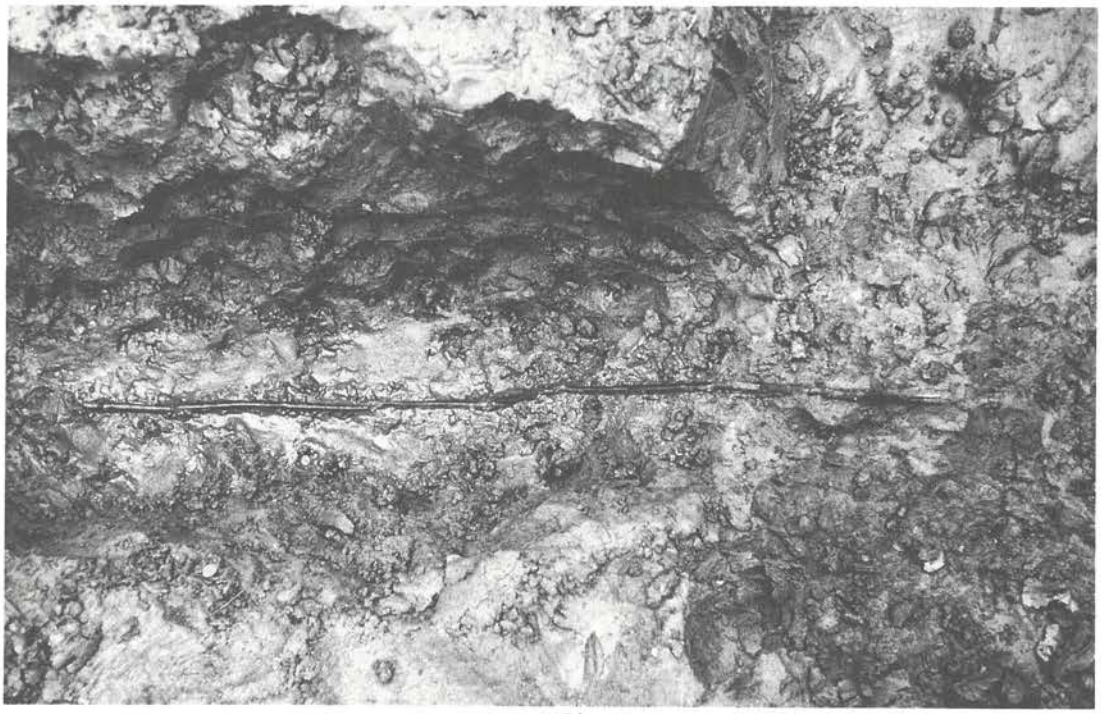
図版15　中島田－D調査区西部の遺構(5)

(1) 自然流路 検出状況



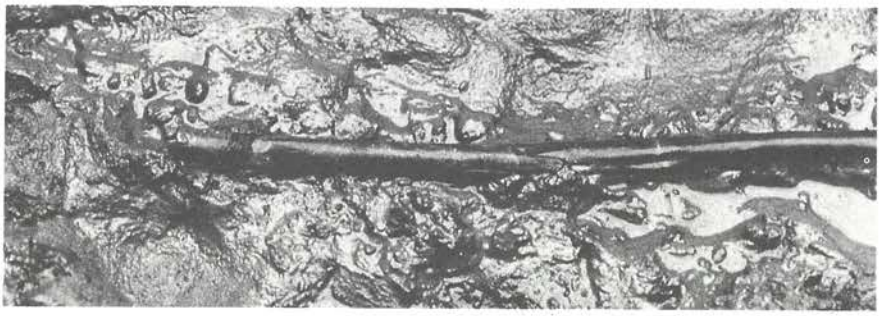
(2) 自然流路「呪符木簡」出土状況

図版16　中島田－Ｄ調査区西部の遺構(6)



(1) 自然流路「矢」出土状況

(2) 同上（部分１）



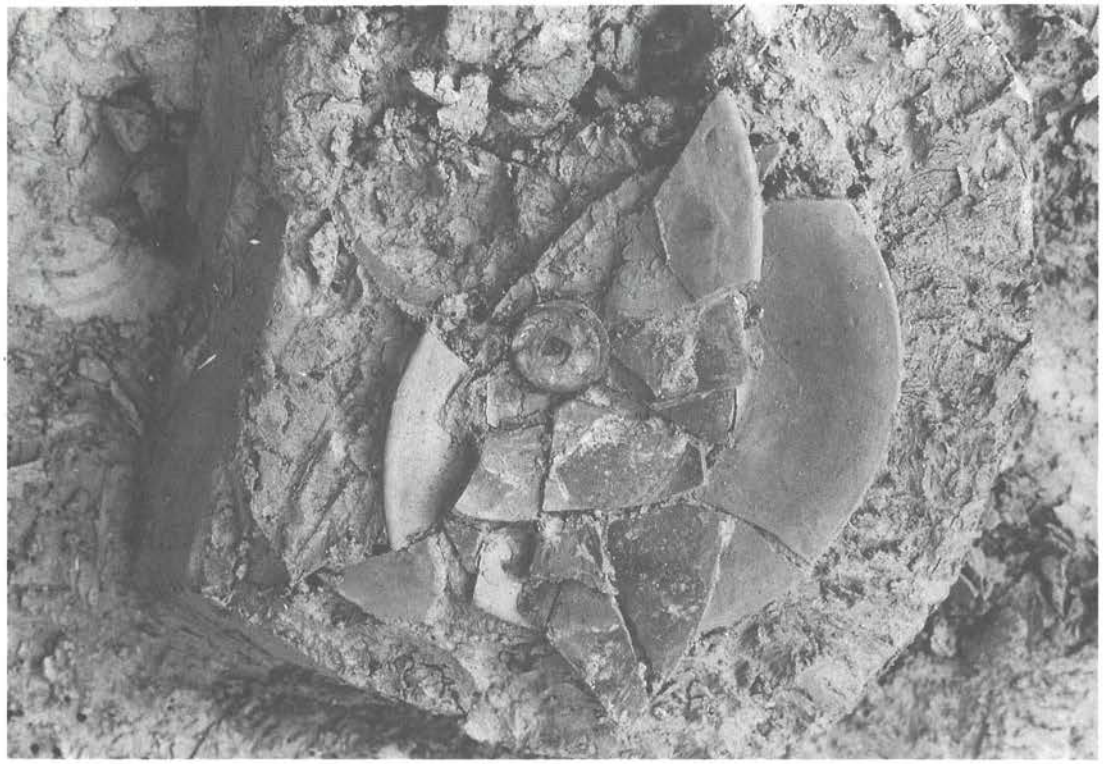
(3) 同上（部分２）

図版17　中島田－D調査区西部の遺構(7)

(1) 自然流路「ヘラ状工具」出土状況

(2) 自然流路「漆椀」出土状況

図版18　中島田－D調査区西部の遺構(8)

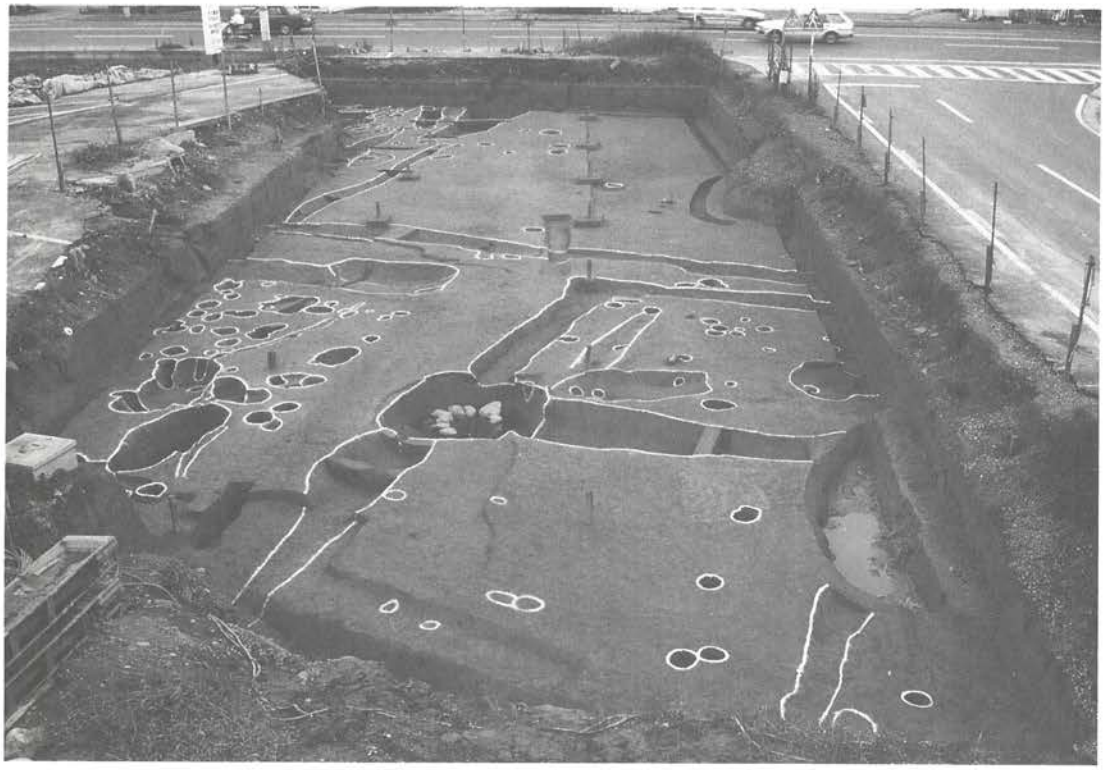


(1) 自然流路「永楽通宝」出土状況

(2) 自然流路「備前大甕」出土状況

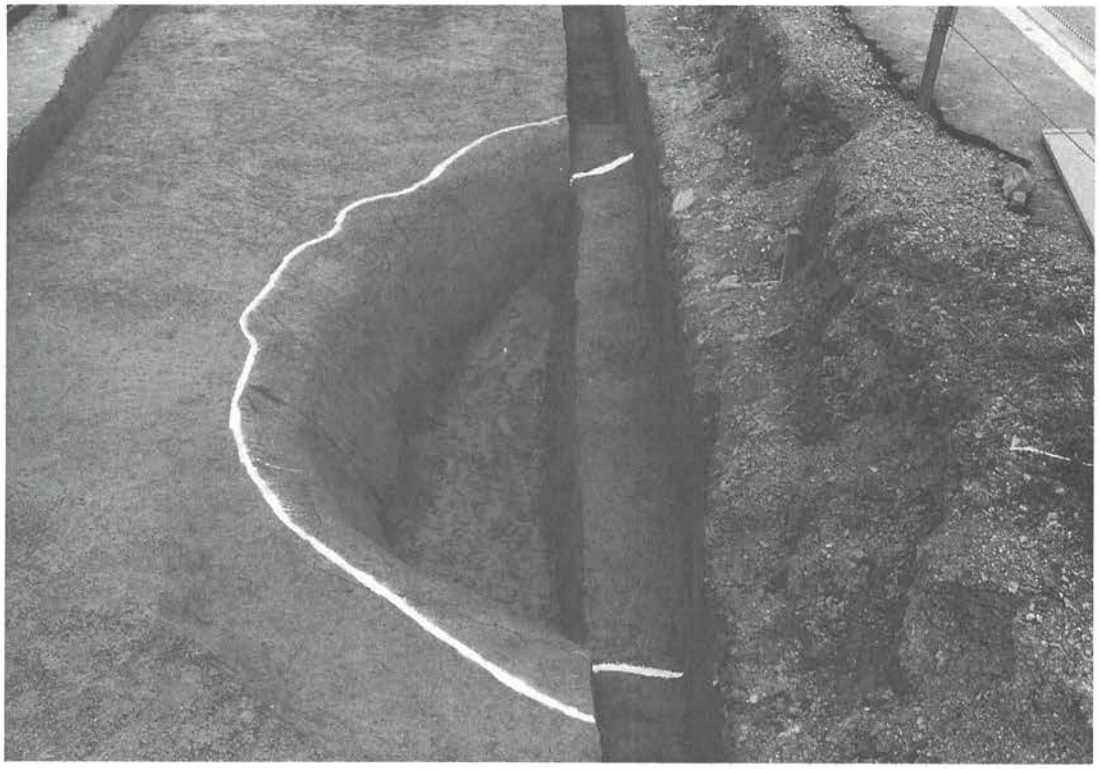
図版19　中島田－Ｅ調査区の遺構(1)

(1) 遺構 検出状況（遠景、北より）

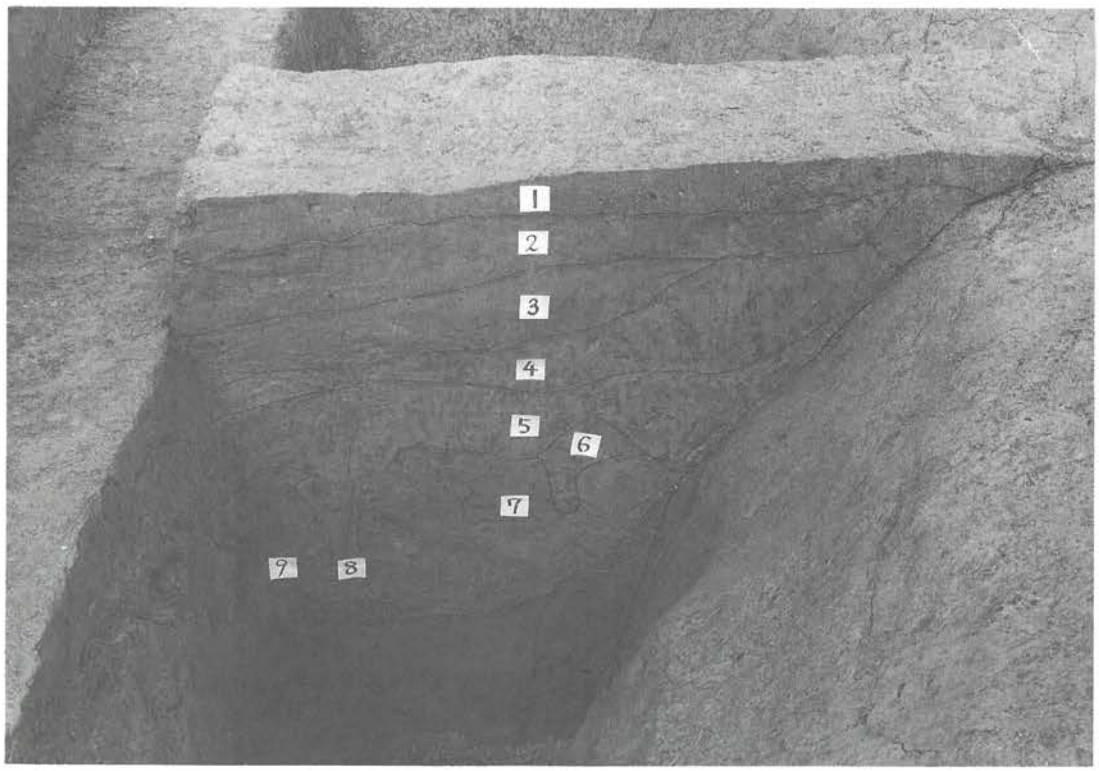


(2) 遺構 検出状況（近景，西より）

図版20　中島田－E調査区の遺構(2)

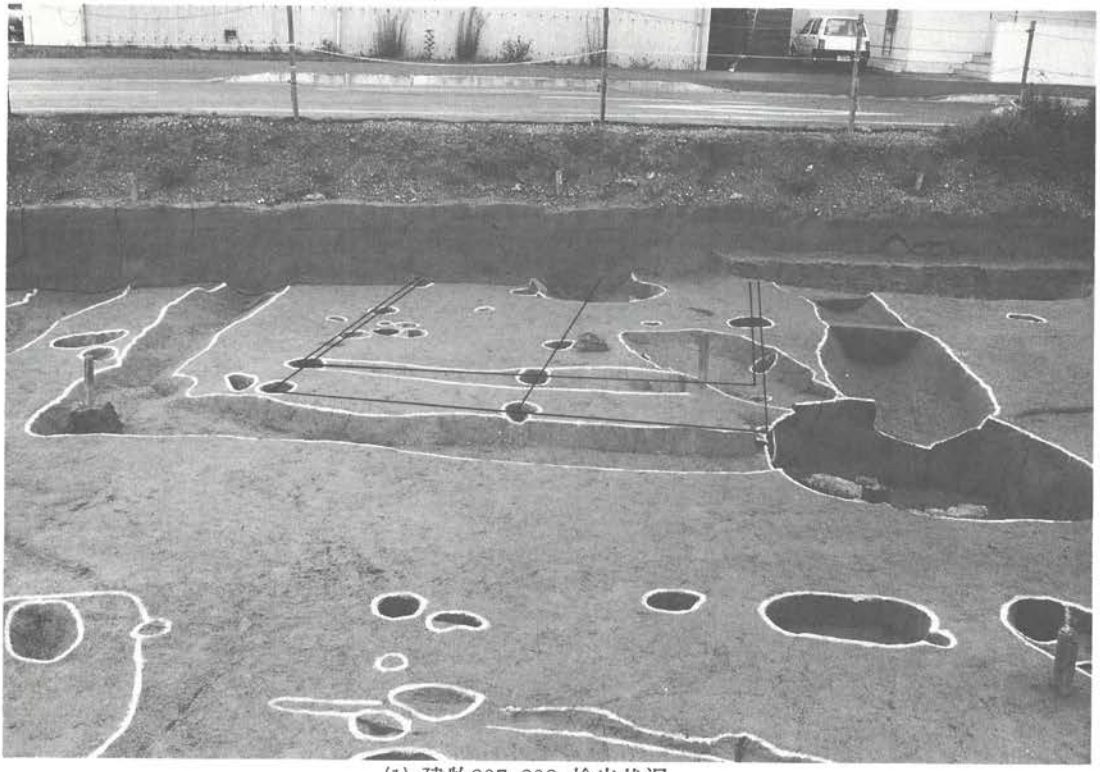


(1) 土坑101 検出状況



(2) 土坑101 土層堆積状況

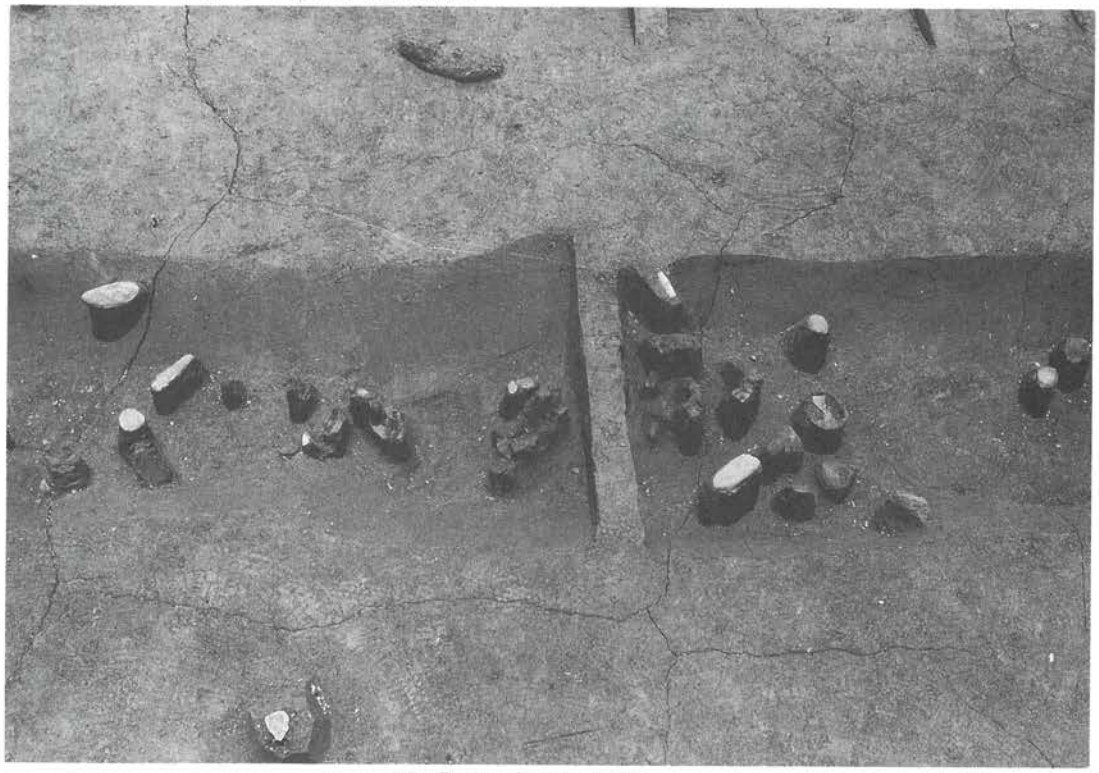
図版21　中島田－E調査区の遺構(3)



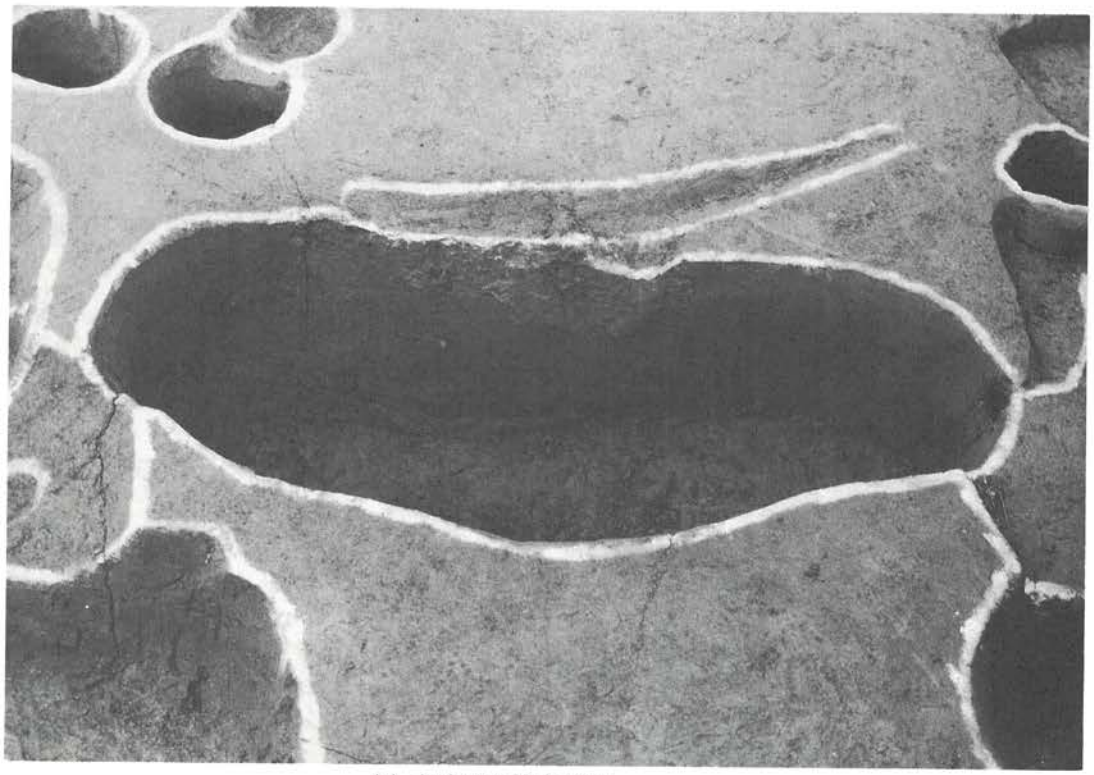
(1) 建物207・208 検出状況

(2) 建物に伴う遺物出土状況

図版22　中島田－E調査区の遺構(4)

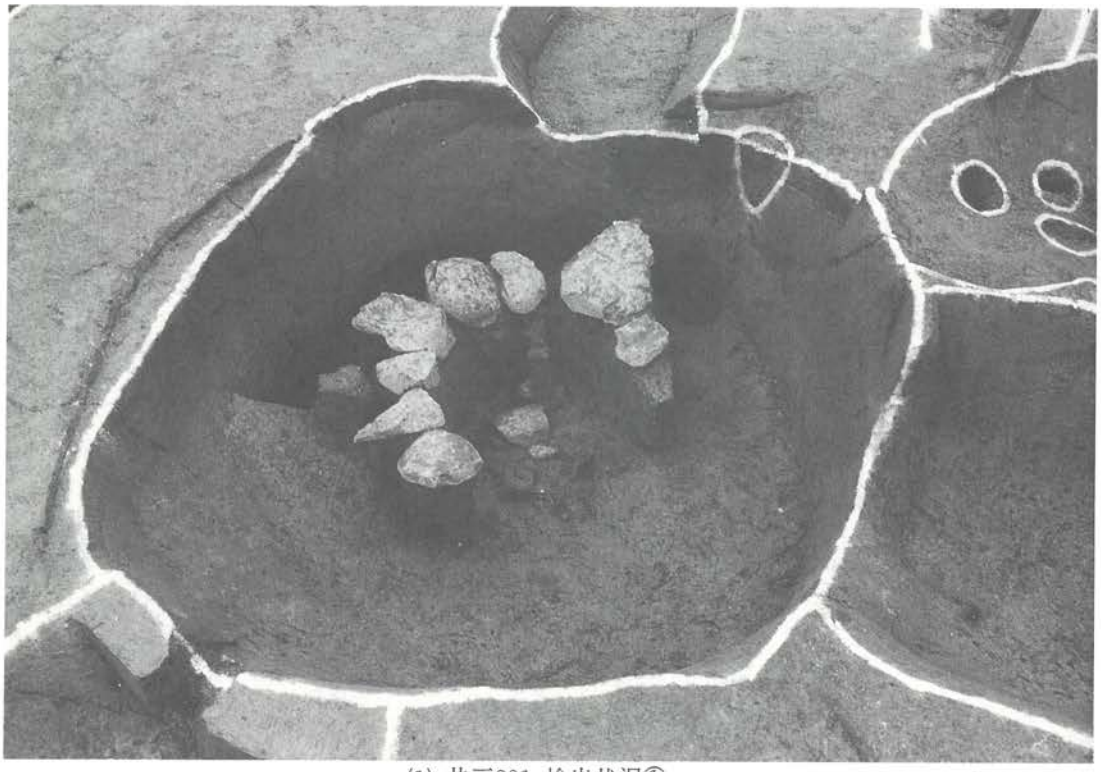


(1) 溝223 遺物出土状況



(2) 土坑249 検出状況

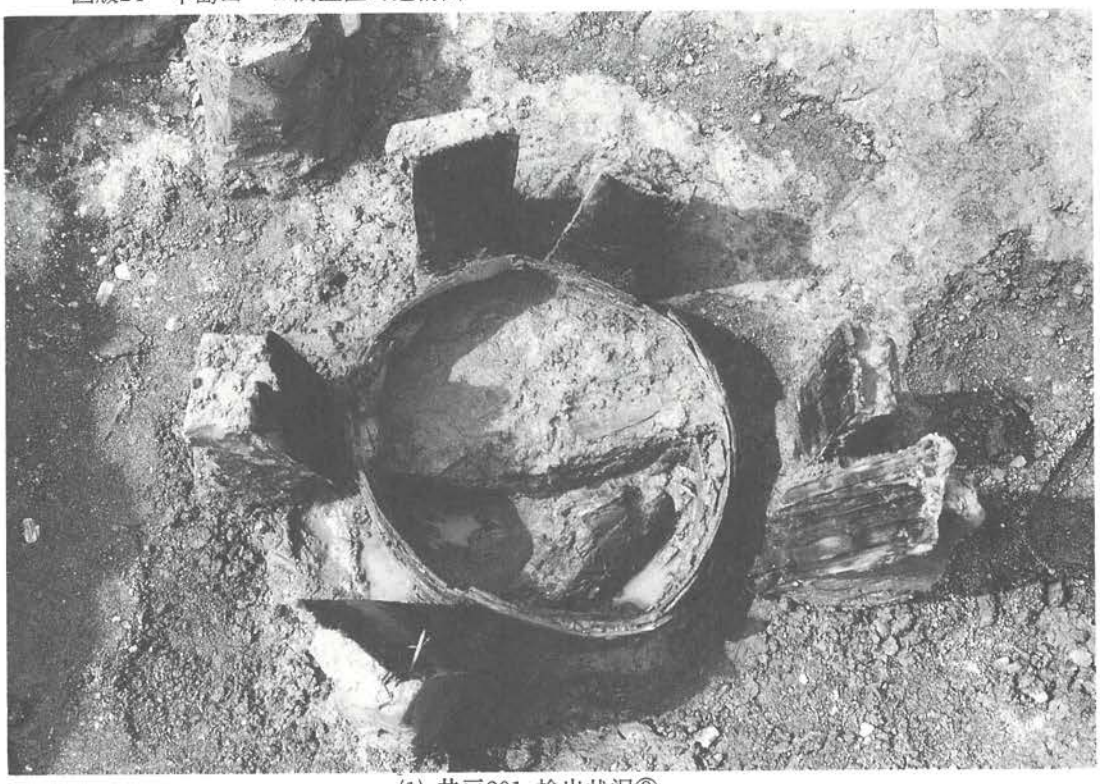
図版23　中島田－E調査区の遺構(5)



(1) 井戸201 検出状況①

(2) 井戸201 検出状況②

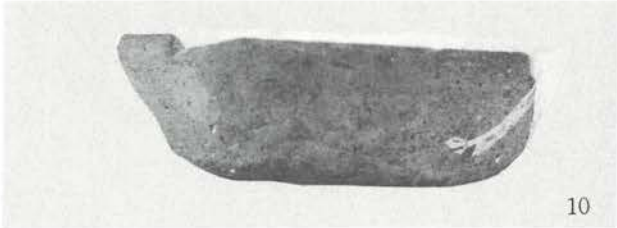
図版24　中島田－E調査区の遺構(6)

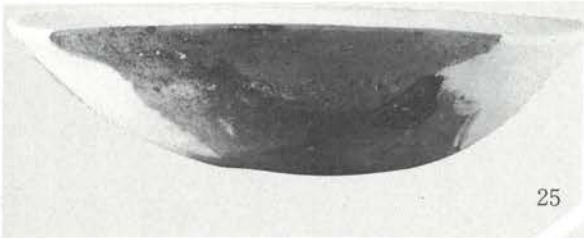


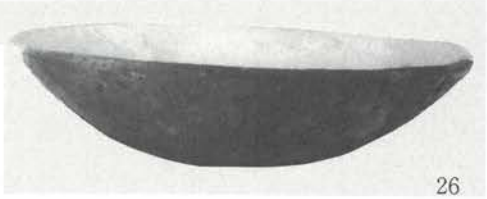
(1) 井戸201 検出状況③

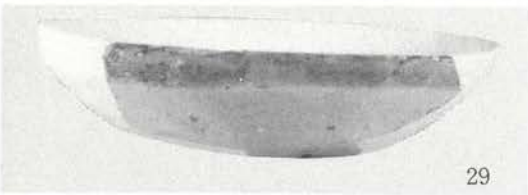
(2) 井戸201 検出状況④

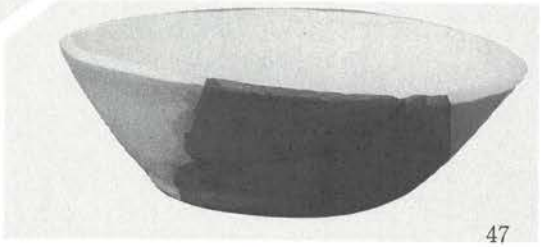
図版25　中島田一遺構出土遺物(1)　　※縮尺は明示したもの以外は½である。

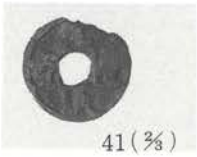


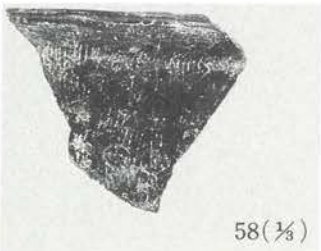


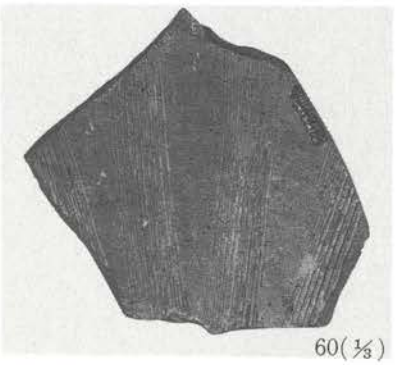






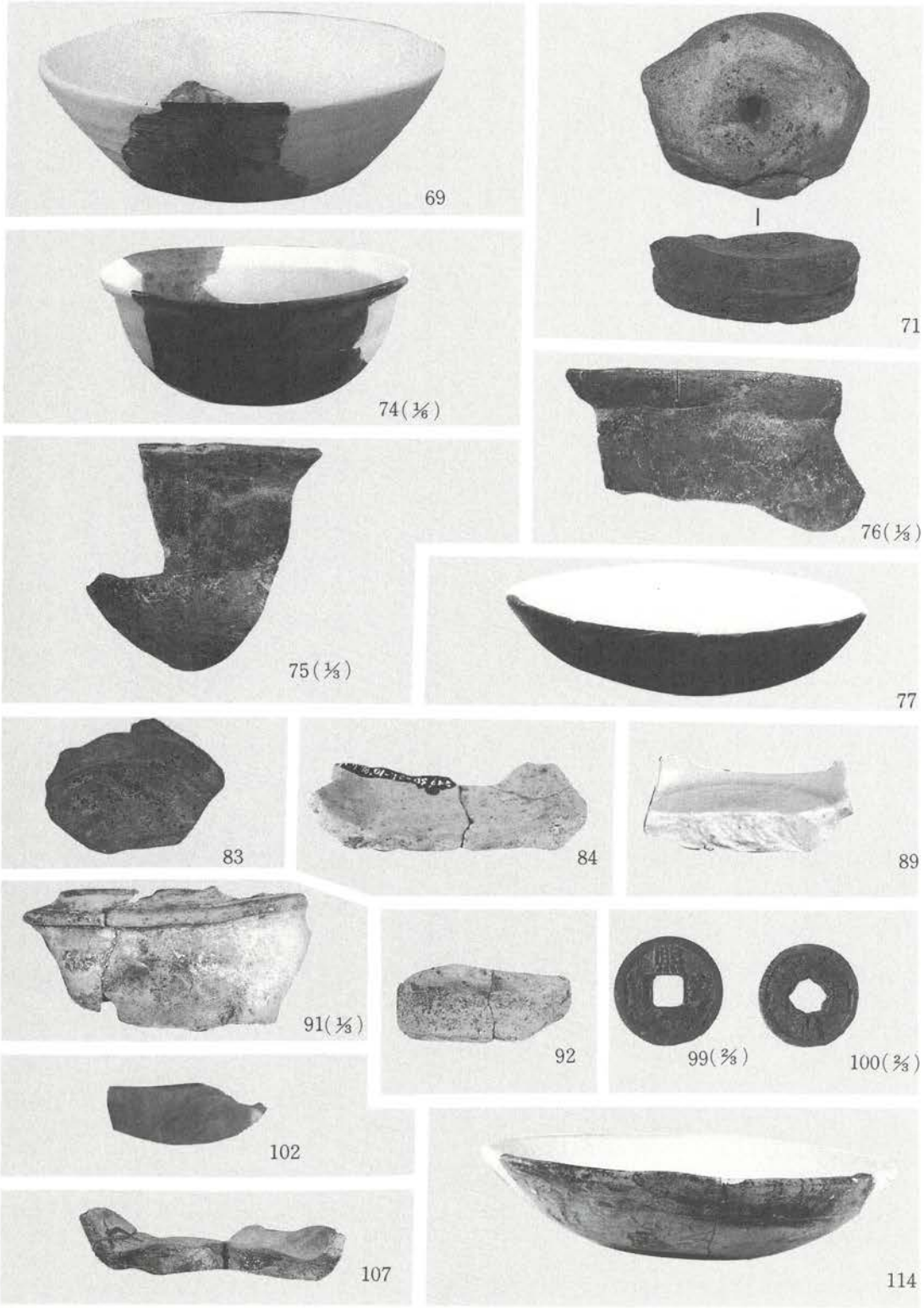






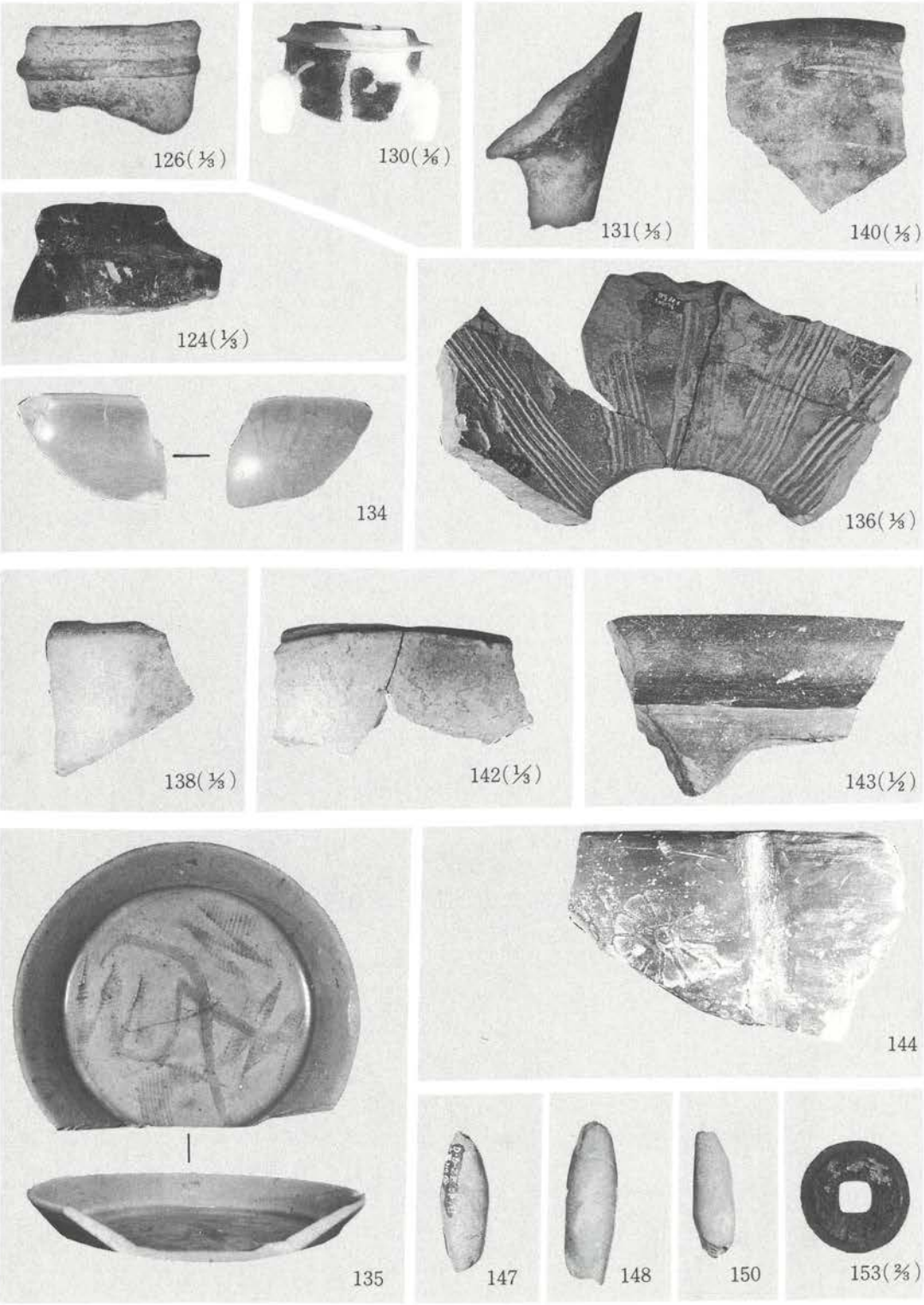
8(集石遺構101)，9～29(柱穴(1))，47～61(柱穴(2))

図版26　中島田一遺構出土遺物(2)



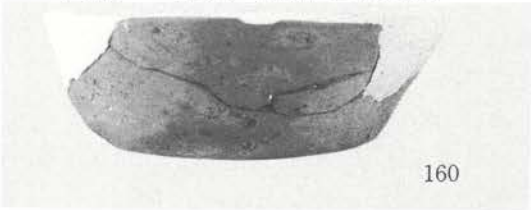
69～77(建物に伴う遺物), 83～91(溝201), 92(溝202), 99・100(溝203), 102(溝204), 107～114(溝205)

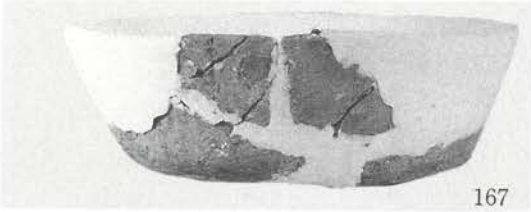
図版27　中島田一遺構出土遺物(3)

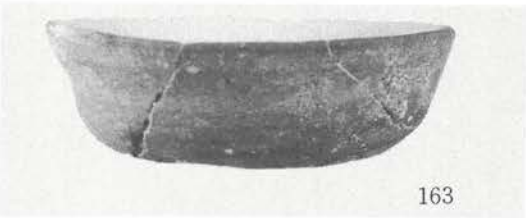


126～153(溝205)

図版28　中島田－遺構出土遺物(4)

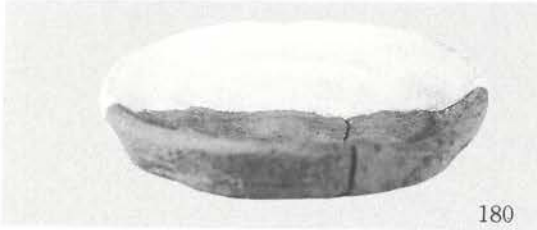

160


167

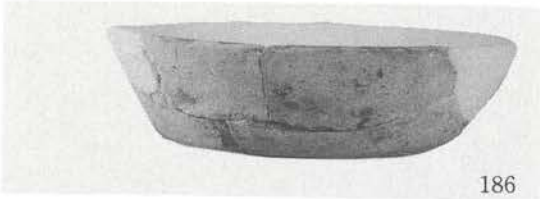

163

169

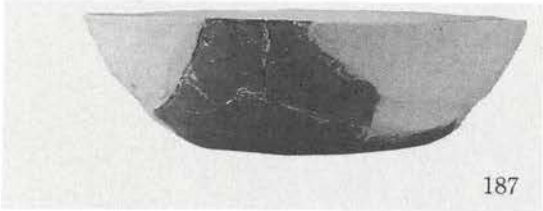
166


180

181


186

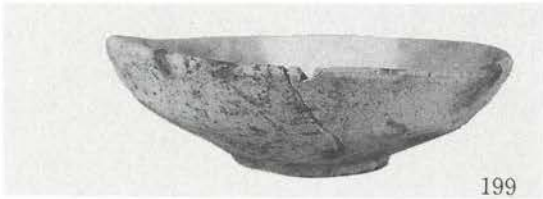
184


187

192

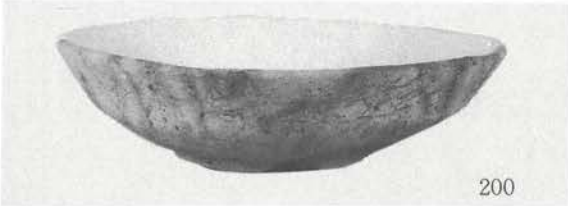
194

193

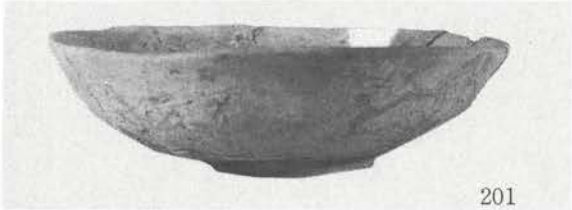

199

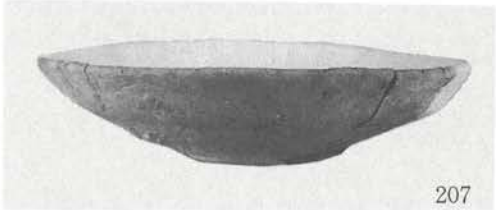
160～199(溝206)

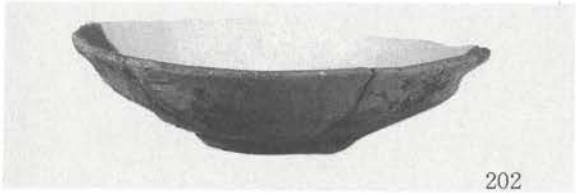
図版29　中島田一遺構出土遺物(5)

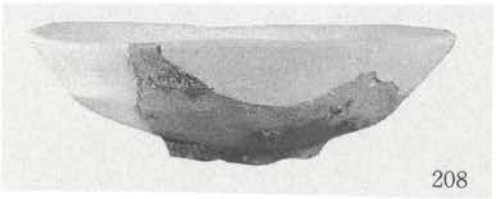

200

206

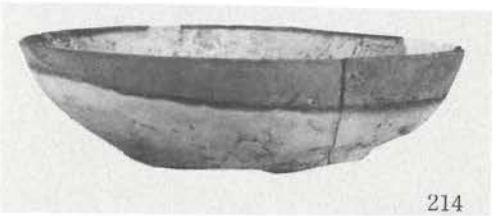

201

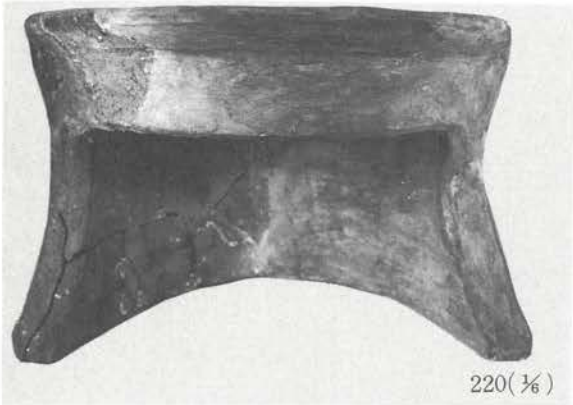

207


202


208

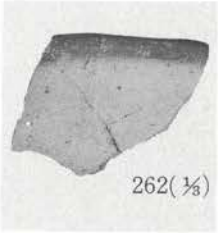
213


214

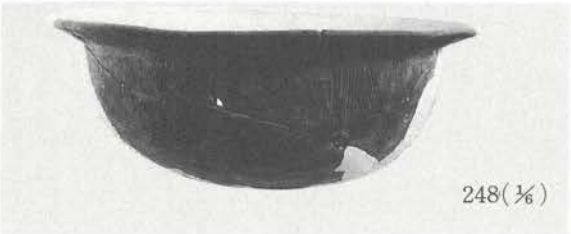

220(1/6)

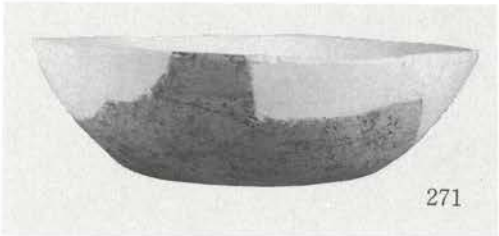
224

225


262(1/8)

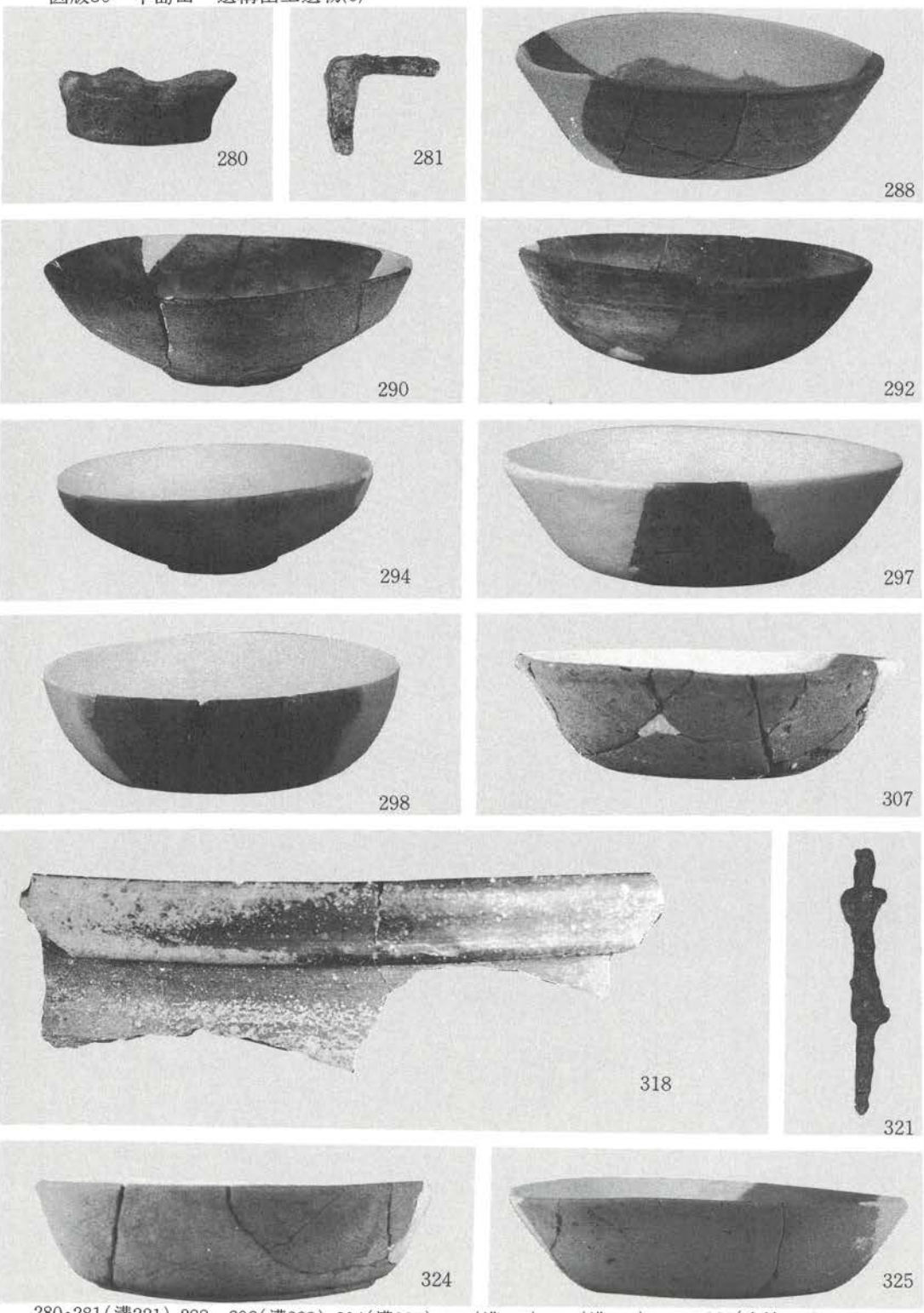
233


248(1/6)


271

200～225(溝206)，233(溝210)，248(溝215)，262(溝216)，271(溝219)

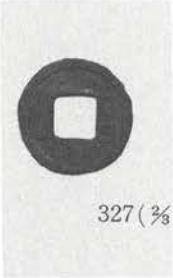
図版30　中島田－遺構出土遺物(6)



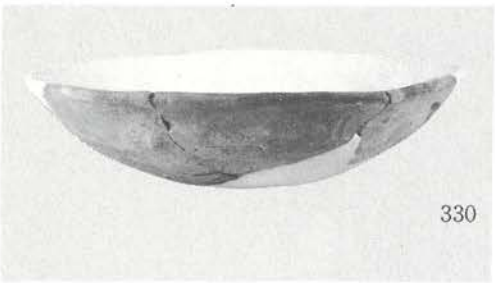
280・281(溝221)，288～292(溝223)，294(溝225)，297(溝229)，298(溝232)，307～321(土坑201)，324・325(土坑207)

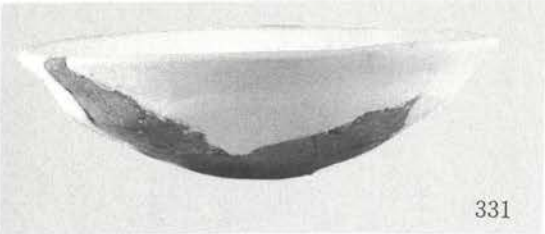
図版31　中島田一遺構出土遺物(7)

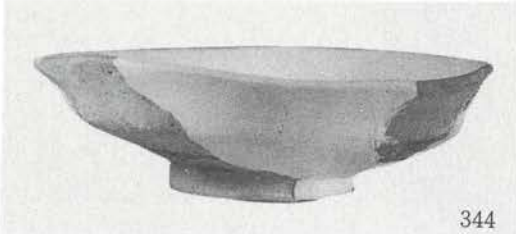
326


327(⅔)

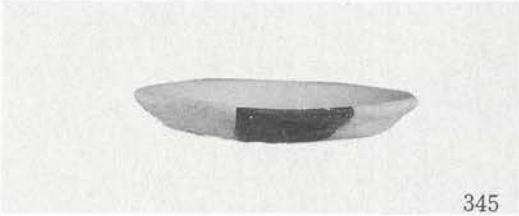
328(⅔)

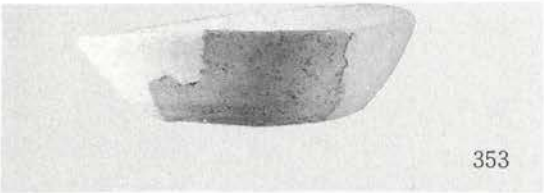

330


331


344

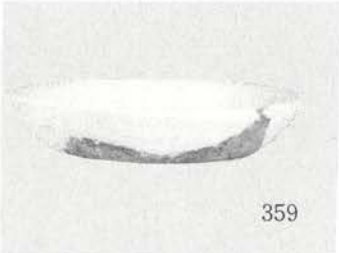
352


345

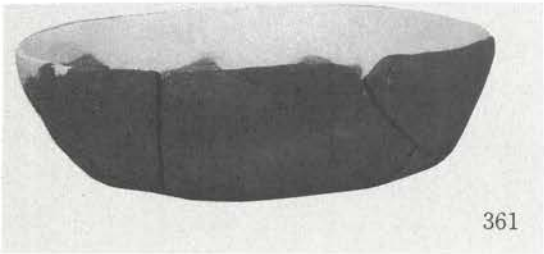

353

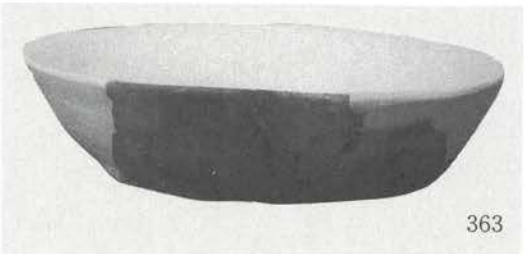
357

358


359

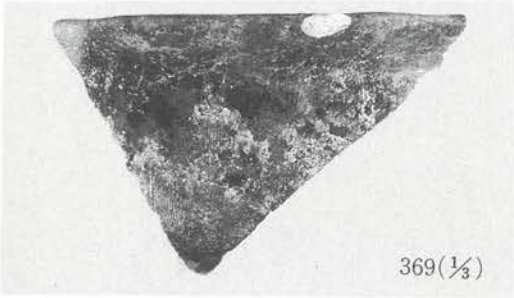
360(⅔)

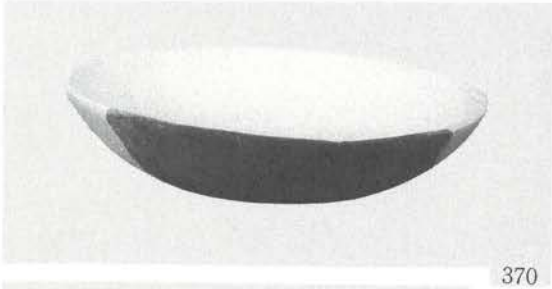

361

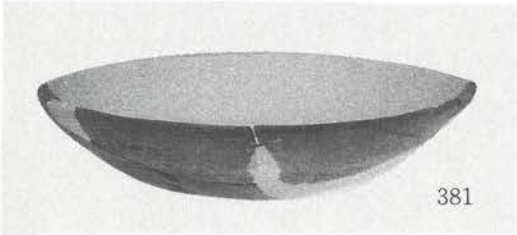

363

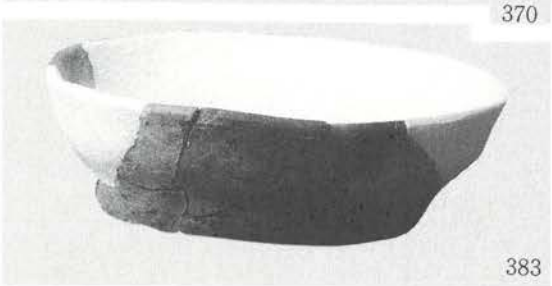
326～328(土坑213)，331(土坑215)，344(土坑219)，352・353(土坑227)，357～360(土坑234)，
361・363(土坑238)

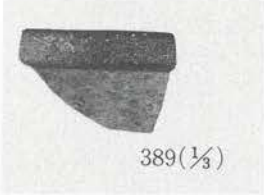
図版32　中島田一遺構出土遺物(8)

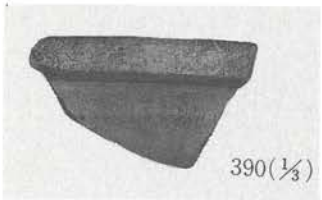


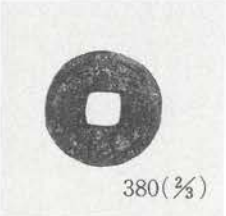


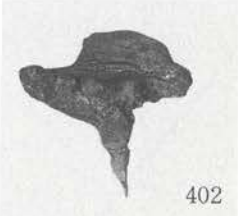


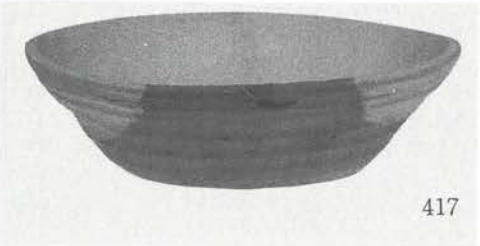


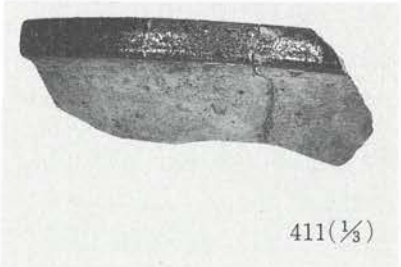






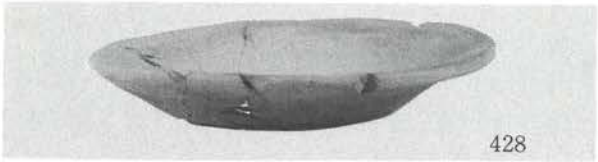


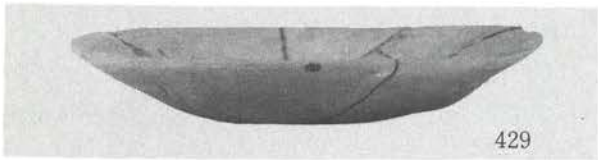


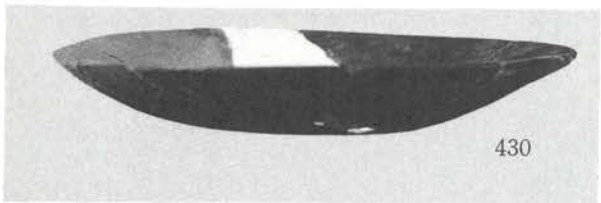


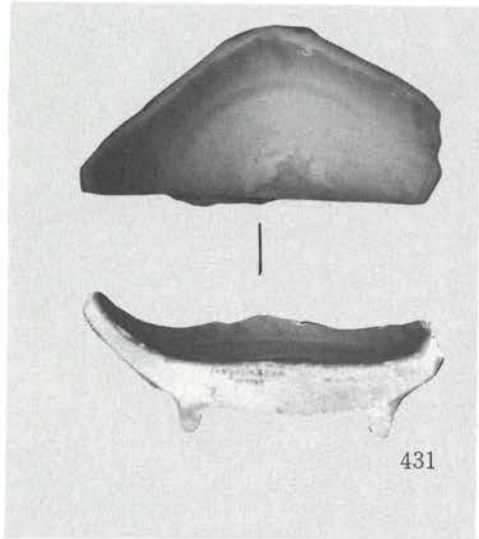
364～370(土坑238)，380(土坑241)，381(土坑242)，383(土坑243)，387～390(土坑246)，
402(土坑249)，408・411(土坑251)，417(土坑253)，426(井戸201)

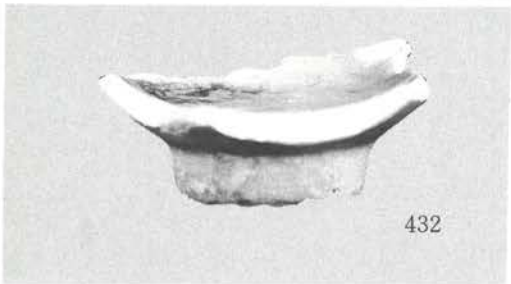
図版33　中島田－遺構出土遺物(9)

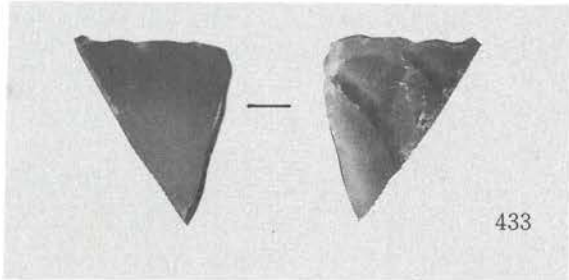


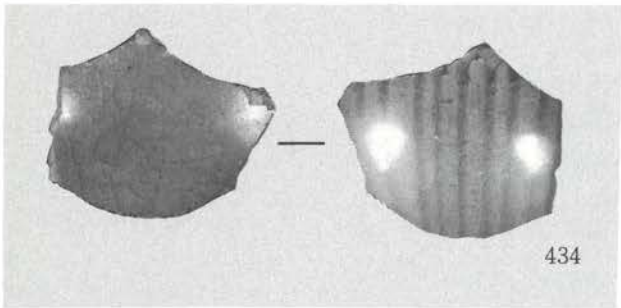


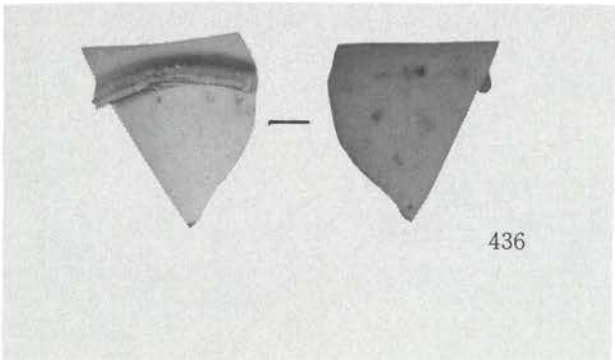


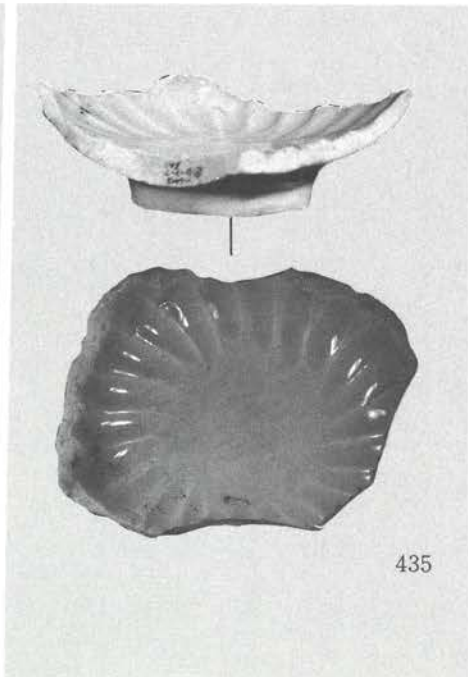








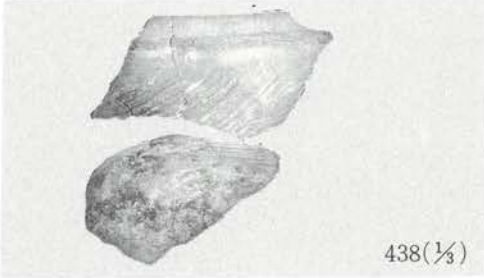




428～435(自然流路)

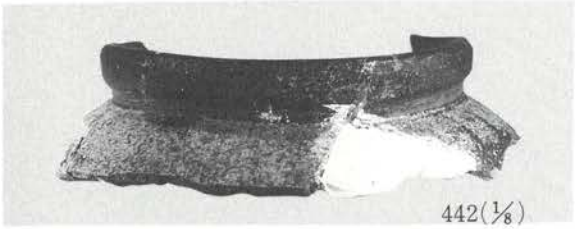
図版34　中島田一遺構出土遺物(10)

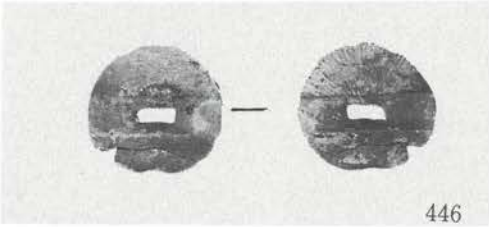
437(1/6)

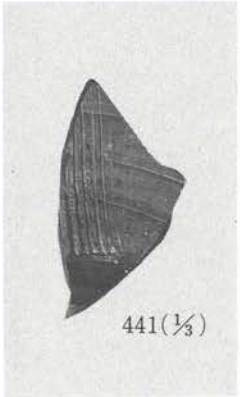

438(1/3)

439

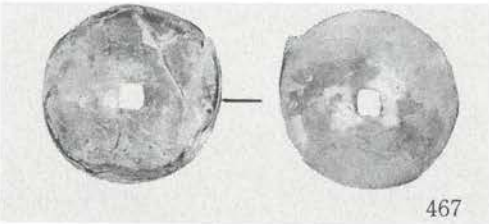
440


442(1/8)


446

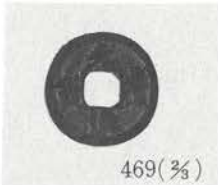

441(1/3)

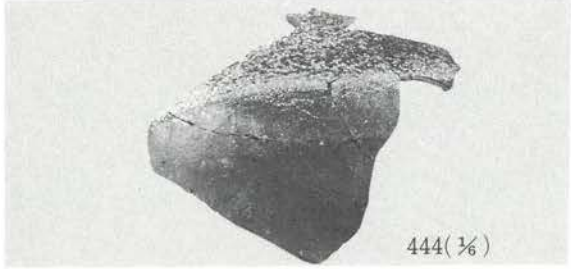
443(1/6)


467

445(1/6)

468(2/3)

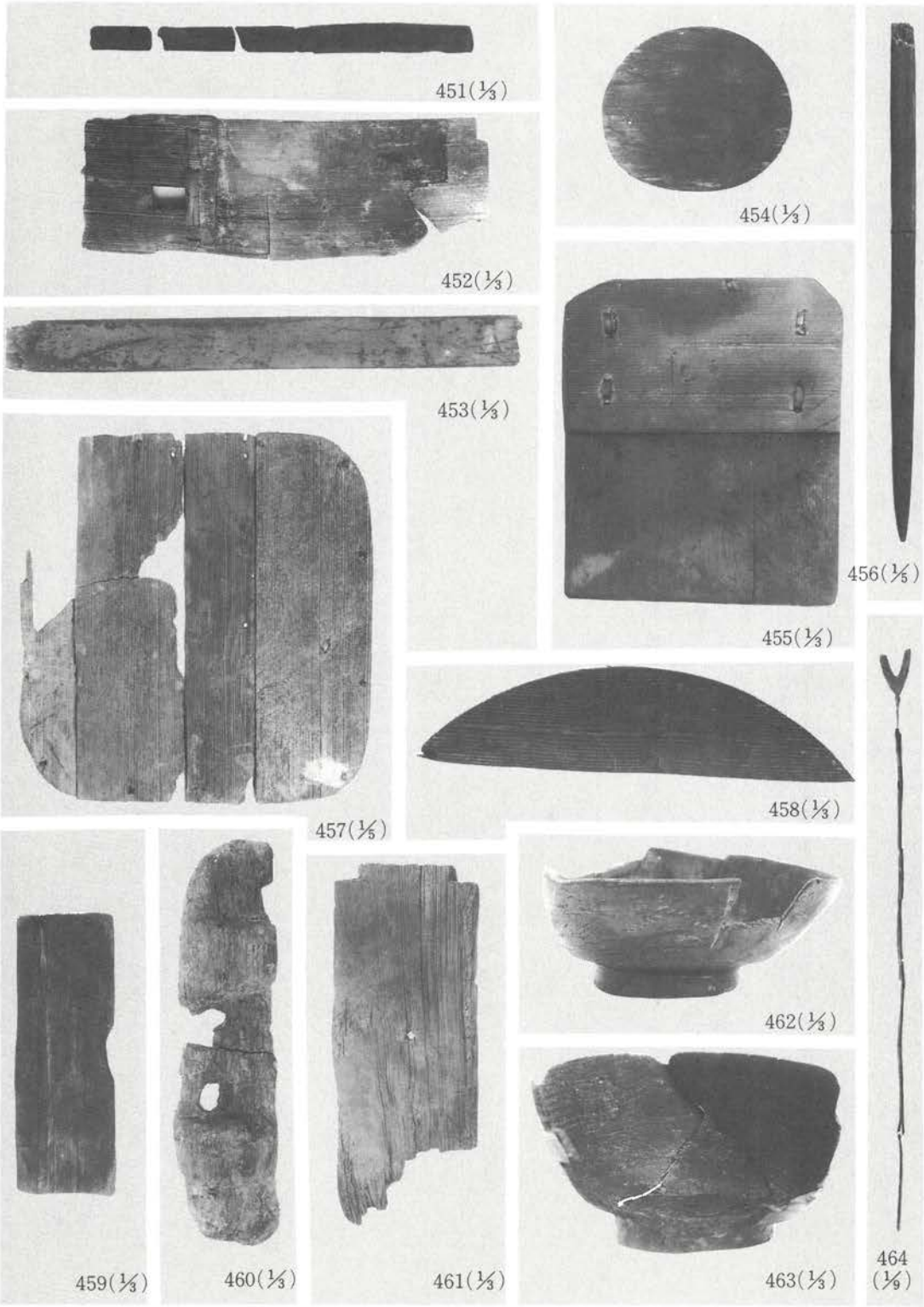

469(2/3)


444(1/6)

470(1/6)

437～469(自然流路)，470(集石遺構202)

図版35　中島田－遺構出土遺物(11)



451～464(自然流路)

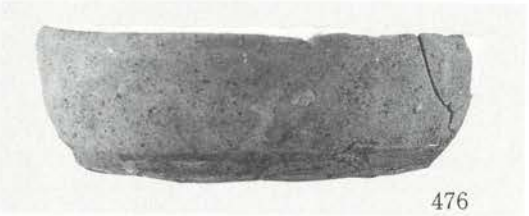
図版36　中島田－包含層出土遺物(1)

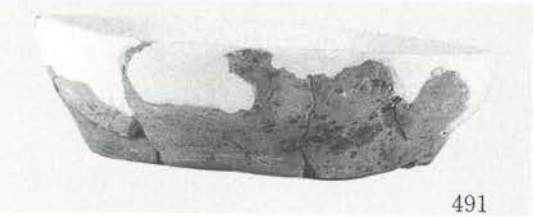
474

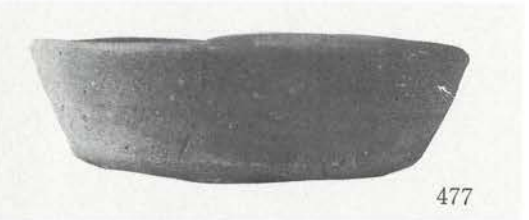
486

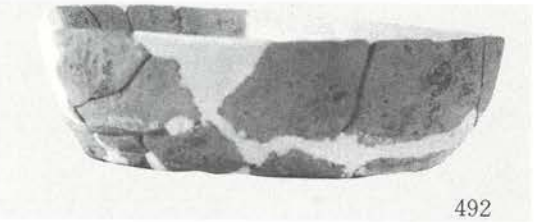
475

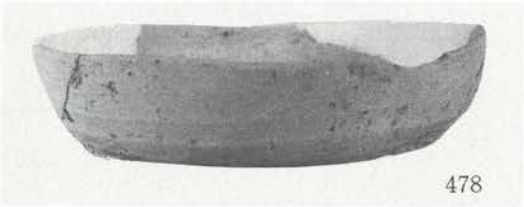
490


476


491


477


492


478

493

479

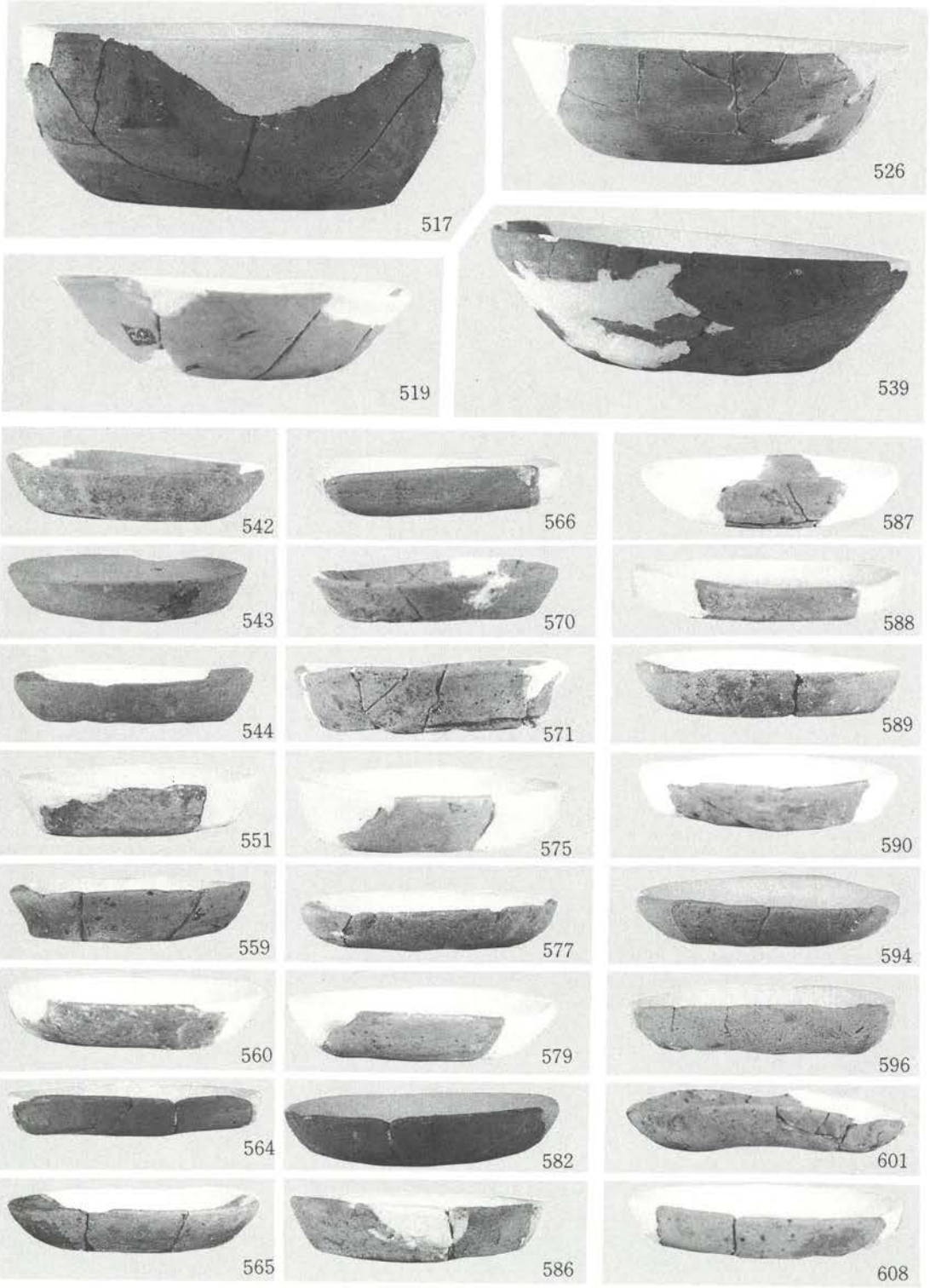
512

485

514

474～514(土師質 杯)

図版37　中島田－包含層出土遺物(2)

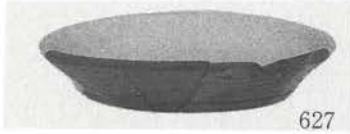


517～539(土師質　杯)，542～608(土師質　皿)

図版38　中島田-包含層出土遺物（3）

614

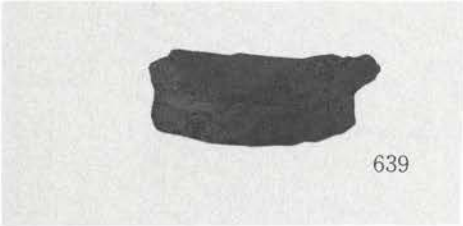
622

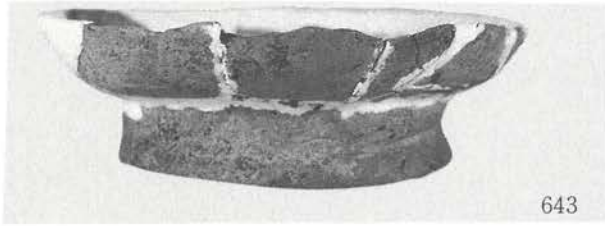

627

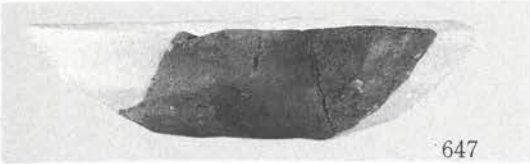
621

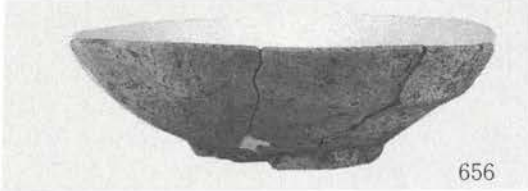
625

632


639

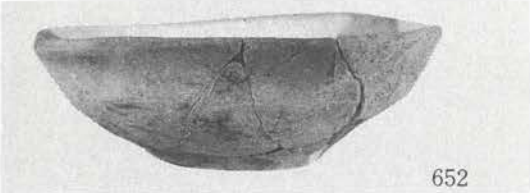

643

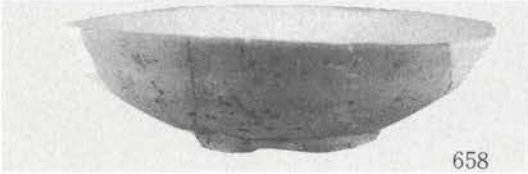

647


656

650

657

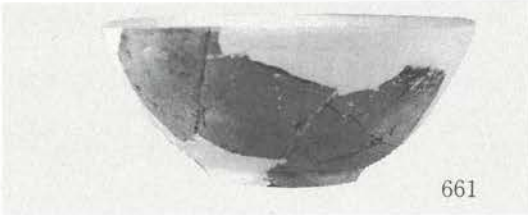

652


658

653

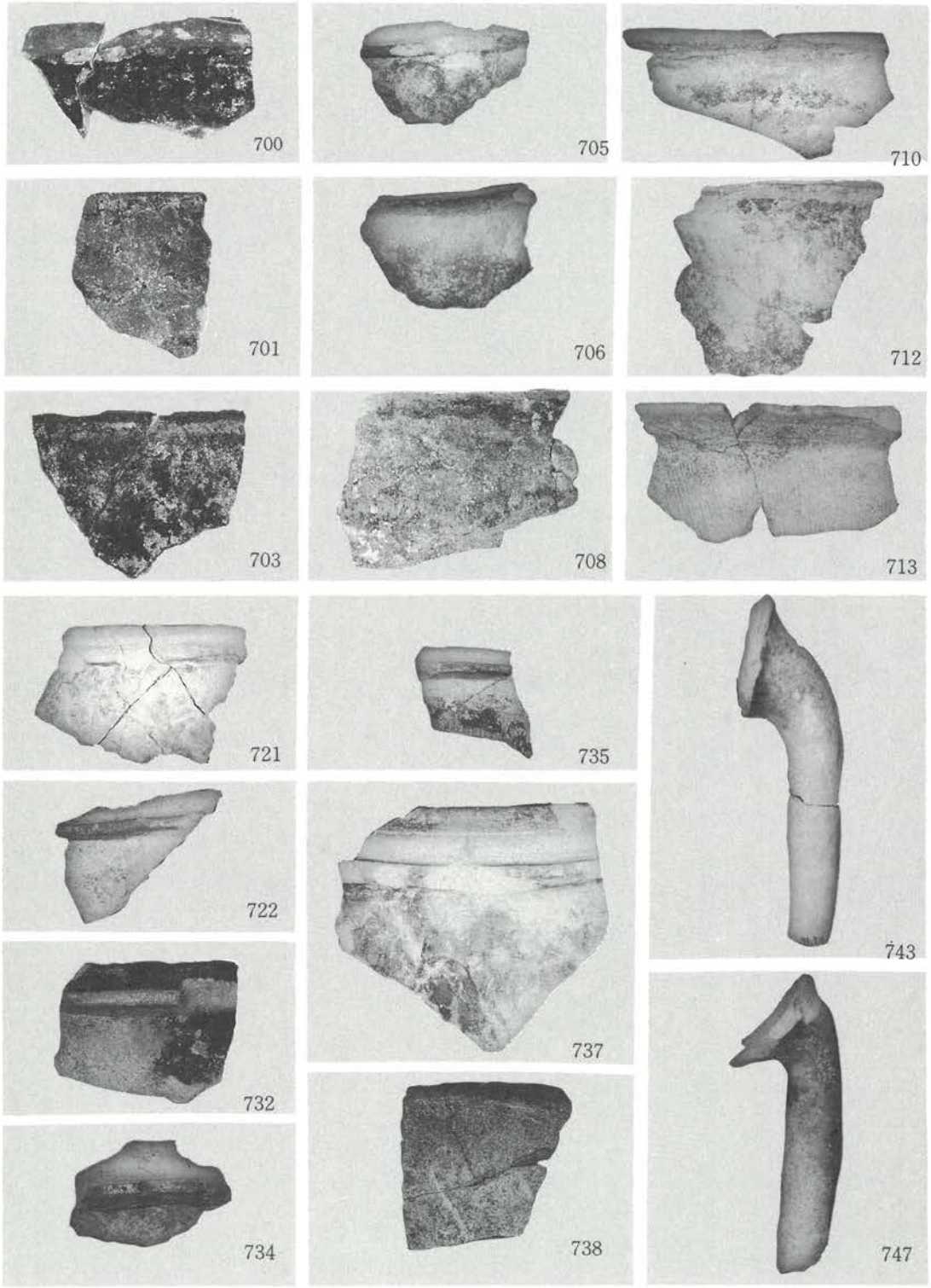
660

654


661

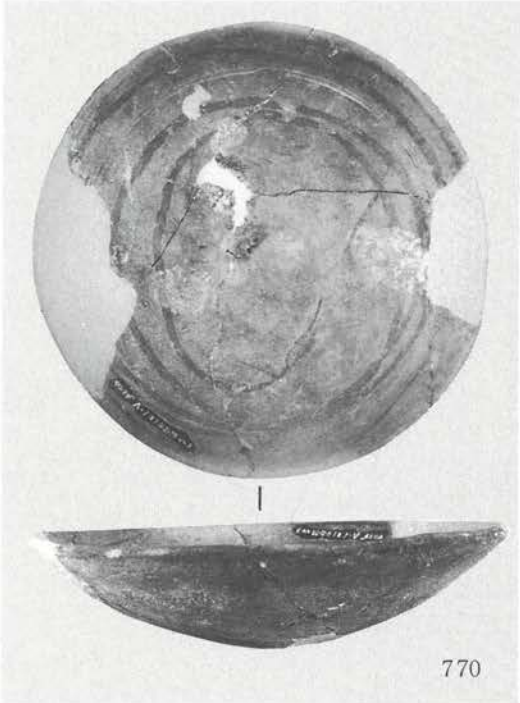
614～643(土師質　皿)，647～661(土師質　椀)

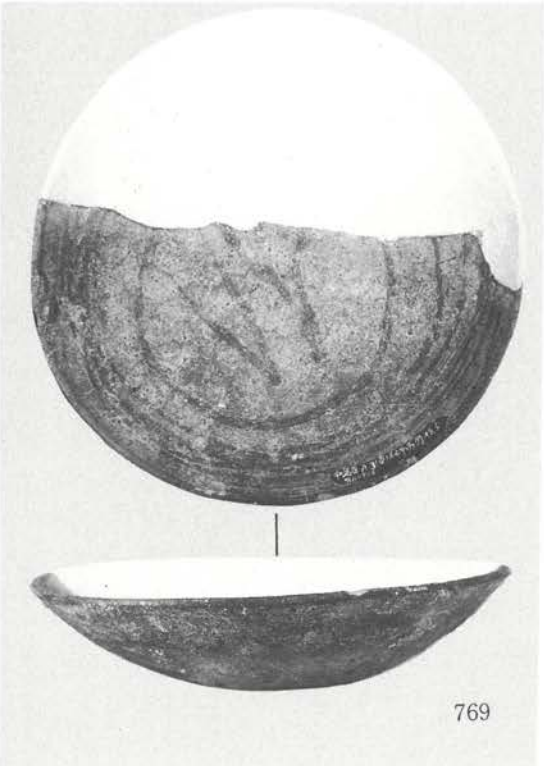
図版39　中島田-包含層出土遺物（4）

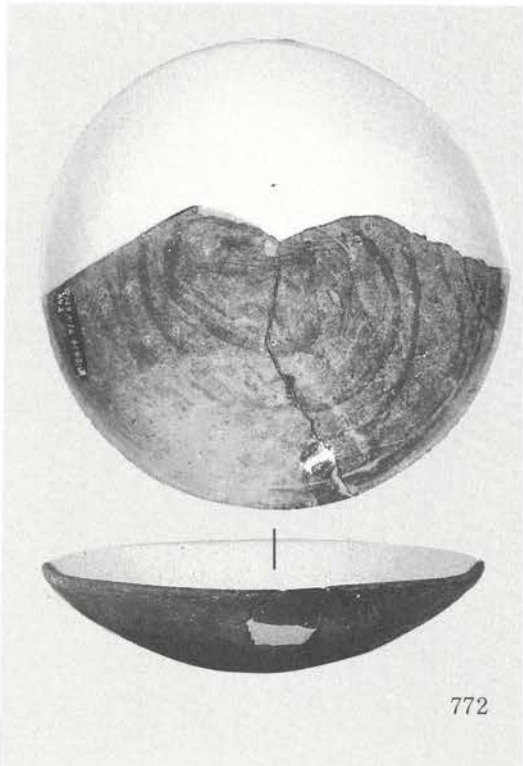


700～713(土師質　鍋)，721～737(土師質　羽釜)，738(土師質　すり鉢)，743・747(土師質　脚部)
※縮尺はすべて⅓である。

図版40　中島田-包含層出土遺物５）

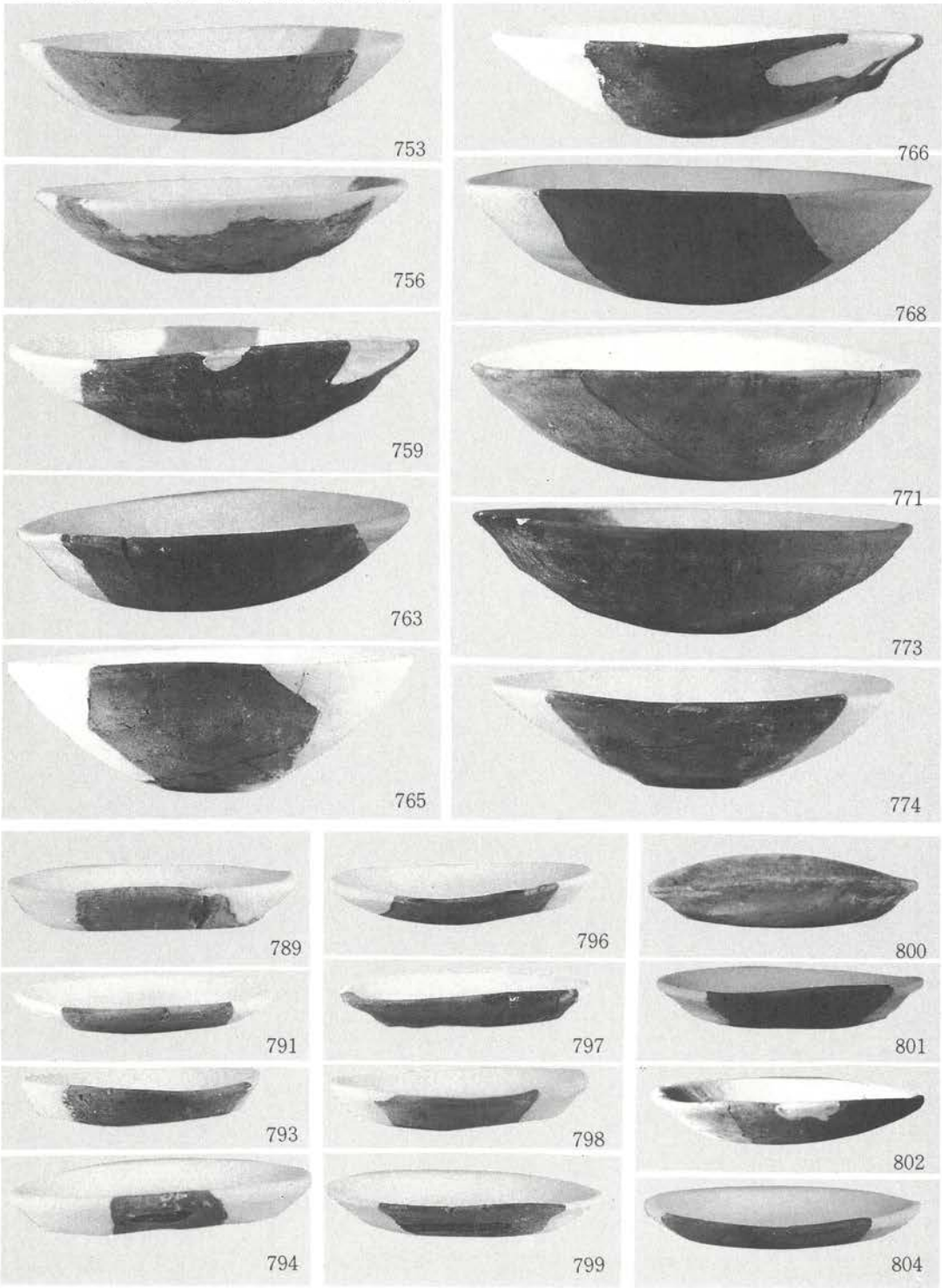






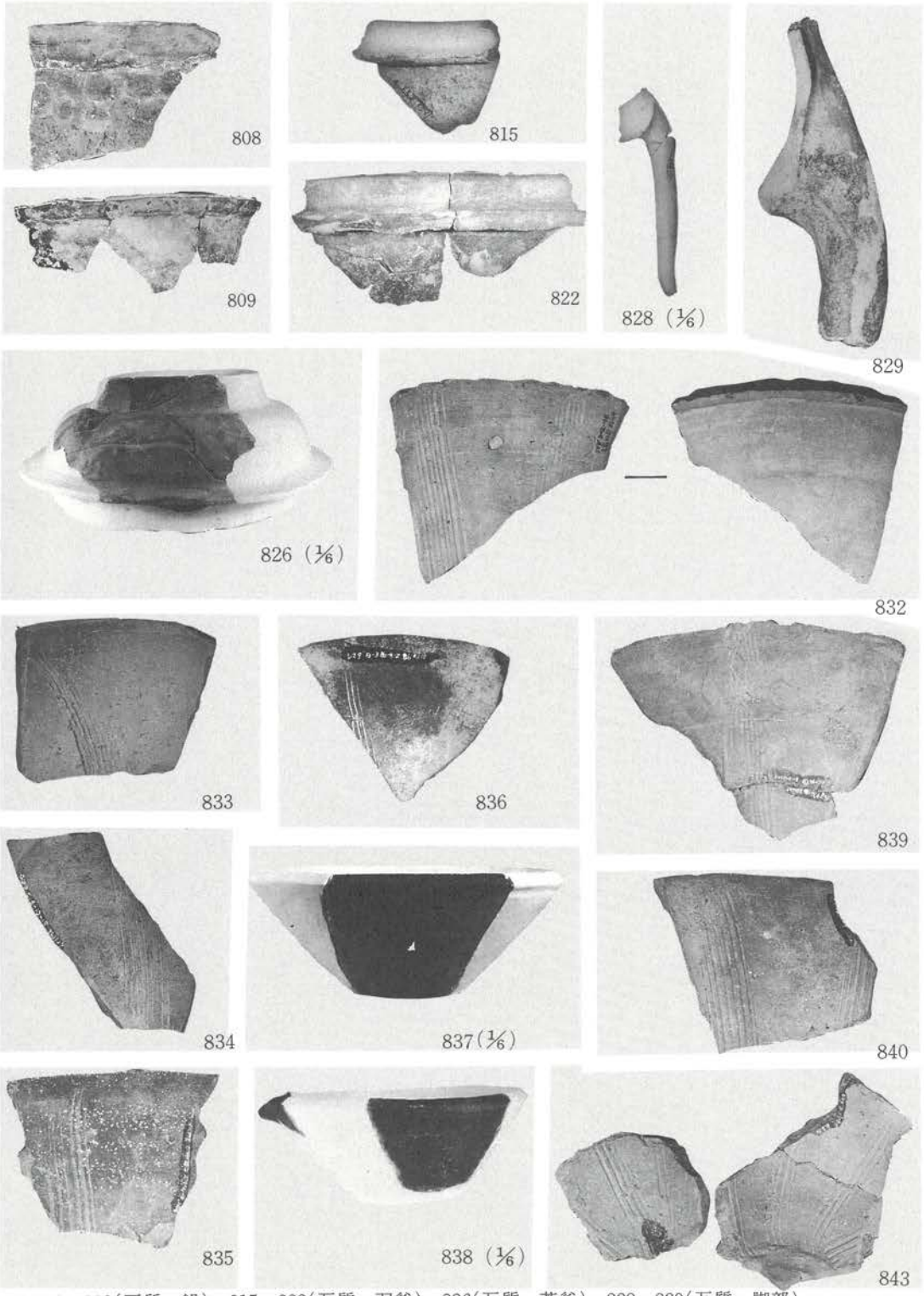
750～772（瓦器　椀）

図版41　中島田-包含層出土遺物（6）



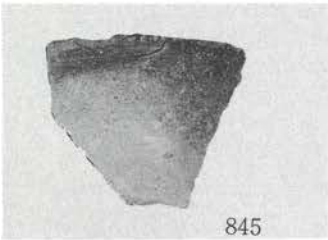
753～774(瓦器　椀)，789～804(瓦器　皿)

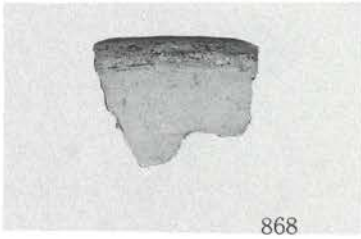
図版42　中島田-包含層出土遺物（７）



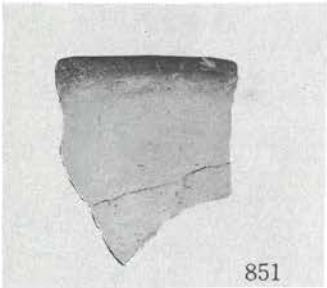
808～809(瓦質　鍋)，815・822(瓦質　羽釜)，826(瓦質　茶釜)，828・829(瓦質　脚部)，
832～843(陶器　すり鉢)　　※縮尺は明示したもの以外は1/3である。

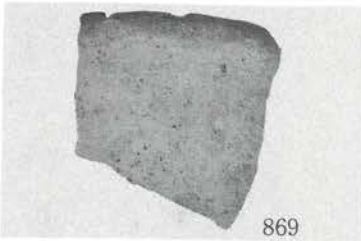
図版43　中島田-包含層出土遺物（8）

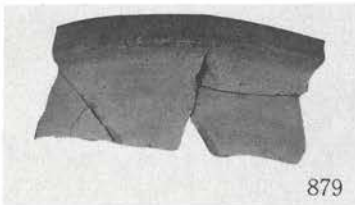

845

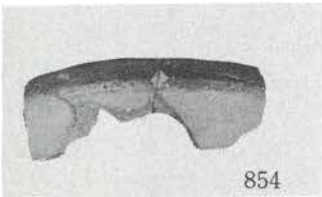

868

876

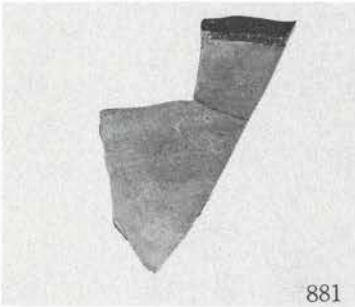

851

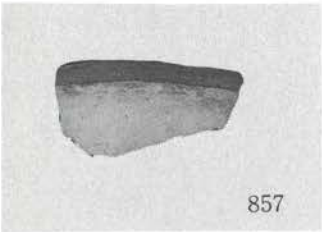

869

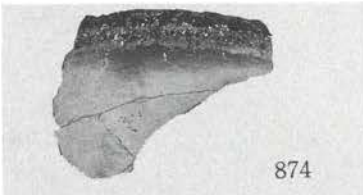

879

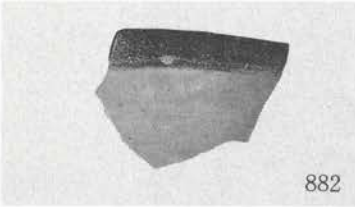

854

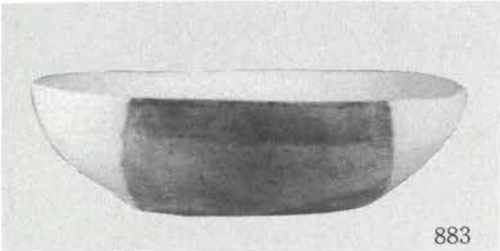
872

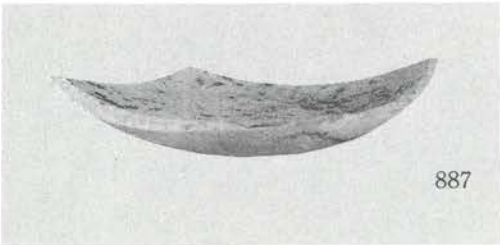

881


857


874


882

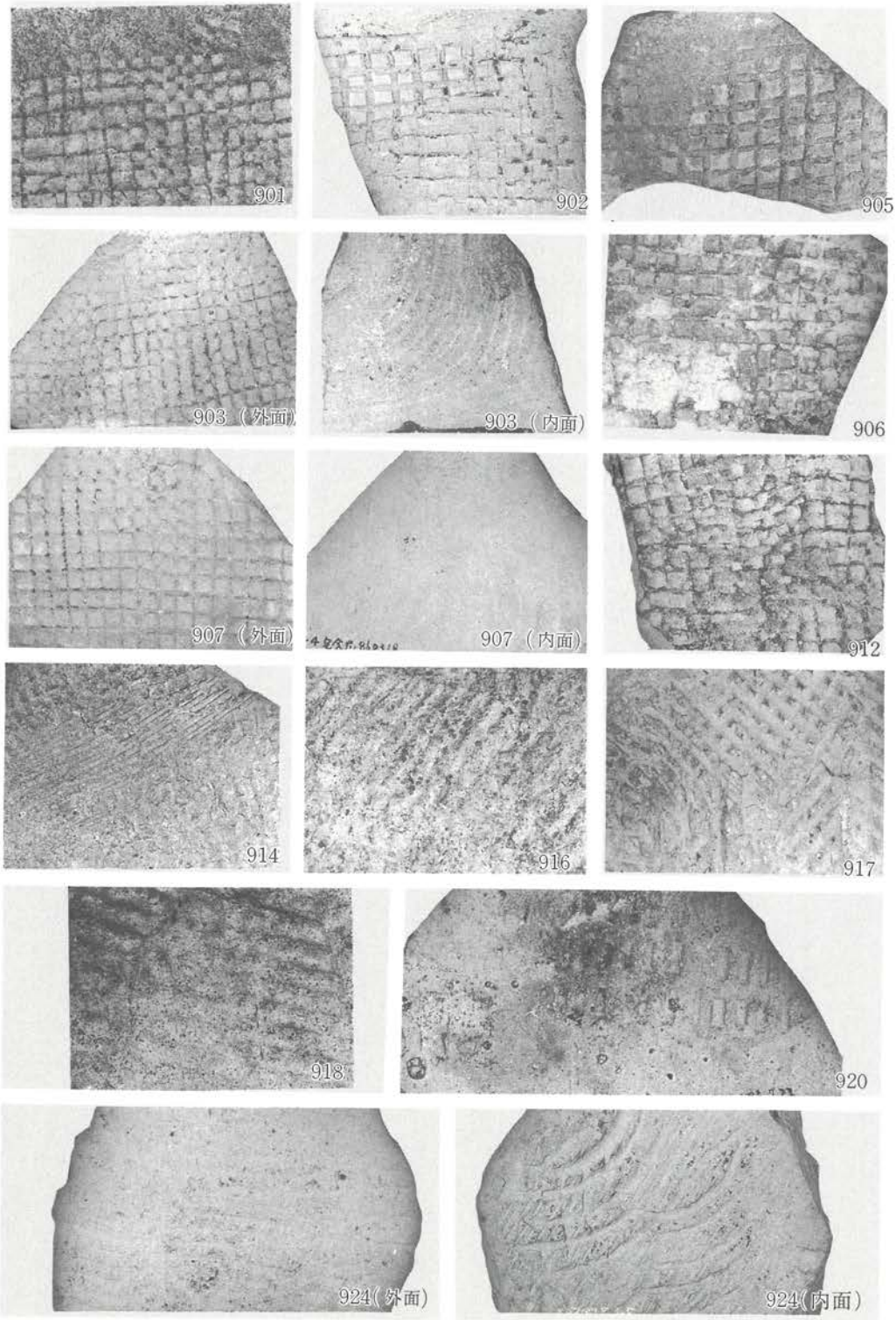

883


887

899（⅙）

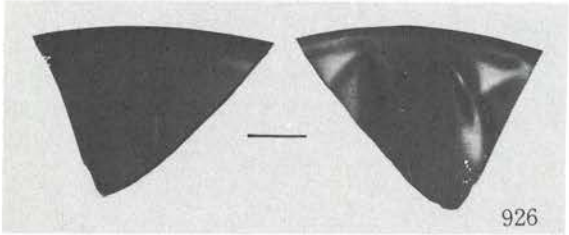
845～882（陶器　こね鉢），883・887（陶器　椀），899（陶器　甕）

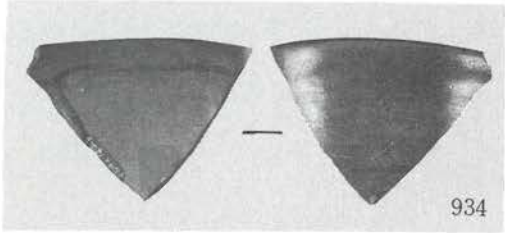
図版44　中島田-包含層出土遺物（９）

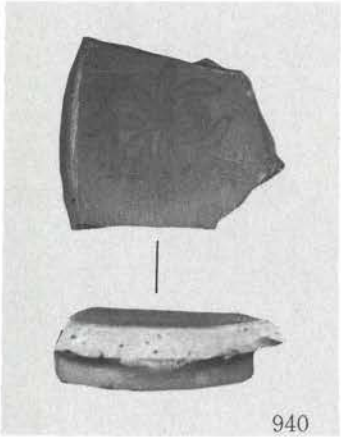


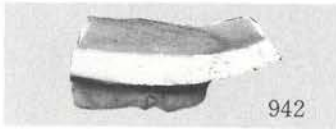
901～924(陶器甕の体部叩き)

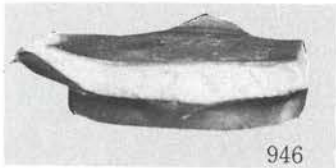
図版45　中島田-包含層出土遺物（10）

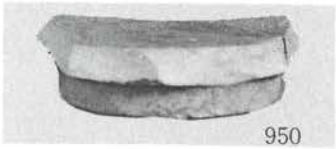


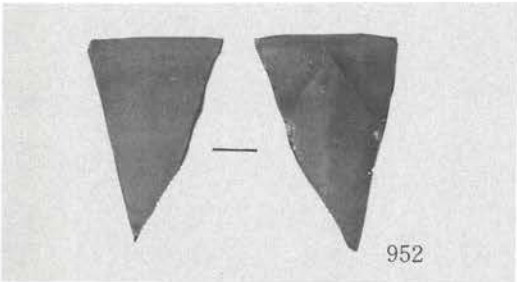


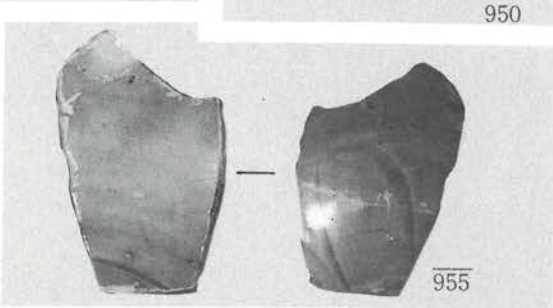


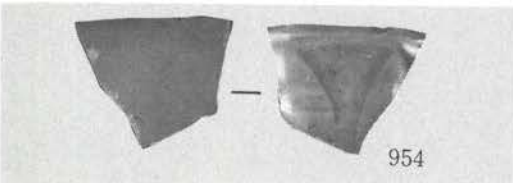


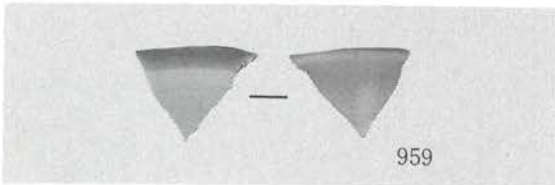


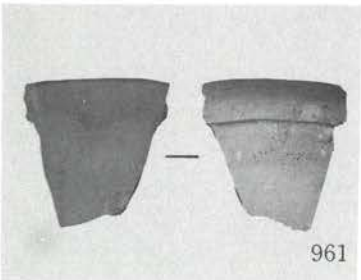


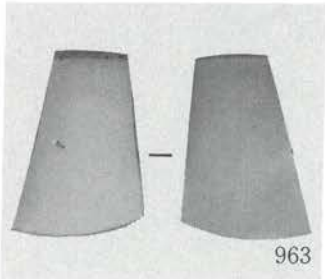


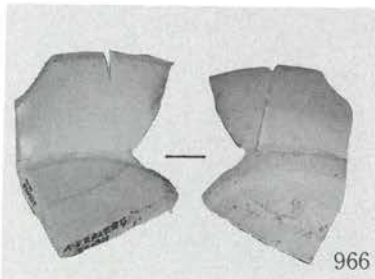






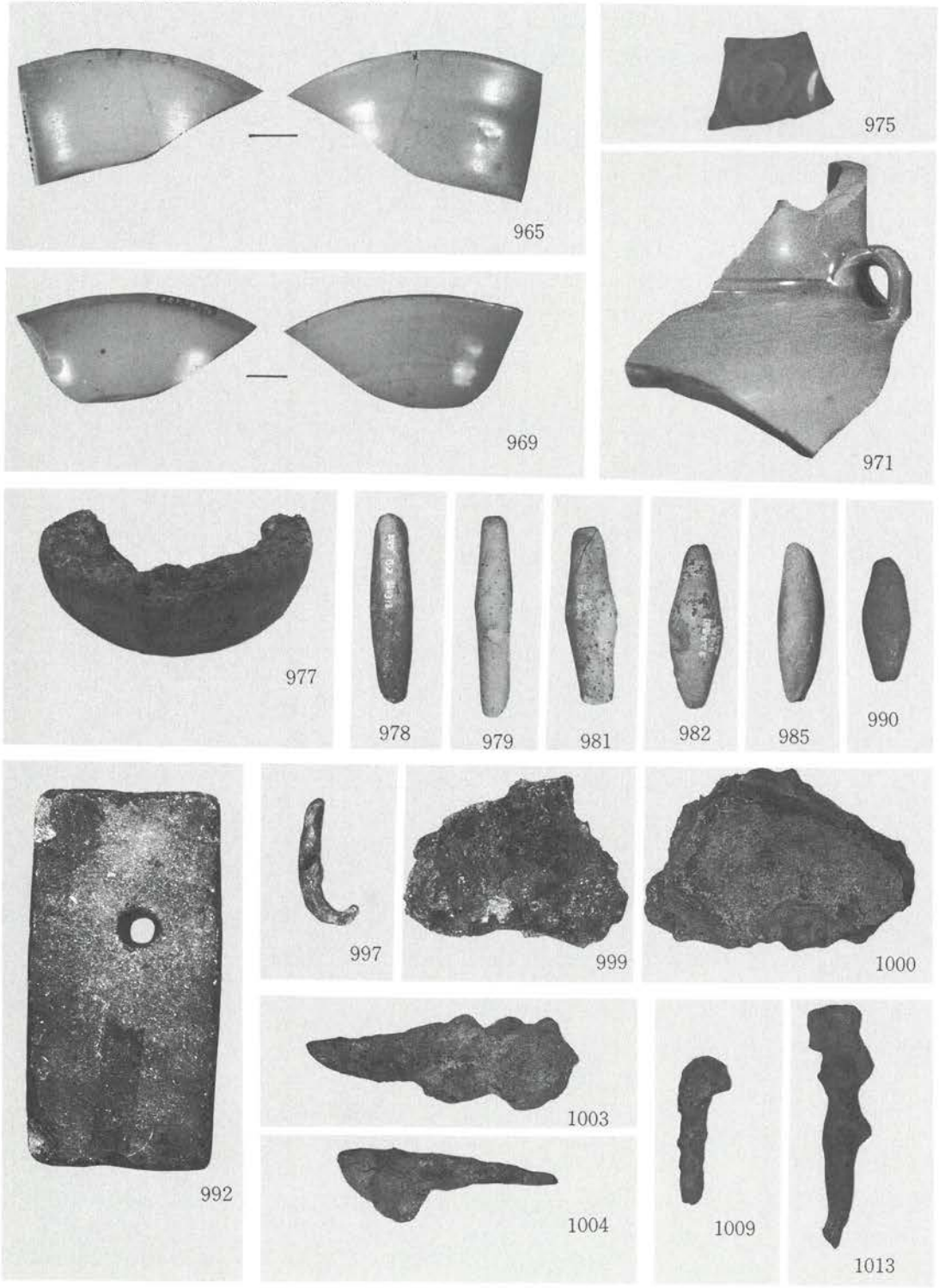






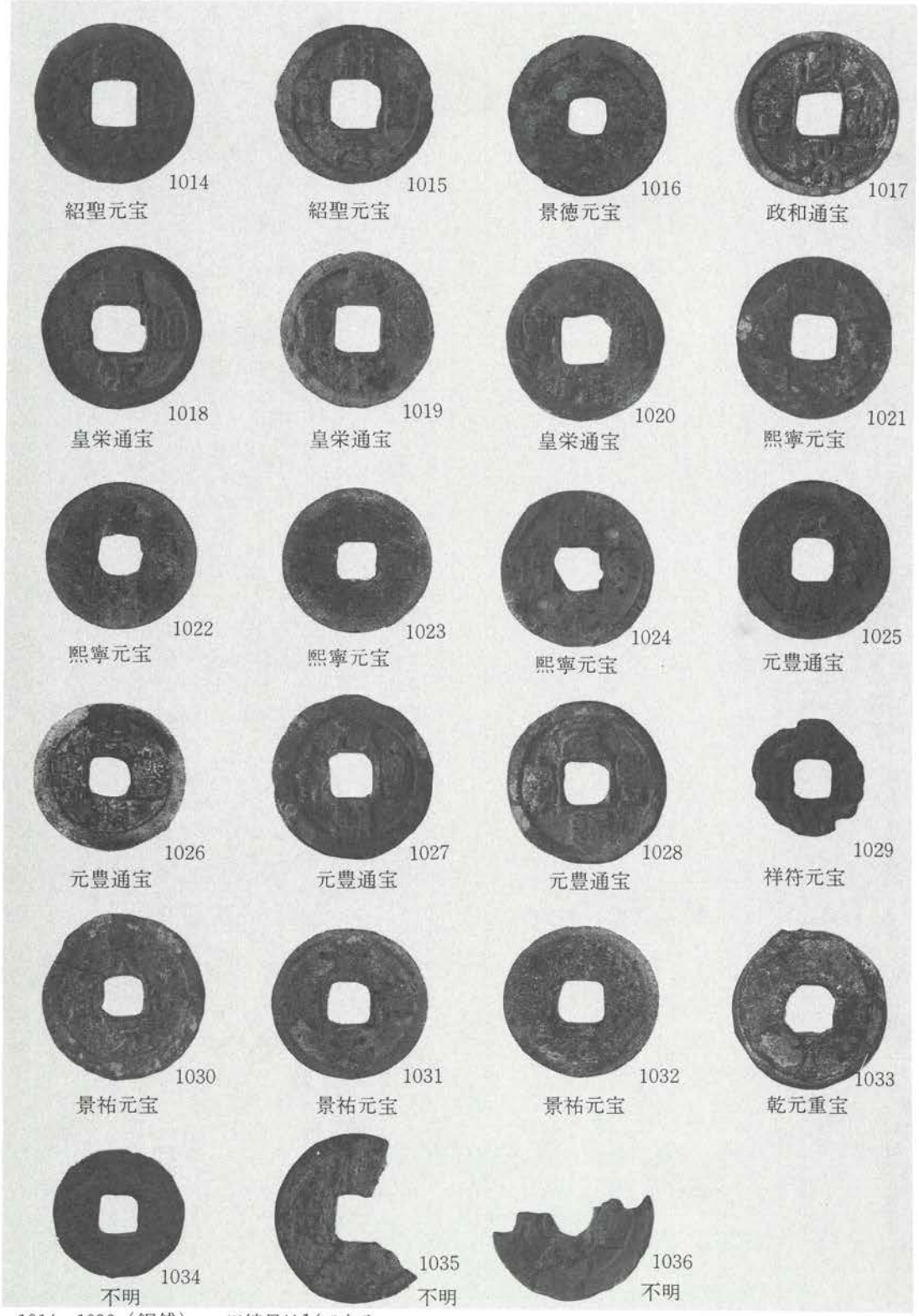
926～955(青磁　碗)，959(青磁　杯)，961(白磁　碗)，963・966(白磁　皿)

図版46　中島田-包含層出土遺物（11）



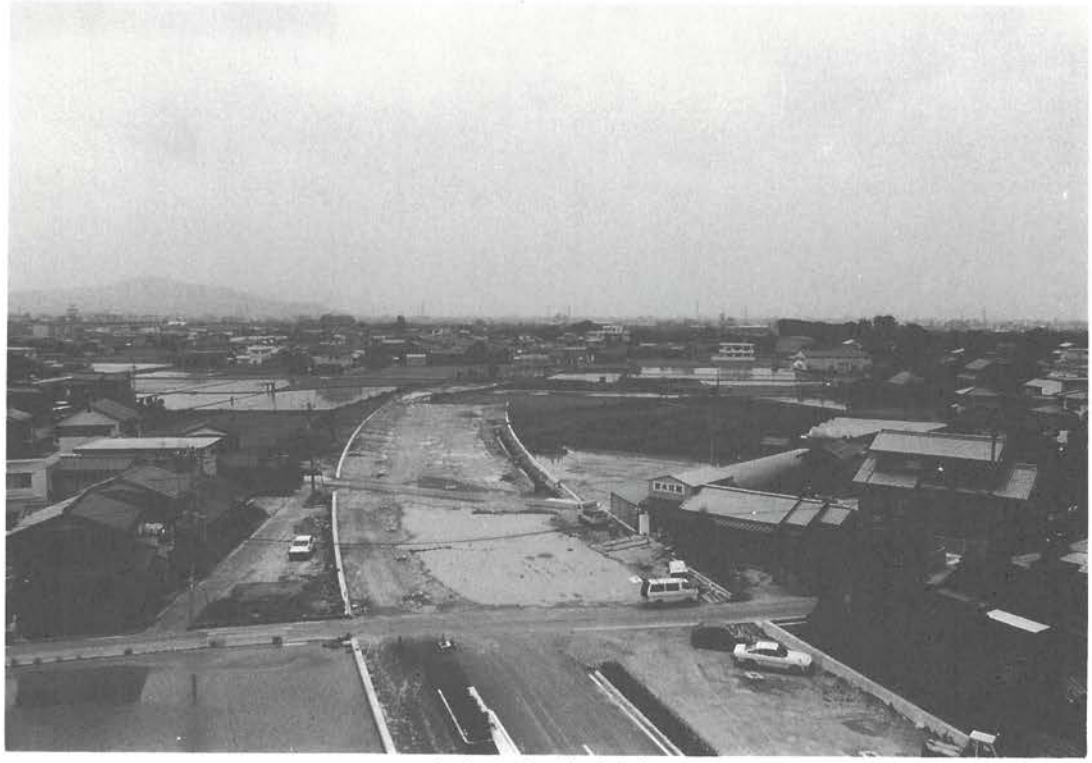
965・969(白磁　皿), 971(白磁　水注), 975(青白磁　梅瓶), 977(坩堝), 978～990(土錘), 992(石板), 999・1000(鉄鍋), 1003・1004(刀子), 1009・1013(鉄釘)　※997はほぼ実物大

図版47　中島田-包含層出土遺物（12）

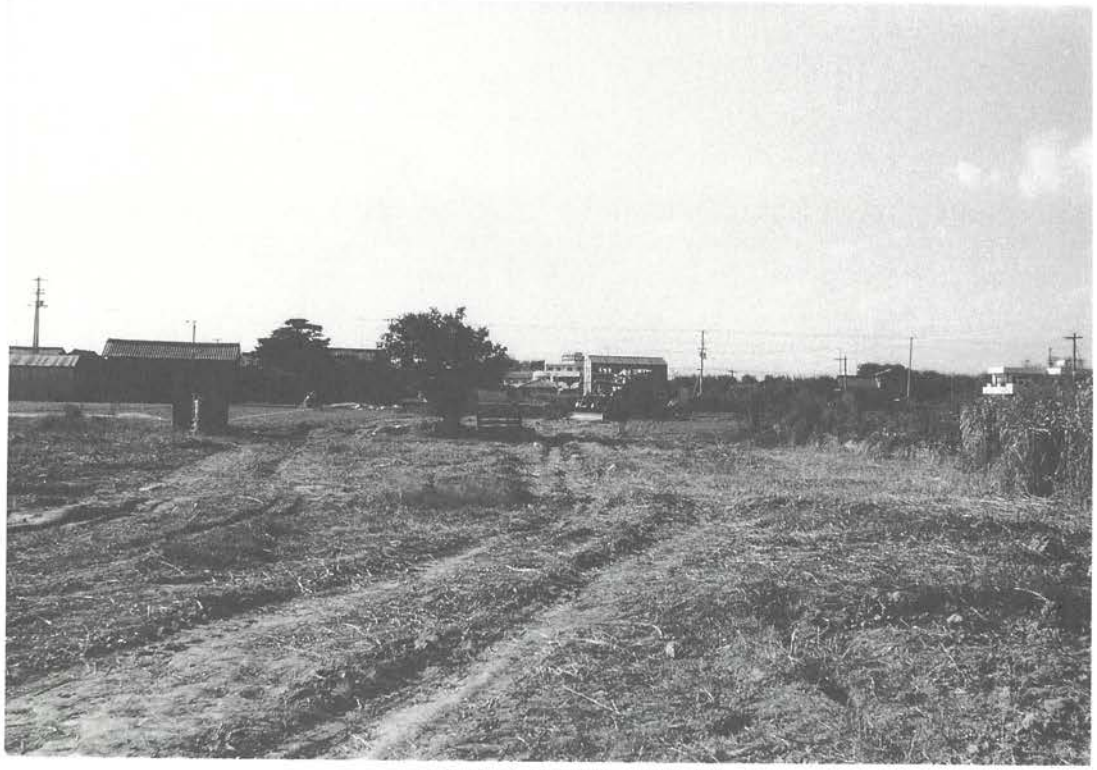


1014～1036（銅銭）　※縮尺は1/1である

図版48　南島田遺跡全景



（1）遠景（東より）



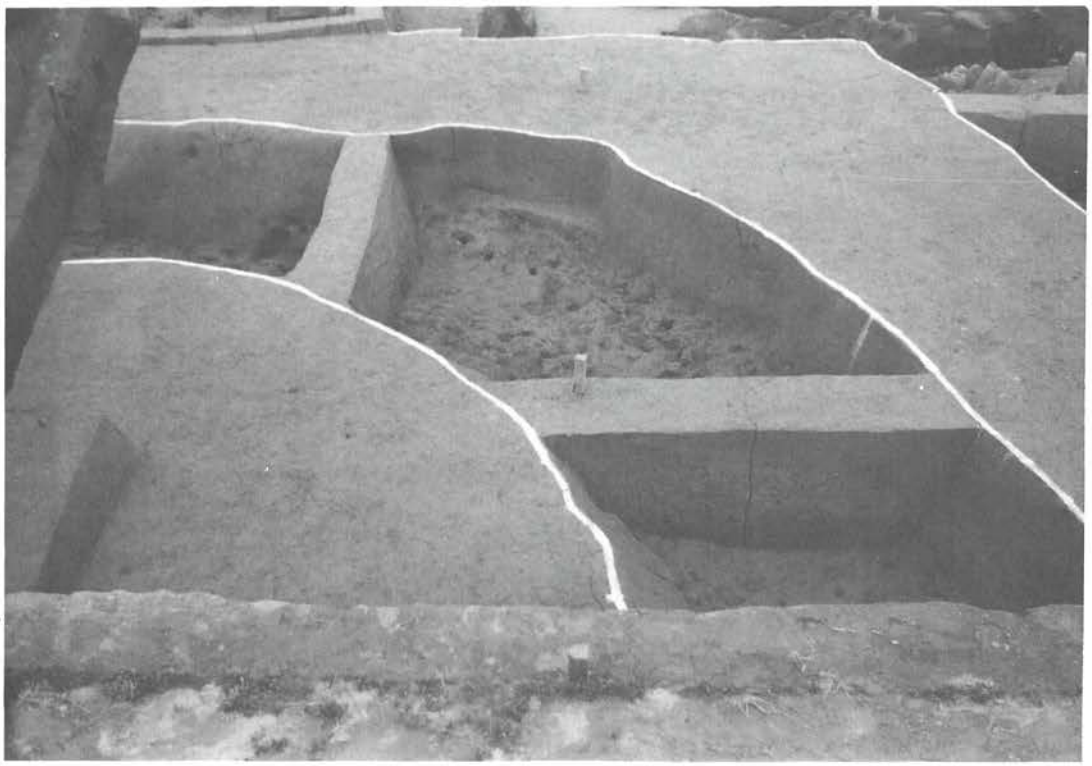
（2）近景-調査前-（東より）

図版49　南島田-第１遺構面の遺構（１）

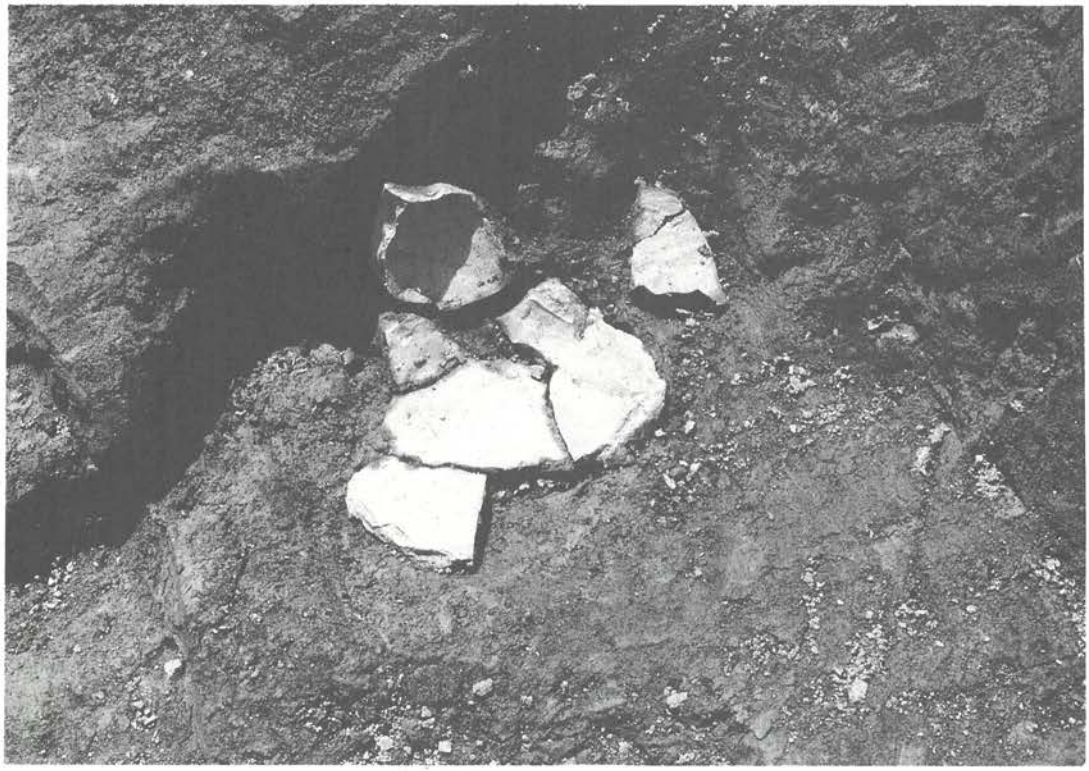
（１）全景（西より）

（１）全景（東より）

図版50　南島田-第１遺構面の遺構（２）



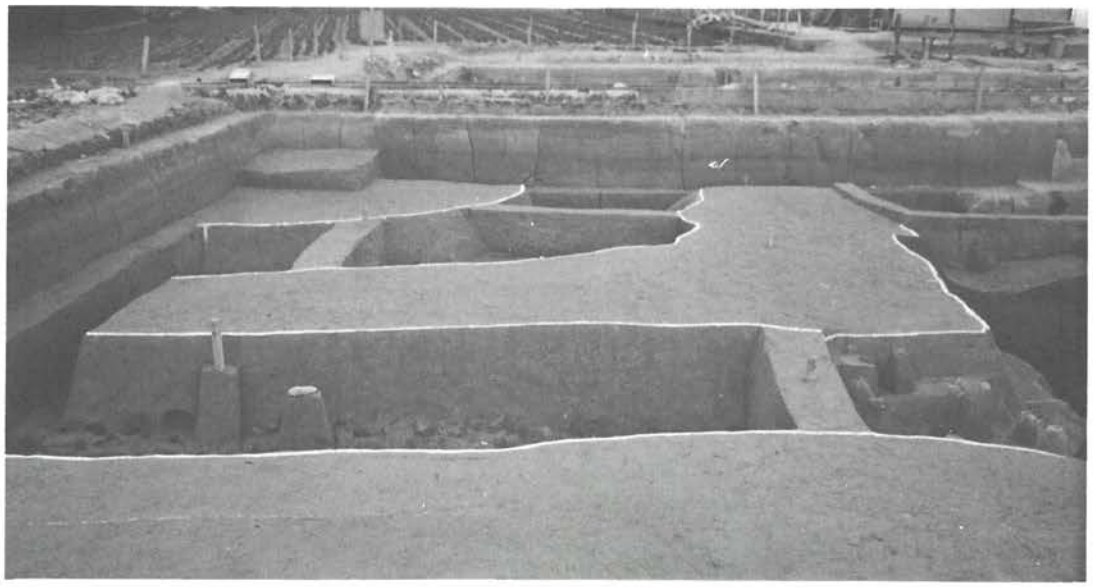
（１）溝101 検出状況



（２）溝101 遺物出土状況

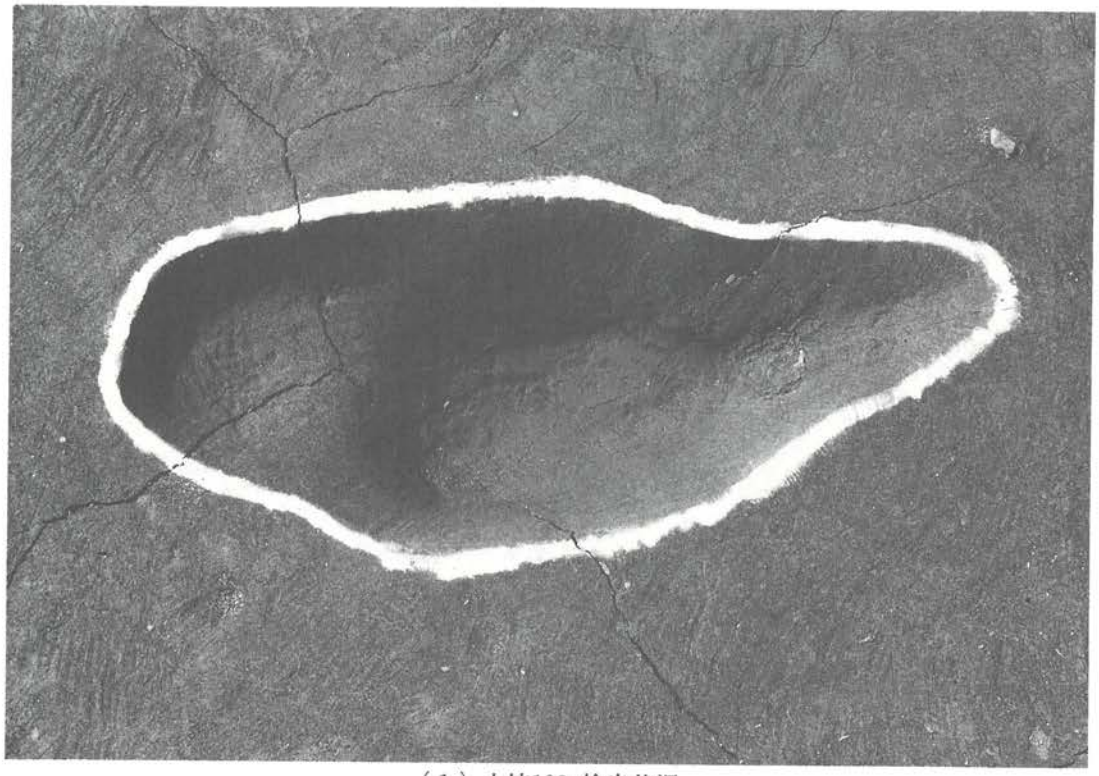
図版51　南島田-第１遺構面の遺構（３）

（１）溝102 検出状況

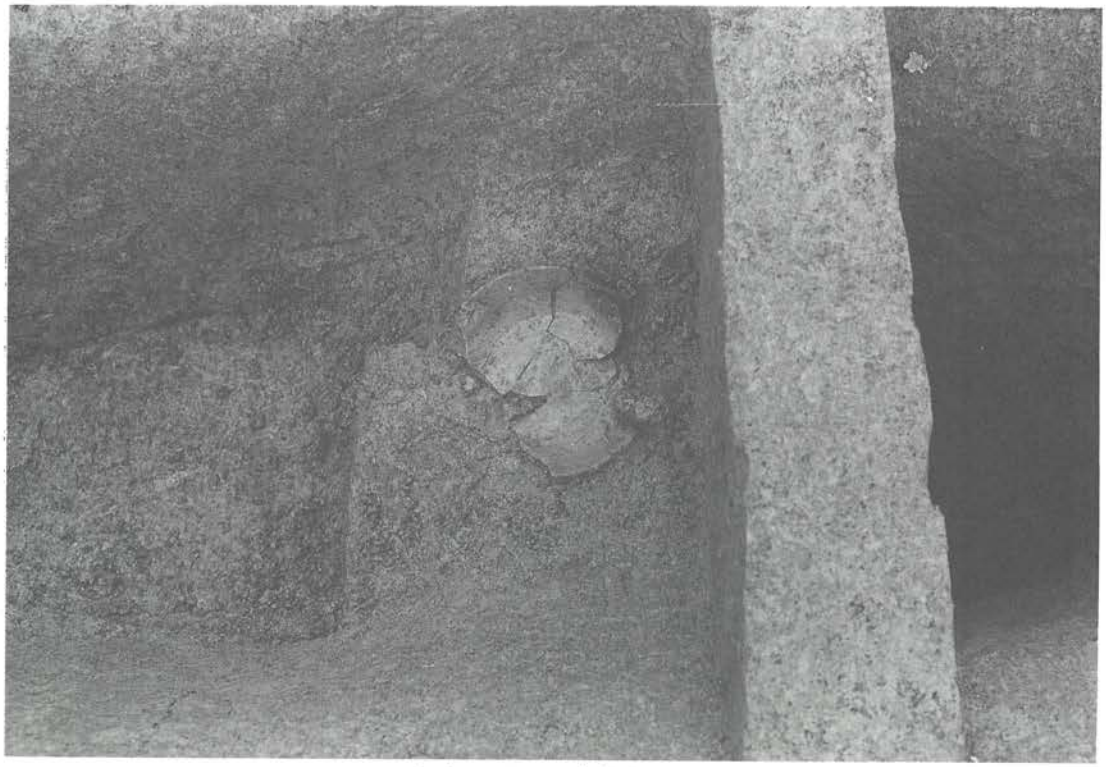


（２）溝101・102検出状況（東より）

図版52　南島田-第１遺構面の遺構（４）



（１）土坑108 検出状況



（２）土坑103 遺物出土状況

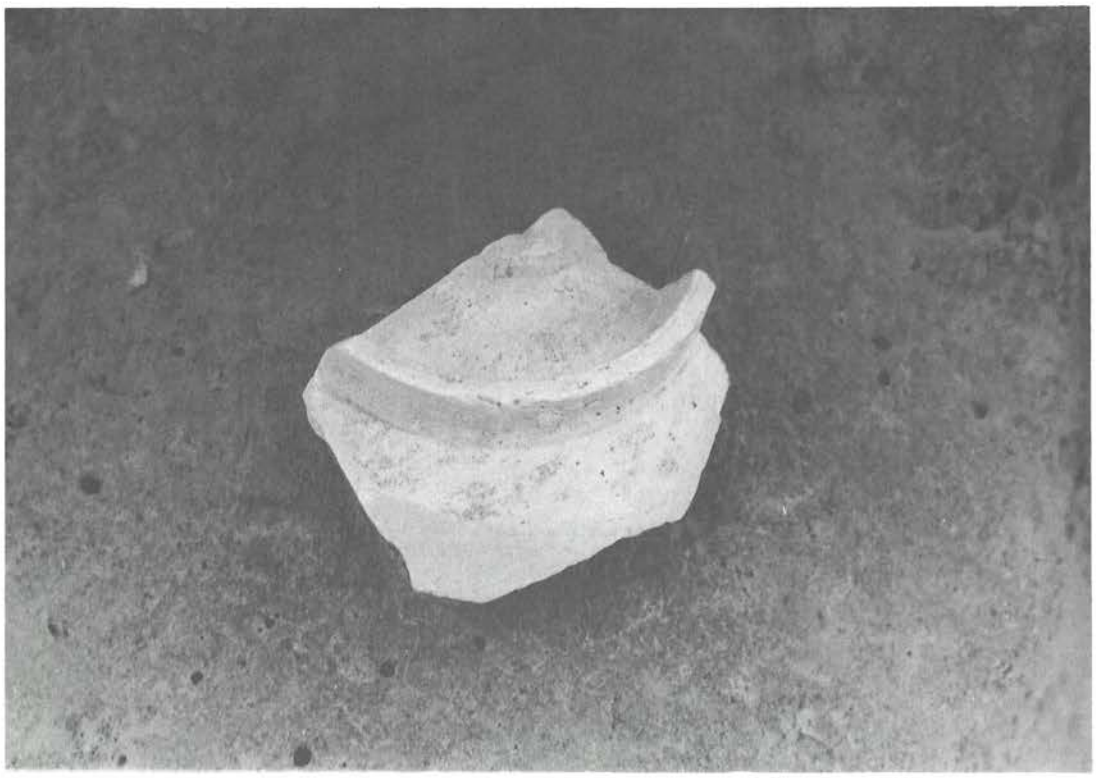
図版53　南島田-第１遺構面の遺構（５）

（１）自然流路101 検出状況（西より）

（２）自然流路102 検出状況（東より）

図版54　南島田-第１遺構面の遺構　（６）

（１）自然流路101　「石鍋」出土状況



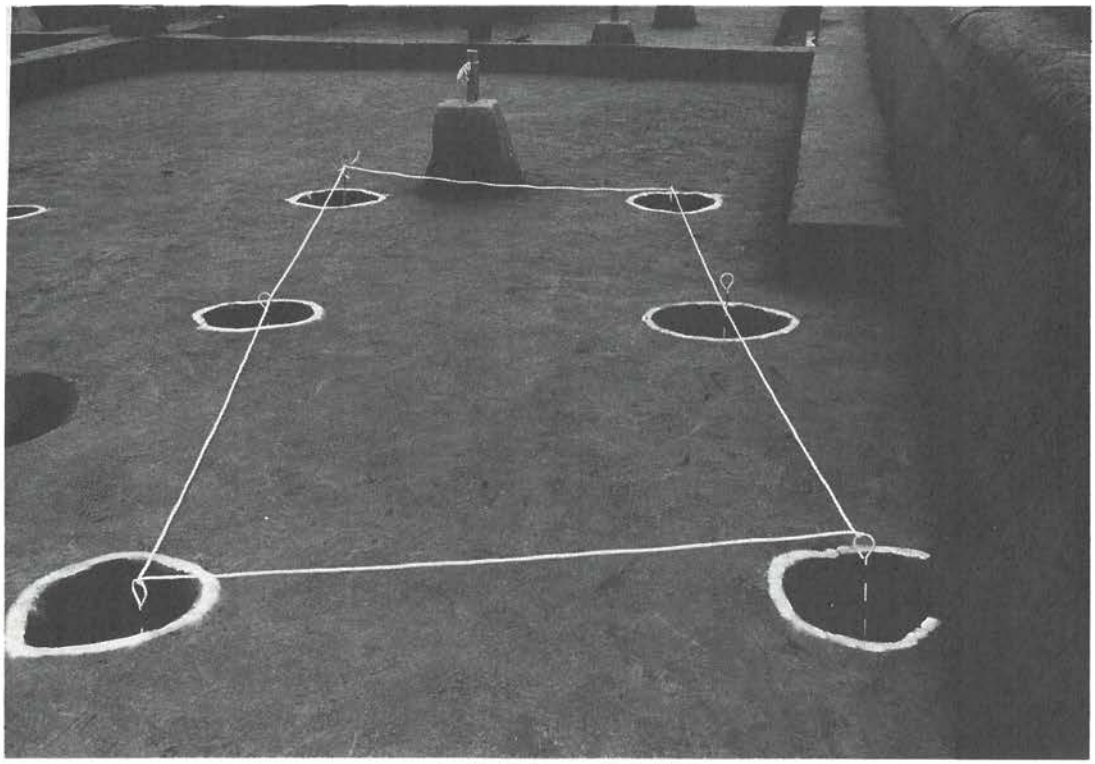
（２）自然流路102　「白磁碗」出土状況

図版55　南島田−第２遺構面の遺構（１）

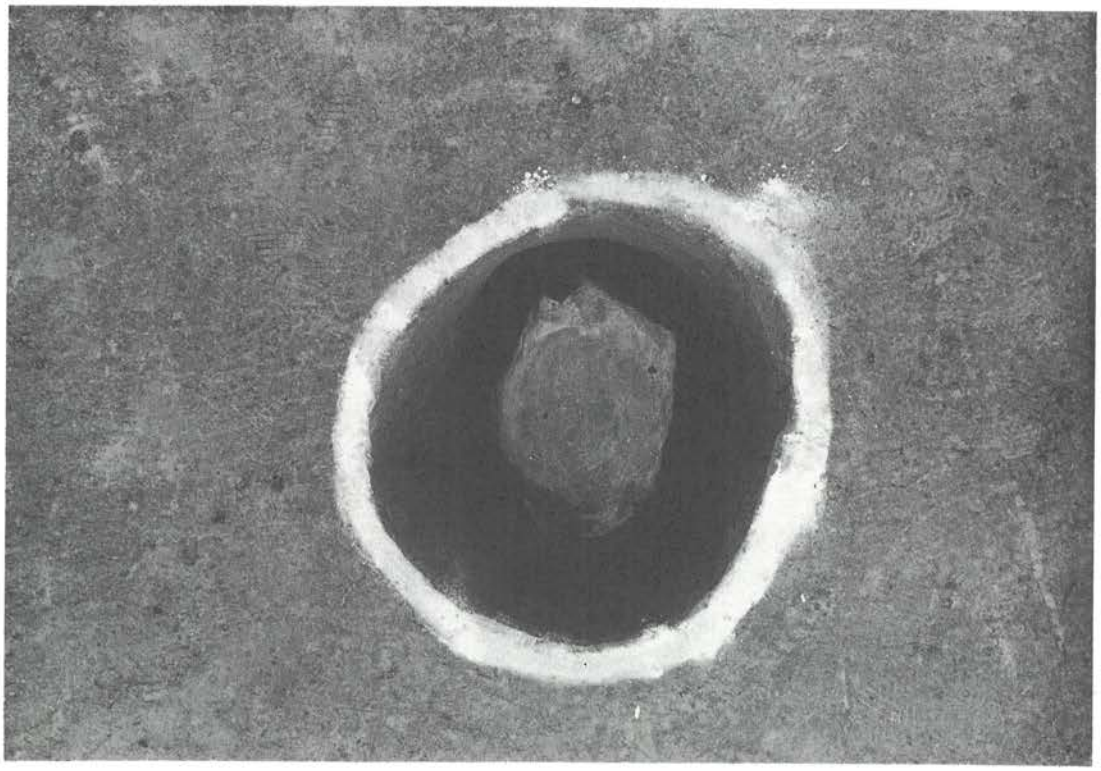
（１）全景（西より）

（２）全景（東より）

図版56　南島田-第２遺構面の遺構（２）

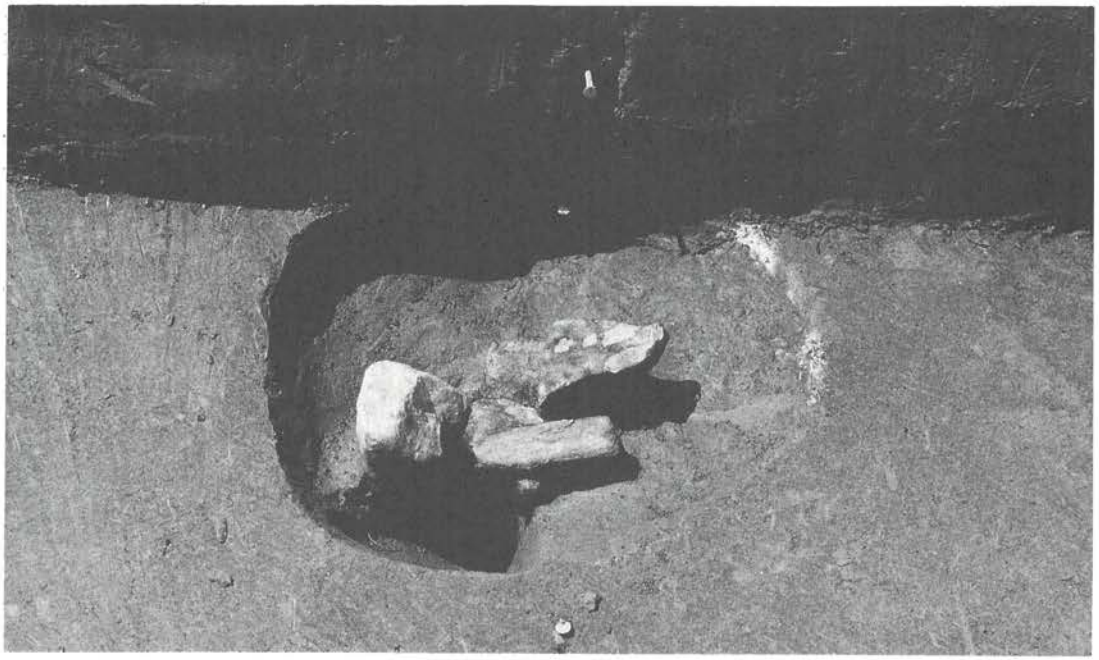


（１）建物201 検出状況

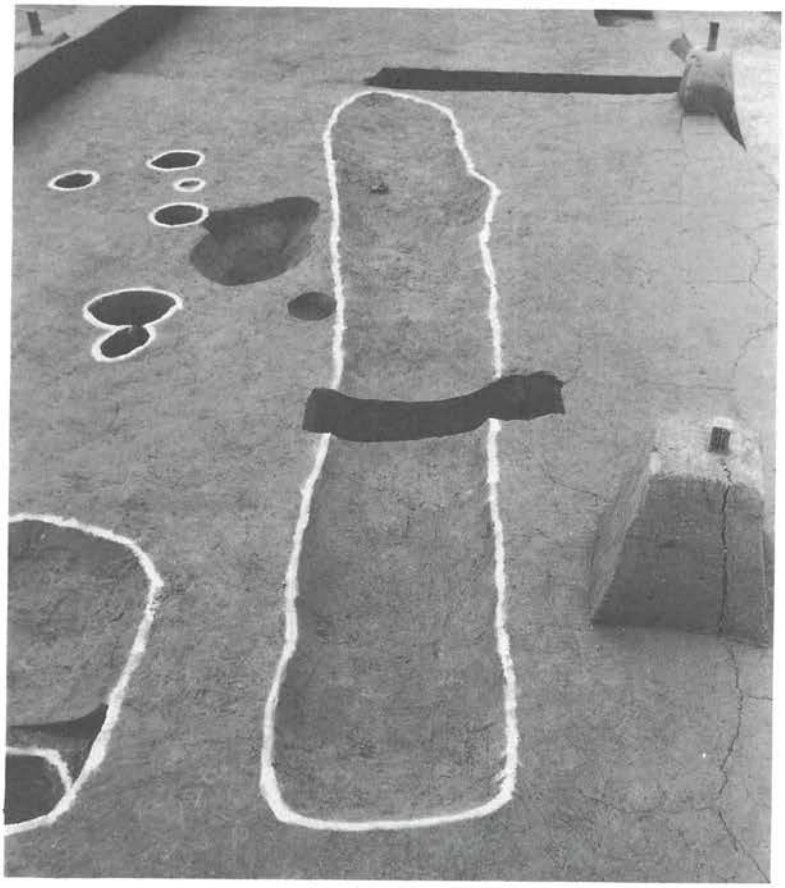


（２）建物201 柱穴内根石検出状況

図版57　南島田-第２遺構面の遺構（３）

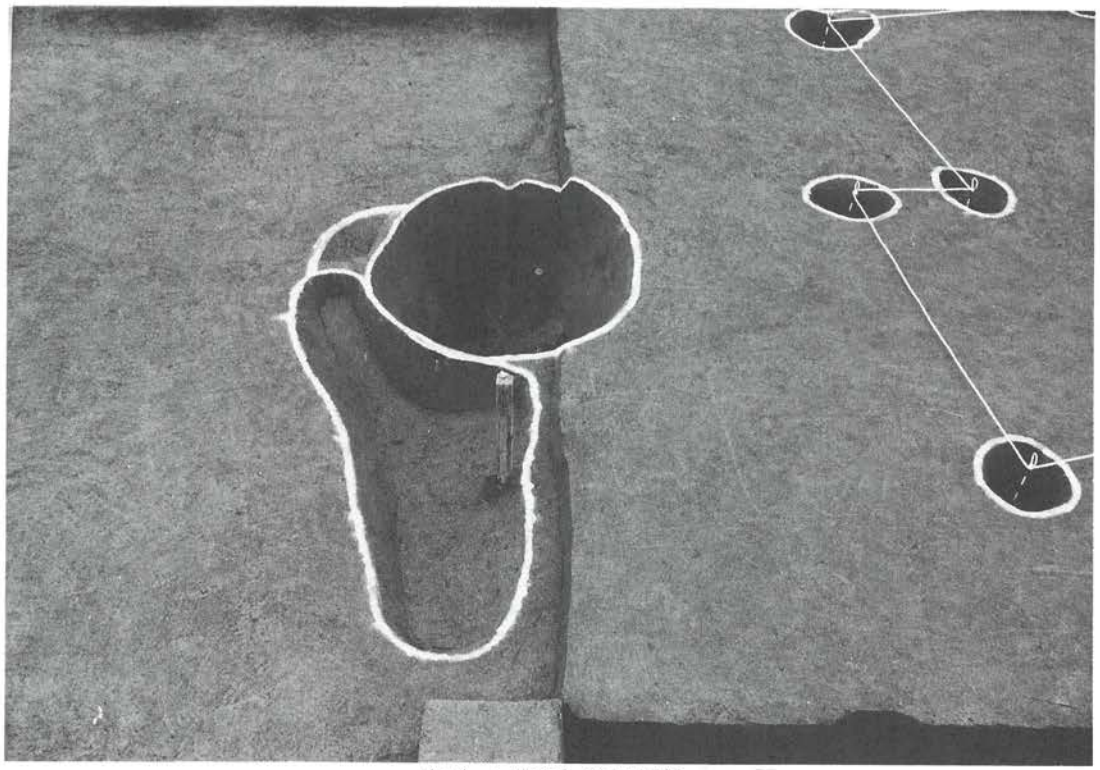


（１）柱穴内「瓦」出土状況

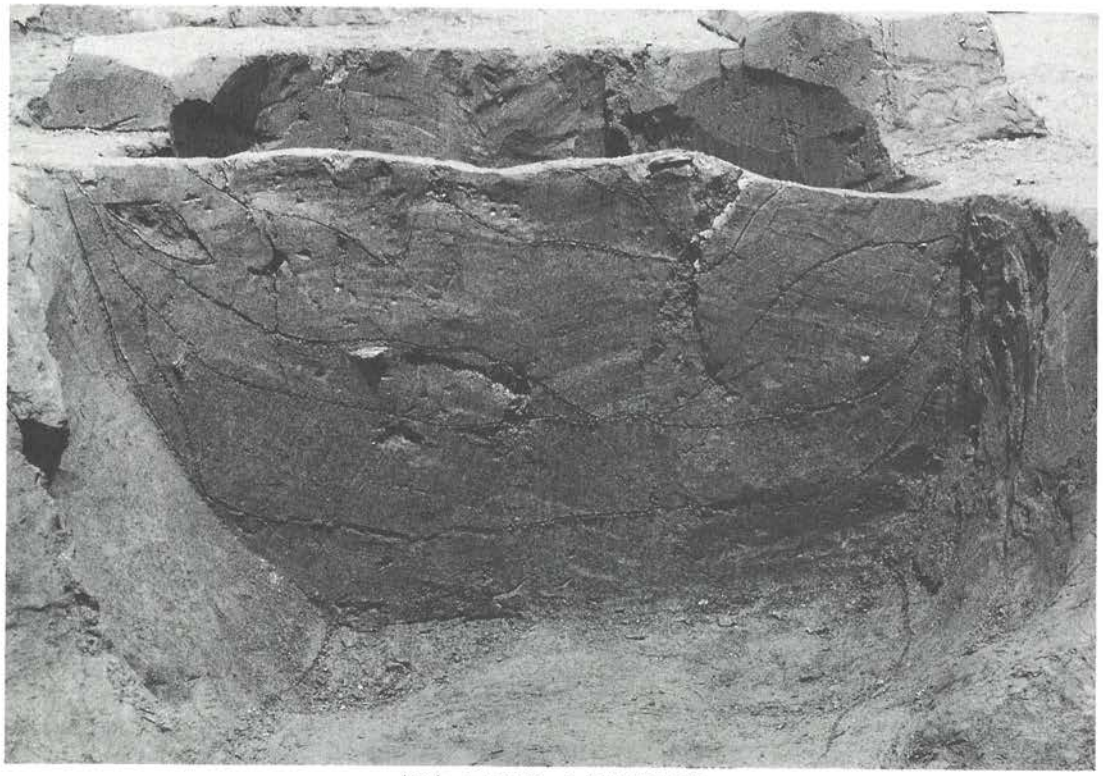


（２）溝205 検出状況

図版58　南島田-第２遺構面の遺構（４）

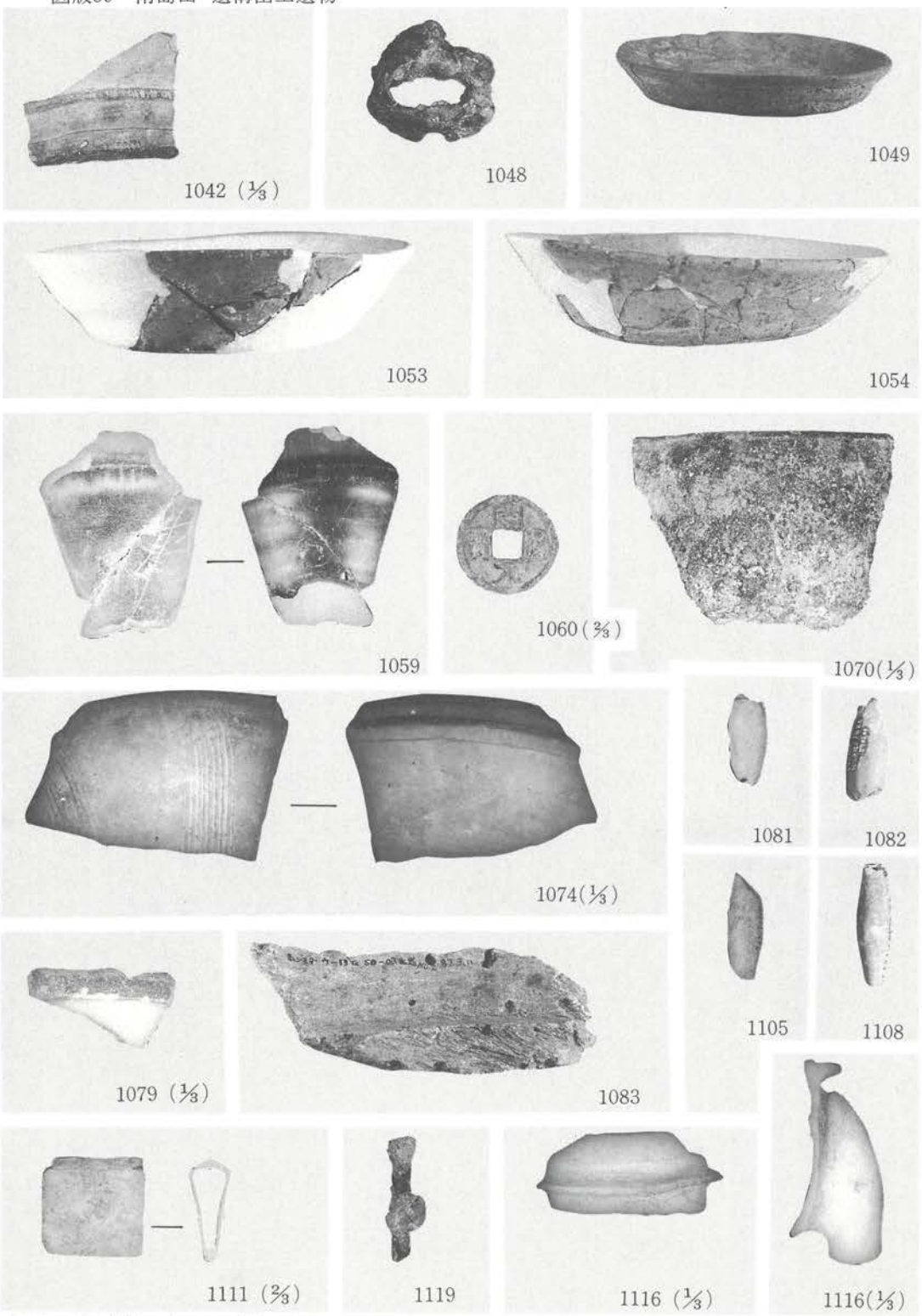


（１）土坑201 検出状況



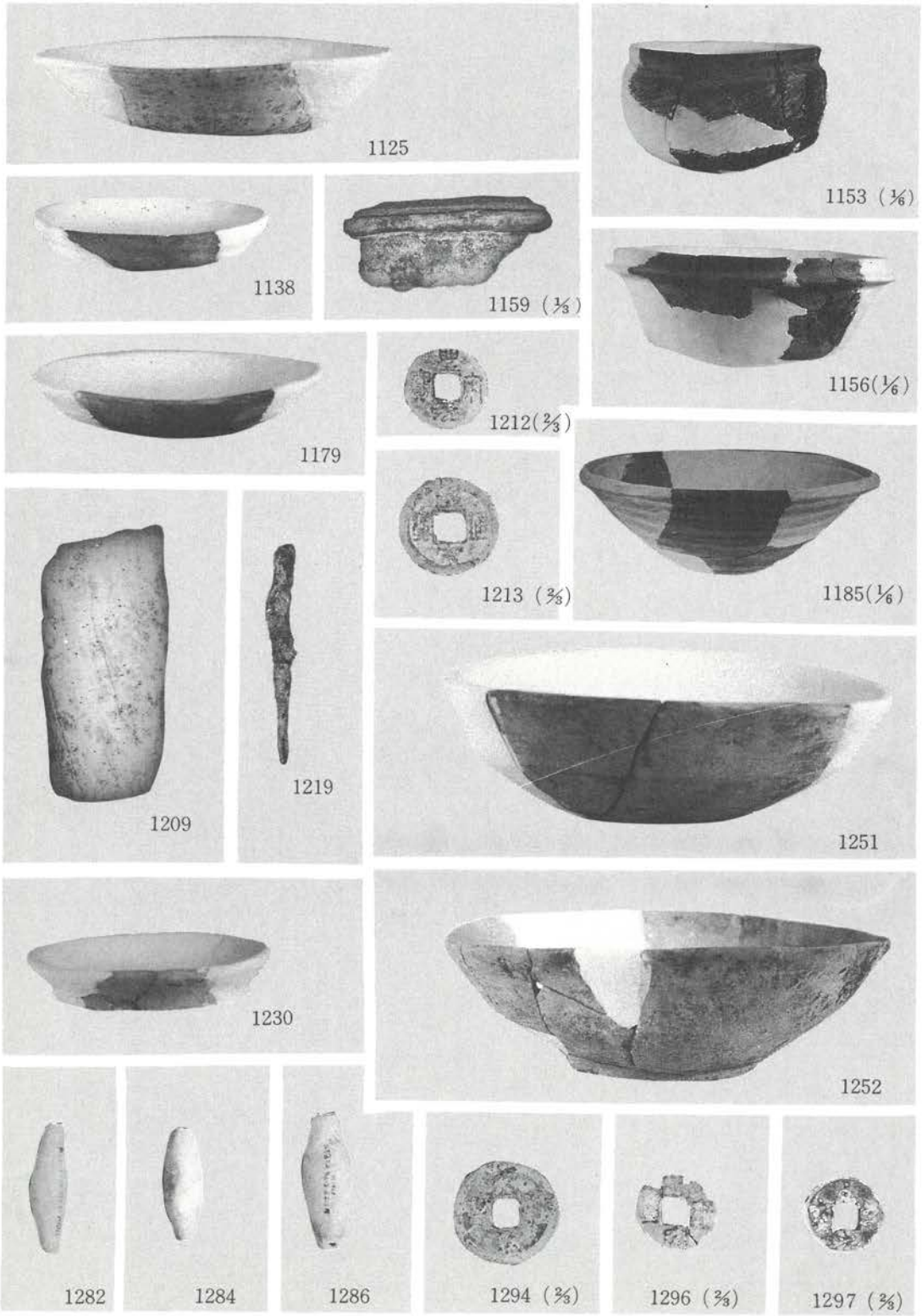
（２）土坑202 土層堆積状況

図版59　南島田-遺構出土遺物



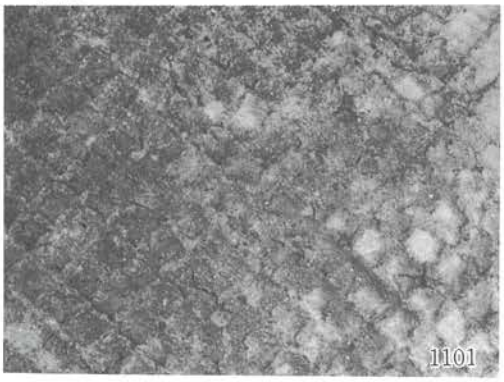
1042・1048（溝101），1049（溝102），1053・1054（土坑103），1059（土坑111），1060（土坑113）
1070～1083（自然流路101），1105～1111（自然流路102），1116（土坑202）

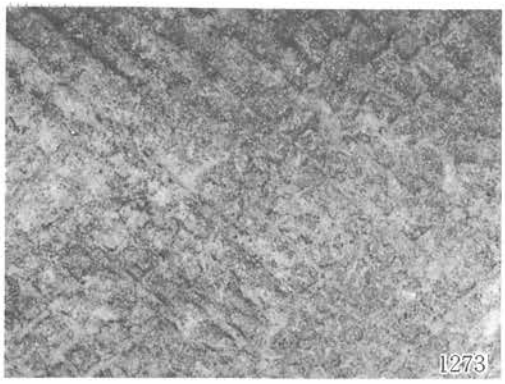
図版60　南島田-包含層出土遺物

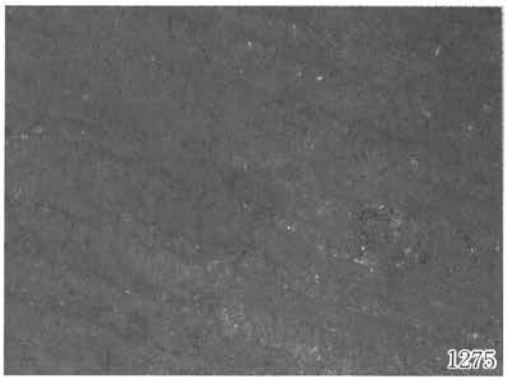


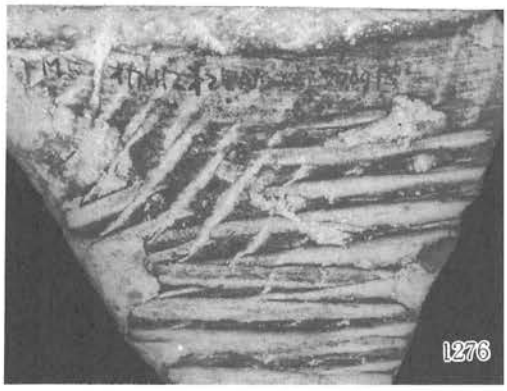
1125～1219(第1包含層)，1251～1297(第2包含層)

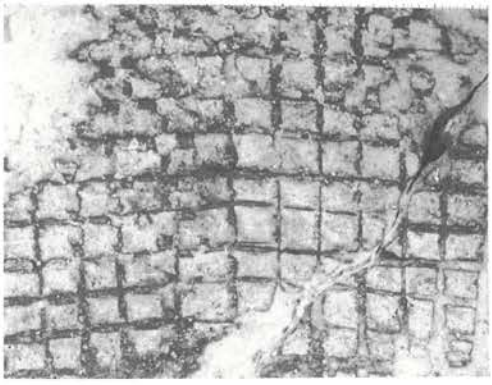
図版61　南島田-遺構・包含層出土の（甕）

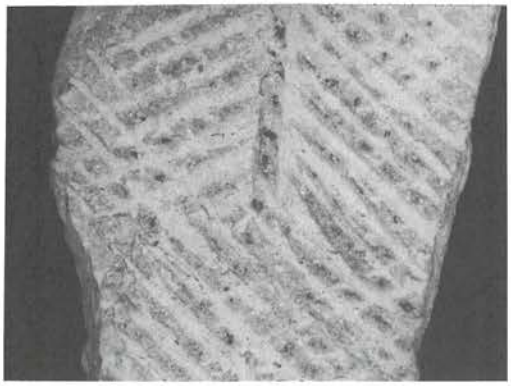


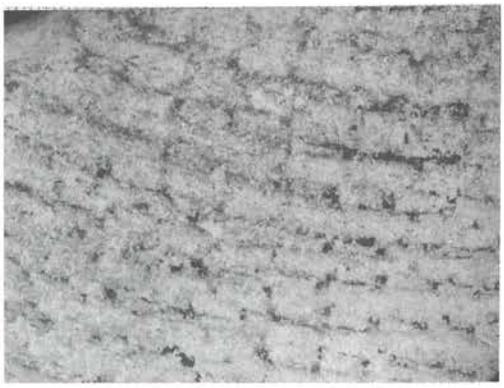












陶器甕の体部叩き